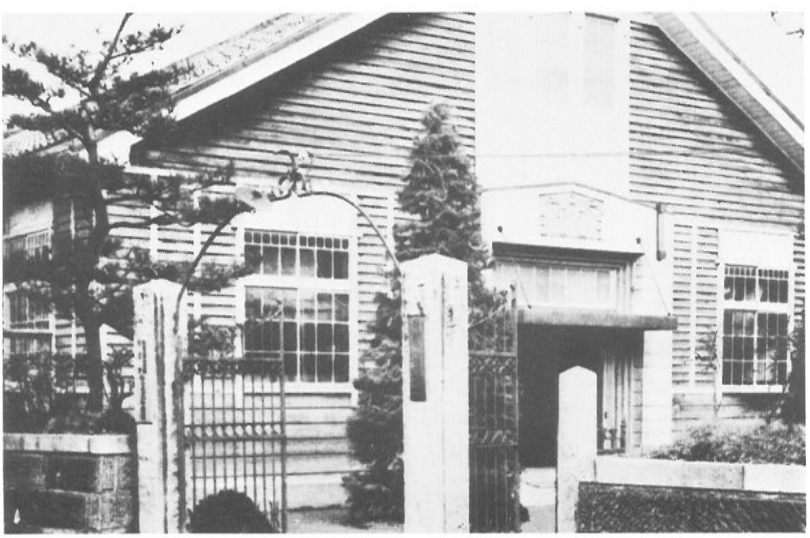
松阪農業高等学校百年史

題字　参議院議員　安田隆明　筆
（昭和九年農科二種卒業）



石川県立松任農学校正面



石川県立松任高等女学校校門



石川県立松任農業高等学校現校舎本館



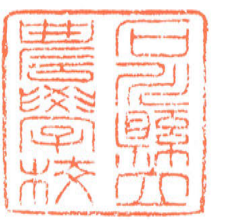
創立九十周年記念時の現校舎全景(昭和41年11月撮影)

印譜



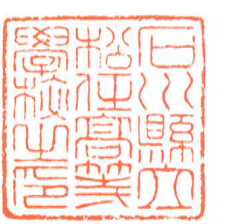








































「人」づくり

――序に代えて――

石川県立松任農業高等学校が、ことしは開校百周年を迎え、これを記念してここに「松任農業高等学校百年史」の編纂をみましたことは、まことに意義ふかいものがあり、心から祝福いたします。

ひとくちに百年と申しますが、それは一世紀であります。いまこの百年史によって本校の歩みをたどってみますとき、明治維新という大きな改革のあった時代を草創期として、今日の世界の日本として大きく飛躍するまでの幾多の変遷、変革の試練の波をくぐりぬけてきた歴史の歩みは、そのままわが国農業史にも、また農業教育の流れにも通ずることがひしひしと感ぜられて、感慨ひとしおのものがあります。

教育は申すまでもなく〈人づくり〉であります。本校が霊峰白山をいただき、日本海を近くにして、水清き手取の流れと、穀倉地帯といわれる豊沃な石川平野に抱かれ、その恵まれた環境のなかにあって、歴代の校長はじめ教師のすぐれた指導・訓練によってよく学び、よく鍛えて、質実剛健・独立自営の〈建学精神〉と、雪深き北陸の風土にとけこみ培かわれてきた不撓不屈の〈松農魂〉を養い、多くの有能な人材が巣立ってきたのであります。

そして先人、先輩たちの多くは、農地整備や土壌の改良、多収技術など、本県農業の基盤づくりに心血をそそがれて幾多の功績をのこされ、その志をうけついだ六星同窓の人たちが母校愛、郷土愛から相和し、相携えて、全国にも誇る近代化された今日の「農業石川」建設の中核として、華々しく活躍されてこられたのであります。

このことは、この百年史をひときわ色彩づけて、同窓会のみなさんによる「六星百年」の記念出版が同時になされて、よき青春の夢多き時代をこの学園ですごし、人間形成に大きな影響をうけた証言を記録されておりますことは、また意義ふかいものがあります。

戦後の学制と名称は変りましたが、この先人、先輩たちが明治、大正、昭和の三代を貫いて守りつづけられて

きた〈建学精神〉と〈松農魂〉は、今も在校生に脈々とうけつがれ、さらに後につづく人々によってこの伝統と誇りは永遠に光り輝くことでありましょう。

石川県は、本校よりもひと足早く昭和四十七年に県政百年を迎えました。私はこれを機に、先人たちの百年の歩みを謙虚にふりかえり、その創造と努力の結晶を新しい百年への出発の礎として、次代の本県の発展を担う〈豊かな人づくり〉を指標に、〈人と生活〉を優先する県政の発展に県民のみなさまとともに全力を傾けることを誓い、努力してまいりました。

本校は、農学校としては北陸はもちろん、文字通り、単に石川県というだけでなく、在来の日本農業を飛躍的に発展させるための日本の農学校でありました。西洋近代農学の窓口であったのです。しかしこの百年史を単に伝統の古きをほこり、過ぎ去りしことどもを追憶することのみにとどめず、これを一つの道標として、きびしかりし歩みのあとをふりかえり、さらに行くての道筋を確かめ、みのり多き新しい世代への跳躍台としていただくことを念願いたします。

ここに開校百年を祝福いたし、意義ふかい百年史を世におくられたことに敬意を表し、これからも立派な後継者がどんどんと社会におくりだされて、日本海時代の〈豊かな郷土づくり〉の担い手となりますよう、本校のすこやかな成長を心からお祈りして、私の序とさせていただきます。

昭和五十年十月

石川県知事

中西陽一

序

開校百年に当たり記念事業の一環として、ここに開校百年史の発刊をみましたことは、まことに喜びにたえないところであります。

本校は明治九年、石川県勧業試験場に農学科を設け開講したときに始まっております。明治九年という年は、北海道大学の前身「開拓使仮学校」が「札幌農学校」と改まり、米人クラークを招いて本格的な農業教育を始めた年であります。また、東京大学農学部の前身とされている「農事修学場」で授業を開始した年でもあり、地方における本校創設とあいまって、わが国の近代農業教育が確立された記念すべき年であります。官学である前二者に比肩すべき理想と気宇をもって、本校を創設された先覚に対し深甚の敬意と謝意を表したいと思います。

本校の教育は、津田仙が設立した「学農社農学校」の流れをくんでおります。学農社は「専ら泰西の農業を講究し、本邦の農事を折衷して広く天下の鴻益を謀り、国家富強の基を固うせんと致す。」としておりますが、本校もまた、わが国古来の農法の上に西欧農法を取捨し、本県農業の近代化の模索に専念したことがうかがえます。爾来明治、大正、昭和の三代一世紀にわたり、金沢、能登火打谷、加賀小松・松任と県下全域を五遷し、直接各地農業の改善発展に貢献してまいりました。この間、校名も、石川県農業講習所、石川県農学校、石川県立農学校と改め、大正十五年に石川県立松任農学校となって終戦を迎えました。

一方、当地方における女子教育の殿堂として大正十二年に創立された松任町立女子実業学校が、昭和二年県に移管されて石川県立松任高等女学校となり、二十余年にわたって多くの有能な卒業生を世に送ったのであります

が、戦後の学制改革により昭和二十三年松任農学校と共に全日制、定時制を備えた総合制の松任高等学校として統合されました。さらに、昭和二十八年地元の強い要望に応じて建学の昔に帰り松任農業高等学校として再発足し現在にいたっております。

さて、本校の百年史は、そのままわが国の近代農業教育史でもあります。本校創設に前後して地方においてもいくつかの農業教育機関が設立されておりますが、あるいは廃止され、あるいは姿を変えていったなかで、ひとり本校のみが一貫して地方農業教育に徹し、百年を迎え得たことは歴代の学校関係者の努力と共に県当局をはじめ地域の農業に対する深い理解と熱意、さらにこれを受けた卒業生の農業はもちろん各界における輝かしい実績がしからしめたものであります。今や世界をあげて食糧問題が重視され農業が見直されようとしておりますが、在校の職員生徒はもとより、あとに続く後輩も光輝ある伝統をさらに飛躍させて草創時の期待にこたえるよう覚悟を新たにしたいものであります。

今回の開校百年に当たり、県当局、同窓会、育友会をはじめ直接間接ご協力を賜わった各位のご好意により、前庭整備等開校百年にふさわしい記念事業が完成し衷心から謝意を表します。また、数年来本事業の準備を進めてこられた橋本龍太前学校長は、本春ご退任されたにもかかわらず引き続いてご出校し、本事業達成にご尽力くだされ感謝にたえません。最後に本書刊行のため長期にわたり連日連夜編集にご努力願った委員各位のご労苦に対し心から御礼を申しあげます。

昭和五十年十月

石川県立松任農業高等学校長

窪田武徳

序

遠く明治九年一二月、石川県勧業場に農学科を創設し翌年一月、石川県農業講習所として分離設立したのが本校創立の起源であります。年輪を重ねる事以来一〇〇年まさに世紀の躍進でありました。

今の知事公舎附近にあった本校が明治十九年、羽咋郡火打谷村に移転して十年を経た明治二十九年、再び小松に移転したのであります。

そして、明治三十五年、更に松任に移転して現在に及んで居るのでありますが、明治・大正・昭和三代に亘り激動した内外の政治経済の中にあって質実剛健独立自営の精神を校風として育てて来たのであります。肌に感ずる不安な今日の世相人心、社会環境のもとに於ても同窓生の一人ひとりの胸中深く定着して居るこの精神この校風こそ今もなほ本校に学ぶ青年学徒の指針であると確信して居ります。

母校の歴史一〇〇年を顧みる時、それは石川県農業の発展史であると共に日本の農業、農業教育の歩みそのままであると言う感を深くするのであります。

農是国の本、富国強兵、兵農学等々明治の初めから今日迄先輩が歩んで来たけわしい道然し教へ子にそそぐひたむきな師弟愛師道の確立と教育の本質は今も昔も一貫して変わるところがありません。現在は忘れられた心をとりもどす昭和五十年代と言われております。私はしみじみとそのことを感じ何か心につきささる思いでありま

す。私達は先輩の残した古き良きものを受け継ぎながらこれを発展させ次代に残して行く義務があると思います。その為にも本書の刊行は意義深く更に二〇〇年の歴史を築く第一歩となることを信じてうたがいません。

本書刊行に当って多大の御力添へを賜りました多くの方々の御協力と年史刊行特別委員の皆様の御労苦に対し心から感謝申し上げる次第であります。

昭和五十年十月

石川県立松任農業高等学校
開校一〇〇年記事業委員会委員長

橋本助男

発刊に当って

古木において、その年輪を尊ぶのは、ただ単に輪数の多きを誇るのではなくて、永きにわたる幾多の風雪に耐えて、いつしか備わった香り・色沢・容姿・余韻などが、自ら織りなす重厚な光りとなって、他を圧するが故でありましょう。それは、創ろうとして創りうるものではないからこそ、重視されるのではないでしょうか。

本校は、いまや一〇〇を数える年輪を重ねました。全国の農業高校中はもとより、全高校中でも最古の歴史をもち、明治・大正・昭和を、わが国の「農業」とともに歩き続けてきたその足跡は、ひろく高い評価を得ていることは、否めない事実といえましょう。

ともあれ、一〇〇年という区切りを、遙か二〇〇年への新しき出発点とすべく、心身ともに脱皮して、悔なき前進を企図するため、かずかずの特別行事が企画されました。その筆頭に、百年史の編纂があげられ、直ちに年史専門委員会ならびに年史編集委員会が発足し、爾来足かけ三年にわたって、並々ならぬ努力が続けられてまいりました。

当初は、既刊の九十年史に、その後の十年を加えることで、その責めを果たすことができると考え、緒に着いたのでしたが、新しい資料の発掘もあり、全面的組み替えの必要に迫られた箇所が随所に見られ、ページ数も五〇〇ページの予定が、ついに八〇〇ページを超える結果になってしまいました。

その間における編集委員各氏の情熱と努力は、たいへんなものであり、とくに総まとめの段階で、約二か月にわたり山崎昭委員長とこれを補佐した山根公委員の、連日のごとく深夜に及ぶご尽力には、唯々頭の下がる思いがしました。また、本書のために、貴重な資料を提供してくださった各位に、心から感謝の意を捧げます。

昭和五十年十月

前石川県立松任農業高等学校長
開校一〇〇年記念事業委員会副委員長
橋本龍太

目次

第一章　本校の草創期
第一節　草設前史
一　明治維新と農業教育……一
藩政時代　明治維新
二　士族の没落と勧業……三
廃藩置県と士族の没落　金沢区方勧業場の開設
三　壮猶館と洋学……六
米艦の浦賀来航　本校創設の場
第二節　草創期の農業講習所
一　勧業場農学科……八
本校創設の起源　欧米農学の研究　杉江秀直のこと
二　農業講習所時代……一二
創設当時の学校規模　規則改正と開所式
三　農商務省の設置と本校の充実……二〇
渡辺譲三郎　黒柳大六　岩田忠益

四　農業講習所時代の特色……三六
湯浅則和　農場実習　養蚕、家禽　養蚕　蘆粟の試植と製糖
第二章　石川県農学校時代
第一節　火打谷時代（明治一九年―二八年）
一　県農学校の誕生……三九
火打谷移転の理由　石川県農学校の発足
二　期待された県農学校……四五
文部大臣森有礼等の臨校　中学校学課程度同等以上と認定
三　県農学校の特色……四九
獣医学別科の設置　湯川温之　明治二四年頃の本校　斉藤十郎
第二節　小松時代（明治二九年―三四年）
一　飛躍期の移転……五九
小松へ移転の理由　小松移転と学校規模
二　本校充実の基礎……六七
沢村真校長の着任と農事講習会　織田又太郎校長の着任
三　全国的基盤の県農学校……七五
実業学校令ならびに農学校規定の発布　本校の全国的位置と県外生　英才教育と教育課程

目　次

第三章　石川県立農学校時代
第一節　明治期の農学校
一　県立農学校の発足……八五
松任移転　寄宿舎規定
二　学校体制の確立……九五
明治三七年規則改正の要点　制服、制帽、徽章の制定　校旗の樹立
三　記念碑と東宮殿下の行啓……一〇二
戦死者記念碑の建立　東宮殿下の行啓
四　来校した文化人たち……一〇五
山崎延吉　暁烏　敏　柳田国男　横井時敬　その他
五　学校行事と校友会……一一四
学校行事　校友会の活躍　進路状況
第二節　大正期の県立農学校
一　農業教育の時代概観……一二九
概説　農業教育の進展
二　農学校の教育拡充……一三五
教育方針　山中良治校長の訓話　農科と獣医科
三　六星の伝統とその栄光……一四五

校長と名物先生　大正期における名物先生　生徒の気質　卒業生の進路　六星の起源　寄宿舎生活　学友会の活躍　弁論部　会報部　剣道部　庭球部　水泳部　柔道部　相撲部　競技部　学校行事抄
四　石川県立農業教員養成所の発足……一九八
農業補習学校の変質
五　創立五十周年記念……二〇二
記念式典　謝恩表彰　追悼会　祝宴会　講演会　提灯行列　記念運動会
第四章　石川県立松任農学校時代
第一節　戦時体制下の教育
一　嵐の中の時代概観……二一一
ファッショ化から民主化へ　戦時下における農業教育
二　松農の規律……二一五
本校の教育目標と校訓　教育方針　学校規則の改正
三　学校生活……二三二
学校日誌抄　農産物の加工奨励　施設のうつりかわり　手取川大水害救助応援
実業教育五十周年記念　創立六十周年記念祭　其香碑の建設　校舎改築運動
主な学校行事　満鮮旅行　兎狩り　県下学生連合演習
四　農業報国……二七〇
軍事教練　特別大演習　練成教育　国民精神総動員　勤労報国隊の結成

学校報国隊と学徒隊の結成　女子農業教育
五　生徒の修学実態……二七九
学級及び生徒数　入学状況　試験と成績評価　学費概算　通学班別校外指導
卒業生の進路
第二節　松農健児の活躍
一　学友会の活動……二八八
学友会の基調　学友会の編成と予算　各部活動の概況
二　運動部・文化部の活躍……二九二
相撲部　柔道部　剣道部　乗馬部　射撃部　籠球部　卓球部　排球部
山岳スキー部　競技部　水泳部　庭球部　弁論部　書道部　音楽部
会報部　文芸部
第三節　本校付設教育機関の消長
一　付設教員養成機関……三二二
青年訓練所　青年学校　石川県立青年学校教員養成所　臨時養成科
二　徳田専修科……三三五
開設前史　学校規模の変遷　加藤完治　各種講習会　うちおこす会と会報
第四節　戦争終結と学校
一　戦時教育の廃止……三四八
終戦時　授業の再開　戦後の虚脱と窮乏　松農同盟休校

二　創立七十周年記念……三五三
記念祭と追悼会
第五章　松任女子実業学校
第一節　創設前期
一　女子中等教育制度……三五五
発端　中学校令と高等女学校規程　高等女学校令
二　県内における女子中等教育……三五七
明治期　大正期
第二節　女子実業学校の創立と県移管
一　開校までの経緯……三五九
女子実業学校設置の動き　開校を目ざして　開校までの経過
二　女子実業学校の誕生……三六三
開校を目前にして　開校式　学校規則　学科目・学科課程及び毎週教授時数
師弟一体の学校生活一年目
三　校風の樹立を目ざして……三七二
組織変更　学校規則の改正　学科目・学科課程及び毎週教授時数表の改正
五箇条の条訓　思い出すこと　第一回卒業式　研究生の併置
四　女子実業学校の県移管……三七八

県移管の経過　加藤校長の退職　畠山校長の着任　女子実業学校と高等女学校の併置　追悼会　女子実業学校の終焉

第六章　石川県立松任高等女学校

第一節　県立松任高等女学校の創立

一　開校までの経緯……三八三

県立移行の経過　生徒募集の舞台裏

二　高等女学校の発足……三八六

開校式　校地校舎の整備　学校規則の制定　学科目・学科課程及び毎週教授時数　校訓の制定

第二節　発展期の松任高女

一　充実した学校生活……四〇一

学科課程、毎週教授時数の改正　校歌、徽章の制定　良妻賢母を目ざして　通知簿　昭和一四年―一七年学科課程及び教授時数　学費　通学状況　上級学校への進学　生徒数の変遷　校友会の活動　主な学校行事　体育面での活躍　初代畠山校長の退職　二代川岸校長の着任

二　本校の歩みの中で……四四五

手取川氾濫による水害　川岸校長の転任と米林校長の着任　創立十周年記念　各地で活躍する卒業生　慈光幼稚園の開校　家政講習会　本校同窓会の歩み　短歌会　学校日誌抄

第三節　戦時下の松任高女
一　戦争前夜時代……四五八
忍び寄る戦争の足音　紀元二千六百年　恩師の出征　宣戦布告　本土初空襲
二　戦局の変転とともに……四六五
戦時編成　陸海将兵、傷病兵の慰問　農繁休暇　病衣、軍衣縫製　鉄屑の献納
銃後の活躍　戦時の学習　昭和一八年―二〇年学科課程及び教授時数　専攻科
戦時の服装　戦時の入学試験　戦争完遂のために挺身　米林校長の退職と柴原校長の着任　本土決戦に備えて　戦時委託生の転入
三　終戦を迎えて……四八一
終戦の詔書渙発　戦い終って　学校工場、その他の戦時施設の解消開始　戦時委託生の廃止
第四節　新教育制度とともに
一　新気運みなぎる学校……四八三
授業の再開　戦後の学科課程及び教授時数　新生の学園生活　帰農
二　学制改革……四八六
新制度への不安　創立二十周年記念　五年制高女の卒業式
三　総合制松任高校へ……四八八
新制高校の発足　最後を飾る諸行事　松任高女最後の卒業式　戦後の学級編成

四　むすび……四九二

第七章　総合制石川県立松任高等学校

第一節　新学制の発足

一　新教育の成立……四九五

米国教育使節団の来日　教育三法の制定

二　新制高校創設期……四九七

設置準備　軍政隊民間情報教育課の指導　新制高校の設立　松任高校の誕生

難波校長の着任　併設中学

三　新制高校の再編成……五〇二

三原則　第一回卒業式　明石校長の着任と松任高校の再編成

第二節　新制高校の教育内容

一　教育課程……五〇五

教育課程の特色　社会科教育

二　新しい農業教育……五一二

農業教育の新しい観点　総合農業　農業クラブ　ホームプロジェクト　プロジェクト活動の実施

三　特別教育活動……五一八

ホーム・ルーム　生徒会活動　松高祭

第三節　学校生活

一　戦後の高校生気質……五二四
誇りと伝統　アプレゲール　人間関係　暴力追放　異性問題　学生風俗
二　校章・校旗・校歌……五二六
校章の制定　校旗樹立　校歌
三　生徒指導……五二八
ディーン　服装
四　進路状況……五三〇
五　図書館……五三三
六　クラブ活動の記録……五三九
クラブの成立　運動部　送球　ソフトボール　排球　陸上競技　羽球
相撲　文化部
第四節　定時制の課程
一　定時制の設置……五五〇
定時制の設置
二　定時制の変遷……五五一
定時制の歩み
第五節　変容する新制高校教育
一　高校三原則の後退……五六〇

総合制の解体　小学区制の解体・共学制の後退
二　本校の転化……五六二
農業教育の危機感　松任高校の終焉
第八章　石川県立松任農業高等学校
第一節　本校の成立
一　成立の経過……五六三
独立設置運動　松任農業高校の発足　飯倉校長の着任
二　小松実高農業部の併合……五六六
小松実業高校の独立　農業部の廃止
三　発足期の農高……五六八
校章・校旗・校歌　制服と襟章　施設設備の整備と拡充　寄宿舎の設置
同窓会の統合　開校八十周年記念　竹沢校長の着任
第二節　専攻科
一　短大設立運動……五七六
促進同盟会の結成　農業短大の構想と設立中止
二　専攻科の誕生と苦難の道……五七九
専攻科の併設　一年制へ移行
三　専攻科の充実・発展……五八三

自営者養成　グリーンクラブの誕生と再び二年制へ　校長参加の巡回指導
ホームプロジェクト　資格試験　海外旅行　農業特別専攻科
四　農業短大の誕生と専攻科の発展的解消……五九〇
農業短大設立への道　専攻科の終焉
第三節　本校の発展
一　馬場町校舎改築……五九三
改築運動の経過　松村校長の着任と改築の具体化　高橋校長の着任と本館落成
二　三浦町現校舎の新築……五九七
吉野校長の着任　新天地を求めて　竣工と移転　校舎落成式　開校九十周年記念
三　施設の拡充……六〇六
水理実験室　果汁濃縮プラント　温室　水泳プール　木津農場　通学路
メインストリート　造園実習見本園
四　設置学科・教育課程の変遷……六〇九
農業経済課程・家庭課程　教育課程の編成　農林科と農業土木科　通学区域の改正　松任普通高校の誕生　三八改訂　畜産科の設置　造園科の設置　橋本校長の着任　教育課程の多様化　専攻コース制の後退　四八改訂
第四節　生徒指導と図書館活動
一　生活指導……六二七
生徒指導部　生徒心得と生徒指導計画　必修クラブ

目　次

二　進路指導……六三七
進路指導係　就職と進学　自営者
三　図書館活動……六四三
運営機構　管理運営　読書会
第五節　学校行事
一　松高祭と農業文化祭……六六七
松高祭と松農祭　農業文化祭
二　修学旅行……六七三
三　その他の学校行事……六七六
学校遠足　学校登山　陸上競技会　運動会　宿泊研修
四　農業クラブと家庭クラブ……六八一
農業クラブの歩み　全国大会　家庭クラブの歩み　家庭クラブの活動
第六節　生徒会と部活動
一　生徒会……六九二
組織と会則　活動　活動経費
二　運動部……七〇〇
各部設置状況　相撲部　野球部　ソフトボール部　陸上競技部　庭球部
剣道部　排球部　羽球部　送球部　スキー部

三　文　化　部……七一三
各部の設置状況　地歴部　文芸部　ＰＦＣ部　ＪＲＣ部　映画部　写真部
美術部　書道部　実践部　吹奏楽部　華道部　茶道部　演劇部　放送部
新聞部
四　農高ごよみ……七三二
第七節　本校の現況
一　教育方針と学校運営……七三三
橋本校長の退職と窪田校長の着任　教育目標・教育方針　教育課程　設置学科・
定員・学区・生徒数・学級編成　職員組織・校務分掌
二　施　設……七四〇
校地・建物の面積　施設の種類と配置
三　行　事　計　画……七四四
四　校　則……七四八
第八節　開校百年を迎えて
付　録
校歌・校章……七五五
応援団団歌集……七五九
校舎平面図……七六一

目　次

歴代所長・校長……七六七
旧教職員一覧……七六九
現教職員……八〇〇
開校百年記念事業委員会会則及び組織一覧……八〇二
開校百年記念事業委員会規約……八〇四
沿革史年表……八〇七
文化部運動部活動年表……八二五
編集後記……八三九

第一章　本校の草創期

第一章　本校の草創期

第一節　草創前史

一　明治維新と農業教育

藩政時代　慶安四年（一六四八）以来、加賀藩は厳重な検地によって村御印を作成し、村ごとに草高と免（納米率）を定め、一方では、作食米の制度をもうけて豊凶にそなえるなど、改作法という全国的な模範農政をおこなってきたが、要は農民の耕作意欲をあおって、農民をよりよく働かせ、年々の納米高を確保して百万石の藩財政を安定させるためのものであって、決して農村を豊かにし農民の地位を向上させるためのものではなかった。すなわち、藩政時代の農民とは、十村や肝煎と呼ばれる一部の人達をのぞいては、教育の機会を与えられない貧困な無学文盲の階層にすぎなかった。

明治維新　明治維新により封建政治が一挙に崩壊し、士族階級の没落により、士農工商のわくがはずされ、明治四年の廃藩置県に続き四民の通婚や田畑勝手作が認められ、翌五年に戸籍が作成されて農民にも姓を与えられ、地券制度が実施され、田畑の永代売買が許されるなど、農民の地位は日ごとに向上していったが、それは主として制度や身分上のことで、農業構造や経営技術の面ではそれほどの変化と進歩がみ

られず、地主と呼ばれる一部の指導階層が急激に勢力を拡張し、新たに地主と小作の関係が生れつつあった。

明治五年（一八七二）八月三日（太陽暦をもってすれば九月五日）に学制がしかれ国民全体に教育が施されることになった。

「学制」は外国の教育制度を参考とし、特に仏国の教育制度をとり入れて編制されたといわれている。「学制」は六編よりなり、大中小学区、学校、教員、生徒及試業、海外留学生規則、学資のことが定められている。のちに「学制二編」「学制追加」「学制二編追加」によって諸規則が補正追加された。

この「学制」の中で、「農業学校」については、

第三、四章　農業学校ハ小学ヲ経テ農業ヲ修メントスルモノノ為ニ設ク

とあり、農工商の学校は中学の一種であるという簡単な定義だけで、他にどんな規定もなく軽く取り扱われている。これは「学制」の中心が初等教育にあったことと、当時の産業の発達からみて、まだ産業教育のための科学的教育を必要とするまでには至らなかったからであろう。

明治六年三月一八日の「学制二編」（文部省布達第三〇号）、同年四月一七日の「学制追加」（文部省布達第五一号）には、農業学校については何等規定されていない。しかし、同年同月二八日の「学制二編追加」（文部省布達第五七号）で農業学校は次のように規定された。

農業学校

第二〇一章　農業学校教科ヲ分テ予科本科トシテ予科修業三年間本科修業二年間トス（農業学校教則別冊アリ）

農業学予科

一語学　二算術　三代数学　四幾何学　五地理学　六画学（図画）　七物理学（窮理学トイフモノ）　八博物学　九飜訳　十体操

但予科年限中修業時間ノ外歴史修身国体等国書ニ就テ学フヘシ

農業学本科

一農用化学　二植物学　三獣医学（農家必用ノ部）　四耕芸（園芸及樹木）　五農学　六農家経済学　七実地農業

但飜訳体操等ヲ付ス

しかし、この「学制」によっては、すぐに農業教育機関は生れなかったのである。すなわち、無学文盲のこれらの人達には、まず、普通教育を普及することが急務であって、その必要は認めていたけれども産業教育にまで手がのびなかったのである。農業教育、特に農民を対象とする農業教育が施策として取りあげられるようになったのは、ずっと後の明治九年（一八七六）前後に全国各地でおこった農業教育機関の開設の動きは、いずれも明治維新によって食禄と職を失った士族階級を救済するための勧業の衝に当たっていた機関から発達するもので、本校も、またその例外ではなかった。

二　士族の没落と勧業

廃藩置県と士族の没落

加賀藩は、元治元年（一八六四）の蛤御門の戦いで、幕府の参戦要請を拒絶して長州藩との提携を策したが、重臣政治の厚い壁と保守派の圧力に屈して失敗し、次いで、慶応四年（一八六八）の鳥羽伏見の戦いでは、時勢の判断を誤って幕府方へ援軍を進発させたが、幕府軍

の決定的な敗北の結果、まもなく金沢城に薩長軍の入城を許し、これを契機に主導権は完全に、薩長側に握られ、その後めまぐるしく押しよせる近代化の波を加賀藩の人達はほとんど受身の態勢で迎えねばならなかった。

明治四年（一八七一）に廃藩置県がおこなわれ、藩主前田慶寧が金沢を立ちのき、これに更って、旧薩摩藩の勝手掛側用人をしていた内田政風が赴任して治県のことに携わると、改革の嵐はさらに激しく吹きまくった。過去三〇〇年間、支配層として藩政に携わり、藩禄に寄食していた士族階級の人たちは、たちまちその地位と職を失ない、新しい職業を求めて転業していかねばならなかった。

明治四年一一月二八日付の金沢県庁からだされた告諭が、端的にその間の事情を物語っている。

時勢之沿革ニ随而、従来盛昌之地モ自ラ衰微ヲ醸ス義モ可有之、就中金沢町之如キハ数百年来政府ノ在ル処、士族卒群居シ以自ラ人民輻湊シテ潤沢ヲ得、寛裕ニ渡世有之候得共、既ニ士族、卒ハ禄制授産之方法被仰出候付、各開墾等ヲ以産業相営候得者、従来之如群居無之筈。去レバ渡世ノ道亦昔日ト異ナルハ必然ニ候間、各時勢ニ注目シ、生活ヲ謀ラザレバ忽チ困窮ノ域ニ可立至。尤金沢町而已ナラズ、予メ目的ヲ定メ、或ハ加能越等ヘ散居シ産業ヲ営孜、如何ニモシテ破産衰業ニ不及様勉励可及候。（下略）

廃藩置県によって士族は失業したが、同時に家禄を失ったわけではなく、明治九年八月一時金として金禄公債証書を下付されるまで、支給の方法に種々の変遷があったが何等かのかたちで毎年家禄が支給され、生計は一応保証されていたから、時勢の推移を認めながらも、ただちに県の指示に従って、開墾の仕事に転業するものは少なかった。

百万石のエリート意識からぬけきれず、藩政の盛時を追慕し、ことごとに明治政府と県政を批判し、右往左往、甲論乙駁を試みるだけで近代化の軌道に乗ろうとはしなかった。そのため、金沢のもつ封建的旧態勢を、一

挙にくつがえすさらに強力な方策がとられることになった。

明治五年（一八七二）二月に金沢県を石川県と改め、県庁を金沢から石川郡美川町に移転したのも、実は、そのためであった。徳川につぐ雄藩の前田百万石が、いまだに金沢を中心として温存している封建的因習と、士族階級の勢力を破壊し、ひいては、政府と県政に対する反対と批判の禍根をたちきり、あわせて、士族の転業を促進させようとしたのである。

金沢区方勧業場の開設

明治六年（一八七三）一月には、県庁を美川町から再び金沢に移したのであるが、その間、わずかに一年足らずであったのに、金沢の受けた打撃は頗る大きく、さしも殷賑を極めた百万石の城下は、たちまち廃都と化し、人口は激減して見る影もなくなってしまった。

市況忽チ沈衰シ、人心亦動揺ヲ免ガレズ、士族ノ邸宅ヲ毀チテ、或ハ郡村ニ隠棲シ、或ハ他府県ニ移住スルモノ多ク、平民モ亦随ヒテ生業ヲ失ヒ活計ノ窮迫ヲ感ジ、戸口大ニ減少シテ、藩政ノ時殷賑ヲ極メタリシ本町スラ連檐間々空閑ノ地ヲ挟ミ、地子町ニ至リテハ往々宅地ヲ耕シテ田園トナスモノアリ、満都寂寥、人ヲシテ憂愁ノ念ニ堪ヘザラシムルモノアリ（下略）

このようにして金沢は次第に衰微し士族は日々に貧困の度を加えていった。

これよりさき明治五年（一八七二）五月、金沢区役所が金沢市柿木畠（現在の県知事公舎付近）にあった旧壮猶館の建物を県から借りて「金沢区方開拓所」を開設した。「金沢区方開拓所」は貧民授産を目的とし、主として農業、牧畜を教え、各種工業についての製造技術も伝習した。記録によれば、主に草鞋や草履・筵をつくっていたとある。これがなかなか好評で、翌六年五月には「金沢区方勧業場」と名を変え、区内数か所にその支場がおかれ授産の普及に努めた。県費で生徒一六名を県外に派遣し、洋式陶器および織機を学ばせたり、職員の島田

直之がごく簡単な日用農事を講義していた。それがきわめて好評であった。

しかし、それは、あくまで実技上の授産であって、当時一石三円前後の時価に換算されて、支給される家禄の生計費の不足分を補う、当座の金銭収入を目的とするものであって、農業・牧畜を学術的に研究し、経営と実習に立脚した根本的職業転換の方向へ進むには、まだほど遠いものであったが、これが明治九年の本校創設の胎動となったのである。

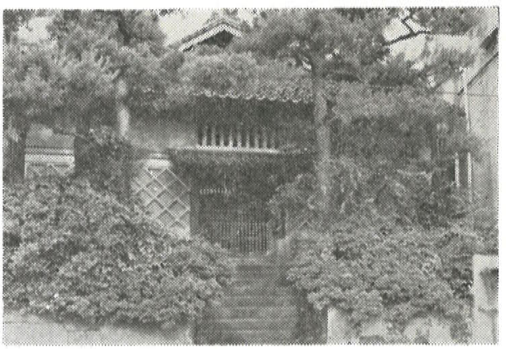
三、壮猶館と洋学

米艦の浦賀来航　本校が、初めて設立された「金沢区方勧業場」の前身である「壮猶館」とは、どんな建物であったろうか。

加賀藩には、藩校として、寛政四年（一七九二）に発足した明倫堂があり、藩士に漢学風の教育が行われていた。明倫堂は経学・律令・習礼等、付属学として和学・易学・医学・天文学・暦学・算学などを教えた。学生は素読生と生徒にわけられ、藩士の子供は男ならば八歳で素読生となり、十五歳から生徒になった。卒業は二三歳だったから、現在の大学並みであり、元治甲子の変における勤王の志士が多くここで学んだことはいうまでもない。嘉永六年（一八五三）ペルリ提督の率いる米東インド艦隊の浦賀入港によって、徳川幕府二三〇年にわたる鎖国のとびらはもろくも打ち破られ、旗艦サスケハナ号から轟然一発、江戸湾上空に放たれた空砲によって、日本国民は長い太平の眠りからさまされた。そして、ただちに外敵に対する警戒態勢がとられることになった。

加賀藩では、同年、金沢市上柿木畠の弓術練習場を廃止し、その敷地を拡張して西洋火術方を創設し、翌安政元年（一八五四）八月、これを「壮猶館」と改称して、その所属としては、小立野弾薬所・土清水村製造所・小

柳村製造所・鈴見村鋳造所・七尾軍艦所・西町軍艦所など兵器、火薬の製造所があった。「壮猶館」では、藩士の子弟に鉄砲の操法を伝習させるとともに、蘭法医の黒川良安、津田淳三、明石昭斉らを採用して、西洋兵書の研究や翻訳をおこなわせ、一方、西洋語学の教授と普及を計った。文久年間には全盛期に達し、ここで教授された学科は、砲術・馬術・喇叭・合図・洋学・医学・洋算・航海・測量などで、後には鋳造場・弾薬製造所などの兵器工場をも付設した。



現存する壮猶館玄関

に思われる。

本校創設の場

慶応三年（一八六七）金沢大学医学部の前身である卯辰山養生所（貧民のための無料病院）ができると、医学部門がこれから分離し、明治元年に英式兵制が採用と同時に、それまで藩校であった経武館と合併して道済館をつくり、軍事教育の規模はさらに拡大された。明治三年（一八七〇）一一月、これまでの英式にかわって仏式兵制が採用されて、新方式の士官養成所である斉勇館が設立されると、その地位をゆずって閉鎖されてしまった。明治二年に英学所として設立された致遠館も、この壮猶館内に生れたものであり、このように壮猶館は西洋兵学を初め、医学・蘭学・英学の学問所であったが、明治五年には「金沢区方開拓所」に使用され、これが本校創設の場となったのである。本校が主として士族を対象とし、教育内容に欧米農業をとり入れたことと考え合せると、本校と壮猶館の歴史がきわめて深いつながりをもっていたよう

この建物は、明治一三年六月に「石川県勧業試験場」が廃止されると、横浜宣徳・奥村政祐らが借り受けて九谷焼の製陶工場とし、明治一五年藤岡友次郎がさらにその建物を買収して西町に移築し、藤岡岩花堂と称して九谷焼の工場に用いていたが、昭和三五年一一月藤花学園に買収された。

現存する建物は、瓦ぶき木造二階建切り妻造りで、延四二二・四平方米、柱は約三〇糎角で二階へ上る階段の踏板の厚さは八糎もあり、梁の太さや木組みのがんじょうさは実に見事なものである。

第二節　草創期の農業講習所

一　勧業場農学科

本校創設の起源

明治九年（一八七六）四月、「金沢区方勧業場」において、同場職員島田直允が篤農家を集めて、試みに日用適切の農書を講義をして、非常に好評を得たことは前述したが、これは記録上、農業が座学として講義した最初であるが、講義された農書や講義の内容は不明である。本校が初めて学校らしい組織と内容をもったのは同年一二月からである。

これよりさき、本県から農学講習のため、津田仙の「学農社」に派遣されていた杉江秀直らが同年一二月に渡辺譲三郎を伴って帰県したのを機会に「金沢区方勧業場」を一二月四日、県に移管した。その名称を「石川県勧業場」と改称し、銅器、漆器、陶器、織物、染物、花筵、瑪瑙細工等の技術を教授するところとした。一方農事の伝習をこれから分離して、同場内の一部に農学科を創設し、中村重を管理者、渡辺譲三郎を教授、本県一一等

この建物は、明治一三年六月に「石川県勧業試験場」が廃止されると、横浜宣徳・奥村政祐らが借り受けて九谷焼の製陶工場とし、明治一五年藤岡友次郎がさらにその建物を買収して西町に移築し、藤岡岩花堂と称して九谷焼の工場に用いていたが、昭和三五年一一月藤花学園に買収された。

現存する建物は、瓦ぶき木造二階建切り妻造りで、延四二二・四平方米、柱は約三〇糎角で二階へ上る階段の踏板の厚さは八糎もあり、梁の太さや木組みのがんじょうさは実に見事なものである。

第二節　草創期の農業講習所

一　勧業場農学科

本校創設の起源

明治九年（一八七六）四月、「金沢区方勧業場」において、同場職員島田直允が篤農家を集めて、試みに日用適切の農書を講義をして、非常に好評を得たことは前述したが、これは記録上、農業が座学として講義した最初であるが、講義された農書や講義の内容は不明である。本校が初めて学校らしい組織と内容をもったのは同年一二月からである。

これよりさき、本県から農学講習のため、津田仙の「学農社」に派遣されていた杉江秀直らが同年一二月に渡辺譲三郎を伴って帰県したのを機会に「金沢区方勧業場」を一二月四日、県に移管した。その名称を「石川県勧業場」と改称し、銅器、漆器、陶器、織物、染物、花筵、瑪瑙細工等の技術を教授するところとした。一方農事の伝習をこれから分離して、同場内の一部に農学科を創設し、中村重を管理者、渡辺譲三郎を教授、本県一一等

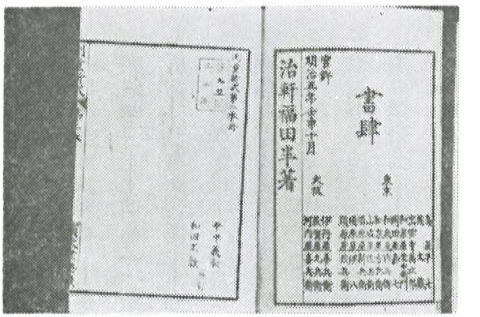
等出仕の吉崎宇一を総轄者として規模の整備に努めた。これを本校創立の起源としている。全国の各地方では、明治八年頃から、「学制」に規定された教科内容をとり入れたことによって、農業教育機関が生まれている。文献によって調べてみたところによると、次のようになる。

植物試験所――明治八年設置　現在宮城県農業高等学校
新潟県農事試験場内農事教室――明治八年五月～明治二四年二月　廃校
岐阜県農事講習場――明治一一年七月～明治一九年五月　廃止、明治三〇年七月　短期農事講習所開設
獣医学舎――明治一二年八月設置　現在岩手県立盛岡農業高等学校
広島県農事講習所――明治一二年～明治一九年二月　廃止、明治四三年四月　西条農学校開校
福岡県農学校――明治一三年一月～明治二〇年　廃校
福島県郡山開成山農学校――明治一三年一一月～明治一九年九月　廃校
山梨県農事講習所――明治一四年二月～明治一九年　廃止
鳥取県公立久米河村農学校――明治一四年～明治二八年三月　廃校、明治二八年八月　簡易農学校となる
農事講習会――明治一六年六月創設　現在山口県立山口農業高等学校

欧米農学の研究

そもそも、杉江秀直らの学んだ「学農社」は、欧米農業の研究のため再度欧米に学び、農具や洋菜の権威者だった津田仙が七人の同志とともに「学農社」を結成し、その第一事業として、八年九月、東京麻布に農学校を開校した。これは津田仙が、農業の近代化と封建性打破のため、合理的な欧米農学を日本に広める新しい農業の指導者を養成しようとして設立したものである。すなわち、洋書によって欧米の農業技術を研究学習し、更に日本古来の農業技術を学ばせ、農業の一層の向上を図り、国家富強の基礎を固

めようと意図したのである。また、農学のほか、一般教養を重視し、地理、経済、数学、物理などの科目を加え、農業社会の指導者としてふさわしい人物の養成に当たった。この学校は、明治一五年頃から次第に経営が困難となり、遂に同一七年頃閉校のやむなきに至ったが、欧米農業の紹介に努めた功績と反響は大きく、学生は数一〇〇名にも達したといわれている。一説には旧加賀藩士の林賢徳が士族授産の一助として設立し、津田仙を校長に招へいしたものであるともいわれているので、杉江秀直が「方今百般ノ学、皆之ヲ泰西ニ習フ、農事豈ニ独、旧株ヲ墨守スベケンヤ」といって上京したのも、彼一人の考えからおこったものでなく、農業に対する進歩的な考えが、本県においてすでに芽ばえていたことを示すものである。また、学農社と本県が特別の関係にあったらこそ、渡辺譲三郎を教師として招へいできたのであろう。しかも、本校の教育方針が欧米農業の研究にあったのも、壮猶館時代につちかわれた蘭学、英書への教養がたやすくこれを受けいれる素地と基盤をつくりあげていたからであろう。



農業講習所蔵書

こうして、本校は主として士族を対象に、学問的には津田英学塾大学の創設者、津田梅子の父、津田仙の農学社の系統に属する欧米農業の学問の府として、金沢市の現在の県知事公舎敷地内にうぶ声をあげたのである。

杉江秀直のこと

杉江秀直は、寛澄の嫡男で、天保五年（一八三四）金沢浅野町一二八番地に生まれ、通称を伝兵衛のち又一と改めた。

父は加賀藩士五〇〇石富田氏の与力で、知行一七〇石を受けた。安政二年（一八五五）父の跡目を相続して富

田方穀の与力となり、金沢城へ出勤精励したが、いくばくもなくして大政は奉還せられ、明治三年（一八七〇）御記録書抜方当分御用を最後として藩政の終末を迎えた。青年時代から農に志し、国家の興隆は農業の振興にあるとして常に農事の研修に専念していた。明治新政府はその逸材をみとめ、明治九年（一八七六）一月、彼を東京麻布の学農社に留学生として派遣した。同年一二月、学農社の教師、渡辺譲三郎を伴って帰郷し、野々市村に



杉江秀直

「農事社」を創立して近郷の篤農家を集め、欧米式農事改良を説き、田地の区画整理、農具改良、洋野菜の栽培、種畜の改良等を教育した。翌一〇年（一八七七）県では農業講習所を創設し、士族救済のためその子弟を対象に農業教育を初めたが、雨天の日または夜間教育を主とし、秀直、譲三郎も教師を兼務した。明治一三年にいたり石川県農業講習所の諸設備も漸く充実したため、同年七月、農事社を閉鎖して同所に合併し、渡辺譲三郎を所長となし秀直は離任した。その後、田区改正による農地改良の急務が叫ばれ、明治二〇年（一八八七）野々市村の石川郡模範農場において、二町五反余歩の田地にこれを実施して天下の耳目を驚かせた。わが国最初に試みられた耕地整理の先覚的偉業であり、逐次全国農村に普及するに至ったのである。当時、この模範農場に学んだ野々市村の玉田小三郎、安原村の高多久兵衛など、自村の耕地整理に心魂を捧げ尽くした。これはいずれも杉江秀直と農事社における教育が主因をなすもので、その功績はまことに偉大なものである。教育の第一線から引退した秀直は、晴耕雨読の生活を送ったが、明治一七年浅野町戸長を嘱せられ、同二二年廃止されるまでよく住民のため力を尽くされた。八一歳没。

二　農業講習所時代

創設当時の学校規模

明治一〇年（一八七七）一月二五日、学校としての規模が、ほぼ整ったので、前記勧業場農学科を分立して「石川県農業講習所」を創設し、育苗、養蚕、製糖、養蜂および牛馬の取扱いなどの実習を主とし、あわせて学理を授けることにした。ここに、その誕生をみた。

いま開所当初の訓令をあげると、次の通りである。

甲一三番

今般当県勧業本場内ニ於テ農業講習所ヲ設立シ生徒ヲ養成候条別紙心得書之旨ニ随ヒ志願之者ハ入学可願出候此旨管内布達候事

明治十年一月廿五日　　石川県令　桐山純孝

そのため、別に実習地として、勧業場の所抵であった旧金沢藩の厩跡（金沢市柿木畠）七、八〇〇歩（二五、七八五平方メートル）をこれにあて、栽培所と名付けた。

農業講習所入学心得及学場制限（明治一〇年一月二五日）は次の通りである。

一、今般設立スル処ノ農事講習所ハ高尚ナル農学ノ課業ヲ修メシムルヲ要セス専ラ農事ノ実施上ニ於テ目下農家ノ稗益トナルヘキ速成生徒ヲ教育スルヲ目的トス

一、生徒ハ貸費生ト自費生ノ二種ニ分ツ貸費生ハ勧業場内ニ寄宿セシメ自費生ハ通学セシムルモノトス

但自費生志願人遠処ノ者ニテ寄宿ヲ乞フ者ハ詮議ノ上許スヘシ

一、貸費生ハ一大区一名越前七郡ハ一郡一名ノ割ヲ以テ入学ヲ許スヘキニ付該区長ニ於テ生徒召集試験規則ノ各条ニ法リ尚本人ノ品行性質奈何ニ注意シ人撰ノ上入学願出テシムヘシ

一、該生徒卒業ノ上区内ニ於テ該業ヲ講究伝習セシムルノ方法ハ追テ各区ニ於テ見込相立伺出スヘシ

但シ卒業ノ暁ニ至リ未タ伝習方ノ見込確立セサル区分ノ分ハ勧業場ニ於テ任用シ或ハ他ノ区内ヘ一時数名ヲ要求スルモ妨ケナシ

一、自費生ハ先ツ二十名入学ヲ許スヘキニ付志願ノ者ハ生徒召集試験規則ノ各条ニ法リ願出スヘシ

一、貸費自費生トモ試験ノ上一ケ年生二ケ年生ノ区分ヲ定メ入学セシムヘシトイヘトモ願人ヨリ何年生タランコトヲ望ミ願出ツルモ妨ケナシトス

一、自費入学願ノ者ノ内生徒召集試験規則第七条ニ掲クルモノハ区長ノ添書ヲ乞フテ願書ヲ併セテ出スヘシ

但区長ニ於テハ本人従来農業ニ功者且ツ篤志ナルヤ篤ト取調ヘ規則第七条ニ適スルモノニシテ成業ヲ期スヘキト見認ルニ於テハ其旨ヲ詳記シ添書ヲナス可シ

一、貸費自費生トモ入学ノ許可ヲ得テオヨソ十五日以内ニ必ス生徒召集試験規則貸費生ハ第八条自費生ハ第九条ニ拠リ証書ヲ出スヘシ

一、貸費生自費生トモ来ル二月十五日限リ志願ノモノハ入学願出スヘシ

但シ二月十八日試験ヲナスヘキニ付願書ハ本人持参直チニ勧業場農事講習所ヘ出シ指図ヲ受クヘシ　同年二月二十六日志願等日限ヲ更生シ出願日限三月十日試験同月十五日トス

一、貸費給与ノ定額左ノ如シ

一、金三円五拾銭

内弐円　生徒一名　月費食料炭油費貸与

壱円五十銭　料紙筆墨等雑費給与

右ノ外入学ノ旅費衣類寝具ハ勿論書籍購求等都テ自弁タルヘシ

一、自費生徒ハ賄料モ右貸費ノ額ニ準スヘシ

一、今般召集スル処ノ農事講習所生徒ハ同所規則第四款ニ掲クル変則ノ科業ヲ以テ教授スヘシ

一、其他ハ別冊農事講習所規則ノ各款ニ就テ心得ヘシ

学場制限

第一条　此場ハ他日農業ノ師範タルヘキ者ヲ陶治スル処ナリ故ニ茲ニ入ルノ生徒ハ能ク其意ヲ体シ孜々学業ヲ勉励シ固ク

諸規則ヲ遵守スヘシ

第二条　入学ノ上ハ修業年間退校ヲ許サス

第三条　父母ノ病気等難捨置事故アルニ非レハ帰郷を許サス

第四条　生徒在場中発病ノ者ハ医ヲシテ診察セシメ三ケ月間ニ健康ニ復スヘキ目途アルモノハ場中ニ於テ治療セシムト雖モ病症ニ因リ当人願望アルトキハ帰郷セシムル事アルヘシ但シ三ケ月ヲ過テ健康ニ復セサルトキハ医接ヲ添ヘ退校ヲ願出スヘシ

第五条　生徒学場ヘ臨ノ節ハ洋服或ハ着袴随意タルト雖モ実験場ニ在テハ勉メテ軽便ヲ要スルカ故ニ洋服或ハ股引脚半ノ類ヲ用ユヘシ

第六条　授業時間前ニ教場ヘ出席スヘシ授業終始ハ撃析ヲ以テ報スヘシ

第七条　授業中談話並他席ヘ行ヲ禁ス

第八条　疾病等不得止事故アリテ欠席スルトキハ其事由ヲ教員ヘ届出ヘシ但シ三日以上病気ノ者ハ医接ヲ差出スヘシ

第九条　学業ハ都テ順序ヲ逐ヒ定課ニ就クヲ法トス猥リニ課目ノ位次ヲ論ス可ラス

第十条　渾テ授業時間ハ短日ハ一日五時間長日ハ六時間トス

第十一条　実験時間ハ午後三時トス降雨ノ節ハ教場ニ於テ科業書ヲ教授シ或ハ復習セシム

第十二条　実験場ハ若干ノ地所ヲ割渡シ各自学業ノ栽培経験セシム

第十三条　毎月一次小試験ヲ為スヘシ

第十四条　毎期ノ末大試験ヲ為スヘシ

小試験ハ毎月学ヒタル書ヲ温習セシメ大試験ニハ期間中学修シタル科業ヲ対策セシム

第十五条　年中休暇日左ノ如シ

日曜日

毎期大試験後一日

毎期学場ハ三十日トスレドモ実験ノ都合アルニ由リ十五日宛繰合セ休業ス但シ日限ハ臨時定ムヘシ

一月一日ヨリ十日迄

十二月二十五日ヨリ三十一日迄
孝明天皇祭　一月三十日
紀元節　二月十一日
神武天皇祭　四月　三日
神嘗祭　九月十七日
天長節　十一月三日

第十六条　一期中大小試験共落第ノ者ハ退校セシム

第十七条　卒業ノ者ハ試験ノ上卒業ノ証書ヲ与フ

一年生徒卒業証書式用紙奉書四ツ切リ

表面

証書

石川県農事講習所

印

農業講習所下等学科卒業候事

石川県農業講習所

第何号

同裏面

印

石川県農業講習所

割

二年生徒卒業証書或ハ前上ノ如シト雖モ農業講習所ノ下「下等」ノ二字ヲ除ク

農業変則　一ケ年
二ケ年　生徒科業

第一期　毎六ケ月ヲ以テ一期トス
口授ノ分都テ筆記スヘシ

原書　西洋農業用法　大意口授　培養秘録　講義或ハ輪講

原書　穀菜耕種並馬糞瀝　大意口授　農業問答　講義或ハ輪講　泰西農学実験　講義或ハ輪講　果木栽培法
講義或ハ輪講

第二期

原書　肥糞論　大意口授　草木六部耕種法　講義或ハ輪講
原書　牧　富　大意口授　養蚕新論実験　講義或ハ輪講　斯氏農書

右ハ一年生ノ学課ナリ但シ二年生徒ト雖モ先ツ之ヲ学習スヘシ

第三期

原書　農業化学　口授　斯氏農書
原書　養峰　口授　果実培養法
原書　家畜養法　口授　実験

第四期

原書　農業土質　口授　斯氏農書
原書　植物学　大意口授
原書　牧牛　大意口授
原書　牧羊　大意口授
原書　牧馬　大意口授　実験

この農業講習所所長は初め総轄とよばれ、石川県一一等出仕吉崎宇一がその任にあたり、教職員は八名であった。

修学期を二等に分け、下等科を一ヵ年、上等科を二ヵ年とし、生徒は貸費生（月額三円五〇銭）と自費生に分けられ、前者は通学、後者は寄宿を原則とした。開所当時の応募生徒は四〇名で、下等科は二〇名、上等科一〇名に初めて入学を許可した。



一宇吉崎職

石川県士族。一一等出仕。明治八年ごろ常徳寺派筆頭武士。明治九年一二月石川県農業講習所総轄となる。明治一三年六月、辞職・明治二二年三月、石川県農学校長・同二三年三月、辞職。

第一回の卒業生は、下等科が翌一一年の三月九日に八名、四月九日に二名、七月三一日五名、一〇月八日に二名、一二月二四日に一名の計一八名であり、上等科は同一二年三月一〇日に五名、七月一六日に六名の計一一名であったことから推測すると、最初の生徒の入学許可は、同時にそろって行なわれたのではなく、随時に行なわれた模様である。明治一〇年一月の農業講習所の創設は、生徒募集の開始を示すものであって、実際の授業開始は三月頃からであったかもしれない。

入学資格は二〇歳より三五歳迄の男子で、農事を営み、身体強健で粗読算数の心得のあるもので、二〇歳以下の生徒は珍しく、二〇歳以上のものが多く、三〇歳を越えるものもあり、入学試験は「斯氏農書」の講読力で試みられた。

士族の子弟が大多数で、第一回卒業生一八名中、士族は一三名、平民の出身者はわずかに五名で、平民といっても地主かまたは特殊の階層の子弟に限られていた。これは、本校が農民を対象として開校されたものでなく、士族を対象に創設されたことをはっきり物語っている。

出身地は金沢が主で、広く県内に分布し、富山、福井にも及んでいた。当時の石川県は、加賀、能登、越中、越前を含む大県で、石川県から福井県が分離したのは明治一四年で、富山県が分立したのは同一六年であるから

富山、福井からの入学者も県内入学者であり、また、たとえ行政上の問題がなくても、北陸で最初の農業講習所であるから、広地域からの入学生があっても不思議ではなかった。

学科は、主として雨天または夜間に行なわれ、晴天には必ず実習を行ない、舶来の果樹、蔬菜および桑苗を試植し、でぼん種等の洋牛を飼育し、種畜の改良を図った。

規則改正と開所式

明治一二年九月二九日、太政官布告第四〇号をもって、「教育令」が公布された。「学制」では、全国の教育を統一しようと考えていたから、地方の事情を考慮し、学校設置、教則設定等に関する認可権を地方長官に委譲した。

さて、明治一二年（一八七九）九月六日規則改正し、下等科（一ヵ年制）を廃止して修学期を二ヵ年とし、それをさらに四期（一年一・二期。二年三・四期）とした。生徒は農業生徒（公費生二〇名、自費生二〇名）と変則生徒（定員一〇名）に分けられ、その修業年限は前者が二ヵ年、後者は半年（一期）または一ヵ年（二期）で卒業することができた。この時、名称を農業講習科と改め、学科の時数を増加し内容の充実をはかり、別に、実地の研究を希望するもののために変則現業科を設けた。また、従来の貸費生をすべて公費生とし、一人一ヵ月に金四円五〇銭を給与して子弟の就学を極力奨励した。このようにして開所以来、農業機関としての基礎が確立した。

当時の教科目及び教授状況は次の通りである。

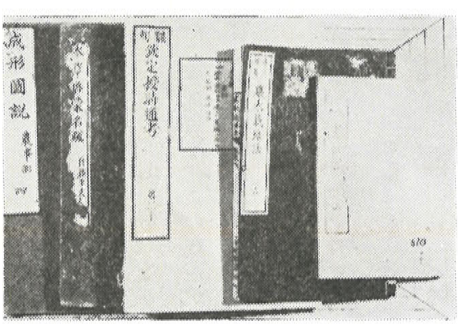
農業論　斯氏農書、培養秘録（佐藤信淵）
植物論　筆記（主として生理、病理）
土壌論　筆記
動物論　筆記（生理、病理、治療、主として牛につき）

画学　筆記
養蚕学　養蚕新論（田島定邦）
物理　格物入門
化学　ロース化学書
肥料　筆記
数学　代数、幾何まで
経済論　ホーセット氏のものを筆記
実習　接木法、桑樹栽培、畑作、養蚕、養蜂、飼牛、搾乳、製糖

教育内容は、当時としては非常に程度の高いもので、実習も旧来の水田稲作農業でなく、欧米農業の移入と研究に努め、果樹、蔬菜を始め、養蚕、養蜂、搾乳、製糖など農業の先端を行くものであった。

同年九月一七日に盛大な開所式を挙げた。それ以来、この日を本校の創立記念日と定め、昭和二三年に総合制がしかれるまで続けられた。

翌一三年四月には、蘆粟（別名砂糖もろこし）栽培の実習地として、石川郡専光寺浜に二町歩（一九・八三五平方米）余りの地所と石川郡金石蔵屋敷跡を開墾し、また、同年六月、中学師範校（金沢仙石町）の地所三反歩（二・九七五平方メートル）を借り入れて実習地の拡張をはかり、同年七月に農業講習所長に渡辺譲三郎教授を初代所長に任命し、巡回教師を兼任させた。従来、初代所長を吉崎宇一としているが、吉崎は総轄と呼ばれていて講習所長としては渡辺譲三郎が初代である。



教科書

三　農商務省の設置と本校の充実

渡辺譲三郎　新潟県士族。明治九年、学農社に学ぶ。明治九年一二月、石川県農業講習所教授、明治一三年七月、石川県農業講習所長となる。明治一四年一一月、辞職。

明治一三年（一八八〇）一二月二八日、太政官布告第五九号をもって「改正教育令」が公布された。この「改正教育令」において、農業学校、商業学校、職工学校等の名称があげられ、各府県は土地の状況によってこれらを設置することとなった。しかし、これらをどのように設置するかはなんらの方針も示していなかった。

第二条　学校ハ小学校・中学校・大学校・師範学校・専門学校・農業学校・職工学校、其他各種ノ学校トス

第八条　農学校ハ農耕ノ学業ヲ授クル所トス（以下略）

とあるだけで、それ以外何等の規定も示されていないので、これが中等教育であるかどうかは明らかではない。

明治一四年（一八八一）四月、農商務省が新設され、内務、大蔵両省の所管事務の一部を主管することとなった。その職制の中に、「農工商の学校を管理し、民立の農工商の学校を監督する」という一項があった。これは従来文部省の管轄下にあった実務教育を農商務省へ移管することを意味していた。文部省は、この規定が著しく教育の体系をみだし、「改正教育令」第一条の精神にそむくとし、直ちに太政官に上稟を行なって、規定の改正を懇請した。

文部省が前後四回にわたって上稟を行なった結果、遂に翌一五年農商務省の職制を改正し、文部省の主張通り、一般実業学校は再び文部省の所管となったのである。

二代所長

黒柳大六　岐阜県士族。明治一五年二月、石川県農業講習所長となる。明治一五年九月辞職。

三代所長

岩田忠益　石川県士族。明治元年九月、民政御用掛、越後府分課新潟民政局、明治二年聴訟兼断獄頭取、越後府判事試補、明治四年、砲隊輜重長、明治六年二月権少属、九月権中属。石川県三等嘱。明治一五年九月石川県農業講習所長となる。明治一六年六月辞職。

農商務省職制第二項に

官設ノ農商工の諸学校（工務省所管ノ工部学校ヲ除ク）農工業模範ノ建造物および博物館（従前内務省所管ノ分ニ限ル）ヲ管理シ民立農商工の諸学校ヲ監督ス。

これに対し、文部省は同年七月に文部省達第二八号をもって、中学校教則大綱に「農業、工業、商業ノ専修科ヲ置クコトヲ得ル」との規定を設けて、実業学校の所管を農商務省と争ったのであった。

明治一四年（一八八一）一〇月、本校は規則改正し、修業年限をさらに一年延長して三ヵ年とした。すなわち、初めの二ヵ年は農業生徒（正則）で農学普通科とよび、普通農事を教授し、後の一年を、専修葡萄栽培科、専修農芸化学科、専修製糖科、専修養蚕科、専修茶栽培科の六科にわけて、生徒の希望により、そのうちのいずれか一つを専攻させることにした。

各科のうち、専修養蚕科に一番希望者が多かったのは、当時は養蚕が最も時代の脚光を浴びた流行産業であったからであろう。

別に一期間の養蚕術の伝習生の制度を設けて、地域社会の要求に応じ、養蚕技術の普及につとめた。生徒数は六三名で、教授者数は九名であった。

そこで、その改正内容については石川県史料二巻掲載の「石川県農業講習所仮規則」（生徒募集・教則実習規則・教場制限・試験規則・寄宿舎規則・禁戒規則）に明らかにされているので、ここに掲げる。

石川県農業講習所仮規則

第一条　生徒募集規則

第一節　正則生徒入学年令ハ十六年以上二十五年以下トシ変則生徒ハ年令ニ拘ラスト雖モ概ネ十八年以上タルヘシ

第二節　補欠生徒ヲ募集スルハ毎年九月新聞紙ヲ以テ広告スヘシ

但変則生徒ハ第三節第五節ニ掲クル期節ヲ以テ出願スヘシ

第三節　給費生年令ハ第一節ニ適シ従来農ヲ業トシ且ツ耕地ヲ有スルモノ及ヒ其子弟ニシテ身体強壮読書算数普通作文ヲナシ得ル者ヲ要ス

但俊秀ノ人ニシテ農事ニ篤志アルモノハ此限ニ非ス

第四節　自費生ハ第三節ノ如シト雖モ耕地ヲ有セス従来農家ニアラサルモ妨無シ

但従来農事ニ篤志アルモノニシテ入学願出ルトキハ年令ニ拘ラス特別試験ノ上合格ノ者ハ都合ニヨリ入学ヲ許可スルコトモアルヘシ

第五節　正則生徒入学試験課目

読書　斯氏農書　物理全志

数学　和相場割　洋分数比例ノ内

作文　通常往復

体格

第六節　変則生徒入学試験課目

読書　泰西農学

数学　和洋加減乗除

第七節　給費生徒志願ノ者ハ第一号自費生ハ三号書式願書並給費自費生共第二号書式ノ履歴書ヲ添ヘ出願スヘシ入学許可ヲ得ルヨリ十五日間ニ給費生ハ第四号自費生ハ第六号書式ノ証書ヲ出ス可シ

第八節　変則生徒志願ノ者ハ第五号書式ノ願書ヲ出シ許可ヲ得ルモノハ第六号書式ノ証書ヲ出ス可シ

第九節　生徒出願人ノ内已ニ農業ノ実際ニ従事スルモ読書力ニ乏シクシテ落第シ商篤志止マス懇切ニ試験ヲ再願スル者ア

レハ試験トシテ一期間ノ寄宿ヲ許シ附科ヲ習得セシム再試験ヲ経テ及第スルモノハ入学ヲ許シ落第ノモノハ退学ヲ命ス

第十節　入学生徒従身元引受人ハ同郡ニシテ戸主ノ者ヲ相立テ願書及ヒ証書ニ連印スヘシ

第十一節　入学願書式左ノ如シ

第一号給費生徒願書式用紙中折系紙二通

給費入学願

誰義

従来農家ニシテ父或ハ兄誰相応ノ耕地所有罷在今般農家修業仕度給費生徒志願候間御試験ノ上入学御許可被下度因テ履歴書相添請人連署相願候也

石川県何国何郡（区）何町村番地

族籍何ノ誰子弟

年号月日　願人　何ノ誰印

本月何年何ヶ月

石川県何国何郡（区）何町村番地戸主

族籍

身元引受人何ノ誰印

石川県　農業講習所御中

右之通違無之候也

右戸長

何ノ誰印

第二号履歴書式用紙中折系紙二通

履歴

一何年何月ヨリ何年何月迄某府県某郡区町村住某ニ就テ何学修業

一……

右之通相違無之候也
年号月日　何ノ誰印
第三号自費生徒願書式用紙一号ト同シ
自費入学願

誰義
自費ヲ以テ農学修業志願候間御試験ノ上入学御許容被下度因テ履歴書相添請人連署相願候也
石川県何国何郡（区）何町村番地
族籍何ノ誰子弟
年号月日　願人　何ノ誰印
本月何年何ケ月
石川県何国何郡（区）何町村番地戸主
族籍
身元引受人何ノ誰印

石川県
農業講習所御中
右之通相違無之候也
右戸長
何ノ誰印

第四号給費生徒保証書式用紙証券界紙一通
入学保証書

一今般御許可ヲ得テ入学致候上ハ固ク諸規則ヲ遵守シ事業ヲ勉励シ決シテ教員及係員ノ指示ニ違背致マシク事
一本人身上ニ係ル事柄ハ受人悉皆引受可申事
一過失ニ因テ退学ヲ命セラレシ時ハ給費即時ニ還納スヘキハ勿論御指導ヲ待タス随意ニ他学校ヘ従事致スマシキ事

一故アリ給費上納ノ際本人ニ於テ弁シ兼候トキハ請人ヨリ還納スヘク其他本人身上ニ係ル事柄ハ請人悉皆引受可申事
右件々堅ク相守可申候也
石川県何国何郡（区）何町村何番地
族籍何ノ誰子弟
年号月日　入学人　何ノ誰印
石川県何国何郡（区）町村何番地　戸主
身元引受人　何ノ誰印
石川県　農業講習所御中
右身元引受人在籍前書之通相違無之候也
右戸長
何ノ誰印
第五号変則科入学願書式用紙中折系紙二通
変則科入学願
誰義
変則生徒志願ニ付養蚕科或ハ何々科修学仕度候間御試験ノ上入学御許容被下度此段請人連署相願候也
石川県何国何郡（区）何町村何番地
族籍何ノ誰子弟
年号月日　願人　何ノ誰印
本月何年何ケ月
石川県何国何郡（区）何町村番地　戸主
族籍
身元引受人何ノ誰印
石川県　農業講習所御中

右之通相違無之候也

右戸長　何ノ誰印

第六号正則自費生
変則自費生　従保証書式用紙証券界紙一通

入学保証書

一今般御許可ヲ得テ入学致候上ハ固ク諸規則ヲ遵守シ事業ヲ勉励シ決シテ教員及係員ノ指示ニ違背致マシク事

一本人身上ニ係ル事柄ハ受人悉皆引受可申事

一過失ニヨリテ退学ヲ命セラレタル時ハ随意ニ他学校ヘ従事仕マシク何分ノ御指揮ヲ受可申事

右件々堅相守可申候也

石川県何国何郡（区）何町村番地
族籍何ノ誰子弟
入学人　何ノ誰印
年号月日
石川県何国何郡（区）何町村番地　戸主
身元引受人　何ノ誰印

石川県　農業講習所御中

右身元引受人在籍前書通リ相違無之候也

右戸長　何ノ誰印

第二条　正則生徒教則

第一節　正則生徒在学期限ヲ三年間トス科程ヲ五級ニ分ケ第五級ヨリ第二級迄ヲ二ケ年間第一級ハ一ケ年間ノ修業ト定ム

第二節　本科ヲ分チテ普通及ヒ専習ノ二科ト為ス二科全級後卒業証ヲ与フ

第三節　専習科ニ入ルノ後吏員ノ見込ニヨリ甲生ハ管内外乙生ハ管内ヘ派遣シ其業ニヨリ実習セシムル事アル可シ

但普通科ヲ卒ラサルモノハ専習科ニ入ルヲ許サス

第四節　本科ハ課程ニ因リ筆記或ハ講義ヲナサシメ実習ヲ要スルモノハ現業ヲ以之ヲ教授ス

第五節　学期ハ毎年十月一日ニ始リ翌年九月三十日ニ終ル之ヲ二期ニ分チ十月一日ヨリ三月三十一日迄ヲ第一期トシ四月一日ヨリ九月三十日迄ヲ第二期トス

第六節　本科学課ヲ定ムル左ノ如シ

但第五級第四級ニ附科ヲ置ハ本科ノ余力ヲ以テ之ヲ修メシメンカ為ナリ

	普通科				
	第五級　第一期	第四級　第二期	第三級　第三期	第二級　第四期	
農学	アーレンス氏小原書 ウィルソン氏大原書 農業機械大意 アーレンス氏小原書 地質大意 アーレンス氏小原書 ウィルソン氏大原書 肥糞論 大学南校官版 泰西農学八本 田岸邦寧著 養蚕新論二本	アーレンス氏小原書 ウィルソン氏大 穀物及野菜論	ジョンストン氏小原書 同 農用化学 アーレンス氏小原書 デックルニン氏大 牧畜学 ターナ氏小 ジョンソン氏大原書 地質学 勧業寮官版 斯氏農書	バルフォル氏小原書 植物学 ターナ氏小 ジョンソン氏大原書 地質学 クレーランド氏大原書 動物学 勧業寮官版 斯氏農書	
化学	文部省官版　小学科学書 三本 東京大学三学部校刻 羅斯打氏化学	東京大学三学部校刻 羅斯珂氏化学	ハーコルド氏小原書 無機化学 ファウン氏大原書 有機化学	カルトウェル氏小 フレセニース氏大原書 分析化学 ペーン氏大原書 製造化学	

理科		宇田川準一訳　物理全誌十本	ガーット氏大原書　理学書 美国丁韙良著　格物入門	テシャネル氏大原書		
画学	自在画初歩	植物器械等ノ輪廓	実用平面幾何画法	配景法及見取図		
数学	関口開撰　改正新撰数学	関口開撰　改正新撰数学	関口開撰　改正新撰数学	関口開撰　点鼠問題集		
代数学						
実習	実習	実習	実習	実習		
附科	藤井徹著　草木栽培法　四本 佐藤信渕筆記　培養秘録三本　附録一本 史学　日本外史　日本政記	佐藤信渕著　草木六部耕種法二十一本 漢文学　十八史略　文章軌範				

専修科

第一級　第五期・第六期

養蚕科

製糖科

第七節　普通専習全科卒業ノ者ヘハ左ノ証書ヲ与フ

農芸科
農用製造化学科
牧畜科
但実地派出中ハ派出規則ヲ遵守シ本所ノ指揮ニ従フヘシ派出前後ハ本所並栽培所ニ於テ其専習ノ一科ヲ学習スルモノトス

第八節　栽培所ニ於テ各生徒実習ノ際ハ栽培係ノ指揮ヲ受該所規則ヲ遵守スヘシ

第三条　変則生徒教則

第一節　変則生徒ハ農学ノ内現業ノ一科或ハ二科ヲ学フヲ以テ其業ヲ終ルモノトス

第二節　変則科目ヲ分ッテ四科トス

育苗科　養蚕科　製糖科　栽培科

第三節　変則生徒ハ第五節ニ掲クル期節ノ前月上旬出願スヘシ

第四節　現業科規限第五節ノ如ク定ムルト雖モ時候ノ都合ニヨリ伸縮スル事アルヘシ

第五節　育苗科ハ三月上旬ヨリ四月上旬マデニ現業ヲ学ヒ後チニ二十日間左ノ書籍ヲ学修ス

果木栽培法
養蚕科ハ四月上旬ヨリ六月下旬マテニ現象ヲ修得シ七月初旬ヨリ左ノ書籍ヲ学習ス
養蚕新論・桑栽培法
製糖科ハ九月上旬ヨリ十月下旬マテニ現業ヲ修得シ右日数ノ内現業休課ノ日ハ左ノ方法ヲ筆記学修スヘシ
蘆粟栽培・製糖法

証

県　族　籍
苗字　名
何年何ヶ月
農学普通科及専習何々科卒業
候
年月日
石川県農業講習所　印
第何号

栽培科ハ三月上旬ヨリ十月下旬マテニ左ノ現業並ニ書籍ヲ本科生徒ノ中ヘ加リ学習ス可シ

現業　製肥　農具用方　培養秘録　六部耕種法
　　栽培　飼牛並搾乳

第四条　栽培所実習規則

第一節　生徒ノ実習ヲ分チ共行独行ノ二類トス共行実習ハ五級四級生独行実習ハ三級生以上トス

第二節　共行実習ハ五名ヲ一組トナシ毎組ニ伍長ヲ置キ若干ノ地ヲ割渡シ独行実習ハ一名宛若干ノ地ヲ受ケ持チ日々栽培実習スルモノトス

第三節　共行独行共必ス帳簿ヲ有シ日々栽培ノ順序及植物栄枯ノ景況ヲ詳記スヘシ

但シ共行ハ一組ニ一簿独行ハ各自一帳ヲ有スルモノトス

第四節　生徒実習時間ハ事業ノ繁閑ニヨリ日々二時午後ヨ乃至三時間トス事業ノ終始ハ擊析ヲ以テ報ス

第五節　生徒実習ノ順序

第五級生

栽培・農具用方・製肥・飼牛

第四級生

栽培・農具用方・製肥・飼牛・埋渠法

第三級第二級生

栽培・接木・飼牛・製糖・搾乳

第六節　栽培飼畜等ノ業ヲ履行シタル其要点細目ヲ本所大小試験ノ節問題ニ因テ筆答セシム

但シ点数ハ都テ学科ニ準ス

第七節　栽培飼畜ハ通常二時間就業スルトキハ一点ヲ附シ三時間ノトキハ二点ヲ附ス若シ出頭ノ際半時間ヲ後ル、時ハ半点ヲ減スルモノトス

但シ実習専行ノ節ハ此限リニアラス

第八節　農具使用中誤テ毀損スルモ其旨届ケ出サルカ或ハ使用后洗除セサルトキハ其ノ日ノ点ヲ除去スルモノトス

第九節　都テ栽培ノ事業ハ午後ニ限ルト雖モ炎熱等ノ節ハ午前ニ繰替ル事アルヘシ

第十節　事業ノ終始ハ各生徒ヲ一場ニ集メ教員自ラ其場ヲ監シ点検スヘシ
第十一節　生徒出場ノ節ハ出頭簿ニ捺印スヘシ

第五条　教場制限

第一節　教場ニ在リテハ万事教師ノ指揮ニ従ヒ身体衣服ヲ正シクシ敬シテ業ヲ受クヘシ
第二節　教場ノ出入ハ殊更札譲ヲ主トシ務メテ静粛ニスヘシ
第三節　教場ノ進退ハ都テ撃析ニ応スヘシ
第四節　教場ニ入レハ授業ニ要用ノ書器ヲ整頓シ教師ノ出ルヲ待ツヘシ
第五節　授業中病気或ハ不得止事故アルトキハ教師ノ許可ヲ得テ退場スヘシ
第六節　病気事故アリテ課業ヲ欠席スルトキハ其趣ヲ生徒取締ヘ届出ツヘシ
　但シ三日以上病気ノ節ハ医按書ヲ添ヘ再届出ツヘシ
第七節　授業時間短日ハ五時長日ハ六時或ハ七時間トス
第八節　栽培所実習ハ降雨等ノ節ハ臨時休業スル事アルヘシ
第九節　実習休業ノトキハ教場ニ於テ科業書ヲ教授シ又ハ復習セシム
第十節　一級生徒専習スル所ノ現業ヲ栽培地ニ於テ研究スルノ順序ハ教師ノ指揮ニ随フ可シ
第十一節　現業科ノ内期節アルノ科業ハ一時学業ヲ止メ現業ノミ従事スル事アルヘシ
第十二節　教場ハ必ス着袴或ハ洋服タルヘシ栽培所ハ洋服或ハ股引脚半ノ類ヲ用フヘシ
第十三節　在学中病ニ罹リ三ケ月間ニシテ健康ニ復セサル病症ハ医按書ヲ添ヘ受人連署退学出願ス可シ
第十四節　年中休暇左ノ如シ
日曜日　毎期大試業後三日間
年始年末休業　一月一日ヨリ同月十日迄
　十二月二十五日ヨリ同月三十一日迄
暑中休業学場ハ三十日トスレトモ栽培所ノ都合ニヨリ繰合セ十五日休業ノ事アルヘシ但日限ハ臨時定ム可シ

孝明天皇祭　紀元節　春季皇霊祭　神武天皇祭　秋季皇霊祭　神嘗祭　天長節　新嘗祭

第六条　生徒試験規則

第一節　試験ハ小試験大試験臨時試験ノ三トス

第二節　小試験ハ毎土曜日ニ施行シ毎土曜日ハ二三課宛月末土曜日大試業ハ毎期ノ末ニ施行シ臨時試験ハ所長ノ見込ニ因テ年末等ニ施行スルモノトス

第三節　試験ノ時ハ一机ニ一名或ハ二名ヲ坐セシメ問題ニ依テ筆答セシム

第四節　筆答ヲ以テ試ミ難キ件ハ一名宛口解ナサシメ之ヲ試ムルモノトス

第五節　大小試験全点数ヲ合シテ一期間農学化学理学合セテ五分ノ三数学画学合セテ三分ノ一ヲ有セサルモノハ落第トシ猶ホ原級ニ在リ温習スルモノトス

但シ小試験ニハ問題五条一題ニ付十点ヲ全点トス臨時試験ニハ同五条一題ニ付十五点ヲ全点トス大試験ニハ同二十条一題ニ付二十点ヲ全点トス

第六節　現業出席点各学課一課各一点宛ヲ合シ日数ニ応シ全点ヲ定メ七分ニ満サルモノハ其試験点第五節ノ数ヲ有スルモ昇級ヲ許サス

第七節　毎大試験課目中点数五分ノ一ニ満サルモノハ昇級ヲ許サス

第八節　普通農学科卒業大試験ノ節四期間ノ学課並ニ現業点ヲ合シ第五節第六節ノ点ヲ有スルモ課目中一課第七節ノ如キモノハ専修科ニ入ルヲ許サス

但教諭ノ見込ヲ以テ尚一期間修学セシムル事モアル可シ

第九節　普通農学科卒業大試験ハ四期ノ末五級ヨリ二級マテノ全課ヲ試験スルモノトス

第十節　大試験ノ節落第シ原級ニ止リ温習ノ上再ヒ大試験ニ落第ノ者ハ退学ヲ命ス

第十一節　毎日学場出頭以前生徒取締ノ出頭簿ヘ捺印スヘシ毎課一点充ヲ附スルモノトス

第十二節　生徒品行ニヨリ教員係員ノ見込ヲ附シ所長ノ決ヲ取リ賞点罰点ヲ附スル事アル可シ

第七条　寄宿所規則

第一節　生徒寄宿所ニアリテハ寄宿所規則ヲ遵守シ互ニ恭謙信義ヲ厚クシ品行ヲ慎ミ苟モ軽薄侮慢ノ挙動アルヘカラス

第二節　晨起入寝及散歩時間門限等ハ日ノ長短ニ因テ定ムルモノトス
第三節　右時間外勉励スルハ随意ト雖トモ午後入寝後ハ黙読ス可シ
第四節　寝床ニ就クトキハ必ス灯火ヲ消ス可シ
第五節　金貨ノ類ハ常ニ自ラ所持スルヲ許サス必ス雑務掛ヘ預ケ置キ入用ノトキ其金額ヲ請取ヘシ
第六節　休暇日其他課業後ハ門外散歩ヲ許スト雖モ門限ヲ慥リ放酔ヲナス等ノ不品行ヲ慎ムヘキ事
第七節　課後及起臥食事等都テ撃析ノ報知ニ随フヘシ
第八節　掛員ノ外室内ニ入ルヲ禁ス用事アリテ父兄ノ対面ヲ請フモノアラハ応接所ニ於テ対面ス可シ
第九節　散歩時間ノ外止ムヲ得サル事故アリテ外出ナサント欲スルトキハ取締ニ告ケ進退スヘシ最モ帰舎ノ節ハ保証人ノ証書ヲ持参ス可シ
　但シ止ヲ得サル事故トハ親族ノ病変或ハ災難ニ遭遇スル事件ヲ云フ
第十節　食堂ニ於テ猥リニ食物ノ好悪ヲ為スヘカラス若シ包厨ノ不都合アラハ之ヲ雑務掛ニ申告スヘシ
第十一節　毎朝室内ヲ掃除シ専ラ清潔ヲ主トスヘシ
第十二節　生徒中公撰ヲ以テ監生並舎監ヲ置キ毎舎ノ取締ヲ成サシム
　但公撰不都合アリト見認ル時ハ所長ノ見込ヲ以テ撰抜スル事アルヘシ
第十三節　生徒申告スヘキ事件ハ総テ監生或ハ舎監ニ告ケ其指示ヲ請フヘキ事
第十四節　毎朝生徒室内ヲ掃除スヘシ若シ不潔ニシテ諸事整頓セサルトキハ舎監其責ニ任ス
第十五節　生徒若シ病アレハ医ヲ招キ診療セシメ其重キハ引受人ニ附シ或ハ病院ニ入ラシメ療養セシム最モ薬価診察料ハ自弁タルヘシ

第八条　禁　戒

第一節　争論ハ勿論高声雑談他ノ勉励ヲ妨クル事
第二節　樹木植物ヲ損スル事
第三節　果実ヲ摘ミ取ル事
第四節　借用ノ書籍ヲ粗暴ニ取扱ノ事

第五節　飲酒遊戯ヲ為ス事
第六節　取締ノ許可ヲ得ス荷物ヲ門外ヘ出ス事
第七節　稗史小説及玩器ヲ室内ヘ入ル事
第八節　金銭衣服ノ貸借ヲナス事

第九条　罰則

第一節　怠惰或ハ放蕩ニシテ教員屢々訓戒ヲ加フルモ尚改メサルモノハ退学セシム
第二節　凡ソ本所ノ規則ヲ犯スモノハ一日以上七日以内教場ノ洒掃ヲナサシム
第三節　栽培所規則ヲ犯スモノハ一日以上五日以内農夫ト共ニ牛舎及該所ノ洒掃ヲナサシム
第四節　寄宿舎規則ヲ犯スモノハ五日以内二日以上外出ヲ禁ス
第五節　凡ソ場中ノ書籍器械戸障子等ヲ故ラニ毀損スルモノハ其修補ノ費ヲ償ハシメ且一日以上三日以内外出ヲ禁ス若シ誤テ毀損セシモノハ其修補ノ費ヲ償ハシムルニ止ル

石川県農業講習所入学心得

一　本所ハ専ラ農事ヲ講習シ農家ノ稗益トナルヘキ生徒ヲ教育スルヲ目的トス
一　教科ヲ分ツテ二類トシ一ヲ本科トシ一ヲ変則科トス
一　本科ヲ学フ者ヲ正則生ト名付ケ修学三ケ年ニシテ卒業ス変則科ヲ学フ者之ヲ変則生ト名付ケ修学間ハ一年ヨリ多カラストス
　但シ変則生ハ都テ自費タルヘシ
一　正則生徒ハ給費生ト自費生ノ二種ニ分ツ給費生ハ講習所内ニ寄宿セシメ自費生ハ通学スルモノトス
　但シ宿所遠隔通学ニ困ムモノハ願ノ上都合ニヨリ寄宿セシムル事アルヘシ
一　給費生徒志願ノ者アレハ郡役所ニ於テハ予メ本人農事ニ篤志ニシテハ父兄或ハ自己相応ノ耕地ヲ所有スル農ナルヤ生徒募集規則第三節ニ適シ其成業ヲ期スヘキモノナルヤ否篤ト取調ラヘ該規則ニ照ラシ一応試験ヲ遂ケ其合格ナルモ尚本人ノ品行性質奈何ヲ探リ其状ヲ詳カニセル講習所宛ノ添書ヲ附シ出願セシムヘシ
一　自費入学ヲ願ヒ募集規則第四節ニ当ルモノハ郡区役所ヨリ講習所宛ノ添書ヲ以テ出願セシム可シ

一　給費生徒ハ賄料ヲ給与ス其他渾テ自弁タルヘシ

以　上

一五年当時の同所の教授法について文部省年報（一五年度）は「午前ハ書ニ就キ学理ヲ講究セシメ午後ハ耒耜ヲ採リテ実業ヲ試験セシメ毎土曜日ニハ学科上ノ問題ヲ与ヘ其学力ヲ試験スル等諸種ノ方法ヲ以テ競争勉学セシメ其他春耕収ノ期又ハ害虫予防駆除ノ時ニ際シ実地村落ニ派遣シ其状況ヲ観察セシメ力メテ生徒ヲシテ学理ト実業ヲ併修セシムルヲ要ス」とあるように、学理と実験とが相半ばした授業が行なわれていた。

同所の全国の農業教育機関としての位置は、明治一〇年代には専門学校として取り扱われ、官立としての駒場・札幌の両農学校をのぞいた府県立の機関としては創立年代教員数、生徒数の面からしても先駆をなしたものである。地方の農学校として、明治一五年農学校通則公布直前の農学校は次の一一校をあげている。

所在	名称	創立	年限	教員数	生徒数	歳費
東京	駒場農学校	明治一〇	三	四四	一一八	六、二五三円
東京	麻布獣医学校	明治一〇	三	七	一一八	七、〇〇円
秋田	秋田農学校	明治一〇	三	五	一一八	三、一五四
岩手	小石川農学校	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四
福島	福島農学校	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四
鳥取	鳥取農学校	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四
石川	石川農学校	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四
福岡	福岡農学校	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四
岐阜	岐阜郡農講習所	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四
山形	山形農事講習所	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四
新潟	新潟勧農場	明治一〇	三	一九	一一八	三、一五四

授業料　一、八〇〇円？

（「文部省年報」）

四　農業講習所時代の特色

四代所長　湯浅則和

山口県士族。石川県四等属。明治一六年六月、石川県農業講習所長となる。明治一七年二月、辞職。

農場実習

実習地はすべて畑作で、数一〇種の舶来品種を試植し、果樹、蔬菜が主なものであった。明治一一年九月に明治天皇が金沢御巡幸の際には、特に、本校生徒の栽培した果実、蔬菜を天覧に供する光栄に浴したのも、学農社の津田仙が洋菜栽培の先覚者だっただけに、その系統に属する教授渡辺譲三郎の実習指導によったものであろう。果樹としては特に葡萄をとりあげ、一四年には専修葡萄栽培科を設け、同一六年には卒業生二名を山梨県に派遣して先進地の実情を研究させている。

水稲農業は、本校創設の主旨からみて、当初はほとんど顧みられなかったが、かといって、全く無関心であったのではなく、明治一五年に始めて水田を開き良種子を求めて試作をこころみている。

養畜、家禽

明治一一年には早くも「でぼん種」、雑種牝牛一頭と和牛一頭を買い入れ、畜産教育の研究に着手した。明治一三年九月、生徒の高倉栄次郎を下総種畜場に派遣して、牛馬睾丸の割去術および飼育法を学ばせ、一方、家禽の孵卵を試み、鶏二二羽、吐綬鶏（七面鳥）三羽、鵞二四羽の孵化に成功し、一四年には専修牧畜科を設置し、同一六年には文部省より獣医器械一組を下賜されるなど、後年になって本校に獣医科を設置する基礎をつくった。

養蚕

明治初年の海外貿易では、絹が最も重要な輸出品であったところから、桑や蚕の品種改良や生産技術の研究が当時の急務であった。本校においても、明治一一年に桑苗の試植が行なわ

れ、同一二年四月には生徒の内田兌事、津田正幸を勧農局試験場養蚕部へ派遣し、同一四年に卒業生内田兌事をさらに、福島県に派遣して飼蚕法を研究させ、専修養蚕科のほかに養蚕伝習科を設けて、養蚕技術の普及発達につとめた。

明治一四年六月に第二回勧業博覧会から生糸褒状を受け、同一七年七月には日本農会より三等白繭優等賞状を受けた。

蘆粟の試植と製糖

蘆粟（一名砂糖もろこし）はアフリカの原産で、インド、満洲、中国、アメリカなどで栽培されていたが、わが国への移入にはいくつかのルートがあった。本校の蘆粟は、明治七年に文部省の雇教師として清国の寧波から東京へ招へいされた米人麦嘉諦（マカデー）が、種子一穂をもたらしたものを、同年秋に津田仙がゆずり受けて栽培した。それを明治一一年九月に吉崎宇一が上京の折、学農社から一穂もらってきて試植に成功し広く県下に分配したもので、これが本県の蘆粟栽培のはじまりである。

蘆粟は蜀黍や箒蜀黍、高粱と同種で形態性状はともによく似ているが、ただ、それらのものと違う点は、稈の柔組職中に多量の糖分を蓄えていることである。しかも、砂糖を採取するころは実もかなり成熟し、食糧や飼料にも利用できるし、気候に対する適応性も強く、どこでも栽培ができ、自家用程度の砂糖ならば、瓜類や豆類の周囲作、または、混植で十分みたすことができた。

明治一二年四月に卒業生の宮口安躬、岡部八男雄を静岡に派遣して製糖法を研究させ、文部省から抜根器、播種器、玉蜀黍脱粒器などの改良農具を借りて栽培規模の拡大をはかった。同一三年、石川郡専光寺浜に二町歩余と金沢金石蔵屋敷跡を開墾して、農場を拡張したのは蘆粟栽培のためであった。なぜ海岸の砂丘地が選ばれたか

は、おそらく粟が深根作物で、耕土が深く排水の良い所がよく、酸性の土壌には弱いがアルカリ性の土質に強く、また、塩分に対する抵抗力が強いといわれていたからだろう。一四年の規則改正には専修製糖科を設置し、同一八年には大日本農会から琥珀蘆粟糖六等賞を受けたが、同二四年の火打谷時代の作付品目にその名が見えないので、講習所の廃止とともにその栽培が終りをつげたのであろう。

第二章　石川県農学校時代

第二章　石川県農学校時代

第一節　火打谷時代（明治一九年―二八年）

一　県農学校の誕生

火打谷移転の理由

明治一四年に農商務省が設立され、農業関係諸学校は農商務省の所管となったため、学制の統一上から、その所管を争った文部省は明治一六年四月一一日、文部省達第五号をもって「農学校通則」を公布して、農学校のあり方についてその基本的方針を明らかにした。この通則は明治一九年文部省令第三号をもって廃止されている。理由は全く不明であるが、当時の地方経済の不況と産業の不振とによって、農学校の新設は勿論、既設の農学校さえ廃校のうき目をみたことと考えあわせて、「農学校通則」の存在意義がなくなったことによるとも考えられる。この「農学校通則」によって設立された農学校に対し、政府は財政的な援助を与えておらず、また実際に、「農学校通則」によって農学校が新設されたかどうかも不明である。

鞍田純氏の「農業教育の成立」（「日本農業発達史第三巻五二六頁」）によると、長崎県に、福江農学校、壱岐農学校、平戸農学校（一八年二月～一九年四月）の三校が創設されたことを記している。

通則によると、農学校を二種にわけ次のように規定した。

第一種　主トシテ躬ラ善ク農業ヲ操ル者ヲ養成スル　修業年限二年（一年延長することができる）入学資格　年令十五年以上小学中等科卒業程度。

第二種　主トシテ善ク農業ヲ処理スル者ヲ養成スル　修業年限三年（一年延長することができる）入学資格　年令十六年以上初等中学科卒業程度。

第一種は農業の躬行者の養成で、専ら実業を授け、教科は簡単なものであった。第二種は農業の処理者の養成で、学理と農業をならび授けるものとした。すなわち、第一種農学校は現在の農業高等学校に相当する農業従事者の養成学校であり、第二種は高等専門学校（大学）に相当する農業指導者の養成学校であった。

当時の農学校は、本校を初め全国で一〇校内外であったが、いずれも教育対象が士族か特別の階層の子弟に限られ、生徒数も少なく、教育程度も高く、教育内容も欧米農業の直輸入であったために、実際に農業に従事している一般の農民にとって、これらの農学校は高嶺の花であって、農村文化を向上し、農業の体質改善を期するためには実益の薄いものであった。

所在	名称	創立年限	教員数	生徒数	歳費
新潟	農学校	明一八三	七	一〇〇	三、九六〇円
山梨	農学校	〃一五三	八	三三	二、一五一円
岐阜	華陽学校	〃一一四			
福島	開成山農学校	〃一三三	三	二〇	四、一四五円
石川	農業講習所	〃一〇三	一〇	六二	三、二三五円

（明治一八年府県立農学校一覧）

鳥取	倉吉農学校	〃一八三	四	二二	六	四、一〇〇円
広島	農学校	〃一二三	五	九		三、二六九円
福岡	農学校	〃一三四	七	三四		三、九一四円
宮城	農学校	〃一八六	七	二九		二、五六七円
山口	農学校	〃一八三	六	三〇		一、三九四円

この期にのぞんで、文部省は従来の農学校を二種農学校とし、これに対して、新しく農家に直接実益のある農学校、すなわち、第一種農学校を府県立で、しかも、数郡で一校ずつ設立することを強く奨励し、農学校教育の理想像をつくりあげたのである。

こうした動きの中で本県においても、第二種農学校の性格をもっている農事講習所を改廃して、文部省の方針通り、教育程度を下げて実習を主とし、かたわら学理を授ける第一種農学校の設立の動きがあらわれ、明治一八年一一月の通常県会で徳久少書記がその告辞の中に「従来ノ農業講習所其位置適当ナラサル而已ナラズ曩ニ農学校則制定アリ、此際組織ヲ一変シ通則ニ基ツキ教科ヲ改正シ更ニ加能両所適当ノ地ニ各一校ヲ設ケ一ハ学術ノ進歩ヲ助ケ一ハ米作改良ノ本部トナシ速カニ普及ヲ策進セントス」（「石川県議会史一巻」）と述べているように加賀および能登にそれぞれ一校の農学校の設置を企画したのである。

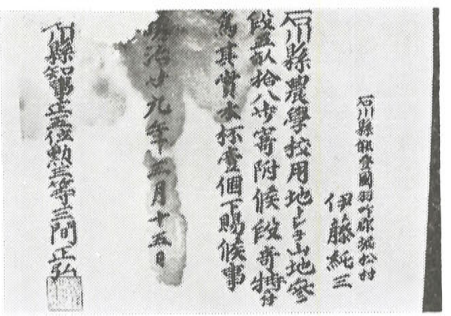
この企画のなされた明治一八年という年は、明治一四年以来行なわれていた幣制改革が漸く終了した年である。このため、高騰していた米価は暴落し（二一年まで）、農村の不況は深刻化し、倒産者が相次ぎ、中小農の耕地は急激に大地主に集中した年でもある。この農業恐慌の年に敢えて農学校設立の議が出されたことは、地方

財政の極度に悪化した当時として時期尚早の感はまぬがれない。しかしその反面、農家経済が圧迫すればするだけ、その根本対策として農民に農業の学理や経済観念を植えつける必要が痛感され、実地農業者に農業教育を授けるため農学校を設立しようとする動きが現われてきたのも当然である。

明治初年以来の士族授産的農業指導者の養成でなく、実地に取り組んでいる農民の養成がこの頃から表面にあらわれてきたことに注目しなければならないし、本県の場合もそうした実務者のための農業教育機関設立を意図したものである。

このようにして、明治一八年に県議会において、加賀、能登両国に各一校の第一種農学校を設立することが議決され、まず、とりあえず能登地区に開校することになった。明治一九年（一八八六）三月一九日、石川県農業講習所は石川県農学校と改称し（県乙第七九号）その位置を金沢市柿木畠から羽咋郡東土田村字火打谷串田野（現在志賀町火打谷）に移転した。これが本校の農学校という名前の実質上の開校となった。

移転先として、なぜ、山間へき地の火打谷が選ばれたかについては、一六年九月にはじまった通常県会中、吉本栄吉議員の発言の中に「農業講習所ノ如キハ専ラ実業ヲ事トスルモノニシテ駒場農学校山林学校ニ於ケルモ皆遠ク市外ニ僻在セリ本員ハ講習所ノ市中ニアルヲ欲セス遠ク市外ニ於テ充分ノ実験地ヲ与ヘント欲スルナリ」（明治一六年度「石川県会議事筆記録」）と表面上は「農家に必要な朴直の気風を養成するため、都市騒擾の土地を避けた」のだとしているが、おそらくは、明治一四、五年ごろから起こった経済不況のため、物価が下落し明治一七年の銀行取付による大恐慌を惹起し、金融会社が軒並に倒産し、主として預金していた士族はほとんどその財産を失ったのであった。これら経済界の動揺を打開する意図もあって、北海道に石川村を建設し、北海道開拓農業に必要な米国式大農法をもあわせ試みるために、これとよく似た環境にある火打谷が選ばれたのではな



寄付に対する感謝状

かったろうか。

それにしても、本校誘致のために払った羽咋郡有志の運動と熱意を忘れてはならない。一三四、〇〇〇歩の広大な土地と校舎ならびに寄宿舎等の建築費は、全て羽咋郡有志国田武信・伊藤純三・松島清太郎らを中心とした寄付によったものである。もちろん、その当時は地価は低落し金沢市内においても、三、三平方メートル二、三銭が普通で、しかも、土地を所有するときは地租税を納入しなければならず、土地を買い取ってもらう時は酒を贈って謝意を表したとまでいわれた時代であったから、土地の提供も比較的容易であったかもしれない。

条件は県下どこでも一緒だったのであるから、羽咋郡に、よほど、農業教育に特別の関心と理解のある人々がいたからだろう。

農学校の校地となった羽咋郡火打谷村串田野の地について、一九年「石川県学事報告」のなかに「此勢タルヤ小松雑木所々ニ散在セル岳ノ如ク近村農家ノ馬草場ト成シ或ハ少シク開墾シ大小麦等ヲ植シアリ東南ハ火打谷村仏木村等山地ニ続キ西北ハ梨谷川繞廻シ境ヲ成ス」とのべているように原野で、移転当時は火打谷村極慈寺を仮教場にするとともに教職員および生徒の寄宿舎に充当するという状態であった。同校の予定校舎敷地二、〇〇〇歩(六、六一二平方メートル)実習地平地一一二、〇〇〇歩（三七〇、二四九平方メートル）山地二〇、〇〇〇歩（六六、一一六平方メートル）計一三四、〇〇〇歩（四四二、九七六平方メートル）で、別に羽咋郡柳田村に水田一町八反（一七、八五一平方メートル）を借用し、出作実習地とし

ていた。

石川県農学校の発足

火打谷に移転と同時に校名を石川県農学校と改称し、規則を改正して（県訓令乙七九号）学科は本科、別科の二学科を設け、その修業年限を本科は二カ年、別科は一カ年とし、本科は実習と学理を併修し、特に実業の熟練を旨とし、別科は主として実習を課し、余暇に学理を授けることにした。また、養蚕については、従来の一期間の伝習生の課程をそのまま残した養蚕伝習所が設けられていた。

・石川県告示第百四十一号（県農学校の生徒募集要項）

石川県農学校本科生徒三十三名年令満十五年以上募集候条志願ノ者ハ郡区役所へ承合出願スヘシ

但シ（江沼能美）ハ十月十日ヨリ同十一日迄能美郡小松（石川河北金沢）ハ十月十三日ヨリ同十四日迄金沢（羽咋鳳至珠洲鹿島）ハ十月十一日ヨリ同十二日迄鳳至郡輪島ニ於テ試験ス

農学校試験科目

但シ当小学中等科卒業証書所有者ノ体格ノ外試験ヲ要セス入学ヲ許ス事アルヘシ

十八史略精講　体格　作文　公私用文　算術比例

明治廿年十月四日　石川県知事　岩村高俊

開校当時の職員構成は得能通孝校長心得（石川県六等属）のもと教諭一名、助教諭一名、補助教員三名、計五名。生徒は公費制度が廃止されて各郡から二円一〇銭あて支給されることになり、士族の子弟が激減して、ほとんど農村出身者となり、志望者が激増して本科二〇名、別科三三名、計五三名の入学を許可した。

明治一九年四月に学校をここに移転したけれども、校舎はまだ建築途上で、同年七月、校舎ならびに職員生徒の寄宿舎が完成するまで、本科の生徒および職員は、火打谷村、小山村などの民家に分宿して授業（極慈寺を仮

教場＝前記）ならびに農場の開墾実習に従事し、一方、柳田村に水田一町八反を借り入れて出作所とし、一部生徒を寄宿させ、教員一名、書記一名を在勤させて水田実習の指導にあたらせた。水稲農業が本校で実質的に取り上げられたのはこれが最初である。

もちろん、農事講習所時代の明治一五年に水稲の試作を行った記録があるが、それはほんの試作程度であって、農場実習の主体は水稲農業ではなく、主として欧米品種の蔬菜や果樹の試植栽培による園芸農業か、養蚕、牧畜、製糖、製茶を初め農芸化学の研究などで、当時の農民農業とは格段の隔たりがあったので、第一種農学校としての移転開校の主旨にもとずき、農村と直結する水稲栽培実習からはじめられたのである。

同年中に開墾した歩数は二四、九一四歩、麦稗、馬鈴薯、甘藷、桑苗、煙草、粟などを試作し、水田は梨谷村に二反歩、火打谷村に一反歩とし、馬三頭、牛一頭を購入して、移転第一年は輝かしい成績をおさめることができた。

二　期待された県農学校

文部大臣森有礼等の臨校

明治一九年五月に建築途上の本校へ県知事岩村高俊が、同年六月折田文部省文部学務局長が臨校し、同年一〇月辻文部次官、芳川内務次官などがそれぞれ来校して視察している。辻文部次官は同校職員生徒に対し農学校の目的が実務に役立つ農業技術の習得こそ肝要であるとし、特に原野に立つ本校こそ全国の農学校の模範となるべきことを強調している。（明治一九年石川県学事報告一三号）次いで、翌二〇年一一月三日に文部大臣森有礼、および本県書記官郷田兼徳、学務課長檜垣直右等が臨校して授業を視察した。

森有礼文部大臣の来校は同年一〇月二六日金沢第四高等中学校開校式出席後、石川、富山および福井各県の教育事情視察の一環として来校したものである。

当時は、まだ北陸には鉄道がなく、しかも能登のこの山間へき地へ、文部大臣を初め政府の高官連が続々と臨校していることは、本校に対して、文部省がいかに大きな関心をもっていたかを示すものであり、特に明治一九年三月に農学校通則が廃止されて、農学校は設立の準拠を失ったのにかかわらず、なお旧農学校通則を忠実に守って開校した本校に対して、文部省は特別の考慮をはらったのではなかろうか。

あるいは、当時の県知事岩村高俊の尽力によったのかもしれない。岩村知事は高知県の出身で、明治一六年一月に内務大書記官から県令として本県に赴任し、同一九年七月の地方官官制改革の最初の知事であり、同二三年五月に愛知県知事に転ずるまで、本県在職中に農村改善と農業改良に尽した業績は大きく、特に耕地整理の必要を認め、本校創設の功労者である渡辺譲三郎を督励して、石川郡野々市町の農事試験場において初めて耕地整理を実行して、その範を示させた。また、本県畜産共進会を開き、洋馬の移入を奨励し、県庁内に産馬事務所を設置して巡回交尾の法を定め、養蚕を奨励して年々補助金を支出し、蚕糸業組合取締規則を公布し、各郡に蚕糸組合を組織させて養蚕伝習所を設けたのも同知事在職中のことであったから、同知事が本校の設立に大きな関心をいだいていたことが推察される。

森有礼（一八四七―一八八九）は明治時代の政治家、教育家、薩摩藩士。薩英戦争後の一八六五年薩摩藩が優秀な青年を選んでイギリスに派遣留学させることとなり、彼もその一員に加えられた。六八年さらにアメリカに渡って帰国。ただちに明治政府にはいり、六九年廃刀論を建議した。七〇年駐米代理大使、七三年外務少輔などをつとめる一方、明六社を設立して啓蒙活動を行なう。ついで駐清公使、駐英公使を歴任。八五年伊藤内閣の初

代文部大臣となり、学校制度の整備につとめ、八六年「帝国大学令」以下の各学校令を制定、国家主義教育政策を確立した。八九年（明治二二）二月一一日、憲法発布の当日、祝典に参加のため官邸を出ようとするところを国粋主義者西野文太郎により暗殺された。四三歳であった。（「学生世界人名事典」）その森有礼が本校視察の際に書かれたと思われる書一幅は最近まで保存していたが、三浦移転の際に失われたのは残念である。

中学校学課程度同等以上と認定

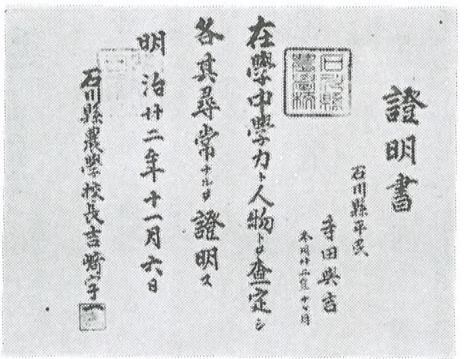
明治二二年（一八八九）一〇月、文部省は本校を中学校学課程度同等以上と認定（法律一号徴兵令一一条）したので、四度目の規則改正を行ない、学則を「本校ハ躬ラ農業ヲ操ルヘキ者ヲ養成スルヲ目的トシ主トシテ実業ヲ課シ兼テ農事ニ適切ナル学科ヲ授クル所トス」と改め、修業年限を再び一年延長して三ヵ年とし、学科の程度を高め、実習時間を制定した。さらに、養蚕伝習生の制度を廃止して耕種および養蚕の二撰科を設け、耕種撰科は一ヵ年、養蚕撰科は一期間を修業年限とし、専ら実業を授けることにした。生徒本科撰科それぞれ七五名（本県在住者）とし、寄宿を原則とした。

思うに、本校は明治一九年四月より文部省農学校通則に準じ、石川県農学校として再出発したが、不幸にも同年三月に文部省は学制の改革を行なって、帝国大学令、師範学校令、中学校令、小学校令と相次いで制定し、農学校通則を廃止してしまったので、本校は移転開校と同時にその準拠を失い、旧農学校通則の落し子となったのである。

中学校令では、農業は第二外国語と組んで選択教科に取り扱われ、商業、工業は土地の状況により、文部大臣の認可を得ればその科を設置することが認められたが、農業については独立の学校はもちろん、農業科の設置も認められていなかった。すなわち、本校は中学校令にもあてはまらない学校であったのである。当時、文部大臣をはじめ高官連が相次いで本校を視察しているのもこれがためで、現に存在している本校を無視することができ

ず、明治二二年一〇月に特別の取り扱いをもって「中学校学課程度以上のものと認定する」という処置がとられることになった。しかし、中学校と同等以上のものとするためには、修業年限および学科程度を中学校のそれらと同等以上にするため、修業年限を一年延長して三ヵ年とした。三ヵ年ということは、その入学資格が、中学校は小学校卒業程度であるのに対し、本校は高等小学校卒業か中学校二年修了程度以上と定められていたからである。これは、石川県尋常中学校が初めて創立された明治二六年から四年前のことである。入学試験科目は読書、作文、算術、地理、歴史、理科、習字、図画等について行なわれた。また授業料は本県人一ヶ月金一〇銭、他府県のものは一ヶ月五〇銭と定められていた。当時学年は一月より始まり同年一二月に終わることになっていた。

ここに二二年一〇月制定の同校規則の学科目および授業時数をあげると次の表の通りになる。（規則二七条）



学業証明書

科目	一ヶ年時数	第一年	一年時数	第二年	一ヶ年時数	第三年
修身	四〇	嘉言善行	四〇	同上	四〇	同上
耕種	一三〇	通論	一五〇	作物種芸 農産物製造	一八〇	同上農場管理 農業経済
養畜	一三〇	通論 蚕児飼養	一五〇	家畜家屋管理及飼育 蚕児飼育	一八〇	家畜蕃殖 家畜病害論

化学	一三〇	通論	一五〇	土壌肥料	一八〇	作物飼料
物理	一二〇	通論	八〇	力・水・気・熱	七〇	光・電気・農用気象
算術	一〇〇	比例開乗	一〇〇	級数求積	五〇	平面・立体幾何
簿記	五〇	単記	三〇	複記		
実習	一、二六〇		一、二六〇		一、二六〇	

一ケ年講学総時数ヲ七百時実習総時数ヲ千二百六十時トシ而シテ一ケ年授業総日数ヲ二百八十日トシ講学ハ一日平均五時百四十日実業ハ一日平均九時百四十日ト定ムルモノトス

（石川県学事報告）



長行
校代
二野
草正

石川県士族。農学士称号を得る。明治一二年一月、広島県農学校二等教諭・明治一六年一月同校校長を経て明治二三年四月、石川県農学校長となる。その後長野県上伊那甲種農業学校へ転任。明治二四年二月辞職。主な著書には、「農学校用物理学教科書」（明治38）・「中等教育農業教科書」（大正6）・「実用作物通論教科書」（明治43）・「実用土壌肥料教科書」（明治43）・「農学校用気候教科書」（明治36）・「実用養蚕教科書」（明治43）などがある。

三　県農学校の特色

獣医学別科の設置

石川県には明治一四年から一八年に至る間、獣医学校を金沢市殿町、袋町、地黄煎町に開いたものがあったけれど、社会の要望に適さなかったため、一、二年間でいずれも廃止された。ところが、明治二三年（一八九〇）四月、修業年限を二カ年とする獣医学別科を創設し、

県下に適切な獣医を養成することになった。

清国をめぐるアジアの情勢が次第に険悪化し、兵力を増強するための軍馬の供給に対する軍部の強い要請と、漸く普及し始めた牛馬による鋤耕が獣医の養成を強く要求したためであろう。

当時は、耕地整理による農業構造の改善が叫ばれはじめ、馬耕が盛んに奨励されたが、手取川沿岸の乾田地帯に多少行なわれていただけで、県では馬耕教師をおいて熊本犂の使用を指導したが、効果がうすく余り普及しなかった。

有畜転業の必要は、むしろ、肥料の面から農民の関心をひいた。当時の肥料は人糞が主で、これと併用して大豆粕とニシン、イワシなどの魚肥が用いられていたが、大豆粕や魚肥は高価な割に効能が少なく、農業経済におよぼす影響が大きかった。その上、明治初年から流行した石灰の施用は、一時、乱用の弊害をきたし、県は石灰取り締りを規則制定して、使用を制限するほどであった。そのため、緑肥の栽培と牛馬糞等の家畜糞堆肥の利用を奨励したことも、有畜農業の普及を促す原因の一つともなった。

いずれにしろ、獣医別科の創設は時代の動向に先駆けるものであり、本校の地位を高めるとともに、本校へ全国各地から入学生を参集させる結果となった。

二三年（一八九〇）一月生徒募集にあたり、従来の一月入学を四月に改め（告示一一号）また二月には県告示二一号により生徒編成の定則が定められている。（二三年石川県学事報告）新設の獣医別科の定員は五〇名であったが、入学者は五名。一ヵ年講義日数は二八〇日で、一日平均五時間、実習一時間の学習であった。

三代校長　**湯川温之**　石川県士族　明治一六年羽咋郡出員一八番（郡書記）を経て明治二四年二月、石川県農学校長となる。明治二五年六月辞職。

明治二四年頃の本校

明治二四年（一八九一）一二月現在で、地方における農業教育機関は一三の農学校が存在するだけであった。

公立農学校及獣医学校統計

校名	修業年限	入学年令	創立年月
大阪府立農学校	三	一五	二〇年一〇月
長崎獣医学校	二	一八	二一年　四月
愛知県尋常中学校付属獣医牧畜科	二	一八	二三年　四月
宮城農学校	三	一八	八年　三月
福島県立獣医講習所	三	一七	一八年　四月
岩手獣医学校	三	一七	一二年　八月
岩手農事講習所	二	一七	二一年　四月
石川県農学校	三	一七	九年一二月
鳥取県立農学校	三	一八	一四年　九月
山口農学校	三	一六	一八年　七月
愛姫県立獣医学校	二	一七	二一年　五月
高知県農学校	二	一五	二三年　五月
大分県獣医講習所	二	一七	二〇年　四月

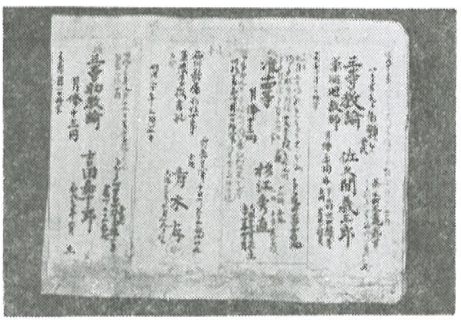
（「大日本農会報第一三四号、文部省専門学務局編纂の公立農学校及び獣医学校統計」）

以上のことから、この統計をみて強く感じることは、一三校中獣医関係の教育施設が六校で、農業教育施設は

わずかに七校である。この七校のうち、創設当初から形式のととのった農学校として発足したのは、大阪、鳥取高知の三農学校で、あとの四校のうち、宮城農学校、石川県農学校、山口農学校の三校は農事講習所から改組されたもの、岩手はこの時まだ農事講習所の名称のままであった。

これらは概ね「農学校通則」の第二種農学校（専門学校）に準拠したもので、比較的程度の高い学校であった。しかし、この当時の情勢では、農民に対する農業教育は、もっと程度の低く、実地教育を主とした農学校の設立が要望されていたのである。

ところで同校は、一九年四月、創立以来五ヵ年を経過した二四年当時には、校舎、学校組織、施設設備などようやく充実をみることとなった。「石川県学事報告」（明治二四年）によると、当時の建物は、校舎七七坪（二五五平方メートル）寄宿舎九二坪半（三〇六平方メートル）土蔵三六坪半（一二一平方メートル）鶏舎一二坪半（四一平方メートル）脱穀舎六〇坪（一九八平方メートル）食堂三〇坪（九九平方メートル）賄所八坪（二六平方メートル）養蚕室六七坪半（二二三平方メートル）旧養蚕室二一坪（六九平方メートル）農具場四六坪半（一五四平方メートル）廐五五坪（一八二平方メートル）豚舎五〇坪（一六五平方メートル）堆肥場二〇坪（六六平方メートル）炊事場一八坪（六〇平方メートル）廊下八二坪（二七一平方メートル）等、その総坪数は六七六坪（二、二三五平方メートル）であった。



職員生徒名簿

教職員は湯川温之以下一〇名で、その職階別は校長一名、教諭兼教務長一

名、教諭一名、助教諭三名、助教諭試補一名、講師一名、書記兼助教諭、試補一名、書記一名、府県別では本県人六名、他府県人四名であった。また生徒数は本科三九名、獣医別科一二名、耕種撰科五名、計五六名で、その出身別では本県人五〇名、他府県人六名であった。県下では、鳳至郡出身者が一番多く、次いで、羽咋、鹿島の順で、能登の出身者が多いのは地域的な関係であろうが、全県的に広く分布していたのは各郡からの郡費による派遣生がいたからであろう。

入学試験は二三年（一八九〇）より四月に行なわれたが、時宜により臨時入学が認められ、入学資格は、年齢一七歳以上のもの、資性行状ともに善良なるもの、身体強健にして定期の課程を修するに足るもの、在学中家事に係留なきものと定められ、入学試験科目は、読書（文部省編集の高等小学読本の解読および修身に係る事項の講義）作文（漢字まじり文、日用書類）算術（比例、開平、開立、求積）地理（本県地理、本邦地理、地球の総論、外国地理）歴史（本邦歴史上の重要な事項および忠良賢哲の事蹟）理科（人生の緊切なる関係あるものおよび児童の目撃し得る所の理科の概略）習字（日用文字、日用書類、楷行章）図画（自在画、用器画）の八科目であった。

授業料は本県管内のものは一ヵ月一〇銭、他府県のものは五〇銭とし、全寮制であったから実際は授業料、寄宿料、炭油代など合算して一ヵ月三円内外を必要とした。

教科目ならびにその内容は次の通りである。

科目	一ヵ年時数	第一年	一ヵ年時数	第二年	一ヵ年時数	第三年
農学	二八〇	農業の種別・土壌論・農具論・排水法・灌漑法・肥料論・輪耕法・普通作物および特用作物の耕種法	二〇〇	普通作物および特用作物の耕種法・園芸論・牧草論	一五〇	養樹法 材木保護法

本

| | | |

科別	科目	一カ年時数	第一年	一カ年時数	第二年
獣医学	修身	四〇	嘉言善行	四〇	嘉言善行
	算術	五〇	比例開乗	五〇	級数求積
	英語	五〇	綴字読法・訳読	五〇	読法訳読
	化学	一四〇	無機化学	一四〇	有機化学
	動物学	三〇	綱目摘要		
	植物学	三〇	綱目摘要		
	解剖学	三〇〇	総論・骨靱・内臓・脈管・神経・五管器		
	生理学	二〇〇	総論・血液循環・呼吸器・消化器・呼吸および類化器分・秘器摂取および排弁・動物熱筋・生理・声音・神経・五神経殖器		
	薬物学	二五〇	総論・中性薬・苦味薬・収斂薬・有香薬・植物・塩基類・酸類・酒精類・擬礦類・アルカリ類		
	原病理論	三〇	一般		
	内科学	一五〇	総論・各論	二〇〇	各論
	外科学	八〇	総論・各論	二〇〇	各論
	家畜疫論			一五〇	総論・微生物学疫病各論

家畜産科		六〇	総論・産科手術・産科・病害各論
寄生動物学		五〇	総論・各論
馬蹄論および蹄鉄学		八〇	総論・馬蹄外貌解剖・生理蹄鉄法・削蹄法
相馬法		三〇	一般
家畜飼養管理および蕃殖論		三〇〇	一般
家畜警察法		五〇	筋乳警察法・疫病警察法
実習	二八〇	二八〇	

教科では、実習が非常に重視され、六月より水路が開通して水田開墾に着手し、水田七〇〇歩を開くことに成功し、翌二五年には新たに三、〇〇〇歩を開いたが、多くは二頭曳、二頭曳プラウを使用するアメリカ式大農法で、北海道開拓農業に似た畑作農業が大部分であった。



象　長校代四　富田輝

安政元年一二月、禄高三百石の加賀藩士富田象直の長子として生まる。文久元年藩学明倫堂に入り儒学・国学を豊島毅（洞斉）に学ぶ。明治三年藩の留学者として洋学者近藤真琴塾に入る。明治一六年農業事務所長、能美郡書記、二四年九月、石川郡長を経て明治二五年六月、石川県農学校長になる。その後、二五年七月、能美郡長、二六年八月石川県尋常中学校長・鹿島・能美・石川郡長を歴任。

明治二四年の石川県農学校の作物種類と作付面積（石川県学事報告）は次の通りである。

作物別	面積	作物別	面積	作物別	面積
水田稲	一町五段七畝一五歩（一五、六二〇平方㍍）	稗	五反六畝二九歩（五、六五〇平方㍍）	小麦	四反三畝歩（四、二六四平方㍍）
甘藷	六反一畝一二歩（二八、〇八九平方㍍）	陸稲	四畝歩（三九七平方㍍）	大麦	四反歩（三、九六七平方㍍）
再植馬鈴薯	一反歩（九九二平方㍍）	花麻子	一畝歩（九九平方㍍）	裸麦	一反五畝歩（一、四八八平方㍍）
馬鈴薯	三反九畝五歩（四〇三平方㍍）	里芋	一反二畝廿八歩（一三二平方㍍）	蚕豆	四反歩（三、九六七平方㍍）
夏大豆	一反四畝二〇歩（二〇五平方㍍）	麻	二畝二歩（二七四平方㍍）	腕豆	一反歩（九九二平方㍍）
秋大豆	三反九畝二二歩（三、九四一平方㍍）	燕麦	一畝歩（九九平方㍍）	蘆台	四反歩（三、九六七平方㍍）
秋大豆	六畝廿七歩（六八四平方㍍）	南瓜	一畝廿一歩（一六九平方㍍）	薏台	一畝五歩（一一六平方㍍）
粟	三反五畝六歩（三、四九一平方㍍）	蔬菜	一反歩（九九二平方㍍）	蕎麦	四反歩（三九、六六九平方㍍）
				桑	一町一反六畝二〇歩（一一、五七〇平方㍍）

特に、気象と肥料に関しては、極めて科学的な研究と施肥が試みられ、農場日誌に散見する気象観察と肥料配合に関する記録は、非常に参考となるもので、肥料は堆糞、糠、〆粕、灰、腐熟水、人糞を初め過燐酸石灰を使用し、作物に応じて配合施肥に、細心の注意と研究ならびに観察が行なわれていた。生徒数わずかに五一名で一四町二反の耕作は、いかに実習に重点がおかれていたかを物語っている。

家畜家禽については、明治二一年四月より前年以来、蕃殖した家畜五〇〇羽、七面鳥四〇羽、豚一〇頭を県下篤志者に頒っているほどだから、火打谷移転当初の初期開墾時代は農場も十分でなかったので、有畜農業に相当の労力をさいていたらしい。また動物家禽飼育実習は食餌の供与、屎尿の運搬をはじめとする一般管理で、当時同校には牛四頭、馬五頭、豚九頭、山羊三頭、緬羊二頭、七面鳥二〇羽、鶏一〇〇羽で、馬はプラウや犂耕に使うためで、家畜は畜舎の広さに比べて多いとは思われない。しかし、山羊やメリノ種の緬羊を少数ながら飼育していたことは、特異点としてあげてよいだろう。

五代校長
斉藤十郎

石川県嘱。明治八年一二月一二日、勧業寮に於て、牧羊の養畜、欧製農具の使用・肥料調剤教授し生徒を徴募するや、これに入所する。明治二五年九月、石川県農学校長となる。明治二六年七月　辞職。



六代校長
中村純郷

鹿児島県士族、明治二六年八月、石川県農学校長となる。明治二八年七月　辞職。



七代校長
松平康保

石川県士族。明治一六年、金沢区会議員第六連区戸長、明治二二年、金沢市長選挙において、長谷川準也候補の参謀をつとめる。明治二八年七月、石川県農学校長となる。同二九年三月　辞職。

第二節　小松時代（明治二九年―三四年）

一　飛躍期の移転

小松へ移転の理由

わが国の産業革命の時期は、明治二三年（一八九〇）から同三三年（一九〇〇）にかけてである。経済界の不況と、それに加えて農学校通則の廃止により農業学校教育は不振となり、学校数も一進一退で、官公立をあわせても全国で一〇校内外にすぎなかったが、この年代には、二三年の府県制及び郡制の公布、教育勅語の下賜、帝国議会の開院、二七・八年の日清戦争等、国力の増強、産業の発展、それに伴う資本主義化と異常な発展を遂げた時期である。そして、教育制度もまた実質的な国民教育制度を樹立するため学制改革の必要に迫られていたのである。

この時期に、井上毅は文相として実業教育制度の確立に尽力するのである。従来の普通教育中心の学校体系に変えて、実業教育的学校体系を樹立しようと意図したが、井上文相の在任期間が極めて短かったため、必ずしも改革は成功したとはいえない。しかし、明治二六年三月、文相就任以来、翌二七年八月辞任するまでの一年六カ月の間に、「実業補習学校規程」「実業教育費国庫補助法」「簡易農学校規程」「徒弟学校規程」等を制定し、実業教育を軌道に乗せたことは偉大な功績といわなくてはならない。井上文相はまた、プロシア憲法に立脚して「明治憲法」を起草した功労者であり、且つ近代国家としてのわが国の政治機構の制度化を図り、行政制度確立に寄与した。

この井上毅が、第二次伊藤内閣の文相として入閣するやわが国の実情を考え、適切な教育施策を樹立するため、短期間のうちにわが国の資料、外国の資料を集め、これを組み合わせて具体的な制度化を考えた。

特に、井上文相は実業教育の施策として、働いて産業を支えている工場の職工や農村で農耕を自分でやっている若者たちをどうしたら無理なく教育できるかを考え、その制度化に尽力したのである。そのため、井上文相はドイツの富国強兵の原因が実業教育の奨励によって生まれたことを知り、国家興隆の基礎である実業教育の振興を企図するのである。

農業教育についていえば、明治一六年に制定された「農学校通則」が全く空文にひとしく、何等農業教育の進展に寄与していなかったことを考え、簡易な方法で教育できる農学校の設立を企画し、その制度化のため、欧米諸国の実例を参考にしてわが国の実情と照らし、実施可能な「簡易農学校規程」を公布することとなるのである。「簡易農学校規程」が公布される九ヵ月前の明治二六年一一月、文部省令第一六号をもって「実業補習学校規程」が制定された。これは、明治五年の「学制」中にある諸民学校といえるもので、この諸民学校設立の精神によって二〇年代まで勤労青年の夜学は各地に存在していた。明治二三年勅令第二五〇号によって、「小学校令」が改正され、その中で実業補習学校の規定が設けられたが、その第九条に基づく規定は容易につくられなかった。それが井上文相の英断によって実業教育振興の第一着手としてこの規程が公布されたのである。

この規程によると、尋常小学校を卒業（卒業しなくとも学齢を過ぎた者）し、実業に従事している勤労者に対して、この補習学校を小学校に付設して小学校教育の補習と、簡易な方法でその職業に要する知識技能を授けることとした。

翌二七年六月一二日、法律第二一号をもって「実業教育費国庫補助法」が公布された。この制定により、実業

教育が画期的に進展し、且又将来の振興に大きな影響を与えるのである。

わが国の産業が大機械による生産に向かい、漸く資本化の確立が緒についたのに対応して、世界市場への経済的進出を図ることが急務となっていた当時において、実業教育の振興がいかに大きな課題であったか想像できる。この法律のねらいは、指導者による高級技術者の教育に対する補助ではなく、むしろその指導の下で働く下級技術者・技能者養成のための教育であった。特に、明治二七、八年の日清戦争と、これに続く三国干渉は、国民全般の自覚意識を高め、富国強兵と産業構造の激変により、農村にも強い刺激を与え農業改善への関心を深めていった。

こうした背景に、本校は大きく発展する必要があった。二九年（一八九六）四月、同校は一〇年におよんだ羽咋郡火打谷村串田野（羽咋郡志賀町火打谷）から石川県能美郡小松町字小馬出町に移転することとなった。その理由の第一は、日清戦争前後の産業界の進展にともない実業教育の振興がさけばれ、火打谷はあまりにも山間僻遠の地に偏在し、県下全般の農家の子弟を教育することはできないとの理由で、交通の便利な加賀地区に移転することになり、移転先として小松が選ばれることになった。第二には、北海道開拓事業の行きづまりから、アメリカ式大農法による火打谷農法が、水田農業を主体とする本県農業の実情にそぐわなくなったことも、本校の移転を促進させた原因の一つであろう。

校舎設備の完備した火打谷を捨てて、なぜ不便な民家の借り入れや公会堂の間じきりをしてまで急に移転したのか、また、校舎の新築が行われないうちに、ここに石川県第四中学校（現在小松高等学校）が新築開校され、三三年には松任に移転が決定して、松任に新校舎の建築が開始された点から推測すると、小松移転は加賀地区移転のための暫定的処置であったのかもしれない。しかし、いずれにしろ、小松時代の六年間は、校舎や設備こそ

不完全であったが、本校が飛躍的発展をとげ、内容の充実の基礎をつくりあげた時代であった。



初代校長　八村崎常治

長崎県士族。獣医学士称号得る。明治二九年四月、石川県農学校長となる。同三〇年三月辞職。

小松移転と学校規模

機業にかけては県下の最先進地であった能美郡（小松も含む）は、もちろん養蚕の産額は県下のトップであった。だが、その蚕種は夏蚕中もっとも悪い一八蚕というのを掃き立て、これを野桑で飼育するに過ぎなかった。そこで、組織的に養蚕の改良をしたのは江沼郡である。同郡では藩政のころから不断の研究が行なわれていたが、明治にはいるや関係者は、東京・前橋に行って養蚕の講習をうけ、一二年にはそのうちの一人丹羽敬太郎を社長とする蚕事原社を大聖寺耳聞山に設置した。旧藩主前田利嗣もこれに協力して所有畑五町歩（五ヘクタール）を桑園に貸与したので、成績は大いに上がり、能美郡のほか、他郡・他県からの見学者も多かった。能美郡では一一年、小松町の横川支作が桑蚕会社（後に拡業社と改称）を起こし、一二年には寺井地方に信州・越中産のネコバという郡下で初の春蚕を導入している。県が養蚕奨励に乗り出し、補助金を出し、苗を交付し、模範桑園をつくるなどしたのは一四年以降だが、これを待ち切れず、小松町の駒田小次郎や今江村の道場正孝らが養蚕伝習所を篤農家個人で設立している。明治一九年、小松の新田甚左衛門がはじめて蚕糸組合をつくるや、このことに深い関心をもっていた旧藩主前田利嗣は五三〇円を寄付したほどで、能美郡（小松を含む）ではこの金で「蚕糸講習所」をつくった。以後、国県の指導奨励は年に追って

続いた。こうして統計によると、明治一八年で県下の桑園一、三〇〇町歩（一、三〇〇ヘクタール）蚕卵紙掃き立て枚数二、七一〇枚、繭の生産一〇、三二五石であったものが、明治四五年には四、四三四町歩（四、四三四ヘクタール）、四六、五五二枚、四〇、四一六石と四倍にもなったのである。

このような養蚕の盛んな能美郡小松町に四月二〇日から臨時休業して諸器械を運搬して開始し、翌五月四日に移転したのであるが、当初は、校舎の設備はなく、旧庁舎や民家を借用して仮り住まいをしなければならなかった。すなわち教場は能美郡公会堂を借りて間じきりし（この建物は、その後、焼失して現存しないが、現在の小松博物館の地であったといわれている）、事務室は能美郡通成館内農産館、養蚕室は小松町の駒田小次郎宅や筒井彦次宅、寄宿舎は木村弥四郎宅などをそれぞれ借用して生徒を収容し、実習地・桑園・脱穀場・農具室・解剖場・蹄鉄場・家畜・家禽舎は小松城址の旧石川県小松監獄所、小松県支署所管の建造物および敷地をこれにあてた。

民家を借与した駒田小次郎について少し触れておきたい。小次郎は石川県山口村火釜（のち山上村、現在辰口町）の百姓駒田甚助の長男として生まれた。このむすこは村の小童にしては頭脳明敏、性質も豪快そのものだった。一九歳の明治一三年に、火釜で資本家対労働者の争議すなわち階級闘争がある。明治一五年、小次郎は早くも村の用係（現在の区長）に登用されたと伝えられる。だが、一六年、二二歳で大聖寺耳聞山町の養蚕研究所「蚕事原社」に入社した。地主と争った経験から、農村の自立には新たな生産手段を持たねばならない。養蚕を学ぼうという気持をもっていた。まもなく技師に成長した小次郎は帰郷し、村に「養蚕伝習所」を開いて生徒を養成、桑園一ヘクタールを開拓して養蚕の普及にとりついている。さらに二〇年には現在の粟生町に「能美郡立養蚕講習所」が設立され教師になった。当時養蚕は農村更生の有力手段と喧伝され、養蚕教師は農村から深く尊

敬されたものだ。しかし、二二年講習所は赤字が原因で閉鎖されてしまった。だが小次郎は屈せず以後二三、四年と自費で継続した。生徒本科二〇人、速成科一〇〇人。農村の自力更生という使命感が小次郎をささえた。経費は新たに始めた蚕種の製造販売で充当した。「養蚕の神様」と尊称されたころに、県農学校の校舎に自宅を提供したのである。

校舎敷地および付属地坪数は、一二四、一二九坪五合六勺であった。このように分散的に校舎の移転が行なわれたのであるが、この移転にさき立つ同年三月県令一四号で、再び規則改正が行なわれた。今回の規則改正は獣医学別科を獣医学科とし、その修業年限を農業科と同じく三年としたこと、また撰科は養蚕と耕種の二科とし、その修業年限をそれぞれ一ヵ年とした。募集生徒数も従来の農業科二〇名、獣医学別科一〇名の定員を一躍農業科三五名、獣医学科二〇名に増加した。

次に明治三〇年頃の学校生活についてのべてみたい。

① 学　校――能美郡小松町におかれ、場所は小松市中央部商店街の裏手に位置し、小松町字小馬出といういわば役所街で郡役所・町役場・公民館等があり、また比較的きれいな洋風の物産陳列場もあったが、わりあい閑静なところであった。校舎は公会堂を借用したもので木造二階建の粗末な古い建物であった。教室は校舎の内部をいくつかに区切ってあり、教具といえば教室の正面壁にぶらさげられた黒板が一面と教師用机と腰掛はこわれ、また、教室に似合いの六尺腰掛で、田舎の小学校のものと選ぶところがなかった。授業中講義の声が隣室はもちろん廊下を隔てた教室にまでつつぬけで他の教室の授業を妨げた。

② 生　徒――生徒の出身地は単に本県のみではなく他府県からも来ていた。茨城県・富山県・長野県・岐阜県・熊本県・島根県（隠岐島）・滋賀県・京都府等から、本校の歴史の古いその名声を買い、あるいは自県の農校長が本県に転任されたのを慕い、あとを追って来た者、例えば、沢村真校長は高知県から、織田又太郎は茨城県からというごとき理由によるものであった。

当時の生徒気風は中学生と異なりその年令差もある関係上、一般に大人びていた。なかにはすでに兵役を終えた陸軍騎

兵軍曹の肩書を持った獣医科生もいた。また、獣医科生の多くは馬産地出身者でその多くは地方で開業目的ですでに仮免許で実務に服していた年輩者もいた。

農科生は獣医科生に比べ、一般に年令も幾分若く、発溂たる元気者が多く、相当常識も発達し、もはや立派な社会人だった。

③　服　装――背広でしたが、ほとんど着る者はなく午前は羽織・袴で学校に、午後は短衣・股引・脚胖掛けで農場に、実習熱心の中浦先生の指導の下に汗水垂らして働いた。

④　修学旅行――農科生は関西、その他は県外に出たが、われわれ獣医科生は県内の搾乳牧場の見学と能登半島における二歳駒の検査（せり市をかね）の実況見学のため七尾・穴水・宇出津・飯田・輪島などをまわり、各地産馬の特異性を知り、有益な見学の成果を収めたものである。当時は能登半島の交通機関としても何一つなく、現在のように自動車などはもちろん、自転車すらなく、従ってわれわれは脚絆草鞋ばきで一日五、六里を踏破するのが普通で、時には小舟を利用することもあった。

⑤　卒業式――能美郡の公会堂だった校舎の二階の奥の教室が使用され、卒業生の農獣医科生が前列にならび本校職員はその左に少数の来賓は右側に窮屈そうに位置していた。ところが私どもが入学当時には校長欠員で卒業当時もまた校長欠員であったので、当日は県の視学官村上幹当氏が校長取り扱いの資格で卒業証書を授与した。

⑥　運動会――一年生の時は安宅の浜で行なわれた。先生と生徒が一団となって運動場の設備用材料や競技用具はもちろん弁当まで荷車で運んだ。競技種目は、短距離・マラソン・障害競走・パン食い・二人三脚・リレー競走などであった。

⑦　寄宿舎――一軒は織物工場を改造したものと一軒は駒田小次郎の養蚕室階下であった。寄宿舎の周囲は数軒の民家が建ち並び、そこの横路を隔てて大与楼という料理屋があった。その楼の抱え舞妓の一人がうしろの家にいて朝から鼓や三味線のお稽古をするのでうるさく、また、その料理屋で時々官民合同の散材（遊興）があり、その騒々しい中に嬌声が交雑するので正に風紀紊乱であり、特に試験前には全く閉口していた。

寄宿舎の食事は共同炊事で上級生が主事となり、前に委員若干を選出して衝に当らしめたように思っている。当時の舎監先生は二名で、一人は学校の庶務主任で一人は教練教師をかねた退役の陸軍歩兵少尉の中村速見氏であった。先生はなかなか厳格で勤務中は常にさっそうたる軍服帯剣で、朝夕の点呼は厳重に行なわれた。

寄宿舎の衛生管理に至っては全く野放しであったといってもあえて過言ではない。舎屋の前後に二軒あり、その洗面所の如きは板張りの流しに水盤四、五個、水は各人で井戸の吊べでくみ上げ、洗面器は共同使用で往々眼疾が蔓延したこともあった。この土地は湿地で往々皮膚病は芥癬で、一時舎生に蔓延猖獗を極めたために舎で硫黄風呂を立てたが、これもかえって逆効果でますます蔓延したので中には温泉に行く者、帰省するもの、入院する者が続出した。芥癬が鼻孔に潜行したと言うので遂に死亡した不幸な事実もあった。

宿直の小使いさんは廊下を鈴ふってすべての合図をした。起床・点検・食事・自習・休憩・入浴・消燈・就寝等規律正しく行なわれた。

⑦

スポーツ――われわれが三年生になるまでは何一つやらなかったが、いつごろからあったものか寄宿舎に撃剣道具が二組あったので、時々夕食後寄宿舎の前庭で、素人同志でいたずらに竹刀のたたき合いで騒々しい音ばかり立てていたが、なにかのはずみで面でも一本とろうものならそれこそ鬼の首でも取ったように奇声を発して勝ち誇ったものだ。剣道の指導者はいなかった。

一方野球の方は織田先生の茨城県から転任された時、先生の後を追って来た五、六名の連中がスポーツとして野球の興味を力説したので、初めは三年生から始めようとしたが、人員のつごうで、各学級を加えることになった。しかし、器具も防具もないのでこれを片町の宇都宮書店に注文してバットとボールだけを取りよせて始めた。グランドは実習地の一部をわれわれの手で除草や地ならし整地して形を整えた。ただし競技の技法、その他の法則は茨城組の指導を受け、メンバーは素足素手でキャッチボールから始める。日を経るにしたがい次第に上達し、稚拙ながら競技の構えだけは一応できた。しかし、われわれの在学中には本式の試合をする程度には熟練しなかった。明治三二年小松町に県立第四中学校が設置されたので、以後庭球や野球が両者の間に覇を競うことになるだろうと競争意識をもやし意気軒昂たるものがありました。

（松崎又五郎「六十九年前の思い出回想」）

なお、明治三二年に実習地のうち一、二〇〇坪を充当して初めて運動場（当時は体操場という）ができあがった。

二　本校充実の基礎



九代校長　沢村真

慶応元年六月二一日、東京市本所区に生まる。明治二〇年七月一五日、東京農林学校農学部を卒業。高知県農学校長兼教諭。明治二七年三月、高知県技師。同二九年一二月、県簡易農学校長兼教諭を経て、明治三〇年七月、石川県農学校長となる。著書に「肥料学教科書」・「農業化学教科書無機編」・「農学教科書」（明治25）・「中等農学」（明治37）・「食物教本」（大正6）・「肥料教科書」（明治40）・「補習教育教科書養蚕編」（昭2）・「農用細菌学」（明治34）・「農産製造原論」（明治35）・「食物教本」（大正6）・「農業経済学」（明治32）「新編動物化学」（明治40）等がある。

沢村真校長の着任と農事講習会

着任当時は校舎が不完全で、御真影を受領したが奉蔵ができなく、県庁に奉移しなければならない状況であった。本校は三一年四月から向こう五ヵ年間、一ヵ年金一、〇〇〇円宛の国庫補助（翌三二年四月から、更に一、〇〇〇円を増加して金二、〇〇〇円の補助となる）を受け、自らも書籍三〇部を寄贈して内容の充実につとめ、一方、生徒心得細則、寄宿舎規定細則を制定するなど、学校は次第に整備されていった。

本校在任中における最も大きな業績は、着任早々の明治三〇年一一月に、本校の規則を改正し、養蚕撰科、耕種撰科を廃止して、新たに農事講習科を設置した。従来、学校を中心にしていた短期農業技術員養成制度を地方に拡大し、各郡に一ヵ年または数ヵ所の臨時教場を設け、積極的に広く、農業に従事する一四歳から四〇歳迄の男女を対象に各々の地域の農業の特色を生かした農業技術の講習を毎年二期にわけて、通算二〇日以上六〇日以内にわって実施した。

政府は、各県に対する「農談会」開設の勧奨に先だち、明治一〇年一一月、農事通信員設置を各府県に訓令した。この農事通信員がやがて「農談会」の設置に一役買うことになるのである。これは、「大日本農史」に、「（明治一三年五月）勧農局より府県に勧告して漸次農事会及び共進会を起さしむ。此の農事会は農業を振起し物産の蕃殖改良を謀るの目的にて各管内農業に従事する者相会し耕耘栽培より選種肥料の得失、其の他牧畜等の事に至るまで各自の経験又は意見を交換せしむるにあり。」

とあることによって明らかである。本県では、明治七年石川郡に早くも「農談会」の設立を見ている。（「日本農業発達史調査会月報三二号」）

明治一八年八月、農商務省は「農業ノ改良ヲ図ランガ為」農商務省第三三号達をもって、「農事巡回教師設置条項」を各府県に布達した。これは、ドイツ・フランス等西欧諸国で実施している巡回教師制度に範をとったもので、経験による老農の農法に加えて、科学的な農学、農業技術を修得させようとしたものである。いわば古い革袋に新しい酒を盛ろうとしたものである。農事巡回教師には甲乙二部があり、甲部は農務局員が教師となり、毎年農商務省が定めた府県、また申請のあった府県を巡回し、乙部は蚕種・製茶の両種について毎年府県を指定して設置し、老農をこれにあて、その府県内を巡回させた。渡辺譲三郎を県農事巡回教師を兼任させ、本県の農事改良を軌道に乗せたのである。更に、明治一八年一二月以来は毎年本校で、県内公立小学校教員を対象に農事講習会を開催してはきたが、組織的に直接各郡に進出して農事講習を行なったのはこの時が初めであろう。この講習は三七年（一九〇四）三月まで七ヵ年間開催されたが、講習科修了生は、江沼郡一六三名、能美郡一六六名、石川郡二五四名、河北郡一八七名、羽咋郡一六六名、鹿島郡一六三名、鳳至郡一六八名、珠洲郡三一四名、計一五八一名の多数にのぼり、県下の農業振興と農民の指導に大きな効果をあげた。渡辺巡回教師は、農民たち

が当面している困難な問題を適切な指導によって解決し、逐次成果をあげるに及んで、講習は日を追って盛況をみたのである。

講習は毎年各郡に一ヵ所または数ヵ所の臨時教場を設けて、定員は一会場五〇名とし、修業期を二期に分け、各期の日数は一〇日以上三〇日以内として学科目は各地の状況に応じて取捨し、第一期は普通作物、土壌、肥料、蚕糸、第二期は特用作物、園芸、作物病虫害・畜産・森林・経済であった。

織田又太郎校長の着任　沢村真校長の後任に、明治三一年一一月、県農学校長に茨城県簡易農学校長織田又太郎が決定した。



十代校長　織田又太郎

文久二年三月一四日、石川県石川郡御手洗村に生まる。明治一八年七月、東京駒場農学校農芸化学科を卒業。茨城第一中学校兼茨城師範学校教諭、明治二〇年、茨城県農事巡回教師・同二八年・茨城県農事講習所長・同二九年県簡易農学校長兼水戸測候所長を経て明治三一年一一月、石川県農学校長となる。明治三三年四月、富山県技師として転任。主な著書には「農理学」（明治22）・「農学提要」・「農業経済要論」があり、また辛辣な農民啓蒙の書「農民之目醒」がある。

当時簡易農学校教諭としてつねに織田校長に兄事していた飯田洪農（織田校長の後任校長）は、当時の苦衷を次のように述べている。

同年十月頃に至り一大事変に遭遇せり。即ち織田校長の石川県農学校長に転任の内定、之れである。同氏は十八年より前後十三年間本県農事改良の木鐸たり、農業教育の創始者たり、本校の生神様たる同氏にして去らるる以上、本県農業界は光輝なく再び暗黒の街となるべしと吾々職員は勿論、県下有志広江嘉平、鈴木文次郎、片岡徹の諸氏熱心に引留策を講じ、校長に懇願せるも、同氏の出身地石川県のため辞退する能はざる場合に立至りたれば、諸君に於ても諒とせられたしと懇々談ぜられたるに依り策の出る所を知らず、十一月に至り終に発表転任することとなった。嗚呼当時を回想せば職員生徒の恫欺、

県下有志の失望如何許なりぞ」（飯田洪農「往事を回想して校運の隆盛を祝す」開校十五周年記念帳）

石川県農学校農科卒業生（明治三三年）で、織田校長のもとで農夫長として勤務されていた前川多一郎は、当時の悲壮な心境を次のように述べている。

此年（秋）恩師織田又太郎校長には郷里石川県農学校長として栄転せられたのである。我等学徒の驚愕落胆は申すに及ばず、先生の教育指導を受け農事の改良に目醒しき成績を挙げつつある県下幾万の農家は暗夜に燈を失いたる感あり、忽然として留任運動の起るは当然たり。然るに織田先生自身も茨城県は赴任以来十数年の長きに渉り熱心に指導啓発せる由緒深き地故可成墳墓の地として止まりたき希望なるも、郷里石川県農学校は甲種程度として全国に知られたる古き歴史を有する名校なるが、校長として適任者を欠き、実に経営困難に陥り正に存亡の分岐点に立ち、是非共手腕力量学徳兼備の織田先生の来任を仰ぐより外に甦生の途なしとて嘱望せらるるに依り、先生にも辞り兼ね遂に決意せられたる次第にて如何に地元有志が留任運動を起すとも目的達成不可能に終り、涙ながらに別れを告げ其の栄転を祝福したのである。（前川多一郎「嗚呼我が生涯」）

前川多一郎は、織田校長送別会の模様を次のように記し、別れ難き別れを告げる師弟の衷情を披瀝している。

思い起せば当時簡易校在学生並びに学校関係者に依り催されたる先生の送別会に於て飯田堯一氏（後に立教大学東洋大学教授となり欧米を漫遊せらる）が代表して送別の辞を読まれた。

筑波の山は八洲に聳ゆる名山なり。織田先生は農学界に聞ゆる名士なり。山は千古所を変はずと雖も、師は今去って此地に見ゆる能はざらんとす。弟等の落胆、弟等の失望豈何を以てか之れに比せん

と云うに至るや、先生にはポケットより白きハンカチーフをとり出す余裕もなくハラハラと落つる涙、会衆の嗚咽、飯田氏の断続たる涙声、漸くにして読み終りたる光景、今尚目前に彷仏として浮ぶのである。かくて先生には第二の故郷とも云うべき懐しき水府の地を去り、石川県農学校長として赴任せられたのである。（前川多一郎「嗚呼我が生涯」）

人柄について令息孝氏は次のようにのべておられる。

親分肌で部下を非常に可愛がった。茨城県より郷里石川県に赴任の際には徳を慕って転校し、その何人かは織田家に寄寓

した。研究熱心で、浪人時代は京都大学で聴講生となり、歴史の勉強をした。義理固い性格で、大阪専売局退官後、当時の憲政会から代議士に推され、立候補の意志がありながら、郷里の本家が政友会の地方有力者である関係から断念したとも聞いている。弁舌は得意であった。

本校在職期間は、明治三一年一一月より三三年三月末までの一年四ヵ月にすぎなかったが、時あたかも、実業学校令、農学校規定の発布された時代である。これに準じて石川県農学校規則を制定し、補習科の設立、運動場（当時は体操場という）の新設など本校発展の基礎を作った。また本校着任の際に一緒に茨城県から八名の生徒が本校に転校して来た。

前川多一郎、は八名の同志が本校へ行こうとした事情経過等について、その自叙伝で次のように述べておられる。

先生には十二月末に家族引連れ移転の為め来県せられし折、茨城県簡易農学校卒業生は石川県農学校の第二学年に無試験にて入学を許す故可成多数入校する様勧められたるに依り友人とも相談の結果、久慈郡の桜岡昌、那珂郡の植田民之亟は已に略入校を決したるに依り、我も亦早速帰郷、父に願いたる。父も織田先生を信頼すること篤かりし為快諾して呉れ、誠に喜びに不堪、茲に同僚三人は恩師の家族と共に夫々荷物中の貴重品を分担して携帯、生れて始めての長途の旅行を為すことなり、東海道線を米原駅にて乗り換え、北陸線敦賀・福井を経て、愈々加賀の小松駅につき同町随一の釜屋という旅館に旅装を解いたのである。

驚いたことには、吾等茨城子には言葉が一向通じないのには閉口した。寒国とはいえ、二階でも三階でも座敷には皆コタツがあり、而も立派な布団に見事なコタツ板あり、御飯の時にはヤグラ一杯もある大きな塗り盆の上に御馳走が並べられ、コタツにて御飯を頂き、又寝るにもコタツという次第、風俗習慣の異様には当分の間何事も珍らしき感を打たれたのである。

我等は甲種農学校第二学年へ無試験入学を許可され、翌年三月学期試験を経て第三学年へ進級するというので一生懸命勉強したのであるが、郷里の同僚にも手紙を送り入学を勧誘せる結果喜び参集せる面々は、棚谷誠、永山止来郎（後に台湾新州知事）白井柳治郎（北海道アイヌ土人教育功労者）、菅井鋭太郎、北原喜太郎（信州蚕種業）の諸氏であった。

三月の学期試験には、富山県の浮田虎万という秀才を加え首席より九番迄全部転校組にて占め得たるは聊か恩師織田校長の面目を施し得たるの感があった。（前川多一郎「嗚呼我が生涯」）

織田校長はいかに生徒から慕われていたかを物語るものであり、着任一貫してきびしい指導方針でのぞみ、つとめて綱紀の振粛にあたったため生徒の気風が引き締り、従来にくらべ校風が刷新された。そのため生徒、父兄の信望も厚かったところ三三年三月に至り、同校長が県政界の党争の犠牲で富山県技師に転任になるという風評が流れたため、織田校長に対する同情心と学校の前途を憂える気持が重なり、生徒の間に留任連動がおこった。

その当時について、東田惣外吉は次のようにのべておられる。

明治三三年二月二〇日掲示板に校長先生が二月一七日付で休職になられたと掲示された。これを見た生徒は一瞬呆然自失、やがて慟哭する者、悲憤の涙に咽ぶ者など名状し難いものがあった。その真最中、誰かれとなく校長先生を要請しようと寄宿舎に集合して嘆願書員・陳情員・学生試験・同窓会父兄のこと、および明二一日は春季皇霊祭につき町内の各神社に留任祈願の参拝を行なうことなどを決めて散会し、翌二二日早朝から各神社に三三、五五で祈願参拝しました。その翌二三日には各自受持先生の机上に欠席届を出して、全員登校しなかった。（三年生は卒業試験が終り卒業式を待つばかりであったのでわからない）そして嘆願書を携帯して、県庁へ向かう一隊を見送る者、その他は寄宿舎で同窓会ならびに父兄を招いて実情を訴え指導協力を仰ぐ書面を発送準備中であり、学校は上を下への騒動との報あり、その刹那学校から各学年の級長・副級長はただちに出校せよとの呼出しがあり、登校したところ校長心得の村上県視学官が校長席に坐られ、開口一番、生徒が同盟休校したときは放校の厳罰を受けることくらいは知っているだろうと卓をたたいてどうかつされ、「張本人は誰か」と厳しく繰り返えし叱責されましたが、全員の総意で主謀者などいないから黙ってだれ一人発言しませんでした。

ここにおいて視学官は張本人がいなければ君たちを主謀者と認め厳罰に処すからと立ち上がられた。このとき新治教頭が立って視学官に「暫く」と言って、級長たちに「君らはかような人騒がせをさせた生徒の名を指すことはその生徒に対し気を兼ねての遠慮ならもっての外だ。視学官殿はかよう言われても、前途ある生徒のことであるから諸君が正直に話してくれるならばなんとか穏便にと温かいお心にも察せられる」とじゅんじゅんと説諭されたので、級長等も深い眠りから覚めたよ

うな気持になり、「実は校長先生休職の掲示板を見た瞬間、最愛の父母よりもさらに深く親炙する先生が突然の離職で、今日以後もその温容に接することができなくなったので留任を願われないかと異口同音の合唱となったのです。従って最初の発言が誰れであったか全然不明です。ただいたずらに上に抗し世間を騒がさんとするものではありません。どうかわれ等の気持を御推量下さって今一度校長先生を留任させられるよう、ご配慮を量り賜らんことをお願いします」との声涙ともにさがる嘆願に対し、視学官におかれてはこれ以上の追求無駄と察しられたのか突然立って「寄宿舎に帰れ、そして断罰の報を待て」と一言申された。特に午後一〇時三〇分、この間級長らは昼夕食抜けの叱責で大変困りました。幸いに寄宿舎から追放されなかったので、同窓会、父兄の方に参集を願い生徒の立場を訴えて処罰緩和に協力、援助を求めるとともに、さらに第二・第三の陳情員を繰り出して嘆願これ努めたところ一新聞は生徒に同情され恩師に対する美談として取り扱われたが、同窓会、父兄の方々からは謹慎中につき自重するよう訓誨されました。

以上のごとく同窓会、父兄の代表の方々から生徒等の軽挙盲動を戒め、また学校側に対しても厳正適切なる処罰を望むと共に断じて犠牲者を出さぬよう警告を発して折衝された。お陰で学校側もこれを了とせられ、遂に三月三一日付で停学を解かれたが数次の陳情嘆願にもかかわらず、生徒等の希望はついに達しなかった。その上生徒は同盟休校の汚名の下に無期停学を命ぜられ、学籍簿に一大汚点を記したことは終生の恥辱で返す返すも残念でした。これより先き、この問題が重大化したとき生徒中他校へ転入を許された者数名あった。同窓会、父兄の方々の斡旋両敗下に解消し学年試験も卒業式も無事終了したが彼等は飜意せずついに校長先生は復帰しなかった。（東田惣外吉「小松時代の校長を偲ぶ」）

右の文章の通り、結局同窓会が調停にのり出し、織田校長の代りに適任の校長を迎えることを条件にこの事件は解決したのである。その間において生徒の出した決意表明をみると若者特有の気負いもうかがえるが反面、学校の実情を無視した一方的な教育人事に対する不満が吐露されている。いまその際の生徒の決意声明をあげればつぎのとおりである。

自分達の愛する石川県農学校は十数年来腐敗衰退の裡にあり、われらの尊敬する織田校長が来任するや、鋭意校務の刷新をはかり、人材を養成せられしこと遑あらず、千里を遠しとせず北陬に来て薫育を受けんとす。その校長の去られるにあた

り、同志八十余名が意気投合してかかる事態になったのである。石川県の政治家と称する人達の頭脳の腐敗おどろく程、われら県下農業教育の為にも、又将社会風気の為にも甘んじて犠牲にならんとす。（北国新聞　明治三三年三月二六日）

明治三三年に松任移転が決定し、校舎の新築が開始されたのも、織田校長の尽力の結果であろう。

明治三三年四月二日に富山県技師に転出し、その後は、富山県農会顧問、全国農事会常任幹事、煙草専売局技師等の要職を歴任したが、大正七年一一月九日、大阪府北河内郡枚方町字岡三二七の自宅で心臓麻痺のため逝去、五七歳で没した。

石川県農学校教員数および生徒数
―明治一九年～明治三四年

年次	教員数	生徒数	年間経費（単位円）
明治19	5	53（本科 20 / 別科 33）	3,509
20	8	63（本科 55 / 別科 8）	3,335
21	9	38（本科 33 / 別科 5）	5,901
22	10	22（本科 20 / 撰科 2）	4,723
23	8	52（本科 35 / 撰科 2 / 獣医科 5）	5,367
24	8	51（本科 34 / 撰科 5 / 獣医科 12）	5,574
25	10	53（本科 36 / 撰科 2 / 獣医科 15）	5,220
26	6	41	4,906
27	8	49	4,906
28	6	53	5,116
29	7	90	8,258
30	8	88	8,868
31	9	92	12,391
32	11	167	12,026
33	12	150（本科 148 / 補習科 2）	14,259
34	12	147（本科 147 / 補習科 0）	45,063

備考　明治26年度より同32年度までの生徒科別数不明（石川県統計書参照）

三　全国的基盤の県農学校

実業学校令ならびに農学校規定の発布

明治一九年の森文相による諸学校令の制定以来、制度上では普通教育の一部に委ねられていた実業教育も、その後、実施の成績ならびに社会情勢に応じ、次第に普通教育から分離独立の傾向を示した。

明治二七、八年の日清戦争の勝利をおさめたわが国は、その後三国干渉の試練を経て、「臥薪嘗胆」と「戦後経営」の名のもとに、大々的な軍備拡張に乗り出し、また産業革命の時期である明治二三年から同三三年にかけて、実業教育の制度は一応の整備を完了するのである。この実業教育の発展の基礎作りが第二次伊藤内閣の井上毅文部大臣の手によって行なわれた。井上　毅（一八四四―一八九五）は「弘化元年熊本藩の士族の子として生る。明治二年上京して大学総舎長となり、のち司法省に入りてますます才能を認められ、時の司法卿江藤新平の渡欧に際し随行を命ぜられ、帰朝後諸官を歴任し、法制局長官としては特に多くの功績を挙げた。当時伊藤博文が憲法の起草に着手し、伊東巳代治・金子堅太郎らをその翼下に置いて審議立案に当らしめたが、井上も当時の俊秀の一人としてこれに加えられ、明治二十一年三月、憲法及び皇室典範、その他の付属法典の立案は完了した。かくてこれが制定発布の形式について種々議論が生じ、結局、枢密院を特設してこれに当らせることとなり、その組織職掌の規定も法制局長官井上の手で立案した。枢密院議長は伊藤博文、書記官長には彼が任命された。そして憲法及び付属法典を審議すべき枢密院会議は二十一年五月八日より開議せられ、同十二年十七日に至って全部の審議を終了したが、憲法および皇室典範の説明者には井上が当った。のち臨時帝国議会事務局総裁より枢密顧問官に栄進し、二十六年より二十八年まで文部大臣となる。教育勅語、勅令等の草案などに與かるところが

多かった。二八年三月一三日、五二才で没した。」（「井上毅年譜」）明治二〇年代に入って、繊維工業を中心とする日本産業の近代化、機械化がすすむにつれ、実業教育を整備する必要に迫られたのを考え、「実業補習学校規程」（明治二六年）、「簡易農学校規程」（明治二七年）、「徒弟学校規程」（同）を制定した。特に「実業教育費国庫補助法」（明治二七年）によって、実業教育の画期的振興策が効を奏しはじめた。年額補助金は一五万円、主として工業教育を振興し、わが国産業教育の推進力としようとした井上文相の頭に、「富国強兵」があったことはいうまでもないが、その一翼を担う農学校も、この「国庫補助法」によって軌道に乗り発展するのである。

今において国家将来の富力を進めんとせば、国民の子弟に向って科学及技術と実業と一致配合することの教育を施すことを努めざるべからず

とは井上文相の「実業補習学校規程公布に関する訓令」の一節である。当時の実情と考え合わせ、実業教育振興への熱意を知ることができる。

日清戦争後、産業の進展と国家の保護とによって実業諸学校は増設されたが、その時の必要に応じて制定された各学校の規程を改め、統一する必要に迫られ、明治三二年二月七日、勅令第二十九号を以て、「実業学校令」が公布された。これによって、従来の中学校とは異質の中等程度の実業教育機関を整備確立し、進展をつづける産業界の要請に答えたのである。この「実業学校令」は、明治三五年、同三六年、大正九年と三回にわたって改正されたが、根本的には何ら変更されず、この「実業学校令」は昭和一八年一月の「中等学校令」公布までおこなわれていたのである。

「実業学校令」制定に伴い、これに関する各種の規程が相次いで制定されたが、「農業学校規程」も文部省令

第九号を以て明治三二年二月二五日公布された。この規程によれば、農学校を甲、乙の二種に分け、乙種農学校は尋常四年卒業資格者を対象とするものであるが、甲種農学校は、年令一四歳以上で、修業年限四ヶ年の高等小学校卒業か、または、これと同等以上の学力を有するものを入学資格とし、授業時間は実習を除いて、毎週三〇時間以内と定められた。乙種農学校は年令一二年以上、修業年限四ヵ年の尋常小学校卒業者か、またはこれと同等以上の学力の有するものを入学資格とし、授業時間は実習を除いて毎週二七時間以内と定められた。いずれも修業年限三ヵ年とする。甲種農学校はその他、年令一二歳以上、学力高等小学校二年修了以上の者を入学資格とする予科（二年以内）と、卒業後に農業に関する一科目もしくは数科目を専攻するもののための専攻科と、さらに高等の農学校に進学するもののための補習科（ともに修業年限二ヵ年以内）の設置が認められた。

本校の全国的位置と県外生

農学校規定により、明治三一年度全国に設置された簡易農学校は三〇校と記載されているが、そのうち一五校が明治年間に甲種農学校となった。（「産業教育七十年史」）ここにおいて、明治三二年（一八九九）甲種農学校となった学校は次の通りである。

二月　香川県木田郡立農業学校設立認可（のちの香川県立農林学校、昭二二年香川県立農業専門学校に昇格。同二三年高校部廃止、在校生は木田高等学校に移り、農業科一学級となる。昭三七年四月、農業科募集停止）。
二月二五日　宮城農学校（明治八年植物試験所、明治一八年七月、宮城農学校と改称）。
二月二八日　高知県農学校（高知県簡易農学校）と改称。
三月二〇日　秋田県立秋田農学校（秋田県簡易農学校）と改称。
四月一日　熊本県熊本農業学校創立（現、熊本県立熊本農業高等学校）。
四月　栃木県農学校（明治二八年栃木県簡易農学校、明治三一年四月校名改称、すでに甲種程度となっていた）。
四月　京都農学校（明治二八年）京都府簡易農学校、同三一年四月、校名改称、中学程度となる）。

四月　福井県立農学校（福井県簡易農学校）と改称。
四月　甲種佐賀県農学校（佐賀県簡易農学校）と改称。
四月　中遠農学校（磐田・豊田・山名三郡組合立中遠簡易農学校）と改称、明治三三年三月静岡県農学校と改称。
四月　鹿児島県農学校（明治二九年、鹿児島県簡易農学校、明治三一年四月校名改称、中学程度と認定さる）。
四月　千葉県農学校（千葉県簡易農学校）と改称。
四月　兵庫県農学校（兵庫県簡易農学校）と改称。
四月　岡山県農学校（農事講習所）と改称。
四月　富山県農学校（明治二七年富山県簡易農学校、明治三一年三月校名改称）。
四月　滋賀県立農学校（明治二九年組合立簡易蚕業学校、明治三一年四月滋賀県蚕業学校）と改称。
四月　大分県農学校（明治二六年九月開校、同三四年九月大分県立農学校と改称）。
四月　石川県農学校（明治九年金沢区方勧業場、明治一九年四月校名改称）。
四月　岩手県農学校（獣医学舎・農事講習所）開校。
四月　鳥取県農業学校（公立久米河村農学校）と改称。
四月　青森県農学校（明治三一年創立、同三四年四月青森県畜産学校と改称）。
四月二九日　郡立吾妻農学校開校（明治四五年四月、群馬県立之条農学校と改称）。
五月　郡立高田農学校（明治二九年中頸城郡立播種場、明治三三年四月乙種農学校、同年五月甲種昇格）。
五月　郡立上伊那農学校（郡立上伊那簡易農学校）と改称。
八月　熊本県熊本第二農業学校設立（現、熊本県立阿蘇農業高等学校）。
八月　山口県農業学校（明治一八年山口農学校、同二八年山口県農学校と改称し、山口県簡易農学校を併置。同三一年三月両校を合併し、山口県農学校を第一部、簡易農学校を第二部と改称）。

（「産業教育七十年」）

明治三二年（一八九九）二月に公布された農業学校規程に準拠して、同年四月七日「石川県農学校規則」が改

正され（県令第二五号）、甲種農学校の適用をうけることになった。農学校は一学年の定員を農学科一〇〇名、獣医学科二〇名に増加し、学校の規模はますます拡大充実されていった。

しかし、甲種農業学校となったが、内容が特別に変化したのではなく、従来から第二種農学校としての学科程度を維持していたのであるから、文章上の校則が整理整頓されたにすぎなかった。

規則改正の結果、入学資格や修業年限は従来と同じであったが、新たに本科卒業後、修業年限二年以内（三七年には二年に改める）の補習科が設けられた。本科の教授科目および毎週教授時数（八二頁参照）は、一学年が前期・後期に分かれており、また、はじめて体操が正課に加えられた。なお、普通教科と専門教科の時間数は半々で、普通教科のなかでは特に理数科と外国語に重点がおかれた。その反面、専門教科の中にはきわめて程度の高いものが含まれており、とくに獣医学科では今日の大学の獣医学部で教えられる程度のものが教授された。それによって本校は、中産以上の農家の子弟に対して中等以上の農業技術ならびに一般教養を授け、将来わが国の近代農業の担い手として育成すると共に、彼らを農村における指導者にしようとしたのである。しかし、県内における農学校入学志望者は概して少なく、県は三九年まで授業料を徴収せず、また同校の入学試験を中学校の実施期日より遅らせて各郡役所でも実施するなどして入学の便宜をはかった。各郡も、管内の農学校志望者には月額二円の学資を補助するなどして同校への入学を奨励したが、それでも他の中等学校にくらべて低調であった。

当時、本校以上の農学校は、東京農科大学と札幌農学校があっただけで、後の農業専門学校もまだ設置される以前であり、盛岡高等農林学校が全国で初めて設けられたのが明治三五年で、鹿児島高等農林学校が第二高等農林学校として設立されたのは明治四二年であるから、本校の補習科が明治三二年五月八日に、文部省告示第六四号で徴兵令第一三条の認定を受けたことは、本校の全国的位置が、当時きわめて高かったことを意味するもので

ある。

本校は、石川県の農学校であると同時に日本の農学校であり、生徒は全国各地から本校へ参集し、出身県は、富山、福井の隣接県をはじめ、茨城・愛知・岐阜・静岡・長野・新潟・大阪・京都・滋賀・三重・島根・大分・長崎・福岡・山口・高知・熊本・鹿児島・徳島など二〇数県に達していた。この傾向は、明治二七年ごろから顕著にあらわれ、在校生の二〇％ないし三〇％が県外生で特に、二九年から三三年までは県外生が五〇％を越えることもあった。



十一代校長
高田鑑三

明治元年一二月一五日、東京府東京市本郷に生まる。明治二四年七月、東京帝国大学農科卒業、青森県尋常中学校教諭・明治二八年滋賀県農事試験場長・兵庫県農事試験場技手・同二九年一〇月、広島県農会技師を経て明治三三年五月二五日、石川県農学校長となる。続いて三四年五月石川県立農学校初代校長となる。主な著書には、「農業全書(養業編)」(明治28)がある。

英才教育と教育課程

当時の本校は二学期制をとり、前期は四月一六日より一〇月三一日まで、後期は一一月一日より翌年四月一五日までとし、毎学期の終りに試験を実施した。

評点は各科目一〇〇点とし、一科目六〇点を合格点とし、試験に欠席したものは〇点で、学年成績は、前後期の評点を合算し、これを二分して決定した。評価はきわめて厳重で、そのため落第生や脱落者が続出し、入学は比較的容易であったが、卒業は大変に困難であった。もちろん、その反面として、本校の卒業生には、それだけの権威が認められていたし、特に、獣医学科の卒業生に対しては書類さえ提出すれば、無試験で獣医の免許状が下付されていた。この傾向は明治の終りまで続けられたようである。年により幾分の違いはあ

ったが大体入学者に対する卒業生の割合は五〇％内外で、時には三〇％しか卒業できなかったこともある。

入学数に対する卒業者の割合

入学年度	学科	一年	二年	三年	卒業者	入学者に対する卒業者の割合	備考
三三	農科	五五	三一	二九	二五	四五・五	三六年卒業
	獣医科	二〇	一八	一六	一五	七五・〇	
三四	農科	五五	三七	一五	一五	二七・八	三七年卒業
	獣医科	一九	一五	一二	一一	五八・〇	
三五	農科	八二	五八	四四	四一	五〇・〇	三八年卒業
	獣医科	三九	二六	二一	二一	五三・八	
三六	農科	六八	四三	三三	二八	四一・二	三九年卒業
	獣医科	三九	二八	二〇	一九	四八・七	

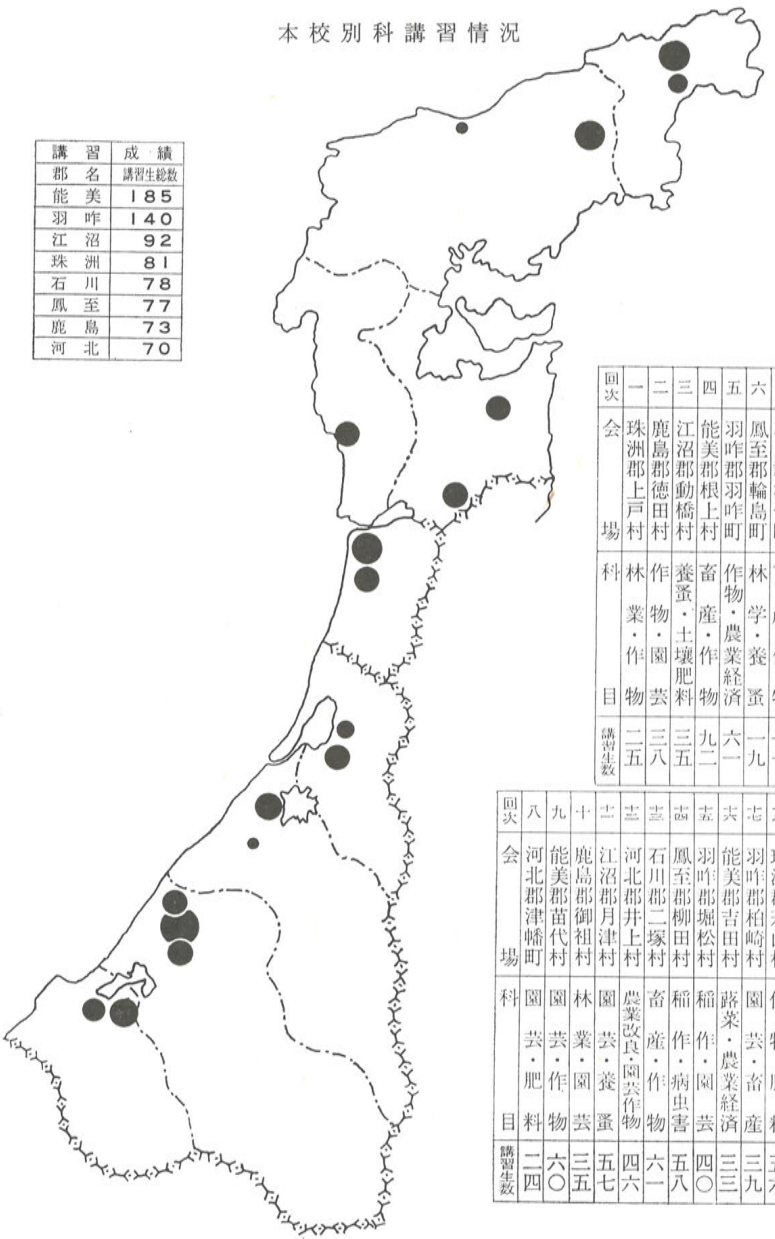
石川県農学校の教育科目および毎週教授時数―明治三二年―（明三二年石川県公報）

農学科							
科目	1年		2年		3年	
	前	後	前	後	前	後
修身	1	1	1	1	1	1
読書作文	3	3	3	3	3	3
数学	3	3	3	3	3	5
理化	6	5	2			
博物	4	4	2			
地理歴史	2	2	3	2		
外国語	5	5	5	5	5	5
法規					2	3
図画	1	1				
体操	2	2	2	2	2	2
経済				3	3	4
土壌肥料	1	2	2	2		
作物	1	1	2	2		
園芸					3	3
農産製造					2	
畜産			2	2	2	
養蚕	1	1	2			
作物病虫害			2	1		
気候				2		
林学大意					2	1
獣医学大意					2	1
実習	（無定時）					
合計	30	30	31	28	30	28

獣医学科						
科目	1年		2年		3年	
	前	後	前	後	前	後
修身	1	1	1	1	1	1
読書作文	3	3	3	3	3	3
数学	3	3	3	3	3	
理化	6	5	2			
博物	3	3				
地理歴史	2	2	2	2		
外国語	5	5	5	5	5	5
図画	1	1				
体操	2	2	2	2	2	2
解剖及組織学	2	3	1			
生理学	2	2	2			
薬物及調剤法			3	4		
蹄鉄及蹄病論				4		
内科学			2	2	1	
外科学			2	2	2	3
畜産学			2	2	2	2
寄生動物学					2	2
衛生学					2	2
動物疫論医獣警察法					2	3
産科学					2	2
死体解剖学					1	2
農学大意					2	3
実習	（無定時）					
合計	30	30	30	30	30	30

本校別科講習情況

講習郡名	成績 講習生総数
能美	185
羽咋	140
江沼	92
珠洲	81
石川	78
鳳至	77
鹿島	73
河北	70



回次	会場	科目	講習生数
一	珠洲郡上戸村	林業・作物	二五
二	鹿島郡徳田村	作物・園芸	三八
三	江沼郡動橋村	養蚕・土壌肥料	三五
四	能美郡根上村	畜産・作物	九二
五	羽咋郡羽咋町	作物・農業経済	六一
六	鳳至郡輪島町	林学・養蚕	一九
七	石川郡松任町	畜産・作物	一七

回次	会場	科目	講習生数
八	河北郡津幡町	園芸・肥料	二四
九	能美郡苗代村	園芸・作物	六〇
十	鹿島郡御祖村	林業・園芸	三五
十一	江沼郡月津村	園芸・養蚕	五七
十二	河北郡井上村	農業改良・園芸作物	四六
十三	石川郡二塚村	畜産・作物	六一
十四	鳳至郡柳田村	稲作・病虫害	五八
十五	羽咋郡堀松村	稲作・園芸	四〇
十六	能美郡吉田村	蔬菜・農業経済	三三
十七	羽咋郡柏崎村	園芸・畜産	三九
十八	珠洲郡若山村	作物・肥料	五六

第三章　石川県立農学校時代

第三章　石川県立農学校時代

第一節　明治期の農学校

一　県立農学校の発足

松任移転　県当局はかねてから小松の農学校が仮校舎であり、設備も不十分であったので、実業学校令の公布と第四中学校が小松に設置されたのを機会に、明治三三年七月七日の臨時県会において、石川郡松任町に移転が決定した。三ヵ年継続事業として総工費約五万円（三三年度に金二万円、三四年、三五年の両年度に各々金一万五千円）を支出して校舎の工事にとりかかった。移転先を松任町に決めたのは、金沢市に近いため第九師団の疫馬が獣医学科の臨床材料に供せられるに都合よかったこと（「県会議事録」）、石川郡が県下でも有数の農業の盛んな地域であったこと、それに地元がおよそ四、三七七坪（一四、四四四平方メートル）の校舎敷地を無償で提供したことなどによる。実習地七、〇〇〇坪、運動場一、二〇〇坪は、土地の人達から前者を四八〇円、後者を八五円二〇銭で借り入れた。（運動場は明治四一年に一六〇坪を買収したが、実習地はそのままで買収されなかった。）

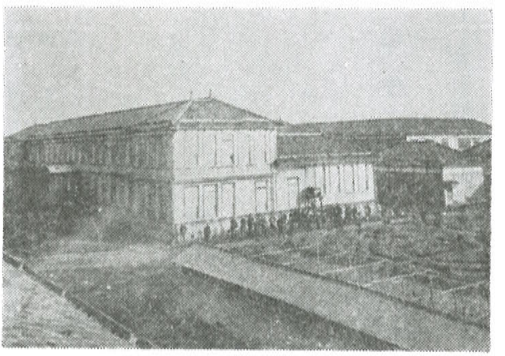
三四年（一九〇一）四月二〇日、次のような文部省令が文部大臣、松田正久によって公布せられた。

文部省令第一一号

師範学校及小学校ヲ除ク外学校ノ名称ニハ費用負担ノ区別ニ従ヒ道庁府県立・郡立・市町村立、又ハ私立等ノ文字ヲ冠スヘシ　既設学校ノ名称ハ前項ニ依リ本令施行ノ日ヨリ六箇月以内ニ改称シ当省ヘ開申スヘシ

明治三四年四月二十日　　文部大臣　松田正久

この文部省令によって、従来○○県農学校と称していた学校は、○○県立農学校と立の文字が加えられるようになった。本校も三四年五月、石川県告示第一四六号をもって、石川県立農学校と改められ、明治三五年三月、本館、寄宿舎、畜舎、農場関係建物が落成したので、三月一三日から同月二四日までの移転のため臨時休業し、



移転当時の校舎西側より

年度	科	能美	江沼	石川	金沢	河北	羽咋	鹿島	鳳至	珠洲	他府県	計
36	農	9	2	57	1		21	5	21	5	6	127
	獣	2	1	27	3	2	5	2	3	2	22	69
37	農	7	1	63	1	2	29	9	17	8	9	146
	獣	4	1	31	6		5	4	2	1	30	84
38	農	6	4	68	4	5	26	16	22	13	7	171
	獣	7	2	35	12	4	2	4	6	1	28	101
39	農	8	1	72	3	8	18	15	20	12	13	170
	獣	9	1	32	16	6	1	3	12	1	26	107

〔明治30年代後半の農学校生徒の出身地〕
―石川県農学校一覧　明治39年―

諸物品の運搬を行ない、同月二五日午前一一時から移転式を挙行し、二六日から五日間学年末試験を実施し、四月一一日、第一六回卒業式を挙行した。講堂がまだできていなかったので、寄宿舎の食堂が会場にあてられた。本館、寄宿舎が完成したが、付属建物はまだ建築途上であったのに移転を急いだのは、卒業生を新校舎から卒業させたかったからであろう。その後、三九年にはじまる県立学校整備四カ年計画の一部として、雨天体操場、講堂、農業実習施設などを増設し、明治末年までには校舎の大部分が完成することに決定した。

明治三五年一一月、養蚕室、生徒控所、調剤室、動物実験室、顕微鏡室、養虫室、蹄鉄場、手術室、解剖場が完成し、三六年四月一〇日卒業式をあわせて校舎落成の式典が挙行された。

その後、明治四〇年に農事実習室、農場観測場、温室、炊事場用納屋、肥料場、雨天体操場および銃器室、明治四三年に講堂、御真影奉安庫、四四年に燻豚室が引き続いて新築された。

寄宿舎規定

本校の特色として、県外生はもちろん、県内でも広く各郡からの入学生が多かったため、生徒の大多数は寄宿舎生活をおくらねばならなかった。火打谷時代でも、小松時代でも、松任移転後も、寄宿舎の占める比重はきわめて大きく、学校もまた、教職員の主たる人員を舎監にあて、集団生活と規律の厳格を期していた。特に小松時代は民家を借りて分宿させていたため、規律の乱れるおそれがあり、明治三一年五月、沢村校長時代に、生徒心得細則および寄宿舎規定細則を制定して規律の厳守に努めたが、松任移転と同時にこれを改正し、寄宿舎規則施行細則を定めた。次の通りである。

第一章　総　則

第一条　入舎シタルトキハ五日以内ニ左ノ書式ニヨリ保証人ヨリ保証書ヲ差出サシムモノトス

保　証　書（用紙半紙）

印紙○

住所
姓名

右之者今般御校寄宿舎へ入舎致候ニ付テハ舎則等遵守可為致ハ勿論総テ本人身上ニ関スル件ハ拙者ニ於テ引受可致仍テ茲ニ保証候也

年　月　日

住所
保証人氏名　印

石川県立農学校長宛

第二条　退舎セントスル者ハ保証人連署ヲ以テ事由ヲ詳記シタル願書ヲ舎監ヲ経テ校長ニ差出シ許可ヲ受クヘシ
第三条　舎則ニ違犯シ又ハ食費ノ支払ヲ滞リタル者ニハ其情状ニ依リ退舎ヲ命スルコトアルヘシ
第四条　疾病ノ性質ニ依リ校医ノ申告ニ基キ退舎ヲ命スルコトアルヘシ

第二章　生徒心得

第五条　諸願届書ハ総テ校長宛室長ヲ経テ舎監ニ差出スヘシ但特ニ明文アルモノハ此限リニアラス
第六条　寄宿舎ニ於テハ総テ舎監ノ命令ヲ遵守スヘキハ勿論室長ノ指揮ニ従フヘキモノトス
第七条　寄宿舎内ノ性行ハ常習ノ基礎トナルヘキニ依リ規則示達等ヲ遵守スヘキハ勿論相互間ノ信義ヲ重シ常ニ容儀ヲ整ヘ苟モ軽挙疎慢ノ所為アル可ラス
第八条　必要ナル新聞雑誌ノ外稗史小説ヲ読ミ又ハ玩具等ヲ弄スルハ勿論之等ノ物品ヲ携帯ス可ラス
第九条　風紀ヲ紊ス可キ所為ハ勿論常ニ静粛ヲ旨トシ放歌高吟スル等喧噪ノ所業アル可ラス
第十条　居常衛生ヲ重シ清潔ヲ旨トシ衣服襯衣等ハ時々之ヲ洗濯スヘシ
第十一条　相互間ニ於テ物品ノ売買及金銭ノ貸借ヲ為ス可ラス若特ニ必要アルトキハ舎監ノ認可ヲ受クヘシ
第十二条　常ニ火気ニ注意シ洋燈ハ金属製油壺ノモノヲ用ヒ火鉢ハ消燈後ハ一定ノ場所ニ置キ舎監ノ検閲ヲ受クヘシ
第十三条　毎月ノ学資ハ各自必ス学費収支日記帳ヲ作リ収支ヲ明記シ翌月三日マテニ舎監ニ差出スヘシ
第十四条　故ナク炊事場・食堂・浴室ニ入ル可ラス

第三章　室　長

第十五条　各室ニ於テ生徒中ヨリ室長及副室長各一名ヲ命ス但時宜ニヨリ他室ヲ兼務セシムルコトアルヘシ

第十六条　室長ハ舎監ノ指揮ヲ受ケ室内生徒ノ取締ニ任シ又諸達ノ伝達ヲ為スモノトス

第十七条　室長ハ生徒中性行不良ノモノアルトキハ懇篤ニ之ヲ説諭シ尚改悛ノ状ナキモノハ舎監ニ申告スヘシ

第十八条　室長ハ生徒中犯則者アルトキハ其犯状ヲ具シ舎監ニ申告スヘシ

第十九条　室長ハ生徒ヨリ差出ス諸願届書ヲ調査シ正当ト認ムルモノハ捺印ノ上直ニ舎監ニ差出シ否ラサルモノハ本人ニ返付スヘシ

第二十条　副室長ハ室長ヲ補佐シ又ハ室長差支ノ時ハ其事務ヲ代理ス

第二十一条　室長及副室長ハ一定ノ徽章ヲ両襟ニ附スルモノトス

第四章　検　査

第二十二条　検査ヲ分ケ人員検査、舎室検査ノ二トス

第二十三条　人員検査ハ現在員ノ収調ヲ目的トシ定時若クハ臨時ニ之ヲ行フ但定時検査ノ時刻ハ別ニ定ム

第二十四条　定時検査ハ一定ノ場所ニ生徒ヲ整列セシメ之ヲ行ヒ臨時検査ハ各居室ニ就キ之ヲ行フ但時宜ニヨリ定時検査ノ例ニヨリ臨時検査ヲ行フコトアルヘシ

第二十五条　舎室検査ハ舎室内ノ掃除及汚損ノ有無等取調ヲ目的トシ毎月一回以上之ヲ行フ

第二十六条　検査ハ総テ舎監之ヲ行ヒ必要アルトキハ校長臨監スルコトアルヘシ

第二十七条　定時検査ハ号鐘ヲ以テ之ヲ報シ其他ハ掲示又ハ口達スルモノトス

第二十八条　疾病其他ノ事故ニヨリ定時検査ヲ受クル能ハサルモノハ舎監ニ届出ヘシ

第五章　寝起自習

第二十九条　起床就眠自習等ノ時間ヲ定ムルコト左ノ如シ

時季	起床	就眠	自習	休憩	自習
自　四月　一日 至　七月二〇日	午前五時二〇分	午後九時三〇分	自午後七時 至同　八時	自午後八時 至同　八時三〇分	自午後八時三〇分 至同　九時三〇分
自　七月二一日 至　八月三一日	同　五時三〇分	同　九時	自同　七時三〇分 至同　九時	自同　— 至同　—	自同　— 至同　—
自　九月　一日 至一一月一〇日	同　六時	同　九時三〇分	自同　六時三〇分 至同　八時	自同　八時 至同　八時三〇分	自同　八時三〇分 至同　九時三〇分
自一一月一一日 至　一月三一日	同　七時	同　九時	自同　五時三〇分 至同　七時三〇分	自同　七時三〇分 至同　八時	自同　八時 至同　九時
自　二月　一日 至　三月三一日	同　六時三〇分	同　九時	自同　六時 至同　七時三〇分	自同　七時三〇分 至同　八時	自同　八時 至同　九時

第三十条　就眠ト同時ニ必ス消燈スヘシ

第三十一条　自習時間中ハ他室ニ往復スルコトヲ得サルハ勿論漫リニ離席シ又ハ音読スル等他人ノ自習ヲ妨クル行為アル可ラス

第三十二条　起床就眠時刻ハ号鐘ヲ以テ之ヲ報シ自習時刻ハ撃析ヲ以テ報ス

第三十三条　病気其他ノ事故ニヨリ第　条ノ規定ニ依リ難キ場合ハ舎監ニ届出ツヘシ

第六章　外出及帰省等

第三十四条　外出時間ハ祝祭日ハ儀式執行後日曜日ハ朝食後其他ノ日ニ在テハ授業後ヨリ夕食時刻迄トス

第三十五条　止ムヲ得サル事故ニ依リ臨時外出セントスルトキハ其事由ヲ申立テ舎監ノ指揮ヲ受クヘシ

第三十六条　外出先キニ於テ急病若クハ止ヲ得サル事故ノ為メ外泊シタルトキハ帰校ノ際医師ノ証明書又ハ其他事故ヲ証スヘキ証憑ヲ添付保証人連署ヲ以テ届出ツヘシ

第三十七条　帰省又ハ外泊ヲ要スルトキハ其事故ヲ詳記日限ヲ予定シ出願スルモノトス予定日限ヲ超過スルトキ亦同シ

第三十八条　帰省シタルトキハ到着及出発時刻ヲ明記シタル保証人ノ証明書ヲ帰校ノ際差出スヘシ
第三十九条　教師ノ命ニヨリ実地視察ノ為メ外出スルトキハ該教師ノ認印ヲ得テ舎監ニ届出ツヘシ
第四十条　外出中帰校時刻ニ後レタルトキハ其事由ヲ詳記シ保証人連署ヲ以テ帰校ノ際直ニ届出ツヘシ
第四十一条　外出スルトキハ舎監室ニアル名札ヲ受取リ門衛ニ預ケ置キ帰校ノ時ハ之ヲ受取リ舎監に差出スヘシ又宿泊ノ予定ヲ以テ外出中ハ室外ノ札ヲ裏返シ置クヘシ
第四十二条　物品ヲ校外ニ持出サントスルモノハ舎監ニ届出物品持出証ヲ得テ門衛ニ交付スヘシ
第四十三条　疾病ノ為メ課業ヲ休ミ又ハ定時検査ヲ受クサリシモノハ当日外出ヲ許サス但医師へ受診ノ為メ外出ノ必要アルトキハ舎監ノ許可ヲ受クヘシ
第四十四条　外出ノ際ハ必ス所定ノ制服又ハ制帽及袴ヲ着用スヘシ

第七章　面　会

第四十五条　生徒ニ面会センストスルモノハ舎監ニ届出ヲ面会簿ニ面会人ノ住所氏名及用向ヲ記載シ後応接所ニ於テ面会スヘシ
第四十六条　舎生ノ外舎監ノ許可ヲ得スシテ居室ニ入ラシメ又ハ校舎ヲ縦覧セシム可ラス
第四十七条　授業時間中ハ面会ヲ許サス但特ニ舎監ニ於テ至急ヲ要スヘキモノト認メタルトキハ此限ニアラス

第八章　舎　室

第四十八条　生徒ノ居室ハ舎監之ヲ定ム
第四十九条　居室ハ各自ニ於テ毎日朝夕二回以上掃除スヘシ室内外ノ掃除ハ全生徒之ヲ行フヘシ但其日時ハ毎年二月、五月、十月ノ中ニ於テ各一回舎監之ヲ定ム
第五十条　舎室及付属ノ器具建物ヲ破壊シ又ハ汚損シタルモノハ之ヲ弁償セシメ其情状ニ依リ処分ス若其人名不分明ナルトキハ同室者又ハ一般生徒ニ其責ヲ任セシムルコトアルヘシ
第五十一条　舎室ニ於テハ窓ヨリ物品ヲ投棄スル等ノ行為アル可ラス又時々窓戸ヲ開キ空気ノ流通ヲ図ルヘシ
第五十二条　舎室ニ於テハ靴又ハ外用草履ヲ穿ツヘカラス

第九章　食堂及炊事

第五十三条　喫飯時刻ヲ定ムルコト左ノ如シ但喫飯時限ハ号鐘ヲ以テ之ヲ報ス

時季	朝食	昼食	晩食
自　七月一一日 至一一月三一日	午前六時三〇分	正午	午後六時
自一一月　一日 至　二月二八日	午前七時	午前一一時三〇分	午後五時三〇分
自　三月　一日 至　七月一〇日	午前六時三〇分	正午	午後六時
自　七月一一日 至　九月一〇日	午前六時	同	午後六時三〇分

第五十四条　食堂外ニ於テハ勿論自己ノ定席外ニ於テ飲食ス可ラス但特別ノ事情アリテ本文ニ依リ難キモノハ舎監ノ許可ヲ受クヘシ

第五十五条　喫飯ハ指定ノ時刻ニ為スハ勿論ナルモ若事故ノ為メ指定時刻ニ為シ難キトキハ舎監ノ許可ヲ受クヘシ

第五十六条　常食ノ変更ヲ要スルモノハ炊事委員ニ届出ヘシ

第五十七条　食物ノ品質調理及分料価額等検閲監督セシメンカ為メ炊事委員若干名ヲ置ク

第五十八条　炊事委員ハ生徒互選シ其任期ハ一ケ月間トス

第五十九条　炊事上ニ関スル諸設ノ事項ハ総テ舎監ノ承認ヲ受クヘキモノトス

第六十条　炊事委員ハ毎土曜日ニ翌週ノ炊事献立標準ヲ舎監ヘ差出スヘシ

第六十一条　食費ハ毎月五日迄ニ当月分ヲ舎監ニ前納スヘシ

第十章　浴室

第六十二条　入浴ノ前限ハ放課後ヨリ夕食時迄トス

第六十三条　浴場ニ於テハ手套、靴下、其他衣類物品等ヲ洗濯ス可ラス

第六十四条　浴場ニ於テハ勉メテ静粛ニシテ且不潔ノ所為アル可ラス
第六十五条　浴場ニ関スル一切ノ事ハ該当月ノ炊事委員管掌スルモノトス

第十一章　病　室

第六十六条　生徒病気ノ為メ課業ヲ休ミ加療ヲ要スルモノ又ハ簡易伝染病ニ罹リタルモノハ病室ニ収容スルモノトス
第六十七条　診察料・薬価・手術料等ハ生徒ノ自弁トス

第十二章　学費取締

第六十八条　生徒ノ学費ハ総テ校長及舎監監督シテ銀行ニ預ケ置カシム
第六十九条　学費ノ支払ヲ要スルトキハ舎監ノ承認ヲ経テ之レヲ引出スモノトス
第七十条　学費取締ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

○　寄宿舎生徒学費取締細則

一、父兄ハ毎月五日マテニ当月分ノ学資ヲ学校長ニ送付スヘシ但数月分一時ニ送金スルモ妨ケナシ
二、学資ハ学校長之ヲ保管ス
三、生徒学資ノ支出ヲ要スルトキハ受取証ヲ学校長（又ハ担任舎監）ニ提出シテ其支給ヲ需ムモノトス
四、学資支給ハ毎週一回金曜日ヲ以テ定日トス但時宜ニ依リ之ヲ変更スルコトアルヘク又臨時急用ノ場合ハ定日外ト雖モ支給ヲナスモノトス
五、学資ハ物価ノ昂低ニヨリテ多少ノ差アリト雖概ネ左ノ如シ

経　常　費　（一ケ月分）

費目	金額	摘要
授業料	○・五〇円	毎月五日限納入
食費	四・二〇〇	一日約一四銭
用紙及文具類	○・五〇〇	平均一ケ月分見込

舎費	〇・五〇〇	校友会費・茶話会費・炭油・湯料等
雑費	一・〇〇〇	洗濯賃・郵便料・手拭・靴下代等雑費
計	六・七〇〇	

臨時費

費目	金額	摘要
衣服	一五・五〇〇円	冬服代参円五〇銭（小倉地紋羽裏）夏服代貳円（小倉）実習服二着代弐円、外套八円 但冬服夏服ハ一ヶ年半、外靴ハ三ヶ年使用ノ見込
靴及ゲートル	三・〇〇〇	靴一足弐円五〇銭、ゲートル一足五〇銭各修繕ノ上一ヶ年使用ノ見込

右記の通り規則はきわめて厳しく、例えば必要な新聞、雑誌の外、稗史小説を読み、または玩具等を弄するはもちろん、これらの物品を携帯することを禁じ、風紀はもちろん、放歌高吟の禁止、生徒相互間の物品の売買や金銭の貸借を認めず、毎月の学資は、各自が必ず学資収支日記を作って毎月舎監の検閲を要した。外出のときは所定の制服、制帽および袴を着用し、舎監室にある名札を受け取って門衛に預け、帰校の際にこれを受取って舎監に差し出し、帰校時刻に遅れたときはその事由を詳記し、保証人連署をもって届け出る必要があった。起床、就眠喫食などは号鐘をもってこれを報じ、時間外に故なく炊事、食堂、浴室へ立ち入ることを禁じ、自習時間は他室に往復することはもちろん、みだりに離席しまたは音読するなど、他人の自習を妨げる行為は全て禁止されていた。

自治活動として生徒のなかから、室長および副室長をえらび、一定の徽章を両襟に付けて室内生徒の取り締りに任じ、諸種の伝達を行ない、生徒中に性行不良のものがある場合は、これを説諭した。なお、改悛の情がない

場合には舎監に申告させた。また、生徒より差し出す諸願届書を調査し、正当と認めたものは捺印の上で舎監に差し出すが、しからざる場合は本人に返付するなど、室長には大きな権限が認められていた。そのため規律は厳格に守られたが、時々は上級生の下級生に対する暴力事件がおこることもあり、上級生のわがままから時には夜間脱出遊興などの行為があって処分問題をひきおこすこともあったのは思い出の一端であろう。

二　学校体制の確立

明治三七年規則改正の要点　明治三七年石川県令第二七号をもって、三月三一日再び本校の規則を改正し、同年四月一日より施行されることになった。

主な改正点は、

一、補習科の修業期間を従来二ヵ年以内とあったのを二ヵ年とした。

二、本校生徒の定員二五〇名を三〇〇名とした。

三、学年を四月一六日に始まり、翌年四月一五日に終るとあったのを、四月一日に始まり、翌年三月三一日に終るとした。

四、本校創立記念日の九月一七日を新たに休業日に加えた。

五、二学期制を改めて三学期制とし、夏季休業が八月一日より九月一〇日までとあったのを、七月二一日より八月三一日までの四二日間、冬期休業日を三日間短縮して一二月二五日よ

明治36～38年度中等学校における生徒在籍

	明治36	明治37	明治38
師範学校	308	310	208
中学校	1,800	1,957	2,017
高等女学校	410	457	459
県立農学校	216	227	227
工業学校	170	181	174
金沢商業	213	221	250
計	3,197	3,352	3,480
前年比較増減	増 242	増 155	増 128

（石川県戦時歳時記・明治38年4月）

り翌年一月七日までの一四日間と改正し、夏季休業中の実習は、農科第二学年、第三学年の生徒にだけ実習を課すと改めた。

六、教育課程においては前期、後期の別を廃して、学年とし、各学年の履修学課目を整理し、外国語各年五単位を各年二単位に減じて、作物、畜産、養蚕、林学等の専門科目を増加した。

七、入学試験の科目を明記し、読書、作文、算術、理科、地理、歴史の四科目とし、修業年限四ヵ年の高等小学校もしくは中学二学年の課程終了者には地理、歴史をはぶき三科目とした。

八、試験と及落判定については、臨時試験と学年試験の二種とし、臨時試験を学年中適宜の時期に二回以上実施し、学年試験を学年末に行ない、臨時試験の平均点と学年試験の点を加えて二分する。各科目の学年成績評点を通約して六〇点を合格とするが、平均六〇点以上を得たものでも、五〇点以下のものが二科目以上、もしくは、四〇点に満たないもの一科目以上あるか、または、実習点が六〇点に満たないときは不合格とする。

九、登校の際は必ず本校の制服制帽を着用する。

などの諸点があげられたのであるが、おおむね、今日の学校規則に近くなった。

本校への志願者・合格者表

	志願者	合格者	(受験倍数) 合格率
明治35	130	124	(1.05) 95.38
明治39	167	108	(1.54) 64.67
大正1	65	48	(1.35) 73.84

(「石川県統計書」)

制服、制帽、徽章の制定　日露戦争の関係が次第にあぶなくて油断ができなくなってきた明治三六年五月一四日、高鳥容孝校長大学が群馬県立農学校から本校に着任された。在任中に本校の諸規定および心得が



長校代二
高鳥容孝

明治四年一二月二一日、静岡県小笠郡大池村に生まる。明治二七年七月、東京農科大学農学科を卒業、農科大学副手、農商務省農務局農事課、台湾総督府技師、台中県内務部殖産課長、明治三二年六月、佐賀県技師、佐賀県農事試験場長、同三四年一月、群馬県農業学校長を経て、同三六年五月、石川県立農学校長になる。四〇年七月、広島県農事試験場技師として転任。

大幅に改正または成文化され、その任務が明らかにされた。すなわち、同年七月一三日に寄宿舎心得、舎監事務取扱心得、非常警備心得、同二三日に処務細則が定められ、同年九月一二日に生徒心得を改正し、同二九日に生徒服制規定が認可され、一一月一七日に種豚種付、病畜治療および装鉄削蹄に関する規定、一二月四日に農科実習規定、同二二日に獣医科実習規定などが相継いで定められた。

国民全体に日露開戦前夜の緊張がみなぎり、「一旦緩急義勇公に奉ず」べき、教育勅語の聖旨に基づき、教育全体に軍事教育がとり入れられ、制服制帽の制定、体操の時間には靴にゲートルを着用させて軍事教練が行なわれ、日常生活においても、すべて指揮命令に服従することが要求され、校長はじめ教職員には敬礼をもってこれに対し、生徒相互間においても、また、敬礼するように定められ、学校生活は一路、軍国思想と軍事教練の一色にぬりつぶされていった。

。生徒心得細則

第一条　常ニ教育勅語ノ聖旨ヲ奉遵スベシ

第二条　学則及其他ノ規定ヲ遵守シ師長ノ指揮命令ニ服従スベシ

第三条　校ノ内外ヲ問ハズ校長及職員ニ対シ敬礼ヲ行フベシ

第四条　生徒相互間ニ於テモ相当ノ敬礼ヲ行フベシ

第五条　校内に在テハ特ニ静粛ヲ旨トシ喧擾ノ言動アルベカラズ

第六条　本校所定ノ制服制帽及実習服左ノ如シ

一、制　服　ダルマ形洋服
　夏　服　上衣袴共　鼠色（縦紺）
　冬　服　同　黒又ハ濃紺色
一、制　帽　大黒形黒色　白線二条ノ横章ヲ付ス
　但夏季（六月一日ヨリ九月三〇日迄）ハ白布ヲ以テ之ヲ蔽フモノトス外出及実習ノ際ニ限リ麦藁帽（帯ハ黒色、前面ニ本校徽章ヲ付ス）ヲ着用スルコトヲ得
一、徽　章　帽ノ前面ニ付ス
一、実習服
　農学科生徒　筒袖ノ短衣（黒色）及股引
　獣医学科生徒　解剖服形

第七条　体操ノ時ハ必ズ靴「ゲートル」ヲ着クベシ

第八条　実習ノ際ハ必ズ実習服ヲ着用スベシ

第九条　已ムヲ得ザル事情アリテ制服ヲ着用スル能ハザルトキハ寄宿舎生ハ舎監ノ認印ヲ得通学生ハ保証人連署ヲ以テ直チニ其事由ヲ届出ヅベシ

第十条　日常外出ノ際ト雖モ可成的制服ヲ着用スベシ若シ和服ヲ着用スルトキハ必ズ袴ヲ穿チ制帽ヲ戴クベシ

第十一条　毎時始業ノ号報ニ従ヒ各自教室ニ入リ着席シテ教師ヲ礼迎シ終課ノ際ハ又教師ヲ礼送シテ後退席スベシ

第十二条　常ニ遅刻欠課欠席ナキ様厳重ニ留意スベシ

第十三条　始業時限ニ遅レテ出席シタルトキハ教師ノ許可ヲ得テ後着席スベシ、已ムヲ得ザル事由アリテ欠課欠席シタルトキハ寄宿舎生ハ舎監ノ認印ヲ得テ直チニ通学生ハ保証人連署ヲ以テ当日又ハ翌日第一限内ニ其事由ヲ届出ヅベシ

第十四条　二日以上引続キ欠席セントスルトキハ事由ヲ記シ保証人連署ヲ以テ速力ニ届出ヅベシ但シ寄宿生ハ舎監ノ認印ヲ以テ保証人ノ連署ニ換フルコトヲ得、病気ニ依リ欠席一週間以上ニ亘ルトキハ医師ノ診断書ヲ添付スベシ

第十五条　休課放課ノ時間ニ於テ妄リニ教室ニ入ルコトヲ得ズ
第十六条　校内ニ於テ帽子・外套・実習服其他携帯品ハ一定ノ場所ニ整理シ置クベシ
第十七条　常ニ衛生ヲ重ジ清潔ヲ旨トシ殊ニ襯衣実習服ノ如キハ数々洗濯スベシ
第十八条　建物器具動植物等ヲ汚損毀傷スベカラズ若シ故意又ハ不注意ノ為メ之ニ損害ヲ加ヘタルトキハ弁償セシム
第十九条　諸種ノ願届書ハ其級ノ係教師ヲ経テ校長ニ差出スベシ但寄宿舎ニ関スルモノハ此限リニアラズ
第二十条　校ノ内外ヲ問ハズ多数ノ会同若ハ文書ノ広布ヲ為サントスルトキハ予メ校長ノ承認ヲ受クベシ

（「石川県立農学校一覧」明治三八年）

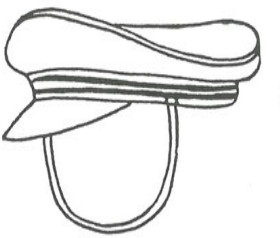
右記の生徒心得細則や生徒服制規定が制定されるまでは、校章や服装がどのようであったか不明であるが、明治三五年度の寄宿生臨時費に、衣服費一五円八〇銭（冬服代三円五〇銭、夏服代二円三〇銭、実習服二着代二円、外套八円、靴二円五〇銭）とあるから、すでに一応の制服はきめられていたと思われるが、それまでは一般に区々別々のものを着用するか、和服に袴を着用していたのではなかったろうか。

制帽は大黒形、地質は黒色絨、庇は黒革、頤紐は黒革幅三分、横章は紺蛇腹組、白線二条、前章はアルミ鍍金にて経一寸の六光を打出し、その中に農の字を付す。ただし、夏服着用のときは白木綿の日覆を付すこと。冬服は、ダルマ形、生地質、黒または濃紺色小倉職もしくは絨、釦は金色、経七分。夏服は製式ダルマ形、地質鼠色（縦紺）小倉織、釦は金色、経七分。

農業科実習服は製式筒袖の短衣および股引、地質紺色木綿。獣医科実習服は製式解剖服形、地質白天竺木綿、靴は製式短靴、地質、革または「ズック」、脚絆は地質麻織と定められた。



前徽章



帽



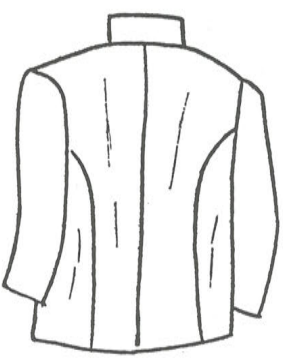
袴



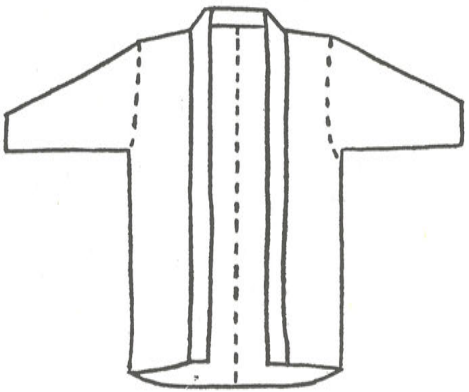
上衣



釦



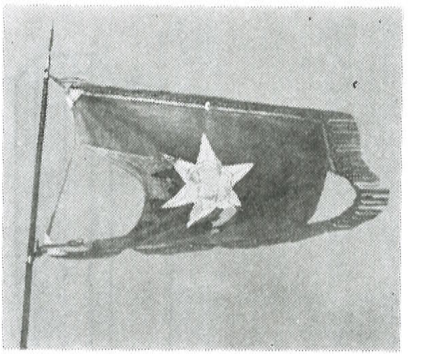
上衣



農学科実習服



獣医学科実習服



県立農学校時代の校旗

校旗の樹立

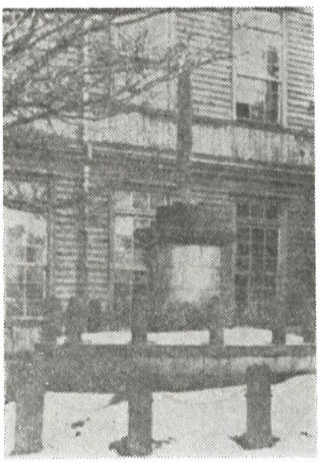
明治四三年（一九一〇）二月一一日の午前九時より紀元節拝賀式が行なわれ、そのあと本県庁より授与された本校校旗の披露式が挙行された。それ以来、本校の象徴としてあがめられた。常に、本校生徒の先頭であったが、長い年月と風雪のために布地は色あせ、糸切れがあり、昭和二三年の新制高等学校発足と同時に新しい校旗にその席をゆずり、現在は、本校の宝物の一つとして大切に保存されている。

三　記念碑と東宮殿下の行啓

戦死者記念碑の建立

日露戦争の終った明治四〇年（一九〇七）三月に、学友会および同窓会の共同決議により、本校出身者で日露の大戦に殉じた人達の芳名と偉勲を長く後世に伝えるため、校舎前庭の正面玄関に向かって左側の、本校新築記念樹であった老桜の側に、本校出身戦死者記念碑を建立し、同年三月三一日に県知事の臨席をうけて卒業式を挙行した。引き続いて、同碑の除幕式を挙行した。それ以来、幾多の戦争により戦死した卒業生を合祀し、慰霊祭が行なわれて来たが、大東亜戦争後に破壊されて玉垣の一部だけが残存された。最初に碑下に祀った方々は次の一〇人である。

陸軍歩兵中尉　従七位勲六等功五級　山岸　長久
同　　山本　武雄（富山）



忠魂碑

陸軍歩兵中尉　従七位勲六等功五級　坂上　嘉市（石川）
陸軍砲兵少尉　勲七等功六級　渋谷　謙治（福井）
陸軍歩兵曹長　勲七等功七級　垣内徳太郎（石川）
同　勲七等　寺井外次郎（石川）
陸軍工兵軍曹　勲七等功七級　館　泰治（石川）
陸軍歩兵伍長　勲七等功七級　藤垣　貞茂（石川）
同　東　懿（石川）
陸軍歩兵一等卒　勲八等　山田　作次（石川）

東宮殿下の行啓

明治四二年九月に東宮殿下（大正天皇）の石川県行啓の折には、本校へも行啓の旨が決定し同年六月よりその準備にとりかかり、願念寺前の小路を取り広げ、県立農学校前の民家を買収して、国道から本校正門までの道路がつくられ、学校内外の消毒が行なわれてその日をお待ち申し上げた。

日程

九月二八日　午前八時四〇分　金沢停車場御発車
同　八時五八分　松任停車場御着車
同　九時　八分　県立農学校御着
同　九時四〇分　同　御発
同　九時五〇分　松任停車場御発車
同一〇時　四分　金沢停車場御着車

九月二八日は夜来の雨がからりと晴れ上り、朝来、冷気が頓に加わって秋空高く気清き好適の日和となった。午前八時一五分に御旅館の成巽閣を御出発、八時四〇分に金沢駅から宮廷列車に御乗車、八時五八分に松任駅に御到着、丹羽郡長などの奉迎をうけて、御料の腕車に召された。駅前の広場には大緑門をつくって奉迎の二字を掲げ、蕪城公園からは皇礼

砲に変えて二一発の煙花を打ち揚げた。西田松任警察署長が御先駆申し上げて、御車は公会堂前から願念寺横をでて、八日市町から中町通りを通過し、記念道路を一直線に県立農学校へ向かわれた。郡下各町村より参集した数万の群衆は通路の両側に人垣をつくり、沿道の各町は浅黄と白の幕を張りめぐらし、軒には日章旗をかかげて全町をあげての奉迎であった。

本校前の記念通路右側には、笠間村字北島の北田はる（一〇一歳）米丸村字中島の津なを（一〇〇歳）をはじめ八〇歳以上の高齢者二六〇名が茣蓙を敷いて奉迎し、殿下には有難く御会釈を賜わった。

午前九時三分に本校へ御到着になった。門前には職員生徒が整列し、玄関で山中良治校長が奉迎して、本館二階の向かって右廊下つきあたりの、当時、農科三年（生徒三〇名）教室の御休憩室に御先導申し上げた。御座所には、金屏風を廻らし、黒松懸崖（紫泥角形鉢）蕎麦花（海鼠甘丸鉢）真柏（白丸形鉢）古屋滝石に福寿草（立海鼠小判形鉢）蔦懸崖（青交趾角鉢）の盆栽が飾られた。村上知事から「本校要覧書」と「拝謁名簿」を奉呈し、山中良治校長、桜田丑雄（農科大学農芸化学科卒業・農学士）、石堂清彝（農科大学獣医学科選科及乙科卒業）両教諭に拝謁仰付けられ、山中良治校長の御先導で、中島駿助（石川県立農学校卒業）助教諭担当の獣医科三年（生徒二〇名）の蹄鉄実習所の木蹄および造鉄作業の実習を御見学になった。それから中庭を通って、運動場西北隅につくられた農業実習場の御野立所に向かわれて、御起立のまま、東四郎（石川県立農学校卒業）教諭の担任する農科三年の間引（六名）中耕（六名）馬耕（二名）稲刈（六名）稲扱（一〇名）本保常次（石川県立農学校卒業）助教諭の担任する農科二年（生徒三六名）の麦整地（八名）間引（八名）中耕（八名）中耕畦上（八名）の実習を御覧になった。生徒は頭に麦稈帽をかぶり、紺の筒袖、半袴に脚絆の実習服姿で実習に従事した。殿下より村上知事に対して種々の御下問があり、「石川県は農作物の収穫期が余程早いようだな」と仰せられ、

知事ならびに陪従の人々は皆、殿下がこれほどまで農事に御留意なされるのを知って大変感激した。

次に、校内の生徒成績品を御台覧あそばされた。成績品は、農場産物水稲一二種、大麦二種、粟九種（農科一年）、豆類三二種、胡麻三種（農科二年）、蔬菜三二種、果実六種（農科三年）、加工農産物、苧、藺、杞柳、澱粉、蜂蜜、蜜蠟、ジャム、ゼリー、ソース各一点（農科二年）、蚕業品蚕種二種、繭三種、絹糸三種（農科二年）実習地肥料試験成績表、実習地測量精図、敷地測量製図（農科三年）作文綴本六冊、蹄鉄二〇個（獣医科二年）そのほか、製作標本類で、別に参考品として、仏・露・清国の蹄鉄一組を陳列したが、殿下は、第一に米国産の南瓜ロード、コロンケット、スクオッシュの三種を御覧になり、「あれは愛玩物か食用物か」との御下問あり、山中校長は知事を経て愛玩物であることを奉答した。それから三尺長茄子を「これは面白い」とお摘みになり、蕃椒を御覧になって「辛いのか」と御下問あったとのことである。こうして、成績品の中から優良なものを選んで差し出すようとの御話しがあり、再び、御休憩の後、午前九時四〇分に本校を御出発になり松任駅から汽車で金沢へ還啓になられた。本校では、還啓後、直ちに生徒の成績品を選定し、米国産南瓜コロンケット、スクオッシュ、コード三種、蕃椒五種、長三尺茄子、巻母一〇〇合五個、長十郎梨五個、薯蕷、午蒡と決定して籠に納め、午後、山中校長が携帯して御旅館へ差し出した。

なお、本校においては、今日も、当日の休憩所に用いられた玉座の椅子を記念として大切に保存されている。

四　来校した文化人たち

加賀藩は学問、芸術尊重の気風が強く、中心都市金沢が豊かな百万石城下の文化都市として栄えた。多くの文人・学者・芸術家が招かれ来って藩侯、士人はもちろん、庶民ともどもにその道に深い関心を示したことは周知

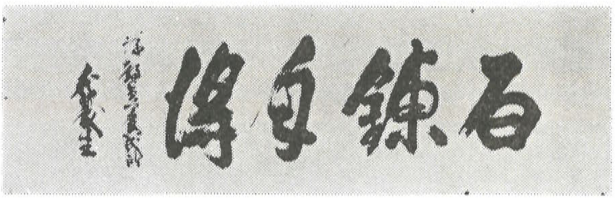
の事実である。近代に至っては旧藩時代に生をうけて自ら伝統を後代に伝えた人々と並んで、この土地に新たに設けられた石川県立農学校らを中心に新教育を受けた青年層が好んで、文学・芸術・農学・学問への進路を選んだ。それらの人々の影響は熱血漢にあふれる生徒時で学んだ時の感慨である。ここに本校へ訪れた人々を探ってみよう。

山崎延吉


山崎延吉の近影

〝農民の道〟を説きつづけて五〇有余年―全国農民の父としたわれた山崎延吉（明治六年～昭和二九年）が、そのひたむきな生涯をとじたのは昭和二九年の夏であった。延吉は、明治六年六月二六日旧加賀藩士山崎有将、喜久の二男として生まれる。出生地は金沢市山崎町、生まれつき身体虚弱で、同一五年満九歳にして小学校に入学。兄、すぐ下に弟がいたが二人とも幼くして死んだ。明治二七年七月、旧第四高等学校を卒業。東京農科大学農芸化学科に入学。法科万能の当時、四高生徒で進学コースに農科を選んだのは延吉が初めてだった。明治三〇年七月、東京農科大学農芸化学科を卒業、福島県立蚕業学校教諭に赴任。明治三一年八月父母のすすめにより結婚、妻久尾も延吉と同郷の金沢市出身だった。明治三二年五月、大阪府立農学校へ転任。同校は職員と生徒が一緒になって学校内容の乱脈をつく校長排斥のストライキの中で、生徒の中にはのち民社党で活躍した田中万逸、社会党で異彩を放った故杉山元治郎らがいた。明治三四年九月、愛知県立安城農林学校の初代校長となる。明治三八年二月、安城農林学校長のほか愛知県農事試験場長、農事講習所長を兼ねる。延吉は自らを我農生と称した。「我は農に生

まれ、我は農を生かさん」という信条を雅号に託し、農民道を説いて東奔西走した。延吉は、農民の窮状を訴え農業こそ国の根本であるという主張で貫かれている。また、農村教育の対象は学校生徒だけでなく、一般農民にまで及ばなければならないと説き、彼自身は先頭に立って鍬をふるい、草をむしって農民の中にとけ込んだ。



山崎延吉の書

泥にまみれて汗を流す—この実践力こそ農民の理解者、のちには農民をして〝聖農〟とまでいわしめた彼のもつ体質そのものであった。酒を好んだ彼は、農民たちと杯をかわし、揮ごうの筆をふるった。「上農は草を見ずして草を取る。中農は草を見て草を取る。下農は草を見て草を取らず」延吉の説いた農民道は、この短い文章の中にあますところなく表現されている。その根本思想は、二宮尊徳の報徳主義を受け継ぎ、大勢順応のなかでも自力更生を説く精神主義にほかならなかった。一面から見れば、それゆえにこそ、彼の訴える言葉の一つ一つはひたすら土地にしがみついて生きる農民の〝心〟をとらえ得たのかもしれない。

本校へ訪れたのは、明治三九年一月八日。高島容孝校長ら職員一同が山崎延吉を迎え生徒二七七名は、「二〇世紀の農法」と題して一時間の熱っぽい講演を拝聴した。延吉は安城におちついて農民とともに土をふみ土にまみれてくらし、農業の改良の実際を身をもって経験し実験して、その良い点を農民にささげた。そして、研究、実験した結果を、多くの著書として次次に発表したが「山崎延吉全集」にその全部がおさめられている。この一生をかけてのたゆまぬ努力が、わが国の明治・大正・昭和の農業全体をたいへん進歩させた。

暁烏　敏

石川県から多くの名僧が出たが、やはり真宗王国だけに、それが真宗に集中しているのはやむを得ない。暁烏敏もその一人である。

暁烏は明治一〇年七月一二日、石川郡出城村北安田（現松任市北安田町）、真宗大谷派明達寺住職、暁烏依念の一人息子として生まれた。依念は学徳高く、奇行に富んだといわれ、明治二〇年四月二〇日、五〇歳で死去している。母は金沢市十三間町、同派妙源寺、源順道の長女千代野で、大正一〇年一月二九日四八歳で死去した。

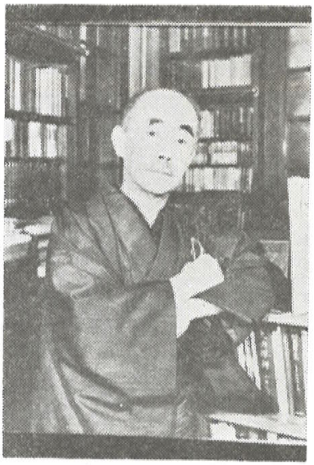


暁烏　敏

敏が生まれるときだが、千代野が産気づいたので産婆を呼びにやったところ、その到着するまでに生まれてしまった。依念は「はや生まれたか」とびっくりしたことから「はや」と名づけられ、漢字には敏捷の敏をあてはめたという。

敏は北安田小学校・松任小学校・松任高等小学校と進んで、一二年一三歳のとき、金沢の共立尋常中学校（二五年から大谷尋常中学校になる）にはいった。明治二六年、同校退学。英語教育の多いのに反対して語学の勉強を怠り、前年の進級試験に落第した。のち語学の重要さを知って刻苦精励するが、この年は自ら退校届けを出した。九月、京都・大谷尋常中学校三年に編入。明治二九年七月、同校卒業、真宗大学に入学。が、恩師清沢満之らの東本願寺宗制改革運動に呼応し、全学ストライキを指導、退学処分を受ける。明治三〇年四月、復学。明治三三年七月卒業。九月、外交官を志望し東京外語露語科別科入学。東本願寺の内地留学生の形をとった。一一月、東京市本郷森川町で、清沢らと「浩々洞」設立。近代仏教の確立を叫ぶ。明治三四年一月、雑誌「精神界」発行。清沢が中心で仏教近代

化の第一歩だった。よって立つ「精神主義」は明治のインテリゲンチアに衝撃を与える。しかし暁烏自身はいつの間にか外語校へ通わなくなった。明治三五年一二月、佐々木月樵の妹房子と結婚。明治四〇年四月二三日、外交官志願をやめ、東京と松任を半々に滞在し、その間求めに応じて全国各地に講演に行くという生活をしていた暁烏は、明治四一年四月二三日午後一時に石川県立農学校を学友会の要請で訪れた。そして、一時間半にわたって、講演「私の精神生活」と題して話された。そして、講演の最後には、「精神界」（清沢満之・佐々木月樵・多田鼎）に触れた。郷里において、香草舎を作り、「におい草叢書」を出版したりして活動した。大正一五年中国からインド・エジプト・ヨーロッパを回り、その後もアメリカや中国を歩いて教えを広めることに努力した。後に目が見えなくなったが、書物をあらわしたり、講演したりしていた。



柳田国男

柳田国男　明治八年七月三日、兵庫県神東郡田原村に生まれた。彼ははじめ詩人として活躍した。すなわち、明治三〇年（一八九七）田山花袋・国木田独歩・宮崎湖処子らと「抒情詩」を出して詩人として知られたが、明治三三年、東京帝国大学法科を卒業し、農商務省農務局にはいる。早稲田大学で農政学を講義した。三四年、長野県飯田出身の大審院判事柳田直平の養子となる。新進の農政学徒である彼の主な仕事は全国各地にこの新しい産業組合の啓蒙をして歩くことであった。そうした事から農山村へのつながりが出来てきた。農商務省はわずか二年間で、明治三五年内閣法制局参事官となった。毎月土曜日自宅で蒲原有明・田山花袋・国木田独歩らと談話会を開きました。専修大

学で農業政策学を講義した。しかし、農山村の啓蒙運動家として柳田は必要な人材とされており、小作騒動（岡山県北部地方）の視察などに出ることは多かったし、明治三八年からは全国農事会（後の帝国農会）の幹事を兼ねることになってから、彼の農山村への旅はとぎれることなく続き、次第に深く旅の魅力にとりつかれていった。この頃の旅は主として講演旅行（夏は産業組合の講演で福島県各地をまわる。秋には愛知県下の水利組合を視察する。三九年、北海道から樺太に渡る。四〇年、イプセン会をはじめる。産業組合の講演で越後へ行き、秋田・山形・福島をまわる。四一年、甲州・武州の境を歩き、引きつづき、九州・四国を旅行する。）であり、役人としての仕事であったから、自由に興味のおもむくままに歩くということではなかったし、その頃の旅の記録である「北国紀行」などを見ても、その関心が後のように民俗採訪を主体としたものではなく農業政策・社会政策的なものにより多く向けられている。明治四二年（一九〇九）柳田にとって当年三五歳であった。その年の六月一六日（水曜日）に石川県立農学校へ訪れた。この日は、とても梅雨時には珍しく素晴しい青空で、柳田は金沢駅を朝七時半の汽車に乗って松任駅に下車した。榊原仲県技師の案内のもとに農学校へ向かった。学校の正面は、東宮殿下（大正天皇）が石川県行啓（明治四二年九月）の折りに本校へ訪れるということで、その準備にとりかかり正門前までの道路をつくっていた時であった。校門をくぐり玄関へ行くと、山中校長をはじめ、青山新教諭（農科大学獣医学実科卒・徳島）広瀬勘次郎教諭（早稲田大学文学科卒業・滋賀）大津節男教諭（京都府養業講習所卒・石川）ら、その他の一四名職員・一九二名の生徒達が、宮内書記官柳田国男（法制局参事官兼任）を迎えた。当時、本校以上の農学校は、東京農科大学と札幌農学校があっただけで、ここに学ぶ農科・獣医科の生徒は、北は茨城から南は鹿児島まで及ぶ。獣医科の蹄鉄実習所をはじめ、農事実習室・農場観測場・温室・炊事場用納室・銃器室・雨天体操場・養蚕室・調剤室・動物実験室・手術室・解剖室・顕微鏡室等を見て、ことに

農業実習場で、リンゴ・梨・桃・ブドウ・サクランボ等その他、夏ミカンの枝もしほれるほど実を結んでいるのに細く観察された。柳田は、農学校を去ったのち、加賀千代女の墓を見て、石川郡役所、丹羽幹のもとへ立ち寄り、農業事情を聞いた後、全国的有名な下福増と下安原との耕地整理を見た。柳田は、「後者は十数年前のもの也。昔の耕地整理は一般に、田一区の面積小さく、爰でも五畝又は七畝を一区とす。此辺吹井多し。さまで水の田無き処にも、小さき石の筒から湧きこぼるゝ水あり。整理には一つの妨げなりといふ。安原村は夙く村是を公表したのを以て世に知らる。今年はそれから八年目、当時の実行事項なるもの果して幾何の成績を示すや。それを尋ぬるに答へ得る人少し。しかし恐らくは住民全数の義務に属せざる部分には、可なり効果の挙がりしものあるならん。」（「北国紀行」定本柳田国男集・第三巻）と述べている。

しかし、このような旅を通じて書物では学び得ない人間の生活のあり方に気付くようになり、地方による暮しぶりの違い、思いもかけないところにある人間生活の共通点、そういったものが次第に柳田の心をとらえ、旅につかれて行くことになった。それと同時に今まで興味を持ち、研究を進めてきた農政学とはまた違った観点から農村を見直し、研究する必要を感じてきた。

その後、貴族院書記官長になった。大正八年（一九一九）に役人をやめ、昭和二四年（一九四九）、朝日新聞論説委員となる。明治三八年頃から民俗学の研究をはじめ、全国各地の口碑伝説を収集し、雑誌「郷土研究」を主宰した。また、伝承文学、方言研究にも学識があり、平明な文章と広い知識によって日本民俗学を創始大成した。昭和二二年（一九四七）、民俗学研究所を開設した。昭和二六年（一九五一）、文化勲章を受賞した。主な著書には「海南小記」「日本の祭」「山の人生」「先祖の話」「昔話と文学」「方言覚書」「民俗学辞典」などがある。彼が集めた日本の民俗学資料は貴重なものである。

柳田国男が、昭和一一年一〇月、金沢を訪れたのを機会に、県立図書館長中田邦造が町村史編さん講習会を計画、翌一二年五月一四日より、県図書館協会主催で三日間、兼六会館で行なわれ、延べ二八〇人を越える参加者があった。昭和二六年（一九五一）六月二四日、加能民俗の会（二四回例会）に柳田国男は顔を見せ、「民俗学の諸問題」という題で講演している。柳田国男が訪れた松任に昭和四七年七月二七日、松任郷土研究会が設立され、蒔田達雄・福田与盛・平田吉夫・宮下与真ら卒業生は郷土研究にはげんでいる。（「柳田国男」項は、山根公「松任農業高校の歴史について―柳田国男と石川県立農学校―」〈図書館教養講座S48・7・22〉より）



横井時敬

横井時敬　万延元年（一八六〇）、熊本県に生まれた。明治四年熊本洋学校に入って英語を修め、明治九年卒業。一一年、東京に出て駒場農学校に学んで一三年農学科を経て農芸化学を専攻した。一四年、兵庫県に出仕し、一八年福岡県立農学校教諭となり、はじめて塩水選種法を発明して農業界に寄与するところが大きく、第三回内国勧業博覧会において賞を受けた。のち一時退職して雑誌「農業時論」を発刊して農業の改善発達につとめ、二七年東京帝国大学農科大学助教授に任じ、三二年（一八九九）農業教育研究のためドイツに留学を命ぜられ、帰国後、東京農科大学教授となった。明治四三年一月二六日、石川県立農学校を訪れ、「稲作改良について」という演題で一九二名の生徒を前に講演をされた。

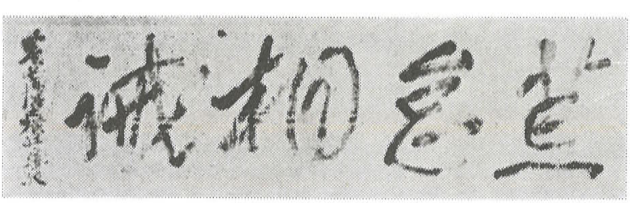
明治四四年、東京農業大学学長となり、同年ジュネーブで開かれた第三回国際労働会議に政府代表委員顧問として派遣された。大正一一年（一九二二）

東京帝国大学教授を辞め、一二年、東京帝国大学名誉教授となる。また実業教育会副会長、農業教育研究会長、帝国耕地協会会長等の職にあり、農業教育に関しては畢生の力を傾倒し実業教育界に重きをなした。これよりさき、明治三二年（一八九九）に農学博士の学位を授けられ、本校には、農学博士横井時敬の掲示額が保存され、生徒の鏡となっている。昭和二年（一九二七）一一月に、六八歳で死去。主な著書には「農業経済学」「農業汎論」「塩水選種法」「稲作改良論」などがある。

その他

明治期に来校を訪れて講演された人々が多い。ここに、明治三六年から四四年までの文化来訪人の一部を紹介する。

年月日	氏名
明治三八・九・二八	金井作太郎（煙草製造所主任）
〃　四一・六・一一	岸本馬政官
〃　四一・六・一一	石崎農商務省技師
四一・一〇・二〇	沢村真農学博士（文部省）
〃　四二・二・二七	瀬川程四郎（林務主事）
〃　四二・四・五	多田　政辰（石川種馬所長）
〃　四二・六・七	牛村　一（全国農事会幹事）
〃　四二・六・二五	砂山　氏（下総御料牧場）
〃　四二・七・一三	野村　紀（石川県種畜場長）
〃　四三・四・二二	多田　鼎（宗教家・常円寺住職）
〃　四三・一二・五	市川　禅海（宗教家）
〃　四四・二・二一	湯池　定武（農商務省技手）
〃　四四・三・一〇	石野　清（第九師団陸軍歩兵大尉）
〃　四四・五・二七	菊地　氏（海軍大尉）
〃　四四・一二・一六	天本　梅可
四五・三・一〇	篠原　氏（第九師団歩兵大尉）
四五・五・二六	広瀬　氏（海軍大佐）



農学博士横井時敬の揮毫

五　学校行事と校友会

学校行事

学校生活に秩序と変化を与える教育活動によって、生徒の心身の健全な発達を図り、あわせて学校生活の充実と発展を資するをねらいとして、学校、学年全体で行動する「学校行事」の一部分〈明治三七～明治四五年〉をのぞいてみたい。

明治三七年　九月二三日　本校運動場において本校校友会運動会を行う。

明治三八年　五月一七日　職員生徒一同石川郡美川海浜へ遠足に行く。

六月一〇日　農科第三年生二二名、獣医科同一六名を引率して修学旅行として三重県外四県をまわり、一五日帰校する。

一〇月一四日　陸上運動会を本校運動場で開く。午後一時、閑院宮殿下御来県に付き、松任駅にて奉迎する。

一〇月一六日　閑院宮殿下御帰京に付き、職員生徒一同松任駅にて奉送する。

一〇月二三日　死体剖検として獣医科第三年生は石川郡二塚村に出張する。

一〇月二六日　農科第三年生は石川種馬所を訪れる。

明治三九年　四月一九日　第九師団において臨時招魂祭が行われ、生徒職員一同参拝する。

四月二八日　午後本校移転五周年記念祝賀のため相撲大会を催した。

五月　三日　長野県人松本氏は自分が発明した松山犂を本校の生徒に実地説明をした。

五月一五日　農科第三年生三二名は京都・大阪・兵庫・奈良・福井県地方へ修学旅行に出発し、

二三日に帰校する。

五月二五日　獣医科第三年生一八名は三丹地方へ修学旅行に出発して六月二日帰校する。
六月　七日　獣医科第二、三年生は騎兵隊を訪れる。
六月二一日　生徒一同は講堂に集まり、文部大臣の訓令（三九年六月訓令第一号）を朗読し特に品性の修養に注意するよう誡告を受ける。
九月二八日　第七回陸上運動会を本校運動場において行なった。
一一月　二日　職員生徒一同野田山（金沢）へ遠足に行く。
一一月　八日　獣医科第三年生は松任町字松任新へ去勢術を見学する。
一一月一五日　農科第三年生は石川能美郡へ林学実習のため出発して一八日帰校する。
一一月二二日　獣医科第三年生は砲兵隊を見学する。

明治四〇年　五月一一日　農科三年生二七名、獣医科三年生一〇名は京都大阪三重県へ修学旅行をする。
五月一四日　全校生徒職員は石川郡石立・美川地方へ遠足を行なう。
六月一〇日　獣医二、三年生は石川県羽咋郡産牛馬共進会参観旅行に出発し一二日帰校。
七月一五日　愛知県農学校長山崎延吉二回目の本校来訪。
一一月一三日　本校生徒職員一同石川県鶴来町方面遠足に行く。
一一月二八日　農科三年生二一名は森林旅行に出発、三一日帰校。
一一月二九日　獣医科二年生三六名、三年生二六名は金沢方面へ見学旅行をする。

明治四一年　七月二七日　本校第九回陸上大運動会が行なわれる。

明治四一年一〇月二二日　生徒職員一同手取川方面へ遠足に行く。
一一月　五日　獣医科二、三年生は金沢市屠牛場を参観する。
一一月一七日　農科三年生は石川県羽咋、鹿島郡地方へ森林旅行に出発して二〇日帰校する。
明治四二年　五月　一日　農科三年生二五名、獣医科三年生一五名は京阪地方面へ修学旅行。
五月　五日　農獣科二年生五二名は小松及び石川種馬場を参観する。農獣科一年生七三名は石川郡御手洗村相川海浜へ遠足に行く。
六月　七日　農科二年生羽咋郡高浜地方へ修学旅行。
六月　九日　獣医科三年生は本県産牛馬品評会へ参観のために修学旅行に行く。
六月二一日　愛知県立農林学校長山崎延吉は本校を来訪した。（三回目）
九月二三日　東宮殿下本県へ行啓午後四時三七分、松任駅御通過職員生徒一同駅にて奉迎。
一〇月　三日　東宮殿下本県下行啓より還御仰出される。午前七時五〇分松任駅御通過。生徒職員一同同駅にて奉送する。
一〇月一六日　午前八時から第一〇回陸上運動会を開き、午後五時に終了。
一一月一〇日　農科三年生は能登方面へ森林旅行をする。
一一月二二日　獣医科三年生は第九師団乗馬隊へ見学のため修学旅行する。
一一月二七日　全校職員生徒一同は本県が開いた農産物品評会に参観のために金沢へ遠足に行く。
明治四三年　五月　四日　農科三年生二八名、獣医科三年生一六名は名古屋方面へ修学旅行に行く。
五月　五日　農獣科一、二年生と全職員は上小松方面へ遠足に行く。

六月　七日　農科二年生は養蚕実地見学のため、石川県農事試験場及び河北郡地方へ修学旅行する。
六月　八日　農獣科三年生は馬匹共進会を視察するために、大聖寺町へ修学旅行する。
六月一二日　農科三年生は林業視察のため、鶴来方面へ修学旅行をする。
九月　二日　獣医科三年生は第九師団へ見学のため、修学旅行に行く。
九月二八日　皇太子殿下、本校行啓記念式典を挙行された。
一〇月一五日　午前七時から校庭において、本校記念碑招魂碑祭を行ない、引き続いて第一一回陸上大運動会が行なわれた。
一〇月二六日　全校生徒の遠足は、小松方面へ向けて午前六時半に出発した。
一一月　八日　農科三年生は能登方面へ森林旅行をする。
一一月三〇日　農獣三年生は石川種馬所へ修学旅行をする。
一二月　五日　農科三年生は午後二時三〇分から石川郡公会堂に於いて米品評会を参観する。
一二月　九日　獣医科三年生は金沢騎兵第九連隊へ修学旅行する。
一二月一五日　獣医科三年生は第九師団へ実地見学のために修学旅行する。

明治四四年
一月二二日　午後一時から、石川郡公会堂に於いて農事講話会が開かれ、職員生徒一同は出席して聴講する。
四月一〇日　農科三年生は金石町砂防林を視察のために修学旅行する。
五月　七日　農科三年生二五名、獣医科三年生一五名は午前八時三五分に、京阪地方方面へ修学

旅行として出発。一四日帰校。

五月一〇日　生徒職員一同は江沼郡大聖寺方面へ午前五時二〇分遠足に出発、即日帰校。

六月　一日　午前一〇時、本校職員生徒一同は当地の若宮、金剣春季例祭のため両県社へ参拝する。

七月　二日　獣医科三年生一六名は、午前一〇時に金沢騎兵第九連隊へ見学のため、修学旅行する。

一〇月　七日　午前七時から本校出身日露戦役戦死者の為に記念碑前に祭典が行なわれ、生徒職員総代参列。九時から一二回陸上運動会が校庭において行なわれる。

一〇月一六日　農科三年生は金沢地方へ修学旅行する。即日帰校。

一〇月三一日　農科三年生は能登穴水地方へ森林旅行する。三日帰校。

一一月　二日　農科二年生は小松町へ修学旅行する即日帰校。

一一月一五日　職員生徒一同は金沢地方へ旅行する。

一一月二二日　農獣三年生は石川種馬所へ修学旅行する。即日帰校。

明治四五年　二月一四日　石川郡公会堂において、李家知事・榊原技師他数氏の農事講話会が開かれるので、農獣科三年生は聴講した。

四月一六日　農獣科第二、三年生の遠足が行なわれた。

五月一〇日　農科獣医科三年生四〇余名は午後六時四分の汽車で京阪地方へ修学旅行する。

五月一六日　農獣医各科第一、二年生九〇名は津幡地方へ遠足に出発する。即日帰校。

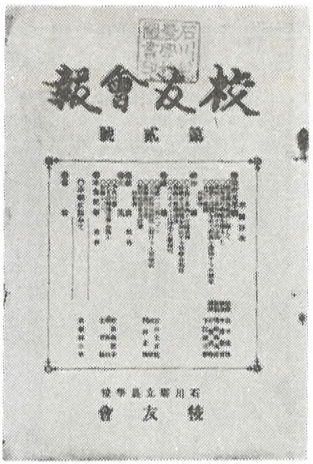
六月　四日　農科第二年生は河北郡高松付近の養蚕視察のため修学旅行に出発。即日帰校。
六月一一日　農科三年生及び獣医科二、三年生は、本県産牛馬品評会の見学のため、修学旅行する。即日帰校。

（「石川県立農学校一覧」）

校友会の活躍

明治三五年一〇月には「同窓唯心会報」第一号が石川県立農学校同窓生が発起人となって、「同窓唯心会」を結成して刊行された。

明治三四年（一九〇一）から、石川県立農学校校友会の名のもとで校内講演会が開かれ、外来招へい（聘）講師、職員の講話や生徒の弁論が行われた。校友会は、目的を会員（賛助（職員）・特別（本校出身者）・通常会員（在学生）の別）相互の親睦扶助と心身の修養におき、講話部・会誌部・運動部の三部を設けていた。三部の行事として講話部は毎年名士の講演会（年二回）と校内弁論大会を、会誌部は会誌の刊行（年二回）を、運動部は職員生徒の健康増進と運動会の開催（年一回）とをそれぞれ規定している。明治期の校友会誌「校友会会報」は、論説、学芸・雑録・会報の体裁をとっている。今日の生徒会雑誌と著しく相違するのは、職員・生徒のみならず卒業生（特別会員）からの論稿を載せ、学校卒業生を一丸とする会誌であったことである。



校友会報第2号
—明治43年—

「校友会報」　第貳号　（明治三五年六月二二日）

目　次

◉論説及学芸
・能登産馬改良に関して　山下盛治
・副産業の興起を図るへし　中浦三藤吉
・気候と農産物との関係　桑田林太郎
・細菌の培養を以て野鼠を退治する別法　石堂清彝
・自己の範囲　下江源三郎
外数件

◉抄　録
・牛肉と馬肉との鑑別例。
・停滞せる娩随を除去する砂糖の効用
・腺疫の血清療法
・ろべると・こほ博士の新発明

◉漫　録
・雑感一二（其一、二）　石川土百姓
・石川郡松任附近に行はるゝ田植歌　鴻雪
・修学旅行日記　西田文治
・蘭草栽培収支計算　高井与三郎
外数件

◉雑　報　数件

◉文　苑
・千代の墓　石黒幽花子
・亡き宮西栄吉君を弔ふ　舘直投
・狂歌一、二　土百姓

◉本会記事　数件

・卒業に臨みて　農獣科三年

◉会　告

運動面の活動では、運動部の組織が十分でなく、わずかに同好者により、撃剣（剣道）、庭球野球・端艇などが行なわれていた。そこで、明治四一年の運動部報告をそのまま「会誌」より抜萃しここに記す。

金沢第一中学校梅寮会対農学校六星会庭球仕合

金沢第一中学校より我校へ庭球仕合を申し込みしにより我校にては之を承諾し十月十一日午後より本校々庭に於て開戦したり。

其チーム左の如し

第一中学校　　石川県立農学校

二木（岩井）―◎永瀬（松本）
伊藤（崎野）―◎川島（舘）
石田（崎田）―
長谷（富田）―中瀬（浜出）
○大村（渡辺）―○出村（里）
○酒井（竹中）―◎仲泉（道）
洞庭（永田）―藤原（小森）
蔵保（田中）

本日天は我校に勝利を得せしむる為か朝夕は降雨ありしもマッチ中は好天気なりき。最初敵は二木・岩井両氏出でしも我軍の松本・永瀬の敏腕には敵し難く遂にラケットを地に置きて去りき、次に敵軍は伊藤・崎野の両氏極力奮戦せしも遂に利あらずして松本・永瀬両氏に名をなさしめ優待となせり。現われ出でたる敵軍石田・崎田の両氏は我軍の新進の剛のもの川島・舘のチームには適はずして引下りたり、次に敵軍の四天王長谷・富田両氏に破らる。

次に敵軍にては大村・渡辺の二氏、我校にては中瀬・浜出の両氏なり大村氏のロピング及渡辺氏のチットプレー能く其効を奏し遂に我軍の敗となれり。代り出でたる我軍は出村・里の二氏なり後衛出村の特異なるサーブの為め流石敵軍の勇将も遂に討死せり、次に酒井・竹中の両氏出で我出村・里の二氏に向ふ。我軍奮戦せしも酒井氏の強サーブに悩まされ遂に敗を招く、我軍には参謀仲泉・道の両氏出つ之には敵し難く退場せり、次に敵軍の御大将洞庭永田の両氏は総軍の拍手喝采の裡に出で立ちたり洞庭氏の後衛永田氏の前衛能く奮戦せしも効あらずして敵軍全く敗を取りたり。我校は此所に於て名誉ある大勝利を博したり。時に午後四時なりき。

。十月十一日　第一回庭球大会

本日金沢市臥龍会によては第一回庭球大会が開かれ本校より二組の選手招待を受く。依て左の者を選手として出場せしめ

たり其勝敗左の如し。

臥龍会　農校　　両組共に吾校の屈指の強武者にして名誉ある月桂冠を戴きて帰校す。

（野沢　◎（小森
山下　　蔵保
（友田　◎（藤原
酒井　　道

。十一月一日　本日石川県立工業学校庭球大会に我校選手一組招待せらる。依て我校より左の選手を出場せしめ其勝敗左の如し。

工校　　県計農学校　　敵軍国本氏奮戦せしも前衛効を奏せずして我軍の勝利となりたり。

×××（国本　　○○○（田中
大畠　　仲泉

。小松中学校対農学校庭球試合

ここに吾が寄宿舎六星会は六月二一日庭球を以て其名を誇れる小松中学校に遠征したるにラインの高く地盤の低く其状恰も田圃の如く遂に無惨の敗を取りたり。然るに彼等は手馴しコートに依り誤りて勝を得しものを其枝量勝れりと誤解し益々吾校を蹂躙せんものと戦を挑み来れり。依而吾が校は会稽の恥を雪くべしと之を快諾し十月十八日を期し本校々庭に於て試合せり此日清朗にして風少く北国日和真の勝負を決するに又と得難き日なりき

当日勝負左の如し

小松中　　県立農学校

（山田　　◎（垣内
柳　　浜出
◎（杉本　　（永瀬
塚　　高倉

◎（福武長基　○（道泉
（室谷五十嵐　◎（小森藤原
◎（早崎森　（田中蔵保

庭球は、明治四二年校内練習のほか他校との交換試合を行なった。同年六月一八日に金沢商業学校との交歓試合につき新聞は次の記事を載せている。

一八日午前一〇時より石川県立農学校校庭にて金商対農校の庭球・野球の試合が挙行された。午前は庭球で午後は野球であった。庭球は三回ゲームで都合七回のマッチをみたが両軍一体にキープが振わないで平々凡々なスマッシングやロッピングで物足らなかった。両軍とも二組を残して昼飯後再び二組のゲームがあったが結局商軍の勝ちとなった。農軍の川島・里野組のモーションには仲々見るべきものがあった。

（「北国新聞」明治四二年六月二九日）

野球は、チーム結成が浅いながら、明治四一年頃から対外試合に参加した。その時には、武上君（明治四一年校歌作詩）の作詩で達久太郎教諭（日本体育会体操学校高等本科卒）作曲の応援歌をうたった。その攻曲は

巍峨と聳ゆる白山の　高きを己のが心とし
浩洋流るる手取川　清きを己のが性として
冴えたる腕を今ぞ示さん敵塁に　勇む六星会の野球団
フレー　フレー六星会　フレー　フレー六星会

現在の六星会という同窓会の名称は、その当時から校友会の愛称として一般に親しまれたのである。明治四一

年一〇月一七、一八の二日間、県立金沢第一中学校野球部主催の連合野球大会に参加している。この大会の参加は、六星クラブ（本校）のほかに、二中・小松中・工業・師範・赤衣クラブ・臥竜クラブ・犀川野球団などであった。また、明治四二年六月一八日、六星クラブ（改称野球部）は金沢商業学校と本校校庭において交歓野球試合を行なったが、その際の試合経過につき新聞は次のように伝えている。

野球試合は一中越田・広崎君の審判の下に挙行、商軍攻守共に振ったが、農軍のエラー続出に乗じて二回一点、三回一点と余裕のある商軍に占められたので農軍斯くてはならずと盛大なる応援に励まされて八回奮戦した。そして商軍のエラーに乗じて一点を取った。結局は五対一プラス・アルファにて農軍の敗北となった。

（「北国新聞」明治四二年六月一九日）

その際のメンバー及びトータルを挙げれば次のとおりである。

	農学校軍	
メンバー	田本瀬原島松田戸村 村松中藤川小富神出 BFFBB IRC32PCSF SL	
トータル	犠牲球	盗塁	過失球	四球	三度	安全振	球十
	○	三	五	七	一	○	

	金商軍	
メンバー	田田田保野　地岡世 羽沢西久水　宮　浅吉久 SSBBBFF SC213RCPL	
トータル	犠牲球	盗塁	過失球	四球	三度	安全振	球
	三	八	一	四	八	三	

（明治42.6.18）

明治四三年（一九一〇）六月一六日に再び本校野球部と金商チームが本校校庭で対戦し、九対六で敗北した。

端艇同好会は、毎年春秋二回、石川郡大野川で行われるボート大会に、かつて舟に親しみ腕に覚えのある連中が、土曜や日曜に四高のボートを借りて練習した成果をいかんなく発揮した。

進路状況　本校の卒業生の活躍は目ざましく各界で大活躍した。朝鮮総督府で月刊の朝鮮獣医学会報の

編集をやっておられた吉田雄次郎や台湾で同会報を編集していた武上耕一は、両総督府技師としてくつわをならべて母校の名声を同地で高めた。奉天の満鉄獣医疫研究所に今では故人であるが奥田金松が満洲畜産界の権威。卒業生で博士第一号の医学博士西田文治。大邸専売局長故前田潤吉等名をあげれば枚挙に遑がないくらい国内だけでなく海外でも大活躍した。

ここに「創立以後ノ卒業生及修了生郡市別人員表」（明治一一年から大正三年迄）・「卒業生中卒業後ノ学業」（明治一一年から四五年迄）・「卒業生徒現在ノ状況」（明治一一年から四五年迄）を図表にして示しておきたい。

二〇　創立以後ノ卒業生及修了生郡市別人員表　（明治十一年乃大正三年）

科別 ＼ 郡市別	農				獣医科			他府県	住所不明	合計	備考
	農業下等科	同講習科	同別科	耕種選科	農事講習所本科	農学校本科	小計	別科	本科	小計	
江沼			一		三	九	一三	—	九	九	
能美			一		四	六五	七〇	一	三	一四	
石川			一	五	三	一五八	一六二	—	六	六二	
河北			五		二	二八	三五	一	七	八	
羽咋			三		四	六九	七六	四	三	二六	
鹿島			七		一	三三	四一	—	一六	一六	
鳳至			三		二	五一	五六	三	三	三四	
珠洲			四		三	二六	三三	一	七	八	
金沢			二〇		一四	一九	三三	三	一八	一九	
他府県			三		三	五七	八三	三	八五	八八	
住所不明			三		一	—	三	—	—	—	
合計			七九		四九	五七	一四	一四	六〇	二九六	
備考			明治十一年ヨリ同三十年ニ至ル		明治十二年ヨリ同十九年ニ至ル	明治二十年ヨリ大正二年ニ至ル		明治廿六年ヨリ同廿九年ニ至ル	明治卅年ヨリ大正二年ニ至ル		

二一　卒業生中卒業後ノ学校

（大正元年十月現在）

年度	駒場農学校	獣医科	農科					大正三年		
			農業下等科	同講習科	別科	小計	農学校本科	農事講習所	養蚕選科	農事講習科
明治十年	二									
十一年	二									
十二年	二									
十三年	二									
十四年	二									
十五年	二									
十六年	二									
十七年	二									
十八年	二									
十九年	二									
二十年	二									
二十一年	二									
二十二年	二									
二十三年	二									
二十四年	二									
二十五年	二									
二十六年	二									
二十七年	二									
二十八年	二									
二十九年	二									
三十年	二									
三十一年	二									
三十二年	二									
三十三年	二									
三十四年	二									
三十五年	二									
三十六年	二									
三十七年	二									
三十八年	二									
三十九年	二									
四十年	二									
四十一年	二									
四十二年	二									
四十三年	二									
四十四年	二									
四十五年	二									
計	一〇									

年度	農業下等科	農科 同講習科	別科	小計	農学校本科	農事講習所	養蚕選科	農事講習科	
明治十年								一〇三	明治十六年ヨリ同三十年マテ毎年養蚕ノ季節ニ於テ開設シタル者也
十一年								一〇三	明治三十一年ヨリ同三十六年迄毎年一回各郡ニ於テ開設シタルモノナリ
十二年								一〇三	
十三年								一〇三	
十四年								一〇三	
十五年								一〇三	
十六年								一〇三	
十七年								一〇三	
十八年								一〇三	
十九年								一〇三	
二十年								一〇三	
二十一年								一〇三	
二十二年								一〇三	
二十三年								一〇三	
二十四年								一〇三	
二十五年								一〇三	
二十六年								一〇三	
二十七年								一〇三	
二十八年								一〇三	
二十九年								一〇三	
三十年								一〇三	
三十一年								一〇三	
三十二年								一〇三	
三十三年								一〇三	
三十四年								一〇三	
三十五年								一〇三	
三十六年								一〇三	
三十七年								一〇三	
三十八年								一〇三	
三十九年								一〇三	
四十年								一〇三	
四十一年								一〇三	
四十二年								一〇三	
四十三年								一〇三	
四十四年								一〇三	
四十五年								一〇三	
計								一〇三	

合計	卒業者																	
	耕地整理技術員養成所	伝染病研究所	畜牛結核研究所	去勢術習得所	水産講習所	農業教員養成所	蚕業講習所	私立農学校	高等農林学校	専門医学校	大学農学実科	高等商業学校	高等学校					
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二																		
一																		
三																		
一																		
二																		
二																		
二				一	一													
一							一											
一一			一				一											
三			一	二														
一			一															
六		一	四	一														
五三		一	四			二	一											
六三		一		五		二							一					
二三	一		一	一						一								
四三	一	一	二	一														
三五	二		二									一	一一			一		
五二	二	一	一	三														
二四				一								一一	一					二
一四	二			一						一	一							
二五	五	一		一														
六		二		四														
一二	一			二														
一一		一							一									
五四七	二五	九	八	三	一	四	五	二	一二	一三	一	一	三					

二三一　卒業生徒現在ノ状況（大正元年十一月現在）

種別＼年度	卒業生総数	在学者											就官		
		帝国大学及実科	高等学校	高等農林学校	医学専門学校	商船学校	蚕糸専門学校	園芸専門学校	計	公吏	軍人	教員	計	備考
明治十年	六	同	同	同	同	同	同	同	同	二	同	同	二	
十一年	七	同	同	同	同	同	同	同	同	一	同	同	一	
十二年	五	同	同	同	同	同	同	同	同	一	同	同	一	
十三年	三	同	同	同	同	同	同	同	同	四	同	同	四	
十四年	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
十五年	四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
十六年	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
十七年	四	同	同	同	同	同	同	同	同	一	同	同	一	
十八年	一〇	同	同	同	同	同	同	同	同	一	同	同	一	
十九年	一二	同	同	同	同	同	同	同	同	四	同	同	四	
二十年	一三	同	同	同	同	同	同	同	同	一〇	一	同	一一	
二十一年	二九	同	同	同	同	同	同	同	同	六	同	同	六	
二十二年	一八	同	同	同	同	同	同	同	同	二	同	同	二	
二十三年	三	同	同	同	同	同	同	同	同	一	同	同	一	
二十四年	七	同	同	同	同	同	同	同	同	一四	同	同	一四	
二十五年	二	同	同	同	同	同	同	同	同	二四	同	同	二四	
二十六年	三	同	同	同	同	同	同	同	同	五	同	同	五	
二十七年	四五	同	同	同	同	同	同	同	同	二一	同	同	二一	
二十八年	二三	同	同	同	同	同	同	同	同	二二	同	同	二二	
二十九年	五六	同	同	同	同	同	同	同	同	五三	同	同	五三	
三十年	五八	同	同	同	同	同	同	同	同	五三	二	三	五六	
三十一年	九三	同	同	同	同	同	同	同	同	五六	同	同	五六	
三十二年	四四	同	同	同	同	同	同	同	同	九七	同	同	九七	
三十三年	三九	同	同	同	同	同	同	同	同	三四	同	同	三四	
三十四年	二一	同	同	同	同	同	同	同	同	九八	一	同	一一	
三十五年	四三	同	同	同	同	同	同	同	同	五七	同	同	五七	
三十六年	一五	同	同	同	同	同	同	同	同	一一	一	同	一一	
三十七年	三五	同	同	同	同	同	同	同	同	一一	同	同	一一	
三十八年	三四	一	二	一	一	同	同	同	四	一〇八	同	同	一〇八	
三十九年	一八	同	同	同	同	同	同	同	同	一〇〇	同	同	一〇〇	
四十年	三元	同	同	同	同	同	同	同	同	八六	同	同	八六	
四十一年	三四	同	同	一	同	同	同	同	一	九九	一	二	九九	
四十二年	三六	同	同	同	同	同	同	同	同	八九	同	同	八九	
四十三年	三〇	同	同	同	同	同	同	同	同	五六	一	二	五六	
四十四年	二六	同	同	同	同	同	同	同	同	一五	二	一	一四	
四十五年	三三	同	同	同	同	同	同	同	同	七	同	同	七	
計	二七一	一〇	二	一	一	一	一	一	一四	二一七	一四	一四	二四五	

| 合計 | 職業者 | | |

| 合計 | 職業者 | | |

今回欧洲ノ大禍乱ハ日本国運ノ発展ニ対シ大正新時代ノ天佑ニシテ、日本国ハ直チニ挙国一致ノ団結ヲ以テ此天佑ヲ享受セザルベカラズ

と大隈首相と元老山県有朋に送ったが、この大戦乱に際し、挙国一致、財政の基礎を固め、欧米列強とならぶ世界的地位をかちとる好機であるとの井上の意図はそのまま踏襲され、政府は大正三年八月二三日、対独宣戦を布告した。

やがてわが国は中国に勢力をはり、南洋諸島をおさめ、国力を増強したが、経済的にも空前の繁栄をきたし、資本主義の飛躍的向上をもたらしたのである。

経済的には、大正三年八月、第一次世界大戦の勃発によって貿易や海運が途絶し、日本経済は一時苦境におちいった。物価の低落・工業部門の操業短縮など明治末年以来の不況は一層深刻となったが、約一年を経過した大正四年の後半から欧米交戦諸国からの大量需要によって輸出は飛躍的に増大し、未曾有の活況を呈し、いわゆる「大戦景気」の時代を迎えた。

輸出は軍需関係品が中心であったが、その他諸種の日用品などの需要も多く、わが国産業は空前の隆盛をきたした。（輸出は大正三年六億一〇〇〇万円であったが、同七年には二〇億一〇〇〇万円に急増した。）とくに工業は軽工業ばかりでなく、この大戦の影響によって造船・機械・化学・金属などの重工業も逐次整備され、発展していった。また、輸出の拡大、世界的な船舶需要の激増、ドイツ潜水艦による連合国側船舶の喪失などの条件が重なり、海上運賃が暴騰し、わが国海運業は巨額の利益をおさめた。大正三年一五九万トンであった船舶が一〇年には三二一万トンと二倍に増加し、船成金時代が出現した。

以上述べたことでわかる通り第一次世界大戦中の経済膨脹が、全く投機的で無計画に広がっていったため、ひ

とたび大戦が終結するや需要が急激に減少し、経済の発展が著しく阻害された。しかも、こうした経済の混乱に対して政府は何等積極的な施策をとらなかった。

このようにして大戦中の巨額の利益も急速になくなり、大正八年以後連年輸入超過となった。大正九年の財政恐慌は、政府の救済によって一時小康を得たが、経済不況は意外に根深く輸出不振などの慢性不況の状態は実に昭和六年まで続くのである。

こうした時代を背景としてウイルソンの提唱によって大正八年国際連盟が結成され、更に恒久平和への世界的な要望から軍備は縮少となり、軍国主義帝国主義は漸く影をひそめ、民主主義思想が謳歌されたのである。

そのデモクラシーの波にのって、政治的には普通選挙への機運が高まり、経済的には生活不安にあえぐ労働者の解放運動が推進され、教育面では自由主義教育が強く主張されてきた。

農業も資本主義の発展に伴って大きく変化してきた。「日本帝国主義の形成」（井上清著・昭和四三年一二月・岩波書店）にきわめて簡潔に要点が述べられているので次に引用しておく。

> 大戦中には農村も繭の値上りと生産高の激増を中心とする収入の増加で、好景気を謳歌した。農業経営では、一町未満とくに五反未満耕作者は漸減し、一町以上二町未満経営が増加し、二町以上の日本農業としては富農経営もいくらか増加する。養蚕・畜産・蔬菜・果実栽培では富農経営の増加はかなり目立つ。ただし、それはなお小部分であり、圧倒的多数は小経営・零細経営であるという日本農業の基本的な様相を変えるものではなかった。米の生産には脱穀作業に足踏みの脱穀機が普及し、徳川時代以来の千歯こきは姿を消し、一部には籾すりに動力機が用いられはじめ、肥料では化学肥料が中心的位置を占めるようになった。自給のための家内手工業はほとんど滅び、自給自足経済は決定的に崩壊した。

この大戦中、五反未満の零細所有者と一〇町以上の大地主はふえたが、その中間の広い層の数は減っている。

これは自作地を売って農業外に転出する農家がふえたためだろう。

農業教育の進展　大正期の教育について、文部省実業学務局編の「実業教育五十年史」の中で、

> 大正の後半期は政治的にも経済的にも社会的にも産業的にも思想的にも極めて多事多難な時代であったが、伸びんとする国家の力に随伴し、更に国運を賭して戦った大戦の経験に鑑み、教育制度に根本的改革を加へんとする欧米諸国の実例に刺激せられて我国の教育も亦その規模に於て著しき進歩を遂げた。（昭9・10「実業教育五十周年記念会誌」）

と述べてあるが、全くその通りであって、大正期は教育上の規模拡張の時代であり、また内容充実の時代でもあった。

大正六年九月二一日、勅令一五〇号を以て「臨時教育会議官制」を公布し、社会状勢の変化に即して今後の教育体制をいかにすべきかについて調査審議させた。この臨時教育会議は、内閣総理大臣の諮問事項である、小学教育・高等普通教育・大学教育・専門教育・師範教育・視学制度・女子教育・実業教育・通俗教育・学位制度等各般にわたって答申した。

そのうち実業教育について、教育制度は改める必要がないこと、国庫補助を増額して振興発達させること、行政機構を整備すること、技能に偏する弊を避けて徳育に努めること、職員の待遇を厚くすることなどを答申した。その他の答申のうち、実業教育に関係あるものは、実業専門学校の増設、公私立大学の設置、実業補習学校の拡充などであった。

この計画に基づいて、大正九年から一三年にかけて、高工一〇校・高商七校・高農五校（鳥取・三重・宇都宮・岐阜・宮崎）が創設された。また、九大・京大に農学部が設置された。

大正九年一二月一六日、勅令第五六四号を以て、「実業学校令」が改正された。その趣旨は「実業教育七十年

史」にある

大正時代におけるデモクラシー思想の普及は、やがてマルキシズム思想の流行となり、社会思想は混乱複雑化してきた。そこで思想対策が重要国策の一つとなり、従来の主知主義に加えて、徳性のかん養に努める。

ということであろう。

その第一条に「実業学校ハ実業ニ従事スル者ニ須要ナル知識技能ヲ授クルヲ以テ目的トシ兼ネテ徳性ノ涵養ニ力ムヘキモノトス」とあるのはそのことを物語っている。

「実業学校令」の改正に伴って、大正一〇年一月一五日文部省令第四号を以て、「農業学校規程」を改正した。その趣旨について同年四月、文部省実業学務局から「実業教育法令改正ノ要旨」という小冊子を刊行し、改正要旨を説明した。その要点は次の通りである。（「産業教育七十年史」による）

1　甲種農業学校・乙種農業学校の種別を廃止して融合し、農業学校の整備充実を図ったこと。
2　入学資格および修業年限を改正し、弾力性をもたせたこと。
3　学科目に改善を加え、普通科目を多くし普通学の素養に遺憾なきを期したこと。
4　学科制度を設け、教授の徹底を期したこと。
5　長期実習を認めたこと。
6　女子に関する規程を設けたこと。

以上であるが、その後大正一二年一月、文部省実業学務局は、農業学校学科課程を公表し、学科目および毎週教授時数の標準を示すとともに、翌一三年にはおもな学科目の教授要綱を制定した。

「大日本農会報第三七七号」（大正元年一一月）に掲載されている「全国に於ける甲種農学校」は七六校であ

る。ここでは北陸三県を示しておく。

府県名	学校名	生徒数 定員	生徒数 現在	学級数	校長年俸	教諭及助教諭 人員	教諭及助教諭 平均月俸	舎監 人員	舎監 平均月俸	書記 人員	書記 平均月俸	経常費（予算）円
福井	福井県立福井農林学校	二五〇	一七二	七	一、三〇〇	一四	四八	四	四	二二〇		一七、五九二
石川	石川県立農学校	三〇〇	一七九	七	一、五〇〇	一四	四五	三	六	二二〇		一五、九九一
富山	富山県立農学校	二〇〇	一三九	五	一、二〇〇	一二	四六	三	三	二一六		一四、一五九
	富山県立蚕業学校	九〇	六九	三	九〇〇	四	三四	—	—	一二三		七、〇四七

大正二年に二五三校であった農業学校（甲・乙種）は大正一〇年には三二一校、大正一五年には三三八校となった。しかし、その後は余り増加しなかった。

一方、県内においては、大正年間を通じて農学校といえば県立農学校・河北郡農蚕学校から発展した県立農蚕学校・鳥屋村立農学校の三校であったが、鳥屋村立農学校は村の財政難から大正二年一一月廃校になった。以後大正一二年まで石川県には県立農学校が一校あるのみであった。

ところで、大正中期の激しい入学試験を緩和するために中学校の新設問題が論議された。大正八年、定例県会六日目の一一月一四日、谷内議員は農学校の設備を充実し、水産学校の新設を要望するとともに、堀金松議員は石川県の農学校から上級学校へ進学する生徒が他府県生徒にくらべて劣っている理由を施設の貧困と教師数および待遇の劣悪さによるものであるとしてその善処を県当局に迫った。この質問に対して県学務課の金井課長は、「中学校は高等普通教育を施すを目的とするを以て、特別の施設を要せず、農学校は俸給減ぜりと云ふも此は整理の結果学級減じ、従って教員を減ずるに因るものにして教員その者の俸給を減ずるにはあらず、而して昨年、

生徒募集方法も改善せる結果、成績可良なり、是れ以上施設の要なし、水産学校は必要なれども手を伸ばす能はず」（「北国新聞」大正八年一一月一五日）と答弁している。事実、大正八年の農学校志願者は明治四〇年に比べて大幅に減っていることにも問題があり、ここに、当時の県当局の農業教育に対する姿勢をうかがうことができる。しかし、県立農学校は農業教育に生徒と教師が一体となり教育拡充に努力していった。

本校への志願者・合格者表

	志願者	合格者	(受験倍数)合格率
大正1	65	48	(1.35)73.84
5	87	62	(1.40)71.26
7	142	125	(1.13)88.03
8	102	85	(1.20)83.33
9	101	79	(1.28)78.22
10	169	99	(1.71)58.59
11	176	109	(1.61)61.93
12	273	152	(1.80)55.67
13	319	186	(1.72)58.31
14	190	124	(1.53)65.26
昭和1	190	128	(1.48)67.37
2	162	101	(1.60)62.35
3	186	139	(1.34)74.73
4	159	133	(1.20)13.65
5	130	112	(1.16)86.15
14	320	164	(1.95)51.25

（「石川県統計書」）

二　農学校の教育拡充

教育方針

明治三五年、小松より松任に移転した県立農学校は、全国的にその名を知られ、各地から入学希望者が絶えなかった。

教授訓育ノ要旨

一　綱領

一　教育勅語ノ聖旨ヲ奉戴スヘシ

一廉耻ヲ重ンスヘシ
一質素朴実ノ風ヲ養成スヘシ
一独立自治ノ気象ヲ養成スヘシ
一学術ヲ研磨スルト同時ニ体育ヲ重ンシ剛健ノ気風ヲ養成スヘシ
一勤労ニ堪ヘ困苦缺乏ニ打克ツヘシ
一公徳心ノ涵養ニ努メ人格ノ修養ニ勤ムヘシ

以上ハ本校ニ於ケル教授訓育ノ綱領ナルカ故ニ職員ハ一致共同常ニ此主義ヲ鼓吹シツツアリ

本校に於テハ生徒ラニ形式ニ流レス務メテ実績ヲ挙ケンコトヲ期ス故ヲ以テ不規律ニ流レス放縦ニ陥ラサル範囲内ニ於テハ生徒ノ心身ノ自由ナル発達ヲ遂ケシメ半業後実務ニ応スルノ人物ヲ養成センコトニツトメ居レリ

三　本校ニ於テハ勤労ニ堪ヘ労力ヲ惜マサルノ習慣ヲ養成センカ為メ実習ニ最モ重キヲ置キ其勤惰ヲ厳密ニ調査ス

四　本校ニ於テハ生徒ヲシテ愛校ノ念ヲ懐カシメ傍ラ自治的精神ヲ養成スルノ手段トシテ職員生徒共同ノ責任ヲ以テ校庭ノ内外ヲ各分担区域ヲ定メテ清潔ニスルコトニ務メ居レリ

五　本校ニ於テハ一学期一回適当ノ時期ヲ選ヒ学友会ヲ開催シテ知名ノ士ノ講話ヲ聴カシメ又教師生徒交互ニ学術其他実務ニ関スル講演ヲナシ数科以外ノ実際的智識ヲ博メシメンコトニツトメ居レリ

六　寄宿舎ニ於テハ毎月一回茶話会ヲ開キ種々ノ講話ヲナシ職員生徒ノ意志ノ疎通ヲ図リ成ルヘク家庭的団欒ノ和楽ニ遠サカラシメンコトヲ理想トセリ

七　本校ニ於テハ教師ハ濫リニ障壁ヲ設ケテ生徒ニ接スル如キ事ヲナキス務メテ融和ヲ図リ精神的共同一致ノ美風ヲ養成センコトヲ目的トス

八　本校ニ於テハ自然ト親ミ其趣味ヲ高尚ナラシメン為ニ見本園其他ニ於テ成ルヘク各種ノ作物及花卉ヲ栽培シ又家畜ヲ愛撫スルノ習慣ヲ養成センカ為ニ飼料生草ノ刈入畜類ノ手入等ニ従事セシメツヽアリ

九　本校ニハ農科医科ヲ置ク其教科目ハ左ノ如シ

農　科　修身・読書作文・数学・物理・化学・動物・植物・土壌肥料・作物・畜産・養蚕・林学・気候・地理歴史・英語・経済・法制・体操・実習

獣医科　修身・読書作文・数学・物理・化学・動物・植物・解剖及組織学・生理・薬物及調剤・蹄鉄学・内科・外科・眼科・産科・死体解剖・畜産・寄生動物学・衛生学・獣医警察法・法制経済・地理歴史・英語・体操・実習

農科実習ハ合理的ニ当地方ニ適切ナル諸般ノ作業ヲ練習セシメ兼テ勤労ニ服スルノ習慣ヲ養ヒ且ツ農業経営ノ途ヲ知得セシムルコトヲ目的トシ耕種・園芸・養畜・林業・病虫予防駆除法・農具ノ使用法・肥料ノ調製鑑査・農産製造・農産物品評・農場管理等ヲ実地ニ行ハシム

獣医科実習ハ蹄鉄及削蹄・解剖・外科・手術・診断治療・調剤・家畜管理・乳肉検査・畜産製造・細菌培養及鏡検等ヲ実地ニ行ハシム

尚校外ニ於テ時宜ニヨリ県立農事試験場第九師団其他個人経営ニ依ル実業ニ於テ実地見学ヲナサシム（「石川県立農学校一覧」第七）

右記は教師が生徒を良い方向に育てる上のかなめについて記したものであるが、教育はなかなか厳しく「授業中は真剣に勉学せよ、実習中真摯な態度で終始せよ」という具合いであった。公徳を重んじ人格の修養にまい進すること、すなわち人を作ることに重きを置く校風であった。先生と生徒は、教え習うというより、人格と人格の触れあいによるこん然一体の教育で農法伝授という感じがピッタリするふうであった。

質実剛健、不言実行を旨とし、意志はあくまでも強く、どんな苦難にでも、耐えることができる忍耐力を養ったのである。学校側は生徒に対して信賞必罰の精神でのぞみ、どんなささいなことでも、あやふやにすることはなかった。

山中良治校長の訓話　明治四〇年七月から本校校長であった山中良治先生の訓話に

一、精農は草を見ずして草をとる

一、中農は草を見て草をとる

一、惰農は草を見て草をとらず

といわれた。「田畑の草をとる」という角度から、結果だけ見るのであれば差別はつかないのであるが、篤農精神の有無からよくよく吟味すればするほど深い味わいのある処世訓である。この処世訓が、当時の農業経営のすべてにかかる要点であったということを物語っているといってよいであろう。

農科と獣医科

大正六年獣医科が廃止されて農科だけとなり、より地域的結びつきが多くなった。これは、明治三三年の中学校令、実業学校令、および高等女学校令の制定により、全国各地に農学校が設立され、実業教育の重視が叫ばれたからでもあった。生徒は、県内の比較的裕福な農家の子弟が多く入学するようになった。本校の設備は

校舎（二階建）	二一三坪二合五勺	病畜舎	二二坪五〇		
内		伝染病厩舎	二三坪五〇		
普通教室	五六坪	調剤及動物実験室	二六坪		
理化教室	二〇坪	燻豚室	三坪		
器械室	一二坪	収納舎及農具舎	六八坪		
図書標本室	一四坪	其他	八〇坪		
其他	一一一・二五				
校舎附属建物（平屋）	六八三坪五勺	寄宿舎及付属建物	四七二坪		
内		内			
		寄宿舎（二階建）	二五二坪		

講堂（附属建物含む）		付属建物（平屋建）	
雨天体操場	八四坪	内	二三〇坪
農科実習室	四六坪	食堂	六七坪五〇
解剖室	六九坪	炊事浴室物置	五九坪七五
養蚕室	七五坪	病室	三三坪
鶏豚舎	二九坪	其他	六〇坪七五
厩舎	五四坪		
敷地及実習地其他	一四八五八坪	雑書	九八
内			
敷地	四三七七坪	機械	四二九四点
実習地	七六五〇坪	内	
内		農具	一二八二
田地	二九〇〇坪	蚕具	一三六九
畑地	四七五〇坪	獣医機具	七三一
其他	二四三二坪	其他	九一二
		家畜	
図書	二九一四冊	内	
内		牝牛	二頭
農書	五〇九	豚	二頭
獣医書	二五七	鶏	八羽
普通書	七四六	馬・山羊	馬二頭・山羊四頭

の通りであるが、その設備の中にあって、農業実習に重点を置いて学科よりも実習を重んじたのであった。農科

実習規定は

第一条　実習ハ合理的ニ当地ニ適切ナル諸般ノ作業ヲ練習セシメ兼テ勤務ニ服スル習慣ヲ養ヒ且ツ農業経営ノ途ヲ知得セシムルヲ以テ目的トス

第二条　実習科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　植物ノ栽培
普通作物類・特用作物類・蔬菜類・果樹類・牧草類・林木類ノ栽培及ヒ接木法等

二　作物ノ試験
種類・品質・収穫・肥料ニ関スル試験

三　病虫害駆除予防及ヒ昆虫飼育
作物ニ発生スル主ナル病虫害ノ駆除予防法益虫及害虫ノ飼育法並ニ経過習性調査等

四　農具ノ使用
各種農具ノ使用法及ヒ牛馬ノ使役法

五　肥料調製
肥料調製及ヒ鑑査法

六　養　蚕
飼育法・蚕種製造及ヒ検査法等

七　家畜ノ飼養
牛馬羊豚其他家禽蜜蜂等ノ管理法

八　農産物製造
地方農家ノ副業トナスヘキ主ナル農産加工品ノ製造法

九　農産物品評
農産物ニ就キ一般ノ審査鑑定法

十　農場ノ管理

第三条　実習方法ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　共同実習　二　組合実習　三　単独実習

第四条　共同実習ハ生徒共同シテ教員及管理者ノ指揮ニヨリ耕耘・整地・播種・中耕・施肥・除草・排水・灌漑・収穫・調製並ニ肥料調製等ニ関スル作業ニ従事セシムルモノニシテ各学年生徒ニ課ス

第五条　組合実習ハ生徒ヲ数組ニ分チ各組ニ一定ノ地所ヲ与ヘ其設計ニ基キ作物ノ栽培、収支計算等独立経営ヲナサシムルモノニシテ第二学年後期生徒ヨリ第三学年生徒ニ課ス

第六条　単独実習ハ生徒各自ニ一定ノ地所ヲ与ヘ各其設計ニ基キ作物ノ栽培収支計算等独立経営ヲナサシムルモノニシテ第二学年後期生徒ヨリ第三学年生徒ニ課ス

第七条　組合実習及単独実習ハ予メ作付設計書ヲ作リ主任教員ニ差出シ其検閲ヲ受ケ作業終リタルトキハ直チニ其成績及ヒ収支計算表ヲ作リ之ヲ主任教員ニ報告スルモノトス

第八条　組合実習ハ各組毎ニ組合員ノ選挙ヲ以テ組長及副組長各一名ヲ置キ主任教員ノ承諾ヲ受クルモノトス組合ハ其組作業上一切ノ責ニ任シ副組長ハ組長ヲ補佐シテ其責ヲ全フセシムルモノトス

第九条　組合実習ノ各組長並ニ単独実習ノ各生徒ハ教員ヨリ作業簿ヲ受ケ必要ナル事項ヲ記入シ教員ノ命アル毎ニ其検閲ニ供スルモノトス

第十条　第三学年生徒ハ教員ノ命ヲ受ケツヽ若干名ツヽ順次交代ヲ以テ共同実習ノ作業準備並ニ其管理及肥料、農具、器具等ノ取締ニ任シ兼テ農場日誌ヲ整頓スルモノトス

第十一条　農具及其他ノ器具ノ使用又ハ牛馬ノ使役ハ丁寧ヲ旨トシ用済後ハ必ス掃除シ管理者ニ引渡スヘシ

第十二条　実習繁多ナルカ其他必要アルトキハ受持教員協議ノ上校長ノ許可ヲ得他ノ学科時間ヲ実習ニ換ヘ又ハ休日ト雖モ実習ニ従事セシムルコトアルヘシ

第十三条　実地指導上特ニ必要アルトキハ教員引率シテ旅行セシムルコトアルヘシ

第十四条　本則ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

獣医科実習規定は

第一条　実習ハ生徒ヲシテ学術ヲ実地ニ練習セシムルヲ目的トス

第二条　実習科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

一　蹄鉄及削蹄
　蹄ノ解剖・肢勢及蹄形ノ鑑定・削蹄・錬鉄・製鉄・装鉄等
二　健体解剖
　運動器肉腕・循環器及神経系統等勢解剖
三　病体解剖
　斃死動物ノ解剖及顕微鏡的検査等
四　外科手術
　動物保定法・手術準備・痲酔薬応用法・局所若ハ一般手術等
五　病畜診察及治療救護
　病畜診察・治療・救護・衛生及病院監理等
六　調　剤
　薬品取締法・鑑別・製薬・製剤及処方等
七　家畜管理
　家畜家禽等ノ飼養・蕃殖及畜舎監理等
八　畜産製造
　煉乳・牛酪・乾酪・燻腿・燻肉製造等
九　乳肉検査
　牛乳ノ理化学的検査・屠肉及製肉検査鑑識・健体検査等
十　細菌培養及鏡検
　純粋培養及顕微境下ノ鑑識等

第三条　第三学年ハ一般実習ノ外特ニ病院ノ当宿直ニ任スルモノトス

第四条　病畜ノ診察及治療救護其他必要ノ場合ニ在リテハ第一・第二学年生ヲシテ第三学年生ヲ補助セシムルコトアルヘシ

第五条　時宜ニ依リ一学年ヲ数組ニ分チ交替ヲ以テ実習ヲ課スルコトアルヘシ　前条ノ場合ニ在リテハ組毎ニ組長一名ヲ置キ主任教員之ヲ指命ス

第六条　生徒ハ各自ニ手帳ヲ携帯シ実習ニ関スル事項ヲ之ニ記入シ教員ノ求メニ応シ其検閲ニ供スヘシ

第七条　病院其他実習場ハ総テ常ニ清潔ヲ旨トシ時々生徒ヲシテ之レカ掃除ニ従事セシムルコトアルヘシ

第八条　器具器械薬品等ハ丁寧ニ使用シ苟モ汚染破損スヘカラサルハ勿論使用後ハ必ス之ヲ整理シ管理者ノ検閲ヲ受クヘシ

第九条　時宜ニ依リ他ノ学科時間ヲ以テ実習ニ換ヘ又ハ休日ニ於テ実習ヲ課スルコトアルヘシ

第十条　教務上支障ナキ場合ニ在リテハ教員ノ指導ニ依リ往診及治療ニ従事セシメ又ハ調査見学等ノ為メ出張セシムルコトアルヘシ

第十一条　本則施行ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

以上、実習を通して、生徒たちは勤労の喜びを知り、晴耕雨読の精神を学んだのであった。精神的訓育もさることながら、先進地のすぐれた技術、知識も、あまねく広く吸収していた。当時は、北陸地方としては珍しかった果樹栽培も、リンゴ、ナシ、夏ミカン、モモ、サクランボ、ブドウの多方面にわたっている。なかでも、夏ミカンのように枝もしおれるほど実を結び、町の人たちや見学者たちを驚嘆させた。

蔬菜においても、技術の難かしいトマト栽培に成功し、当時、高級野菜であった玉ネギ、キャベツ、結球白菜、イチゴ等をも生産していた。また、ハム、ソーセージ、チーズ、バターはもちろんのこと、養蜂から養鯉まで手を広げていた。

職員も常に、鋭意研究を怠らず、視察旅行等によって、近畿方面の農事試験場、高等農林、篤農家等を見学し



キャベツ畑

た。

農場の作業は、管理室の鐘の合図で、所定の作業衣を着て集合し、精魂を打ちこんでやったものである。この汗の農作業で、勤労の精神が培かわれていったのである。

獣医科の生徒は、卒業と同時に獣医の資格を得られる特典があったので、全国各地から入学した。とくに馬産地出身者が多く、卒業後は開業を目的としていた。地方で、すでに仮免許をもって、実務に服していた年輩者もいたくらいである。

このように、獣医科は全国的に数少ない関係で、全国から集まり年齢差も大きかった。その学習内容も高く、高度な技術を習得しなければならなかった。

したがって、中等学校というより、専門学校、大学という感じであった。町の人たちは、松任大学と呼んだのも無理もないことであった。

獣医科には、常に、病鳥や病犬がもたらされ、農場の一角にある伝染病舎へ入院しているものもあった。時には、大きな図体の牛や馬を解剖する白衣の生徒たちを見ると、どうしても中等学校と見られなかった。

解剖された馬は、骨も肉も細かく刻んで、厩舎にぶちこんで肥料にしたものである。雨のそぼふる風のない暖かい晩など、火の玉が出たといって騒いだものである。

この明治二二年（一八八九）より続いた伝統ある獣医科も、各地に専門学校ができるにおよんで、獣医師免許

には専門学校以上の学力がいることになり、また、施設、設備の老朽化が目立ち、ついに、石川県議会は経費がかかりすぎるという理由で、大正六年（一九一七）廃止にふみきってしまった。

三　六星の伝統とその栄光

校長と名物先生

大正年間には六人の校長が着任している。本校の伝統ある校風を築く礎となった校長である。



長　治
校　良
代　中
三　山

明治元年一二月二二日、兵庫県神戸市に生まる。明治一五年七月、東京駒場農学校普通農学科卒業。明治一八年岐阜県華陽学校・岐阜師範学校・兵庫県尋常中学校・佐賀県尋常師範学校各教諭、明治二四年一一月、徳島県技師、同二八年一月、福島県農事巡回教師・山形県農事試験場長・岡山県技師・岡山県農事講習所長・同三二年四月、岡山県農学校長・山口県農事試験場長・宮崎農事講習所長・同三九年五月、愛知県農務課農業技師を経て、明治四〇年七月、石川県立農学校長となる。その後、大正二年四月、群馬県立蚕糸学校長に転任。

四月一〇日に、群馬県立蚕糸学校長兼教諭に転任の辞令が発令され、一二日、山中校長の告別式が行われ続いて農獣三年生徒主催による送別茶話会がにぎやかに開かれた。山中校長を送るにあたって、一生徒は「草木鬱倉として生の充実を聞ける学年の初めに当り、惜しい哉慈愛深き前校長山中先生は本校を去られて遠く群馬県立蚕糸学校長に転任せらる。先生は本校に赴任せられてより玆に六星霜、熱誠至らざるなく、生徒を教導せらるるや懇篤極まれり。学友会の隆盛亦先生に負ふ所なり。然るに今や本校を去らる、生等の遺憾何物か之れに如かん。六ケ年の長月間吾等を子の如く愛撫せられたるその俤、その言葉さえも今猶は心底にあり。忘れんと欲して忘るる能

はず。生徒等深く先生の去られたるを惜むと共に、其教訓を肝に銘し、智能を啓発し徳性を涵養し、刻苦勉励して鴻恩の万一に報いん事を期す。終りに臨み謹んで先生の健康を祈る。」（「学友会報」第二二号）と述べている。



長　校　代　四
郎　二　林　林　楢

明治八年八月一九日、埼玉県大里郡玉井村に生まる。明治三一年、第五高等学校、同三四年、東京帝国大学農科大学農芸化学科卒業。埼玉県農事試験場技師・農事試験場長、明治三六年四月、埼玉県熊谷農学校化学科教授、同四三年一一月、兵庫県農事試験場長を経て、大正二年五月、石川県立農学校長となる。大正五年一〇月、高知県立農林学校長に転任。

ところで、五月八日の若葉の繁れるころ、二〇〇の六星健児は樽林新校長を迎えて一同歓喜の眉を開いた。一生徒は「仄かに聞く、先生は明治三四年農科大学農芸科を卒業せられ、爾来兵庫県の農事試験場に在りて、農界の為に尽瘁せられし事少からず、夙に斯界有為の良技師を以て目せられ其の明石在任中には、畏くも故有栖川宮殿下の御懇命を蒙られしこと屢々ありきとぞ。抑々先生識見高邁にして人格亦優良、不偏不党にして江海の量ありと云ふ。我校の前途、洋々として慶す可く賀す可きに非ずや。惟ふに現下我校の状態は、卓抜なる人材を待つこと急なるものありて存す。されば我等は、此良校長の膝下にありて、懇篤なる薫陶を受け、我校の名声を発揚するの遠きに非ざるを知る。我等は誓って堅忍不抜の精力を以て事に当り、最善の努力を致し、以て我校風を振起せむことを期す。新校長を迎ふるに際し、聊か所感を述ぶと云爾。」（「学友会会報」第二二号）と述べている。これに対し、樽林新校長は就任にあたって、「余、今玆任に本校に莅む。顧るに本校は其創立の旧き農界に多大の効果を遺せることは、実に幾多農学校中に於て、巍然頭角を表はせるにても知らるるなり。従って多数先輩の校長として本校に莅み、極力改善に尽され、各自表彰すへき功績を遺して、本校の為に光輝を副へられしこ

とは感謝に堪へざるところなり。而して今や余の不敏なる、其継承者となり、任に経営に当る。精励尽瘁、敢て多数先輩を辱むる無からむことを欲するも、独力独歩の克くすへきにあらず。庶幾くは、全校一致、協力戮力、自今益々善良なる校風を振起し、校紀を廓清し、益々我校名をして斯界に隆々たらしめんことを。其之を致すの道奈何。忠実なれ勉強なれ労働を励めよ、公徳を重んぜよ、廉耻を知れよ。之等の徳目は、余等終生従事して、諸子と共に須らく修養を積むべきなり。是を就任の辞となす。」と述べ、抱負を語っている。おとなしく無口な人で、非常にまじめな人柄であり、生徒からの信望が厚かった。大正二年から大正五年一〇月の在職中は、一生懸命農学校の拡充に努力され、別れにあたって、「今より後益々駑駘に鞭ち各位と共に本校改善の実を挙げんことを期待せしに図らざりき茲に各位と遠く別れざるの運命に会す亦奈何ともしがたきなり。されど余が本校を思ふの赤誠は長へに渝るものにあらず今後益々弥栄えに栄えよと祈るものなり。各位に対しても在職と否とに依て其交情を二三にするものに非ず、各位亦別後永く交誼を維持しせめては朶雲に依て消息を将来せられんことを望む時正に新秋、風颯々、露冷々、鴻雁北に渡るの時、余は南に去らんとす。多年綿々の情豈断腸の思なからんや。会者定離は人生の常と知りながら噫々惆悵何ぞ堪へん。別るるに臨み一意各位の健康と清福とを冀ふ」と語りながら、一〇月二日の官報に目を点じつつ、寂しく高知県立農林学校へと向かわれた。



高橋代校長　昌五

文久二年一月二五日、高知県高知市に生まる。明治一三年東京駒場農学校農学科を卒業。農商務省地質調査所、明治一八年四月、佐賀県中学校教諭、明治二〇年五月、新潟県農学校教頭、同二五年、南洋濠州及びニウ・ヘブリジース群島探検、同二八年五月、陸軍省占領地総督部・台湾総督府民政局技師・静岡県農会顧問、明治四三年、鳥取県農事試験場長、同四四年、岐阜県農会技師、大正三年九月、高知県立農林学校長を経て、大正五年一〇月、石川県立農学校長となる。

秋の深まりを感じる一〇月一八日、待ちに待った新校長高橋先生が着任された。先生は、母が大病なので、その看病のため半月余り着任がおくれた。一生徒のH君は「我等が先生を翹望する愛情は着任のおくれたるだけそれだけ一層熱度を高めたり。我等は停車場に出迎えてその風貌と謦咳とに接し、慈父に見えたる心地して先づ安堵の思をなせり。翌日新任式は行なわれたり。明晰にして底力ある音声によりて伝へらるる先生の本校に対する抱負の一端と之を着々実行せんとする熱誠とは我等に深き印象を與へたり。仄に聞く。先生は駒場農学校を明治一三年に卒業せられし我国農学界の先輩たり。従来農村経営及び殖民の研究に鞅掌せられ、之が為に台湾朝鮮支那南洋等に赴かれしことあり。先生が農業教育の衝に当られし経験は比較的少しと雖其の之に対する遠天なる理想と抱負とは多年の考案と各地に於ける経験とを重ねて醸成せられたるものにして洵に貴重なる精神上の一大産物たり。先生やこの産物を携へて本校に臨み給ふ。本校の面目必ずや先生を俟って一新せんこと疑を容れず。かかる機運に際会しかかる良師を戴く我等の幸福そも幾許ぞや。我等は須く改むべきは之を改め正すべきは之を正すに吝なるなく、大に発憤して校風の振作に努め以て先生の大志に副はんことを期せざるべからず。」と述べた。これに対して、高橋校長は、「我が石川県立農学校は今を距ること四〇有余年の昔、明治九年七月金沢区方勧業場に於て県下の農業篤志者を招集し農業を講じたるに淵源し続て石川県農事講習所となり同一九年四月能登の火打谷に移され石川県農学校と改称せられしより以来、連綿として農業教育を行ひ大正五年春季に至るまでに既に農科に於て七三五名、獣医科に於て三一五名、計一、〇五〇名の卒業生を出し、而も其の内他府県人一七八名を養成し、夙に県下唯一の農業教育機関として県内に重きを為したるのみならず、全国を通じて最も古く且つ功績顕著なる学校の一として名声を博したるの事実は敢えて絮説するを俟たず。不肖誤って乏を此の名誉ある学校の職員に承けたるは身上の光栄たり。」の就任の言葉を吐いて本校の教育に努力された。



長　吉代宅鏗六三

慶応二年一一月九日、新潟県岩船郡村上本町に生まる。明治二五年七月一〇日、東京帝国大学農科大学農芸化学科を卒業。農商務省地質局土性課雇拝命、福岡県勧業試験場技手・長野県小県郡小県蚕業学校教諭・新潟県農事試験場技師、明治三三年、茨城県農学校長、明治三八年、宮城県立農学校長、同四二年、京都府立農林学校長、同四四年、朝鮮総督府勧業模範場技師平壌支場長・平壌公立農学校長を経て、大正六年一〇月、石川県立農学校教授、大正七年、石川県立農学校長となる。同一〇年六月・休職。

三宅先生は、温厚な人格者で生徒たちから尊敬されていた。特に、剣道に興味と熱意をもって、暇をみては生徒と共に稽古に励み、剣道大会や他校選手との交歓試合には必ず出席された。また、書道について造詣深く、能筆の人であった。常に生徒を愛し、この指導に熱意をもって当たり、卒業生との歓談には愉快に酒杯を交し人間味溢れる先生であった。先生の養嗣子三宅瑞穂は、書画を愛好し、囲碁、剣道をたしなんだという。農業学校の使命を省みて一層土の教育の尊重すべき所以を鼓吹し、「行動は人間が教え且慰籍するものなり」を信条とした。



長　雄校　文代　田七　富

明治一九年六月一〇日、宮城県仙台市東八番町に生まる。大正二年、東京帝国大学農科大学農芸化学科卒業。大分県立農学校教諭、大正五年、群馬県立勢多農林学校教諭・長野県立小県蚕業学校教諭、大正七年、石川県立農学校教諭を経て、大正一〇年六月、石川県立農学校長兼石川県実業補習学校教員養成所長となる。大正一二年一一月、鹿児島県立鹿屋農学校長に転任。主な著書に「農業教科書農業経営」（昭和15）がある。

化学が専門の農学士で、容姿端正の紳士であった。なかなかの雄弁家で頭脳明晰、いわゆる秀才で目から鼻へ抜けるというタイプであった。人の心を読みとるのが早く、金縁眼鏡の奥から、けいけいたる鋭い眼光を放って

いた。文学も音楽も愛好された文化人で、農村文化論をとなえ、各地で農村文化講演会が持たれたものであった。氏についてはおもしろいエピソードがある。当時、紫色に六星の立派な校旗はあったが、かんじんの校歌がなかった。それで、大正一一年の学生相撲大会のとき、前年度に授与された優勝旗の返還式に校歌を合唱することになったがないので大弱りとなった。そのうち期日もせまり、どうすることもできなくなった。そこで富田校長は、島崎藤村の詩集「労働雑詠」からタネを借り一晩で作詩したのが、かの「山紫きに……」である。作曲は、当時盛んに愛唱された一高の「あゝ玉杯に……」を拝借し、その場をきり抜けたわけであった。



八代校長　竹内秀雄

明治一五年六月二日、愛媛県温泉郡道後湯之町に生まる。明治三八年七月、第六高等学校卒業。同四一年七月、東京帝国大学農科大学農学科卒業。農商務省養業講習所技手・福岡県立福岡農学校教諭、大正六年、福岡県立田川農林学校長を経て、大正一二年一二月、石川県立農学校長となる。続いて一五年四月、石川県立松任農学校初代校長となる。昭和五年、福島県立蚕業学校長に転任。

温厚な人柄で、大きな声でしかったことすらなかった。円満・福徳ということばがよくあてはまり、いわゆる君子であった。卒業生にはいつも「諸君らは松任山を築け、大きな松任山を築いていけ」といわれていた。

大正期における名物先生

本校は伝統ある校風にふさわしく、自他ともに許す名物先生が多かった。自分の著書をテキストとして授業する教師や高度の教材を十分マスターして教壇に立つ人が多かったので、概して生徒も教師を信頼して真剣に授業をうけた。大正期の教師で、とくに卒業生の印象に強く残っている何人かを紹介してみる。

松岡与太郎先生　あだ名は、名前からきた「ヨタ」で実にまじめな徳行の師であった。いつも農場で黙々と働

かれ、授業中でも作業服のまま、また、はだしのままで教壇に立たれ、尊い姿で全校生徒に無言の感化を与えられた。その教訓も「人のいやがることを進んでやれ」「土や作物の声が聞えにゃだめじゃ」「一すみを照らす人物になれ」という滋味豊かな教訓をもっておられた。

高畠　信二先生　国漢の高畠先生は「カンヌシ先生」と呼ばれ、松任金劔神社の宮司であった。いつも、高価なアルパカの背広を着こみ、美しい声で「古事記」や「万葉集」を講義され、文学方面に興味を持った生徒も少なくない。

西崎　茂先生　化学を担当し愛称「アボ」。いつも百雷一時に落ちるような破れ声で授業を進められた。エチル、メチルまではわかるが、後は、ウァーウァー。生徒は、一様に酔ったようになり、ポカンとしているうちに授業が終るといった調子であった。

中野　義隆先生　河北郡木越村（金沢市木越町）の生まれで、石川県立農学校、鹿児島高等農林学校在学中から農産加工の必要性を感じての研究をすすめていた。中野先生の蓮根に関する造詣はきわめて深く、すでに農学校二年生の時「石川県石川郡河北郡ニ於ケル蓮根栽培調査報告」を発表している。農学校に農産加工室を設置する際の面白い話がある。農学校に奉職した氏の念願は農産加工室を設置することであった。そこで当時の校長を通じて知事に懇願したところ断わられ、そこで氏はかねて知遇を得ていた内務大臣にこの話を持ちこみ、たまたま、小松にきていた大臣と面接し、同席の知事に「中野があんなにほしがっているのだからつくってやれ」の一声で四日目に許可がでて、さすがの校長も驚いたという。こうして五〇〇円の補助金で建物、機械設備一切を完了し、つぎつぎと研究が成功し商品化されていった。あだ名を「ダック」とつけられ、荒木与逸先生とともに本校の大先輩である。果樹や農産加工を担当され、講義の明快なことは随一であった。ウグイスのような涼しい声

で、水の流れるような授業ぶりは、なかなかまねのできるものではなかった。

荒木　与逸先生　あだ名を「サボ」とつけられ、やはり本校出身の大先輩である。農学関係を担当し、終始、温情春風のごとく後輩を導かれた。その教育ぶりは、学問知識の切り売りでなく、心情のこもった授業で、実にわかりやすく説かれたものであった。

手塚　為吉先生　博物（動物・植物・生理衛生）の担当で小柄な方で、「オッサン」の愛称があり生徒から信頼されていた。授業の時に小さい銀縁眼鏡が鼻の先端からずり落ちはしないかと、ひそかに気をもんだものだ。それに眼鏡の掛けはずしの忙しいこと、これも七くせの内か。教科については深い研究のご苦心が払われているようにうかがわれた。年中行事の一つとして夏休みに入ると、徳光の海岸で水泳が始まる。水泳部長としての先生は、終日生徒達と行動をともにされ、特に遠泳テストの日ともなれば先生みずから小舟のデッキに立って短いシャツ一着のゆるふん姿で竿を杖に白い帽子の長い列に向って「ヨーイヤ、コリャー」と励ましの掛声、生徒の列から一斉に「ヨーイ、コラー」と返す。いつしか遠泳の長い列は遠く岸を離れて青海原の沖へ出ていった。

浜岡　賢了先生　畜産担当で古い本校の先輩の先生である。いがぐり頭の大入道、がっちりした容貌体格、ゆっくりとした口調で納得のいくまで教えられた。胆力のある豪傑らしい先生でなまけると「君達は勉強が足りんぞー。俺の盛岡高農の学生時代にはなあー、級友から松任の県立農学校出身だと言うと皆一目おいて敬服してくれたものだぞー」と、低声であったが力強い調子でさとされた。ちょっとこわい反面、なかなか人情厚く多くの生徒に敬慕されていた。

田中庫十郎先生　養蚕の担当で、長身青髯、顎の角張った顔が印象的、授業はすこぶるユーモアに富み、教室から爆笑がしきりに起こる。それでいて要点はきちんと叩き込まれ、質問はないか？　なければこちらから逆に

連発されるのでちょっとの油断も許されなかった。

三浦長一郎先生　園芸の担当で、多年の体験の裏付けのあるすばらしいものであったが、それにも増して印象の深いのは、その授業を通しての社会学であった。かっての教え子だった若い卒業生達の失敗談や怪我の功名、さては機智で急場を突破した物語など興味津々で大いに啓蒙されたものである。この先生について深い感銘を受けた忘れ得ぬ思い出がある。ある秋の一日、本館二階の中央あたりの教室での先生得意の授業最中であった。廊下をあわただしく駈け来る足音が止むと見るや、いきなり入口の戸が引きあけられた。年寄りの小使いさんだ。「先生！　お嬢さんが高熱で大変です。早く帰って……」とどもりながら注進に来た。一同、はっと息をのんだが次の瞬間、「今は授業中だ！　医者にすぐ見せるように言ってくれ」と先生少しも騒がず静かに再び授業を続けられた。たしか先生には一粒種のまだ幼いお嬢さんの急病である。先生も人の親としてどんなにつらい思いだったろうに、でも当時は公のためには勝手な私事は許されなかった時代でもあったが、日頃から公私の区別を判然とする先生の態度はあまりにも立派で高潔な御人格が躍如として若い私達の心に強い感銘を与えた。

生徒の気質　石川県立農学校は、全国でもまれにみる古い歴史と輝かしい伝統をもった名声の高い学校であったので、生徒の気風も誇り高いものがあった。「われら六星健児なり」と、意気まことに盛んなものがあった。デモクラシーの風潮の影響で、戦前のうちでは最も楽しい学校生活を送ったようである。もっとも今日と異なり、長髪は認められず、男女別学であり、映画館や飲食店への出入りも禁じられていたが、それでもスポーツや文学に自分の才能を十分に発揮して、充実した青春の日々を送った。

生徒は総体的にまじめで、質実剛健の気風は全校にあふれ、とくに実習ではかげひなたなく働いた。当時の生徒層の構成は、他の中等学校には見られないような珍しい状態であった。自宅で一、二年農業をやっ

大正12年度　県下中学校の規模

校　名	定　員	敷地(坪)	1人当り	運動場(坪)	1人当り
師範校	360	18,683	51.9	3,000	8.3
農学校	650	16,316	25.1	1,581	2.4
工業校	400	7,683	19.2	1,041	2.6
小松中	750	11,113	14.8	3,354	4.5
二　中	750	7,307	9.7	1,000	1.3
七尾中	750	6,636	8.8	1,433	1.9
一　中	1,000	8,657	8.7	2,930	2.9
七尾商	500	3,398	6.8	1,655	3.3
金沢商	750	2,771	3.7	800	1.1

（大正12.11.19　北国新聞）

てから入学したとか、代用教員をしていたのが、教え子といっしょに入学したというようなものもある。また、結婚しているのや、在学中に徴兵検査に合格しているのや、在学中に徴兵検査に合格して途中で入営するという、今日では想像もつかないような実例もあった。年長者は落ち着いていて社会常識も豊富で、年少者から父のような感じを受けていた。また、上級生と下級生との間は上下の関係というよりも兄弟のような愛情が流れ、厳しいうちにも暖かく結ばれていたのであった。

しかし、一部の生徒間には、質実剛健のあまり鉄拳制裁なるものが流行した。下級生は上級生に校外で会ったときは、脱帽敬礼することが強要された。規定よりはずれた服装のもの、生意気なもの、ハイカラなもの、態度の悪いものなどが上級生に呼び出され、校風刷新だといって上級生から鉄拳制裁をふるまわれたものも多い。

反面にはユーモラスなこともあった。生徒たちの間でヒゲをはやすことが流行した。ヒゲをはやし校舎内外を活歩した姿が見られた。生徒たちは、このヒゲに免じて、悪いことはしないという心を持っていたようである。実習を重んじはしたが、学科をおろそかにしたわけではない。いつもよく勉強した。

級長、副級長とも成績順で命じられ、座席も成績順で決められた。そのため、試験の点数の良し悪しによって教壇から遠くなったり、近くなったりしたので、試験が始まるとだれもがネジリはち巻きで猛勉強して席次を争

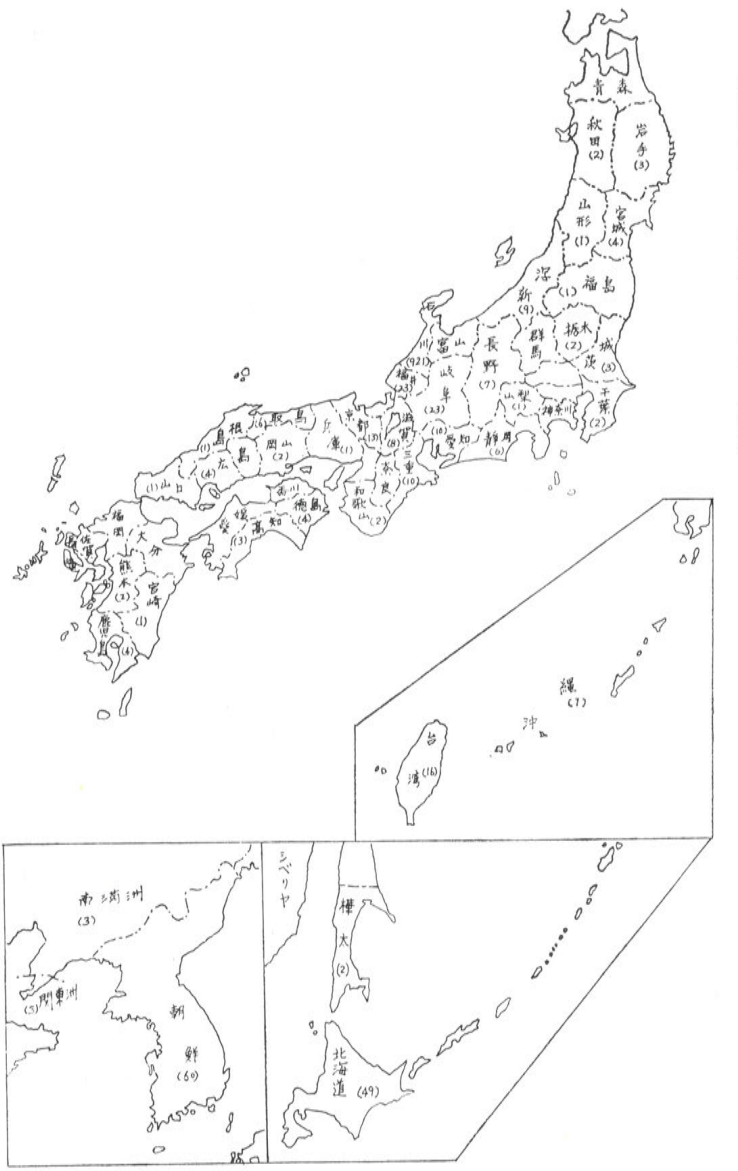
ったものであった。しかし、中には赤点をつけられ落第、退学していったものも多くあった。そのため、試験時になると体重がぐっと目に見えて減少したものであった。

卒業生の進路

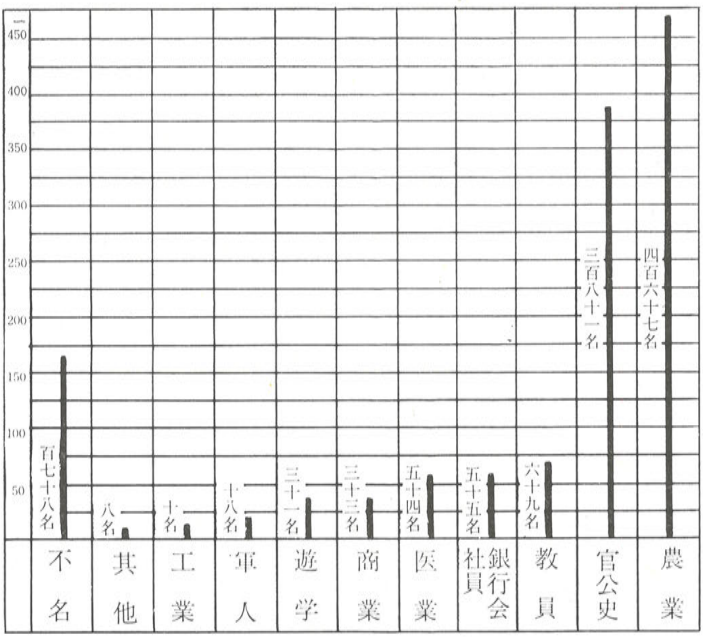
卒業生たちは本校に学んだことを常に誇りとし、六星精神をもって幾多の難関を克服し、その進路を開拓していったのである。就職の世話は、校長自らあたり、自分で東奔西走して開拓して来た就職先を卒業生一人一人に紹介して受験させた。就職先は、今日と同様、地元、県外さまざまであったが、当時は「北進か南進か」という論議される海外発展の時期であったから、卒業生の中にも海外に就職を希望する者が多くいた。ともあれ、本校は卒業生の生涯の基礎となり魂の故郷となっていったのである。順境にあるときも、また逆境にあるときもこの六星魂が無言の激励と慰撫とを与えてくれたのであった。

前学年半退学者
（大正2・3年）

度年	科別	家事の都合	病気	退学を命じた者	転校	死亡	合計
大正2	農科	二〇	三	〇	一	一	二五
	獣医科	二	〇	〇	〇	〇	二
大正3	農科	一七	二	一	〇	一	二一
	獣医科	二	二	〇	一	〇	五



。国内卒業生分布図（大正一四年七月現在）


450
400
350
300
250
200
150
100
50
百七十八名
八名
十名
十八名
三十一名
三十三名
五十四名
五十五名
六十九名
三百八十一名
四百六十七名
不名
其他
工業
軍人
遊学
商業
医業
銀行会社員
教員
官公史
農業

○卒業生中等学校卒業後の学業

| 年度 | 卒業 | | |

二三　卒業生徒現在ノ状況

（大正二年十一月現在）同三年十一月現在）

| 年度 | 卒業生総数 | 在学者 | | | | 大正二年 | | | |

年	二	正	大
其他	者	就	者	学	在
其他	不詳	死亡	計	関業獣医	実業	教員	軍人	官公吏	計	園芸専門学校	蚕糸専門学校	商船学校	医学専門学校
同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同	同同
一	二	一	五		三			二					
	三	三	二		一			一					
		四	一					一					
	五	二	五		一			四					
	二												
	一〇	一	三		一	一		一					
一	五	三	二		一			一					
	六	一	四					四					
	二	四	五		三	一		一					
	九	一	九		八		一	一〇					
二	一	三	二		四	二		六					
	三												
	二	二	三			一		二					
	二												
二		一四	二六	一		一		一四					
	一	一	三四	一				二四					
二		二	二八	二		一		五					
一	一		四五	二		三		二一					
	二	二	三五	一		三		二二					
	三	一	九九	二		六		七三					
一	三	四	三七	五		一	二	五三					
三		二一	一〇五	五		四	五	五六					
	一		二〇	二		三		九七					
一二	一	三二	三七			一	二	二四					
四		三二	二九	三		九	一	一 九八					
	一	一一	二三	五		五	一	五七					
七	四	二	一〇二	九		三	一	一 〇八	一三				
一		二	八六	九		三	三	九〇					
一一	一	二	八五	一〇		二	六	二一 八七	二				
一二		一	五一	四		七	二	二二 九九	一				
二			六二	四		七	二五	二二 〇〇					
六		一二	九一	一〇		九	一一	二三 六八	二	一	一		
三四		一一	七三	一〇		八	一四	二二 二六					
一一			二八	七		六	六	三四	二	一			
九四			四七	一〇		九		四八	一				
一〇	一	五	二四	二		一九	四	二八					
一八〇	三三	四一	五四	一〇		六	六	三三 二〇七	一〇	二	一		

年度	卒業生総数	在学者				就職者				
		計	帝国大学	高等農林学校	園芸専門学校	私立農業大学	官公吏	軍人	教員	実業
明治十年	農獣	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十一年	八						一			三
十二年	七									一
十三年	五						一			
十四年	三						三			二
十五年	一									
十六年	二			1			一		一	
十七年	四									一
十八年	一						三			
十九年	一						四		一	二
二十年	一						九			
二十一年	一						六		一	二
二十二年	一						二			
二十三年	一						四			
二十四年	一						三		一	二
二十五年	一						四			
二十六年	一						三			
二十七年	一						一			
二十八年	一						三			
二十九年	一						五			
三十年	一						四			
三十一年	一						四			
三十二年	一						一			
三十三年	一						三			
三十四年	一						六			
三十五年	一						五			
三十六年	一						四			
三十七年	一						一			
三十八年	一						一			
三十九年	一						九			
四十年	一						六			
四十一年	一						一			
四十二年	一						五			
四十三年	一						四			
四十四年	一						四			
四十五年	一						三			
大正元年	一						一			
二年	一						三			
三年	一						一			
計	六六	三	三	一	一	一	一〇七	一	三	一

年度	合計		計
	同	同	同
明治十年	八		三
十一年	七		五
十二年	五		四
十三年	三		七
十四年	一		一
十五年	二		二
十六年	四		一
十七年	一〇		八
十八年	一二		七
十九年	三〇		五
二十年	二九		一〇
二十一年	一八		六
二十二年	三		三
二十三年	七		四
二十四年	一一		二
二十五年	三三		一六
二十六年	四五		一一
二十七年	二二		四
二十八年	五六		一一
二十九年	五八		三三
三十年	九三		三
三十一年	四四		一七
三十二年	二九		二四
三十三年	一一		一
三十四年	二四		二四
三十五年	二五		三六
三十六年	二五		一二
三十七年	二四		七
三十八年	一九		三
三十九年	二九		二四
四十年	二七		二二
四十一年	二六		二
四十二年	二六		一八
四十三年	二九		四五
四十四年	二三		一一
四十五年	二三		九四
計	二九四	二五五	二九四

| 大正三年 | | |

称が定められたのではないだろうか。当時県の中等学校設置のあり方として、先ず義務教育普及の要員養成のため、師範学校・普通教育向上のため、男子に中学校・女子に女学校を、実業教育振興のために農工商校の設置をなし、この六つを教育の目標としたもので、本校校章の創定もこの頃と推定される。そして、この六つの異なった目的を持つ学校をそれぞれ一つの星と見做し六つの光芒を表わし、その上、「農は国の本なり」との意を含め、本校はその中核をなすものとして農の文字をも中央に据えたものと推察され、当時、その構想の雄大、意匠の斬新さはとても他校の追従を許さないものがあった。母校愛、その発展を図り立派な校風を育むためには誇りある六星のもつ由来を、卒業生から在校生へと伝えていったのである。



六星校章

寄宿舎生活

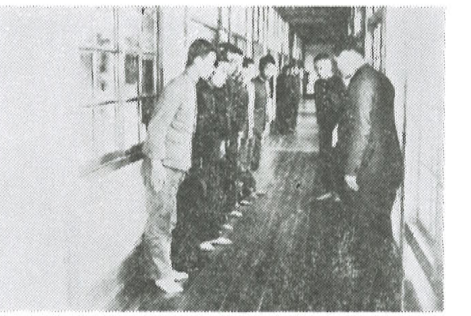
寄宿舎入居者は、それぞれの年によっても相違はあるが、だいたい一五〇名から二〇〇名ぐらいであり、彼らは規則正しい共同生活をおこなっていた。部屋数が約一八室、その他、集会室・食堂・風呂場・物置などが完備して、楽しい寄宿生活を送ったのである。

一室は三二畳敷き、定員八名で各室に室長と副室長を置き、すべてが生徒の自治制で運営されていた。

寄宿舎の朝

松村東軒

東の空が漸く白んで来て倉ケ岳の絶頂から薄明るい光がさしそめた。すると向うにこんもりとして居る若宮の森の中からけたたましい声で四、五羽の鳥が飛び出した。後は再び元の寂莫に帰って向うの空には明星が二つ三つ睡むたそうに瞬をして居る。昼間はさしも喧しい寄宿舎もまだ起床時間に一時間も前なので舎生は尚ほ夕べからの夢に耽って居るが食堂には早や賄が朝飯の用意をして居るので有ろらう。電燈の光が窓硝子を透して前の柳を覚束なさそうに照らして居る。空はだんだ



寄宿舎の朝礼

ん明るくなって来た。東の空にかかって居る雲は薄紅や紫色に染められてまるで錦の様で有る。向うの白山の麓に立って居る森の外今まで薄かった野や畑は漸くはっきりと見えて来て右手の一木村の藁葦家から朝飯を炊いているので有らうか一筋の煙が夢の様に立ち昇って来た。折から何処ともなく鶏の鳴く声が聞えた。すると俄かに東の山から真赤な光がさっとさして野も山も畑も皆んな一時に紅に染めてしまった。そしてそれが寄宿舎の窓硝子や傍の堀の水に映してまぶしい程反射している。今は東の空は名残なく晴れていつの間にか明星も消えてしまった。白山は中頃から薄紫の霧に蔽はれて麓の方は刷毛でぼかした様になって居る。しかし世間はまだひっそりとして居る。すると俄かにがんがんと鳴りだしたのは寄宿舎の起床鐘で有る。ア、アーと欠伸の声がすると暫くして急に喧ましくなって来た。蒲団を畳むもの押入の戸を開くものばたばたと大騒ぎをやってる中に早いものは手拭片手に揚子を喞へながら洗面所へ出かける。「ヤッ早やう！」「ヤッ失敬！」と粗末ながら挨拶が始まる。やがて衣物の前を水で濡らして胸の辺には歯磨粉を一ぱいつけ赤い顔を拭きながら洗面場を出て来る。暫くの間は入れかはり立ちかはり水を上る音お早う、失敬の音でそれはそれは喧ましい。

またがんがん点検だ点検だ、オイ未だ寝ているのか起きないか、もう舎監が来るぞ「ウム起きる起きる」と云ひながらまだ蒲団の中にもぐり込み「僕は今日は病気だ」「アハ、―又虚病か」、そうして居るまに舎監が来た「気をツケー」「番号！」「一二三四！」点検後二十分たって朝飯のベルがなる。すると各室の戸は言ひ合はした様にからっと開きどんどんと雷の様な音をさして食堂へ走り出す「キリュー」「レー」で食べる。さすがは食ふ間は静かなもので茶碗の音、汁を吸ふ音しか聞えないが折々「オイ汁を呉れ！　賄ひ！　漬物を呉れッー、茶がないぞ！」と怒鳴るのが聞える。十分程たつとぽつぽつ食堂から帰って来る。来ると同時にどこからか琵琶や詩吟の声が起る。詩吟かと思へば間にオイ乳屋、牛乳呉れの声があの室からも此の室からも、その中に自修に皆取りかかる。内科や外科や死解に頭を悩まして居る。而しそれは勉強家だけで中には机の上にはさすが申訳に書物は広げられて有るが、あはれ書物は見向きされずページは何時までたっても始めのままである。処へがらっと戸を開けて入って来たのは例の真黒な男だ。「オイ君昨日診断した患馬の病名が宿題に成って居た



寄宿舎娯楽室

が解かったか―」と例の真黒な男が尋ねた。呼ばれた男は「昨日の宿題か！　いやまだだ、もう御免だ、いくら考へても解らん「アハヽヽいくら考へても解らんて実際考へて見た事があるのか？」「アハヽヽいや考へても解らんからもう考へんのさ。而しそういふ君はどうだ？」「僕も実は解らんのさ」「それではあまり人の事も言へワいなアハヽヽ」と大口あけて笑ひながら急に「君よまだ時間があるか」「ヤッもう五分だ」「なに五分とは―どれ仕度をしようか」と立ち上って押入から洋服を取りだす途端各室は又々さわがしくなる。日課の書物を取り揃へるので有らう―「外科・手術・死解・細菌・産科…今日は難かしい奴ばかりだな」「オイ己れの上衣を知らんか？」などと怒鳴っていると、がんがんと出校の鐘がなると、どんどんと玄関へ出る。ここで又一騒ぎ。舎内は再び元の静かさに戻って室の中には脱ぎ捨ての衣物が乱雑に取り散らかされ机や本箱は窓からさし込む温い日光をあびながら静かに主人の留守を守って居る。（「学友会会報」第二一号）

一生徒の右の文章のように、朝、打ち鳴らす鐘の音に合せて、週番生徒の「起床ッ」という大きな声で、一日が始まるのである。床上げ・掃除・洗面・点呼・食事・自習時間・登校と続き、また、下校後は自由時間・夕食・自習時間・休憩・自習時間・整頓・点呼・就寝・消灯で一日が終るのであった。

「食事時間」＝大正元年一〇月一日

時季	朝食	昼食	晩食
自九月十一日至十月三十一日	午前六時三十分	正午	午後六時
自十一月一日至二月末日	午前七時	午前十一時三十分	午後五時三十分
自三月一日至七月十日	午前六時三十分	正午	午後六時
自七月十一日至九月十日	午前六時	正午	午後六時三十分

下級生は上級生に服従し、上級生は下級生の模範になれ、という鉄則であった。下級生は宿舎の掃除・整頓にあたり、大正初年はランプみがきも下級生の仕事であった。しかし、つらいのは一年生のときだけで、二年生ともなると要領よく振る舞えるし、最上級生ともなれば、たいてい室長か副室長になり、神様扱いとなって威張っていることができた。

舎監長一名、舎監数名が配置され、寮生の指導を受けもっていた。「寄宿舎は家庭である」という方針に基づいて、できるだけ暖く指導に当るようにしていた。新年会・送別会・歓迎会、時おり開く懇親会などでは、お茶とお菓子が用意され、日ごろやかましい舎監の先生たちも、この時ばかりはいっしょになって楽しいひとときを過ごしたものである。

舎監が送金を管理して、生徒の所持金全部を預っていた。小遣い銭の請求は月四回、土曜日ごとに請求した。生徒の家庭はわりと裕福で、大正初期のころはだいたい一〇円送ってきた。当時の寮費は五円であった。（その後値上がりし昭和初期で一〇円内外となる）うどんが二銭、映画が一〇銭で、五〇銭を持って外出すれば、おつりがくるという時代で、寮生は青春の楽しい一時期を送ったのである。

消灯後も、集会室で勉強するという勉強好きも数多くいたが、反面、とてつもない豪傑もいた。果樹園の果実を無断で頂戴したりするのはまだよいほうで、ひどいのになると、馬、豚などの家畜の解体実習のとき、その肉片をしめし合わせてリレー式に隠しておき、寄宿舎へ持ち帰りスキ焼きをやったモサ連もいる。もちろん、舎監が寝静まって後、炊事場の片すみで大なべをかこむわけである。肉のほか野菜などの材料は、これすべて農場からの間引き、調味料は炊事用のものを失敬するというわけである。

また、あるものは、そのころ、まだ、貴重だった白色レグホンのニワトリを盗み、家畜実習の先生をして、「白レグホンが一日にして在来種と変ずる」と嘆かしめた。

学友会の活躍　明治三四年四月に、忍耐の資・応用の智・冒険の勇を大きく掲げた石川県立農学校校友会発

行「校友会報」第一号が発刊された。明治四三年三月の総会において、「同窓唯心会報」（石川県立農学校）が合併し「石川県農学校学友会」と改称した。会則制定は旧同窓会及び校友会の両会より選び委員に付託し、同年八月、金沢市において会合を行ない、次のように会則が決まった。

。石川県立農学校学友会会則

第一章　総　則

第一条　本会ハ石川県立農学校学友会ト称ス

第二条　本会ノ事務所ハ石川県立農学校内ニ置ク

第三条　本会ハ会員相互ノ親交ヲ厚クシ兼ネテ智徳ノ三者ヲ練磨スルヲ以テ目的トス
本会ノ目的ヲ達センガ為メ各郡市双ニ関係アル府県ニ支部ヲ設置スルコトヲ得

第四条　本会ノ会務ヲ処理スル為メ庶務会計会報運動ノ四部ヲ置ク　但シ各部ノ細則ハ別ニ之ヲ定ム

第五条　本会会員ハ左ノ四種ニ分ツ
一　名誉会員　一　賛助会員　一　特別会員　一　通常会員

第六条　名誉会員ハ本校ニ縁故アルモノ若シクハ本会ヲ稗益スル者ト認ムル者ヲ役員会ノ可決ヲ経テ会長之ヲ推薦スルモノトス

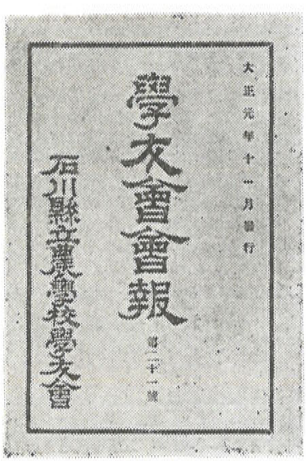
第七条　賛助会員ハ本校職員ヨリ成ル、本会ノ会務ヲ賛助スルモノトス

第八条　特別会員ハ本校卒業生ヨリ成ル

第九条　通常会員ハ在学生徒ヨリ成ル、但シ補習科生ハ通常会員トス

第二章　会　員

第十条　本会会員ハ会費トシテ毎月左ノ金額ヲ納ムル者トス
一　賛助会員ハ毎月弐拾銭



学友会会報第21号
— 大正元年 —

二　特別会員ハ毎年壱円宛五ケ年又ハ一時ニ金四円
三　通常会員ハ毎月拾五銭

第三章　役員及ヒ権限

第十一条　本会ニ左ノ役員ヲ置ク
一　会長一名　一　副会長一名　一　部長四名　一　理事若干名　一　幹事若干名

第十二条　会長ハ本校校長ヲ推戴スルモノトス

第十三条　副会長ハ会員相互ノ互選トス

第十四条　部長ハ賛助会員中ヨリ会長之ヲ委嘱ス

第十五条　理事ハ特別会員ヨリ会長之ヲ指名シ県下一郡二二名関係アル府県二二名宛置ク

第十六条　幹事ハ通常会員中ヨリ各級ニ於テ二名宛互選シ会長ノ承認ヲ受クルモノトス

第十七条　副会長理事ノ任期ハ二ケ年トシ満期総会ニ於テ改選ス

第十八条　幹事ノ任期ハ一ケ年トシ毎年一月ニ於テ之ヲ改選ス　但シ役員ハ互選ヲ妨ゲス又欠員ヲ生ジタル時ハ臨時選挙ヲ行フモノトス

第十九条　会長ハ会務ヲ総理シ兼ネテ本会ヲ代表ス

第二十条　副会長ハ会長ヲ補佐シ会長事故アルトキハ代理ス

第二十一条　部長ハ会長ノ指揮ヲ受ケ部務ヲ処理ス

第二十二条　理事ハ本会重要事件ヲ評議ス

第二十三条　幹事ハ会長及ヒ席長ノ指揮ヲ受ケ各部ノ事務ヲ分担ス

第四章　集　会

第二十四条　集会ヲ分チテ左ノ三種トス
一　総会　一　講演会　一　役員会

第二十五条　総会ハ毎年三月本校卒業証書授与式当日ヲ以テ之ヲ開キ会務ノ報告役員ノ改選ヲナスモノトス
講演会ハ毎月第二土曜日ヲ定日トシ演説討論其他学術上ノ研究ヲナスモノトス、但シ臨時会ヲ開クコトアルベ

シ
役員会必要ナル場合ニ於テ会長之ヲ招集スルモノトス

第五章　会　報

第二十六条　会報ハ毎年六月十一月ノ二回之ヲ発行シ会員ニ配布ス特別会員ニ限リ毎年六月発行ノ会報ヲ配布ス

第六章　運　動

第二十七条　運動ヲ分チテ左ノ二種トス
一　定期運動　一　常設運動

第二十八条　定期運動ハ毎年一回秋期ニ於テ行ヒ常設運動ハ所定ノ個所ニ於テ之ヲ行フモノトス

第二十九条　運動ニ関スル設備及ヒ器具ノ保管ハ運動部幹事之ヲ担当ス

第七章　会　計

第三十条　会計部ハ出納簿ヲ備ヘ収支ヲ明カニスルモノトス

第三十一条　収入セル会費ハ会長ノ名義ヲ以テ之ヲ銀行ニ預ケ入ルモノトス

第三十二条　会費ノ支出ハ其都度会長ノ承認ヲ受クベキモノトス

第三十三条　会計年度ハ暦年ニ依ル収支ノ報告ハ総会ニ於テ之ヲ為スモノトス

第三十四条　理事ヲ招集シ評議セントスルトキハ実費及ビ其幾分ヲ支給スルモノトス

第三十五条　本会役員ニシテ本会ヲ代表シ出張セントスル時ハ実費又ハ其幾分ヲ支給スルモノトス

第八章　基　本　金

第三十六条　本会維持ノ為メ基本金ヲ設ケ一般ノ寄附金及ビ会費ノ積立金ヲ以テ之ニ充ツ

第三十七条　基本金ハ会長之ヲ保管シ確実ナル銀行ニ預ケ置キ適当ノ利殖ヲ計ルモノトス

第三十八条　基本金ハ総会ノ議決ヲ経ルニアラザレバ之ヲ消費スルコトヲ得ス

第三十九条　基本金五千円以上ニ達シタル時ハ其利子ヲ以テ経常費ニ充ツルコトヲ得

第九章　付　則

第四十条　会員ニシテ会費ノ不納及ビ不当ノ行為アリト認ムル時ハ総会ノ議決ヲ以テ除名スルモノトス

第四十一条　本会ニ会員出席簿ヲ備ヘ毎集会ニ会員ノ勤怠ヲ検スルモノトス　但シ事故欠席ノモノハ其都度届出スヘシ
第四十二条　本会ノ各部ニ担当ノ帳簿ヲ備ヘ会務ノ整理ヲ計ルモノトス
第四十三条　本会ニ芳名簿ヲ備ヘ金員物品ノ寄贈ヲ受クタル時ハ其寄付者ノ姓名ヲ記入シ永ク保管スルモノトス
第四十四条　本会ニ閲覧室ヲ設ケ雑誌書籍ヲ購入シ会員ニ随意閲覧セシムルモノトス
第四十五条　閲覧室ノ取締ハ庶務之ニ任ズ
第四十六条　会則ノ変更ハ総会ノ議決ニ依ル

。講演部細則

第一条　本部ハ弁舌ヲ錬達シ智識ヲ交換シ以テ友情ヲ温ムルヲ以テ目的トス
第二条　本部ハ其目的ヲ達センガ為メ毎月一回之ヲ開キ講演者ハ前日迄ニ部長ニ題目ト姓名トヲ届出スベシ
第三条　本部ニ幹事若干名ヲ置ク
第四条　本部ハ会員以外ノ名士ヲ招イテ講演ヲ請フコトアルベシ
第五条　地方農業者ハ会長ノ許可ヲ得テ講演会ニ出席傍聴スルコトヲ得
第六条　講演会ノ際ハ常ニ本校気風ヲ美ナラシメ学生ノ品性ヲ高尚ナラシムルニ勉ムベシ
第七条　講演ノ際本校平和ヲ害シ学生ノ本分ヲ忘ルルガ如キ挙動アルイハ講演ヲ中止スルコトアルベシ

。会報部細則

第一条　本部ハ会報ノ編纂発行配布ヲ掌ルモノトス
第二条　本部ニ幹事若干名ヲ置ク
第三条　会報ノ原稿ハ部長之ヲ選択シ会長ノ検閲ヲ経テ発刊スルモノトス

投稿者心得

一　原稿ハ長短ヲ問ハズ全篇全備ノモノタルベシ
二　原稿ハ半紙半面十二行二十五字詰楷書ニテ認メ仮名ハ平仮名タルベシ
三　原稿ニハ必ラズ会員ノ名称及ビ姓名ヲ明記シ匿名ヲ許サズ
四　原稿期限ハ春ハ五月末日秋ハ十月末日迄トス

五　原稿ハ其良否ニ拘ラス凡テ返戻セズ

。会計部細則

第一条　本部ハ本会ノ基本金及ビ会計収支ヲ掌ルモノトス

第二条　本部ニハ部長ノ外ニ幹事二名ヲ置ク

第三条　本部ニ左ノ帳簿ヲ備ヘ置クモノトス

一　会費徴収簿　一　会計簿

一　基本金台帳　一　寄付芳名簿

第四条　本部ハ毎年総会ニ決算報告ヲ調製シ会員ノ承認ヲ経ルコト

第五条　毎年ノ決算報告会費徴収寄付物件ハ春期発行ノ会報ニ記載スルモノトス

。運動部細則

第一条　本部ハ身体ノ健康ヲ謀リ士気ヲ振興スルヲ以テ目的トス

第二条　本部ニ幹事若干名ヲ置ク

第三条　運動ノ種類ヲ分チテ左ノ如クス

一　遠足　一　相撲　一　庭球　一　野球　一　撃剣　一　フットボール等

第四条　本部ニハ毎年秋季大運動会ヲ開ク　但シ臨時会ヲ開クコトアルベシ

第五条　運動器具ハ左ノ三種トス

一　本部ニ購求シタルモノ

二　本校備付運動器具ニシテ其使用ヲ許可セラレタルモノ

三　寄付ニ係ルモノ

第六条　運動器具ヲ毀損又ハ紛失セシ時ハ之ヲ弁償セシムルコトアルベシ

第七条　器具使用後ハ必ズ規定ノ場所ニ復シ置クベシ

右のような会則のもとに、卒業生と生徒との連帯感をつよめ、六星の名を高めようと学友会は努力していった。

弁論部

大正期における弁論部の活動はめざましく、校内外でも意気盛んであった。大正六年校長先生であった高橋昌は、「一般に演説振りは政談演説風なり而も田舎廻りのデモ政客風に活動弁士風を加味し頗る品格乏し。演説の際その態度は演題に相応したるものならざるべからず換言すれば演題と論旨とにより態度を決定するを要す。元より各個人の性質により異なる所あるを以て各々その長所を発見しこれを発揮せざるべからざるは勿論なり。各個人皆習癖を有すれども身振りせざれば演説出来ずと誤解せるものあるが如し。元来身振りは言ふ所と一致せざるべからず、演説の際精神作用の意識的に発露する時身振あらはる。之れに反するものは滑稽味を帯ぶに至る。故に強て身振をなさざるを可とす。精神作用の発現は眼を以て最とす。故に眼は聴衆に注ぎ論旨の徹底を期すべし。間々真面目なる演説には抑揚なかるべからず、以て人心に変化を与へ興味を惹く只言語のみにては不可なり。須らく論旨と並行せざるべからず。演題に対する論旨は概して可なりと雖も充分咀嚼せずして之れに使役せられ他人より借りたるものを話すが如きもの多し概して準備足らず。常に草稿を見ざるべからざるはその證なり。」と注意をのべ、当時の弁士に啓発を与えた。大正六年一月二七日に本講堂において弁論大会が午前九時から石堂弁論部長の開会に引き続いて小竹與子男（獣三）・根建森熙（農三）・東尚次（農二）・佐々木敦（農一）・松村永一（農二）・手塚雅彦（農一）らが熱弁をふるった。

大正八年一一月一五日、金沢師範弁論大会に「務めよ大正国民」と題して、三年和多幸作が、一一月二二日、金沢第二中学校弁論大会に「奮闘的生活について」と題して、一年森永喜平松が、一一月二四日、金沢第一中学校弁論大会に「文芸は果して青年を毒するか」と題して、三年橋本喜六が、それぞれ三〇分の時間をそれぞれの角度から主張し、万雷の拍手を受けた。

大正一〇年六月二九日、「おお熱弁の士！　卿等が気と熱と血とによって叫んだ雄弁の暴評を許して下さい」

と呼びかけ「学生相撲激励演説大会」が行なわれた。弁論部は奮起一番、三宅校長が、「諸君の精神の緊張と、自重と、肉体とは裕に角戦の覇王となり得やう。而し乍ら碁法に曰く『自ら勝つと出づれば敗れ自重して死守せば捷つ』と。唯、自重して戦って欲しいと述べられた。沈痛なる御教示に鬱堆せる満腔の悲憤は一時にはち切れさうになって、唯、時機の到るを俟った。」と開会の辞を述べ、森永喜平松・北岸外良吉・安田敏成らは我が六星健児の名声を社会にとどろかすのは一に諸君の双肩にある。奮闘努力せよと激励し、三浦先生の霊妙閑雅な口調で閉会している。七月一九日には「第一学期弁論小会」が人心の惰眠を破って開かれ、田中一郎・浜出忠次・高村忠加栄・砂川五六・宮西仁平・北原佐一・中山靖・小石茂俊・北岸外良吉・寺井義守らが吾等の抱負、学生裏面の悪弊等を主張した。一二月二二日の肌寒さを感じる講堂、緊張した精神もぐったりとなった試験がすんだ。翌々日、それでも熱心な若人は雲った光線が沈んでいる講堂を美しく恁う叫んだ「第二学期 弁論小会」の弁士は、研谷正次・角田三郎・安田繁成等九名が熱を持て、気を振え。熱なく意気なき国は亡びると論じた。

大正一一年二月一三日に、「弁論大会」が、工業の渡辺欣一君・一中の宮尾貞雄君・師範の高崎貞之君・二中の藤田信勝君らを迎えて、一三名の生徒がそれぞれ自分の考えをのべた。委員の山根與喜吉君は、「湧き出る泉は遮ぎることが出来ない。若人の燃ゆる意気は抑へることが出来ない。はじめて私達が周囲を見る眼を得た時、はじめて人間をまともにみつめた時、或は其処に鬱勃たる憤懣を感じ、時には又限りない歓びを得たであろう。その憤懣を、その歓びを、諸君の三寸の舌で、偽らず恐れず思ふが儘に発表せられたい。他の個性は、諸君のその雄々しい叫によって或は覚醒め、或は力を得るだろう。斯くてこそ人類不断の前進があるのだ！　若人よ立て！　立って御身の発溂たる思想を批擺せよ！　御身の熱弁を振へよ！」と叫び、閉会で、富田校長は「大会の後に、鈍い私の頭にも明らかに感じられた事は、本校の諸君は話方に於ては敢て他校選手諸君に比して遜色を認

めないまでも、その内容に至っては彼に一歩を譲ってはいないだろうかといふこと、是であった。本校の誰が、果してあの工業校の渡辺君の様に、つつましやかな口調を以て現代の凡べてが言はんと欲して居る所を適切に喝破し得たであろうか。『地の愛欲に悶えつつも、尚善くならうとする祈りは禁じ得ない。』『我が求むる神は決して人間性を無視した冷い無慈悲な神ではない』との痛切な叫びは、午前中には到底きくことの出来なかった所である。」と批評をしている。六月二日、二年間、朝な夕なに講堂の学生相撲大会優勝旗が七中に奪われて早や一年がたち、「学生相撲激励演説会」が行なわれた。三浦・小森・荒木・松岡の諸先生に、本校生徒数名、それに教員養成所の奥野・小泉の二人が、交互壇上に立って、「舌端火を叶く様な熱弁を以て、勝たざるべからず、勝たさざるべからずと絶叫された時、叫ぶ者、聞く者、その凡べての眉字には、戦わずして既に勝の概がアリアリ」と浮べられた。第二学期弁論大会は、一〇月二五日に本校講堂で行われた。

一	開会之辞		江藤部長
二	大正九年五月二四日午後一二時を忘るな	一東	酒井又治郎
三	出発点	一西	村田粂二
四	遅れたる日本	二東	米永幸男
五	満鮮の鏡に映じて	三東	安達滝雄
六	戦後の英米と日本	二部一年	津田平作
七	田吾作の自慢	二西	吉村正直
八	噫！デモステネス	二部一年	向田義松
九	所感		村田柔道教師
十	手取河畔に立ちて	三西	岩脇良雄
十一	我等の生命	二西	山根興喜吉

十二　農業国是れ文化国　　舟木教諭
十三　大震災の後に鑑みて　　三西　鍋　淳治
十四　我等の使命　　二東　平場林作
十五　閉会之辞　　江藤部長

以上の演題で、江藤部長は、「山根君。荘重な口調は君のよくする所だが、あれにもう少し若々しさが伴なったならばと思ふ。益々自愛されたい。」等と一人一人の弁士の批評をされた。一〇月二一日、小松中学校弁論大会へ坂井喜一が「瞬間に生きよ」という演題を持って、一二月一〇日、第二中学校弁論大会へ小石茂俊が「自覚せよ」という演題を持って、七月二八日第四高等学校北辰会主催近県中等学校弁論大会へ北村敦丸が「美はしき社会の建設は」という演題でそれぞれ派遣熱弁をふるった。

大正一四年二月九日、大正一三年度三学期弁論大会が小林先生の開会の辞に続いて、「農村に働く人々」（江川昇）・「近世二大記念日」（山根秀治）・「農村の革新は吾人の使命」（田村外彦）ら一九名が、青春の感激！赤き叫び、はち切れる若さ！紅顔健児の偽りなき声を発表した。五月三〇日、「学生角力激励演説会」が開かれ、「聞けよ諸君！諸君の耳朶に流れ来るではないか？。今年こそは……何卒……あの七中菩薩の復讐を……雪辱を……と云ふ先輩闘士の尊き犠牲の血涙に咽ぶ恨の呻きが、悲哀が。今や、戦の気は高し、炎々たる敵軍猛竜の焔は正に諸君の緑髪をも……諸君は、唯傍観せんとするか？　美事なる復讐……栄冠の獲得！四〇〇の健児よ奮起せよ。而して、意気で闘へ！　力で勝て！　明日の戦闘には、七中、師範に挑戦し、吾人の目前に放擲するぞ、否、刻々と血潮のみなぎる燦然たる優勝旗は、この講堂に来れるのが、見えるではないか！怒濤逆巻く金石海浜を目指して、戦闘場裡に登らんとして正に校門を出でんとするに当り、優勝の栄冠を獲得す

るにあらずんば、いかでか此の校門を通るを得べけんや、必ずや必ずや全勝の栄を得て、赫々たる優勝旗を陣頭に押し立てて凱歌の声を蕪城の天地に轟かさん、意志を以て闘へよ！　おお……四〇〇の健児よ！　見よ！　明日の号外を……農校健児遂に勝ちたりとの。かくして出征に当り、選手諸兄を激励し、応援諸君は互に奮然躍起して、明日の優勝を確信して、止まず」と気焔をはいて励ました。六月二〇日、一四年度一学期弁論小会が行われ、竹内校長の開会の挨拶に引き続いて、「農村衰頽の原因」（1西　乙崎幸一）・「漸く提唱されたる農村問題」（農4　山根秀治）・「農村問題の第一歩として」（林4　樫田栄治）ら一六名が自分の持っている考えを主張した。

講演部は今日からいえば、講演会、アセンブリ、弁論大会を包括した会を企画実施するクラブといってよい。他校の生徒の参加する弁論大会と名士招へいの講演会に分かれ、年数回にわたって行なわれるようになった。

会　報　部　学友会の機関誌は、明治三四年四月に「校友会報」第一号が発行され、その後概ね年二回の割でA5判一〇〇頁前後の雑誌が続刊されている。年毎に内容外観ともに充実したものになっていったが、特に大正一五年八月一〇日刊行の学友会誌（三五号）「五拾周年記念号」はその圧巻と言ってよい。この「五拾周年記念号」は記念事業費として会報発刊費全部並びに基金の一部より合計二〇〇円を得て発刊されたものである。大正期の校友会誌の内容は、普通、論説及び学芸、文苑、紀行、雑録、会報の体裁をとっている。今日の生徒会誌と著しく相違するのは、職員生徒のみならず卒業生



学友会会報五十周年記念号

（特別会員）からの論稿を載せ、学校卒業生を一丸とする会誌であったことである。

剣　　道

運動部としてその成立は早く明治三九年である。その活動の主要なものは日々の荒稽古をはじめ校内紅白剣道大会の開催、さらには対外試合への出場であった。

大正五年二月七日、剣道大会が行なわれた。この日は朝から凍雲暗黒にして生徒の肌肉を刺さんとするような日である。やがてガーンとなる鐘の音に二〇〇の六星健児は勇気凛々として雨天体操場に集合して、樽林学友会長は壮厳に開会の言葉をのべ、紅白両軍各雌雄を決めようと互いに結束して出場した。終って樽林学友会長より「本年寒稽古皆勤証書」を生徒総代柳沢に「進級証書」を同総代高村に授与された。

大正九年四月二〇日、金沢武徳会支部主催吉見、都賀田両翁の表彰演武大会に、剣道部の田中・池田・上井諸君が参加した。

大正一〇年二月一二日、第七回校内剣道大会が行なわれた。

我等が寒き肌を血に変へ鍛錬極めし此の虎の腕獅子の腕！　振はん日は来りぬ。我武者百餘は薄衣を纏ひ、雄々しく開会の辞と其時の至るを待てり。紅白勝負は開かれたり、双方共に決心と戦ひぬ、其猛烈さ火事に猛風の如く互に奮闘せり。紅軍は、先負の態度を取り遂に大将西沢君紅軍副将本川君の戦ひとなりぬ。嗚呼関ヶ原の戦ひ！遂に紅軍の勝利となり、本川君雄々しく竹刀を引きぬ。（「校友会報」第二九号）

午前は一本勝負試合を行ない、午後は各県立学校、警察署の選手を招へいして、本校剣道部員との対抗試合を行なうもので、終日激しい竹刀の音と鋭い気合いの声が堂にみちていた。一一月七日、富山農学校の剣道部は、本校との交歓試合にいどみ、県立農学校は完勝した。対外試合でも武徳会主催青年演武会・第四高等学校主催北辰会・富山福農校との懇親試合等に出場し、本校スポーツの花形として万丈の気をはいたのである。大正期では、

押田・研谷・坂東・西川・林信・林與・坂井・石田・中村・藤井・粟山らが活躍した。

庭球部

庭球部の活動は校内庭球大会（紅白勝負）のほか他校との交歓試合を行なった。たとえば、大正八年一一月二日には、県立第二中学校、大正一二年一〇月七日、第一〇回関西北陸中等学校庭球大会（主催四高北辰会）には、高岡中学校、八月一日、第八回県下中等学校庭球争覇戦（主催北国新聞社）には、金沢工業学校、大正一四年（一九二五）一〇月四日には、石川師範等がその一例である。

水泳部

部の創立年月は不明だが、大正一二年幹事平塚教諭のもとに、委員中山・津田・森・三輪らは学校の名誉にかけて頑張った。当時の「水泳日記」をひもといておきたい。

苦しい試験も過ぎ印象深い夏期休暇は来た。身体各部の細胞の勇躍高鳴は青春の血潮を波立たせ鉄腕の向ふ所何もない。我が水泳部にては彼の白石閃めき碧波淘去淘来し岸に撃ち折れて雪と乱れ玉と飛ぶ徳光の海浜に於て水泳練習を開始した。

七月二〇日その日である。

夜来より降り続く雨の為道場で開会式を挙行す。富田校長の水泳に関する訓示あり後助手の任命あり次で水泳師範柏原先生の水泳の歴史及練習上に就てのお話ありて式終る。

漸次天候回復の見込立ちたるため海浜に向ふ、十時半再び水泳に関する注意ありて入水せり。風浪高き為午前一回水泳の心得ある生徒のみを各学年別に分ちて十分宛行なひたるのみ、三年生講習の為不参す。

七月二一日　雲風強

午前十時開始せしも波高く水温低き為二十分位にして上陸す。心得なきものは入水せず十時三十分より十一時迄小屋内にて水泳術の知らざるものは型の練習をなす正午に至るも回復の見込なく止むを得ず解散せり。

七月二二日　雨後雲

朝来曇りたる空は午前八時頃より降り来りたるも八時半頃に至り稍曇模様なるため練習を行ふ事に定め学校の掲示板にて之を示す。会場にては朝の天候の為か出席者少なし、本日より三年生も出席す、寄宿生は弁当の用意なきを以て午前十一時

半にて終る、因に本日砂糖湯を準備せり。

七月二三日　曇

朝より曇り勝ちなりしも水泳開始以来の好天気なり午前十時開始はじめて夫々得意の術を現す、飛台の付近には心得あるものを集め磯辺に心得なきものを集め共に練習す、午後は特に水泳術の知らざる者の為河にて行ふ飛び込み台を引き上げんとしたる時波高く縦操自由ならずして台足一本根本破壊せり。

七月二四日　雨後曇

夜中より暴風朝に至りて小雨を交へしも八時半頃より晴れ上りたる為水泳場に集る然れども波高くして入水するを得ずして水泳術教授の為川に於て行ふ午前十一時半自由解散せり。

七月二五日　雨風

波高かりし為練習中止す。

七月二六日　曇

昨日より波稍低けれども未だ静穏ならず。午前午後各二回練習をなす。

七月二七日　曇後晴

波漸く静穏となり練習意の如くなる、三町、五町、二五町の試験を行ふ。稍波高かりしも一名の落伍者も無く合格せしを喜ぶ。

七月二八日　晴

晴天なりしも波浪又高く練習十分ならず為に二五町以上に合格せし者のみを暫時海中に於て練習をなし他は川にて練習す。

七月二九日　曇

午前七時半海浜より特使あり昨日以上の激浪にて練習試験共に不能の旨あり為に本日中止す。

七月三十日

本日は前五日激励の為め渚は大に変化して先日来の梯を有せず試験に応ずる者のみを船にて沖に出し五町及び十町試験をなし中食後三町試験及び練習の為め倉辺川に行く。

七月三一日　曇
　五十町及三里半大試験を挙行したけれども中途に於て強風起り波浪刻々荒くなりて危険甚だしく加ふるに二艘の舟に船頭二人宛居れども荒浪の為舟の縦操自由ならず遂に相川浜に舟を寄せ避難し暫く海上の形勢を伺ひ居たけれども何時和波とも見えず遺憾なく五拾町の試験のみに止め三里半の金石行試験は休止せり。
八月一日　曇後晴
　三里半の試験を行ふ十二名受験したけれども四名落伍し八名合格せり。終りし頃は夕陽水にありて涼影掬すべしだった。
（「学友会報」第三二号）

大正一五年には、七月二〇日より相川海浜において水泳教師柏原先生の指導の下に練習を八月二日（日）まで行なう。最終日の午後、試験を実施し、合格者には「合格証書」並びに「皆勤証書」の授与式あって、小林先生の閉会の辞で無事終了した。

柔　道　部

時代の花形として、多数の部員を擁し、学校内外で多くの試合を行なった。とくに校内において、年一回の大会、数回の小会を主催したほか、寒稽古、土用稽古を実施した。

大正五年二月一五日（火）午後一時より柔道師範高嶋義直先生審判の下に「校友会柔道部大会」が開かれた。一本勝負三人抜きでは、平橋・大浦・室山・樫野が、一本勝負五人抜きでは、平橋・佐々木が、一勝負三人掛けでは村田がそれぞれ勝った。二月一八日、「学友会柔道部大会」紅白試合が行なわれ、紅軍が完勝した。

大正八年一一月二三日には金沢武徳大会が県下七校中等学校参加の下に行なわれ、大将登は特別賞として北国新聞社からメダル一個を受賞わが校の名誉であった。登は八月七、九日の大日本武徳会本部主催第二〇回全国青年演武大会に参加した。その他、四月二〇日、金沢武徳会支部主催吉見、都賀田両翁の表彰演武大会に、柔道部から、登、外蔵、瀬戸が参加。六月二三日、「柔道紅白大会」が行なわれ、紅軍が辛勝し、外蔵・瀬戸・米沢・

一花・寺井・芦沢・井の活躍が目立った。八月二日、第四高等学校北辰会柔道部主催「北陸東海中等学校柔道大会」が無声堂にて行われ、農学校の参加は本校だけであった。

大正九年七月一九日に本年度第一回柔道紅白試合が行われ、白軍が勝つ。米沢・堀井・田中・清水（源）・菱村・北原らの活躍が大会を盛りあげた。六月一九日「富山農校へ遠征する」（全盛時代の我選手等は北陸に於ける実業学校の覇を握るべく、先づ福井農林に遠征を申し込む事前後二回、而して拒絶せられ福井の天地に於ては遺憾ながら技量を発揮する事を得ず、ここに於ては六月一九日頃富山農校へ遠征を申込む……愈々一九日万歳の声に送られ、零時二五分発列車にて途につく、二〇日午後一時より試合開始せられ敵は防戦態度に出でしため、我充分技を見する能はず、口惜しくも引分となれり。）八月二日、第四高等学校北辰会「柔道大会」に参加し、本年武徳会石川支部優勝の小松中学校と対戦し完敗する。八月七、八両日、京都における大日本武徳会第二一回青年演武大会に本校より米沢、藤森が招かれ、「君等は行手に如何なる猛き敵あり共名誉の月桂冠を手にする迄は帰らるな」の言葉を胸に奮闘し、誉れの賞を受ける。一〇月二四日午前八時から「県下中等学校柔道大会」が行われ、第五位を占めた。寺井、藤森を中心にしてチームよくまとまる。

大正一〇年一月二二日「医学専門学校柔道大会」へ本校より選手二名派遣し勝負は次の通りである。

○○藤森　繁――瓦　興兵衛
○米沢保雄――原　久米男

一月二三日　第四高等学校北辰会柔道大会へ

井　甚作――早川○
寺井義守――北村
藤森　繁――小幡

米沢保雄――×――新木
一月二三日　小松中学校へ
堀井安治――×――上出
西村作造――×――村橋

一月二九日第一中学校と師範学校、二月七日工業学校、二月一〇日商業学校へそれぞれ派遣した。二月一二日午前九時から柔道大会があり、校内三本勝負、五人掛、講道館投之型、講道館固之型の種目を競った。

大正一二年八月二、三日、「北陸関西中等学校柔道大会」が行なわれ、金二中と対戦し惜敗したが、金沢商には、山崎・佐小田・作田・平田・中村・蒲田・仲市らが頑張で勝利を収めた。一〇月二一日、富山福野農学校と交歓試合。六月五日、能美郡寺井村字湯ノ谷小学校においての就実青年会第一回武道大会に山崎選手の五人掛あり。一〇月二七日、金沢高工柔道大会に山崎・佐小田両選手参加して、佐小田圧勝した。

相撲部

スポーツの花形といえば、柔道・相撲・剣道といわれた大正四年。北国新聞社は五月二〇日の新聞紙上で「体育奨励のために学生相撲を六月中旬に開く」と大々的に発表。金沢市の中学校、高専はむろん加賀地区の学校はじめ、相撲ファンに大きな関心をいだかせた。開催は六月一三日（日）と決まり、場所もいろいろ検討されたが、風かおる金沢金石海浜を選んだ。第一回の参加校は、金沢医専・石川師範・金沢一中・金沢二中・小松中・県立農学校・工業学校・商業学校の八校（二〇〇人）と決まる。一五歳以下を少年部、一六歳以上、一九歳までを中等部、二〇歳以上を青年部とし選手数も各校の全校生徒数に比例して数を決めるという現在とはまるっきり違ったやり方だった。取り組み方法を学校別によらず選手東西に配し（たとえば農学校選手三〇人とすれば一五人ずつ分ける）下位選手より一番勝負二人抜きとすることが決められた。も

ちろん同じ学校の選手同志が顔を合わせることもあった。二人抜きのあと、さらに選手全員の五人抜きを行なうこととし、また五人抜き同士の取り組みで勝ったものの学校を団体優勝とした。いわば個人優勝した学校が団体優勝にしても五人抜きの多い学校を優勝とした方がよさそうにおもわれるが、個人優勝者の学校を団体優勝としたのはどういうわけだったのだろうか。しかし、当時はマイクがないため、観客が遠くから見てもどの学校の選手ということがはっきりわかるように、まわりの前に各校色別の布きれをつけることになっていた。本校は茶色だった。一三日の午前六時出羽町練兵場から大会の決行を告げる号砲が二発雷鳴のようにとどろきわたった。号砲を待ち切れずに本校応援団、一般観衆は、早朝四時から五時にかけて会場の日和山下へどっとくりだした。一五、〇〇〇人の観衆。午前九時、立派にできあがった土俵上の盛り砂はくずされ、競技のスタートが切られた。五人抜きでは本校の岡部が勝ち光彩を放った。本校応援団は、「黄色（こうしょく）の三角旗に日を呼ぶ者は農学校なり」と叫び、栄光を呼ぶ黄色の旗（古代中国の皇帝の旗の色）を選び応援の第一発を放った。

大正五年五月二九日、能登勢からはじめて七尾中学校が加わった。参加校は県立農学校をはじめ九校（二〇八人）が団体優勝をあらそい、五人抜き勝者同志の決戦は金沢商業の加茂、農学校の村田、金沢一中の木谷、阪田の四選手で争われたが、木谷が最優勝して、村田は惜敗。

大正八年五月二五日といえば、わが相撲部が雷名を県下にひびかし六星健児の為に万丈の気をはいた第五回学生相撲大会が青松白砂の地金石海浜において催されたその日である。当時のありさまを記してみよう。

二百線にAなる文字を白く染抜いた三角の応援旗を打振りながら校庭を発したのが午前六時。長程三里の金石街道を隊伍堂々会場へ乗り込みしが八時で勝頭第一なり。若き人々の面には喩へ様もない喜悦の情が現れている。元気な団長の号令一下「皇御国の真男子。野見宿弥の昔より……」って応援歌が高唱された。洋々たる日本海の波は其唸りの上に芯色を湛え

てこれにコーラスするが如く岸打つ波は白い歯を現しつつ吾応援歌と応ずる様であった。時は刻々と進み十時を指した頃開会となり吾選手七名は意気揚々として入場するや熱狂し居たる応援団は何者にチヤームされたるか思はず一斉に拍手喝采した。視るからに筋肉逞ましく日頃自然に接して鍛えし賜物が遺憾なく認められる。場内は各所に起る応援歌の声フレーフレーの叫びにて喧々囂々たり。聽て行司の打出す拍子木の音と共に第一部一回の幕は切って落された。皆々手に汗して片唾を呑む間に斯界の勇将藤森繁君我一人星校を代表して登場す。熱血溢るる応援隊は吾を忘れて声援す。何がさて敵は我に対して早くも戦々競々たる有様なり。阿修羅の荒れたる如き藤森君物の見事に敵の首を挙ぐ。宜なる哉。彼我の実力の相違実に雲泥の差なり。一同幸先良しと歓喜す。次いで二回目神保長重君肥満々たる体格を現すや一気にして敵を呑むの概ありしが惜しき敗者となりぬ。然れ共吾意気未だ衰へず。三回目米沢保雄君沈着切って出場し最善のベストを盡せしかで嗚呼天なる哉。命なるかな。是亦破られぬ。今や吾が軍勢皆挫けたる感あり。そうだ。此時だった。意気あり勇ある吾安宅貞之助君獅子奮進の勢にて怒り向ひたれば相手は恰も猫に睨まれし小鼠の如く施す術もなかりしが脆くも敗者に属せしめらる。此処に於て吾軍の士気大いに揚り上を下への大喝采暫らくは鳴も沈めず。仰げば一天片雲だも認めず朝来の雨模様も全々一掃されぬ。引続いて小体ながらも緊張せる肉体美、加之巧者角力の瀬戸平右衛門君登場し虚々実々の秘術をつくして敵を充分に悩ませしが彼もさる者良く受け流し終に勝利は彼の掌中に輝く。応援団の一隅の声あり。曰く嗚呼瀬戸君にして今二寸許り高かりしかばと。瀬戸君の苦辛蓋し此処にあらんか。

是より静かなる海波を背景にし約半時間は各自弁当を開き午前中の労をいこふ。時計は一時を報じた。此処に第五回目の開会となり場内一同活気満々たり。応援団亦必死の勇を振ふ。吾が六星校よりは名声嘖々たる猛者中の猛者一花茂雄君悠揚迫らざる態度にて登場す。応援隊より起る拍手は宛然雷の如し。敵は恰も波濤の巌岩に打寄せては砕くるが如く吾一花君は泰然自若として勝名乗りを揚ぐ。実際此角力は問題にならざるなり。最後の第六回目には吾校の御大たるのみならず斯界の明星たる登秀次君最後の栄冠を戴かばやと土俵上に躍り出づれば向ふ所敵なき有様なり。さりながら勝敗は時の運とか勁敵にも非ざる一中の宮村君に屠られ終に吾御大登君は敗将となりぬ。噫。是にて一部は滞りなく終了せるなり。試みに本校力士の取組める割角刀の勝負を左に記せん。

勝	負
藤森　繁（本校）	入江助永（商業）

和佐田　徳次（工業）　神保長重（本校）
安田　広（七尾）　米沢保雄（本校）
安宅貞之助（本校）　武田霊正（二中）
中西四郎（師範）　瀬戸平右衛門（本校）
一花茂雄（本校）　竹内衛三（小松）
宮村本彦（一中）　登　秀次（本校）

時正に三時、之より第二部の取組に移る。吾校よりは登、一花の両将を出場す。勝誇れる一花君医専の猛将高島高文君何の苦も無く土に紛れしめ、やんやの喝采を浴びて得意然たりしは痛快の極みなり。続いて登大将第一部の雪耻戦なれば用意周到大事をとって油断せず。満身の勇と秘術を盡して医専の麒麟児生垣省三君を手玉に操る。終りて登君五人抜勝負に大活動をなし瞬く内に勁敵五人を屠って優勝せるなど如何に花々しく我等の眼に映じ吾等の耳に響いたか。今思い出してさへ若き血潮の逆流するような感がする。其時四周に起った天地に轟く拍手の音、或は賞讃の辞実に百雷の一時に落ちしが如きものであった。此光景は恐らく吾運動部創立以来の最大偉観だろうと思ふ。是で吾校は第二部に於て全勝せるなり。依って紫色燦たる優勝旗一旒と大花環を授与され応援団一同手の舞ひ足の踏む所を知らざりき。

打出せしは日既に西山に傾き暮色蒼然たる頃、選手一同は新聞社のカメラに納められ二百の六星健児は威風堂々帰路についた。凱歌を奏しながら松任町を一周し若宮神社にも詣でし後、校庭に集合の上浜岡先生の祝辞、登君の挨拶終って団長の音頭にて本校万歳を三唱し盛会裡に散会せしは午後十時過ぎであった。（「学友会報」第二八号）

そして、五月三〇日午後三時から、寄宿舎食堂内において、相撲大会優勝祝賀会が催されている。

九月一三日（火）、本校土俵場において「寄宿舎相撲大会」。九月二八日、「金沢医専相撲大会」。一〇月二日、「金沢二中相撲大会」。一〇月一一日、「金沢師範相撲大会」。一〇月一三日、「金沢商業相撲大会」。一〇月一五日、「金沢一中相撲大会」。一〇月二一日、「金沢工業相撲大会」。一〇月二五日、「小松中学校相撲大会」。以上の大会に、瀬戸、中村、米沢、藤森の活躍が目立った。

大正九年五月三〇日「第六回学生相撲大会」が快晴のもとに金石海浜で行われた。第一部は全敗だったが、第二部は本校が三勝一敗で月桂冠の王座についた。成績は左の如し。

	勝		負
藤森　繁（本校）		山崎（医専）	
一花茂雄（本校）		内田（師範）	
米沢保雄（本校）		某氏（医専）	
穴田（師範）		井甚作（本校）	

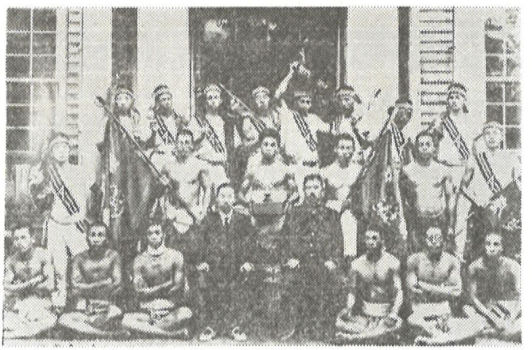
一〇月二三日に「秋季相撲大会」、一一月四日に「金沢一中相撲大会」等を中心に他校へ交歓試合に参加して五人抜きするなど大活躍した。

大正一〇年の「第七回学生相撲大会」は第一部石川師範、第二部は三年連続本校の優勝栄冠をにぎった。

大正一二年六月三日、六星四〇〇名の生徒は「一、薫風若葉に匂るとき　鼓の空に響くとき　龍勇虎術見えたる　吾等が選手雄猛けるよ。二、彼れにケハヤの術あらば　吾等にスクネの力あり　百万の敵何のその　雄猛ける吾等選手いざ。」と蕪城が丘の一角より、長蛇の列にして応援に出かけた。

この大会の予想はやはり第一部は二連勝をねらう七尾中と金沢二中、第二部は工業だった。七中の優勝にひかれ七尾商業も初参加し三五〇人の応援団が前日大挙して金沢にのりこんだ。しかし、第一部七尾中、第二部は意外にふるわずまとまりを見せていた本校が五勝二敗の好成績で優勝。第二部は粒ぞろいの工業が本校と互角の勝負を演じたが、結局本校がわずかに制して三勝一敗で優勝。このころから、松任町内のひいき筋が力をいれだし、つぎつぎとノボリ旗を贈り、現在も同校に一〇余枚が保存されている。

当時の新聞によれば、次のように記している。



第九回金石相撲大会優勝記念

第九回学生角力大会の盛況

真乎天下の大壮観

皆を決し土俵場裡熱火相搏つ

胃蠋れて憂々一劔戟交りて火花を散らす

各自秘策妙計の限りを尽くして善戦好防

栄誉に光る一部優勝旗は、農学校の手に帰す。選手応援団、雀躍して喜ぶ。

十二時、第一部の勝負は終りたるが、農学校は七名選手中、五つの勝星を得たるにつき、今回の優勝校と決定するや、同校応援隊の歓喜その極に達し、手も足もその処するところを知らざるものの如くあったが、当日、特に好意を以て出場した金石音楽隊の先導にして、農学校選手一同は土俵の上に列を作り、その奏づる勝利の譜に合して、大将山崎選手は土俵の中央に進み、行司が捧ぐる栄ある第一部優勝旗を受けて、茲に名誉ある第九回学生相撲大会の覇者となり、師範之に亜ぐ。

応援旗波を打ち

鳴物地響を立つ

……農学校では、蒸すが如き暑さの中に簑を着けた団長が、ホイホイホイと五百の団員を指揮命令していた。

二部も又農学校へ

トロフィー迄も授与せらる。

第二部に於ては、東西の勝星数同数となったので、規定により単星の多き西方の勝利となったが、西方でも工業、農学校の勝星同数だったので、単星数は農一、工零なれば農学校の勝と決定し、更に、両部を通じて最も星数の多かりし農学校は山県総裁寄贈のトロフィーを受くるの栄誉を得ることに決定したので、三時五十分より、それぞれの勝旗及賞品を授与し、

茲に第九回の学生相撲大会は目出度閉会した。（「北国新聞」大正一二年六月四日）

選手は次の通り。

山崎由一君（三年）　佐小田歳太郎君（三年）
平田善造君（三年）　仲市一雄君（二年）
蒲田一正君（二年）　浦伝四郎君（二年）
中村吉勝君（二年）

補欠選手

三宅長次君（三年）　角屋喜八君（一年）

この選手大奮闘のかげには、全校生徒の一糸乱れぬ応援練習があった。大会の二ヵ月前より、中庭で練習を始め、毎日夕方暗くなるまで応援歌の練習が続けられた。また、出発に際して金剣、若宮の両神社に参拝し優勝を祈願した。この苦しい応援練習によっても、六星魂のよりよき伝統が培われたのであった。

六月二日金沢高等工業学校開校記念相撲大会。九月一五日、石川師範。九月二二日、工業学校相撲大会。九月二五日、第二中学校。一〇月二〇日、高等工業学校。一〇月二五日、商業学校相撲大会。一一月二三日、第一中学校相撲大会。一〇月二〇日、富山農学校来校。以上の催し大会に三名ないし五名派遣した。

大正一四年第一一回北陸学生相撲大会は五日晦日の日に行なわれた。「オヽ彼の西涯に高く聳ゆる白山連峰は万古の雪を戴いて吾が相撲部の盛なる意気を示すと思われた憶！　何ぞ旺んなる哉？　又痛快なるか？　一刻万秋の思で待ちあぐみし（津田平作談）」

この日の参加校は、石川県一六校、富山県三校の一九校で、従来選手のまわしに各校の色別の布きれをつけていたが今回からこれをやめ、西軍のみに紅色の布きれをつけることとした。参加校増加とともに競技方法も一部

かわった。東西に分かれることはいままでどおりだが、参加校の選手数に比例して勝率から優勝を決めていたのを一校の参加を一部五名、二部三名と同一数にした。取り組みも一人二番勝負二回戦とした。従って、一校の取り組み数は一部は五名で一〇番勝負、二部は三名で六番勝負となったわけ。

本校相撲部選手名

第一部　角屋喜八・寺本勇松・吉田瑛瑛・川端健一・荒木外間

第二部　大井貫兵衛・高　貞蔵・加藤申二

競技は第一部一回戦から行なわれた。その結果、石川師範と本校が九勝一敗の同点数になった。しかし、規定により勝負星数採点の結果、石川師範が負け数一つ、本校二つあったため、石川師範優勝、本校準優勝になり、本校は、紅萠わる第二優勝旗及び花輪、個人賞として、出羽の海寄贈の締め込みを角屋が、特別賞は吉田がそれぞれ賞をうけた。一部三回戦で敗けた本校の荒木外間（現在豊蔵組労務課長）は「ぼくは二回戦の二番勝負でストレート負けしたので優勝できなかった。このため責任を感じて一〇日も頭をかかえて学校を休んだこともある……」と当時の想い出を話している。第二部は二勝四敗であった。

競技部

はじめ徒歩部と称したが、大正二年一〇月、四高主催の一〇マイクロスカントリーに本校から初出場した。大正五年第四三回各官公立学校選手競走大会（五周）に参加。やがて大正一二年に競技部と改称し、小松教諭を幹事に、滝田・村上・浦・岡田委員らは努力したが、大正期にあって優勝できなかった。

物寂しき秋も深まれる十月十二日北陸毎日新聞は北陸運動会の秋を彩る廿哩（金沢金石、金石松任、松任金沢）マラソン競走の壮挙を催せり。此日一天片雲だも認めず涼風肌を撫る好運動日和なり。午前九時一発の号砲高く天空に轟き渡りて開

会を報ずるや六〇名の北国健児躍如として金沢第一中学校運動場に集り各自が母校或は郷村の全責任を双肩に荷負ひ居る事とてその意気頗る旺んなり。午前十時学生団選手、同十時半青年団選手は夫々スタートを切れたり。飛翔するが如くに疾駆するユニホーム姿の雄々しさよ。広漠たる石川平野に鉄脚を誇りつつ勇往驀進、兼六公園下の石川赤十字社支部なる決勝点に到着したり。本校選手は遺憾ながらも優勝し得ず。（「学友会報」第二八号・大正九年一月）

学校行事抄

大正元年度

九月　二日　始業式挙行、大喪中特に生徒一同の心得すべきことにつき山中校長の訓示があった。

九月一三日　本日より三日間御大喪儀御挙行に付き廃庁仰出されて本校も謹んで三日間休業とした。本日午後五時運動場に斎壇を設け職員生徒一同厳粛なる遙拝式を挙行し久後教諭誄詞を捧読する。

九月一七日　本校創立記念日に付き休業

一〇月一一日　午後六時一三分職員生徒一三五名伏見桃山御陵参拝のため松任駅を出発する。

一〇月一二日　午前〇時四十一分米原着更に臨時列車に乗換え八時稲荷着一同下車徒歩にて桃山に向ふ。行程一里途中深草村に第十六師団あり、桃山に着くや間道より群衆と共に進みて広場に出る。ここに一同は列を整え服装を正し皇宮警手の指揮に従いて祭場殿の御前にすすみ頭上の御須屋を仰いで最敬礼し、本道より下山する十時より十二時までの間数隊に別れて御香宮、垣武天皇陵等に参詣、午後〇時二十五分桃山御発汽車にて京都に至り七条駅に下車、東本願寺駅御茶所にて昼食を喫しそれより又数隊に別れ、枳穀殿清水寺両大谷知恩院動物園大極殿等を巡覧、午後六時上珠数屋町林屋、井筒屋、沢田旅館に分宿する。十三日午前八分十三分七条駅出発、午後六時四十分松任駅

着、無事帰校

一一月　七日　農科第三年林業視学のため能美郡西俣方面へ修学旅行する。
一一月二三日　獣医科第二学年九師団へ見学のため修学旅行、即日帰校する。
一二月　五日　遠藤林業技師来校講話
一二月二一日　獣医科第三学年金沢輜重兵隊へ見学修学旅行、即日帰校する。

大正二年度

二月一五日　撃剣大会を開催する。
二月二七日　坂知事着任後始めて来校する。
三月一二日　本日より学年試験を行なう。

ああ今日は特用作物の試験だ、可成しらべた積りでにこにこ然として試験場に乗り込んだ、甲組は東方、乙組は西方と陣取りが先づきまっている。暫くするとガンガンと鐘が鳴った。頓て先生は教壇に立って今からと問題を書く。割合易い様に見えた。大丈夫だと自信して筆をとったがさあ、どうしたはずみか、一向鉛筆が動かない。頭を左右に振ったが何の効もない。そうすると全身の血潮は急流の様に流れ出す。顔はほてる、足が振ふ、震ふのを見せまいと無理に平気に装ふた。こうなると精神錯乱だ。順序もなく規律もなく前後ホコトンと云ふ始末。とうどう思ひきってほり出して舎へ逃げ帰った。定めて先生は面白く読まれたであろう。

試験問題

(一)　イ　特用作物ヲ分類シ其各科ニ付キ名一ツヅツ挙ゲヨ
　　ロ　本県下ニ適スル薬用植物名一ツヲ挙ゲヨ
(二)　草綿ノ気候ニツキ述ベヨ
(三)　大麻ノ収穫期節及収穫ニツキ述ベヨ

三月二二日　学年試験終了する。
三月二六日　第二十七回卒業証書授与式挙行する。
五月一二日　農獣三年生二四名東京方面へ修学旅行、一週間にて帰校する。
五月一三日　養蚕実習を開始する。
五月一七日　農科一二年生那谷、粟津方面へ遠足、即日帰校する。
六月一一日　獣医科三年生は産牛馬共進会見学のため輪島町に修学旅行し三日にして帰校する。
六月一六日　農商務省技師石崎芳吉氏の講演あり後三笠艦観覧のため職員生徒一同金石町へ遠足、即日帰校する。
六月二一日　愛知県立農林学校長山崎延吉氏の講演あり。
七月一六日　アイヌ土人山内為有外一名、船着由松氏と同行来行して講話をする。
七月一七日　故有栖河宮威仁親王殿下国葬当日に付き敬弔の意を表し休業
七月二六日　相川新海浜に於て三重県は黒田実之氏指導の下二週間水泳練習行なう。
七月三〇日　明治天皇御一年祭執行する。
九月　四日　一坪農業主唱者織田利三郎氏の講演があった。
九月二二日　金原明善翁の講演があった。
一〇月一一日　第一四回陸上運動会開催された。
一〇月二〇日　農科第三学年生は石川郡河内村方面へ林業見学のため修学旅行、三日間にて帰校
一〇月二八日　農科獣医科第三学年は石川種馬所へ実地見学のため出発、即日帰校。

一一月　八日　職員生徒一同大乗寺山へ遠足会を行なう。
一一月一五日　石川種馬所長田村補三郎氏講話があった。
一一月二一日　愛知県立農学校長山農学士及び第四高等学校教授八波文学士の講話があった。
一二月一八日　第六旅団長白井少将の軍事講話があった。

大正三年度

三月一〇日　陸軍記念日に付き午前九時陸軍歩兵第七連隊倉島富次郎氏来校講堂において記念講話があった。
三月二八日　午前九時本校第二八回卒業証書授与式挙行、知事代理次田理事官来校
五月　八日　午前一〇時五五分朝鮮人内地視察団六三名来校、午後二時五〇分退校していく。
六月一九日　熊谷本県知事来校される。
七月二一日　当郡宮保村字小川海浜において水泳開設される。
一〇月　四日　午前八時より運動会開催される。

大正五年度

一月二二日　加藤技師の講演があった。
二月　七日　剣道大会開催
二月一五日　柔道大会開催
二月二一日　松任美川間に発火演習を行なう。
五月　二日　農科第一学年生本日より二日間江能地方へ修学旅行する。

五月　三日　農科獣医科第三学年生本日より一二日迄関東方面へ修学旅行をする。当時の修学旅行のようすを記してみよう。

三年農獣関東地方修学旅行記抄

T N 生

五月三日

昼寝が覚めたのが午后五時、これで今晩の旅行も大丈夫だと風呂へ行ったり、携帯品を整へたりして午后八時といふに、制服に制帽、靴ゲートルのいでたちで校門を出でて、停車場に向った。九時の上り列車はプラットホームの前で静止した。僕等は乗った。汽車は動いた。見送りの諸友は万歳を三唱した。その声は余り悪い感じも起させなくて、何時までも何時までも後に響く様な気持がした。

車中談笑することが稍長かったが、夜が更けるに随って、談笑の声は鼾声に変り、各勝手な夢を貪った。

五月六日

徒歩で駒場まで行き畜産試験場を見た、ここには本校卒業生も居られて精しい説明を聞いた、豚の病気には腹水が多く、山羊には腰脱けが多いそうだ。不思議なのは豚の純粋バークシャ種の子にヨークシャが出来たといふことだった、遺伝学上の帰先とでもいふべきものだろう。

稍々あって長尾鶏を見た、暗室の中に入れ運動を禁じ、唯一日に時を定めてこれをなさしめるのだそうだが、我等には特別に出して見せてくれた、実に見事なもので、尾の長さが一丈三尺五寸とかあるそうだ、ここを辞してから東京帝国大学農科大学に行き我々農科は農学科の方を、獣医科は獣医科の方を参観した、我等は小林とか林とかいふ実科出の助手に案内せられて、農場及校舎を巡覧した。実験室で食パンの昼飯を喫し、本校卒業生市井君の案内で温室を見、又狸の子をも見て足を鍋島侯爵の農園に向けた、ここの農場主任はやはり本校の卒業生で江沼郡とかの人だそうだ、応接間で小憩し、茶菓を饗せられた後で農場を一周した、芝草の代りに矮生の樹木を高さ七八寸位に剪って、幾種類も密植してあった、春花の咲くとき、秋葉の紅葉するときの美観が想像された。バラをトンネル型に作った鉄柵に這はして緑のトンネルを拵へてあったのは

中々綺麗だった。ここを去ってから自由散歩となり自分等は東先生と一緒に日比谷公園へ行った。躑躅が花盛であった、それから宿に帰り、夜は各々足に委せて市中を徘徊した。

五月　四日　農科第二学年生本日より三日間福井地方へ修学旅行をする。

五月二三日　田植をする。

六月　七日　福島大将の講演があった。

七月二一日　本日より二週間徳光海浜に於て水泳練習を行なう。本日より二九日迄獣医科生徒本県立種畜場に於て夏季実習を行なう。

九月　七日　倉重学校医の衛生に関する講話があった。

九月一六日　創立記念式挙行長距離競走を行なう。

一〇月　七日　第一七回陸上運動会開催

第十七回運動会

秋晴れの空清々しき運動会の好季節となりぬ。先づ我学校に於ても十月七日グラウンドに於て第十七回運動会を開催せり。午前六時の号砲にて本日挙行の予報あるや、我々をして腕鳴り血湧くの感あらしめたり。恒例により早朝先づ戦死校友の招魂祭を執行したる後、会場に入れば中央には擬満艦飾の各国々旗折柄の秋風に飜翻たり。周囲には程良き所に会長席、来賓席、観覧席、クラス休憩所を設けられ掃除万端行届けり。午前八時半辰己会長代理厳に開会の辞を述べらる。次で一発の煙花天に轟くと同時に競技愈々開始せられぬ。先づ第一回二百ヤードの競走は宛ら飛行機の如く宙を翔って走り忽ち場を一週して悠々として賞品を受く。第二回物拾ひ次いで四百ヤード達磨・提灯・忍耐・障害物競走等順々に行はれた。其の間に観覧者は人の山を築き感興愈々高まれり。斯て予定番組の如く競技を進め第二十六回二人三脚を終へて昼食の為一旦休憩し午後一時クラスリレーより再び開会されたり。我々二百の健児は午前より元気益々加はり一回々々の競技に各級より歌ひ出す応援歌天地に充ち充ちて運動は益々佳境に入り。一等競技続々演ぜられ、競技者はベストを尽して疾駆し見物人は手に汗

を握って声援を与ふ。時に三年生の唱歌あり。続て第三十八回小学校選手競走あり。四十三回には官公立学校選手競走など興味愈々深く、其の声援益々高まれり。猶又農科第一学年生の仮装行列は大いに観衆の喝采を博せり。それより来賓職員、卒業生競走を経て第五十三回の各級選手競走に至るや各級の野次声援更に猛烈を加へ七週の間殆んど場内破るるばかりなりき。かくて競技全く終を告ぐるに至るや一同集合、会長の閉会の辞あり一同万歳を三唱して散会せり。時に五時半、日は西海に傾ける頃なりき。

一〇月一六日　金沢郵便局員の簡易保険に関する講話があった。
一〇月二六日　農科第三学年生本日より三日間羽咋郡に森林視察旅行をする。
一一月　六日　第九師団観兵式参観
一一月一一日　獣医科第三学年生石川種馬所へ向けて修学旅行をして即日帰校する。
一一月一三日　生徒一同高尾山記念林へ遠足して羅漢柏補植えをする。
一一月二四日　農科第三学年生は農事試験場及び製紙会社を見学即日帰校する。
一二月一七日　大山公爵国葬に付敬弔を行なう。

大正六年度

一月一三日　剣道寒稽古始
一月二〇日　柔道寒稽古始
二月一七日　剣道大会開催
二月一八日　柔道大会開催

大正一二年五月二八日、片山海軍中佐を招き、その講演会が午後八時から本校講堂において開かれた。「長閑な春の一と夜、斯くして此処松任の一角には霊妙なオーケストラに、澄みきった肉声に、暫らく恍惚の境が現出

されたのであった。人々が講演によって知性の満足を得、和らぎられた魂に音律の余韻を抱いて、家路についたのは凡そ十一時頃でもあったらうか、紺碧の空高く美しい月が皎々と輝いて居た。」（「学友会報」第三二号）

プログラム　（海軍記念講演音楽会）

一君が代合唱　一同
一開会の辞　富田校長
一管弦楽　海戦のあと　本校職員生徒
一講演　片山海軍大学校教官
一歌劇　夢の国　曙日曜学校生徒
一独唱　ふなうた・童謡　櫛野てる子嬢
一ヴアイオリン合奏　一原善雄氏・建部　亮氏
一独唱　大海原　奥野直政氏
一独唱　たゆとふ小船　関　斎子嬢
小唄

一ヴアイオリン独奏　海軍進行曲　小林教諭
一合唱　日本海々戦の一節　関　斎子嬢
海を憶ふ　櫛野てる子
一管絃楽　黄海々戦記念曲　本校職員生徒
一閉会之辞　富田校長

在学中の学校行事の数々は、忘れがたい生涯の思い出につらなっているものである。

夏季の水泳大会、毎年、相川新・宮保・徳光などの海浜で、一週間にわたって水泳講習会が行なわれた。泳法は、日本古来の観海流で、抜き手を切って泳ぎまわったものである。最終日には水泳テストがあり、一〇町、二五町、三里半といった試験が、順次に行なわれて合格者を出した。遠泳テストは相川から金石までで、疲れたものは、船中から口に氷砂糖を入れてもらい、勇壮な陣太鼓による音頭に元気づけられ、疲れも吹っとばして泳ぎきったものであった。

剣道・柔道の武道大会は、毎年一月か二月に行なわれた。それは、時期的に農場がわりと忙しくないからであ

った。道場割れよとばかり元気のよい声を張りあげ、若い選手たちは、実力の限りを尽くして覇を争った。

また、この時期に、弁論大会や音楽会も催された。とくに当時は弁論大会の盛んなときで、若い弁士たちは悲憤こうがいし、机をたたき胸を張り、若い声を講堂いっぱいにみなぎらせて、自己の理想、信念を聴衆に訴えた。弁士は、本校選手の他に、四高・医専・師範・県内各中学校、農事試験場技手らが参加した。

冬の学校行事の楽しみに、もう一つある。それはウサギ狩りである。場所は安原専光寺浜・高尾・額・蔵山地区で、がい歌をあげた獲物は、さっそくメッタ汁にし、持参の大きな握り飯で舌鼓を打ったものである。そのほか、運動会・書道展・わら工品展などあげればきりがない。

修学旅行も大きな楽しみの一つであった。関東修学旅行中、駒場農学校を見学していたとき、馬耕中の馬が暴れ出し、どうしても静まらないので、見学中の本校生徒が見るに見かねて、馬の手綱をとって御すると、今まで荒れに荒れていた馬が、うそのようにおとなしくなったという話が残っている。これによっても本校生徒の心意気がわかろうというものである。

大正一二年一二月二五日現在で、「学友会」の会長竹内秀雄校長、副会長三浦教諭のもとに、文芸部・弁論部・雑誌部・運動部・庭球部・柔道部・相撲部・剣道部・水泳部・徒歩部・競技部の部があった。

四　石川県立農業教員養成所の発足

農業補習学校の変質

実業補習学校は、明治二三年の小学校令にはじめて規定されたが、実際には、同二六年一一月制定された実業補習学校規程にもとづいて発足したものであるが、その目的は同規定第一条につぎのようにうたわれている。

第一条　実業補習学校ハ諸般ノ実業ニ従事セントスル児童ニ小学校教育ノ補習ト同時ニ簡易ナル方法ヲ以テ其ノ職業ニ要スル知識技能ヲ授クル所トス（「明治以降教育制度発達史第二巻」）

これによって明らかなように、実業補習学校は、勤労青少年を対象として、小学校教育（普通教育）の補習を行なうと同時に、低度の職業教育を施すことを目的としたものであった。

ついで明治三五年一月同規程の改正が行なわれて、右の第一条は、

実業補習学校ニ於ケル教科目の修業期間及教授時数ハ土地ノ情況ニ依リ適宜、之ヲ定ムベシ（前掲発達史第四巻）

と改められ、普通教育の補習と低度職業教育という実業補習学校の目的は無視されたかに見えたが、しかしこの改正について文部省が示した「改正ノ趣旨」は、つぎのようにのべているのである。

実業補習学校ハ各種ノ実業ニ従事シ又ハ従事セントスル者ニ簡易ナル方法ニ依リ其ノ職業ニ要スル知識技能ヲ授クルト同時ニ普通教育ノ補習ヲ為シ両者共ニ其ノ目的ヲ達スルヲ以テ実業補習学校ノ本旨トナスベキコト専ラ普通教育又ハ実業教育ヲ施スカ為ニ設ケラルルモノト（ハルカ）覈ニ其ノ趣旨ヲ異ニスル所ナリ（前掲発達史第四巻）

これによると、明治二六年規程の第一条の目的が、同三五年改正規程にも生きていることが明らかである。ただし、二六年規定では「普通教育の補習と職業教育」であったのが、三五年「改正ノ趣旨」では、職業教育が主で普通教育が従となっている点に注意すべきである。ここに実業補習教育の目的の変化がすでにあらわれているとみてよいであろう。

続いて大正九年一二月、同規程は再び改正され、その第一条は実業補習学校の目的をつぎのように規定している。

実業補習学校ハ小学校ノ教科ヲ卒ヘ職業ニ従事スル者ニ対シ職業ニ関スル知識技能ヲ授クルト共ニ国民生活ニ須要ナル教育ヲ為スヲ以テ本旨トス

すなわち、この改正によって従来の実業補習学校の目的から「普通教育の補習」が脱落し、かわって「国民生活ニ須要ナル教育」、つまり国民教育が加えられたのである。そしてこれは、大正六年の臨時教育会議の答申の精神のあらわれであった。

すなわち、臨時教育会議は、大正六年一二月の「小学教育ニ関スル答申㈡」の中で、

四、補習教育ヲ義務トスルハ今日尚其時期ニアラサルモ益々之カ内容ヲ改善シ其ノ普及発達ヲ図ルノ必要アリト認ム

とのべ、さらにその「理由」の中で、

然レトモ補習教育ノ必要ナルハ時勢ノ進運ニ鑑ミ明白ナル事項ナルヲ以テ先ツ補習教育ニ従事スル教育ヲ養成スルニ適切ノ方法ヲ講シ、又其ノ教育ノ優遇ヲ図ル等補習教育ノ成績ヲ挙ゲムコトヲ期シ、益々其ノ普及発達ヲ企リ一般国民ノ実力ノ充実ヲ期スルハ緊急ノ要務ナリトス（海後宗臣編「臨時教育会議の研究」）

とのべている。「一般国民ノ実力ノ充実ヲ期スル」ために、実業補習学校の目的として、「国民生活ニ須要ナル教育」が新たに加えられたのである。こうして、明治二三年の小学校令ではじめて規定された実業補習学校は、今や実業教育と国民教育を目的とする、中等学校に準ずる学校としての位置づけを与えられたのである。

その課程は、尋小卒業者を入学させる前期（二年）と、前期終了者および高小卒業者を入学させる後期（二年ないし三年）に区分され、修身・国語・数学・理科および職業に関する科目、家事および裁縫（女子）を課し、とくに適当な学科目において、「国民公民トシテ心得ヘキ事項ヲ授ケ又経済観念ノ養成ニ力ムルヲ要ス」とされたのである。また新規程の実施とともに、実業補習学校の教員は、訓導から教諭、助教諭に改められ、専任教員

を配置するための国庫補助の途が開かれ、教員養成のための実業補習学校教員養成所令が制定された。

なお大正一三年には実業補習学校公民科教授要綱が制定され、法制・経済・社会について国民として心得べき項が明示され、普通選挙実施対策として、勤労青少年に対する公民教育＝国家主義教育の体系化が進められたのである。

以上の概観によって明らかなように、実業補習学校は、「規程」上から見て、大正末期において、小学校に準ずる学校から中等学校に準ずる学校へと変質するのである。そして、このような変質をもたらしたものは、一つには中等教育に対する国民の要求の高まりであり、二つには、こうした国民の教育要求を吸いあげて自らの利益に奉仕させようとする支配階級の要請であった。実業補習学校はこのような変質を遂げたところで昭和初頭の大恐慌を迎えたのである。（小松周吉「昭和初期の石川県における農村青年の学習活動について」）

大正二年八月三日から同月二三日迄の三週間、本校において小学校教員農事講習会を開いた。講師及び講習科目は左の通りである。

農政・肥料　楢林林二郎　　土壌・農業経済　　久後　基一
畜産　　石堂　清彝　　普通作物・園芸・害虫　東　四郎
林学　　小田春太郎　　作物汎論・作物名論　本保　常次
植物病理・養蚕　水野勝太郎

以上のように、国家及び社会の要請によって勤労青年に対する実業補習教育の機運が高まっている時、大正七年四月から石川県立農業教員養成所を本校に付設し、四月四日、江幡辰三郎が養成所教諭兼農学校教諭に任命され、四月一五日、農業教員養成所主事に任命された。四月一三日、知事代理富永内務部長・金井理事官・毎田視

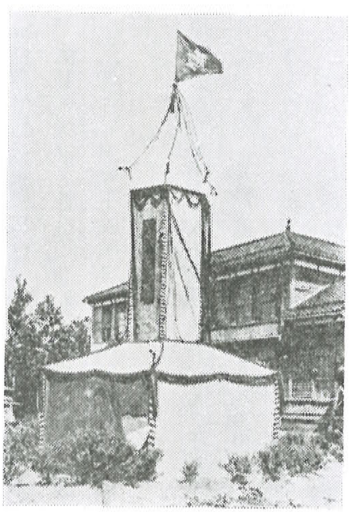
学臨場の下に農業教員養成所開所式及び入学式が行なわれて輝かしいスタートを切った。第一回の入学者は二八名で、入学資格は、本科正教員の有資格者であり、この期に限って一一月一五日に第一回の卒業式が知事代理金井理事官・毎田視学官臨場の下に挙行された。

大正一〇年四月から「石川県立農業教員養成所」が「石川県立実業補習学校教員養成所」と改称された。翌一一年二月一五日実業補習教育の学科課程の標準が示され、これによって各補習学校の学科課程が定められた。いづれも師範学校の卒業者を基幹として、小学校の本科正教員の免許を持ち、小学校教員の経験がある者に対し、実業補習学校の教員として必要な技能・知識の教育を行なってきた。詳しくは第四章で参照されたい。

五　創立五十周年記念

記念式典

記念式典は協賛会員来賓父兄らがたくさん参席して、祝賀気分満点の大正一四年九月一三日午前九時、知事閣下並びに来賓が入場し、花火の合図と共に式が始まった。九時四一分に一同起立して国歌合唱。竹内秀雄校長が忝しく勅語を奉読して降壇されると全国で最も古い歴史を持つ本校に対する長知事閣下の告辞があった。来賓祝辞並びに祝電披露は、金沢医科大学学長須藤憲三氏、石川県下郡長総代石川郡長城森省三氏、田中喜太郎松任町長、県下中等学校長五坪茂雄氏の祝辞あり。その他数名の祝辞があったことを記しておく。



創立50周年祝賀記念塔

次いで後掲げるように各方面からの祝電を披露。盛夏のような暑さの中に生徒総代角屋喜八の答辞があって、一〇時二五分閉会した。

校長式辞

本日我が石川県立農学校ノ創立五十周年記念祝賀式ヲ挙行スルニ当リ県知事閣下ヲ首メ多数貴賓ノ御来臨ヲ忝クスルヲ得タルハ本校ノ尤モ光栄トスル所ナリ

顧ルニ本校ノ創立ハ明治九年七月石川県金沢区地方勧業場ニ農業ノ篤志家ヲ集メ農書ヲ講シ同年十二月同場ニ農学科ヲ設ケタルヲ以テソノ濫觴トシ而モ本邦中最古ノ農学校ナリ同十九年四月羽咋郡火打谷ニ更ニ同二九年九月能美郡小松町ニ移転シ同三四年五月石川県立農学校ト改称シ同三五年三月規模ヲ革メ現在ノ地ニ移リ又大正十二年三月学則改正行ハレ新ニ修業年限五ケ年ノ農科第一部並ニ林科ヲ設ケテ今日ニ及ベリ此ノ間五十年ノ長月日ニ亘リテ本校ノ卒業生ハ既ニ千五百有余名ノ多キニ上ル之等ノ卒業生ハ入リテ郷里ニアリ耕作ニ親ミ出デハ社会ニ立チテ斯界ノ開発ニ励ム其ノ功績タルヤ蓋シ尠クナラザルモノト信ス則チ本県下農村ニ於ケル中堅人物ハ実ニ本校卒業生ノ占ムル所ト云フベク現今発展ノ趨勢ハ実ニ本校卒業生ノ存在ニ起因スルモノナリ此ニ本校ハ密ニ省ミテ意ヲ強シ聊カ社会ニ対シテ誇ヲ感ズルト共ニ此ノ意味ニ於テ本校ノ創立ヲ記念シ益々尽キザル前途ノ進展ヲ期シテ衷心慶賀セント欲スルモノナリ翻テ本校今日ノ隆盛ヲ見ルニ至リタルハ偏ニ賢明ナル当局並ニ県民ノ本校ニ寄セラレタル熱誠ト旧職員諸士ノ致サレタル功績ノ結果ニシテ謹ンテ感謝ヲ捧ケント欲ス　一面同窓会ハ此ノ挙ニ賛シ種々記念ノ事業ヲ計画セラル、コレ全ク母校ヲ熱愛セラルル至誠ノ発現ニシテ是亦甚深ク感謝ヲ表スベキナリ、我等幸ニ職ヲ本校ニ奉ジ図ラズモ此ノ記念祝典ニ際会シ過去ヲ想ヒ、現在ヲ考ヘ、更ニ想ヲ将来ニ馳スルトキ無限ノ感激ニ打タルルヲ覚ユ此ノ秋ニ方リ我等ハ宜シク本校ノ歴史ノ尊キヲ痛感スルト共ニ責任ノ重且大ナルニ想到シ益々精励事ニ当リ以テ既住ノ名声ヲ失墜セザランヲ期スベキナリ

尚此ノ際生徒諸子ニ望ヘテ深ク反省自覚ヲ促サザルベカラザルモノアリ夫レ農ハ国ノ基ニシテ百業ノ母ナリ、諸子ハ此ノ貴キ農業ヲ以テ自己ノ天職ナリトシテ本校ニ来リ学ビ以テ他日邦家ニ報ズル所アラントスルモノナルガ諸子ハヨク前述ノ如キ光輝アル歴史ヲ有スル本校タルコトヲ自覚シ其ノ栄誉ヲ失墜セザランコトヲ望ム、サレド栄誉ノ存スル所ハ責任ノ存スル所ナリ諸子ハ校運ノ発展ト校風ノ振起トヲ図ルベキ重大ナル責任ヲ感ゼザルベカラズ、由来我カ校ニハ農村独特ノ美風タル

質実剛健ノ存スルアリ諸子ハ此ノ伝統的美風ヲ失フコトナク大イニ校風ノ発揚ニ努ムルノ覚悟ヲ要ス、冀クバ諸子ヨ、栄アル今日ヲ機トシ深ク自己ノ天職ノ尊キヲ思ヒ愈々刻苦学ニ勉メ先輩諸子ノ遺サレタル意義アル歴史ヲシテ更ニ一段ノ光彩アラシムベク努力セラレンコトヲ

終ニ県当局並ニ県民諸士ノ本校ノ前途発展ノタメ旧ニ倍シテ一層ノ同情援護アランコトヲ念願シテ止ザル所ナリ

大正十四年九月十三日

石川県立農学校長　竹内秀雄

※　※　※　※

知事告辞

本校ハ遠ク明治九年十一月金沢市ニ農事講習所ヲ創設セシニ起源シ爾来校舎ヲ羽咋郡火打谷、能美郡小松町ニ移転シ同三十五年三月現在ノ地ニ移リ以ニ今日ニ及ベルモノニシテ其ノ間年ヲ閲スルコト五十年、卒業生ヲ出スコト無慮千五百有余、創立ノ古キ真ニ全国稀ニ見ル所ナリ

而シテ之等卒業生中県内ニ在住シテ農業ノ実務ニ従事シ地方ノ啓発ニ努力セルモノ多キノミナラズ県外又ハ遠ク海外ニ雄飛シテ農業其ノ他ノ殖産業ヲ経営シ斯界ニ貢献セルモノ少ナカラサルハ本校ノ為メ将タ国家ノ為慶賀ニ堪ヘサル所ナリトス

惟フニ我ガ国ハ古来農業ヲ以テ国ノ大本トナシ夙ニ斯業ノ発達ヲ見タリト雖モ一般世運ノ進歩ニ比スレバ尚之ニ伴ハサルモノ少ナシトセス即チ近時唱導セラルル農村振興問題ノ如キハ当事者ノ卒先考究ヲ要スヘキ所タラズンバアラズ殊ニ本県ノ如ク県民ノ大部分ハ農業ニ従事シ其ノ生産額ハ毎年約七千五百円ニ達シ各種生産総額ノ約四割ニ相当スルノ事象ニ察スレバ其ノ消長ハ直ニ県勢ノ隆替ニ関スルノ極メテ著シキモノアルヲ認メラレ本校卒業生ニ俊ツノ甚タ切ナルモノアルヲ感セシム斯ノ秋ニ方リ本校創立五十年ヲ記念セムカ為メ本日ヲ以テ盛大ナル式典ヲ挙ゲ校運発展ノ蹟ヲ温スルト共ニ卒業在学ノ各生徒諸子ノ為メ一新生気ヲ加ヘラルヽハ洵ニ恰好ノ企画ト謂フヘシ

希クハ職員竝ニ生徒諸子励精自重益々本校使命ノ十全ニ意致シ永年ノ歴史ニ更ニ一段ノ光輝ヲ加ヘ国家切実ノ期待ニ副ハムコトヲ

式ニ臨ミ言所懐ヲ陳ヘテ校運ノ隆昌ヲ祝ス

大正十四年九月十三日

石川県知事正五位勲三等　長　延　連

総代
小学校長総代祝辞　石川郡第二部小学校長　宮下茂生
江沼郡支会長祝詞　江沼郡支会長　田中喜太郎
松任町長祝辞　石川郡松任町長勲三等　三浦長一郎
農蚕学校長祝辞　河北農蚕学校長　城森省三
石川郡長祝辞　石川郡長正七位　須藤憲三
医科大学長祝辞　金沢医科大学長　神田重義
石川県会議長祝辞　石川県会議長

祝賀



永井柳太郎

式当日名士・旧職員・同窓生其他ヨリ発セラレタル電文左ノ如シ

過去五十年間ニ於ケル貴校ノ農業教育上ノ功績ヲ感謝シ創立記念式ヲ祝スルト共ニ校運ノ将来益々盛ニシテ農業ノ進歩ニ貢献セラレンコトヲ望ム

武部実業学務局長

五十年記念ノ盛典ヲ祝シ尚将来ニ期ス

文部省督学官　小出満二

盛会ヲ祝シ併セ学校ヲシテ今日アラシメタル各位ノ御尽力感謝ス

外務参与官　永井柳太郎

他二四名の方々の祝電披露があった。

生徒総代答辞

天高ク馬肥エ一望千里ノ広野モ今ヤ幾多農民ノ汗ト脂トニ依リ黄金波打ツ楽園ト化スルノ秋吾等ガ学ビ舎石川県立農学校ハ創立以来春秋移リ変リテ五十周年為ニ知事閣下始メ貴顕紳士並ニ先輩諸有志ノ寵監ヲ辱クシ盛大ナル祝賀ノ典ヲ挙ゲラル回顧スルニ吾ガ石川県立農学校ハ明治九年尾山ノ一角ニ於ケル微々タル農業講習所ガ其ノ揺籃トナリ年ト共ニ来ル波乱曲折

ノ中ヲ当局者ノ深大ナル御指導ト社会識者及ビ農業当事者ノ厚キ助力後援ノ下ニ今ヤ農界ノ先駆者トシテ厳然屹立スルコト得タリ、之ノ間先輩卒業生ヲ送ルコト無慮千六百人吾等幾多ノ先輩ハ農界ノ先導者トシテ、或ハ国家枢要ノ官界ニ或ハ実業界ニ遠キハ満鮮、シベリヤ、南米ノ広野ニ新天地ヲ開拓シ以テ国家ノ為メニ将又農界ノ為ニ貢献セラルルアリ、之レ我等後輩トヅテ国家ノ為メ農界ノ為ニ衷心歓喜ニ堪エザル所ナリ然レドモ熟ク時勢ヲ鑑ミルニ吾ガ農界進歩シタリト雖モ未ダ幾多発展ノ方途アリ吾ガ農業技術如何ニ進歩シタリト雖モ尚研究ノ余地アリ、外ニハ人口増加ニ伴ク食糧経済ノ諸問題内ニハ骨肉相食ム小作争議ノ頻々タルモノアリ、明治以来観ジ来レバ半世紀ノ吾ガ農界ノ進歩尚遅々タリト言ワザルヲ得ズ、此処ニ於テ吾等ハ本校五十周年ノ栄典ヲ祝フト共ニ国家将来ヲ慮リ之ノ渾沌タル農界ノ先導者トシテ躬テ活社会ニ活動スベク今ヨリ更ニ学術技芸ヲ練磨シ以テ本校ノ面目ニ一新機軸ヲ抽出セン事ヲ期ス一言所感ヲ述ベテ答辞ニ代フ

大正十四年九月十三日

石川県立農学校生徒総代　角屋善八

謝恩表彰

永年母校に勤続して努力された石堂清彝先生の二三年二ヶ月を筆頭に一三名の方が表彰式に望み、記念品を贈って感謝のしるしとした。

追悼会

いままでの創立五十年の間になくなった人たちの諸霊を招いて哀悼の意を表することになった。静寂の中に追悼の詞が朗読される約二〇名に及ぶ僧侶の伽陀を読み上げる音吐はおりからの楽の音と共に人々の心に透徹した。やがておわって、八八歳の老体を提げて、松本白華老師は、まず焼香をおえて導師として中央の座に着く。阿弥陀経は再び場のすみずみまでひびきわたった。その中を焼香がひっきりなしにつづき、ありし日の学友を偲んだのである。

祝宴会

同窓会並びに来賓の県官各位、県各中等学校長、その他有志及び本校職員の方々は祝宴会場としてあてられた石川郡自治公会堂に参集された。

講　演　会

講演会は、一同入場、敬礼に続いて、会長の竹内秀雄校長は、

只今から講演会に移る事に致します。本校の産み出しましたる卒業生諸君は先刻来重ね重ね御聴取りになりました通り小にしましては一家の経営一村の経営に任ぜられ又進んでは県郡乃至他県に出られまして又官庁と致しましては本省方面の方に発展せられ、或は朝鮮、満州、台湾、北海道の遠くに発展せられて居りまして夫々斯界の為めに努力になって居られますが尚国内ばかりで無くして国外にも其の面目を発揮されつつ有る様な次第であります。此の際におきまして多数先輩の御集まりを得まして誠に光栄に存じて居る次第でありますが暫くの間に多数の方の御話を願ふ事が不可能で有ると心得まして今此処に演題を掲げました御両君並に本波氏より諸君に対しまして御話下さる都合になりました。

どうか暫くの間御静聴を得まして協賛会の事業として光輝あらしめる様に深く御願する次第であります。一言開会に当りまして蕪辞を述べて開会の辞と致します。（「五拾周年記念号」）

講師　本波慶次郎・竹内　進・山岸　錠松（旧中野）・塩谷清太郎

最後に、竹内校長は

「記念の講演会は予想以上の盛会裡におわる事ができまして協賛会長と致しまして誠に幸に存ずる次第であります。

此の際私は同窓会の会長として皆様に御願して置きたいことがあります。同窓会は卒業生各位の同心協力に依りて発足し得るものと心得ます。どうか此の五十年の祝典に協賛翼力せられました様に今後は一層同窓会の為め御尽力せらるる様御願ひ致します。卒業生諸君は平素互に進退を知らせ合ひまして動静を明にしたいものであります。居所の移動は必ず学校へ通知して貰ふ様に宣伝方御尽力を御出席の各位に願ひたひと思ひます。

居所が明になりますと学校又は同窓会が中心となりて一層連絡を取り礎を堅めて活動が出来ると存じます。協同一致により農村振興を図り斯業の為め成績を挙げ度存じます。（「五拾周年記念号」）此の席を借り御出席の各位に繰返して特に御依頼して置きます。」

記念の講演会は之を以て終りと存じます。と述べ盛会のうちに幕を閉じた。

提灯行列　五〇年間の発展を祝う今日の日に夜をいろどる提灯行列があった。午後七時二〇分、全校生徒は運動場に集合して、松任町民老幼あわせてその数はたいへん多く、手に手に打ち振る赤く丸い提灯は運動場にうずをまきながら長蛇の行列をつくって、一部三年生の作った大達磨を先頭に町内を練り始めた。打ち上げる美しい花火が夜空にあがり、それを見ておどる心はますます元気ついて七〇〇余りの赤の球、それは若人の心を象徴するようなものであった。行列には次の歌を連呼した。

一、遠き神代に承け継ぎて　三、鍛へ修めしそが技を
語り伝へし今の代に　試すもろびと外つ国に
瑞穂の国の名も実も　拡ごり見せて今日の日を
担ふは吾等我が名よ　祝ふは我等我が校よ

二、紫雲英菜の花百の花　四、星が田中を天の川
黄金波打つ幸の日を　流れつきせで万代に
今ぞ迎ふる五十年　光も清し六星校
共にことほぐ県民　宵の世界を照すかな



創立五十周年祝賀提灯行列

そして、いたるところで応援団長の発声にて農学校万歳歓呼の声天地にとどろくその意気はすさまじく、この喜びのあまりに幾人かの先生を胴挙げして本日の最後としての生徒のよろこびをあらわした。午後一一時にめでたく散会した。

記念運動会　九月一四日打ちあげる花火は秋天高く響き、田圃の面を伝って遠くに住んでいる人たちにこの佳き日を知らせた。

一〇時三五分、校長の開会の辞により我が校全部の六星健児の血は躍動して各クラスの気力は応援歌にまじって旗ふる様子も秋の日ざしに白く映えて美しい。二〇〇メートル競争をスタートに、載嚢スプーン・一人一脚・提灯競争・竹馬・郵便・障碍物競争と順を追い、マスト旗取り・パン食い競争・農装競争等は場内を爆笑させ、若い血潮の生徒の歓声は遠くへこだました。

剣道部の全生が紅白の二組に分れて、八幡大菩薩の長旗二旒を秋風に揺がし、各自が背に立てる印しの小長旗、列をなして場内に繰込む勇姿、宛として昔日の倭冠を見るが如く、丁々発止と入乱れて戦ふ両軍の気勢は相伸し、観衆はすべて手に手を汗し息を飲んで、視線は之に集中する。赤旗軍の勝利に帰し、異彩を放った野試合はここに終を告げた。午後は寄宿舎生の盆踊りで人気は再び湧き返った。囃し立てる太鼓の音、それに唱和する歌・踊り舞ふその姿、元禄の風俗の再現かとも思はれ、来り集ふ大衆千五百の心も自ら踊っていた。かくして二十分程を経て踊りは終り、大拍手裡に退場、再び起る各級の応援は熱血児の気概の発揮であった。千五百米競走は各級の参加なれば応援は猛烈を極めた。第一着は二部三年佐小田君の五分三十八秒、走高飛の最大は奥野君の四尺七寸であった。

継いで二部二学年の学校教練が始った。拍手歓呼の声、楽隊の打鳴らす太鼓の響き、笛の音、鐘のざはめきなど調は相合して、足並揃った一隊は、先づ運動場を一週したが、隊伍堂々、既に敵あらば戦わずして遁走せしむるの勢がある。兵営内に於ける軍事教練のそれに劣らずとの評判があった。冷評ならざりしは倉橋教官の熱誠なる指導の表れである。而も一斉射

撃の銃声、三度共に見事なりし撃出よ！　その轟秋天高く到り、流血惨たる戦場を偲ばせ、観衆の血は湧き、思はず歓呼していた。国民体操は各学年全部集合し、横浜先生の指揮に一挙一動些の違背者なく、パッパッと変化する有様自ら愉快をそそった。

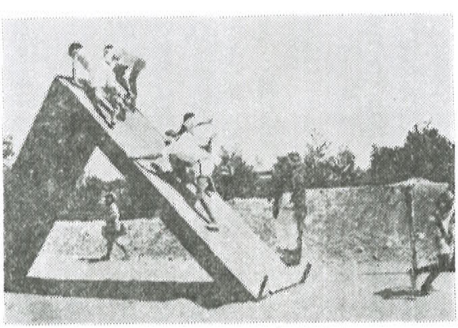
ヨイショヨイショの掛声で運動場を駆けりながら場を半廻したその様子は最後に添加した面白いものであった。第六十回より各小学校尋常科よりの選手競争に入る。まづ運動場一周に、第一回・第二回の競走をした。

高等小学校選手競走（二周）
補習学校選手競走（二周）
各部百足競走
六十四回　卒業生三〇〇メートル競走
六十五回　ダルマ割。一般観覧人
六十六回　卒業生提灯競争

（「五拾周年記念号」）

各学年選手競争の熱狂なレースを展開して全部の競技は終了した。時は午後六時四〇分だった。閉会を知らせる数発の銃声をききながら、帰りゆく人々の声は四散して全く消えて静寂の夜に入った。

大正一五年（一九二六）四月一日から、「石川県立農学校」から「石川県立松任農学校」と校名改称し、修業年限五ヵ年制の林科を廃止して、修業年限三ヵ年（高卒）とした。



創立五十周年記念運動会

第四章　石川県立松任農学校時代

第四章　石川県立松任農学校時代

第一節　戦時体制下の教育

一　嵐の中の時代概観

ファッショ化から民主化へ

第一次大戦後の日本は、戦時中の空前の大繁栄のあとをうけて、慢性的な不況の中にあった。大正末期から昭和の初期にかけて、都市には失業者があふれ、農村では、娘を売る悲劇が相次いでいた。これがために県下の中等学校の生徒数も激減し、中途退学者が増加していった。昭和二年の金融恐慌、昭和四、五年頃の米国をはじめとする農業生産の不安など日本の経済的行き詰りをみた。政府・財閥・軍部の目は、不況からの脱出の道を大陸に求めた。昭和六年九月、関東軍の謀略によって、大陸侵略劇の幕が切って落とされた。翌七年満州国建国を宣言した日本は、大陸市場の一部を手中におさめたが、同時にそれは、以後一五年にわたる中国民衆との闘争の泥沼化の第一歩であり、さらに八年三月の国際連盟脱退に始まる国際的孤立化へ足を踏み入れたものであった。一方国内においては、七年五月のいわゆる五・一五事件をはじめとして、軍部、右翼台頭が著しく、相次ぐテロ事件やクーデター未遂事件の後に、一一年にはついに二・二六事件の発生をみた。この間、学問研究、思想の自由に対する圧迫も、一層強まり、八年の京大滝川事件、一〇年の

東大美濃部事件、一四年の東大河合事件、さらに忠実な天皇制捧持者である津田左右吉博士の古典研究が罪を問われる等、世はあげてファシズム化へ突き進んでいった。

昭和一三年、重慶を脱出した汪兆銘が南京にあって親日反共の新国民政府を樹立した時、ヨーロッパではドイツ対英、仏の開戦となり、第二次世界大戦の幕が切って落とされた。日本は独、伊枢軸国と三国同盟を結び（昭和一五年）やがて翌年ソ連との間に中立条約を締結するという微妙な国際関係を持ちながら、アメリカとの国交調整・南進政策の進行にとまどいをみせた。

昭和一六年には、日本の南進に備える米・中・英・蘭のＡＢＣＤ包囲陣突破のため、米英両国との決戦が特に陸軍により強調され、政権が近衛文麿から東条英機に移るや、一二月八日、ついに太平洋戦争（いわゆる大東亜戦争）に突入することとなった。この間、アメリカとの交渉に一縷の望みをもつ政府部内の一部によって戦争回避の努力がはらわれないでもなかったが、統帥権が国務から独立しているという特殊な事情から、軍部の意見がついに国家を引きずって、この不幸な戦争に突入していったのであった。

フイリピン・マレー・ホンコンからビルマ・ジャバにおける緒戦の戦果により、一時的に南太平洋を制圧し、国民が軍報導部の戦果放送に拍手を送っている間に、態勢をととのえたアメリカ軍の大陸海空軍の総反撃によって、昭和一七年にはミッドウエー海戦に大敗し、一八年にはガダルカナル島を失なった。同じころヨーロッパ戦線でも、ドイツがスターリングラード包囲戦に失敗し、ソ連軍の反撃のため敗退の状況へ傾きつつあった。

戦争激化にともない、国内は食糧不足を招き、かつ戦争による戦死者の数は日毎に増加し、国民の動員もまた次第にその数をふやし、国内に残る成年男子は非常に減少したのである。銃後には、婦人、子供、老人が多く、国策としての食糧増産も声ばかりで、その実績があがらなかった。昭和一六年の皇紀二六〇〇年記念祝典を最後

の饗宴として、政府は高度国防体制統合のため、はっきりとした「国家総動員法」を施行し、政党をはじめとするすべての政治団体を解散して大政翼賛会を結成、いっさいの労働組合を産業報国会に改組した。戦勝の望みを失なった昭和一八年にはいると、大日本言論報国会により、言論、思想の統一が強化され、国民服の制定やゲートル着用によって服装の自由をうばわれた。特に、学徒動員体制の確立によって、大学、専門学校の学生たちが次から次へと戦場へ送り出されることとなった。

わが日本軍は、生産力の量、質両面の懸隔、社会経済機構のちがいにより敗北を続け、ついに昭和一九年サイパン島をはじめ、フイリピン、硫黄島、沖縄と次から次へと要地を奪われ、昭和二〇年三月より本土はアメリカ空軍の猛爆撃に見舞われた。しかも東条から小磯へ内閣が渡されると、絶望的な国内総動員のもとに本土決戦までが企画された。二〇年四月に成立した鈴木内閣によって長い悪夢のような戦争の終幕がくだされたことには、八月六日、九日の広島、長崎への原子爆弾、九日のソ連の対日宣戦が直接の動機となった。もちろん、七月二六日に発表されたポツダム宣言受諾の決定までには、強硬派の策動があった。八月一五日天皇によって降服の詔書が放送され、いっさいのことが終った。アメリカ軍はただちに日本全土に進駐し、九月二日東京湾上のミズーリ艦上で降伏文書調印式が行なわれた。日本はポツダム宣言を受諾して無条件に降服したのである。

こうして、二〇年八月三〇日、司令官マッカーサー元帥の引きいる連合軍主力部隊が海空両方面から進駐を開始し、一〇月二日には、東京に連合軍最高司令部が設置され、ポツダム宣言にもとずく占領体制が完備した。日本管理のため、ワシントンに設けられた極東委員会、東京の対日理事会が、世界の視聴を集めながら討論を重ねたが、そこには戦後世界の新しい形勢が反映し、日本の前途に困難さが予想された。

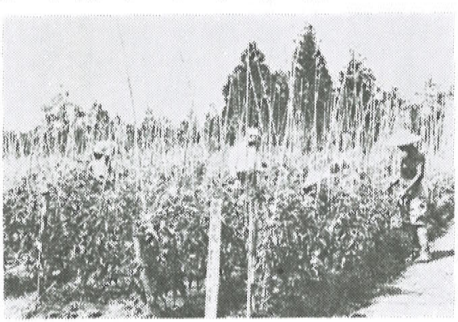
ところで、新しい日本は明治維新でもそうであったが、古いものの廃棄の上に道を開いて行かねばならない。

連合軍進駐以来、その施策としてつぎつぎと行なわれた改革のうち主なものは、㈠天皇神性の否定、㈡新憲法の制定（昭和二三年一一月三日　日本国憲法発布）㈢財閥の独占と地主、小作関係の否定

以上、この三大改革をはじめ、あらゆる部門にわたって変革して行ったが、新教育方針に基づく男女共学や六・三・三制教育機構も、その一部分としてあらわれた。他面、公職追放令によって、二一年から官界、財界、言論界から戦争指導にあたった主要人物が公職や教職から一掃されることとなった。二一年四月には、日本最初の男女平等の総選挙が行なわれ、婦人代議士三九名が選出され、女性開放の推進力となり、労働組合の運動もかつての不当な弾圧を蒙ることがなく、復活発展の途についた。

戦時下における農業教育

前項で述べた時代背景の中にあって、戦争遂行のために、国内での自給自足による食糧の確保が最大の急務となり、従来の農本主義の国是とともに、ますます農業政策が国策上、重要視されだしたのである。これによって、農学教育が特に重視されるようになり、中でも、実習教育が重んじられるようになり、普通教科はあまり重視されなかった。本校でも例外なく、教育方針に従って、学科の教育よりも、実習の教育に力を入れた。例えば、教科評価にしても、学科の点数がいかに良くても、実習に出席しないと、その成績が特にさがるというのが事実であった。特に、五坪茂雄校長は、この点に重点をおいて生徒指導にあたったので、農場には、草一本もなかったといわれるほど、徹底した実践教育が行なわれたのである。さらに、肥料には堆肥を積むことが行なわれ、当時の金肥不足を補なうと同時に、地力の培養に力を



トマトの手入れ実習

そそいだことがうかがわれる。また、この実践にあたっては、教師も自ら率先して模範を生徒に示したといわれ、生徒の敬服するところであった。もちろん、実習は本校でも従来より重視していたのであるが、国策遂行上からも、この時代が特に徹底していたようであり、当時の国家政策がいかに農業教育に向けられていたかを示している。

二　松農の規律

本校の教育目標と校訓

本校の目的は、「実業学校令農業学校規定により農業、林業、蚕業ニ従事セムトスル者及獣医手タラムトスル者ニ須要ナル教育ヲ為ス」（「松任農学校一覧」昭和一六年五月現在）を目的とした。また、校訓は「忠孝至誠」・「勤勉力行」・「農業報国」とした。

教育方針

戦時下の食糧増産の一翼をになう農学校としての自覚、また、それを教える教師の人格など、さらに旺盛な研究心を強調するよう教育が行なわれ、そのための教育方針が示されている。本校教育の方針は、㈠　教育勅語、青少年学徒に賜りたる勅語を奉仕し皇国民たる光栄に感激して負荷の大任に堪えるの自覚を明確にすること。㈡　興亜の理想と大和民族の使命を明確にす。㈢　「農は国の基」の真意義に徹せしむ。㈣　興隆の迫力と創造発展の能力を養う。㈤　勤労に徹し身体を鍛練し質実剛建の気風を振興す。とし、日常標語は、精魂をこめて実践躬行、全校一致最高能力発揮、朝に希望計画、夕に反省感謝を胸に精進したのである。

五坪校長は、その教育方針を兵農学においた。これは、当時の国策である富国強兵と農業教育を均等させる方針である。当時の農学校教育は、一方において食糧増産につながるとともに、また、他方においては、兵役に

服した場合にも国家目的に間に合うような教育方針を考えられたようである。そのためには、学校教育の方針の中に、特に農業実習や軍事教練に力を入れ、運動においても、武道的な面に力が入れられることになったのである。農場においては、従来からあった個人農場を廃止し、自給自足の意味から堆肥の指導に熱心で、地力の向上につとめた。

・。科学教育に関する施設

農業は、科学の基礎の上に成立するものなるに鑑み特に自然科学の振興に力を尽くし科学的態度を持たしむべく左の施設をなす。

一、品種改良施設　交配育種により代用食として価値ある南瓜の作出、金沢節成胡瓜、其他品種の交配改良、緑肥としての耐雪性強き紫雲英の選出

二、農芸化学実験用設備の充実　土壌・肥料・化学・物理に関する実験設備をなし農業基礎科学の振興を計る。

。生産拡充に関する施設

生産拡充に関しては左記留意せしむ。

一、畜力・器具器械の利用に習熟せしむ。

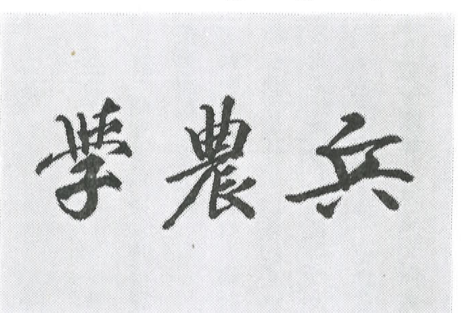
二、農作業の要領を会得せしめ其習熟に努めしむ。

三、生産資源の節約、生産資材・肥料等の自給度拡大を計る。

四、農業計画経営の才能涵養に努む。

五、耕地空地の時間的空間的利用を一層集約的に行う。

（「県立松任農学校資料」）



松下栄太郎教諭書

また、軍事教練には特に力を入れ、自ら馬上から先生、生徒を指導され、その成績は、常に優秀と折り紙つけられた。また、生徒の軍人志願をすすめ、旧陸軍の少壮幹部には、多数の本校生を送り出した。中でも、旧七連

隊の将校の大半は、わが農学校出身者によって占められていたといわれている。この非常時の日本がたどった長い特異な時期に、本校発展に努力された五坪茂雄校長の横顔をながめてみよう。



五坪茂雄
校長
二代

明治二二年五月一七日、滋賀県東浅井郡朝日村に生まる。明治四五年三月、滋賀県師範学校本科第一部卒業。県朝日実業補習学校、県師範学校・大正七年三月、福井県立福井農林学校教諭、大正九年七月、石川県立農業教員養成所教諭兼石川県立農学校教諭、大正一二年、県羽咋中学校長、昭和五年、石川県立松任農学校長兼石川県立実業補習学校教員養成所長となる。昭和一一年青年学校視学委員委嘱、昭和一六年、満洲国中華民国及蒙古へ出張、昭和一九年四月、石川青年師範学校長へ転任される。

五坪校長は、特に、雄弁家として自他共に許していた。また、実践家であり、思った仕事をバリバリ実行していった。例えば、本校の教育方針の設定やまた教師の指導にあたっては、反対者を退け自分の方針を貫いた。特に、柔道、剣道の有段者数の目標を掲げ、見事にこの目標数を実現するなど、その実績は素晴しいものであった。また、馬が好きで、乗馬部を組織し、その会長をつとめていた。馬上の勇姿は今も本校卒業生の思い出話として残っている。彼は玄米食論者として有名で、玄米とツルナで癌を治したといわれ、他の人々にも、逢う人毎に勧めていたとのことである。生徒には「五坪のセキタンバコ」というニックネームで親しまれていたが、その容貌から受ける印象によるようである。剛直な感じの彼のおもかげは、松農百年史上、忘れられない人である。

学校規則の改正

本校は、大正一五年四月、従来の修業年限五ヵ年の林科を廃止して、これにかわるものとして、修業年限三ヵ年の林科を設け、石川県立松任農学校と改称した。昭和六年四月、学校規則を改正して従来の農科第一部を農科第一種に、農科第二部を農科第二種と改称した。昭和八年四月、学則を改正し従来の林科を農林科に改めた。（石川県令第七二号）昭和九年（一九三四）二月一〇日、学則を改正して専

修科が設けられた。（石川県令第五六号）昭和一〇年四月、学則を改正して教授時数を変更した。（石川県令第六〇号）昭和一一年一月、学則を改正して専修科の定員を変更した。（石川県令第六一号）昭和一二年八月、学則を改正して専修科に九月開始の学年をおく。（第三四号改正）昭和一五年四月、学則を改正して、獣医畜産科を設けて専修科を廃止した。（第一四号改正）

石川県立松任農学校規則

沿革　昭和三年石川県令第三七号
同　八年　同　第七二号
同　九年　同　第六五号
同　十年　同　第五八号
同　　第六号
同十一年　同　第六一号
同十二年　同　第三四号改正
同一五年　同　第一四号改正

第一章　総則

第一条　本校ハ実業学校令及農業学校規程ニヨリ農業林業畜業ニ従事セムトスル者及獣医手タラムトスル者ニ須要ナル教育ヲ為スヲ目的トス

第二条　本校ノ学科ヲ分テ農科農林科及獣医畜産科農科ヲ分テ農科第一種及ビ農科第二種トス

第三条　本校各学科ノ修業年限左ノ如シ

農科第一種	五年
農科第二種	三年

農　林　科　　三年
獣　医　畜　産　科　　二年

第四条　本校ニ於テハ主トシテ農業林業蚕業畜産業ニ関スル事項ヲ授クル為講習ヲ開設スルコトアルベシ
講習開設ノ要領ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第五条　農業学校ヲ卒業シ特ニ農業林業蚕業畜産業ニ関スル事項ヲ研究若ハ補習セムトスル者アルトキハ研究生トシテ在学セシムルコトアルベシ
研究生ノ修業期間ハ一年以内トス
研究生ニ関スル細則ハ学校長之ヲ定メ知事ノ認可ヲ受クベシ

第六条　本校ノ生徒定員左ノ如シ

農　科　農　林　科　　五百五十名
獣　医　畜　産　科　　百二十名

第二章　学年、学期、休業日及式日

第七条　学年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月一日ニ終ル

第八条　一学年中ノ学期ヲ左ノ如ク定ム

第一学期　四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル
第二学期　九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル
第三学期　一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル

第九条　一学年中ノ休業日ヲ左ノ如ク定ム但シ夏季休業中ハ生徒ヲ数組ニ分チ交互ニ実習ヲ課ス

一　祝日及大祭日
二　日曜日
三　学校創立記念日
四　夏季休業
七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル四十二日間

五　冬季休業
十二月二十五日ヨリ翌年一月七日ニ至ル十四日間
第十条　学年ノ終始ニ於テハ通シヲ十四日以内教授ヲ欠クコトヲ得
第十一条　伝染病予防ノ為必要ナルトキ其ノ他非常変災アルトキハ学校長ハ知事ノ認可ヲ受ケ臨時休業ヲ為スコトヲ得
第十二条　紀元節、天長節、明治節及一月一日ニハ職員生徒学校ニ参集シテ祝賀ノ式ヲ行フベシ

第三章　学科課程、教授時数成績考査及卒業

第十三条　本校各学科ノ学科目学科課程及其ノ毎週教授時数ハ第一号表第二号表第八号表ニ依ル
第十四条　各学年ノ課程ノ修了又ハ全学科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ学業成績ヲ考査シテ之ヲ定ム
成績考査ニ関スル細則ハ学校長之ヲ定ム
第十五条　各学科所定ノ課程ヲ卒業シタル者ニハ卒業証書（第一号書式）ヲ授与ス

第四章　入学、退学及休学

第十六条　生徒ヲ入学セシムベキ時期ハ学年ノ始メヨリ三十日以内トス但シ臨時入学ヲ許スコトアルベシ
入学セシムベキ生徒ノ員数、其ノ他ノ要項ハ予メ之ヲ公告ス
第十七条　本校農科第一種第一学年ニ入学ヲ許可スベキモノハ左ノ各号ノ一ニ該当スルモノニ限ル
一　尋常小学校ヲ卒業シタルモノ
二　年令十二年以上ニシテ学力検定ニ合格シタル者
前項第二号ノ学力検定ハ国語・算術・日本歴史・地理・理科ノ各学科目ニ就キ尋常小学校卒業程度ニ依リ之ヲ行フ
第十八条　本校農科第二種農林科第一学年ニ入学ヲ許可スベキ者ハ左ノ各号ノ一ニ該当スルモノニ限ル
一　修業年限二年ノ高等小学校ヲ卒業シタル者
二　修業年限三年ノ高等小学校第二年ノ課程修了シタル者
三　中学校第二学年ノ課程ヲ修了シタル者
四　尋常小学校卒業程度ヲ以テ入学資格トスル農業学校第二学年ノ課程ヲ修了シタル者
五　年令十四年以上ニシテ学力検定ニ合格シタル者

前項第五号ノ学力検定ハ国語・算術・日本歴史・地理・理科ノ各学科目ニ就キ修業年限二年ノ高等小学校卒業程度ニ依リ之ヲ行フ

第一九条　第二学年以上ニ入学ヲ許可スベキ者ハ相当年令ニ達シ且ツ前各学年ノ学科課程修了程度ニ依ル検定ニ合格シタル者ニ限ル

前項ノ入学許可ハ生徒ニ欠員アル場合ニ限ル

第二十条　生徒ニシテ退学シタル者其ノ退学シタル時ヨリ二年以内ニ於テ再入学ヲ出願シタルトキハ原学年以下ノ学年ニ限リ入学ヲ許可スルコトアルベシ

第二十一条　他ノ農業学校生徒ニシテ本校ニ転学ヲ志願スル者又ハ他ノ農業学校卒業者ニシテ本校ニ入学ヲ志願スル者アルトキハ当該学校長ノ品行及学力ノ証明書ヲ有スル者ニ限リ学校長ニ於テ検定ヲ行ヒ又ハ検定ヲ行ハズシテ相当学年ニ転学又ハ入学ヲ許可スルコトアルベシ

本校生徒ニシテ他ノ石川県立農業学校ニ転学又ハ入学ヲ志願スル場合亦前項ニ同シ

第二十二条　入学志願者ハ入学願書（第二号書式）ニ入学手数料ヲ添ヘ最終在学々校長ヲ経テ学校長ニ差出スベシ

前項ノ学校長ハ入学志願者ニ関スル調査書（第三号書式）及最終二学年ノ身体検査票（昭和十二年一月二十七日文部省令第二号ノ書式）ヲ作製シ前項ノ書類ト共ニ之ヲ学校長ニ差出スベシ

第二十三条　入学ノ許可ヲ得タル者ハ七日以内ニ二名ノ保証人ヲ定メ誓約書（第四号書式）ヲ学校長ニ差出スベシ

保証人ハ石川県内ニ居住シ独立ノ生計ヲ立ツル者タルベシ

保証人中一人ハ学校ヨリ一里以内ノ地ニ居住スル者タルベシ

保証人住所又ハ氏名ヲ変更シタルトキハ其ノ都度之ヲ学校長ニ届出ツベシ

学校長ニ於テ保証人ヲ不適当ト認メタルトキハ之ヲ変更セシムルコトアルベシ

第二十四条　学校長ハ左ノ各号ノ一ニ該当スト認メタルトキハ之ニ退学ヲ命スベシ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナキモノ

二　学力又ハ実習劣等ニシテ成業ノ見込ナキ者

三　他人ノ嫌忌スベキ疾病ニ罹リ容易ニ恢復セザルモノ

四　正当ノ理由ナクシテ引続キ一月以上欠席シタルモノ
五　出席常ナラザルモノ

第二十五条　生徒ニシテ退学セムトスルトキハ其ノ事由ヲ具シ保証人連署ノ上学校長ニ願出ツベシ

第二十六条　生徒ニシテ疾病其ノ他已ムヲ得ザル事故ノ為ニ三月以上修学スル事能ハズト思慮スルトキハ休学ヲ願出ヅルコトヲ得

学校長ハ前項ノ出願ニ対シ期限ヲ定メテ之ヲ許可スルコトヲ得

第五章　褒賞懲戒及生徒心得

第二十七条　学校長ハ生徒中学業操行ノ優秀ナルモノ又ハ其ノ進歩顕著ナルモノニ対シ褒賞スルコトヲ得

第二十八条　学校長ハ必要ト認メタル場合ニ於テ左ノ区別ニ従ヒ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

一　戒飾
二　謹慎
三　停学

第二十九条　生徒心得ニ関スル事項ハ学校長之ヲ定ム

第六章　入学料及授業料

第三十条　入学志願者ハ其ノ出願ト共ニ入学手数料トシテ金弐円ヲ納ムベシ　但シ本県立農業学校ヨリ転学スル者又ハ再入学ノ者ハ此ノ限リニ在ラズ

第三十一条　授業料左ノ如シ

農科農林科及獣医畜産科　　月　金参円
研究生　　月　金壱円

授業料ノ徴収期日及徴収ニ関スル手続ハ学校長之ヲ定ム

第三十二条　一旦納入シタル授業料及入学手数料ハ之ヲ返還セス

第三十三条　学校長ハ授業料ノ納入ヲ怠リタル生徒ニ対シ其ノ授業ヲ停止スルコトヲ得

第三十四条　明治三十三年石川県令第八十七号ノ規程ハ授業料ニ関シ之ヲ準用ス

第七章　寄宿舎

第三十五条　自宅ヨリ通学スルコト能ハザル生徒ハ凡テ之ヲ寄宿舎ニ収容ス　但シ当分人員ヲ限リ収容スルコトヲ得

第三十六条　寄宿舎ニ関スル細則ハ学校長之ヲ定ム

附　則

第三十七条　本令ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三十八条　大正十二年石川県令第八号石川県立農学校規則ハ之ヲ廃止ス　但シ同規則ニ依リ在学スル生徒ニ課スベキ学科課程及其ノ修業年限ハ此ノ限ニ在ラズ

第三十九条　生徒ニ課スベキ学科課程ニ関シテハ学校長ニ於テ前条ノ規定ニ拘ラズ便宜本令ノ規定ヲ斟酌スルコトヲ得

学科課程及び毎週教授時数

石川県立松任農学校農科第一種学科課程及毎週教授時数表

学科目＼学年	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年
課程時数	毎週	毎週	毎週	毎週	毎週
修身	実践道徳作法要項	同上	同上	同上	同上
	一	一	一	一	一
公民科				公民	同上
				二	二
国語	講読作文習字文法	同上	同上	講読作文文法	講読作文
	八	七	(一)四	三	三
数学	算術珠算代数	珠算代数幾何	代数幾何	同上	(一)三幾何三角法
	五	五	三		三
歴史地理	日本歴史日本地理	日本歴史外国地理	東洋歴史地文	西洋歴史	
	四	四	二	一	
物理			物理	同上	同上
			二	二	二
化学			化学	同上	
			(一)二	二	

| 博物 | 植物 | 二 | | |

石川県立松任農学校農科第二種並農林科学科課程及毎週教授時数表

学年	第一学年		第二学年		第三学年			
学科目＼課程	学科課程	毎週時数	学科課程	毎週時数	農科・第二種 学科課程	毎週時数	農林科 学科課程	毎週時数
修身	実践道徳作法要項	一	同上	一	同上	一	同上	一
公民科			公民	二	同上	二	同上	二
国語	講読作文習字文法	四	講読作文	三(一)	同上	三(一)	同上	三(一)
数学	代数	三(一)	代数幾何	三	幾何三角法	三	同上	三
地理歴史	地文東洋歴史	二	西洋歴史	一				
物理	物理	二	同上	二				
化学	化学	二(一)	同上	二				
博物	植物動物鉱物	四	生理	一				
外国語（英語）	発音綴字、読方、読解、話方、作文、書取、習字、文法	三	読方、読解、話方、作文、書取、文法	二(一)	同上	二(一)	同上	二(一)
作物	作物各論	二(一)	同上	一	作物汎論	一	同上	一
園芸			蔬菜	一(一)	果樹花卉	一(一)	同上	一(一)
農産製造					農産製造	一	同上	一(一)

備考　一、四月一日ヨリ十月三十一日迄ヲ前期トシ　十一月一日ヨリ翌年三月三十一日迄ヲ後期トス
二、本表毎週教授時数欄内（　）ハ後期教授増加時数トス

| | | |

新設獣医畜産科学科課程及毎週教授時数表

科目＼学年	第一学年		第二学年		第三学年		備考
	課程時数		課程時数		課程時数		
修身	実践道徳作法要項	一	同上	一	同上	一	四月一日ヨリ十月末日マデヲ前期トシ十一月一日ヨリ三月末日マデヲ後期トス括弧内数ハ後期ノ増加時数ヲ示ス
公民			公民	二	同上	二	
国語	講読、作文法、習字	三(一)	講読、作文	三(一)	同上	三(一)	
数学	代数	三(一)	代数、幾何	二	幾何、三角	二	
物理	物理	二	同上	一			
化学	化学	一(一)	同上	一			
博物	動物、植物	二	生理	一			
外国語（英語）	発音、綴字、読方、訳解、話方、作文、書道、習字、文法	三	読方、訳解、話方、作文、書取、文法	二(一)	同上	二(一)	
地理歴史	地文、外国歴史	二	国史	一			
家畜組織解剖学	組織解剖	二	同上	二			
家畜生理学	生理衛生	二					
畜産学	畜産各論	一	同上	二(一)	畜産汎論	一(一)	
薬物学			薬物学	二			
家畜内科学			内科学	二	同上	二	

家畜外科学			一
獣医警察衛生学			
病理			
農学	農学大意	二	同上
体操	体操、教練武道	四	同上
小計		二八(三三)	二八(三三)
実験実習		二七六	三八四

外科学総論	一	外科学各論	三
		獣医行政 乳内衛生	二
		家畜病理	二
		同上	一
		同上	四
	二八(三三)		二五(二九)
			三九八

括弧内数ハ後期毎週教授時数ヲ示ス
実験実習ハ不定時ニテ一ケ年ノ総時数ヲ示ス

設備・経費

設備

| 地 | 校 | | |

| 校舎 | | |

同	同	同	同	同	同
十五年四月十日	同	英語、修身、水産	加藤	祇	長野
同	同（兼）	畜産	舟木	十郎	福井
十二年五月廿四日	同	地理、歴史	松下	栄太郎	石川
同	同	作物、博物、病虫	山本	敬三	石川
十三年七月卅一日	同	化学、土壌、肥料	本田	他喜男	石川
昭和十四年十二月卅一日	同（兼）	英語、教育、修身	目黒	松治	新潟
同	同	林業、数学	松浦	進	宮崎
十四年六月三十日	同	物理、数学	大池	明信	徳島
同	同	数学、物理	中田	正男	石川
十六年一月十日	同（兼）	養蚕	宮本	清松	長野
同	同	国語、漢文	神沼	春雄	埼玉
十六年三月卅一日	同	花卉、園芸、化学、数学	国井	靖夫	岐阜
同	同	畜産、数学	吉松	孝雄	大分
十五年十一月三十日	同	国語、漢文、修身	大中	俊吉	石川
同	同	公民	川崎	政雄	石川
十五年十二月卅一日	同	果樹、園芸、数学、図画	横山	勇	長野
同	同	剣道、国語、漢文	武田	弘	福島
十五年十月廿三日	同	体操、地理	中谷	知敬	石川
同	同	蔬菜、博物	伊東	平俊	石川
十五年八月卅一日	同	稲作、数学、養蚕	飯田	覚	石川
同	同	柔道、国語、漢文	田中	勝雄	鳥取
九年十月八日	同	蔬菜、習字	東	孝男	石川
同	教諭心得	教練	山中	増太郎	石川
十五年十一月廿四日	同				
同	同				
十四年五月卅一日	同				
同	同				
十五年三月卅一日	同				
同	同				
十三年九月五日	同				
同	同				
十五年十二月十三日	同				
同	同				
十六年三月卅一日	同（兼）				
同	同				
十四年三月卅一日	同				
同	同				
十六年四月十三日	同				
同	教諭心得				
十五年三月卅一日	同				
同	同				
九年六月四日					

林業、数学	同	十五年三月卅一日	同	若林春二	石川
獣医、畜産、生理	同	十六年三月卅一日	教授嘱託	若林政義	滋賀
（休職）	同	十四年三月七日	教諭	石次幸雄	石川
合計係	同	十四年四月十三日	書記心得	畠重明	石川
庶務係	同	十五年四月三十日	同	辻権三郎	石川
会計兼務係	同	十四年二月廿二日	同	南貴美子	石川
	同	六年九月卅一日	校医	倉重芳嗣	石川
	同	十四年四月十日	歯科医	斉川源左衛門	石川
	同	十六年二月廿八日	学校看護婦	南美津ゐ	石川
	同	十六年三月	配属将校	湯浅成雄	

教科書			獣医畜産一年科
教科書名	著書	定価	出版者
皇国実業修身書　一	小西重直	四三	金港堂
実業学校国文新選三（新制版）	垣内、西尾	八九	文学社
新編実業日本文法	安藤正次	五五	三省堂
新修漢文　一（新制版）	簡野道明	五五	明治書院
再訂新実業代数学教科書	松本敏工	八七	冨山房
再訂新実業幾何学教科書	〃	一、〇四	〃
実業教育新編東洋史	中山久四郎	九〇	三省堂
実業新選地理概説編（改訂版）	守屋	八二	帝国書院
新制最近世界地図（増訂改版）	編	一、三〇	三省堂
現代実用物理要説	竹内時男	八八	開成館
最新実業化学	柴田栄一	一、〇五	〃
総合博物教科書　上下	編	一、〇〇 八二	〃
ザ、ニュウ、ネチュア、リーダーズ　一	周防時男	五〇	農協
昭代中学留字帳　下	石橋啓十郎	二七	修文館
学校教練教科書　前後	陸軍省徴募課	四五 五五	軍人会館図書部
畜産教科書　前、後編	釘木	九八	農学校図書刊行会

教科書

農科

現代農業教科書　上	住江　金之	九〇	帝国書院	
家畜生理学　上下	深谷、長尾		克誠堂	
教科用家畜解剖学				
新撰実業修身書　(五)	亘理章三郎	四五	金港堂	
公民教本下	中川善之助	五五	六星館	
(新制版)実業学校国文新選(五)	垣内、西尾	八八	文学社	
実業皇朝漢文　(五)	本田　成之	五五	湯川弘文社	
中星学校時文新編(一)	塩谷　温	三五	開隆館	
アレセント、ディーイングリッレュ、リーダーズ　(五)	斉藤　静	五九	冨山房	
新式実業三角法	高木　貞治	五〇	開成館	
改訂果樹園芸教科書附観賞植物	小　龍	九〇	明文堂	
新制農業経営教科書	関野外九名	六〇	〃	
実習作物汎論教科書	小　能	五五	〃	
実用農産加工	農学校校長会帳	一、二〇	農学校図画刊行会	
最新作物病害教科書	西田、前原	一、一〇	開成館	
測量教科書(改訂版)	三浦、金子	六五	成美堂	
畜産学教科書(汎論)	星	一、〇五	明文堂	

三　学校生活

学校日誌抄

松農時代における日誌の一部を紐解いてみよう。

大正一五年度

二月二〇日　軍事教練査閲吉富七連隊長来校。

五月　一日　全校生徒遠足（粟崎方面）。

五月二七日　海軍大佐村松亥四松講演。

六月一六日　一部第二、三年、林科四年の七〇名は関西旅行に出発。
七月二〇日　相川新海浜に水泳練習場開設。
一〇月　九日　二部三年、満鮮旅行に出発して二二日に帰校。
一〇月二九日　二部二年、農林一部四年秋季機動演習に参加して三〇日に帰校。
一一月二六日　中学校生徒野外演習に参加。職員生徒一同は見学のため八時一〇分から二時まで石川郡富樫村に出向く。

昭和五年度

四月　九日　荒木与逸先生の満鮮視察談ある。
五月　一日　農・林科修学旅行。
六月　四日　神饌田を始めとして水田全部の田植えする。
七月一八日　山崎延吉先生の講話「農村青年の覚悟」を聞く。
一〇月　六日　陸上運動会。
一〇月三〇日　勅語喚発四〇周年記念式行なわれる。
一一月　一日　収穫祭を兼ねて美川海浜に遠足し、小春日和の一日を海洋をわたる空気を吸う。
一二月　二日　父兄会。

昭和七年度

一月二三日　武道大会。
一月二五日　全校生徒は金石へ遠足にいく。

四月　四日　入学式。
四月　七日　林科三年金沢街路樹剪定出張する。
四月一四日　上級生修学旅行に出発し、二三日に帰校。
四月二二日　北陸近県農業学校研究大会を本校で行なう。生徒一同に伏見川に遠足する。
五月　二日　相撲小会。
　三日　全生徒博覧会場見学。本校出品物は異彩を放つ。
　七日　文部省普通学務局長来校。
六月　四日　陸上競技小会。
　七日　凱旋兵を松任駅にて歓迎する。
七月二〇日　上級生徒一週間の農産物検査講習会を受ける。
七月二七日　林科三年生は七尾徳田演習林へ修学旅行する。
七月三〇日　明治天皇二〇周年祭。
九月一三日　水泳大会。
九月一七日　創立記念日。
九月二〇日　最上級生三日間、軍隊宿営演習。
一〇月　一日　運動会。
一〇月　八日　手取川辺粟生水産増殖場へ遠足。
一〇月一五日　相撲大会。

一一月　二日　体育の日につき庭球会。
一一月　七日　一週間にわたり徳田演習林に各クラス別に旅行。
一一月二〇日　五日間、種禽農産物品評会開催。
一一月二五日　学校教練査閲。五十嵐七連隊長来校。

昭和八年度

四月　四日　午前一〇時入学式。
四月一二日　金沢市出羽町練兵場における閑院宮殿下の御視閲式に生徒参加。
四月一六日　春季相撲大会。
四月二一日　全校生徒伏見川方面へ遠足。
四月二二日　農科三年徳田練習林実習（二六日まで）。
四月二八日　校医倉重芳嗣医学博士は結核に関する講話を行なう。
五月　一日　農科二年徳田演習林へ開墾実習（六日まで）。
五月一〇日　同窓会記念林実習。
五月二三日　F■徳田演習林実習に出発（二八日まで）。
五月二六日　神饌田植え式。
五月二七日　海軍記念日、太田宇一（海軍機関中佐）の講話あり。
五月三〇日　北海道アイヌ酋長川村イタンロマ氏次男青年団長川村才登の講話があった。川村氏は「アイヌ民族と内地人の差別反対」を唱えて本校へおとずれた。

六月　三日　陸上競技大会。
六月　九日　文部省青木督学官来校視察。
六月一七日　台湾アミ族内地見学団は本校施設を見学。
六月二三日　荒蒔師団長閣下来校。
七月　一日　生物慰霊祭挙行。
七月　三日　小泳小会。
七月一一日　武道小会。
七月一二日　林業科二年三年徳田演習林実習。
九月　一日　午前一〇時五〇分第二学期始業式。
九月一六日　創立記念式典。
九月一八日　満州事変第二周年記念日にて閲兵分列式あり。弁論大会。
九月二七日　三泊四日上級生七連隊宿泊教練。
一〇月三〇日　菊地文部省実業学務局長来校視察。
一一月　一日　神宮競技大会馬術北陸選手として五坪茂雄校長出場のため午後出発。
一一月　七日　精神作興週間（～一三日まで）。佐藤工学博士講話。
一一月一七日　父兄会。

昭和九年度

二月一〇日　徳田専修科・津幡専修科設置。

四月　四日　午前一〇時より入学式。
四月一〇日　新設徳田専修科入学式。専修科主任山崎賢一先生着任。
四月二六日　午前一〇時より校内相撲小会。
四月三〇日　午後九時一四分松任駅発列車にて修学旅行団（六〇名）出発し五月九日帰校。
五月一一日　陽明学者横永太郎の講話あり。
五月一四日　金沢市工業学校教練見学。
五月二三日　第三一代館哲二知事午後二時本校視察する。
五月二九日　神饌田植え式。
六月　四日　金子金沢連隊区司令長官来校視察。
六月一五日　水泳小会。
六月二八日　父兄会及び父兄会創立総会。
七月　七日　三浦関造の講話。武道小会。
七月　九日　第二限目沢中佐講演。
七月三一日　本日より夏期休業に入る。
九月　三日　配属将校高椋少佐新任式。
九月一七日　相撲小会。
九月二八日　弁論大会。
一〇月　六日　第三四回陸上大運動会。

一〇月一二日　県下中等学校総合演習参加。
一〇月二〇日　倉ヶ獄登山。
一〇月二三日　実業教育五十周年記念式行なう。午後五時より管弦楽及び合唱を放送。
一〇月二六日　本日より二日間、県下農業補習教育大会行なわれる。
一〇月二七日　校内球技大会。
一〇月三〇日　東京大学助教授佐々木博士来校し講話。

昭和一〇年度

四月　二日　午前一〇時教育養成所入学式。
四月　四日　入学式。
四月一二日　春季相撲大会。
四月一三日　全校伏見川へ遠足。
四月二一日　第三二代生駒高常県知事視察にくる。
五月二五日　大楠公六〇〇年祭講話。剣道小会。
五月二九日　校内競技小会。
六月一一日　水泳小会。
七月一二日　招魂祭、慰霊祭。
七月二〇日　終業式。
七月二六日　中等教育研究農業部会講習会。

八月二一日　第二学期始業式。
九月一七日　六十周年記念式、表彰謝恩式、祝宴会、夜は提灯行列。
九月一八日　追悼会後講演会。
九月二三日　相撲大会。
九月二八日　農林科三年生宇ノ気試験場、津幡農蚕学校見学。
九月三〇日　養成所生徒鶴来方面地質調査にいく。
一〇月　五日　第三五回陸上大運動会。
一〇月　七日　農・林科三年生旅行団出発する。
一〇月一五日　文部省視察員西田農学博士来校する。
一〇月二四日　球技大会。
一一月　二日　本校菊花展覧会。
一一月　七日　村井又三郎の千代尼に関する講話あり。
一一月二五日　教練査閲。
一二月　七日　遠足。
一二月一七日　収穫祝いをする。
一二月一九日　終業式。

昭和一一年度

一月一一日　第三学期始業式。

一月二三日　寒稽古納会。
二月　七日　養生所生徒は盲聾唖学校・刑務所見学。上級生は粟津種畜場・牧場見学。中級以下遠足。

昭和一二年度

一月一四日　態岳城農業実習所北田三郎（本校卒業生）来校し講話。
一月二〇日　九師団渡満部隊歓送。
一月二二日　寒稽古納武道大会。終了後岩井美良の指導あり。
一月二七日　石川竜三来校し剣道の講話あり。
二月　九日　笠間海岸へ全校遠足。
三月　一日　上級生学年末考査開始。下級生考査六日より開始。
三月　九日　第三三代児玉政介県知事視察にくる。
三月一五日　午後一時、家畜慰霊祭開催。中野昭心師の講話あり。
三月一七日　本日より三日間、春休暇前期実習。
三月二二日　入学試験。
四月　五日　新入生入学式。
四月一二日　本日より四日間、農林科三年演習林実習。
一九日　全校生白山比咩神社へ遠足。
二一日　午後一時より父兄評議員会開く。
二七日　靖国神社臨時大祭につき休業。

五月一三日　九師管下凱旋兵歓迎。上村勝爾博士来校講話。
五月一四日　国防映画を午前一〇時より鑑賞。
五月二〇日　校内春季相撲小会開く。
五月二七日　神饌団御田植え式行なう。
五月二八日　釣谷海軍中佐来校講話。
六月　一日　校内陸上小運動会開く。
六月　九日　父兄会総会開く。
六月一二日　全校は県加賀地方男子中等学校体育大会に参加（小松商）。
六月一七日　上級生三七名は満鮮旅行に出発し七月三日に無事帰校。
六月二四日　軍艦多摩の見学をかねて美川へ遠足。
七月　二日　富田文雄来校し講話をする。
七月二一日　本日より九日間前期班夏期実習。
七月二二日　本日より二五日まで上級生兵営宿泊。
七月三〇日　本日より四日間、農林科三年演習林実習。
八月　一日　本日より九日間　中期班夏期実習。
八月一三日　本日より九日間　後期班夏期実習。
八月二五日　第二学期始業式。
九月一七日　創立六二周年記念式挙行。

九月二〇日　本日より三日間、上級生・養成所生徒は九師団兵器庫にて奉仕労働に従事する。
一〇月　九日　時局を鑑みて体育本位の第三六回陸上大運動会を開催。
一〇月一一日　本日より一〇日間、農林科演習林実習。
一〇月一三日　本日より国民精神総動員強調週間始まる。
一〇月二三日　午前六時全校生徒集合し吉野谷へ二〇粁強行遠足を行なう。
一〇月二六日　相撲大会行なう。
一一月　一日　本日より一週間臨時考査開始。
一一月一〇日　国民精神作興に関する詔書奉読式挙行。
一一月一三日　全校生徒勤労奉仕のため、社寺清掃作業並びに実習を行なう。
一二月　八日　配属将校坂野少佐新任式。
一二月一一日　第三限より南京陥落旗行列挙行。
一二月一六日　武道大会。
一二月一七日　収穫祭の御祝いする。
一二月一九日　本日より三日間上級生加工・養魚実習。
一二月二一日　職員一同終日繩掏を行なう。

農産物の加工奨励

人口過剰と食糧不足の現状打開の途は、まず狭隘な国土をできる限り活用して、ただ増産を図ることである。石川県によこたわる広い水田には米の生産に全力が注がれてはいるが、湿用地帯はともかく、乾田地帯における裏作の甚だ低い事実を顧みなければならない。そこに

は石川県特有の気候的制約を受け、われわれ湿田地帯のようにその立地的悪条件と戦わねばならず、また現在の営農技術に依存する限り裏作に対する労力問題は解消されず、さらに肥料不足の悩みと割当供出の荷重とが相重っているために、一般に裏作における生産意欲に乏しく、その発展性はほとんど認められない現状である。しかしながら、これらの諸問題を科学的に再検討し、米の生産に支障をきたさずして、さらに有利にそして容易に裏作物の増産ができるように、技術的並びに経営的に考究し改良していくことが、本校の使命であった。本校は農家の加賀地方の農業センターの性格をもっていた。加工室では水飴の製造、青年団対象の講習会、婦人会に対する加工講習を開き、毎年たいへん盛会であった。

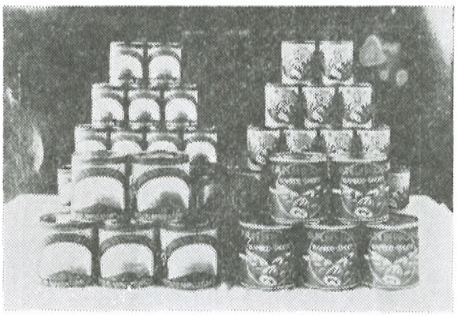


ソース製造

ここに、各施設の中から、農産加工室と実習をのぞいてみよう。

今回のドラマチックな恐慌を迎えた農村は、日一日と苦しさをましていった。農民の自力更生策として「多角化」が奨励され、養兎や白百合・りんごが作られ、農村副業伝習所が開設されて有畜化が勧められたが、「養豚・養鶏は忽ち生産過剰となり収支が償わなくなっ」（北国七・六・八）て、恐慌に拍車を加えることになった。農村指導も観念的で「農閑期に行われている修養講座や生活改善講習会では、農村不況は打解できない。もっと農村更生の具体的方法を研究すべきだ」との声が叫ばれていた。（北国七・六・二二）。このような時に、母校で「法制、経済、簿記、農産製造」という科目を担任していた中野義隆教諭は、農業恐慌を克服する手段として農産物加工の必要性を痛感されていた。たまたま、昭和六年七月、加賀蓮根出荷連合組合から

缶詰根蓮の研究を委託され、同年一〇月、蓮根の缶詰製造化に成功したのを機会に、五坪茂雄校長と共に校内に農産加工室の設置を県に懇願した。昭和七年八月、県から五百円の補助金が出、林科の実験加工室と実習棟に並んで、五間×八間の農産加工室とホームシーマーなどの機械設備一切を完備した。



シカゴ出品缶詰

昭和八年二月、アメリカ合衆国シカゴ市百年祭世界大博覧会にあたって、文部省より指定されて缶詰蓮根が出品された。その結果、アメリカで大いに好評を得、シカゴ・ハワイ・ロスアンゼルス・ニューヨークなどの諸都市から問い合せ、注文が舞い込み、国内でも北海道などからの注文が多くなっていった。先述の連合組合の人達が、本校へ缶詰蓮根製造の伝習や製造依頼のため日参したのもこの頃であり、蓮根の掘り取りの最盛期には、毎日トラックに一車ずつ送りこまれてきた。こうして学校が、地域農民の指導センター的存在となったのであるが、見方をかえれば、最後まで企業化されなかったということであり、石川県の農業の後進性ということがいえるだろう。

農産加工室ができると、それまで「農産製造」といっていた科目も「農産加工」と変り、加工実習として右の缶詰蓮根の他に、白山なめこ・缶詰枝豆・トマトケチャップ・缶詰筍・トマトソース・トマト羊羹・福神漬・苺ジャム・馬鈴薯澱粉・漂白葛粉などが製造され、昭和一〇年一二月には、これらの農産加工品が同室で展示され、近郷の人達の目をみはらせた。澱粉は、腐敗馬鈴薯から分離精製したもので我が国最初であり、缶詰枝豆は東京亀屋商店に卸され酒場などで珍重された。

施設のうつりかわり

当時は空地でさえあれば、ところかまわず雑然と建物をつくっていった。まず、昭和五年から八年にかけて、運動場の東角に養魚池をつくった。五月孵化した稚魚を八月まで水田で養ない、三センチから五センチになったものを池に入れ、翌年末には三〇センチから四〇センチに成長する。これを桶に入れて松任町や金沢市へ生徒が売りに行った。鯉をやしなった池には三尺余り土がたまる。一一月末から一二月にかけて、この土をあげて池を掃除した。校長以下全員、普通科の先生も授業を中止して朝から夜六、七時ごろまで交代で一週間あまり続けて作業したが、毎年恒例化していた。昭和九年にテニスコートを、昭和一〇年頃に前庭造園を、昭和一二年に兎飼育舎を、昭和一三年に圃場学習室（土間）を、昭和一五年に、獣医畜産科が新設されたのに伴い、新校舎を階段教室（化学室験室）から寄宿舎へ行く西側に二階建木造建造物をつくった。基礎工事も円滑に進んだが、横山先生の園芸実習室であった収納舎前の温室内作業中の出来事、ガラス越しに一〇数人の人夫達が農産加工室の前から荷車の受台に大きな棟木らしきものを乗せて、収納舎前にとまり、棟木をおろすときに、人夫が大木の下敷きになり即死。いたましい尊い犠牲者があったことを忘れてはならない。昭和一六年鶏舎を移動して第二体育館が農産加工室横にそれぞれ新築または増築して、施設拡充されていった。

手取川大水害救助応援

昭和九年七月一一日および一二日の降雨量は、手取川上流の白峰においては四六六ミリという驚異的なものであった。これは平年の五五日分に当り、東京地方の一〇八日分に相当するものであったために、県下では空前の大水害となったのである。

手取川では一一日午前四時、大増水のために白峰村役場付近の田畑橋りょうが流失、湯ノ谷川は同日未明に堤防欠壊のため一ノ瀬を一呑にし、風嵐を侵し、桑島をおかした怒とうは矢作水力電気会社の沈沙地をこわし、深

瀬の大半を激浪でさらってしまった。下流の釜谷、五味島を浸した水は、大日川の増水と相まって、釜清水の黄門橋付近では約二一メートルの増水となって、護岸の堤塘は根底から破壊され、金名鉄道は不通となり、吉野谷の二ヵ所の発電所も浸水で大打撃をこうむった。水勢は福岡第一発電所を浸水すること五メートル、第二発電所を流失し、白山においては河原堤、白山堤を欠かいした。鶴来地内に入ると十八河原堤の一部をこわし、天狗橋は完全にさらわれ、能美電鉄の鉄橋の三分の二以上も流失したのであった。右岸では舟場、桃ノ木両堤防、さらに川北村の二十石堤、八間堤、権正寺堤、朝日前堤、三百河原の欠かいのために、下田子島、橘、橘新、朝日の各部落が浸水、河口の美川町では全町に浸水、北陸本線の手取川鉄橋は一時は危険に瀕死したほどであった。一方、左岸では梅ノ木堤は一一日正午に一番堤が、一二日早暁に二番堤がこわれたので、久常村は手取川本流の貫流するところとなって、上清水、下清水、川原新保は孤立し、北市、徳久、高座、秋常、米寺は浸水、粟生村も水浸しとなり、寺井では住家の大半に浸水、湊、吉田の両村を一のみにして根上町をおそい、濁流は板津村を一面の泥海として、梯川とついに合流、下流の牧村および安宅町にも損害を与えたのであった。こうして出水以来六〇日間余りもこれらの方は、水魔のなすがままにゆだねざるを得ないありさまであった。

ところで、わが本校の手取川大水害救助活動はどうであったろうか。その有様を見てみよう。

一一日



手取川水害（川北村橘新）

手取川流域氾濫し事態容易ならぬものがあるを聞き昼食後通学生全部を講堂に集合せしめ災害地域方面出身者通学第一班、第二班は各監督教諭並に班長を督して松任町に親戚ある者は其の親戚に残余の約五〇名は寄宿舎に宿泊せしめることに手配を定め他の通学生には帰路一層の注意を払う様通達した。而して一方取扱へず第一班監督佐々木教諭を派し水害地を視察せしめた結果能美郡川北村字上田子島方面は危険がないので該方面よりの通学生は帰宅せしめた。残余生徒三二名は寄宿舎に収容宿泊せしめた。第二班は現地視察の結果異状なきを確め得たので帰宅せしめた。松任町其の他の親戚に宿泊の者及寄宿舎に臨時収容せる生徒の父兄とは夫々電報及電話を以て之を通知した。

一二日
各職員は生徒通学区域の状況視察訪問を為したが汽車不通、帰宅不能の為寄宿舎収容中のもの三二名で昨日同様。

一三日
加藤恭、佐々木両教諭は能美・江沼両郡の生徒通学区域状況視察並に家庭の訪問を行った。

一四日
五坪校長、勝田・加藤恭の諸教諭は水害地を視察した。

一六日
午前七時二五分教員養成所生徒、農学校上・中級全部実習服の儘集合、予て打合せしてあった川北村字橘より差遣したトラックに分乗し橘小学校を中心に橘新・舟場島の生徒、被害家屋及附近罹災地の応急復旧作業に助力の上午後五時半帰校、当日五坪校長を始め石母田・天田・荒木・中野・松下・舟本・加藤恭・長田・江山・石原・佐々木、県の諸教諭が引率した。又鹿島郡徳田村青年団員一四名本校視察の為来校、宿泊実習中の処水害地救護として本校主任と同一行動に出で橘小学校に出張、午後四時五十分松任駅発列車で帰郷した。

一七日
水害地方通学生家庭状況調査、見舞の為藤盛・佐々木両教諭能美・江沼郡へ出張した。

（「昭和九年石川県水害誌」）

以上の救助活動であったが、生徒家庭の被害状況は、家屋流失一、家屋浸水一六、田畑流失浸水三九、その他

二であった。一方、校内において水害義捐金募集がさかんに行なわれた。職員一同から金二六円二五銭、生徒から一三円七五銭、合計金一三八円を比較的被害の多かった鍋島太一外九名の生徒の家庭に分配贈呈した。

実業教育五十周年記念

昭和九年一〇月二五日には、実業教育五十周年記念式が全国的に盛大に行なわれた。実業教育五十周年というのは明治一六年（一八八三）四月、農学校通則の出令を実業教育の起点とみ、五十年の隆昌発展を祝ったものである。当日の記念事業には館知事が総裁、青戸金沢高等工業学校長が会長となり、金沢市西町公会堂で一、七〇〇名の参列者による盛大な記念式典と農学博士東郷実による記念講演が行なわれた。また、当日から三日間県内実業学校生徒による店頭装飾競技会、ポスター展覧会、資料展が市内デパートをはじめ三八商店で行なわれた。本校も実業学



実業教育五十周年記念本校出品物

品名	数	説明	著者及び刊行者
昆虫学	一		草野正行口述
養蚕論	二		河村九淵口述
養蚕論	二		稲葉口述
農芸化学	一		草野正行口述
米麦栽培	一		
園芸論	一		
作物晩餐	一		竹内久米男口述
農業講習所沿革	一		石川県農業講習所
職員並現在生徒名簿	二		石川県農学校
係員等名簿	一	明治一三年九月	農業講習所

（「実業教育五十周年記念会誌」）

校の中心として出品し観覧者の注目をあつめた。

本校から実業教育沿革資料として右表のものを陳列した。

また、学校生徒製作品の即売は、農業学校三五校、工業学校一六校、水産学校一一校、女子職業学校四校、合計六四校で、即売品は九、八八三点にのぼり、その売上げ高は二、〇九五円三七銭に達し、予想以上の成績をあげた。本校の出品物は下表の通りである。

品目	数量	単価（円）
筒缶詰	三斤入 九〇個	
蓮根缶詰又は壜詰	三〇個	
蕗菜壜詰	五〇本	
福神漬	一升缶 四八個	

（「実業教育五十周年記念誌」）

創立六十周年記念祭

昭和一〇年九月一七日、一八日の両日に、本校を中心にして「創立六十周年記念祭」が盛大に挙行された。今、行事を追ってここに再現してみよう。

記念式は、一七日、一〇時三〇分より、花火の合図と共にはじまった。折りから降りしきる雨の中を、同窓生、父兄、知事をはじめ、来賓多数が出席された。国歌斉唱、教育勅語の奉読のあと、五坪校長の式辞、生駒高常知事の告辞、来賓の祝辞と続けられた。来賓は、松田源治文部大臣（代読）、谷寿夫第九師団留守司令官、青戸信賢金沢高等工業学校長、高橋潜蔵石川県下中等学校長総代（金沢商業学校長）、正見二郎松任町長、山田善太郎石川郡小学校長総代（松任小学校長）、前田豊吉石川郡町村長会長の諸氏で、いずれも本校六〇年の歴史を寿ぎ卒業生の功績を挙げ、産業の現状から国力の振興は農業の振興、農業教育にある事を力説され、農村中堅人物の都会集中を憂い、或は農に身を捧げる若き生徒諸君の覚悟、進むべき道を力説された。続いて同窓会員総代高井與三郎から、本校に学んだ頃の生徒に帰って当時の状況を語り、現在の飛躍に比べ感慨おくあたわざる旨を述べ

られ、生徒総代として金田平進が、祝典に参加できた喜びと更に一層の躍進を誓う答辞があって、最後に中野義隆教諭によって、永井柳太郎はじめ各方面諸氏からの祝電が披露され、一一時三〇分記念式を閉じた。

記念式に引き続いて謝恩表彰式に移り、五坪校長の勤続功労者二十有余名に対する謝恩の辞のあと、謝恩状ならびに記念品が贈呈された。被表彰者は次の各氏であった。まず、多年本校職員として生徒の学業訓育実習にあたられた先生の氏名と勤続年数

荒木　與逸（一七年）　中野義隆（一六年）　藤森光雄（一四年）　舟木十郎（一三年）　美馬住二（一二年）
松下栄太郎（一二年）　加藤　祗（一〇年）　横浜勘蔵（一二年）　曾山直高（一一年）　米谷徳松（一三年）
永井太三郎（一一年）

次に母校と同窓会発展のために尽瘁し、地方産業の開発及び農業経営に貢献され、表彰された人は次の通りである。

森成次郎、中浦藤吉、本谷愛次郎、高井与三郎、石坂次郎、三盃隆平、堂前専治、若島春二、中島栄治、吉田八三郎、熊田真佐雄、大石斉治、松田俊、駒田孝義、奥田金松

来賓として津幡農蚕学校江藤安次郎校長、同窓生総代三浦五一から、功労者を表彰するのは、教育の府として意義ある事であり、各方々の諸業績に敬意を表したい旨の祝辞があった。被表彰者を代表して荒木與逸先生と、中浦藤吉から謝辞があり、一二時三〇分花火の響きと共に閉会した。

午後一時になって、万国旗幔幕で飾られた体育館で、一七〇余名の参会者によって祝賀の宴が開かれた。文部省安達督学官の挨拶をはじめとして、来賓各位、同窓会役員方々によるテーブルスピーチは、いよいよ記念祭を盛りあげた。やがて県知事の音頭で皇室の万歳、第九師団留守司令官による本校の万歳三唱で会を閉じた。

朝から降り続いた雨は午後に入って寒風を交えて激しくなった。計画された記念提灯行列のために、丹精をこめて作った飾り物も大方はこわれ、諧謔的な絵も消失したが、雨天決行となって、午後五時、記念を祝う赤飯と本校産の梨で腹ごしらえをし準備が進められた。六時、集合の合図と共に中下級生は提灯を手にし、上級生は薄い夏の白シャツに実習ズボンにゲートルを巻き、頭に手拭いを締めて造り物を肩にして運動場に集合した。来賓や同窓生も多数参列し、ブラスバンドを先頭に、五〇〇の健児による記念歌は松任町に響いた。

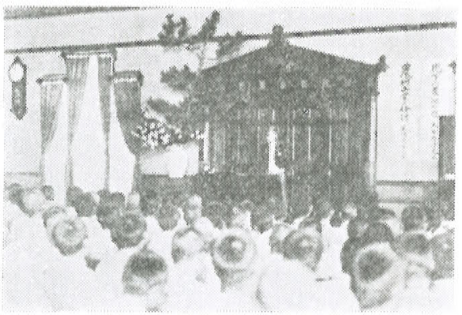
（A）　Ⅰ　御国の基農業を　栄かさんと雄々しくも
　　明治の始立て初めし　其名は高き我が松農
　　Ⅱ　幾多の辛き変遷を　顧みつつも今日此の日
　　六十周の式典を　挙ぐる我等が胸躍る

（B）　Ⅰ　越の白峰を仰ぎ見て　農を磨きつつ
　　尊き汗に築かれし　歴史は輝く六十年
　　Ⅱ　黄金波打ち此の秋に　六十年の記念日を
　　迎へし我等の血は躍る　歌へ若人高らかに

ただ声の限りに絶叫して過ぎる異彩の行列に、観衆は驚異の眼をみはり、空に続く花火の五彩にただただ呆然としていた。全身ぬれ鼠となって運動場に帰り、本校の前途を祝して万歳を三唱し、提灯行列を企画経営にあたった生徒役員によって五坪茂雄校長はじめ数人の先生を胴上げし、一同疲れ果てて帰路についたのは九時であった。

創立六十周年を迎えるにあたり、本校の今日あるのは皆先輩諸氏の努力に負うものであり、中には既に世を去

り故人となっている人も少なくなかった。そこで記念祭第二日の十八日、午前十時より聖興寺に遺族を招き追悼会が開かれた。出仕楽にはじまり、同窓会長、同窓会総代、在校生総代の弔詞、伽陀、登高座、呉音弥陀経（焼香）、下高座、伽陀と続き、遺族の謝辞で午前一二時法会を終えた。



六十周年記念講演会

午後一時より、本校講堂で記念講演会が開催された。本校卒業生であり、富山県氷見農学校長である大石齊治先生は「現下の農政問題」と題し、また本校旧職員であり、前岐阜高等農林学校長であった草場栄喜先生は「農村工業の検討」と題されて、深い学識と長い経験とにもとづく講演であった。午後四時半の閉会をもって、創立六十周年記念祭のすべての行事を終え、また新しい歴史をつけ加えるべく歩みだしたのであった。

其香碑の建設

昭和三年度の同窓会通常総会は、昭和四年三月一六日開催された。その際、会員死亡者合同の碑を建て、故人の事蹟遺徳を追慕し永く記念する象徴たらしめんという事が諮られ、満場一致で議決された。ただちに、高井與三郎外数名の建設委員が委嘱された。六月一日、第一回の委員会が開かれ次の諸項が決定された。

1　追悼碑は宮保村、東田朝一氏の提出せる花岡岩による設計を採用し、この建設を同氏に委嘱する。

2　建設の位置は、母校前庭玄関に向かって右の既設の忠魂碑と並設する。

3　標柱に記載する文字は凡て掘り込みとなす。表面の文字はなるべく宗教味のない字句とし、この選定記載は第四高等学校長武藤虎太先生に御依頼すること。なお、側面には「昭和四年八月　正四位勲二等　武藤虎

太選書」の文字を掘り込むものとする。

4　標柱台石の裏面に「同窓会建之」の字を掘り込むこと。

5　材料検査並に工事監督は、高井與三郎、中本　勲、松原多喜男、中野義隆、荒木與逸がこれにあたる。

6　九月四日（水）除幕式を行なう。工事報告は松原多喜男がなすこと。

このような決定にもとづいて六月二二日、宮保村黒瀬の東田と、工費五〇〇円、竣工期限八月二〇日として契約された。七月一一日、県に対して校庭の一部、凡そ六坪を永久無償に借用し、碑を建立するための許可の申請が同窓会長竹内秀雄より願い出された。建設予定の位置には樹木が植っていたが、生徒の手により移植され、八月四日、金剣宮々司高畠信二氏を斎主として地鎮祭が挙行され、翌日より工事が起こされた。

碑面の撰書も武藤氏が請を容れられ、八月七日、次のような文書と共に届けられた。

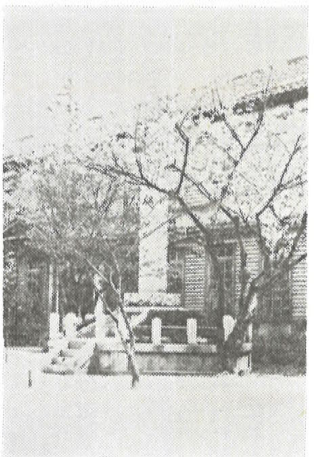
拝啓　炎暑の折柄愈御清安奉賀候然は御頼嘱の碑面揮毫相試申候間何時にても差上可申候就夫左の件念の為申上候

一　碑面の字配りは上部を少々下部は多分に御残しの事存候其調節釣合ひ等御見計ひの上適当に御配下され度従て各字切離し置申候

各字の間も適当に御配列御斗願上候

二　彫刻は申迄もなく圓鑿（マルボ）りに成され候事と存候薬研鑿（ヤゲンボリ）は見すぼらしく存候

兎に角揮毫拙劣誠に慙愧の至御座候御配捨願上候先は右迄



其香碑

申上候　匆々拝具

　　馥其香　　周頌載芟

　　有馥其香邦家之光

　　穆如清風　　六雅烝民

　　吉甫作誦。穆如清風、仲山甫永懐。以慰其心。

さっそく、委員会が開かれ種々検討されたが、「馥其香」と決定され、碑名を其香碑と名付けられた。

このようにして碑の建設は進み、九月二日竣工検査を終えた。碑石、碑台、柵及び段などの主要部はすべて茨城県産の最良花崗石作である。碑の平面積は約六坪、高さ地上一七尺、碑石は、高さ一〇尺、巾二尺二寸、厚さ一尺五寸、この重量九〇〇貫である。工事の時期は、盛夏酷暑の頃であったが、工程が極めて順調に進歩したのは在校生の援助によるものであった。

昭和四年九月四日、午後一時より来賓、同窓生、遺族、職員、在校生ら多数の参列を得て盛大な除幕式が挙行され、遺族を代表して吉村栄太郎が除幕をなした。続いて城丸兼雄師の御尽力により、導師、松任町四ヶ寺住職、伶人五人、助音僧一一人の人達の指導で、追悼法会が盛大に行なわれた。桜井貞二の遺族、同貞氏は、同窓会の今回の壮挙を喜ばれ、各位の英霊を慰めるために歌二首を献歌された。

除幕式けふのみのりや逢ひかたし石にいく千代ひかりはなたん

同窓のともこゝろ碑をたてゝさき立つみなの名を遺してしかな

校舎改築運動

昭和一一年度の同総会定期総会は、昭和一二年三月一六日開かれた。その席上、母校改築を促進する案が決議された。これにもとづいて、三月一九日に五坪茂雄同窓会長より評議員が

委嘱され、その実行方法の打合せのため、第一回の役員会が四月一〇日午後二時より本校にて役員一五名出席のもとに開催された。

その席で決定された事は、各支部長に通知されたが、大要次の通りである。

一　母校の実情を調査したる結果、校舎の狭隘腐朽並に教育上の施設不完備等により、速に之が改築、拡張完備を必要とする事

二　同窓会にて陳情委員団を組織し、まず五月初めに於て第一回の陳情を県当局等に行ふこと。

三　第一回の陳情委員は各郡市支部長・副支部長並に母校附近の役員之に当る事

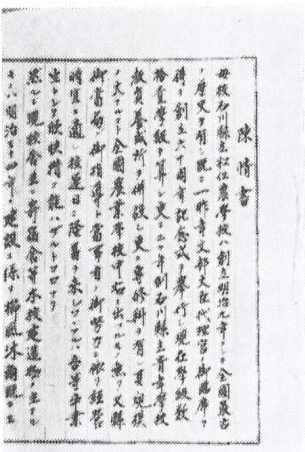
その後、二回の校内役員会が開かれ、陳情書の草案が木沢、松田両氏によって起された。その陳情書は次の通りである。

陳　情　書

母校石川県立松任農学校ハ創立明治九年ニシテ全国最古ノ歴史ヲ有シ既ニ一昨年文部大臣代理官ノ御臨席ヲ得テ創立六十周年記念式ヲ挙行シ現在学級数拾壹学級ヲ算シ更ニ二ケ年制石川県立青年学校教員養成所ヲ併設シ更ニ専修科ヲ有シ其ノ規模ノ大ナルコト全国農業学校中右ニ出ツルモノ無ク又県御当局ノ御指導ト当事者ノ御努力ニ依リ経営時宜ニ適シ校運日ニ隆昌ヲ来シツツアルハ吾等卒業生トシテ欣快措ク能ハザルトココナリ

然ルニ現校舎並ニ寄宿等本校建造物ノ主ナルモノハ明治三十四年ノ建設ニ係リ櫛風沐雨既ニ三十七年ヲ経過シ建築当時物価漸騰ノ趨勢ニ際会シタル為材料ノ良質ヲ得ザリシト爾後ノ管理修覆等ニ遺憾ノ点有リシ為其ノ経過年数ニ比シ腐朽欠損著シク各所ニ土台崩レ床落チ大雨アルヤ漏洩随所ニ生ジ益々腐朽ノ度ヲ高メ大風アル毎ニ窓框戸硝子ノ破壊甚ダシキニ至レリ

而シテ之ガ修理ノタメニ最近数ケ年ニ於テ壹万円近クノ修繕費ヲ加ヘタリトノ事ナルモ其後新タナル腐朽破損ノ箇所ハ年一年ト累加シ仮令徹底的大修繕ヲ加フルモ余命少ナキコト県下中等学校々舎中随一ナリト信ス更ニ教室ノ状態ヲ見ルニ生徒三十名程度ヲ収容スル教室多ク現在ノ一学級五十名定員ニハ極メテ狭隘ニシテ教壇教卓ト生徒ノ机相近接シテ配列シアリ為ニ



陳情書の一部

教卓前ノ生徒ハ教師ノ咳唾ヲ常ニ顔面ニ被ルノ状態ニアリ且ツ実習服実習足袋、実習用具ノ一部等モ他ニ之ヲ納ムルノ設備無キ為止ム無ク教室ニ置ク等不衛生ニシテ実ニ不体裁不愉快極マルノ状態ナリ加フルニ教室ハ多少ノ増築アリシト雖モ学級増加ニ伴ハス之カ為教材、教具図書、柔剣道等ノ置場ナク且ツ実習着ヲ更衣スル室モナク教授訓育上不便少ナカサルヲ常ニ目撃セリ

更ニ世論漸ク時局打開新日本建設ノ為農業興国ノ緊要ナルヲ今更ノ如ク痛感シ其ノ源流ヲナス農業教育ノ一大刷進ヲ要求スルヤ切ナルニ至レリ　而シテ今後幾多ノ新施設ヲ行ハントスルモ校地狭隘ニシテ之ヲ設クルノ空地無ク又現設備ハ所謂寄木細工的ノ不適当ナル配置ニシテ之ガ運用ニ不利不便著シク教育上ノ効果不徹底ナルヤヲ憂フルモノナリ茲ニ於テ去ル三月十六日開催ノ同窓会通常総会ニ於テ母校々舎ノ改築拡張並ニ設備充実ノ急務ヲ痛感セル会員一同ハ満場一致ヲ以テ之ガ実施ヲ県御当局ニ希フ事ノ決議ヲ為スニ至レリ吾等微力ノ身ヲ以テ之ガ委員ニ委嘱セラレ特ニ校舎ノ現状ヲ詳細調査シ真ニ改築ノ急ナルコトヲ確信シ本県経費多端ノ実情ヲ充分認識セルニモ関ラス敢テ之ヲ訴フルノ止ヲ得サルニ至レリ

庶幾クハ本県農業教育徹底ノ為メ吾等ノ熱意ト衷情ヲ諒トセラレ速力ニ松任農学校ノ改築拡張ヲ行ハレンコトヲ　茲ニ同窓会ヲ代表シテ謹ミテ陳情スル次第ナリ

昭和十二年五月　　日

このように準備が進められて、四月二八日、熊田真佐雄・中島栄治ら二三名が母校改築促進実行委員が委嘱された。そのうち二一名の実行委員が、第一回の陳情委員となり、五月四日、石川県農会に集合して、午前一一時県庁に赴き、総務部長、学務部長に肉筆の陳情書を提出し、学務課長、土木課長、庶務課長には口答にて陳情した。あいにくと児玉知事が不在であったため、校長と金沢の委員とで五月六日に改めて陳情した。

県庁を引きあげて、県農会にもどり反省と今後の事が協議され、次のことを確認した。

一　松任農学校改築期成同盟会を結成する事

二　公債を担保にして銀行より借入金をなし使用する事

三　支部に於ては陳情書を各郡選出県会議員に提出し助力を願う事

これにもとずき、各郡の県会議員に対して先の陳情書が最寄の支部長より渡され、更に、五月一二日に県参事会が開催されるので、それまでに各郡出身県参事会員に対しても同様の陳情がなされた。まもなく県議会事務局より、中島栄治等のもとへ県会で陳情書が採択される旨の案内状が送付されてきた。委員一同は「採択即決定」と判断し、改築運動は頓挫した。しかし、国の姿が変り特に前年の八月に広田内閣のもとに決定された満洲開拓国策が動き出して、いわゆる移植民教育が陸軍省や拓務省の肝いりで実施されることになったため、本校でも例にもれず、徳田専修科に加藤完治を校長とする日本国民高等学校に似せて「日輪校舎」を新築することとなり、この校舎改築の件はすりかえられる結果となった。なおこの趨勢は、専修科の終焉、白山塾の完成が影響して、一八年四月、修業年限三ケ年の拓殖科が設置されることとなり、一貫して農村の次三男を対象とした移殖民教育がなされたが、昭和二〇年一一月二八日に文部省学校教育局長より出された「終戦ニ伴フ中等学校措置ニ関スル件」の

三　学校学科名称及学校種別変更ニ関スル件

(1)　農業学校

（前略）獣医畜産科ハ昭和二一年度ヨリ之ヲ畜産科ニ変更シ（下略）

(3)　拓殖学校

（前略）農業拓殖科ハ農業科、農蚕科、農林科等商業拓殖科ハ商業科ニ変更スルコト（下略）

によって昭和二一年度より農業科となり、獣医畜産科は畜産科となり、いずれも松任農学校併設中学校、松任高等学校第一期生と共に卒業し、畜産科は昭和二五年三月卒業の二九名をもって終るのである。

主な学校行事

大正一五年から昭和二三年までに種々な行事が催されたが、そのいくつかについて、当時の生徒の文章をここに掲げて有様をのぞいてみたい。

関西関東旅行抄

FⅢ　髭右近英夫

九日早朝起床し一行は更に尽きぬ旅先の楽しみを予想しつつ午前六時五十分宇都宮に向って車中の人となりぬ、繁忙の巷より再び名に負ふ坂東平原の漸次に展開されて最初は蔬菜園より水田に麦畠にと遷りて果は山林に尽きぬ。私は今を遡る三百年茫漠たりし草原の今は転じて瑞穂の野と成れるを想ひ乍ら北進して九時三十分宇都宮に到着し直ちに停車場より一粁に余る高等農林学校に赴き農場を参観したり、農場は畠地七町歩田地四町歩の広大なるものと雖も栽培植物には大して賞讃に値なしと思ひしに専門独特の説明を聴いて驚異を感じ且讃辞を惜まざりき。十一時再び車中の人となり日光に到着せしは正午過ぎなりき。それ日光は山岳地を挟みて東西両町より成り区域極めて広大なり一行は駅より電車にて東照宮に達したり。東照宮は別格官幣社にして家康公を祀る。社殿は権現造にして結構の壮麗なる蓋し天下無比なり、殊に有名なる陽明門の日暮門と称せらるるも実に宜なりと云ふべし。我顧念するに戦国乱世を鎮定し爾後三百年大平の礎を築きたる家康が祭神と雖も斯く迄豪勢華麗なるは神社の感なし。

東照宮よりり出でて西なる二荒神社に拝す。之より電車にて馬返に到り、ここより徒歩中禅寺に向ひぬ。折から淫雨霏々



中禅寺湖にて

として注ぎ雲霧の渓谷に棚引く中を左に大谷の激湍を聞き右に百丈に余る懸崖を眺めつつ紆余曲折の道を喘ぎ乍ら登り方等槃若の瀧を見て午後五時湖辺に辿り着き直にレークサイドホテルに投宿したり。中禅寺湖は男体山の噴出に依り大谷川を堰塞して成りし湖沼にして朧の月光を浴び霧中に聳ゆる二荒の此の湖に蔭を投ずるや形容すべからざるものあり。湖水は流れて直下に懸垂すること百二十米の華厳の瀑となり瀑水堂々附近を震動せしめ煙霧騰り壮観比なし。されど快哉の裏面には恐怖伴ひたりき。日光には華厳の外猶降霧、羽黒、慈観、龍頭の瀑布数多あり、此の地は頗る寒冷にして海抜正に二千米菖蒲咲く五月に尚桜の綻びざるの一事によりても良く之を知るべし。

翌朝一行は数艘の船に分乗して湛々たる湖上を濃霧に被はれたる男體山を後に見て横断したり、時に私は湖水の冷きに今更其の感を深うしたりき。湖水を渡り終り険峻なる山路を足尾に向って上る。山の頂より先は隈笹のみ生じて喬木の繁茂せるものなく只僅に大島桜のみを認めたり。これ銅製錬の煙毒の為めに生育出来ず只矮生なるもののみと其の抵抗に大なる桜のみ存する所以なり。

其より小坂、別子と並び称せらるる、大銅山足尾に着し、銅鉱採掘場及び製練所を参観したりき。一行は其の規模の広大にして且結構の壮大なるに驚異感服したり。午後四時足尾を発して汽車で桐生を経由高崎にて乗替へて右には榛名浅間の山を想見しつつ碓氷の難険を通り上杉、武田両雄の合戦をもつて名ある川中島を眺めつつ長野に到着したるは暁明の四時二十三分なりき。駅より二粁、市の北方に巨刹善光寺あり。未明の為め開門を俟って入境拝観したり。有名なる闇の円廊を廻りて神秘の鍵を探ねたりき。

帰途此処が最後のお土産の買場所と名産林檎其の他の名物を鞄に満す。下向の後余裕の時間を利用すべく公園を散策したり。兼六公園に比すべくもあらず。

長野を十時二十一分に出発し途中直江津を経由し能生、親不知の難所を今は車窓より左には巍然として我を被ふ数百丈の懸崖、右には一望千里の海原寄せては返す白浪の足を洗ふを見る。十一日間の永き修学修行も無事安穏裡に終了し欣喜雀躍として松任に下車したのは午後七時三十分なりき、これより旅行中の事を追想し互に楽しく語りつつ別れて待ちつつある家の人々に一刻も早く我が無事に帰りしを知せ且お土産話をすべく駈るが如く家路を急ぎたり。

最後に出発及び帰校に際し校長先生以下諸先生及び寄宿舎生徒の送迎を忝し衷心感激に堪へず一行に代り謹みて感謝す。

（「学友会」第三七〇号）

中部地方一周の記

二部三年　大井生

金風颯々として紅葉を催し旅行の好期節となった。時は十月十一日。

淡い夢路を辿って居たがパット驚かされた様に目が覚める。未だ予定の時刻に早すぎる。吾々の数日前から待ち焦れていた中部地方一週旅行が、愈々数時間の後に迫ったのである。誰か胸の躍るのを覚えない者があらうか?。七草の露深く白山嵐に追つたてられ一行の蔽ひ得ぬ愉しい快い面が九時松任駅に揃った。やがて引率の松岡先生が見えた。間もなく驀進して来た上り九時二十三分の列車に一行はのり込む。ピーと汽笛は中空に響く、同時に松任駅を出発する。

車中満員で二割引の価値を認めた。

笠間、美川と……数ケ所の駅が十時前であった為めか、時々窓を開けたが敦賀、福井は汽車は夢を乗せて過ぎた。

米原近くにて同僚の声に醒むればウヲツチは三時だった

間もなく名古屋行に転乗したが伊吹颪いと寒く垂井や岐阜も打ち過ぎ関ケ原を打ち過ぎる。天下分け目当時を思ひ起して限り無き懐古の念に打たれた。あはれ一挙に徳川氏をほふり、古城落日の豊臣氏を再興せんとした大願望も此の一戦に果敢なき水の泡と消えた。西軍の恨の遠久に絶えないのか桃山も闇んで見えない。様々に想を廻す間に汽車は南へ南へと平野を猛進した。夜は次第に更けて行って、木曾川の水車船も岐阜の稲葉山頂の赤い城も見る事は出来なかった。

五時枇杷島に着く、枇杷島〳〵と車掌に叫ばれて下車した、木曾の川風に緑髪を吹かれ短い首を尚縮めてステーションの前に佇んだ。

小ステーションで一行の外に僅か三名の客を吐き出しただけだった。先生は『市場はどの方面で御座んす』とお得意の質問せらるると、最も茶目らしいしかも肥った婦人は『この大通をドンとつき当り左へお廻りになればよろしい。なも。はい。……しかも口調が如何にも変に聞えた。

大通とは言ふものの左右両側は青田で黄金の波でなくて一面青き毛氈の様で百万城下の二百十日頃の装ひ十月の猶寒きを知らぬ顔でいた。市場はまだ全部開くまでは一時間も予猶がある様だ、為に枇杷島市内見学をなさんと一行は此処彼処を逍遙すると附近の人は変な目つきで凝視している。それもその筈だ。問ふ言葉は加賀能登二国の純なまり、小さい事にまで哄笑し、其の上夜汽車の疾労で大な奴さん等は未明より不規律に外套を引き掛け、古い軍隊靴をバタバタ引き歩けば異様な目

つきは勿論なりと後で自分等はふき出した。

市場町たる枇杷島は流石は東洋一の青物市場だと一同は驚異した。熱帯に亘るあらゆる青草八千八百種が網羅してあってアデンの楽園をも斯くばかりの結構に陳列され殊に当地名産の尾張大根の市場の如きは容易に形容出来ない。

自動車、馬車が陸続として次から次とこれ等の物産を満載し来り、人馬の往来織るが如く雑踏を極めている。先刻鉄道便にて青森の林檎、台湾のバナナの荷着き、『新荷到着』と大書し群衆の最も注意する場所に掲示した。

この市場の青物の大部分はこの地方に生産し、七八里の遠方からも遙る〳〵出荷するので、実に年中園芸果樹に農民の大部分は力を集注し田圃の如きは濃美平野広しと言へど正条植は一寸見当らぬ程畠農業に大資本を投じつつあり、女子供等でも吾等の地方の農民よりも、農業を理解し生産物に重きを置いている。随ってその報酬も大であると言う結論になるのである。かくして近年農村の進展を見た此の地方では農村唯一の交通機関たる自転車！この自転車に乗れ得るか否かが農家の嫁の撰択の第一条件になっている由。……

枇杷島橋よりも十五分市外電鉄に身を托せば清洲試験場の正門に至り門を叩いて参観を乞へば快く受付けてくれた。

（「学友会報」第三四号）

演習林生活の一日

AⅡ　山本治雄

時は四月の中頃、春色将に酣ならんとする暖さの時、我等は徳田の演習林に足を留めていた。或日、静かな一夜は明けて谷間の峰より爽かな朝日が昇り、花に映じ、萌え立つ若葉の露に宿る。谷を埋める白霧も、次第次第に薄らいで行く。

今日は朝から快晴である。面より蒸気立つ谷深い堤、岸には杉林が鬱然として、其の間よりのぞく。桜の一枝、まあ何たる光景ぞ。昨日の疲れも一夜の夢と消え、快い大気は胸一杯に吸い込まれる。我等はこの堤で洗面するのである。山はよい、朝はよいとは感じながらも、今朝の気持は格別である。洗面が終るとしばらくして朝礼だ。其の行事として先づ国旗を掲揚する。体操も行ふ。総て本校の外の朝礼と同一である。然し白地に赤い燃えるような日章旗が、山奥より吹き出るそよ風に吹かれて翻々としてひるがへる様は、亦言ふにいはれぬ感を抱かしめる。やがて朝食である。合図の鐘が鳴るが早いか、我先にと食堂に入る。その様は亦勇敢で面白い。一同は揃って挨拶をなし、食べ始める。飯は流れ込むようにして胃袋を満たす。朝食がすむと、一時間の休憩を終へて作業である。

やがて出発の鐘に送られて、銘々は実習服に地下足袋、ゲートルと、身軽な装で手に手に使用の道具を持ち、作業地に向ふ。

日は路傍の千草に輝いている。野山は若葉で彩られている。小鳥が鳴く。突然何所かでけたましい音がする。あたりはだんだん賑やかになる。其の中に目的地に着く。開墾は班別で行ふ。或は開墾鍬、或は鎌、或は抜根機を友として一行はそのトップを切る。

木を切る、根を掘る、運ぶ、見る見る中に地は開かれ、木や根は次第に積まれて行く。何時しか時は過ぎて、太陽は空高く昇っている。そこそこにして休憩の合図がある。然し頑固なるものは休まないで、せつせと働いている。遙かな峰の谷間より淡い糸煙が昇っている。多分七尾のセメント工場の煙突だろう。開始の鐘が鳴るが早いか再び始める。太陽は益々照る、開墾は次第に進む、あたりの様も刻々と変って行く。若人はいよいよ励む。斯くして日中は汗でシャツも実習服もまるでびしょびしょだ。そろそろ腹も唸り出す。時しも作業中止の合図、一行はその合図の鐘と共に寄宿舎に帰る。

かくして温い昼食によって空腹は回復せられ、元気も幾分回復して亦午後の作業に取りかかる。皆んなは午後は一段と元気を出してやる。然し割合に能率は上らない。背中の汗も冷たくなる。夕陽は将に没せんとしている。其の時無事一日の作業を終る。あたりは俄かに静寂を極める。落日に見送られて一日の労苦により、生み出された若人の血と汗との結晶は、将に希望と努力の熱血に変らんとしている。誰もだいぶん疲かれていた。然し若人の健かな腕により切り開かれた、なだらかな山の跡を眺める時、一鍬々々打返した土塊を見る時、さすが若人の意気と熱血とが思ひやられる。折しも晩鐘の音に誘はれて、そよ風がさっと顔をなめる。

一行は手に手に用具を持って、疲れも見せず歩みを運ぶ。寄宿舎に帰って夕飯が終る。入浴をして体を清め、疲れをなほし、静かに一日を顧みて日誌を書く。点検を終へて一同は一室に集合し、暗いランプの下で、無言の行をやる。やがて就床の鐘が鳴る。「お休み」の声はそこここに起る。あたりは暗い闇である。春を彩る山河も、緑に萌ゆる。草木も、今は静か



実習林実習演

に眠って行く。時計ばかりが動いている。いつしか寄宿舎も今宵の夢を結ばんとしている。

満鮮旅行

修学旅行のいくつかの中で特筆すべきは、満鮮修学旅行である。中等学校の修学旅行は国内に限られていたが、学校側では、農学校生徒の将来のためには、満洲、朝鮮への旅行こそ意義があるとの見解で、県を説得し満鮮旅行が許可になったのである。

大正一五年一〇月、最上級生の第一回満鮮旅行が行なわれた。旅行日程は約半月、旅費は約七〇円を要した。当時の七〇円といえばなかなかの大金であった。

下関から関釜連絡船に乗って、夕やみせまる釜山に着き、京城を経由し満洲に達した。朝鮮では、家々に干してある真紅のナンバの色と人々の民族衣装の白が印象的であった。奉天では先輩の出迎えがあり、満洲の農場を見学した。農場は広大無辺、一望千里の大平原で、日は平野から出て平野に没するという大農場を、心ゆくまで見学することができた。帰路は旅順、大連を経由し神戸に着いた。

当時、わが国の外交政策は満蒙進出に重点がおかれ、物資豊富な満蒙は、国民にクローズアップされていたときだったので、その成果は大きかった。この旅行がきっかけとなり、同期生の海外進出の機運が高まり、朝鮮、満洲、台湾、樺太、南米ブラジルなどへ勇飛したものも多い。そこ



で、その一部を掲げる。

奉　天

午前八時一行は日程通り先輩に見送られて京城を出発した。四方の山に僅かながら小さい松が点在している。堤防も何にもない河原と平野とが引続いて限界のない臨津江を通る、朝鮮式河川の代表だといっても差つかへなかろう。

高麗の旧都開城附近の山裾には見事な人参畑が見える。黄海道の山岳重畳たる中を辿り行く程に平野は開け馬洞駅附近では甜菜が見られた。黄州駅の朝鮮林檎の珍味を称讃しつつ河辺洗濯、頭上の籠を見るにつけても流石朝鮮だとうなづくに充分であった、砂洲を抱く大同江を渉り平壌に至る、此処は朝鮮最古の都で箕子の廟及び日清、日露の古戦場としても有名である。朝鮮第二の都会だそうだ。汽車の北上と共に落陽もせまり今や新義州に至る頃は既に落ちていた。汽車は鴨緑江を通る江上に閃めく星、江岸につながれる船、沈黙の中より出づる車窓の歌、側なる橋を通って行く支那人、朝鮮人を見る時は朝鮮国境ならでは味はれない情緒がうかんだ。三千九百八〇呎の暗黒の開閉橋を過ぎて今や国土を離れし外国に入った。外国と称するだけに時計も一時間遅くせなければならない。

安東県に四十分の停車、支那税関の検閲が始まる、案外楽であった。此の間で今迄沢山の白衣をまとへる朝鮮人が黒帽を被れる支那人と早変りした事にいささか驚いた。僅かに国境と名付くるにつけてもかく民族が急激に変化するものかと怪まれた。身の丈長く大きなる手荷物一種の嗅気は満洲人をして私達に感ぜしめた第一印象であった。白の美、黒の醜は顕著に此処で感ぜられた。

満洲の寒気は車窓の二重硝子ステーム等に打消されて汽車は未だ北上して行く、辺は分らない。明れば十四日の払暁だ、車窓に眼を向ければ既に目渡す限りの大平原、満洲の秋、高粱も大豆も何もない、只点在するポプラの集団あるばかりだ。陸の太平洋とは斯の如きをいうのであろう。始めて満洲の広漠を感じたのであった。

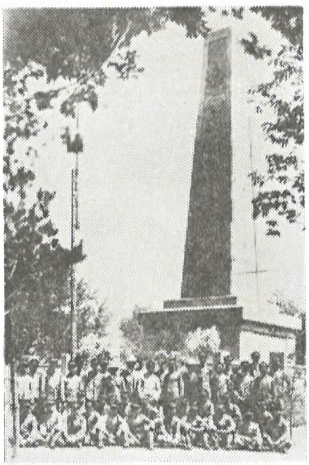
海もない山もない一眸千里の大平原は私達を如何に感ぜしめた事でせう。

時は六時半異郷の地に始めて下車しぬ。郷土の先輩が出迎られた事は非常にうれしかった。駅前の乗合馬車の多きに驚く、赤練瓦の三階の高楼軒を並べ依然たるは満洲の野にあるとは思はれない。

満洲ならでは味はれない馬車に乗り移り奉天見学の途についた。新市街の東南の巍然と聳ゆる忠魂碑に至る。奉天大会戦

の際忠烈なる名誉の戦死を遂げし二万四千八百四〇人の納骨堂にして堂上百尺の小銃弾形の碑が屹立せり。我等一同ありし人に対して深刻なる敬意を表しぬ。

其の前には戦役記念碑及び当時を物語る八吋の大砲あり、馬上に移り旧奉天を目指行くに途中我が日章旗が総領事館の空高く翻飜として満洲の地に飜るを見たる時、私達の胸は如何に心強く感じた事でしょう。



ハルピンにて

恰も張作霖の入城もかくばかりと車上悠々城門を通る、今や支那人のみといっても過言であるまい。街路の狭き往来の頻繁黒帽子の支那人女子の少き、交通巡査、軍兵の服装等あらゆるものは支那風に見える。

城内は政治軍事の中心程あって官庁軒を並べている、奉天第一のデパートメントストアの五層階上に昇り旧奉天を眺めし時は実に心持が良かった。階上の禁止小便の立札を見るにつけても支那人の滑稽さが味はれる。午前十一時北陵に向ふ。奉天の郊外黄塵濛々として眼目を開く困難なり。其の中を通り越し今や北陸に至る、全景恰もお伽の龍宮を想像するも可なりと称する程立派にして規模壮大なりき。石畳を踏んで進むに境内広濶全く別天地の感あり。

銃は杖に椅子に腰煙草は口、実に支那式を発揮せる支那番兵あり。楼門の奥に太宗文皇帝の陵と大書してある、其の後方に万頭形の円丘あり、之清の太宗の寝れる地なり、太宗文徳高く武威入荒に輝き帝業始めて隆とにより隆業山と称する。然るに今や其れは工足に掛けられ足跡歴然として歩道の観あり実に惜しいものでした。清朝の社稷既に亡び雄魂泉下に如何なる感やあらんと感慨に耽けるのも無理なき事であった。建物の大きさ、絵書の妙は実に立派なものでした。帰途につき新奉天の医科大学の五階層に昇り新奉天を俯瞰したる時、さながら満洲の気分を理解した様に又一日の行程で心持が大きくなった様な気がしてならなかった、明日の行程を続くべく英気を養ふべく旅館に入る時五時頃なりき。

撫順炭鉱

十月十五日奉天発午前九時四〇分の列車に乗り込み十一時五分撫順駅に着しました。此の度も駅頭には本県出身の多数の

先輩各位が我々一行を出迎へて下さったのが非常に嬉しく思いました。

先輩各位の厚意で撫順図書館で昼食を認め後某先輩から撫順の現況を承りました。

此の撫順の町は奉天の東九里の所にあって、人口五万五千、内日本人が一万五千位移住し日本人の中学校、鉱山学校、高等女学校等の教育設備、病院其の他消費組合の設備が完備し実に内地以上に文明の恩恵を受けて居るのに驚きました。附近一帯の土地は甚だ肥沃で大豆、高粱を盛に栽培し、就中米に至っては内地米のそれに優るとも劣らない撫順米が三十数万石から収れるそうです、亦炭鉱に使用する坑木を自給の目的で満鉄が附近の山野に朝鮮カラマツ、ニセアカシヤ、満洲黒松等の樹木を植栽し之が又非常なる好成績を挙げて居ると言った様に我々農林の学に携る者と雖も此の撫順は大いに注目に値するのであります。

一口に撫順炭鉱と申しましても東西四里、南北一里の尨大なる鉱区でありまして何でも含有炭量は少くとも九億噸は下るまいと云ふ話しである。採炭量も今日では一日二万噸で満鉄が採掘権を継承した当時の三百噸に比較すると七〇倍の増加であります。石炭二万噸とは一体どれ位の容量に成るだろう、物好き者の計算に依ると石炭積用三十噸貨車が七百両で其の長さが一里半位になる計算である、一日二万噸採炭しても今後百数十年間は裕に採炭が出来ます。斯の様な大富源でありますから我が満鉄も資本金総額の三分の一即ち一億数千万円の巨費を此の炭鉱に投じて居るのである。

随って六百年以前高麗人が採掘して、以来幾他の血で血を洗ふ様な激烈な争奪戦が行はれたと言う事も亦肯定されるのである。

撫順図書館で新聞を見ますと満洲守備の第十師団が長春を中心に全満洲を背景にして張作霖そっちのけで大演習を挙行して居るとの記事がありましたが非常に嬉しく思いました、此の一例で満洲に於ける日本の勢力が窺はれます、然し亦撫順で次の様な不快な事実をも目撃致しました、撫順鉄道は至る所電車が走って居りますが此等の電車が皆特等と並等の二両連結です、即ち特等とは内地人の使用するもの、並等は支那人の乗る車両となって居るのです、只単に支那人が汚い不潔であると云う簡単な理由でこんな差別的な事をするのは戒まねばなりません、然るに日支親善の第一線に立つべき在満邦人が案外斯る事項に無頓着なるは実に我々の了解に苦しむ所である。

露天掘は実に奇抜なものです。長さ八百米幅三百米深さ七〇米と云ふ実に人工の谷です。掘っても突いても崩しても限り無い石炭ですから愉快です。満洲の大平野も狭いように感じ出した我々ですけど此の露天掘りを一見するや思はず感歎の声

を放ったのです、蟻の様に見える沢山の坑夫あれが何でも八千位居るとの事です、夜は夜で採炭するのですが此の露天掘全部が電燈で埋まり非常な偉観を呈するのです、此処では一日七千噸即ち三万噸の三分の一が採炭されます。

露天掘の炭層が現在の市街地の地下を走って居るので此の市街地を他に移転の必要を生じたので今日盛んに移転工事をやっておりました。何しろ此の露天掘の石炭を全部掘り出した暁は実に世界第一の大穿盤工事になるとの事です、大山坑で不細工なエレベータで底知れぬ真暗闇の竪坑を降るのは何だか変な薄気味の悪い感じが致しました。一千二百三十六尺の地下だと云ふのですけれど御殿の様な立派な事務室や発電所にある様な大きなモーターが沢山あるのには驚きました。坑道が諸方へモグラの巣の様に走って居るのですが延べ哩百哩だと云ふ事です。

第二発電所の発電装置は他の火力発電所と違ひ石炭を一度乾溜してガスを得、此のガスを燃料として電力を得ると云ふ所謂モンド式の装置です。副産物として硫酸アンモニヤ・タール其の他ナフタリン・クレオソード・ピッチを頗る大仕掛に製造して居ります。

又此の撫順では我々が見学する数週間前から我が海軍の最も頭を痛ます重油の製造に着手しました。此の製造にはまだまだ研究の余地がありますが、今迄の所相当の成績を挙げて居るとの事誠に喜ばしき事です、重油は負岩を乾溜し搾って製するのですが、此の負岩は撫順には六億噸あると言はれて居ります、負岩からは平均十%の重油が取れるのですから六億噸の十分の一、六千万噸の重油が今後製造される訳です。此の重油製造が経済的にも引合ふ様になると採炭の方は止めて専ら重油製造に全力が注がれるでしようとの話しです。

撫順は炭鉱であると同時に此の大炭鉱を背景とした満洲第一の大工業地であります、将来は実に世界有数の大工業地と成る事でしよう、撫順炭鉱は独り我が日本にとって貴重なる倉庫であるばかりでなく実にアジアの誇りである。実に気強い感じが致します。

晩。先輩諸氏が支那料理の饗応をして我々の為に歓迎の宴を張って下さいました、支那料理は初めてなので一寸様子が分らず皆大人しい顔して居ましたが、段々慣れて遂にはもう支那料理通になって了ひました。先輩諸氏は交々胸襟を開いて過去の奮闘談や感想を述べられ我々も共に打ち寛いで将来の目的や覚悟を話し実に愉快な親しみの多い会合でありました。汽車の都合で尽きせぬ名残を打ち切り各位の万歳を連呼し奉天を経由して大連に向いました。先輩各位の厚意を謝して筆を擱く。

大　連

奉天を午後八時四十分発の列車で出発しました。大連まで約十時間半かかります。車中は殆ど夜でありますから一望千里の南満平野はもう見られなかったのは惜しい気がしました。

目の覚めた頃はぼつぼつ海が見えました。しばらくたって右方に日露戦争で激戦地として有名な南山が見られました。南山は低い禿山で其の頂に表忠塔が建っています。丁度亀の甲に蠟燭を立てたやうな形です。此の処から大連通いの学生が乗ります。支那の学生でも日本の学生のように見え一寸解りません。小学生ですら日本語で簡単な話しぐらいはします。又短かい文句を読んだ事に異様な感じがしました。

（「学友会報」第三四号）

なお、昭和一五年五月一一日の「北国毎日新聞」紙上に「鉄道輸送の混雑緩和のため文部省でも今後の修学旅行を禁止することとなった」とある。

兎　狩　り　毎年一二月下旬に恒例の兎狩りが行なわれ、生徒の楽しみの一つであった。

兎狩の記

雪は鵞毛に似て飛んで散乱し厳寒冬籠の気分に鎖され見渡す限り白雪を被り銀世界と化したる二月の三日を卜し我が競技部に於て恒例の全校職員生徒並に養成所生徒の兎狩を催した。

午前八時半の号鐘を合図に一同運動場に集合すれば浅野・横沢両先生の指揮のもとに整然たる行軍の隊形を整へ愈々午前九時校門を発し目的地安原の海浜に向ふ、右脚を上ぐれば左足滑り左脚を進めれば滑りて前進困難なり、時に我が校四百の健児意気揚々たり、下安原の海岸の松原に広く網を張られ網の守備隊は今か今かと待ち受けつつあり。

打木の浜に着きたる全員の勇気百倍、浅野先生の命令にて総攻撃始まり、鬨の声実に壮観何ぞ痛快なる哉、けれども可憐なる兎の影すら認めず時に一羽の大鷹飛立つあり。惜しき哉一頭の獲物なく一同引上げ暫時休憩の後西崎先生の訓話あり次で用意する昼食を摂る運びとなる。

一農家の庭前に大鍋の肉汁は沸騰し寒気と空腹を覚えた人達は自由に汲み味ひ舌鼓を打つ。松吹く風は更に強くあの大自然に奮闘したる凱旋の勇士を迎ふる如し、間もなく降り積る雪を蹴って自由に各自帰途についた。

（「会報」第三五号）



運動会アーチ

運動会

待ちに待たれし運動会は十月八日と定った。前日まで数日の準備に多少疲れ気味であったが当日は朝来の雨天、翌日は好晴であったがグランドは未だ不十分であった。

翌十日は絶好の運動会日和、万国旗の快げに翻へる蒼空に開会の合図の煙火は響き渡って茲に第廿八回陸上運動会は会長竹内校長の開会の辞についで開始されたのが午前八時三〇分だった。

昼食後の野仕合に山鹿流ならぬドドンドンドーン陣太鼓の響につれて練出された俄武士連やがて運動場を半円形に廻って左右に分れた、合図と共に一度にドット列を乱して荒れ狂う敵味方入り交りて戦うこと三十分勝利は紅軍に帰した。

野仕合も終る頃には見物人も次第に増し殆どグランドを全部取囲んで了った。次に目を喜ばしたのは全生徒一同の桃太郎であった。桃太郎に読いて兎と亀も亦拍手の裡に終った、これによって見物に倦みかけていた観衆を魅することが出来た。最後の各学年選手競争は実に激烈を極めた。かくして楽しき一日は終った。

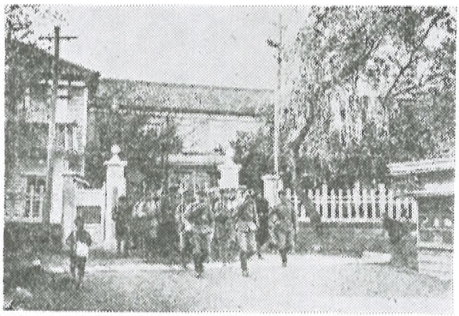
（「会報」第三五号）

県下学生連合演習

この連合演習が行なわれたのは大正一四年以降である。本校は大正一五年一〇月二九日から三〇日にかけて、二部二年、農林一部四年は、倉橋配属将校及び横浜教諭に引率されて機動演習に初参加し、同演習は昭和一八年までつづけられた。ここに、昭和二年に同演習に参加した松崎圭三君の想い出の記をつづろう。

物寂しき秋も深まれる十一月十日県知事統裁、学生連合演習に元気溌溂たる我校健児は好機を逸せず直ちに参加した。此日一天片雲だも認めず涼風肌によい日和であった。午前八時本校運動場に我々は時早くも武装して集合した。そして一中隊を編成し松任農学校生徒隊を名づけた。

漸く教官の厳然たる号令により劉喨たる喇叭と共に歩調高く雄々しく校門を出発した。我々の意気は正に天をも突かんと



演習参加（校門を出る）

してゐた。そして鳴りひゞく喇叭の音は我々の筋肉を極度に緊張せしめた。

九時半我々松任農学校生徒は野々市西南端に到り直ちに敵に対して戦闘準備が行はれた。そして我々松任生徒は南軍の最右翼にありて敵を攻撃すべく命ぜられた。そして敵に接近するにつけて益々銃声は烈しく静寂なりし加賀平野はもはや一大修羅場の如く化した。やがて突撃の号令により両軍の間には白兵戦が行はれ其後演習は中止され有松村落にて中昼をなし午後の演習に移った。午後は南北両軍犀川を挟んで一大接戦が行はれ本日の演習は終った。此日の我々の熱心なる活動は一通りでなかった。

演習終り各学校直ちに出羽町練兵場に集り閲兵式があり、其時の閲兵官は知事代理の警察部長であった。其後師団長演習の統監部七聯隊長松田大佐及び警察部長より講評あり此日の演習は終った。本日の松任農学校の演習振り及び閲兵式振りなどは実に松任農学校は優良なる成績であったと七聯隊長松田大佐より「松任農学校はうまい」と云ふ御言葉を承り我々は非常に喜び嬉しかった。本日の演習疾労もあったが意気盛んなる我々は本校まで行軍で三里の道を帰った。

四　農業報国

軍事教練

寺内内閣によって大正六年に設置された臨時教育会議は、内閣直属の諮問機関であった。この会議の国民教育に対する基本方針は、寺内首相が訓示で示した「護国ノ精神ニ富メル忠良ナル臣民ヲ育成スルコト」そのものであった。会議はこの基本方針に基づいて、学校教育・社会教育の全般について、国家主義的改革を数次にわたって答申した。「忠良ナル臣民」とは、国体観念に徹し、軍事能力に富む人間であるとされ、このような国民の育成のため大正一四年四月一三日「陸軍現役将校配属令」が公布され、全国の

中等学校以上で、現役将校による学校教練が実施されることになった。本校にはこの年の七月、歩兵第七連隊付倉橋尚歩兵少佐が配属された。そしてその成果を検閲すべく翌一五年二月吉富第七連隊長による教練査閲が実施され、以後太平洋戦争終結の前年昭和一九年まで、毎年恒例の、しかも最も重要な学校行事の一つとして続けられたのである。大正一五年六月、校庭の一隅に狭窄射撃場が完成し、射撃訓練が開始され、以後誕生した射撃部は、昭和二年九月九師団管下学生射撃大会に参加したのを始め、各年の射撃大会に参加し、優秀な成績を収めた。また大正一四年一一月、県下中等学校野外演習が実施され、毎年秋、上級生が参加して県下中等学校連合演習が行なわれるようになった。日華事変の始まった昭和一二年には、文部省訓令第二六号により、教練教授要目を改正し内容を強化している。「各個・部隊教練・射撃・敬礼・閲兵・分列・指揮法・陣中勤務・距離測量・測図・軍事講話・その他」の教材について、到達の程度を規定し、小隊以下の教練の概略を会得せしめるよう示している。

昭和一八年には、中学校規定・実業学校規定が改正せられ、「体操科」を「体練科」とし、「体練科ハ身体ヲ鍛練シ精神ヲ練磨シテ剛健不撓ノ心身ヲ育成シ国防能力ノ向上ニ力メ献身奉公ノ実践力ヲ増進スルヲ以テ要旨トス　体練科ハ之ヲ分チテ教練、体操及武道ノ科目トス」とある。本校では既に、体操の教授内容を、体操、武道、教練とし、各学年について週四時間を当てている。

昭和九年九月には登下校の際巻ゲートル着用と定められ、教師、上級生に対する敬礼、職員室出入りの呼唱、授業の出欠報告、号令等、次第に軍隊調が浸透して行ったのである。

特別大演習

大正一三年一一月三日から五日にかけて第九師団を中心にした特別大演習が石川県で行なわれた。この時、摂政宮が来沢されて大演習を統裁されたあと、八日午後、第二中学校校庭で県

下学生奉迎式に臨まれた。この時は単なる奉迎ということであったが、次の昭和八年一〇月二四日から二六日までの間、福井県下で行なわれた特別大演習には、軍事教練もほぼ一〇年を経ており、学生演習も現役兵の演習と共に行なわれ、本校からは陸軍輜重兵大尉牧野文一配属将校の引率のもとに佐藤政太以下一三名が参加し、帯剣・執銃・背のう・脚絆を巻き天皇陛下の前で分列行進をした。なおこの時は、本校で加工した缶詰製品が展示され天覧のえいに浴している。

練成教育

昭和一四年五月二二日、陸軍現役将校配属令十五周年に際し、全国の学生・生徒代表三五、〇〇〇人は、宮城前広場において天皇陛下の御親閲をうけた。本校からも校長五坪茂雄、教頭天田音三郎、教練科渡部貞良陸軍准尉、生徒代表土井康夫以下九名が選ばれて参加している。この日「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が発布された。

国本ニ培ヒ国力ヲ養ヒ以テ国家隆昌ノ気運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其任実ニ繋リテ汝等青少年学徒ノ双肩ニ在リ汝等其レ気節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史実ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ格守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質実剛健ノ気風ヲ振励シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

これに続いて石川県は、教育刷新強調事項として、次の誓詞を制定した。

我等ハ謹ミテ、聖旨ヲ奉体シ、光栄アル負荷ノ大任ニ鑒ミ、皇運扶翼ノ大義ニ徹シ、益々心身ヲ錬磨シテ学徒タルノ本分ヲ尽シ、誓ッテ、聖慮ニ答ヘ奉ランコトヲ期ス

これによって生徒に常時携行を強制された「生徒心得」には、まず天壌無窮の神勅にはじまり、教育に関する勅語（明治二三年一〇月三〇日）・戊申詔書（明治四一年一〇月一三日）・国民精神作興ニ関スル詔書（大正一二年一一月一〇日）と、この青少年学徒ニ下シ賜ハリタル勅語と石川県の誓詞がもれなくのせられることになっ

た。また、この日を記念して、毎月二二日を勅語奉読式の日と定め、国旗を掲揚してこれらの勅語を奉読し、日本臣民たるの自覚と尽忠奉国の決意を新たにすることとなった。

国民精神総動員

昭和一二年七月七日の芦溝橋事件が契機となって、日華事変が勃発し、政府の不拡大方針にかかわらず、戦線は急速に拡大していった。この事変を契機にこの年の八月「国民精神総動員運動」推進が閣議決定された。そしてこの総動員運動推進の中核として「国民精神総動員運動推進連盟」が中央に結成され、地方では府県知事を中心とする地方実行委員会が組織された。これらの組織を通じて「国体の本義」の宣布、「愛国行進曲」の普及、国民貯蓄運動の展開、出征軍人家族の援護、耐乏生活等が強調され、「国家目的を個人目的とし」（近衛首相演説）国民はあげて戦争に協力するよう政府から要望されるにいたったのである。政府の戦争遂行の方針に基づき、教育界も方向転換をし、国策にそわざるを得なかった。

勤労報国隊の結成

昭和一三年三月には「国家総動員法」が成立し、引き続いて六月文部省から次官通ちょうをもって「集団的勤労作業運動実施ニ関スル件」が指令されたのである。それは、「実践的精神教育ノ一方法トシテ」大きな意義をもつものであることが強くいわれた。県では同年七月一七日、五坪茂雄校長をはじめとする中等学校長、生徒代表が野村練兵場に集まり、「中等学校勤労報国隊」を結成し、隊旗と綱領を受けとった。

綱領

一　我等ハ皇国民タルノ光栄ニ感激シテ誓ッテ尽忠報国ノ誠ヲ輸サントス
一　我等ハ常ニ心身ヲ鍛錬シテ肇国ノ理想実現ノ先駆タラントス
一　我等ハ協力一致資源ヲ開発シテ国力ノ増進ヲ期セントス

一方、本校の教育方針の「体位向上身体鍛練に関する事項」では、養護、鍛練教授実習は一元的に取扱い其成果の発揚に努むとしている。

1　国防競技訓練　教練と連絡して各種国防競技訓練を実施す。
2　養護訓練　朝礼の際に行う養護体操、行進、駈歩、乾布磨擦
3　錬成訓練
イ　放課後一定時間に行う。駈歩、武道、相撲、乗馬、球技特に武道、相撲、乗馬に就ては全国制覇を期す
ロ　定期的に行う錬成訓練　毎月強行軍を行ない行軍力を養う
ハ　集団勤労作業　身心の鍛錬・団体訓練・不屈不暁の精神を涵養せん為、集団勤労作業の体制を確立実施す。

そうして、日曜日、祭日、夏休暇を利用して盛んに勤労奉仕が行なわれた。

本校でも、この時期における勤労作業は、主として木炭の増産、稲や飼料用干草刈り等で、これは戦争による農村の労力不足を補充しようとするものであった。作業日数も夏休みなどの六日間を割り当てるものであったが一六年二月「青少年学徒食糧飼料等、増産運動要項」により、「一年ヲ通ジ三十日以内ノ日数ハ授業ヲ廃シ…」て作業に当てることができるとなった。

一六年四月入学の林科生を例にして、本校の動向をみると、九月には出征兵士の家へ稲刈りの手伝いに出かけており、一七年五月には勅使村松山部落の山林を開墾している。これは肉牛生産事業のためである。九月には能美郡山上村和佐谷より雑木材を伐採して学校に運び、苗圃地で木炭を製造している。

一七年一月九日、国民勤労報国会施行規則に基く学徒出動命令が出された。これによって「興亜学生勤労報国隊満州建設勤労奉仕隊」が編成された。その綱領は、

我等興亜学生勤労報国隊ハ聖旨ヲ奉戴シ身ヲ挺シテ興亜ノ大業ヲ翼賛シ以テ大御心ニ副ヒ奉ラムコトヲ期ス

であった。本校では四月に、各学級五名計二十名が選ばれ、農業学校隊第一中隊第四小隊に組まれ、宮本清松教

論が小隊長を務められて満洲に渡った。

第二分隊員　松井右一、北川勝美、江田師朗、浦　英夫、長井　蔵、太田秀雄、五坪　衛、的場昭一、松田理門、樋口俊夫

第三分隊員　池端　弘、吉本茂夫、蒔田達雄、渡辺良房、三田喜久男、江端精一、橋浦精一、吉村和夫、太田忠雄、西出　明



興亜学生勤労報国隊

現地での生活は、学科の日と勤労の日にわけられ、いずれも起床ラッパ・日本体操（又は興亜体操）で一日がはじまった。実習は満拓公社の特設農場で行なわれ、園芸班・畜産班・機械班にわかれた。園芸班は、ほとんどが馬鈴薯の植付と除草、植樹であった。機械班は、トラクター・コンバイン・ドリル・デスクハローを使った大農式のものであった。すべてが軍隊式で、たとえば農場に出かけることを「出陣」といって隊を組んで行進し、装備した隊員によって立哨も行なわれた。このようにして帰国したのは九月であった。

このようにして当時、各中学校や各種団体による軍需工場への参加（兵器生産）や農家支援が行なわれた。国をあげての「国民総動員」である。中学生や女学生も稲刈り部隊に参加した。もちろん、本校が例外であるはずがなくその総動員の最先頭に立ったのである。

本校では、昭和一六年にいたって物資が不足し、特に食糧飼料等の増産が急がれ、「青少年学徒食糧飼料等増

産運動実施要項」が出され、昭和一七年から昭和一九年まで、援農実習が特にさかんだった。また、満洲にも興亜学生勤労報国団として二回程度、五年生が実習に参加したこともある。北海道にも二学級ずつ交替で、お寺、農家などで合宿実習を行なっており、その他、県下の農家からも援農の申し込みが続々とあり、戦争の激化とともに教科学習の時間も次第に少なくなった。

学校報国隊と学徒隊の結成

昭和一八年六月二五日に「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議で決定し、学徒に対する積極的な動員態勢が整えられた。翌年一月一八日の閣議で「緊急国民勤労動員方策要綱」の一環として「緊急学徒勤労動員方策要綱」、また二月二五日に「決戦非常措置要綱」の決定をみ、それに基づき三月七日「学徒動員実施要綱」が発表され、中等学校程度以上の学生・生徒に対する全面的な動員要領が明示された。

昭和一九年八月二三日には、勅令第五一八号をもって「学徒勤労令」を発布し、すでに行なわれている学徒動員の法的措置がなされた。

第二条　学徒勤労ハ教職員及学徒ヲ以テスル隊組織（以下学校報国隊ト称ス）ニ依ルモノトス（…下略）

第三条　学徒勤労ニ当リテハ勤労即教育タラシムル様力ムルモノトス

次いで、学校長を隊長とした（第一三条）「学校報告隊組織」が確立された。さらに昭和二〇年三月一八日閣議で、「決戦教育措置要項」が決定した。

第二　措　置（中略）

三　学徒ノ動員ハ教職員及学徒ヲ打ッテ一丸トスル学徒隊ノ組織ヲ以テ之ニ当リ其ノ編成ニ付テハ所要ノ措置ヲ講ズ（下略）

四　動員中ノ学徒ニ対シテハ農村ニ在ルカ工場事業場等ニ就業スルカニ応ジ労作ト緊密ニ連繋シテ学徒ノ勉学修養ヲ適切

ニ指導スルモノトス

ついに授業は全面的に停止され、全学徒はすべて戦争遂行上の緊要業務に総動員されることになったのである。そうして五月二二日勅令第三二〇号「戦時教育令」が公布されて、その法的措置がとられた。

第三条　食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究等戦時ニ緊切ナル要務ニ挺身セシムルト共ニ戦時ニ緊要ナル教育訓練ヲ行フ為学校毎ニ教職員及学徒ヲ以テ学徒隊ヲ組織シ地域毎ニ学徒隊ヲ以テ其ノ連合体ヲ組織スルモノトシ（下略）

このようにして、学徒動員と教育の一本化がはかられ、いわゆる教育の決戦体制が確立した。

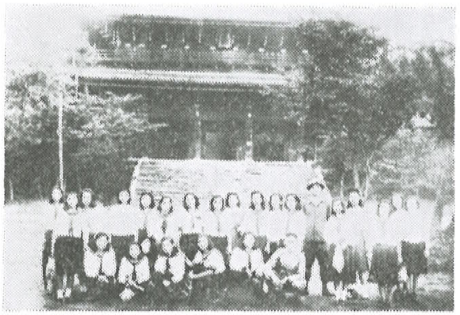
このような日本の歴史は、当時の国家主義・全体主義の風潮から考えて、当然本校にも「学校報国隊」あるいは「学徒隊」が存在したと考えられるが、資料がないためその実態は未だ詳かにできない。ここに金沢第二中学校を例にとってみると、昭和一六年四月に報国団が組織され、総務部・鍛練部・勤労奉仕部・国防訓練部・文化部・生活訓練部の六部三一班にわかれ、正課に準じて扱われて評定がつけられている。更に学校運営もこの組織の下で行なわれ、九月には報国隊規則が施行されている。また、昭和一九年八月五日には、県下の一〇中学七五〇名の「学徒隊」は、「愛知派遣石川学徒隊」と称され、三中隊にわかれて、豊田自動織機・豊田製鋼・豊田航空機へ配属されたという。

女子農業教育

わが国では、明治五年九月開拓使仮学校が東京に設けられたとき女子部が設置されている。しかし、学校が札幌に移ってからは衰えて九年五月には廃止された。その後、明治年間に創設されたものはわずかに一三校であった。大正時代に入ると、各分野に女子の進出が目立ち、一〇年までに一六校が農学校に女子部を併置した。大正一〇年一月農業学校規程が改正され、第八条、第九条で女子に関する規程が設けられてから、この教育の発達を助長した。特に満州事変以後移植民教育が盛んになると、その花嫁教育も

行なわれ、大平洋戦争に突入するようになると、戦時食料自給体制確立の重要性から、農村労働力を補給する意味において女子の農業教育が盛んになってきた。そこで昭和一八年三月に、女子農業学校に関する規定ができ、昭和一九年度、二〇年度の二か年に一〇〇校近くが設立され、終戦当時は総数二三九校であった。

このような流れの中で、本校でも農村労働力の補給と女子農業指導者の養成機関として修業年限二か年の女子農業科が、昭和二〇年四月に設置された。江沼郡から河北郡にいたる高等小学校卒業者の中から、口頭試問と筆記試験を通って、入学を許可された第一期生は五七名であった。学科目は、修身・公民科・国語・数学・理科・家事及裁縫・体操並びに農業に関する学科目耕種・園芸・畜産・農産製造及び実習と決められていた。しかし、四月には連合国が沖縄に上陸し、いよいよ本土決戦の様相を呈し、五月二二日「戦時教育令」が公布されてから、食料増産のための実習や訓練に従って、ほとんど正規の授業はなされなかった。制服は、ヘチマ襟で、旧養蚕室の二階が教室にあてられ、一階の和室では裁縫とお茶が学習された。二一年度には第二期生が入学し、二〇年一一月二八日に公布された「終戦ニ伴フ中等学校措置ニ関スル件」の四項によって、「学力補充」が測られ、男子科生徒と共にようやく学校らしい体裁を整えはじめた。すなわち、運動会・学芸会が行なわれ、修学旅行で永平寺に一泊しており、卓球部・排球部などの課外活動にも参加した。一期生は、当初の修業年限が二か年であったため、この年で修了したものが多く、彼女達は新制中学校卒業と同じ資格とされ、三年生に進級したものは、旧制女学校卒業、四年生にまで進んだ場合は新制高等学



女子農業科修学旅行

校卒業として扱われたが、これは三名であった。

五　生徒の修学実態

学級及び生徒数　次の表は、昭和一六年五月現在の学級及び生徒数であり、全県はもちろん、全国から本校に慕ってきていることがわかる。

学級数生徒数

	学級		生徒												
			現在												
	定数	現数	定員	江沼	能美	石川	金沢	河北	羽咋	鹿島	鳳至	珠洲	他府県	其他	計
農 第一種 一年	一	一	五〇	二	六	二九	七	七	一	一	一	一	一		五五
農 第一種 二年	一	一	同	一	一	三九	七	一	一	一	一	一	一		五二
農 第一種 三年	一	一	同	一	七	二五	八	五	一	一	二	一	三		五一
農 第一種 四年	一	一	同	二	七	一六	八	一	一	二	二	二	七		四八
農 第一種 五年	一	一	同	一	四	二三	三	七	一	一	一	一	一		三二
科 第二種 一年	一	一	同	五	六	一九	二	四	一	一	一	二	二		五六
科 第二種 二年	一	一	同	四	一	三一	四	一	一	一	二	一	一		五四
科 第二種 三年	一	一	同	一	一五	二七	一	一	二	一	一	一	二		五二
林 二年	一	一	同	五	一	二八	四	一	一	一	二	一	一		五三
農 一年	一	一	同	三	一一	二四	四	一	二	一	一	一	一		五六
科 三年	一	一	同	四	七	二九	一	一	二	三	四	四	一		五二

	獣畜医科	産業	一年	二年	計
一			一		一三
一			一		一三
四〇			同		
一			一		二九
一二			一	九	九八
一九			七	二	三四六
七			二		五七
三			四		二六
一			一	二	一二
一			一	三	一三
二			一	三	三二
一			一	八	一八
一			一	八	
四五			四四		六五〇

入学状況

昭和一二年一月二九日、県発令の第二〇三八号の文書をみると中等学校入学者選抜方法改正に関することが記載されていて、当時の選抜方法をうかがうことができる。

石川県訓令甲第二七号ヲ以テ標記ノ件ニ付、訓令相成候処、右ハ中等学校ニ於ケル入学者選抜方法ノ適正ヲ図リ、入学考査ニ因ル児童ノ負担ヲ軽減シ、入学準備ニ伴フ諸種ノ弊害ヲ一掃スルト共ニ、特ニ児童生徒ノ健康ヲ重視シ、学校教育本来ノ目的ヲ達成セントスルモノニ有之候ニ就テハ、左記ノ改正要項ニ示ス所ニ従ヒ、趣旨貫徹ニ万遺憾ナキヲ期セラレ度依命通牒候也

改正要項

一　人物考査

素質性行等ノ考査ハ口答試験ニ依リ、数科目ヲ併ヒ行ハントスル場合ハ、国語（読ミ方ノミ）及算術ノ二科目ニ付口答若ハ筆記試問ニ依ルベシ、但シ師範学校及実業学校ニ於テハ当該学校ノ性質ニ依リ、適宜他ノ教科目ヲ増加スルコトヲ得、教科目ニ関スル考査ヲ行フ場合ハ出願ニ付左ノ諸項ニ留意スベシ

㈠　平易ナルコト

㈡　教科書ニヨリ提出スルコト

㈢　入学受験ニ関スル参考書等ニ依ル準備ヲ要セザルモノナルコト

㈣　入学考査問題検閲委員会ノ結果ニ付通知セル事項ハ充分厳守スベキコト

二　身体検査

身体検査ハ体格性質及体力ニ付之ヲ行フベシ……

三　選抜ノ決定
身体検査一〇〇点、素質性行ニ関スル口答試問並ニ出身学校長ノ調査書ニ基キ尚教科目ニ関スル試問ヲ行ヒ、評点ヲ付スル場合ハ、百点満点トシテ之ヲ決定スベシ……

さらに、昭和一五年度からは学科試験は廃止され、内申書、人物考査及身体検査の総合審査による入学者選抜方法がとられた。昭和一四年（一九三九）一一月二九日付県学務部長よりの通達によれば、中等学校入学者選抜要項は次のとおりである。

一　選抜方法
中等学校ニ於ケル入学者ノ選抜ハ小学校長ノ報告、中等学校ニ於ケル人物考査及身体検査ノ三者総合判定ニ依リ之ヲ行フ

二　小学校長ノ報告
小学校長ハ学籍簿児童観察録等ニ基キ志願児童ノ学業成績、身体状況、性行等人物全体ヲ察知シ得ベキ個人調査書並ニ学業成績ニ関スル学級一覧表ヲ作成シ中等学校長ニ報告スルモノトス

三　人物考査
人物考査ハ口問口答ニヨッテ行ヒ児童ノ日常生活ニ於テ経験スル普遍的事項ニ付キ徳性ニ基ク判断（推理ノ適否情操ノ深度等）ヲ考査ス
口頭試問及身体検査中ニ現ハルル児童ノシツケ及性行ヲ観察シテ人物判定ノ参考トスルコト

四　身体検査
疾病及異常発育及栄養運動能力ニツキ施行シ特ニ疾病及異常ノ検査ニ重キヲ置ク

五　運用ニ関スル事項
1　小学校長ノ報告書ノ作成並ニ中等学校ニ於ケル報告書ノ審査ニ付テハ各学校長ヲ主班トシ教職員ヲ以テ組織スル委員会ヲ設ケ報告書ノ作成並ニ審査ノ適正ヲ期スルコト

2　中等学校ニ於ケル報告書ノ審査ニ当ツテハ各志願児童ニ付厳密ニ之ヲ行ヒ一律ニ小学校間ノ等差ヲ附スルガ如キ事ヲ避クルコト

3　人物考査ニ於ケル試問事項及其ノ方法ニ就テハ予メ周到ナル考究ヲナシ之ガ為準備教育ヲ誘発スルガ如キコト無キ様留意スルコト

4　小学校長ノ報告、中等学校ニ於ケル人物考査並ニ身体検査ノ総合考査ニヨリ其ノ優劣ヲ判定シ難キ者ニ付キテハ抽籤ニ依リ入学者ヲ決定ス

5　小学校長ヨリノ報告書ハ児童保護者其ノ他第三者ニ対シテ之ヲ発表又ハ内示スルコトヲ得ズ

入学資格及修業年限

	入学資格	修業年限	授業料	入学手数料
農科第一種	尋常小学校ヲ卒業シタル者年令十二年以上ニシテ学力検定ニ合格シタルモノ	五ヶ年	月　参円	弐円
農科第二種及農林科獣医畜産科	修業年限二年ノ高等小学校ヲ卒業シタルモノ 修業年限三年ノ高等小学校第二学年課程ヲ修了シタルモノ 中等学校第二学年ノ課程ヲ修了シタルモノ 尋常小学校卒業程度ヲ以テ入学資格トスル農業学校第二学年ノ課程ヲ修了シタル者年令十四年以上ニシテ学力検定ニ合格シタルモノ	三ヶ年		

次に、本校への志願者・合格者の一断面を見てみよう。

本校への志願者、合格者表

	志願者	合格者	(受験倍数) 合格率
大正14	190	124	(1.53) 65.26
昭和1	190	128	(1.48) 67.37
昭　2	162	101	(1.60) 62.35
昭　3	186	139	(1.34) 74.73
昭　4	159	133	(1.20) 13.65
昭　5	130	112	(1.16) 86.15
昭　10	144	130	(1.11) 90.28
昭　14	320	164	(1.95) 51.25

（「石川県統計書」）

昭和一六年四月、入学者状況は次表の通りである。

本年度入学状況

	農一種科 志願者	農一種科 入学者	農二林科 志願者	農二林科 入学者	獣医科 志願者	獣医科 入学者
江沼	二五	一九				
能美	一五	一〇				
石川	七八	三〇	一三二	七〇		
金沢	二五	一七	二二	一三		
河北	六六	六八				
羽咋	一二	一四				
鹿島	一二	一二				
鳳至	一一	一五	一七			
珠洲	一			六六		
他府県	一二			二六		
合計	一三七	四五	二六六	一五五		

（「石川県松任農学校一覧」）

昭和18年県下中学校入学志願者数抄

（　）定員

松任農 528 (240)	金　城 347 (150)
松任高女 164 (100)	市実女 234 (100)
金沢一中 348 (200)	第一女 359 (200)
金沢二中 356 (200)	第二女 238 (150)
金沢三中 369 (200)	市　工 343 (150)
金　商 231 (150)	飯田中 168 (100)
県　工 352 (150)	輪島中 220 (100)
藤　花 136 (100)	津幡農 240 (100)
小松中 264 (150)	羽咋中 320 (150)
小松工 356 (120)	七尾商 184 (100)
七尾中 261 (150)	七尾農 155 (50)

(18.3.1)

試験と成績評価

当時における試験は、中間と期末があった。その二回の試験によって学期の成績がつけられていた。今日のような○×式の問題は少なく、白紙が配られ、黒板に「○○についてのべよ」と一行の出題もあった。通知簿は終業式後四、五日のうちに郵送する方法がとられた。操行及学科成績査定細則によると次のように決められていた。

第一条　学業成績ハ一〇〇点ヲ以テ定点トシ、父兄ニ通知スル場合ニハ甲・乙・丙・丁ノ評語ヲ用フ

甲（一〇〇～八〇）乙（七九～六〇）丙（五九～四〇）丁（三九～〇）操行ハ甲・乙・丙ノ評語ヲ以テ現ハス

各教科は丙以上を合格としていたが、昭和一八年七月二二日県では各中学校に通牒し成績の点数制を廃止して優・良・可・不可で表わし席順の撤廃をした。

秀（一〇〇～九五）・優（九四～八〇）・良（七九～六〇）・可（五九～四〇）・不可（三九～〇）

学費概算

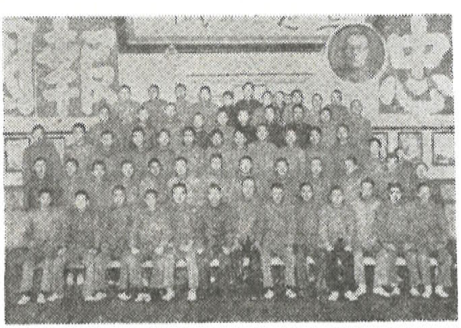
学費概算

費目	金額	費目	金額	費目	金額
一ケ月経常費（八月ヲ除ク）		教科書	一五・五〇円	作業服	一七・八〇円
授業料	三・〇〇円	臨時費		同帽子	一・五〇
報国団費	〇・五〇	夏制服	九五・〇〇	鍬	四・五〇
旅行積立金	一・五〇	冬制服	一二五・〇〇	柔道着	七・〇〇
学用品小遣	二・五〇	制帽	一二三・〇〇	剣道面甲	一七・八五
計	七・五〇	靴（ゲートル）	一二四・〇〇	手着	二・三〇
		地下足袋	一二五・〇〇	剣道竹刀	一・六〇

通学班別校外指導

本校は従来全国的な入学者が多く、そのほとんどが寮生活をしていたが、大正・昭和と時代を経て教育が普及するにしたがって通学生が年を追って増加し、その通学生の生活指導の立場から、通学経路別に班組織をもっていた。この組織の初めは大正の頃であるが、昭和になると、さらに増加したのである。その例としては、次のような班別の組織がもたれた。松窓会(松金電車で通学するもの)石友会(山島、林中、川北方面より通学するもの……、石同町で会うの意味)松西会(出城、御手洗、美川方面から通学するもの)江能会(江沼、能美郡から通学するもの)等があり、各班は、その方面から通学する最上級生や教師が、その指導にあたった。毎年一、二回、その生徒同志の懇親会が先生を囲んで行なわれ、松任市の田中屋などで教師と生徒、生徒同志間の親交と意志の疎通が行なわれ、学校教育の目的にそってよい効果をあげていた。昭和一五年四月現在の通学別状況は次の通り。

／	江沼	能美	石川	金沢	河北	羽咋	鹿島	鳳至	珠洲	他府県	合計
通学生	二三	八八	三四五	五六	二二	一	一	一	一	一	五二九
寄宿生	六	一〇	一	一	五	一二	一七	五三	一八	一八	一二二
計	二九	九八	三四六	五七	二六	一二	一七	三三	一八	一八	六五〇



松西会会合記念

卒業生の進路　明治一一年から昭和一六年までの卒業生数は次表の通りである。

卒業生数

年次	卒業数	生	年次	卒業数	生	年次	卒業数	生	年次	卒業数	生
明治一一年	農一八		明治二四年	七		明治三七年	一一五		大正六年	三一〇	
〃一二年	一七		〃二五年	二		〃三八年	四一		〃七年	四一	
〃一三年	五		〃二六年	農一二 獣三		〃三九年	二八 一九		〃八年	三九	
〃一四年	一二		〃二七年	四五		〃四〇年	三九 一〇		〃九年	五一	
〃一五年	—		〃二八年	一二 二		〃四一年	三四 二七		〃一〇年	三三	
〃一六年	二		〃二九年	五七		〃四二年	三六 二九		〃一一年	五六	
〃一七年	一四		〃三〇年	五八		〃四三年	三〇 一八		〃一二年	五九	
〃一八年	一〇		〃三一年	一二 九		〃四四年	二六 一九		〃一三年	八〇	
〃一九年	一一		〃三二年	一一 四四		〃四五年	三二 一三		〃一四年	九八	
〃二〇年	三〇		〃三三年	一一 二九		大正二年	三三 二三		〃一五年	五五	
〃二一年	二九		〃三四年	一一		〃三年	二二 二二		昭和二年	四七	
〃二二年	一八		〃三五年	三一 一四		〃四年	二七 —		〃三年	六五 一九	林
〃二三年	二		〃三六年	二二 一五		〃五年	三七 —		〃四年	七七 五五	

合計　三、一九〇名

また、郡市別にすると、次の表の通りになる。

郡市別数	農林科合計	職業別数	官公吏	軍人	教員	農	商	工	上級学校	医	その他	死亡	不詳	合計
江沼	五	十六年五月調	七一八	一二〇	二〇五	八三三	一三一	四一	一二四	六一	二三二	五五六	一七〇	三、一九〇
能美	一四													
石川	三八													
金沢	六													
河北	四													
羽咋	五													
鹿島	二													
鳳至	九													
珠洲	二													
他府県	二													
その他	一													
合計	一八													
	五〇													
	一三七													

次に、本校から上級学校進学者は、昭和一四年度以降急激に増加している。青年師範学校・師範学校・東京獣医学校・早稲田大学を軸に、有名校へ肩を並べて入学するようになり、また昭和一五年以降は陸海軍関係諸学校への進学者が目立つ。もちろん、この背景には戦局の進展に伴う技術者の育成、軍幹部の養成という時代的要請もあったが、それにしても著しい進路成績の伸張であった。主な上級学校は、盛岡高等農林・三重高等農林・宮崎高等農林・岐阜高等農林・鳥取高等農林・東京高等農林・日本高等獣医・新京獣医大・拓殖大・中央大・東洋大・日本大・千葉園芸学校・金沢工業学校・東京体育体操学校・満州国導学校・東京物理学校・明治大・国学院大・大東文化学院・法政大・名古屋専門学校等であった。

一方、就職は県内はもちろん県外就職者も多く、さらに満州・支那・朝鮮など国外より多数の求人申し込みがあ

り、さらに先輩の大陸での活躍が当時の在校生には大きな刺激となり、広野の大陸への夢を抱かせたのである。特に昭和一九年、二〇年八月までは授業が全面的に停止され全校生徒は勤労作業に終始し生産を守るつとめを全うしたのである。

第二節　松農健児の活躍

一　学友会の活動

学友会の基調

学友会活動は、青年期人格形成にとって不可欠な教育活動であり、それは生徒の自主性を尊重しながら展開された。思うに生徒は常に時代の児であり、そのかぎりで六星の松農健児は大正末期から、昭和初期にかけての大正デモクラシー期の社会的風潮を敏感に反映し、自由な生徒気質がつちかわれつつあった。そして、校是として、〝国家有用〟の人材養成のための精神的支柱として〝忠孝至誠〟〝勤勉励行〟〝農業報国〟の校風をめざして学友会活動があった。

学友会の編成と予算

昭和一二年七月、日華事変が起り、国内には日毎に戦時体制の色彩を濃厚にしていったが、学友会各部はこれまでどおり活発な活動を行なっていた。昭和一二年の学友会各部には運動部として、剣道部・柔道部・相撲部・庭球部・水泳部・競技部・射撃部の七部が、文化部としては、図書部・雑誌部・音楽部・弁論部の四部が、他に庶務会計部があり別に応援部があった。その後、昭和

り、さらに先輩の大陸での活躍が当時の在校生には大きな刺激となり、広野の大陸への夢を抱かせたのである。特に昭和一九年、二〇年八月までは授業が全面的に停止され全校生徒は勤労作業に終始し生産を守るつとめを全うしたのである。

第二節　松農健児の活躍

一　学友会の活動

学友会の基調

学友会活動は、青年期人格形成にとって不可欠な教育活動であり、それは生徒の自主性を尊重しながら展開された。思うに生徒は常に時代の児であり、そのかぎりで六星の松農健児は大正末期から、昭和初期にかけての大正デモクラシー期の社会的風潮を敏感に反映し、自由な生徒気質がつちかわれつつあった。そして、校是として、〝国家有用〟の人材養成のための精神的支柱として〝忠孝至誠〟〝勤勉励行〟〝農業報国〟の校風をめざして学友会活動があった。

学友会の編成と予算

昭和一二年七月、日華事変が起り、国内には日毎に戦時体制の色彩を濃厚にしていったが、学友会各部はこれまでどおり活発な活動を行なっていた。昭和一二年の学友会各部には運動部として、剣道部・柔道部・相撲部・庭球部・水泳部・競技部・射撃部の七部が、文化部としては、図書部・雑誌部・音楽部・弁論部の四部が、他に庶務会計部があり別に応援部があった。その後、昭和

一六年四月、報国団結成をみた。

名　称　石川県立松任農学校報国団
目　的　本団ハ団員相互ノ交誼ヲ図リ徳性ヲ涵養シ学芸ヲ攻究シ身体ヲ錬磨シ以テ校風ヲ発揮センコトヲ期ス
事　業　剣道部・柔道部・相撲部・陸上競技部・水泳部・庭球部・弁論部・図書部・雑誌部・庶務会計部
団　員　通常会員（本校生徒）、特別団員（本校職員）

（「石川県立松任農学校一覧」）

ところで、松農時代における学友会の予算はどのくらいであったろうか、昭和三、四年の一断面をのぞいてみたい。

昭和三年	
収入の部	三六四三円九
内訳	
前年度繰越金	四三二円一七
入会金	一三六円
通常会員会費	二八五五円五〇
（延　五七一一人、月平均　四七六人）	
養成所生徒会費	一五円
特別会員会費	一六八円四六
雑収入	三五円九六
校内拾得金	四円一四
寄付金	二〇円
利子	一一円八二
支出の部	三四六九円五一

剣道部	四一四円六〇
柔道部	二七〇円三二
相撲部	三五一円九四
陸上競技部	一九〇円七一
水泳部	一七四円七
庭球部	二〇七円一七
弁論部	一五七円一
音楽部	一八七円三〇
雑誌部	二九四円九六
図書部	一一九三円四三
庶務部	二四三円二三
内運動会	二〇八円一八
御大典奉祝	九四円六三
射撃	九七円六
収穫祝	

応援	九三円一三
父兄会	九〇円
試験用紙	六六円
兎狩	六五円九六
生徒手帳送費	三一円五八
招魂祭	二三円一八
神饌田	二〇円
教育映画	一七円四〇
香奠	一一円一八
寄付金・孝子建設	一〇円
雑費	四円六五
神饌料（春秋祭礼）	二円
畳代	一一〇円二五
相撲場移転	五五円
植林補助	五〇円
差引残金	二〇三円五八

（「学友会」第三七号）

昭和四年

収入ノ部　三一二〇円三七

内訳

前年度繰越金	一二八円五八
入会金	一三四円
通常会員費	二六五二円五〇
特別会員会費	一六九円八八
雑収入	三五円四一
養成所生徒寄付	一〇円
其他ノ寄付	一七円五〇
預金利子	七円九一

支出ノ部　二八八三円六三

内訳

弁論部	一一八円五九
剣道部	二九七円四七
柔道部	三四二円八八
庭球部	二二五円一九
相撲部	三一七円九二
陸上競技部	一二七円六四
水泳部	二二〇円九
図書部	二四九円三〇
雑誌部	二四四円五
庶務部	六三一円五〇
運動会	一三三円三一
射撃	八三円一
応援	八六円四七
田植収穫祝	六三円
香奠	一三円五二

生徒手帳送費	二九円六四
試験用紙	九円六〇
寄付金	五円四
メタル代	一〇七円九〇
植林費補助	五〇円
山田晴之君へ見舞	三〇円
活動写真講話	一三円八六
其他	六円一五

温室建設費ノ内へ支出　一九九円
建設費総額四五〇円ノ内卒業生寄付二六二円本会より
支出一八八円ノ筈なりしも寄付未収一一円ありしにより
本会支出一九九円となりたるものなり
差引残金　二三六円七四

（「学友会誌」第三八号）

各部活動の概況

各部活動は、本来、教科の一環としてなされ、教師の指導下にあるとはいえ、最大限に運営が生徒の自主性にまかされていた。各部活動の中にあって、剣道部は、支柱的存在であった。全校的な規模、活発な対外活動からみて、いわば、〝校技〟の位置にあった。これに対して、生徒の自発生の強いものの典型として水泳部をあげねばならない。また、全校的な応援体制をもってあたる「金石の学生相撲大会」参加への相撲部の活動も注目すべきものであった。

また、教科活動の一環として、運動会・剣道小会・陸上小会・弁論大会・柔道大会なども全校的行事のものとしておこなわれ、生徒の士気の鼓舞がはかられていた。講演会は、生徒にとって啓発されるところが大きかった。

願

暁烏　敏（明達寺住職）

青年に大切なものは大きな理想であります。理想が具体的の願いとなって実生活の上に現われて来る時に、自然に精進勉強が出て来ます。

中心に大きな願いを持たない青年は唯だ瞬間的の衝動によって動いているから、毎日同じ処をどうどう

廻りした様な生活をしているのである。

毎日の生活に一歩づつ進歩するところがなければ生活に楽しみがない。将来に願いを持っているものには、日々に新天地が開かれて行くのである。

願ひは主観的であるがその主観的の願ひに普遍を見出す時に客観化して来る、その時に自分の願ひは単なる主観的な願ひでなく、宇宙に満ちた大いなる力が願わしめ給ふのであると思う様になる。そうなると願ひが成就するかせぬかと云う懸念はなく成就せしめられると云う信念となって来るのである。

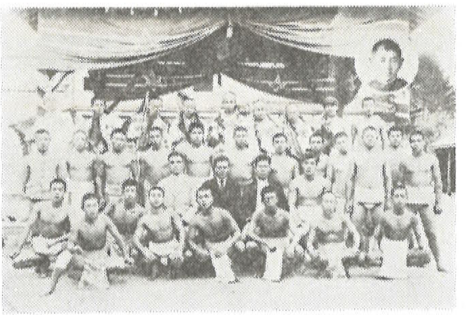
だから志願に向っての生活はあやふやしたものでなく一歩づつが志願を成就して行くにたしかなるものである。

二　運動部・文化部の活躍

本校の校友会には、運動部と文化部があり、運動部としては、水泳・剣道・陸上・馬術・柔道など軍国主義教育にふさわしいものも多く含まれていた。

相　撲　部　大正一五年一〇月一七日、全北陸中等学校相撲選手権大会は、日本海の潮音高い金石海辺で行なわれ、本校は団体、個人とも優勝した。当日の本校選手名は、堂前　束・川端健一・加藤申三・浅田正勝・森忠太郎（個人優勝）だった。一〇月二三、四日、全国相撲大会は大阪大浜南公園で五万人の観衆を集めて行なわれた。「伏虎城南健児の意気」、「気蓋世鹿児島健児」等の旗がひるがえる。仲市一雄・吉田瑛瑛・常前　束が出場。第一回戦堺商業学校と一対二で負ける。第二回戦大阪関西中学校二対一で勝利第三回戦は海南中学校と対戦し一対二で敗北したが北国健児の健闘に会場から万丈の拍手がわいた。昭和三年第一四回

学生相撲大会への優勝意気込みはすごかった。当時、従軍記者中田は「時は陽春酣なる卯月、蕪城ケ丘の隅々にも平和のシンボールたる女神は訪れて人々は「春駘行楽」に耽って居る間も我等の選手はその姿を土俵上に見せぬ時は無かった。雨の日も、曇る日も、照る日にも、風の日とても練習に余念はなかった。実際筆にし難い苦しい火の出る様な練習は毎日繰り返えされた。未明床を蹴って起き出て朝の草露を踏んで、草木未だ眠り、星輝くに出でて尚時も足らずとした。あの熱心なリーダーに率ゐられて薄暗い雨天体操場に、或は運動場に、愛校の精神に燃ゆる全校生徒の肺肝より絞り出る応援歌は如何に我等の選手をして奮起せしめし事であらう。



昭和6年度　相　撲　部

若しそれ「久遠の光」の叫を耳にするときは諸君はかくまで我相撲部を思ふかと皆涙を禁じ得なかった。」とのべている。二年続けて雨にたたれたが、第一四回大会はまったくの快晴。参加校は中等部一七校、専門部五校の合計二二校と最多の顔ぶれになった。前年参加しなかった専門部の金沢高工、中等部の小松・輪島・金沢三中・大野（福井）・高岡（富山）が新メンバーを編成して出場、選手数も一六〇名にふくれあがった。五月二〇日、金石海浜日和山下へ「松任農」と大書した流れ旗を先頭に五〇〇有余の団員は向かい、惨敗に惨敗だった。中森曠・山口外雄・立矢義雄・太田正保・北田喜義・泉宗明・田島外男らが出場した。全北陸中等学校青年団相撲大会に本校は、富山砺波中学校についで第二位になった。また、立矢義雄は五人抜きをした。

昭和四年第一五回学生相撲大会は五月二六日金石日和山下相撲場で行なわれた。今大会から大聖寺中・小松商

が初参加。出場校は専門部五校、中学部一九校の二四校にのぼった。濤々園下に会場を移して三年目、会場づくりも金石実業会の援助で着々と広げられていった。場所的に甲子園球場の〝すりばち型〟になっていたことから応援席・観覧席は見やすかった。ところが会場づくりに一役買った地元金石町の人たちが試合開始前に会場につくと、もう満員だったという。第一回戦一対四、第二回戦四対一、第三回戦は四対一、第四回戦は三対二の成績だった。個人戦で立矢義雄（大将）は決勝戦で七尾商業の青木重信に敗れたものの第二位となり、大花環を受けた。

昭和五年第一六回学生相撲大会は五月一八日に日和山下で行なわれたが、源佐眷三（副将）は相撲中になくなる。

忘れなん夢なれかしと思へども露と消えにし君はいまさず

昭和七年第一八回学生相撲大会は五月二九日日和山下相撲場で行なわれた。中等部で金沢三中、専門部で福井高工・金大薬専が出場をとりやめ、かわって中等部に氷見中（富山）専門部に名古屋高商（愛知）が出場した。北信越以外から、はじめて名古屋高商が参加、大会のスケールをひろげた。本校は団体第三位。個人で菱田正則が第三位に入る。当時、菱田正則・髭右近一夫・渋洞万右衛門・森倉正三・畠寿太郎が出場した。一〇月二日、中等学校相撲大会（金沢高工主催）があって、本校は第二位を獲得。

昭和八年第一九回学生相撲大会は五月二八日、金石海浜日和山下相撲場で行なわれた。この大会は参加校が少なく、中等部一二校、専門部三校の一五校。髭右近一夫・窪田信二・石田吉造・佐藤政丈・正田則行選手の健闘があって団体第三位を得た。北陸中等学校相撲大会兼全国学生相撲大会（大阪毎日新聞主催）は快晴の下、大熱戦が行なわれ、本校は七尾商業に次いで第二位を獲得し、全国大会の出場権を得た。

昭和九年第二〇回学生相撲大会は、日華事変を前にして国中が非常時体制にあった。この余波を受けて二〇回の記念大会も中体連の応援自粛が通達された。二〇回記念大会とあって新しい方式がくり込まれた。大相撲の北陸三県出身力士を招待、相撲四八手を土俵上にくりひろげたのもその一つ。大化獄・青葉山・小松山・千山の四力士によって模範試合があり、つぎつぎに型を披露してファンの拍手をあびた。優秀八校に入った。正田則行・上野佐一、金田平進・西村務・南谷忠人が出場。五月一三日、近県中等学校相撲大会（高岡高商主催）は五月一三日行なわれ、本校は第一位を獲得した。七月八日、県下中等学生相撲大会（山代町主催）で、第一位を得た。個人は第一位から第三位までを本校が独占した。近県中等学校学生相撲大会（大阪毎日新聞社主催）で、本校は七尾商業についで、第二位の栄冠を握り、全国学生相撲大会の出場権を獲得。個人では、西村務第二位、正田則行が第三位となった。

昭和一〇年六月二日、第二一回学生相撲大会は金石海浜日和山下で行なわれた。この大会には、また機構がかわった。中等部を二つに分け、一・二年生を少年部、三～五年生を中等部とし、専門部を合わせて三部制をとった。第一回大会の少年・中年・青年部の構成に逆もどりしたわけ。第一回戦四対一、第二回戦五対〇、準々決勝で二対三（石川工業）に敗ける。個人で、金田平進が第二位となり、月の桂を失なう。

県下青年団中等学校相撲大会（根上町体育研究会主催）　第一位。
第一〇回全北陸中等学校相撲大会（全国大会北陸予選）　第一位。
個人　張寛宝（副将）　第二位

凱旋

第一〇回全北陸中等学校相撲大会（大阪大浜全国大会北陸予選会）の覇者我が松任農学校は、実に臥薪嘗胆一〇年目、北

陸予選の大権を把握した。一路鉄路で帰還すれば、秋空碧く澄み渡り、燦とさす陽光は優勝旗に反映して五彩を発し、戦士の悪戦苦闘を物語っていた。（「会報」創立六十周年記念号）

雨雲の大阪府堺市大浜相撲場で行なわれた全国中等学校相撲大会は、一〇月二七日、午前九時四〇分から、御影師範対鹿児島商船から火ぶたを切った。本校は第一回戦、熊本工業と対戦三対〇で完勝。第二回戦安芸中学と対戦〇対三、第三回戦岐阜商と対戦一対二でいづれも敗北する。個人戦は第四師団長宮殿下観戦の下に、西村・金田・張の三君は奮戦する。第一回戦は三君とも完勝。第二回戦は金田が熊本工業の選手を破る。第三回戦は金田が駿台商業選手に完勝。金田平進は優秀三二名に入り、決勝トーナメントで第一神港の選手にうっちゃりで敗けた。この大会にマネージャーとして同行した得能は、「思ふに体格も多少の差はあり、技も隔りはあったとは言へ、吾々の最も欠点とする所は、北国地方独特の敏捷を欠く事であった。北陸以北より多数来て居たが、此の為に思はしからぬ成績を取ったのである。現に或商業の大将の如きは、五尺未満の小兵であり乍ら、個人トーナメントの準決勝まで進んで居る。是等は特質だとは言へ、矯正すべきであり、彼等に学ぶべき点である。」（「全国中等学校相撲大会出場の記」）と語っている。

昭和一一年第二二回学生相撲大会は六月七日金石海浜日和山下で開催。中等部は青年部と名称が変更された。青年の部は本校が羽咋中を破って優勝した。

昭和一四年第二五回学生相撲大会は六月四日金石海浜日和山下で開催。本校は青年の部の個人で東　永松が優勝。

昭和一五年六月、世界の情勢は風雲急をつげていた。第二六回大会の当日は朝から小雨がパラつき開会が危ぶまれた。二時間の天気待ちのあと午前九時半小雨をついて強行、火ぶたは切られた。青年部は宇出津水産の初参

加を含めて一八校が参加。決勝は予選最高得点の石師を破った氷見中と伝統を誇る本校が対戦。一対四で負け第二位となった。

昭和一七年第二八回学生相撲大会は六月七日金石海浜日和山下で開催。本校は青年の部で団体第一位の栄冠にかがやく。

昭和一八年六月、戦局は悪化の一途をたどり本土決戦が唱えられてきた。二九回を迎えた学生相撲大会も東海・北陸・関西から選手を集めることができず「北陸中学相撲大会」と名を改めて福井・富山・石川の三県一八校によって開かれた。青年部の個人戦で本校の松田　正（現姓西田・国鉄松任工場勤務）が優勝。松任町は前年の青年部優勝に続いての快挙に町をあげて祝い、ちょうちん行列が夜おそくまで続いた。

このように、相撲部は、輝かしい伝統を持ち、金石学生相撲大会では、常に優秀な成績をあげていた。また、地方の草相撲としても大いに活躍した。例えば、護国神社の大祭には常に「カタヤ」松任農校「コナタ」陸軍、各中学というように、「カタヤ」は常に松任農校生の選手のたえることがなかったと言われるほど、選手はメンバー豊富で、松農の相撲選手層の厚さを物語っていた。また、この相撲での「カタヤ」という言葉は、当時、松任にあった「カタヤ」料亭の意味も兼ねており、松任を表わす代名詞として人々に親しまれていた。

柔道部

昭和二年八月二日、北陸関西中等学校柔道大会が、池田師範・広陵中学ら一三校が参加して行なわれた。第一回戦小松中学校と対戦し惜敗。第二回戦七尾中学校と対戦し完勝。川端・泉・杉畠・辻口・堂前・吉田・仲市が活躍した。

昭和三年九月一六日、第七回北信越中等学校柔道大会は富山薬学専門学校で行なわれた。第一回戦は旧仇敵福野農業と対戦し勝つ。第二回戦は富山商業と対戦し吾校に凱歌。優勝戦で魚津中学校と対戦し辛勝。中森　曠・

柔道部歌

作歌　能登太郎先生
作曲　崎井義幸先生



吾が部の為に歌並曲を作って下され度る事を深く感謝の意を表します。

山口外雄・田島外男・泉宗明・太田正保・北島吉二・立矢義雄が当時活躍。

北陸中等学校少年柔道大会（金沢高工主催）・北陸関西中等学校柔道大会（四高主催）・県下中等学校柔道大会等に参加した。

昭和四年六月一六日、北陸中等学校少年柔道大会（金高工主催）が白山連峰がくっきり見える快晴の下に行なわれた。第一回戦不戦勝、第二回戦高岡高商と対戦四対〇、第三回戦四対二と勝ち進んだが、優勝戦で福井商業に四対〇で完敗した。室谷・広中・苗代・山本一・正田が活躍。第八回富山薬専主催北信五県中等学校柔道大会出場。

昭和五年六月一日、第三回北陸中等学校少年柔道大会（金高工主催）が行なわれ、第一回戦は不戦勝、第二回戦は神通中学校と対戦し、四対四となった。そのところで各校代表選手一名を出して決戦したが広中は桶田（神通中）に敗けた。

昭和七年は、各大会に出場したがいづれも敗北したが、奥村重雄・小原清次・新谷郁志・田平光吉・渋洞万右衛門・若田久孝・岡部儀三郎らの努力はみのがせない。昭和八、九、一〇、一一年と目立った活動ぶりはない。

剣道部

昭和三年五月二七日、少年剣道大会（金高工主催）が昨夜来の雨があがり晴天となった。鷹栖藤吉郎は当時の模様を次のようにのべている。「本校七名の選手は血を吐く如き猛練習を開始して早や五十有余日此に充分の自信を抱いて目指す戦場高工道場へ！　午前八時一同道場に入り部長の開会の辞終るや石川師範対金沢二中を以て剣激の火ぶたは切られた。午前一一時いよいよ農校スピリットを発揮する

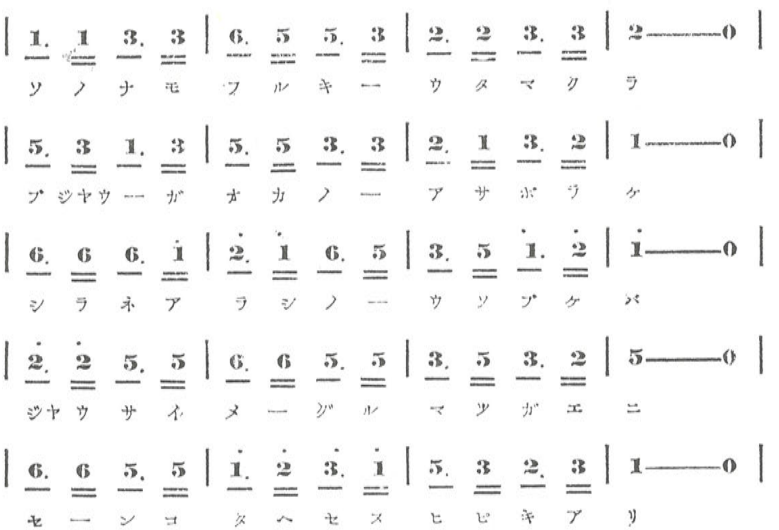


柔道部優勝記念

剣道部歌

昭和四年十二月　日認定）　作歌　織田隆幸
作曲

ハ調 2/4



一、其の名も古き歌まくら　我が民族の誇り得し
燕城が丘の朝ぼらけ　剛毅質実今何処
白峰嵐の嘯けば
城塞続る松が枝に
千古絶えせぬ響あり

二、見よ白嶺の彼方より
蒼穹高く弥繁く
上りて息まぬ雲煙は
胸奥燃ゆる希望なす
吾若人の意気なるぞ

三、世は徒に偸安の
花燎爛の春の夢
うたげや舞の声高く

四、正義の道に踏み迷ふ
思想の潮山をなし
濁れる陸に波打ちて
日出る国の岸に寄せ
心の巌にくだけ散る

五、起て六星の健男児
斬魔の剣提げて
剛毅正義に身をかため
四海に誇る国の華
おほし立てなむ剣道部

時が来た。敵は富山中学なり、更に第二回戦。戦わずして準優勝戦に送られた。選手の眉宇には死すとも勝たんの気あふれ勇気百倍敢然として敵塁に迫り、されど敵もさる者自重して容易に動かず、先鋒深田敵を良く攻撃して得意の甲手を取り最後の一本に至らんとするも時間に制せられて引分く、中堅本校花形口羽奮然猛虎の如く起ちて敵全部を丸呑みと君の電光石光の如き甲手には敵も開いた口がおさまらなかった。しかし疲労したか敵中堅に破らる、しかし敵も良く廻りて引分けとなる。我校副将八田復讐せんと君の戦いは壮烈なものであった。甲手を取り敵副将と対す、しかし利あらず。本校大将小林奮戦して副将を見事打切り戦は一進一退形勢容易に逆図し難し、敵の大将躊躇して仲々出ず、一挙一動万場をして片唾を呑ましむ、小林の攻撃は良く功を現はすも残念や面を二本取られ勝ちをゆずった。」

この年、わが本校の武道科が準正科として認められるに至ったことは本校学友会剣道部歴史上における一大変遷であるといっても過言ではない。

昭和四年七月二〇日から一〇日間、合宿練習をして腕をきたえてきた剣道部は、四高北辰会主催北陸関西中等学校剣道大会に出場したのは七月三〇日だった。第一回戦は魚津中学に対抗し、副将長山・大将北田を残して見事に勝ちを得た。第二回戦は不戦一勝を得て第一日の試合はおわった。第二日の試合には、優勝校候補砺波中学に対し各員一層奮励努力満身の勇いをふるったが、遂に惜敗にいたった。当時の合宿練習をのぞいてみよう。

一　合宿所　本校養蚕室階上
二　合宿畳及び寝具　本校養蚕当直用ノモノヲ借用
三　食事　町ヨリ之ヲトル
四　合宿規定

一、起床四時半　一、点呼、朝四時四〇分、夕八時（寄宿舎）　一、掃除　朝夕両点呼直後　一、消燈　八時半
一、食事　朝七時　昼〇時一〇分　夕六時半　一、稽古　午前ノ部自五時至七時、午後ノ部自四時至六時

五　注意
一、合宿員ハ時間ヲ正シク守ル事　二、夕点呼後ハ外出ヲ為サザル事　三、合宿並ニ其ノ備品ハ清潔ニシ之ヲ破損又ハ汚損セザル事　四、合宿員ハ総ベテマネージャーの指揮ニ従ヒ一意専心稽古ヲナシ苟クモ校規ハ勿論本規定ニ違反スルノ行為アルベカラザル事

（「学友会」第三七号）

富山高等学校主催近県中等学校剣道大会（六月九日）、北陸中等学校少年部剣道大会（六月九日）、北陸関西中等学校剣道大会（七月三〇、三一日）、金沢医大十全会剣道部主催第五回近県剣道大会（九月二二日）、大日本武徳会石川支部武道大会等に松農健児は健闘した。当時は、北田喜義・長山頼光・福田與盛・田上勝雄・梅本吉正・水内重三・米蔵米蔵・長　千治・小坂敏雄らが奮闘した。

昭和八年七月三〇日、三一日、四高北辰会主催関西北陸中等学校剣道大会に参加して準決勝で負けてしまったが、剣道部にあって、この成績はよく頑張ったものである。

第一回戦　第二回戦　第三回戦　準優勝
◎松任農学　◎松任農学　松任農学
砺波中学　岩田村中学　松任農学
◎小松商業　小松商業　松任農学
石川工業

当時の代表選手は、大杉勝美・木野仕農・佐竹四郎・田丸午十郎・北山三郎らだった。

ここに、部の一部記録をみてきたが、剣道や柔道に有段者が多かった。特に五坪校長時代は有段者の目標を掲げて、先生、生徒を激励したといわれ、有段者の数は従来にくらべて急激にふえた。

乗馬部

昭和九年四月創立。松下二良は「春季より秋季に掛けて、日曜日毎に輜重隊の営門を足並み揃へて馬屋迄へ行く時は実に嬉しいものだ。尚各々配当された馬に乗って、広い野村練兵場を一列縦隊に走り、十五の馬蹄の音高らかに砂煙を立てる時は、まるであの満洲の広野を走った山田一等兵の勇敢な姿が頭に浮かんで、一日も早く満洲へ第二の国民として活躍したいという事を、心の中につくづくと思う。そして練習終って再び馬屋に行って足の裏を我に向け、洗ってくれるのを待っている馬を見れば、流石に可愛いものだ、力一杯に洗い汗をふき取って給水して馬屋へ帰して来るのである。此様な楽しい事は、此の広い北陸の中等学校では、唯だ本校のみである。諸君実に幸福であり、有難いことではないか。」（「会報」第四二号）とのべている。メンバーは、割出弘雄・西川静男・金田善二・中林巳季丸・中堀春二・村田久男・山室吉一・水上進・中山弘その他四名であった。

昭和一〇年四月一八日の遠乗会をはじめとして、日曜日ごとに午前八時までに孝子茶屋前に集合する。靴音高らかに、あこがれの輜重隊の営門を足並み揃えて入る時は愉快なものである。それぞれ配当された馬に鞍をおき手綱を握って、馬上の人となり、一五頭の馬の蹄の音も高らかに野村練兵場を走りまわる時はなんともいえぬよい気持である。金沢市の街路を威風堂々と乗りまわすのも悪くはない。練習は四時間する。営門を入ってから練習をおえて出るまで、皆軍隊式で部員は緊張した態度で、教官の教え通り練習操作をするから、早く技術も上達した。中等学校で、乗馬部が設置されているのは、北陸はおろか、日本全国でもただ本校だけである。倉重軍曹を顧問に一五名の部員がいた。また、乗馬部は、五坪校長も好きで自ら乗り訓練にあたっていたので相当の実力をもっていた。

射撃部

昭和五年の秋、午前八時半から、野村の草多い原で、第九師団管下学生連合射撃大会が行なわれた。本校から、八田義武・苗代市太郎・本野金弥・神田外志夫・森田世一・北川清喜・瀬川太一・服部政雄・西出二郎・佐武正二らが出場したが、本校は第六位だった。



射撃部

昭和八年九月二三日、第九師団管下学生連合射撃大会が、くもり空の下に本校は勝田の四二点をさきがけとして、六星射手よくうち続け、窪田・竹内・松下・山本・高蔵・得田・林・安川・勝田・宮下・市川・宮本らが参加した。

昭和九年炎熱燃えるような盛夏の候もすぎて初秋を感じさせる季節、指名された一五名の射手は、朝夕に熱心な練習をして九月二三日、学生連合射撃大会に参加し六星校の射手は誠心誠意よく奮闘した。宮下与真をはじめ、西川・松下・北村・山本・市川・辰己・森岡・能登・佐々川・木野・南・三盃・石次・二口（旧姓山崎）が活躍した。

昭和一〇年マネージャー長峰　進の手記から当時の模様をみよう。

天高く気爽かな秋の候、名誉ある代表と選ばれた我等一五名の射手は、来るべき大会を約して、朝に夕に猛烈な練習を続けた。或時は本校で狭窄射撃をなし、又は遠く離れた上野射撃場に行き実弾射撃をして腕を練った。斯様にして一〇日間の練習も夢の如く明けて、愈々一〇月二日県下学生連合射撃大会の日が来たのだ。非常時国家の重責を双肩に荷ふべき若人の意気は、天もさけんばかりの物凄さだ。午前八時半愈々戦の幕は切って落された。上野初秋の松籟も爽かに最初太田君をさきがけとし、続々初陣の六星射手はよく奮闘した。然し戦は利なく、栄冠は他校に譲るのやむなきに到った。けれども本校

は第四位となり、其の成績中にかつてない好い成績を修め得た。敗戦の原因は矢張り練習不足な為であった。戦に破れた射手の心中は、筆舌に尽されない。許して呉れ。四百の健児よ！　どうか来年は六星校の汚名を洗ひ流して呉れ。

（「会報」昭和一一年三月）

射撃は、戦時下の国策上の必要性から、特に激しい訓練が行なわれ、松農の射撃術は優秀であるというので、軍隊に入ってからも旧陸軍の間でも定評があった。

籠球部　昭和一〇年六月八日に、県下中等学校体育連盟主催県下中等学校体育大会が金沢市郊外市設運動場で行なわれた。今年部創立で技術において劣るわが部は強敵小松商業と対戦し、完敗を喫した。出場選手は、田島惣勝・南谷忠人・東　正博・竹田与志男・吉田喜久治・補欠は竹下一男・川畑春雄・魚住舜光・北野庄助であった。

卓球部　昭和一〇年四月、二つのゲーム台を学友会が購入して卓球部を創設した。「技を屋内に争うスポーツとしての卓球こそ、我が北国に於て宜しきを得たものと言うべきであろう。あのゲーム盤に一条の白線を描いて躍るボール、室内に響くやさしきが中に威厳のある快音、瞬間と瞬間との連続、若人の血を躍らすには充分であろう」（「会誌」昭和一一年三月、宮本記）

排球部　昭和一〇年四月部を創設した。そして、始めて練習したのは、八月二三日だった。それからほとんど毎日雨の降る日、風の吹く日にも元気よくコートに出た。〃統制と団結。目指せ、全国の覇を！　を部の精神として、練習を続けた。練習の甲斐があって、一日一日と上達するのが見えた。ただ練習するだけでなく、自ら進んで見学や試合を行なった。

主な日誌

九月八日　金沢に合宿している東京帝大・東京文理大両排球部練習見学。パス・トス・キル・タッチ・サーブ・レシーブ等部員大いに参考になる。

一〇月二七日　場所　金市工屋内コートで初試合に臨む。

市工　2（21―6、23―21）0　本校

一一月二三日　場所　本校コートで金市工戦を行なった。

本校　2（21―9、19―21、21―15）1　市工

先月の二七日惨敗したわれわれは、遂に初勝利を得た。我々はたしかにチームワークに一日の長があった。しかし、敵に与えたポイントをよく考えて見ると、われわれはまだまだやらねばならない事が残っている。見よ！　明年は頑張るぞ！

部結成当時のチームメンバーを示そう。

トッサー　石塚、木戸、石田、山田

キラー　藪内、池村、金、中野、松木

バック　笠間、市野、長山、南手

山岳スキー部

「幾多の伝説と神秘をつつんでそびえ立つ二、五〇〇米加賀の霊峰白山、それは吾々若人のあこがれの山であり活躍の舞台である。冬来りなば白一色の銀監にシュープールを描き、夏来りなば黒百合と雷鳥の野に登高にはづんだ胸を憩う。この霊峰の下に日夜学ぶ吾が松農に山岳スキー部の存在を見なかった為に、幾多才能ある先輩もその技を発揮する事無くして涙をのんで母校を巣立った事だろう。そして彼等は、いつか吾が部の創設される事をどれ丈熱望していたことだろう。而して幾星霜。今その機運熟して、

玆に松農に山岳スキー部の出現となったのである。昭和九年は吾が山岳スキー部は喜びの年である。」

（「会誌」第四二号）

昭和一〇年一月一九日、北陸代表スキー場鶴来のゲレンデーで北陸中学校スキー大会（北国新聞社主催）が行なわれ、吾が部は四位に入賞。木戸口・宮越・二口（旧姓山崎）・辰己らが出場した。

競技部

旧競技・水泳・徒歩の三部を合併して、一つの競技部となったのが大正一五年だった。

大正一五年七月二〇日、水泳開始・松任相川新海辺において全部、それに三町遠泳未受験者を参加させて八月一日終了式を行なう。七月二四日に能登一周徒歩旅行隊出発して三一日に帰校。七月二四日、陸上競技講習会は、石川県社会教育主事西園富吉を招き陸上競技法につき講習を行なった。内容は、短距離及び長距離競走のスタート。砲丸投げ。円盤投げ、ハードル、走高飛びの原理、並びに実地につき詳しく説明をきく。出席二八名。八月三日、富士登山隊出発して九日帰校。八月一〇日、白山登山隊出発して一二日帰校。一一月三日、午前八時三〇分より「体育デー」にちなみ、陸上競技大会を行なう。

昭和三年、九月二二日、第八回全国中等学校陸上大会に参加して、北川作雄（一〇〇米）、松下与之、長山頼之（二〇〇米）、増崎（一五〇〇米）、雄谷（四〇〇米）、竹田（棒高跳）、喜多（砲丸投決勝）、松下（走巾跳）の力走およばず、それぞれ敗北した。得点0点。

昭和四年九月二二日、第九回全国中等学校陸上競技大会開催。

春風まだ寒く石川平野の雪やうやく解け終へた頃より三十数名の部員は直に練習を始めてゐた。其より今日の大会まで日曜と云はず休暇と云はず風の日も炎熱焼くが如き盛夏の日も一日として休んだ事はなかった。

（「学友会」三七号・喜多尚是）

入賞者は、竹田が棒高飛びで三米〇五を飛び第四位獲得。得点四点五分。

同年六月二三日、午前八時三〇分から、第一回県下中等学校陸上競技大会が城南市設グランドで開催。入賞者は、巾飛びで松原第五位。三段飛びで中村が一二米で四位。長山一一米九五で第五位。総合得点は六点だった。

昭和八年六月一〇日、一一日、第三回県下中等学校陸上競技大会が行なわれた。その様子をみてみよう。

ああ六月十日、十一日！　そは我が競技部が春まだ浅い頃より猛練習を続けて、待ちに待ってゐた日である。其の日一部一五。二部十一校の各選手はトラックを半周してスタンドの前に集合した。かくて前年優勝の石川師範と七尾商業より夫々優勝旗が返還され、一同緊張の中に入場式が終った。そして百米予選を以て大会の幕は切られた。当日の本校選手の成績は次の通り。

トラック

一〇〇米予選　一着　西田伸寿邑　一二秒九

二〇〇米予選　二着　山本　武

四〇〇米継走予選　一着（西田伸寿邑、表　外次、南　博、山本　武）五二秒

フイルド決勝

走高跳び　二着　表　外次　一米四〇　五着　金田平進

走巾跳び　一着　西田伸寿邑　四米九八

砲丸投げ　一着　南谷忠井一　一米三七（大会新記録）　二着　金田平進　一一米二五

トラック決勝

一〇〇米　三着　西田伸寿邑　二〇〇米　山本は棄権す。

かくて本校は二一点三分ノ一、少年部で優勝になった。二位は七尾中で二一点であった。お遂にわが校は優勝したのだ。栄ある優勝旗は蕪城が丘に燦然として輝いて居る。思へば、今日の優勝は偶然でない。わが部は春風まだ寒く石川平野の雪

やうやく消え終へた頃から本日まで一日として運動場をみせない日とてはなかった其の努力は遂に空しからず、此に優勝する事が出来たのだ。最後に当日出場された選手に労を謝し、芳名を記す。

西田・表・南谷・金田・山本・南・（「学友会誌」第四一号・北村剛「第三回県下中等学校陸上競技大会記」）

このようにして、陸上競技大会は地道に伝統を築いていったのである。

水泳部

昭和三年北陸唯一のプールを持つ松任町にある我が校において特に水泳部をさかんにしようとした勝田は、昔からの旧習を破ってプールにおいて水上競技の練習をもっぱら行うことに決定した。教師は、名コーチとして名高い京都帝国大学箕田武雄を招き、監督を荒井、横浜両教師に頼んだ。昨年まで、日本海で泳いでいたため、急に今年からクロール、バック、ブレスト等の新しい競泳法を教えられたけれど、なかなか旧癖がとれず満足に泳ぐ者はなかったが、近頃では非常に上達した。また、とびこみも始めは三米を飛ぶ者わずか数人であったが、今では一〇米からツバメのように飛ぶ者ができた。何分にも選手にとっては、プールで泳ぐのは始めてであった。九月一五日北陸中等学校競泳大会が一一校の参加のもとに行なわれた。浜頭幸作が福井中学の竹下と一〇〇米背泳で激戦を演じ半身のおくれの二位となった。タイムは一分三〇秒フラットで大会新記録。五〇〇米で高島政雄が四位。上村孝一が四〇〇米自由型で第四位等、六星健児の名を高めた。

昭和四年第三回県下中等学校水上競技大会が行なわれた。「暑い暑い西日は薄れて蚊柱が立つ頃になると濃い黄昏にまぎれる様に蝙蝠の姿は夜の空を遊び柳の葉かげには早新月の細い光がきらめいている。川風がよふ氷屋の店には四五人影が集って明日の大会には断然農校必勝なるを賑やかに語り合っている。風鈴の音、ラジオの声吹く風の音……皆明日の農校の必勝を期せんがために。選手は春まだ浅き卯月の半ばより水気鉄骨を凍らすが如きプールに於て猛練習に猛練習を重ね待つたる八月四日はまさに明日に迫った。選手の鍛へたる鉄腕は猛虎の

猛るが如く其の意気穆王八匹の天馬の如きものである。」（「第三回県下中等学校水上競技大会記」）

総合得点　一九点　第二位。
二〇〇米自由型決勝　高島政雄　第四位。二分五〇秒
四〇〇米自由型決勝　本田次雄　第三位。六分一一秒
二五〇〇米自由型　本田次雄　第二位。二五分一〇秒
二〇〇米平泳　竹田　行　第三位。三分二二秒
二〇〇米リレー　高島・朝倉・橋本・本田・第三位。二分一一秒
八〇〇米リレー　高島・朝倉・橋本・本田・第三位。一一分五〇秒
福井遠征（九月一一日　月曜日　快晴）
一〇〇米決勝　高島政雄　一位（一分一〇秒）大会新記録
二〇〇米自由型決勝　橋本　幸　二位（二分四四秒八）
高島政雄　三位（二分四五秒九）
四〇〇米自由型決勝　橋本　幸　二位（五分五五秒四）

第三回全日本水上競技大会において、二〇〇米リレー決勝で、京武天王寺師範学校に次いで第二位に入賞。メンバーは高島、朝倉、橋本、本田で二分六秒四のタイムで六星健児の名を高めた。

昭和七年

第五回県下中等学校水上競技大会（決勝入賞者）第三位（総合）。
二〇〇米　竹中和夫　第二位　二分四五秒
四〇〇米　竹中和夫　第二位　五分五七秒
四〇〇米　徳田文雄　第二位　五分五八秒五
板飛込・高飛込　北村久雄　第二位。

中部日本水上競技大会（八月二三、四日　松任プール）
四〇〇米自由型決勝　竹中和夫　第二位　五分五五秒
ダイビング　北村久雄　第三位。
第二回近県中等学校水上競技大会（九月四日　快晴）第三位（総合）。
四〇〇米自由型決勝　竹中和夫　第二位　五分五三秒八（大会新記録）
一〇〇米背泳決勝　徳田文雄　第二位　一分二七秒五
八〇〇米自由型決勝　第二位　一二分一八秒（大会新記録）
水泳部福井遠征（九月二五日）

本年最後の戦の日だ。静かな夢路を破られて床を離れたのが四時。三日月の淡い光りと無数の星が、静かに我等を見送って呉れる。僅か二三の者にて遠征の途に上らねばならない時、何かしら淋しさを感じた。夜の明くるに従って美しく空は晴れ、水泳日和として絶好。我等の腕は層一層力の漲れるのを覚えた。（「福井遠征の記」橋本龍太）

四〇〇米自由型決勝　竹中和夫　第四位。
三〇〇米メドレー決勝　徳田・橋本・竹中　第三位。
一〇〇米背泳決勝　徳田　タイム一分二六秒（大会新記録）第二位。
総合　一八点　第四位。

昭和一〇年松任プール修繕のため練習ができなく、犀川や美川プールへいって練習が続いた昭和八年。その後昭和一〇年六月二三日、雷豪雨で、少しコンディションの悪いながら行なわれた第八回中部中等学校水上競技大会に塚本、北川が二〇〇米平泳に出場したのをはじめ、村田、酒本、室賀、番匠、安実、根布、中村、徳田が奮闘。七月一二日から一九日まで、東京高等師範学校より坂本博司コーチを招いて強化練習した。

全日本選手権水上競技大会予選（七月二九日）
一〇〇米自由型　番匠　第二位　一分一四秒

五〇米背泳　　室賀　　第三位　四三秒
二〇〇米背泳　酒元　　第二位　三分二六秒五
一〇〇米平泳　塚本　　第二位　一分四二秒
二〇〇米平耽　北川　　第二位　三分四三秒

庭球部

大正一五年八月三日、第一三回全国中等学校庭球大会に参加。午前八時から京都一商と対戦して完敗。神保、樫田、北川、中森、北村、玉田が選手として出場。

昭和二年八月三日、第一四回全国中等学校庭球大会が行なわれた。その当時の様子をみてみよう。

第十四回　全国中等学校　準硬球　庭球史会参加の記

委員　丸山生

過去数年間敗残の歴史を繰り返せる我が松任農学校庭球部は積れる恨みを晴すべきは今年なりとて百花美を競ひ人三春の行楽に耽り桃源の春を夢見る頃より猛練習を開始せり。

十数日の合宿猛練習!!

時は来たれり!!

雪辱の日は!!

八月三日!!

此の日は朝来黒雲天にみなぎりあまつさへ大雨なり。選手一同切歯扼腕し合宿所にありし折、さすがの大雨も午前十時頃仙石が原頭に黒雲散り果て忽ちにバラ色に染り紫鮮の雲を破りて陽光麗かに淡青の大空に輝く。

我等駒を仙石が原に進めぬ!!

入場式午後一時十三分

全選手の拍手裡に和歌山中学優勝旗返還終る。時正に午後一時二十分なり。

試合開始は一時三十八分

第一回戦は本校対高岡中学
高中の№3組のサーヴにて試合開始せり。本校選手は日頃練磨せる手腕を発揮せんと武者振勇しく戦ひぬ。
選手良く奮戦し№2の奮戦努力!!
№1の神保の猛烈なサーヴ、北村のコビング奮闘遂に効を奏し敵の中堅№2組と大将№1組とは枕を並べて討死し斯くして倶利伽羅の嶮を越へて遠征せし中越の覇者高中軍は空しく我が膝下にひざまづきしは、あはれなれ。
其の成績左の如し

本校	二	―	一	高中
№3	四	―	六	№3
№2	六	―	四	№2
№1	六	―	三	№1

第二回戦開始午後六時
本校対和歌山中学
折しも夕靄に包まれ眼が見へず、止むなく試合中止す、時!!　午後六時四十七分
八月四日雲はしきりに流れ白山頂上に輝く太陽は如何に我等の心を強くした事だらう!
倒れる迄戦へ自己の為に母校の為に!
我等の心は屈しないぞ!
午前八時十分和中の先攻にて試合開始せり
奮起せよ母校のために!
雪辱を注ぐために!
先に高中を屠つた本校は狂つた獅子の如く和歌山中学に肉迫した。
我が軍の№3組の苦戦奮闘!
遂に其の効を奏し敵№3組に一回のリードすらさせずして屈服せしめぬ。
本校№2は最初は大事を取つてネバリ初めた前衛中森は良く敵のモーションを見抜いては得意のストップヴオーレで惨々

に敵を悩ましぬ。
然し敵も、さる者良く挽回して試合酣なるに及びて敵味方共に調子附きて五対五になりぬ、味方の№2組ヂユスを繰り返し敵もさる者之れに応戦す№2組稍々あせり来たりしも中森のスマシング効を奏し遂に勝ちぬ。
№1組は昨年の優勝校としての面目を保たしめんとする武士の心！
敵№1に対する神保良く働き北村又良く牽制し大いに敵の心胆を寒からしめたり。
敵にワンゲームを与へ次にトウゲームに一点を取り追ひつ追はれつの状況なりしも遂に勝を譲り彼等の面目を保たしめぬ
関西の猛覇者！　強敵！
和歌山中学をも敗退せしめぬ！
成績左の如し。

本　校	二	―	一	和歌山中学	
№2	六	―	〇	№3	
№2	六	―	五	№2	
№1	三	―	六	№1	

第三回戦なり。
「母校の興敗此一戦に在り」と双方共大いに緊張せり。
本校対岐阜師範
試合開始！　午後一時二十分なり。
我等は連戦連勝の勢で中部の勇者岐阜師範に向ふ。
本校の№3良く奮戦し前衛後衛の連絡及其の計略は敵をして迷はしめ敵に猛進肉迫せしも遂に彼等に勝を与へたり。
№2組稍々自重し過ぎ前日からの奮戦の関係あるかの様に感ぜられて空しく敗を取れり。
№1組は№3№2の復讐せんと已れ、につくき敵御大組唯一打ちと勇みて応戦す。
神保、北村の熱球は敵の陣形を乱し敵が狼狽せしが其の甲斐なくして敗れしは無念なり。
噫!!!　表日本の勇者岐阜師範のために敗れたり。

再び汝に与へし名は？　敗残者！
其の戦況を記さん
本　校　〇―三　岐阜師範
No. 3　四―六
No. 2　二―六
No. 1　一―六
最後に本校出場選手の芳名を記さん。
No. 3（原　利雄　向　実）　No. 2（樫田信三久　中森　曠）　No. 1（神保　周郎　北村　利一）
最後に当り選手の労を謝し部長及び先輩校友の熱心なる御応援を感謝する。
選手諸君来るべき時を！
大いに自重されんことを！

石川福井中等学校準硬球庭球大会が五月二九日、大聖寺で行なわれ、本校は午前一〇時五分金沢商と対戦して〇対三で敗けた。

昭和三年六月一〇日、北陸中等学校庭球争覇戦が行なわれ、小松中と対戦して完敗した。八月四日、五日、第一六回全国中等学校準硬球庭球大会（四高主催大阪毎日新聞後援）が二八校一六八人参加のもとに行なわれ、本校は金沢商と対戦し、一対二で敗ける。向、原、中森、西出、樫田、本田が出場。

昭和四年北陸中等学校庭球争覇戦（五月一八日）、第一八回全国中等学校庭球大会に出場した。当時は、橋爪、藤住、串村、奥村、森倉らが活躍。その後地道に部員は努力していった。

弁論部

大正一四年度弁論大会は「吾人は桃太郎を何と見るか」（宮田重雄）、「吾等が覚悟」（山根秀治）、「事業と成功」（江川昇）ら一六名が熱弁した。大正一五年五月三〇日、金石学

生相撲大会激励演説会があり、生徒側から、織田隆幸、宮田茂男、喜多久太郎、島津進、吉本健二、川端千里、木田政二、中町栄、大井貫兵衛、森川初一、成谷文雄、神保周郎、島敏胤、中田友忠、山根秀治、樫田栄治、小山久美が激励した。六月一三日、富山薬学専門学校主催北陸学生雄弁大会に、「苦闘せよ」の演題をひっさげて樫田栄治を、八月三〇日、石川郡山島村青年団主催郡下青年雄弁大会に「現代青年は建設的たれ」の演題をひっさげた山根秀治をそれぞれ派遣した。

昭和二年一一月二七日、北国新聞社主催県下中等学校弁論大会に竹内久雄（「使命に生きよ」）が、一一月二八日、小松中学弁論大会に紺谷一次（「自覚より創業への道」）がそれぞれ出場した。

昭和三年

北陸学生弁論大会（六月二日、四高弁論部主催）　安本辰太郎

県下青年団雄弁大会（六月七日、蔵山村青年団主催）　中田源悟、安本辰太郎が出場して、安本が見事に優勝し、優秀賞杯花輪獲得。

県下中等学校青年団連合雄弁大会（六月七日、金沢市瓢箪町青年団主催）に中家忠敬が出場。

県下中学校青年連合雄弁大会（九月二二日、夜間中学校主催）に清水勇二、中田源悟が出場。

小松中学校弁論大会に大藪武夫が、金沢工業学校弁論大会に宮田重雄が、近県中学校弁論大会（一二月二三日）に安本辰太郎が、大聖寺中学校弁論大会に樫田信三久がそれぞれ出場して松農健児の意気を示した。

昭和四年一一月一日、第四回北陸中等学校雄弁大会（北国新聞主催）が行なわれ、樫田が出場した。その模様を伝えよう。

北国新聞　社主催第四回北陸中等学校雄弁大会の記

時将に霜月朔日！　それは北陸雄弁界唯一の権威を有する北国新聞社主催北陸中等学校雄弁大会の日だ。吾が弁論部は連年惜敗に惜敗を重ねたので今年こそは燕城ヶ丘に凱歌を奏せんとの重大責任を負うて吾が代表樫田君が参加した。

此の日早くも参加二十二校の選手は多数応援者に擁せられ、共に溢るゝ自信を圧へつゝ開会今や遅しと待ちかまへて異常な緊張が漂うて居る。九時半開会の鈴は鳴り響いた。審査員、選手入場後開会の辞と共に選手を激励する所あり、読いて第二三回連勝せし富山工業より優勝旗返還ありて、直ちに金沢商科校中山君登壇、いよいよ本会熱弁の花火が飛ばされた。回を追ふにつれ若人の意気はあがり、舌端より火を吐くが如き雄弁に聴衆ただ恍惚として魂奪はれて時の歩みも忘れて、サイレンの響く頃富山中学牧君にて午前の部を終つた。午後一時再会、聴衆益々その数を加へ、第十二回より始まる壇上各弁士亦熱弁迸る弁論を以て縦横に所信を述べいよいよ第十五回吾が校の花形樫田君に至る。君は「自己肯定の立場より奮闘努力せよ」との題下の場内割れるが如き拍手に送られ、悠々と壇上に現はる。その態度その論調、そのゼスチユア、その沈着、あゝ君は第二の永井？　君一たび口を開くや聴衆一人として其の弁に酔はざるはなく、論を進むに連れ弥が上にも熱を増し、最後に至りて君独特の熱弁を振ひ飽く迄も自己肯定に立脚して己の信ずる彼岸に向つて奮闘努力せよと結んで降壇するや場内に起る拍手に天地も今や覆るかと思はれた。かくて回を進めて第二十二回七尾中学の林君を以て本日の弁論を終つた。



弁　論　部

続いて医大教授星野博士の講評ありしが、この間審査採点の計算がある。思へば今瞬時にして運命は決するのだ。歓喜か絶望か、凱歌か咏歎か。轟く胸をヂツとおさへて審査報告を待つ。

かくして土師記者の結果報告。第一等五三五点松任農学校樫田信三久君！　今まで静かだった聴衆一時に歓声を挙げた。

この間に優賞旗は青戸商工校長の手より樫田君へ授与された。然も第二等富山工業との差僅かに一点とは吾が応援団の歓喜、樫田君の満足、記するに文字はない。

閉会の辞ありたるは将に午後四時。

あゝ遂に吾が校は月桂冠を得たのだ。

栄ある優賞旗は多数応援団に擁せられ蕪城ヶ丘に燦然として輝いて居る。

顧るに吾が樫田君は雌伏五ヶ年、その間各地に雄弁を練り奮闘努力せるもその目指す一は本大会だったのだ。

思へば今日の優賞も偶然にあらず、実に君の断えざる努力の賜であると云はなければならない。諸君吾等は本年の優賞のみならず、来る年も亦来る年も否永久に北陸雄弁界の覇者としてこの栄ある優賞旗を吾が講堂に飾れんことを望んでこの筆を擱く。（大藪記）

その他の大会の入賞者

鶴来町青年団主催県下青年雄弁大会（一一月二七日）

生存の意義を知れ　樫田信三久　第三位。

宮保村青年団主催県下青年雄弁大会（三月一日）

雄弁は熱血なり　藤井　直之　第二位。

御手洗村青年団主催県下青年雄弁大会（七月二六日）

雄弁は熱血なり　藤井　直之　第一位。



書道展知事賞

昭和五年各大会には、安井外喜男、深田貞二が活躍。山島村青年団主催県下青年雄弁大会（一一月二〇日）に安井が「創造の努力に生け」と題して第三位を得た。

書道部

大臣賞をもらうなど、入選するものが多かった。現在活躍している二水高校教諭の久田鶴南（本名久田久信、日展作家）や中野有建らが中心に部の

運営をはたした。これには、当時、松下先生などの熱心な指導者があったためといわれている。

音楽部

音楽には、各種楽器による演奏もさかんだったが、戦時下になると軍事教練などの必要性から、三〇数名からなるラッパ隊がおかれ、松農健児の意気を高めた。

昭和九年一〇月二六日、実業教育五十周年記念のため、県下の各実業学校の校歌放送が行なわれた。我が部は日頃の練習できたえた技能を発揮するひのき舞台であった。従って練習も猛烈に行なった。当日は朝から秋晴れの好天気に恵まれ、私たちを祝福するかのようであった。放送学校は、本校、津幡農蚕、県立工業、市立工業、及び女子職業学校の五校だった。本校はそのトップを切って、正午から約五分の放送を行なった。指導者は、松下、竹内、森川、福留小の南、松任小の中西先生だった。当日のメンバーを記す。

器楽メンバー

ファースト・ヴァイオリン	竹内先生
ビオラ	森川先生
ピアノ	南　先生
セコ	中西先生
セカンド・ヴァイオリン	県　先生、川辺甚作、中堀春二、中山弘、徳田得二、辰巳　勇
コルネット	橋本　博
トランペット	北村初雄
トロンボン	西田長雄
バリトン	崎村金吾
クラリネット	吉田与市

声楽メンバー　堀本芳郎、宮下与真、水上　進、市川一郎、藤田友之、鹿子田武雄、高藤　一、上野佐一、中村忠造、差田

正一、木下太二郎、徳田一郎、的場　久、奥村　勉、半田茂一、東　正博

会報部

学友会では毎年「学友会報」を発行した。昭和二年二月二八日発行の「学友会報」では謹みて先帝陛下の崩御を哀悼し奉る、と冒頭に掲げ、昭和の御代、学芸、論叢、紀行、感想、芸苑、会報から一三二ページにわたっている。昭和三年三月「会報」昭和四年一二月「学友会誌」昭和五年一二月「学友会誌」、昭和七年一二月「学友会誌」、昭和一一年三月、「会誌―創立六十周年記念号」、昭和一三年二月、「会誌」等発刊して、校内の状況等を卒業生たちに知らせた。

目　次　第四〇号（昭和七年一二月発行）

特別欄

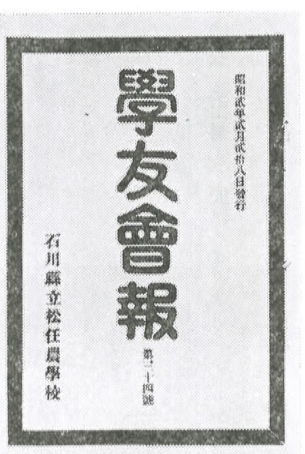
◦諸君に望ましき事ども（石母田菊三）。抱腹絶倒の支那新聞（青山大尉）。C・N率に就いて（荒木与逸）。副業としての養鯉（加藤祇）。多産鶏雑感（舟木十郎）。映画の短歌録・ピクニックの短歌録（独思草）。短詩（西川義能）。樹を植える心（宮川精一）。伊勢の踊（佐々木吉雄）。西崎先生よりの御通信。佐藤先生よりの御通信。出品について

◦研究

◦徳光西瓜栽培研究（竹田助治）。蕃茄（中島昌次）。飛込の見方（北村久雄）。郷土の産業に就いて（小西長雄）。大菊栽培研究（川辺甚作）

◦感想

◦農村の現状（北川信雄）。農村の自力更生（安田直久）。生産費軽減と都会病（出村正二）。誠と云ふ語（田平光吉）。自力更生と農民教育（中浦外次）。希望（渋洞万右衛門）。自然の芸術（谷保栄助）。流れ行く文明（木村太郎）。草花栽

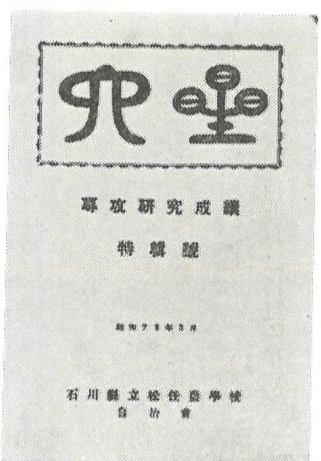


学友会報　昭和２年

培（割出弘雄）
。紀行小品
。吉野から東都（巻田源久）。秋夜（西川修）。落ちるな舟を（岡部義三郎）。夏の演習林生活（三浦一太郎）。演習林生活の思ひ出（中川直温）。夏の演習林の一日（安島外男）。秋暁（西守隆）。小松の大火を見る（渡辺修吉）。晩秋（小西仁兵）。かえり路（橋本龍太）。或る日の開札口（三宅憲吉）
。短歌　。俳句　。詩
。部報　剣道、柔道、相撲、弁論、庭球、水泳、陸上競技部

文芸部　部員は「会誌」（学友会）の編集に助力を尽くしたが、昭和二三年三月に、「六星」が発行された。この誌は、専攻研究成績特集号としている。本校は昭和二二年四月より、農場実習の一翼として各種専攻研究班が設置された。既に一ヶ年各種班員は、不安、恐怖、希望を持つ中に日曜日、夏休み、冬休み、そして毎日寸時を惜しんで始業前に、かつ放課後の時間を利用して研究室へ、研究地へ、日々の黙々たる勇姿、人知れぬ努力、精励ぶり、篤農家にも劣らない研究熱、並々ならぬ苦難の障害に打ち勝って、ここに研究成果が生まれたのである。ここに二八篇の中から主なもののテーマを掲げる。

北陸地方に於ける水田裏作研究の課題　菊池　和雄（教　官）
金沢市山科町窪町及額村に於ける苹果栽培　中田　盛二（果AⅢ）
屑トマトの利用法　谷口　清志（製AⅢ）
手取川上流砂防と石川平野　宮岸　岩夫（土FⅢ）



専攻研究成績特集号「六星」

石川郡御手洗村の土地利用について　　野本　栄之（地Ⅱ甲）
稲田・蓮田養鯉法　　加藤　祇（教　官）

第三節　本校付設教育機関の消長

一　付設教員養成機関

先に見たように、大正七年四月に本校に付設された「石川県立農業教員養成所」は、大正一〇年四月「実業補習学校教員養成所」と改称され、昭和に入ると青年学校教員養成所令の公布とともに、昭和一二年四月「石川県立青年学校教員養成所」となり、昭和一九年四月「石川青年師範学校」として、河北郡津幡町に移転するまでの二六年間、九二名の卒業生を送り出してきた。名称は、種々変更してきたが、いずれの時代にも、勤労青年の教育を第一の目的とし、続いてこれらの青年を包括する青年団、更に社会教育の中心人物を育成する教育機関であった。このような歩みを残した教員養成機関について、次に概観しよう。

青年訓練所

加藤高明内閣は、文政審議会の答申に基づいて、大正一五年四月青年訓練所令、および青年訓練所規程を制定した。それによると、一六歳より二〇歳までの男子を対象とし、軍事教練を中心とする教育機関であった。訓練項目は、修身および公民科、教練、普通学科、職業科であった。これに基づき、石川県では県令第四五号をもって、青年訓練所令施行細則を定めた。この施行細則によって、県下各市町村はいっせいに青年訓練所を設定したが、そのほとんどが、小学校もしくは実業補習学校に併置、もしくは後者

石川郡御手洗村の土地利用について　　野本　栄之（地Ⅱ甲）
稲田・蓮田養鯉法　　加藤　祇（教　官）

第三節　本校付設教育機関の消長

一　付設教員養成機関

先に見たように、大正七年四月に本校に付設された「石川県立農業教員養成所」は、大正一〇年四月「実業補習学校教員養成所」と改称され、昭和に入ると青年学校教員養成所令の公布とともに、昭和一二年四月「石川県立青年学校教員養成所」となり、昭和一九年四月「石川青年師範学校」として、河北郡津幡町に移転するまでの二六年間、九二名の卒業生を送り出してきた。名称は、種々変更してきたが、いずれの時代にも、勤労青年の教育を第一の目的とし、続いてこれらの青年を包括する青年団、更に社会教育の中心人物を育成する教育機関であった。このような歩みを残した教員養成機関について、次に概観しよう。

青年訓練所

加藤高明内閣は、文政審議会の答申に基づいて、大正一五年四月青年訓練所令、および青年訓練所規程を制定した。それによると、一六歳より二〇歳までの男子を対象とし、軍事教練を中心とする教育機関であった。訓練項目は、修身および公民科、教練、普通学科、職業科であった。これに基づき、石川県では県令第四五号をもって、青年訓練所令施行細則を定めた。この施行細則によって、県下各市町村はいっせいに青年訓練所を設定したが、そのほとんどが、小学校もしくは実業補習学校に併置、もしくは後者

を充用している。生徒数は、発足当初からかなりの数を示しているが、これは在学年限の短縮という特典がものをいったのであろう。しかし、この生徒数がすべて訓練所を修了したのではなく、たとえば、昭和五年度では年度内修了者は一、三七六名であり、退所者は二、一七五名と、生徒総数の一七・九%である。

訓練所主事は、小学校長もしくは実業補習学校長で占められていた。指導員も、教練を担当する在郷軍人以外は、小学校教員や実業補習学校教員の兼任であった。訓練項目、学科は、教練以外は実業補習学校のそれと重複していたから、やがて補習学校教師の間から青年教育の統一の声が起こってくるのである。

青年学校

昭和二年七月、全国町村長会会長、全国実業補習学校教員養成所協会常務幹事並びに実業補習教育研究会常任幹事等六名で、内閣総理大臣、文部大臣、陸軍大臣あてに、「青年訓練は実業補習学校の課程において之を行ふを以て適当なり」と建議を行なった。翌三年四月、第四回全国実業補習教育大会においても、「青年教育機関として速かに実業補習学校と青年訓練所との合一を図り、之を義務制とせられたきこと」を関係大臣に請願することが決議された。一方、二年一〇月山形市で開催された全国青年訓練大会

年次別青年訓練所数および生徒数

種類生徒 / 年次	訓練所						生徒		
	総数	公立				私立	総数	公立	私立
		村立小学校ニ併設シ市立ノ単独ニ置ク	補習学校ニ置キ実業学校ニ併セ行フ	設ケサルモノ	補習学校ノ実業学科ニ充用セラルルモノ				
昭和 1	229	37	27	4	161	—	13,002	13,002	—
2	247	36	1	9	200	1	13,798	13,745	53
3	252	36	1	9	205	1	12,766	12,924	42
4	253	35	1	10	205	2	12,120	11,932	188
5	255	34	—	10	207	4	12,150	11,862	288

（昭和2年～5年石川県統計書）

では、「青年訓練所・実業補習学校を別個に存立せしめ其の使命を全ふせしめること」を文部省に答申している。このように、青年教育機関についての意見は対立していたのであるが、満州事変以後、統合の世論が次第に高まり、一〇年四月青年学校令、同規程が公布されることとなった。これに基づき、本県では六月に県令第一五号をもって青年学校令施行細則を定め、訓令第一〇号をもって同実施要旨が示された。農村地帯の多い本県では、青年学校は順調に普及していったが、全国的にみると成績が悪かったため、教育の機会を全青年層にひろげるよう義務制がとられることになり、一四年から実施に移された。

石川県立青年学校教員養成所

実業補習学校から青年学校への移行の大要は、前述した通りであるが、これらの学校に勤務して、勤労青年の教育の任にあたる教師の養成は、補習学校時代では一ヵ年の在学期間の補習学校教員養成所で行われたことは前述の通りである。しかし青年学校令が公布されると、この教育に任ずる教員養成制度も大改革を必要とするに至った。このようにして、昭和一〇年四月一日青年学校教員養成所令が公布され、各府県に設置されることになった。石川県立青年学校教員養成所は、昭和一二年三月一七日石川県令第五二号を以て公布され、四月一日から定員三〇名、修業年限二年で、石川県立松任農学校に併設され、塾舎・講習科の規程を付して設立された。当時の松任農学校五坪茂雄が所長を兼務し、生徒を塾舎に収容し、錬成教育を実施した。

石川県青年学校教員養成所学則

第一章　総　則

第一条　本所ハ青年学校教員養成所令ニ依リ青年学校教員タルヘキ者ヲ錬成スルヲ以テ目的トス

第二条　本所ハ石川県立松任農学校ニ併設ス

第三条　生徒ノ定員ハ三十名トス
第四条　修業年限ハ二年トス
第五条　授業料ハ之ヲ徴収セス

第二章　学年、学期及休業日

第六条　学年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル
第七条　学年ヲ左ノ学期ニ分ツ
第一学期　四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル
第二学期　九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル
第三学期　一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル
第八条　休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ
一　祝日、大祭日及日曜日
二　創立記念日
三　夏季休業　八月ニ於テ十五日
四　冬季休業　十二月二十五日ヨリ翌年一月七日ニ至ル
第九条　成績考査、生徒入所等ノ為学年ノ終始ヲ通シテ十四日以内教授ヲ缺クコトヲ得
第十条　所長ハ知事ノ認可ヲ受ケ臨時休業ヲ為スコトヲ得但シ急施ヲ要スル場合ハ施行後速ニ知事ノ承認ヲ受クヘシ

第三章　学科課程及毎週教授時数

第十一条　学科課程及毎週教授時数ハ別表ニ依ル

第四章　入所、退所及休学

第十二条　入所セシムヘキ生徒ノ員数及入所出願期日等ハ其ノ都度知事之ヲ告示ス
第十三条　入所志願者ハ身体強健、品行方正県内ニ於テ青年学校教員タラントスル志望確実ニシテ左ノ各号ノ一ニ該当スル者トス
一　尋常小学校卒業程度ヲ以テ入学資格トスル修業年限五年以上ノ実業学校又ハ之ト同程度ノ実業学校ヲ卒業シタル者

二　師範学校又ハ中学校ヲ卒業シタル者
三　前各号ニ掲クル者ニ準スヘキ学力アル者

第十四条　入所志願者ハ願書（第一号書式）ニ履歴書（第二号書式）戸籍謄本、最終学年ノ成績証明書及身体検査書ヲ添ヘ所長ニ差出スヘシ

第十五条　入所ヲ許可スヘキ者ハ身体検査、人物考査及学科試験ニ依リ所長之ヲ決定ス
試験ノ期日及科目ハ知事之ヲ告示ス

第十六条　入所ヲ許可セラレタル者ハ入所ノ日ヨリ七日以内ニ二名ノ保証人ヲ定メ連書ノ上誓約書（第三号書式）ヲ所長ニ差出スヘシ
保証人ハ石川県内ニ居住シ独立ノ生計ヲ立ツル者ニシテ内一名ハ養成所所在地又ハ其ノ附近ニ居住スル者タルヘシ
保証人ハ其ノ住所又ハ氏名ヲ変更シタル時ハ其ノ都度所長ニ届出ツヘシ
所長ニ於テ必要アリト認メタルトキハ保証人ヲ変更セシムルコトアルヘシ

第十七条　所長ニ於テ疾病其ノ他ノ事由ニ因リ卒業ノ見込ナシト認メタル者ニハ退所ヲ命スルコトヲ得

第十八条　生徒ハ自己ノ便宜ニ因リ退所スルコトヲ得ス但シ已ムヲ得サル事由ニ因リ所長ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限リニアラス

第十九条　所長ニ於テ前二条ニ依リ生徒ヲ退所セシメタルトキハ事由ヲ具シ知事ニ開申スヘシ

第二十条　所長ハ疾病等ノ為三月以上修学スルコト能ハスト認メタル生徒ニ対シ期間ヲ定メ休学ヲ命スルコトヲ得
休学ヲ命シタルトキハ事由ヲ具シ知事ニ開申スヘシ

第五章　課程ノ修了及卒業

第二十一条　学年ノ課程ノ修了及全課程ノ卒業ノ認定ハ平素ノ学業成績ヲ考査シテ之ヲ定ム但シ所長ニ於テ必要ト認ムルトキハ試験ヲ行ウコトヲ得
試験及成績考査ニ関スル細則ハ所長之ヲ定メ知事ニ開申スヘシ

第二十二条　所長ハ所定ノ課程ヲ卒ヘタリト認メタル者ニハ卒業証書（第四号書式）ヲ授与スヘシ

第六章　褒賞及懲戒

第二十三条　所長ハ生徒中学業、操行、体位優秀ナル者又ハ其ノ進歩顕著ナル者ヲ褒賞スルコトヲ得

第二十四条　所長ハ生徒ニ対シ教育上必要ト認メタルトキハ左ノ懲戒ヲ加フルコト得

一　戒飭

二　謹慎

三　放所

懲戒ヲ加ヘタルトキハ事由ヲ具シ知事ニ開申スヘシ

第七章　服務及償還義務

第二十五条　卒業者ハ卒業証書受得ノ日ヨリ一年間本県ニ於テ青年学校教員ノ職ニ従事スルノ義務ヲ有ス

特別ノ事由アルトキハ前項ノ服務義務ノ履行ヲ猶予シ又ハ免除スルコトアルヘシ

第二十六条　左ノ各号ノ一ニ該当スル者ニハ授業費ヲ償還セシム但シ情状ニ依リ其ノ全部又ハ一部ノ償還ヲ免除スルコトアルヘシ

一　第二十四条ニ依リ放所ニ処セラレタル者

二　第十七条ニ依リ退所ヲ命セラレタル者

三　第十八条ニ依リ退所ヲ許可セラレタル者

四　前条ノ服務義務ヲ尽ササル者及自己ノ便宜ニ依リ服務義務ヲ免除セラレタル者

五　服務義務期間内ニ於テ懲戒免職ニ処セラレタル者

授業費償還ノ金額及期日ハ知事之ヲ指定ス

第八章　塾舎

第二十七条　生徒ハ総テ塾舎ニ入ルモノトス但シ所長ニ於テ必要ト認メタルトキハ知事ノ指揮ヲ受ケ期間ヲ定メ通学ヲ命スルコトヲ得

第九章　講習科

第二十八条　青年学校ノ男子教員其ノ他青年教育ニ従事スル男子ノ為ニ講習科ヲ開設スルコトアルヘシ

講習科ニ関スル要項ハ開設ノ都度之ヲ告示ス

第十章　補　則

第二十九条　本則施行ニ関シ必要ナル細則ハ所長之ヲ定メ知事ニ開申スヘシ

附　則

第三十条　本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三十一条　大正七年二月十六日石川県令第二十号石川県立青年学校教員養成所規則ハ之ヲ廃止ス

（別表）

石川県立青年学校教員養成所学科課程

学科目＼学年	第一学年 課程	第一学年 毎週教授時数 前期	第一学年 毎週教授時数 後期	第二学年 課程	第二学年 毎週教授時数 前期	第二学年 毎週教授時数 後期
修身及公民	道徳ノ要領並ニ法制上、経済上及社会上ノ事項	三	三	同上	三	二
教育	教育学、心理学	三	三	教授法、教育史、社会教育、青年学校経営	三	二
国語、漢文	講読、作文	四	三	同上	四	三
国史	国史	一	一	同上　郷土史	一	一
地理	既修知識ノ整理補充	一	一	同上　郷土地理	一	一
数学	応用数学	二	一	同上	一	一
音楽	歌曲、楽典	一	一	同上	一	一
農業経済		一	一	農業経済 農業政策	四	四
作物	普通作物	一	二	工芸作物 育種学	一	三

職業科									
園芸	蔬菜	一	二	果樹、花卉	一	二			
農芸化学	土壌、肥料	二	二	植物生理	一	一			
病虫害	病理、害虫	一	二	同上	一	二			
畜産、水産	畜産	一	二	畜産、水産	一	二			
養蚕	栽桑、飼育	一	二	蚕体生理病理	一	二			
農産加工	農産加工各論	一	二	農産加工通論	一	一			
林業	林学大意	一	一	同上	一	一			
農業土木	測量	一	一	土木	一	一			
工作		一	一	木工	一	二			
体操	体操、武道、教練	四	四	同上	四	四			
合計		二四	三三		二四	三四			
実験実習	農学実験、農業実習	五回	三回	同上	五回	三回			

備考　一、前期ハ四月一日ヨリ十月三十一日迄後期ハ、十一月一日ヨリ翌年三月三十一日迄トス
二、実験実習ニ関シテハ本表時数外ニ延長シ又必要ニ応シ之ヲ課スルコトアルヘシ

（第一号書式）（用紙美濃紙）

入所願

私儀本県青年学校教員志望ニ付御所ニ入所致度候間御許可相成度別紙履歴書、戸籍謄本、成績証明書、身体検査書相添へ此段御願候也

年　月　日

本籍
住所
本人　氏　　名印

本籍
住所
親権者又ハ後見人　氏　　名印

石川県立青年学校教員養成所長氏名殿

（第二号書式）（用紙美濃紙）

履歴書

氏名
生年月日

一　学業
　修業ノ場所　学科　年月日等
一　免許状
　教員免許状ノ種類　年月日等
一　業務
　職名　年月日等
一　兵役
　服役ニ関スル事項
一　賞罰
　賞罰ノ事由　年月日等

右之通候也

年　月　日

右氏　名印

（第三書式）

誓約書

印紙

私儀在所中ハ所定ノ御規則等固ク相守リ且卒業後ハ成規ノ服務義務ヲ完了可致尚御規定ニ依リ授業費償還ヲ命セラレタルトキハ保証人ト連帯ノ上其ノ責協ヲ完済可致候依テ誓約書差出候也

年　月　日

本籍
住所
本人氏　名印
生年月日

本籍
住所
保証人氏　名印
生年月日

本籍
住所
保証人氏　名印
生年月日

石川県立青年学校教員養成所長氏名殿

（第四号書式）

卒業証書

所印

第　号

右之者本所ノ課程ヲ卒業セリ仍テ茲ニ之ヲ証ス

年　月　日

石川県立青年学校教員養成所長位勲爵氏名㊞

氏名

生年月日

教員養成所入学・卒業者数一覧表

| 回次 | 所長名 | 入学 | 卒業 | 入学者 | 卒業者 | 修業年限 | 名称 | 出身学校別 | | |

臨時養成科

青年学校の数は急激に増し、その専任教員の需要も増加したために、青年学校教員養成所の卒業者だけではその必要を満たすことが出来なくなった。そこで昭和一三年、修業年限一か年、定員二五名、小学校本科正教員の免許状を有する者を入学資格とする臨時養成所が併設された。第一回は昭

| 回次 | 所長名 | 入学 | 卒業 | 入学者 | 卒業者 | 修業年限 | 名称 | 出身学校別 | | |

和一三年六月一日、二一名の入学者を以って開所されたが、これは開講準備のために二ヶ月遅れたもので、翌第二回以降は、養成所本科生と同様に四月当初に入学、第一日から直ちに農場実習が課せられた。第一回の生徒担任者は、広島武雄で、在任一年半で女子師範学校に転任され、その後任として山本敬三が着任し、臨時養成所の廃止まで担任した。

この頃の入学者はいずれも青年学校教育に希望をかけて入学した人々であり、小学校教育に数ヶ年の経験を有する彼らは、農業、特に農場実習には、本科の生徒にも劣らぬ熱心さで従事した。しかし戦局が拡大するにつれて、入所希望者が減少し、生徒の中から応召者が続出するなどの事情が加わり、昭和一八年三月をもって、臨時養成所は閉鎖されることとなった。発足以来わずか五ヶ年、卒業生八〇名とはいいながら、この卒業生達は現在、県内の小学校・中学校・高等学校もしくは社会教育の各分野において活躍を続けているのである。

臨時養成所入学・卒業者数一覧

回次	所長名	入学修業年月日 入学	卒業	入学修業者数 入学者	卒業者	修業年限	出身学校別 金沢	七尾	小松	江沼	能美	石川	河北	羽咋	鹿島	鳳至	珠洲	備考
一	五坪　茂雄	昭一三、六、一	昭一四、三、一六	二一	二一	一ヶ年			1		1	2	3	1		1	2	
二	〃	一、四、四	五、三、一六	二四	二四	〃	1	2		1	3	4	4	5	3	1		
三	〃	五、四、四	六、三、一六	一三	一三	〃	2	1	3	4	4	5	4	3	2	1	1	
四	〃	六、四、四	七、三、一四	一四	一四	〃	1	3	2	3	4	4	4	3	2	1	1	
五	〃	七、四、一	八、三、一六	八	八	〃	2	1	1	1	2	1	1	1	1	2	1	

（「師範七十年史」「石川県史」による）

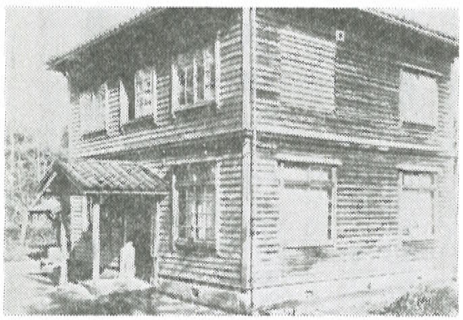
二　徳田専修科

昭和初期の経済恐慌は特に農村に大きな問題を生み、その対策が種々と論議された中で、特に、農業教育の姿勢の根本改革と、農村の中堅農業者養成を目的とする施設の設置が要望された。このような時代の要望をになって、松任農学校徳田専修科が、全寮一年制として、昭和九年四月、入学生一七名で、鹿島郡徳田村旧石川県営種畜場跡で発足した。以来、昭和一〇年農業教育訓練道場、一一年満蒙開拓訓練所、あるいは傷病兵再教育所を併設しながら、昭和一五年三月、三五名の卒業生を送り出してその任を終え、新しく石川県立七尾農学校として脱皮するまでの小史をみよう。

開設前史

中野邦一知事は、昭和五年九月二日、石川県庁に県下の篤農家三〇名を招集して、意見交換の懇談会を開催した。その模様は「篤農家懇談会要録」に詳しいが、その中で仲島豊吉は「義を先にして利を後にせよ。国土を荒していづこに農業の大義あらん。国士を気取れ。原野を開け。生産を高めよ。和倉から徳田に至る数千町歩の原野が兎の道場となっている。失敗の廃園が公私ともにある。農業の根本精神を忘却していづこに農道ありやである……」と述べているが、これは徳田種畜場跡をさし、能登に農業後継者育成機関のない事を嘆じた声であった。中野知事は、このような人の意見を県政に反映しようと考えられたが年末の県会は争乱議会で新しい事業予算は望めず、翌六年には同知事が転出すると共にこの問題は一時火を消さざるを得なくなった。しかし、全く火が消えてしまったものではなく、底流として根強く存在していた。時の流れは、農村の疲弊を深め、五・一五事件を契機として、農村の青少年問題が国会の場でも取りあげられるようになった。昭和八年帝国議会の貴族院で、農業教育についての質問に鳩山一郎文部大臣は、石川県立松任農学校の

教育振りを例にあげ、期して待つものが大きいと答えた。これが新聞に報道されると、全国から視察者が松任農学校に訪れたが、内実は新みのないものであった。そこで五坪校長は、徳田村の県有地を利用して特別教育を施す案を再度とりあげ、当時社会事業などに篤志を寄付していた粟ヶ崎村の木谷吉次郎より二、〇〇〇円の寄付を懇請した。（米一石一八円の時代である。）五坪校長は、これによって県側を動かし議会も同意し、徳田村に松任農学校専修科設置案が作られたのである。



専修科教棟

昭和五年以来、満四ヶ年を費し念願とした徳田専修科は、漸く胎動期を経て、時代の要請に応じる新しい教育の場として、諸々の期待を負って誕生したのである。

学校規模の変遷

第一期生が入学した昭和九年の専修科は、何もない所から出発した。建物は四棟あったが、それは県営種畜場時代のもので粟津町へ移転して以来一〇数年を経ていた。その場長官舎は事務所兼職員室にあてられ、一棟は本校林科の生徒が、演習林の手入れの実習に来校した時の合宿所であり、先の蹄鉄場は炊事場とし、二階建ての棟は寄宿舎と教室にあてられた。農場は田一枚、畠一坪もない状態であったから、近隣の松林を開懇し地面から作らねばならなかった。これが一貫して有畜農業という方向を決めた大きな理由の一つである。このようにして第一農場（現運動場）、第二農場（現サイロ附近）が開拓され、畑作蔬菜園、果樹園として植樹などの実習が行なわれるようになった。しかし、荒れた山の中に開かれたものであるから、たとえば、夕方になると畑の道にはヨトウ虫が集まり、離れてみるとまるで道が動いて

いるようにみえたり、蝮が多いため朝晩の草刈りはひかえねばならない状態であった。家畜は、馬一頭・乳牛三頭・子牛一頭・豚二頭の他にアンゴラ兎や七面鳥などが徐々に置かれたが、翌年には、牛一四頭・豚三〇頭・鶏三〇〇羽と増え、収納庫・畜舎・鶏舎が建てられた。鶏舎は生徒の販売実習等による利益で建てたものであり、畜舎は徳田村からの寄付であった。当時の水口徳田村村長は専修科に対して非常に理解があり、学校も地域と深く密着した存在であった。たとえば、雪の朝、ソリの前にトタンをつけて朝鮮牛に引かせ、駅前から小学校までの道をラッセルしたり、徳田村の体育大会には教員・生徒も参加し、学校から西瓜を荷車に二台寄贈して楽しんでいる（昭和一〇年）。また、牛乳殺菌室・加工室も整備され、一一年には第二宿舎が建てられた。これは国費によるもので、「農民道場を各県に置く」という方針から生れたものであるが、満蒙開拓訓練所生（先遣隊）の専用宿舎にあてられた。第三農場（道の横）が先遣隊の訓練農場として使われた。又、文部省より一、二〇〇円の補助を得て畜産加工の設備が整った。一二年には、米作が飯田教諭によって指導されるようになり、名実ともに「自給自足」ができるようになった。これには、昭和一〇年六月四日、一一年一〇月一八日と二度にわたって来校した内原訓練所長加藤完治氏の影響は見逃がせないようである。

加藤完治　明治一七年一月二二日、東京市本所区中の郷に生まれる。明治三八年第四高等学校卒業。明治四四年東京帝国大学農学部卒業。同年帝国農会嘱託、翌四五年内務省雇となる。愛知県立安城農林学校教諭、大正四年、山形県自治講習所長、同一四年日本国民高等学校長に就任。昭和二年、青年教育に専念し、同一〇年六月四日に石川県立松任農学校専修科を訪れる。昭和一三年、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所長、満蒙開拓者送出の推進役を勤めた。農本主義の権化であり、第一次世界大戦後における農村農民対策と、第二次世界大戦期における満蒙開拓のイデオローグとして、重要な役割を果たした。

同年一一月、炊事場の裏に「日輪校舎」が建てられ武道・体育・礼法と精神訓練にあてられた事からも推察す

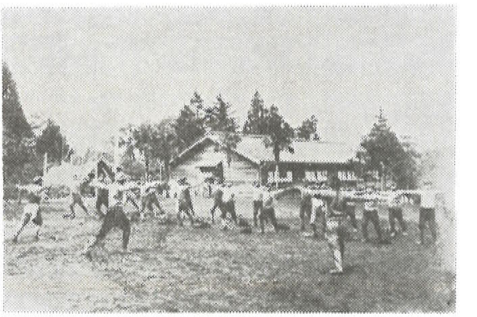
ることができる。一四年には、一期生の植樹した果樹園で、梨・栗・桃が収穫できるようになっていた。

入学資格は高等小学校卒業程度であったが、たとえば四期生をみると小松商業・羽咋中学・飯田中学などの卒業生もおり、一二歳から二〇歳の青年が入学していたのである。ただ、村長の推薦が必要であった。これは「健全なる農家」「村の中堅を育てる」ということで、出身地域では非常に期待しており、たとえば柳田村では生徒一人に対して月五円の奨学資金を給付しており、九年秋には村会議員団が慰問をかねて視察に訪れている。これは、当時の産業協同組合の普及による人材確保でもあったろう。卒業式は松任まで来て寄宿舎に泊り、本校の生徒と同時に行なわれた。（金石の相撲大会の時も、前日に徳田を出て、寄宿舎に泊り、本校生と共に行軍して、応援に参加している。）

修業年限は一年制であるため、年度頭初は農業にとって重要な時期であるにもかかわらず、新入生に対して最初から教えこまねばならないという支障がおこりはじめたため、九月入学、翌年八月卒業という形のものが、昭和一二年より定員四名で募集され、更に修了生のうちより三、四名が研究生として残り、つなぎの役割をなした。なお研究生には月額一五円が支給されている。

教育内容　専修科の教育目標は、先に述べた仲島豊吉（鹿島郡高階村蔵出農場主）の言葉にみられる「国士を気取れ、原野を開け、生産を高めよ」という一語に尽きている。すなわち、完全に晴耕雨読で、学科は雨天または冬季に行なわれ、晴天には必ず実習を行ない、園芸を主とした有畜農業と加工実習・販売実習である。実践即応、「体得」が教授内容・方法であり、「質素」が旨とされた。当時の教科目、教授状況は次の通りである。

修身公民　国史・国語・珠算・理科



朝の体操

園芸（果樹・蔬菜・花き）作物・加工・土肥
畜産　病虫・栄養
経済（農村経営・農村経済）
農業実習
教練

実習は山村の開拓と畑作が主である。径二〇センチメートルの松を切り、根を六台の抜根機で除去した。本校の林科の生徒達も一名の引率教諭の指導で手伝ったりしたが、これは長田健教諭からである。農産物が売れない時代でもあったので、加工作物を作り、農産加工・畜産加工を主とした。その製品としては、豆腐・沢庵・福神漬・味噌・醤油・じゅんさいのびん詰・ようかん・万頭・アメ・ブドーシロップ・梅シロップなどである。これらは寄宿舎でも使われたが、生徒の手で和倉あたりまで販売された。じゅんさいのびん詰は宮市大丸に出品され好評を得た。畜産加工では、カルピス・牛乳・ソーセージなどである。カルピスは、フラワーという名の牛乳とビタミンの二語をあわせて「フラミン」と呼ばれた。牛乳は徳田村の織物会社が大得意先であったが、市価の半値であったため一般家庭からの注文もあり、当番を決めて早朝に配達し、集金がなされた。醤油は昭和一二年に税金がかからなくなってから作られた。そのために農場で裏作の小麦が作られたが、これも能登地区で最初であった。

五坪校長は週に二回来校され、時々訓話をされたが、決って「尊徳夜話」か、水田裏作として「玉ねぎ」に成功した石川郡山島村の経営についてであった。実習も「率先垂範」で、たとえば軍馬の敷藁・馬糞を手でしばっ

て荷車に積まれるので、生徒はもちろん、教師も一体となって、名実ともに二四時間の教育がなされた。

教練は、徳田村青年学校の査閲と同時にうけている。これは最初のうちは行なわれておらず、かわって「夜行軍」があった。二〇時に学校を出て二四時に帰校するが、その間は口をきいてはならず黙々と歩くだけであった。行程は六里で、二つのコースが決まっていた。

各種講習会

昭和一〇年五月二一日、生駒高常知事は、徳田専修科に「石川県農業教育訓練道場」を併置し、県下農村教育者を順次再教育する場として指定した。これによって、二泊三日から一週間の日程で、各種団体の指導者訓練に利用されたが、生活は専修科生と区別なく全く同じように実施された。宿泊所は、本校林科の合宿所があてられ「合同合宿所」と称された。利用された主な講習会は、県下小学校次席訓導講習会・県下青年団幹部講習会・県下婦人会幹部講習会等である。これは鶴来町字八幡に「紀元二千六百年記念石川県修練道場白山塾」が建設されるまで続けられた。

次に講習会の例として、昭和一一年七月一三日より、一八日まで行なわれた「能登四郡中堅青年講習会」についてみよう。これは昭和一一年度経済更生指定村の経済更生を側面よりその促進を計るのが本講習の眼目であった。講習科目及び講師は次の通りである。

帝国憲法大意	社会教育主事　吉田他吉
立憲政治と選挙	同右
地方自治と協同生活	同右
農村経済更生計画と産業組合	産業組合課長　守重剛
農村経済更生の樹立実行に就て	地方農林主事　青野敏夫

能登地方の農業経営改善案　　松任農学校長　五坪茂雄
経済更生と農民精神　　松任農学校長　五坪茂雄
実習及説明
蔬菜果樹実習　　松任農学校長　五坪茂雄
畜産実習　　同　教諭　山崎賢一
病虫害実習　　同　同　山本功
一般作業実習　　同　同　田中米夫

講習参加者は、終始真面目によく専修科生徒と起居動作をともにし、学科の聴講に実習作業に大いに努力した様子は、主催者である県学務部の記録にみられる。次に参加講習員の感想手記を「うちおこす会報」第九号、一〇号から抜粋しよう。

幹部青年講習会に就ての愚感想　　羽咋郡加茂村　井上正太郎

選ばれし責任を感じつつ七月十三日午前九時入所した。予期した事とは云へ建物、調度等、質素ながら総てに細心の注意が払はれ、良く生かして使はれていて本校の指導精神の表はれている事に敬服する。

しかして専修科設立の目的、指導、経営方針を承り、校長先生始め諸先生が真先に高原の日が照り返る農場に立たれる事は、他に見なきところ、生徒の真剣さも、さこそとうなづかれる。真の教育のむづかしきことを思ふ時、心から感謝の念を禁じ得ない。

こうした環境の元へ我々が加へられ、諸先生には慈愛の溢れる御指導を賜り生徒諸君の厚意によりて入所期日僅か六日間の短きとは云へ其の感銘は我々生涯忘れ得ぬものである。会期中県学務部長殿・社会教育主事殿・農林主事殿・産業組合課長殿の有益なる講話を拝聴し、其上へ五坪先生より、適切なる能登の農業経営改善に関し又農政問題、農民道に関し御教示を賜りて流汗鍛錬の実際を如実に体験さして頂いた事は真に何ものにもかへがたきものである。

守氏の資本主義的農場と、労力資本で自給自足に立つ中島農場は其の長短、特質相当面白く、わけて中島氏に接しては唯々体験と研究の尊きを知り其れより生れし精神生活、即農業労働其のものを楽しむ風格に対しては、自ら頭が下る見識がある。国家の農村施設を思ひ農業の真当の精神を知る時、勇往邁進、農民相互扶助の実を挙げて特に徳義を重んじて日進月歩の新時代に善処を誓ふものである。新緑の高原に高く揚げられし国旗を仰げば我国歴史の尊厳と有難さを思ひ何としても我々の重大なる責任を果し以て再び農村救済なんと云ふ忌はしき言葉の絶無を期して君国に報ずる信念である。

終りに我々のため御尽瘁下されし方々に心からなる感謝を捧げて此の稿を了る。

鹿島郡久江村字久江　今井為二

去る十三日幹部青年講習会と云ふドエライ催しに際し、幹部たるドエライ肩書を乗て、私は一箇の平凡な久江村の青年の一員として又我が久江村青年団員中、薄・北木・大湯の三君の修養にいそしみつつある此の専修科、此の農民精神涵養道場に或る種の親しみを感じつつ参会致しました。左に少し感じた事を草したいと思ひます。

一　専修科職員方及び生徒達に就いて

(イ)　校長先生は先きに村の村田青年学校教員、及び井上村長殿より御話を受けていた通り真剣に先頭に立って真黒に働かれるのに驚きました。今迄幾多校長先生（小学校）に会ったか知りませんが、五坪先生の様な方は初めてです。専修科の生徒の幸せであり、先生より生徒に流るる一脈のガッチリした所のものがあると思ひました。

(ロ)　山崎・其の他の諸先生方は親切にして、何者にも恐れず唯土と作物と生徒との三つが一致したガッチリした一家のオヤヂの様に感じました。

(ハ)　生徒の真面目な態度に驚きました。以前此の地に来て遊んでより数年にして、あの熊笹の茂った荒れはてた広い地が、然も年若い小学校上りの生徒の手により開墾され結構な畠と変ったのに驚きました。協同の力の偉大なのに今さら驚き私の村の荒地を思ひ出し一種の感に打たれました。特に感じたのは私が草刈当番の日でした。私と一緒の当番の生徒。たしか山崎甲吉君とか申しましたが、あの幼ない生徒が自己に課せられた一定の仕事に対し真面目にそして責任観念の強いのに驚きました。私は幼ない生徒の事とて、又私の其の生徒の年頃の事を思ひ出し（私は父親に死別れ、東京に出て淋しかった事を思ひ出して）可愛想に思ったので、私が一生懸命に刈ってやるから休んではと言ふと『さう云ふ事は出来ない私には私に与へられた分量がありますから刈ります』と言ふて一生懸命に働くのでした。亦明朝早く刈るのは嫌だらうから、今日刈らうではないかと言ふと『其の日其の日で切りつけるのです』と言ふのです。実に感心致しました。明朝も約束の通り三時三十分に起こしに来て呉れました。其の幼い生徒が親元より離れ淋しさも考へず一路仕事に励み然も責任観念に強く、其の日の仕事は其の日に行ない後ゆづりのしない精神に驚き感心しました。

これは一つの感じた一例に過ぎませんが、総てが此の通りの様に思ひます。こうした所に一年起居致し修養して郷土に帰り、互に手を取り進まれる今後がたのもしく感じて居ります。唯一つ悪いと思って居りますのは、農具の手入に如何かと思ひました、特に鎌の切れないのに困りました。

二　講習会に就いて

(イ)　講師先生の講義が今迄の他の講習会の講師方よりも真剣でユーモアたっぷりな話で、眠けを催さず頭にしみこみました。

(ロ)　現代農業方針の二つの異なった進んだ農場を見学して非常に得る所がありました。企業的の資本を投じた守茶園。特に主婦さんの奮闘に驚きました。自給自足天恩に感謝し、勤労本位の中島豊吉老翁の勤労振りと、北海さんの奮闘振りを見て今更ら驚きました。

(ロ)　元気な青年の講習会の事とて全力を出して働く様な仕事（朝早くから開墾を全期間同一区域内に仕事）をさせ作付させては如何かと思ひます。講習員の態度は遊び半分の様に感じました。

(ハ)　私は時間観念の乏しい放縦な生活をしていた事とて、二日程は規律的時間に対して困りました。

三　結び　六日の期間は短かいが然し今日迄、団の幾多の幹部講習会に出席しましたが、オセジでもありません、此の講習

会程得る所がありませんでした。直接行なって居る農業関係の事であったせいもあるのでせう。今後の私を見て頂きたいと率直に申すだけの決心がつき、腹が定まりました。

(イ)　私の今迄の農業経営　水稲一町四段、畑一反、養豚二頭、藁加工(建莚)養鶏成鶏五羽雛十一羽、日雇稼等の単純な経営でした。家族（母、私と二人の労働、外に中学校在学の弟と、小学校在学の妹の四人です）此の機を一区転として、今後は水稲は従前通り、畑を五反程にし、養豚二頭藁加工、養鶏は従前通りにし日雇を止め、畑作と養鯉を行ないたいと思ひます。外に山羊を飼育し家族保健に充てたいと思ひます。計画より実行ですから今後を見て下さい。私は大農にあらず小農にあらず無理せず急がず家族の保健と弟妹の希望を果さすべく後の心配なく伸び行く亡父様に変り尽したい決心です。

色々御世話になり厚く御礼申します。

感　想

珠洲郡木郎村　山森　実

只今六日間の講習を願て実際はづかしく思うので有る。僕は入舎した時は兎角農事一般の知識及び技術を穫得し、村の青年団に伝達すべき事を最大目的として居たのである。

然かし入舎したる其の日から草刈と言ひ、或は薪拾と言ひ僕等はすでに経験した仕事なので、僕としては全くまとにはづれてしまった訳である。いく度か不平の言をもらした事も有った。

たしかに第二日目の午後の実習開始の時だった。整列後五坪校長先生に今回の講習の真の目的の説明をいただいて今迄の心得違いに気づかざるを得なかったのである。其の後は只だ自己に与へられた仕事に最善を尽くすの意味で実習に応じた。したがって日の立つにつれて自己の目的は真の勤労になれせしめる外に何物も無い事に自覚する様になった。是れすなわち徳田専修科風に感化されたのであって諸先生の熱心なる教導の賜と唯々感謝して退舎する次第である。

鹿島郡中乃島村　半田繁男

今更ながら驚くのは生徒の規律正しい事です。そしてその意気です。この意気と規律を以ってしたなら、如何に農村非常時なりと言へども遠からん将来には打開出来るでせう。我等の村からもかかる優良な学校へ生徒を一人送りたいものだとも

考へたものです。それにしても入学当時の感じは先生の喧しいのには一服しました。それも一日と経ち過ぎ行く中に何だか懐しく去るが嫌になった（？）様に感じました。

それにしても校長先生の熱意、各先生の熱心、我等はあの熱を以って農業に当り諸業につくべきだ。そうも感じました。各講師のお話には吾人の胸は躍ったものです。仲島先生の農民精神も面白く感じました。そして我等も村へ返ったら皆様の万分の一でもやって見たいと思ひました。実習も良いですが実際の学習と言ふと誤りがあるかも存じませんが、農業に就いての授業が無かったのは、なんだか不足を感じました。一週間の長い間講習なんかに行って金を使って果して得るところがあるだろうか、仕事も後れて居るのにと言ふ様な気持ちで来たんですが、本当に得るところがあったと強く感じたものです。

感想録

珠洲郡木郎村上　元谷甚平

我等は今度村当局より選ばれ、此の徳田専修科の講習会にのぞむ事の出来た事は嬉しくもあり、又重大なる任務でもある様に思ふのであります。

今や僕等の農村は経済更生指定村だけあって良く考へて見ると実に哀れな有様であります。講習会にのぞみ校長先生各講師諸先生の御話により、痛切に考がへるべき事の多いのに驚きました。現今の農村青年、其して僕等までも繁華なる都会を思ひ少数の成功者をうらましく思ひ、家で土にまみれ、肥料をかつぎ黒くなって働く僕等はなさけなく、都会を度々あこがれました。しかし今ここに偉大なる或る物を握る事の出来た事は今後の務にたづさはる事のどんに楽しく、嬉しく、喜びに包まれる両親の顔をみて農務精進出来る事と思ふのであります。其して此の一週間の講習中痛切に感じ、其して楽しく家へ帰って働く事の出来るのは専修科生徒がモクモクと働く有様を見、年若くして此の公けの如き仕事を、自分の物として働く。我らは永らく農業に従事して居ながら、なにら考へて居なかったが今初めて勤労の有難さをシミジミ感じ、感謝すべき我等の農、前途は明るくなって参りました。

雑感

珠洲郡浦上村　平岡一孝

経済更生講習会、私共は何か金の節約か、金的に何か農村が豊かになり、生活しやすく成る様にする。其の目的をモット

ーとしてやる講習会とのみ思ひ、何だつまらなぬ講習だと足重く徳田専修科に第一歩を踏込んだ次第です。而るにずらりと並んだ農園（第一開墾畑）に目を通じた時の我々の第一印象はそれはそれは私共には一時は口が開かなかったのです。

五町歩の開墾畑を廻った時生徒の汗の結晶の偉大さ、先生の指導の御苦労、よくこれまでに漕ぎつけた努力、そして今斯くどんどん収獲して手に握ぎる金、これこそこれこそ涙を以て感謝して見つめた事だった。私共は実習に農場の一角に立った時こんな事が脳裡深くわいて来るのです。

今此の六日間講習を振り返って考へて見るに、此の徳田専修科のやり方、即校長先生の農村更生の御主旨と私共の農村を比較して見まするに、私共の地方の山地は穴熊の住む様な急斜、耕作出来る様な所はほとんどなく、先祖開墾した其の畑も斜面の為土方から「がべ」が出て山に返ってしまふのです。此の様な状態で私共の地方は畑の方より大多数造林をやっております。理想的な開墾なんて到底出来ません。然れ共今度の講習の主旨なる「農民精神、精神更生流汗鍛錬」地変は如何に悪く共、土地が悪く共、此の主旨にそふ様にやる事はいくらでもあるのです。そして此の経済更生に充分満足出来る様鍬を取って野に立つ決心です。

我が浦上村よりも毎年一・二名づつの講生徒を此の農園に送って真の農道精神を会得せしめたいものです。尚方向は違ふが私の平常の念願は農村は「入るを計って出ずるを制す」の通り先づ宗教的方面よりの因習はもとよりあらゆる方面よりの悪習の打破改革が第一の目的ではないかと思ひます。そういって真の宗教が解っているのではありません。

中島文吉殿を始め本専修科生の能登半島開発の真剣さに唯々感激感謝して私共も出来得る限りの汗と力で努力することを誓って此の雑感を止めます。

うちおこす会と会報

昭和九年九月二六日、徳田小学校へ山崎延吉が来校し、「文明は金である。そのために金をもうけよ。農業はもうかるのである」という主旨で講演された。これを契機として、「もうかる農業」が模索され、有畜農業研究会が、職員・生徒・修了生・近郷有志を会員として昭和一〇年一一月発足した。翌一二月には編集兼発行人山本功によって会報が発刊された。次はこの創刊号刊頭を飾る五坪校長の言葉を引用してみよう。



五坪校長の揮毫による題号

（前略）事をなすには何時も新らしい努力がいるのだ、苦しいことは何時でも誰でも同じだ、只其苦痛艱難に堪へる精神力が鍛練出来ているか否かによって事の成否が別れるのである。

吾々が過去一ケ年専修科に於て黙々として朝に星を頂き夕に月を踏んで努力を続けて来た、今も続けつつある。何の為だ！　皆この精神力の鍛練なのだ、口先計りの青年、何一つ是と云ふ仕事の出来ない青年、そんな青年は今の日本には一人もいらんのだ、農村の経済更生、農村文化の建設、そんな青年の生やさしさで出来ることではないのだ。

吾等は世界に誇る日本の青年だ、不屈不撓の進取敢為、勇往邁進、飽迄初一念を徹すのだ、其為毎日努力を続け何時も新たに打起しつつあるのだ、而も協力の偉大さを知っているからこそこの会を打起すのだ、憂国の青年、真実に生きんとする青年よ来り結べ、専修科に関係するとせざるとを問はず、而して共に進み研究し共に語らうではないか。

これによって同研究会は「うちおこす会」と名づけられ、五坪校長の揮毫による題号の「うちおこす会報」が定期的に発刊され専修科の幕を閉じるまで続いた。内容は、会員相互の研修のためのものや研究発表で、農事相談・経営相談等に答え指導するという専門的なものである。

第四節　戦争終結と学校

一　戦時教育の廃止

終戦時

昭和二〇年五月、戦局の敗色が濃厚になり、本土決戦の声がようやく高くなってくるとともに「戦時教育令」「同施行規則」が制定され、学徒の「勉学停止」が決まった。

・決戦教育要綱に基き、国民学校初等科を除いて、学校における授業は四月一日より一年間停止、学徒を決戦業務に総動員することになった。（四月十四日・公報）

全校生徒を食糧増産、防空強化に動員し、勤労一本に徹せしめるという最終段階に到達し、ここに学校教育はくずれていった。これから、「学校毎に教職員と学徒で学徒隊を組織し、地域毎に学徒隊の連合隊を組織すること、また出動した職場毎に学徒隊を編成すること」（「朝日年鑑」）になり、本校生徒の中にも職場を変ったものが多く出た。

第三次学徒動員は、学徒義勇隊の編成などの準備期間一ヶ月は一四日を以って見了した。（五月十四日・北国毎日新聞）

県では交通線が遮断されても、勤労学徒が工場に通勤し得るよう、自宅の近くの工場に出勤している学校に教育依託をすることにしたが、その数は八百名に及んでいる。（五月二八日・北国毎日新聞）

空襲情勢の緊迫化により、県では金沢・小松・七尾の三市における旧町内全国民学校の授業停止を発令した。（七月二一日・北国毎日新聞）

このような激しい混乱のうちに八月一四日、日本政府がポツダム宣言を受諾し、八月一五日終戦日を迎えた。

終戦の詔勅は、それぞれの動員先の職場で聞いた者もいようし、また学校で聞いた者もいるだろう。どの生徒も正確な戦局に対する情報を知らされず、いわゆる皇国不敗を教えこまれていただけに半信半疑であった。しかし、その疑いの気持は著しい虚脱感へと移っていった。本校へ七月二二日から駐とんしていた二一七六九部隊・追撃砲隊第一五大隊は八月一五日の敗戦に伴い、連隊残務整理班五〇余名を残して、同月二七日兵員は除隊した。

終戦により新しい教育体制が確立されるまでの日本の教育は、教育民主化の至上命令のもとに、どのように歩んだのであろうか。日本の全面降服によって教育の面では、これまでの戦時教育の体制と思想とを急速に切りかえることが、まず必要であった。文部省は、八月一六日「学校及び職場で、大東亜戦争終結に伴う詔書奉読式を挙行するよう、各学校に通牒した。」（「北国毎日新聞」）そして、学徒動員を解除し、九月には陸海軍諸学校在学者の中等学校への編入学、復帰入学を認めることにした。外地からの引き揚げ学生についても、これと同様扱いとした。

連合軍司令部は占領政策の一環として、「日本教育制度に対する管理政策」にはじまる一連の教育関係指令を発表した。これに先だって、文部省は、「新日本建設の教育方針」を発表したが、司令部の出した管理政策はこの文部当局の教育方針をはるかにこえたきびしいものであった。管理政策の主な内容は次の通りである。

一　軍国主義的及び極端な国家主義思想の普及を禁止し、一切の軍事教育、軍事教練を廃止する。
一　議会政治、国際平和、個人の人格尊重、言論信教の自由などの基本的人権に関する思想を教えること及びこれらの思想の実践。
一　職業軍人、軍国主義及び極端な国家主義を鼓吹した者、占領政策に敵対行為をとる者の追放。
一　自由主義者、反軍国主義者の復職。
一　学生、生徒、教職員が教授科目の内容に批判を加えることの奨励。

一　学生、生徒及び一般国民に対し、占領の目的及び政策、代議政治の理論と実際、軍国主義の指導者と協力者が演じた役割などを知らしめる。
一　現行の教科書、教授指導書、その他の教材より軍国主義的及び極端な国家主義的思想の箇所を削除する。
一　平和的で責任のある国民を作り上げる目的の新課程、教科書、教授要目及び教材を準備し、出来るだけ早く現存のものとおきかえる。

以上の管理政策の補足として、司令部は、つぎつぎといろいろな指令を発表した。このようにして、文部省の戦後教育の方針は、軍国主義的、戦時的色彩を払いのけて、文化国家・平和国家の理念に基づいて、日本の教育を進めていこうとした。

授業の再開

苦しい戦争が終った。勤労動員が解除され、生徒達は再び学校に帰り、山崎賢一校長は生徒たちを集めて、戦争の敗北での生徒への慰めと激励をおくった。



三代目校長　山崎賢一

明治三六年八月一七日、和歌山県和歌山市に生まる。大正一一年和歌山中学校、大正一五年三重高等農林学校農学科を卒業。兵庫県大山村農業公民学校教諭・昭和四年和歌山県立農事試験場技手・昭和六年、県立伊都中学校教諭・同九年県立松任農学校教諭・昭和一五年石川県七尾農学校長・県立満洲開拓民訓練所長を経て昭和一九年四月、石川県立松任農学校長となる。

本校は九月一日（土曜日）天候青空の下に授業が再開された。学校の授業面では、㈠教科書より軍国主義的思想の箇所を削除する。（昭和二〇年一〇月）㈡教練・武道の廃止。教練用銃兵器の処理。（昭和二〇年一一月）㈢修身・日本歴史・地理の授業の停止。の条が付けられた。修身・日本歴史・地理の三教科が廃止されたのは、神道はじめ軍国主義及び極端な国家主義思想の普及に役立つものと判断されたからである。司令部は、文部省に

対して、これらの代りとして、社会・経済・政治について初歩事項学習に主眼をおいた。

校舎は、第二大隊第五中隊員二〇〇名や、連隊本部員三〇名が駐とんしていた関係で荒れ、運動場は畑になっている中を、冬は、マントや外とうを着たまま、ふるえながら授業を受けたが、一週間の大半は午前中でおわった。

戦後の虚脱と窮乏

敗戦は、日本国民にとって、まことに悲しい事実であった。かつて、日本が体験したことのない敗戦という現実の前に、戦時中の張りつめた気力が、まったくたたきのめされて、一種の虚脱状態に陥ったのである。

戦時中の張りつめた気力を作っていた、軍国主義の証拠を焼き払う煙とともに、一切の戦時色は、一応、姿をかくしたのである。いまわしい戦争から国民は解放されたのである。だが、目の前には飢えのためにやせ衰えた人々がいたのである。戦時中からの物資不足は依然解消せず、敗戦と同時に一切の統制を解除したが、ふたたび統制経済に入らざるを得なかった。しかし、人々はその統制のワクのなかでは、とても生活ができず、生きていくために、あらゆる手段を講じねばならなかった。

絶対的権威の消滅、敗戦で衝撃をうけたのは、生徒も同じことであった。これまで文教政策として絶対と唱えられ、かつ、信じてきた超国家主義的思想が一掃されるとともに、この面の権威は消滅していったのである。こうした思想的変動のなかにあって、生徒の気持には、もやもやした曖昧な気持から権威に対する反抗感が起きつつあったのかもしれない。まもなく、戦時中における学校体制の抑圧（軍事教練による軍国主義）に対する反抗に転化していった。

県立金沢三中四年生は同盟休校した。（一〇月三日・北国毎日新聞）

県立小松商業四年生が二二日から三日間、同盟休校した。（一〇月二四日北国毎日新聞）
県立松任農学校の上級生が同盟休校した。（一〇月二四日・北国毎日新聞）
県立津幡農学校三年生及び二年生は二五日から三日間同盟休校した。（一〇月二七日・北国毎日新聞）

右の新聞記事のように、金沢三中に起ったストライキは次から次へと連鎖的にひろがっている。

松農同盟休校

二二日（月）、一種農科四年、二種農科、農林科、拓殖科、獣医畜産科、各三年の五学級二〇〇余名は校長室へ「教職員の野菜持出しをやめて欲しい、勤労作業の報償金を明らかにされたい。教職員農場を廃止して欲しい、時局にそわないことを理由に五教員の退職をせしめられたし。」などの要求書を投げ込んで学校を引き揚げ、寄宿舎生徒は帰宅して同盟休校に入ったのである。

松任近郷のものは聖興寺に集まって気勢を上げ、時局にそわない教師を厳しく追求した。また、生徒の一部は、自宅から登校とみせかけて学校へでずに、香林坊・犀川・浅野川両大橋付近、寺井駅前などで分散的に集団行動をとった。

この事態に対して、学校当局は、二五日（木）教員を派遣して生徒代表を出頭せしめ、懇談すべく努力をする一方、父兄に対しては二四日に出校方を求める処置を遅まきながらとったのである。

山崎賢一校長は、「いろいろ誤解もあり、話をすれば生徒にもわかってもらえると思う。学校としては、生徒を圧迫したり処分したりする考えはなく、生徒の意思を尊重して早く解決したい」（北国毎日新聞、二〇・一〇・二四）との談話によって、同窓会幹部が仲に入り、生徒の意志を尊重する建前をとったので、ストライキの勢いも次第に収まり、二九日（月）に解決した。

二　創立七十周年記念

記念祭と追悼会

終戦直後の昭和二〇年は、本校にとって記念すべき年であった。それは、明治九年開校以来七〇年の歩みをみた年であった。この記念すべき年を祝し、なお一層の発展を祈念し、以前から計画されてきた諸行事が、「創立七十周年記念祭」として、九月一七日（金曜日）に本校や聖興寺を舞台にくりひろげられた。

九月一七日午後一時三〇分から本校講堂で挙行された記念式には、第三九代県知事伊藤謹二をはじめ来賓約三五人と同窓生・在校生・父兄ら関係者約一、六〇〇人が列席した。開会の辞の後、国歌斉唱、勅語奉読し、山崎賢一校長が「論語に七十にして矩を踰えずと云ふのがありますが何物にも揺ぎなき明遠不壊（ふえ）の境地に我校も亦立つに至ったのであります。思へば本校はその創立を遠く明治九年に発し、洵に人生の波瀾をその儘に幾多の変遷を経て七十の齢を迎へたのであり、共に誕生を見た学校も或は廃止され或は形を変へて、その健やかな成長を続けて参ったのは実に全国一つと申しても差支へないのであります。就中その過ぎ来たあとを振り返って見るに（中略）、昭和十七年六月八日全国より優秀校として選抜され、徳川侍従の御差遣あり親しく本校の御視察を賜はりたることであります。かかる数々の光栄は今日なほ眼前に見る如くただしく感激の極であります。本校の玄関正面に掲げられている加賀藩主十三代前田斉泰公の書にある「農ハ是レ民ノ本ナリ」の額が創立当時よりそのまゝに静かに、その守神の如く我等が成長を見守って居ります。併し今日、この栄誉ある歴史を誇ることの出来ますのも偏へに歴代の校長・職員の方々の御努力と卒業生諸君の血の出る如き奮闘の賜物であって、決して偶然ではありません。」と述べ、県知事や父兄会代表・同窓会代表ならびに生徒代表らの祝辞があった。校歌斉唱して閉会

した。

さらに、勤続年数一〇年以上の職員は中野義隆・舟木十郎・五坪茂雄・松下栄太郎・加藤祇・山中増太郎・高畠信二・平田吉栄・倉重芳嗣の九名、また同窓会においては永年功労のあった木津三之丞・堀矩従・三浦五一・古源栄美・仲川朝慶・喜成清八・北村敦丸・浮田吉太郎・一花茂樹・大場勝次・東田惣外吉・山本信次・松崎又五郎・瀧元清透・中村直作の一五名に感謝状が贈呈され、二時すぎに記念式は無事終了した。

このあと、午後四時から同窓会の晩餐会が本校道場で行なわれ、一人五分間発表をはじめ、だし物多く同窓生たちは互いに肩をたたきあって七十年の思い出に花を咲かせていた。

なお、当日午前九時半から松任町聖興寺で、同窓会主催により、旧職員・同窓生の物故者六三〇人の追悼法会がしめやかに営まれた。

第五章　松任女子実業学校

第五章　松任女子実業学校

第一節　創設前期

一　女子中等教育制度

発端

我が国の女子中等教育は、明治四年官立女学校設立布達に基づき、翌明治五年に設立された官立女学校（後、東京女学校と改称、明治一〇年閉校、明治一五年東京女子師範付属高等女学校として復活）に端を発する。修業年限六か年、国語・手芸・書道・英語を教科とし、一日四時間半の課業と定め、年一四才以上一七才以下の小学校課程卒業の女子を入学資格の対象として開設したこの学校は、「女子ヲシテ外国人ト語ヲ通シ博学明識ノモノト相交リ見聞ヲ広大ナラシムルヲ要スナリ」と教科に謳っているように、欧米の文明をにわかに摂取しようとした、明治新政府の婦女子にかける期待の程を充分にうかがえるものであった。

その官立女学校の開設は、明治四年一二月に名古屋に女学校を開設、京都府においても明治五年五月、新英学校（女学校）及び女紅場（女子手芸の教授施設）を開設し、同年一〇月、開拓使仮学校に蘭人女教師二人を招いて女学校を併置するなどとあいまって、女子中等教育の歩みがはじまりつつある段階として大いに注目すべき出

来事でもあった。なお、新英学校と女紅場は、明治一五年に合併し京都府女学校となっている。

其の後、明治八年、東京に女子師範学校を開校、同年石川県女子師範学校が創設、明治一二年、岐阜県に岐阜県普通女学校及び女子師範学校が創立され、そして明治一五年、東京女子師範学校予科を廃止し、附属高等女学校（高等女学校の初め）が設置されるに至って、女子中等教育のあり方に新しい局面がのぞかれるのである。すなわち、教科に修身・家政・育児・裁縫・礼節等が新たに加えられ、「良妻賢母」育成を目的とした女子教育になって来るのであった。

中学校令と高等女学校規程

そうした女子中等教育の黎明期もやがて、明治二四年の中学校令で、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス、高等女学校ハ女子ニ須要ナル技芸専修科ヲ設クルコトヲ得」のように、新たな規程がなされたが、体質的には従来通りのままであった。それが、明治二八年、高等女学校規程が定められるに至って、その位置づけが明確にされたのである。その規程によると、高等女学校の修業年限は一か年の伸縮を認めた六か年、入学資格は修業年限四か年の尋常小学校を卒業した女子と定められ、さらに修身・国語・外国語・歴史・地理・数学・理科・家事・裁縫・習字・図画・音楽・体操を学科目とし、それに教育・漢文・手芸の一科目あるいは数科目を随意科目として加えることができると定められた。なお、学科目のなかの外国語・図画・音楽に限っては生徒の希望によって必ずしも課さなくてもよいとされた。

高等女学校令

このように高等女学校が尋常中学校の一種としてどのような教育機関であるかが明らかにされたが、さらに明治三二年二月八日、その高等女学校規程を改めて新たに高等女学校令が公布されたことにより、より著しい発展段階へと移っていくのである。その第一条には、「高等女学校ハ女子ニ須

要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス」と明確にその目標を示したのである。その学校令を運用するため、明治三六年までに高等女学校令施行規則、時間配当及び編成設備等に関する規定、そして高等女学校教授要目などが次々と定められた。それらによると、修業年限は四か年で一か年の伸縮を認め、二か年以内の補習科を設けることができると定められ、同時に技芸専修科、専攻科を置いてもよいとされたのである。さらに学科目を修身・国語・外国語・歴史・地理・数学・理科・家事・裁縫・習字・図画・音楽・体操とし、それに教育・漢文・手芸の一科目あるいは数科目を随意科として加えてもよいとした。そして一年約四〇週の授業日数、一週間三〇時間以内の週時数も同時に定められた。

しかし、その高等女学校令も大正九年七月には、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トシ特ニ国民道徳ノ養成ニ力メ婦徳ノ涵養ニ留意スベキモノトス」のように規定が改められるなど、改正されることとなったのである。まず学科目については、従来よりさらに柔軟性を加え、各種多様の学科をとり入れることが許された。さらに四年とされていた修業年限も改められて五年制を認めた。又、専攻科、高等科という新しいコースを設けたことも大きな特長であった。このように高等女学校令の改正によって、女子中等教育は、男子の高等学校や専門学校に相当するようなひとつの教育の道をもつに至ったのである。

二　県内における女子中等教育

明治期

明治という新しい時代になってもなお女子には学問は不要という藩政下の封建的観念は緒をひいていた。それが改められ順調な歩みをみせはじめたのは明治も中頃からである。その端緒となったのは明治三二年に公布された高等女学校令によってであろう。当時、県内において官立では、金沢市

高岡町小学校に付設されていた金沢市立高等女学校が金沢市穴水町に移転して県立となった石川県立高等女学校（のちの県立一高女）があるのみであった。その後明治三九年、金沢市立実科女学校が発足するなどしたが、まだまだ時の要請に充分に応じたものとはいえなかった。それが明治四二年の高等女学校令の改正により、高等女学校に実科を設置することが認められたため、同四四年江沼郡立実科高等女学校（のち大正一〇年江沼郡高等女学校と改称、昭和一一年石川県立大聖寺高等女学校となる）が発足したのをはじめとして、同年能美郡に能美郡立実科女学校（のち大正一〇年能美郡高等女学校と改称、大正一二年石川県立小松高等女学校となる）、鹿島郡に鹿島郡立実科高等女学校（のち大正九年石川県立鹿島高等女学校と改称、大正一二年石川県立七尾高等女学校となる）、さらに明治四五年珠洲郡に珠洲郡立実科高等女学校（のち大正一三年石川県立飯田高等女学校となる）がそれぞれ設立された。これらは女子教育が地方に拡大しつつあることを示すものであることはいうまでもない。

私立においては、当時、北陸女学院（明治一八年に私立金沢女学校として設立、同三三年私立北陸女学院と改称）、金城女学校（明治三七年私塾遊学館として発足、同三八年私立金城女学校と改称）、そして、金沢女学校（明治三八年私立金沢女学校として発足、以後二度経営者が交替するなどしたが名称はそのままであった）があった。各校それぞれ特色ある校風で県内にその名をあげた。

大　正　期

江沼・能美・鹿島・珠洲などの各郡立実科女学校の多くは、大正一〇年には高等女学校に改編、さらに大正一二年は県立に移管された。又、私立金沢女学校が大正二年に石川県立第二高等女学校として石川県立女子師範学校に併置され、同一二年石川県立金沢第二高等女学校となったのをはじめとして、大正一二年に松任女子実業学校が開校、さらに大正一四年能美郡小松実科高等女学校（のち昭和一〇年

小松町立専修女学校と改称、同一五年能美郡小松町立実科女学校と改称、そして同一八年小松市立高等女学校となる）が開校されるなど、この大正期には明治期よりさらに女子教育機関の充実がはかられることとなったのである。

私立においては、北陸女学校が大正二年に文部省より修業年限四年の高等女学校と同等と認められ、同六年には五年制高等女学校と同等の資格を得ている。また金城女学校は、大正一三年に文部省の許可を得て金城高等学校となった。つづいて大正一四年に金沢女子学院が設立され、それは翌大正一五年五年制高等女学校となり、藤花高等女学校と改称された。

第二節　女子実業学校の創立と県移管

一　開校までの経緯

女子実業学校設置の動き

県下の女子中等教育機関が金沢から各郡へと発展し、大正一二年までに珠洲から江沼まで、私立又は郡立から県立へとそれぞれ進展しているこの時、当地方の有識者の中で、女子の中等教育を受けた者が往々にして実業に従事することを厭う傾向にあることを歎き、家庭婦人として必要な裁縫・家事・家業に関する知識・技能を与えるかたわら女子の常識を高めることのできる中等程度の普通学科を修められる教育機関の設立を望む者が少なからずあったのである。そこで農家および商家の家事に従事する女子に対して須要の教育を行うため、実業学校令、農学校規程および商業学校規程によって、石川郡実

小松町立専修女学校と改称、同一五年能美郡小松町立実科女学校と改称、そして同一八年小松市立高等女学校となる）が開校されるなど、この大正期には明治期よりさらに女子教育機関の充実がはかられることとなったのである。

私立においては、北陸女学校が大正二年に文部省より修業年限四年の高等女学校と同等と認められ、同六年には五年制高等女学校と同等の資格を得ている。また金城女学校は、大正一三年に文部省の許可を得て金城高等学校となった。つづいて大正一四年に金沢女子学院が設立され、それは翌大正一五年五年制高等女学校となり、藤花高等女学校と改称された。

第二節　女子実業学校の創立と県移管

一　開校までの経緯

女子実業学校設置の動き

県下の女子中等教育機関が金沢から各郡へと発展し、大正一二年までに珠洲から江沼まで、私立又は郡立から県立へとそれぞれ進展しているこの時、当地方の有識者の中で、女子の中等教育を受けた者が往々にして実業に従事することを厭う傾向にあることを歎き、家庭婦人として必要な裁縫・家事・家業に関する知識・技能を与えるかたわら女子の常識を高めることのできる中等程度の普通学科を修められる教育機関の設立を望む者が少なからずあったのである。そこで農家および商家の家事に従事する女子に対して須要の教育を行うため、実業学校令、農学校規程および商業学校規程によって、石川郡実

業女学校を設立する機を待ったのである。

たまたま大正一一年松任町に於て、男女児校合併の議を決定したのを機会に設立することを企てその援助を関係の村々へ求めたところ、挙って賛意を表した。前にも述べたように当町に於いて女子の中等学校設立は多年の希望であり、附近の村々にあってもその要望が強かったのであるから、その計画の着手に早速踏み切ることになったのである。

松任町男女児校合併の議とは、

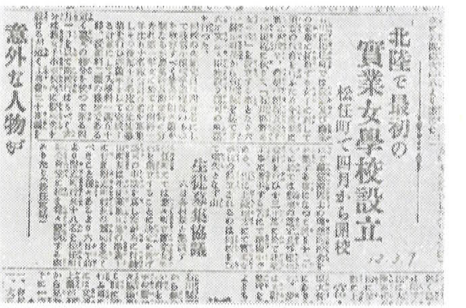
「近く工事費三〇万円を以て鉄筋コンクリートの理想的校舎を建築する。一二年度に於ては敷地の選定及び建物設計を行い、一三年度に於て建築工事に着手する予定である……」

というのであって、実業女学校設立に当っては当分旧女児校内に仮校舎を設け新校舎（小学校）完成の暁には現在の校舎をそのまま譲る手筈となったのである。

	現校舎（女児校）の竣工年月日	旧校舎（男児校）竣工年月日
	明治三五年一〇月起工	明治二九年一二月起工
	明治三六年三月末竣工	明治三〇年一〇月二三日竣工

開校をめざして

時恰も地方財政緊縮の方針を示されている際に松任町として一躍中等教育程度の学校を設立することは困難であると察知し、まず、実業補習学校規程によってこれをを置き、暫時拡張するのが得策であるとし、その学科課程、教員の組織は中等程度によったが、修業年限及び学期は実業補習学校規程によることとし、松任尋常高等小学校の一部を仮校舎に充て、四月、前後期各一学年宛の生徒を募集するこ


北陸で最初の
實業女學校設立
松任町で四月から開校
意外な人物が
生徒募集協議

北国新聞記事　大正12年3月7日

とになったのである。

募集要項

生徒定員	四百名
入学資格	尋常小学校卒業程度（前期）修業年限二ヶ年の高等小学校卒業程度（後期）
修業年限	四ヶ年（前期二ヶ年、後期二ヶ年）
学科課程	農業科、商業科
募集人員	初年度、両科第一学年生、五〇名宛
入学料	一円五〇銭
授業料	二円

大正一二年四月一日開校をめざして愈々細案をそえ、三月五日、女子実業学校設立認可を文部大臣に申請したのである。

開校までの経過　開校までの経過を箇条書きにしてみると次のようになる。

大正一二年三月五日　松任町長より松第一六一号を以て文部大臣に本校設置の認可要請をなす。

大正一二年三月六日　本校設置認可申請を出した鉾田町長は、生徒募集その他の準備につき附近村長の賛同を受ける為、六日午前から附近村長一八名を松任町郡公会堂に招き、種々懇談する。

大正一二年三月二二日　三月五日松学第一六一号で申請中の本校設置認可はむずかしくなる。即ち県にはこの年三つの中学校の新設、四つの女学校の県移管があるため、実業学校令に依る女学校設立好ましからず、特に町

村監督の立場上財政の膨脹はまかりならぬとの理由で願書は却下されたのである。鉾田町長は早速実業補習学校令に基く願書に変更して改めて申請をしたのである。

大正一二年三月二三日　実業補習学校令に基く申請が認下されたので松任町長は更に松学第一九二号を以て石川県知事に本校を松任尋常高等小学校に併置の件認可稟請をなす。即日石川県知事より石川県指令第一七六九号を以て松任尋常高等小学校に併置の件認可あり。

石川県石川郡松任女子実業学校と称し四月一日から開校とする。

右にみるように四つの女学校の県移管とは、郡制廃止に伴い珠洲・鹿島・能美・江沼郡立実科女学校が自然的発展で県に移管され、それぞれ、飯田・七尾・小松・大聖寺の県立高等女学校に昇格したことを指すもので、時を同じくして実業女学校設立の申請を出した松任町には思わぬ障害となったわけであり、それにもめげず開校まで手を尽した鉾田町長はじめ関係者の労は察するに余りあるのである。

石川県では山梨県知事の方針に基き、中学校の実業化を理想として各中学校の上級生徒に対し、実業科目を課すべく曩に当該校長の意見を徴し、それぞれ一二年度から実施することになっているが、更に高等女学校をも実業化すべく学則を改正し、実業科目を課すことができるようになりつつある時であったことはこの計画にプラスしたのではなかろうか。

大正一二年三月二五日　入学生募集、三月二三日付を以て松任女子実業学校設立の認可があったので、第一学年生（尋常科卒業生）前期生、第三学年生（高等科卒業生）後期生各五〇名募集すべく、尚出願手続等は二七日以後それぞれの小学校へ知らせる。

大正一二年四月九日　入学試験実施、九日―午前、午後、十日―午前にて試験終了す。志願者数、前後期あわ

せて百一名であった。

大正一二年四月一二日　入学者発表、百一名志願者のうち他校へ入学した者八名を除き、九三名受験者全員入学許可された。前期生四〇名、後期生五三名である。

二　女子実業学校の誕生

開校を目前にして

幾多の難題を乗り越えての発足にはまだ気にかかることがあった。それは、教員の組織である。開校式までに着任されたのは同年三月三一日付で松任尋常高等小学校長加藤政吉氏が小学校長と兼務で初代校長、橋本助太郎教諭、一八日付で田村秀三教諭が着任、この三名で開校式を迎えねばならなかった。勿論開校式には間に合わないが既に任命されていた滋賀県立水口高等女学校の佐藤八千代教諭、目下交渉中の愛知県某郡立女学校在勤中の加藤のぶ教諭及び松任農学校の中野義隆教諭が兼務で赴任されることになっていた。



女実校長
加藤政吉

慶応三年六月二日、石川県鳳至郡に生まる。松任農学校本科を卒業。石川県白丸小学校・劔地小学校・鳳至小・松波小各尋常小学校訓導、明治二九年四月、松波尋常高等小学校長・輪島高等小学校長・輪島女児尋常高等小学校長、明治三九年五月、羽咋郡視学に任ぜられ、鳳至郡・能美郡・石川郡各視学。大正五年、内務省教育課、同二〇年九月、内務部教育課兼内務部社会課、同一一年一月、松任町立裁縫学校訓導校長を経て、大正一二年三月、石川県石川郡松任女子実業学校長となる。

今一つ女児校から二教室をかり受けての準備、設備にも充分とはいえない面が多かった。そして、苦しい中で諸準備を整え開校へと運んだのである。

開校式

大正一二年四月二〇日、開校式にふさわしい日本晴れ、午前一一時から松任尋常高等小学校講堂に於て開校式が挙行された。松任町内は勿論、附近の村々からも女学生となる喜びを胸一杯に、尋常科からのかわいい前期生四五名、高等科又は補習学校在学中からの娘らしい後期生五四名入場、来賓は山縣県知事、関堂部長はじめ関係町村長及公職者、小学校長など約一〇〇名である。

開校式次第

一、一同敬礼
二、開式の辞　吉田助役
三、君が代斉唱
四、勅語奉読　学校長
五、開校の辞　鉾田町長
六、告辞　山縣県知事・関堂部長
七、答辞　学校長
八、祝辞　関係村長総代　吉本永次郎林中村長
　　関係小学校長総代　石坂郷小学校長
　　町公職者総代　関一二町会議員
九、一同敬礼

吉田助役の開式の辞で式ははじまり、生徒一同の君が代斉唱、加藤校長恭々しく勅語を奉読し、鉾田町長の開校の辞に続いて山縣県知事、関堂部長の告辞、加藤校長の答辞が終ると、関係村長の代表として林中村長吉本永次郎氏、関係小学校長代表として石坂郷小学校長、公職者代表として関一二氏の祝辞があって一二時半無事開校

式を終了する。

式後松任町郡公会堂に於て祝賀の宴が催され、鉾田町長の挨拶、県知事の謝辞あり、関堂部長の万才の合図に一同唱和して二時半、盛会裡に散会となる。

当日の来賓は、山縣県知事、水原教育課長、高田官房主事、関堂部長、西村代議士、富田農学校長、櫛野松任警察署長、町会議員、各町区長、附近町村長、小学校長等約一〇〇名であった。

学校規則　大正一二年三月二三日付認可された本校の規則は次の通りである。

石川県石川郡松任女子実業学校規則

第一章　総則

第一条　本校ハ石川県石川郡松任尋常小学校ニ併設ス

第二条　本校ハ実業補習学校規程ニ拠リ農家又ハ商家ノ家事ニ従事セムトスル女子ニ必須ナル教育ヲ為スヲ以テ目的トス

第三条　本校ノ修業年限ハ前期二箇年後期二箇年トス

第四条　本校ノ生徒定員ハ三百名トス

第二章　学年・学期・休業日及式日

第五条　学年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第六条　一学年中ノ学期ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一学期　四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

第二学期　九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

第三学期　一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル

第七条　一学年中休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ

一、祝日及大祭日

二、日曜日
三、本校記念日
四、夏季休業　八月一日ヨリ同月三十一日ニ至ル三十一日間
五、冬季休業　十二月二十五日ヨリ翌年一月七日ニ至ル十四日間

第八条　学年ノ終始ニハ各七日以内教授ヲ缺クコトヲ得
第九条　伝染病予防ノ為メ必要ナルトキ其ノ他非常変災アルトキハ学校長ハ管理者ト協議ノ上臨時休業ヲナスコトヲ得
第十条　紀元節・天長節・祝日及一月一日ニハ職員及生徒学校ニ参集シテ祝賀ノ式ヲ行フヘシ

第三章　学科目・学科課程・教授時数・成績考査及卒業

第十一条　各学年ノ学科目、学科課程及其ノ毎週教授時数ハ別表ニ依ル但シ学科目中実業科ハ生徒ヲシテ農業・商業ノ中其ノ一ヲ選択履修セシムルモノトス
学校ニ於テ必要ト認メタルトキハ第一項ノ教授時数ヲ増減シ又ハ休業期間ニ於テ実習ヲ課スルコトヲ得
第十二条　各学年ノ課程修了又ハ全学科ノ卒業ヲ認ムルニハ卒業ノ学業及試験ノ成績ヲ考査シテ之ヲ定ム
成績考査ニ関スル細則ハ学校長之ヲ定ム
第十三条　各学年所定ノ課程ヲ卒業シタルモノニハ第一号書式ノ卒業証書ヲ授与ス

第四章　入学・退学及休学

第十四条　生徒ヲ入学セシムヘキ時期ハ学年ノ始ヨリ三十日以内トス但シ臨時入学ヲ許可スルコトアルヘシ
第十五条　生徒ヲ入学セシムヘキ員数並試験ノ期日、場所及其ノ他ノ要項ハ予メ之ヲ公告ス
第十六条　本校ノ入学資格ハ前期ニアリテハ尋常小学校卒業課程トシ後期ニアリテハ前期ノ課程ヲ修了シタル者、修業年限二箇年ノ高等小学校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同程度ノ学歴ヲ有スル者トス
前項ノ学歴ヲ有セサルモ年令十四年以上ニシテ相当ノ学力ヲ有スルモノニハ特ニ入学ヲ許可スルコトアルヘシ
入学志願者ノ数、募集人員ニ超過シタルトキハ学校長ニ於テ選抜試験ヲ行フモノトス
第十七条　相当ノ年令ニ達シ相当ノ学力アル者ニ対シテハ学校長ニ於テ試験ヲ行ヒ又ハ試験ヲ行ハスシテ第二学年以上ニ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第十八条　生徒ニシテ退学シタルモノ其ノ退学シタル時ヨリ二年以内ニ於テ再入学ヲ出願シタルトキハ原学年以下ノ学年ニ限リ試験ヲ行ハスシテ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第十九条　入学志願者ハ第二号書式ニ依ル入学願書ニ身体検査ヲ添ヘ直ニ学校長ニ差出スヘシ

第二十条　入学ノ許可ヲ得タル者ハ七日以内ニ保証人一名ヲ定メ第三号書式ニ依リ学校長ニ届出ツヘシ

第二十一条　学校長ニ於テ保証人ヲ不適当ト認メタルトキハ之ヲ変更セシムルコトアルヘシ

学校長ハ左ノ各号ノ一ニ該当スト認メタルトキハ之ニ退学ヲ命スヘシ

一、性行不良ニシテ改悛ノ見込ナキモノ

二、学力又ハ実習劣等ニシテ成業ノ見込ナキモノ

三、正当ノ理由ナクシテ引続キ壱箇月以上缺席シタルモノ

四、出席常ナラザルモノ

五、他人ノ嫌忌スヘキ疾病ニ罹リ容易ニ回復セザルモノ

第二十二条　生徒ニシテ退学セムトスルトキハ其事由ヲ具シ保証人連署ノ上学校長ニ願出ツヘシ

第二十三条　生徒ニシテ疾病其他已ムヲ得サル事故ノ為三箇月以上修学スルコト能ハスト思慮スルトキハ休学ヲ出願スルコトヲ得

第二十四条　学校長ハ前項ノ出願ニ対シ期間ヲ定メテ之ヲ許可スルコトヲ得

第五章　褒賞懲戒及生徒心得

第二十五条　学校長ハ生徒中学業操行ノ優秀ナル者又ハ其ノ進歩顕著ナル者ニ対シ褒賞スルコトヲ得

第二十六条　学校長ハ必要ト認メタル場合ニ於テ左ノ区別ニ従ヒ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

一、戒　飭

二、謹　慎

三、停　学

第二十七条　生徒心得ニ関スル事項ハ学校長之ヲ定ム

第六章　授業料

第二十八条　授業料ハ生徒一人ニ付壱箇月金壱円トス
授業料ノ徴収期及徴収ニ関スル手続ハ学校長之ヲ定ム
一旦納入シタル授業料ハ之ヲ返還セス
学校長ハ授業料ノ納入ヲ怠リタル生徒ニ対シ其ノ授業ヲ停止スルコトヲ得

附　則

本則ハ大正十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

（第一号書式）

卒業証書

府県
氏名
生年月日

校印

右ハ本校前（後）期（修業年限（二箇年））ノ課程ヲ卒業セリ仍テ之ヲ証ス

年　月　日

石川県石川郡松任女子実業学校長位勲爵　氏　名　印

番　号

（第二号書式）

入学願書

本籍地
現住所
学歴　大正　年　月　日　学校卒業（卒業ノ見込）（何学年修了）

身　　分　　族称職業戸主氏名及之トノ続柄
志　望　科　　志望者氏名
第二志望科　　生年月日
右ハ御校（　期　学年）ニ入学為致度候ニ付御許可相成度此段相願候也
志願者トノ続柄
年　月　日　　氏　名　印
石川県石川郡松任女子実業学校長　氏　名　殿

（第三号書式）

保証人届
入学者　氏　名
右今般入学御許可相成候ニ就テハ左記ノ者ヲ保証人ニ相立テ候ニ付此段御届ニ及ヒ候也
志願者トノ続柄
氏　名　印
右何某入学御許可相成候ニ就テハ同人ニ係ル一切ノ事件ハ拙者ニ於テ引受申スヘク万一本人ニ於テ授業料等怠納スルトキハ何時ニテモ代納致スヘク此段保証仕リ候也
本　籍
現住所
本人トノ続柄
職　業

保証人　氏　名　印
生年月日
石川県石川郡松任女子実業学校長　氏　名　殿

学科目・学科課程及毎週教授時数

開校初年度に於ける学科目、学科課程及び毎週教授時数は次の通りであった。

学科目・学科課程及毎週教授時数表

課程	学年	前期		後期	
学科目	毎週教授時数	第一学年	第二学年	第一学年	第二学年
修身	学科課程	実践道徳 作法要項	同上	実践道徳・法制上女子ニ適切ナル事項	同上
	毎週教授時数	二	二	二	二
国語	学科課程	講読・作文 習字	同上	講読・作文	同上
	毎週教授時数	五	五	三	三
数学	学科課程	算術・珠算	同上	同上	同上
	毎週教授時数	三	三	二	二
歴地理史	学科課程	外国地理 日本歴史	同上	地理・概説	
	毎週教授時数	二	二	一	
理科	学科課程	博物	博物 人体生理	物理・化学	同上
	毎週教授時数	二	二	三	三

図画	写生画・臨画考案画	一	同上	一			
家事	衣服・食物・住居実習	二	同上	二	家内ノ整理・家事衛生割烹実習	四	育児・養老・看病・家事経済・家計簿記・実習
裁縫	運針・裁方・縫方・繕方（手芸）	六	同上	六	裁方・縫方・繕方・洗濯法・ミシン使用（手芸）	七	同上
音楽	単音・唱歌	一	同上	一	単音・唱歌簡易ナル複音唱歌	一	同上
実業	商業通論農業大意（食用作物）	二	同上（食用並工芸作物）	二	商業各論・簿記・農業各論（花卉・蔬菜・養蚕）	三	同上（養鶏・養蜂・果樹・乳畜・管理）
体操	体操・遊戯	二	同上	二	同上	二	同上
計		二一 二八	一一 二八	二一 二八	一〇 二八	二八	九 二八

師弟一体の学校生活一年目

初年度の編成は前期生第一学年四五名、後期生第一学年五四名、女児校々舎の一隅二教室を充てた。教員の組織も、開校式までに三名着任、続いて四月二七日に愛知県から加藤のぶ教諭、四月三〇日に滋賀県から佐藤八千代教諭、石川県立松任農学校の中野義隆教諭が嘱託として着任されここに四月末日を以って教授陣容も整ったわけである。

制服も五月一一日に制定され、開校式以来それぞれの私服だったのが揃うわけである。上・下とも紺色で上衣はそれまでに加藤先生指導のもとに各自制作、袴には裾にうす水色の線が一本入り、上・下で四円五〇銭であったとか、夏になると上衣が白絣となり、当時としては派手な服装、近在の相当広い地域からの通学で中には当時

には珍しい婦人乗自転車の生徒もあり颯爽とした乙女の姿を想像することができる。

「女学校!!　お寺の子か、医者の子でなし」と一蹴された時代、小学校尋常科で終る者、高等科へ進む者、中にはその上に補習学校へ進むことが普通だったのであるから、本校に入学した女生徒たちはまことに恵まれた女性と言わねばならない。学校に通うことに誇を持ち、特に初年度は小学校と同居の上、諸設備も不充分な中にあって一面何もかも新しく創造の喜びがあったことだろう。世は日本帝国時代、校長は「英語の勉強は要らない、日本語は世界に通ずる」と胸を張られた軍国調、おそらく国語が重視されたことだろう。物思うことの多い女生徒達に独身の田村先生が慕われ、お茶の水出身の佐藤八千代先生は江戸ッ子、袴に大きなバックルをつけられて憧れの先生であったなど、厳しい中にも暖かい師弟関係で女子実業学校も第一年目にして校風の礎が確立しはじめたのである。



女実制服

三　校風の樹立をめざして

組織変更　大正一三年二月一四日、女子実業学校も一年目を終ろうとするこの時、実業学校令及二種以上の実業学校の学科を置く学校の規程に依り農家、商家の女子に必須な知識技能を授ける目的を以て組織変更を稟請した。（松第一〇二号を以て）これに対し、三月二七日文部省は之を認可（文部省石実第四号を以て）したので、大正一三年四月一日よりこの組織で発足することになった。

学校規則の改正　組織変更に伴い大正一三年四月一日より左の学校規則となる。変更のところのみ上げる。

第一章　総　則

第一条　本校ハ実業学校令及二種以上ノ実業学校ノ学科ヲ置ク学校ニ関スル規程ニ依リ農家又ハ商家ノ家業ニ従事セムトスル女子ニ必須ナル知識技能ヲ授クルヲ以テ目的トシ兼テ徳性ノ涵養ニ力ム

第二条　本校ニ農業科、商業科ヲ置ク其ノ修業年限ハ四箇年トス

第三条　本校ノ生徒定員ハ弐百名トス

第二章　学年・学期・休業日式日

第六条　一学年中休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ

一、祝日及大祭日

二、皇后陛下御誕辰

三、日曜日

四、本校記念日

五、夏季休業　自七月二十一日至八月三十一日　四十二日間

六、冬季休業　自十二月二十五日至翌年一月七日　十四日間

第三章　各学年ノ学科目・学科課程及教授時数

第十条　各学年ノ学科目・学科課程及其ノ毎週教授時数ハ別表ニ依ル　但シ　農業ニ関スル学科目ト商業ニ関スル学科目トハ生徒ヲシテ各其ノ一ヲ選ヒテ之ヲ履修セシム

第五章　入学、退学及休学

第十六条　第一学年ニ入学ヲ許スヘキモノハ左ノ各号ノ一ニ該当スルモノニ限ル

一、尋常小学校ヲ卒業シタル者

二、年令十四年以上ニシテ本校ノ学力試験検定ニ合格シタル者　但シ学力試験検定ハ国語・算術・日本歴史・地理・理科ノ各学科目ニ就テ尋常小学校卒業程度ニ依リ之ヲ施行ス

入学志願者募集人員ニ超過シタルトキハ国語・算術・理科ニ就キ選抜試験ヲ行フ

学科目・学科課程及毎週教授時数の改正　組織変更に依り共通学科目の内容の変更及び農業科、商業科に課する学科目の内容が専科として色濃く内容を明示している。乃ち

学科目・学科課程及毎週教授時数表

目科学通共	学年	第一学年		第二学年		第三学年		第四学年	
	類別 学科課程教授時数 学科目	学科課程	毎週教授時数	学科課程	毎週教授時数	学科課程	毎週教授時数	学科課程	毎週教授時数
修身		実践道徳・法制上要項	二	同上	二	実践道徳・法制上女子ニ適切ナル事項	二	同上	二
国語		講習・読方・作文	五	同上	五	講読・作文	三	同上	三
数学		算術・珠算	三	同上	三	算術・代数・幾何	二	代数・幾何	二
地理・歴史		日本地理・日本歴史	二	日本地理・世界地理・日本歴史	二	世界地理・外国歴史	二	地理概説・外国歴史	二
理科		博物	三	博物・人体生理	三	物理・化学	三	同上	三
図画		写生画・考案画・臨画	一	同上	一				
家事		衣服・食物・住居・実習	二	同上	二	看病・養老・育児・割烹・実習	四	家事経済・家計簿記・一家整理・家事研究・割烹実習	四

裁縫	音楽	体操	商事要項	簿記	商業算術	商品	英語	耕種	園芸	養蚕及畜産	農産製造
普通衣類ノ裁方・縫方・繕方（手芸）	単音唱歌	体操・遊戯	商業総論 商業各論				講読	作物総論 食用作物			
七	一	二	二				二	二			
同上	同上	同上	商業各論				同上	食用作物	花卉・蔬菜		
七	一	二	二				二	一	一		
普通衣類ノ裁方・縫方・繕方・ミシン使用法（手芸）	単音唱歌・複音唱歌・簡易ナル楽器使用法	同上	同上	商業簿記	商業算術		同上	工芸作物	同上	養蚕大意	
七	一	二	一	三	一		二	一	二	一	
同上	同上	同上		同上	同上	内外重要商品	同上		同上	養鶏・養蜂 養乳畜管理	主ナル農産製造
七	一	二		二	二	一	二		一	二	一

	計	商	農
明治三十二年	三〇		
明治三十三年	三〇		
明治三十四年	三〇		
明治三十五年	三〇		

となった。

五箇条の条訓　農家又は商家の家業に従事し、豊かな知性・徳性をそなえた健康な女性を目ざす本校生徒には、左の五箇条の条訓が定められていた。生徒たちはこれを学校生活の具体的目標として暗記し、事ある毎に唱えて名実ともにその実践者への道を励んだ。

五箇条の条訓

一　行住坐臥心を磨き体を鍛ふこと忘るまじ
二　時と物とを問はず消費を慎み出来得る限り之を利用せん
三　自分の為し得ることは決して他人を煩はすまじ
四　事々真心をこめ専念努力成功を期せん
五　人には親切を尽し迷惑をかくまじ

思い出すこと　当時を偲び思い出すことを話してもらったところ

定期考査　毎学期定期試験が行われその内容はよく覚えていないが、答案には氏名を書かず、出席番号（生年順）を記して提出した。

修学旅行　関西方面へ修学旅行、京都では外出が許され、ちょうど皇太子殿下（今上天皇）御成婚の祝賀行事で賑わい、大勢の人のお祭騒ぎがとても凄かったようである。京都では詰所泊りであった。

遠足　鞍ケ岳などへ強行軍、先生も一緒で当時は健脚だったものであると思う。

野田練兵場へ　大正一三年一〇月末、金沢市野田練兵場で今上陛下（当時摂政宮）が学生を閲兵され、市内からは全員参加、本校からは代表者が、加藤校長、橋本教諭に引率されてこれに参加した。

ストライキ　大正一四年三月、独身で日頃生徒に人望の篤かった田村先生が転任されることになり、生徒達はこれを不満としてその留任運動としてストライキを計画、集団で相川の浜へと向ったが、いち早く事露見し途中で教師に連れ戻された小事件があった。

第一回卒業式　大正一二年四月後期生として入学した五四名は、翌大正一三年の組織変更で、第四学年となり、農業科、商業科の何れかを選択して一年を経過、茲に第一回卒業式を迎えた。大正一四年三月一九日、農業科二二名、商業科二三名、計四五名に対し第一回卒業証書授与式が挙行された。与える者、与えられる者、誠に感慨深い光景であったろう。

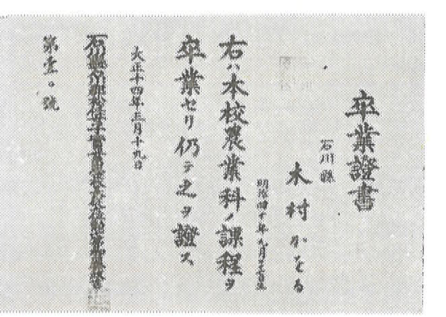
研究生の併置　大正一四年六月八日、私学第三〇五号を以て本校規則を左の通り変更し研究生併置の件を文部大臣に稟請した。

その内容は、

第二条ノ二　本校ヲ卒業シ尚農業ニ関スル事項ヲ研究若ハ補習セムトスル者アルトキハ設備ノ許ス限リ研究生トシテ在学セシムルコトヲ得

第三条（末尾）但シ研究生ハ定員外トス

第十三条ニ左ノ一項ヲ加フ


卒業證書
石川縣
木村
右ハ本校農業科ノ課程ヲ
卒業セリ仍テ之ヲ證ス
第一回生。號

第一回生卒業証書

研究生ニハ其ノ学業ノ成績ニ依リ第一号ノ二書式ノ研究証書ヲ授与ス

第二十九条ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ研究生ハ一人ニ付一箇月金壱円トス

第一号ノ二書式

研究証書

府県

校印　　氏名

生年月日

右ハ本校研究生トシテ農業科ヲ研究シタルコトヲ証ス

年　月　日

石川県石川郡松任女子実業学校長　位勲爵氏名　印

四　女子実業学校の県移管

県移管の経過　大正一五年一一月二二日、松任町会は小学校の新築移転を機に次のことを決議した。

松任町会は本校々舎、校地、備品及旧小学校に属した土地・建物並四箇年間に費やした弐万七五〇〇円の寄附を以って石川県へ移管する。

又、松任町史によれば

大正一五年一一月町立女子実業学校を県に移管するに際り、校地・校舎等を学校地として使用する期間寄

附することとした。

とある。乃ち小学校が移築合併され、これまでの同居生活に別れを告げると同時に県へ移管され、女学校校舎として使用することになったわけである。順を追ってみれば

昭和二年二月一八日　松第一六四号ヲ以テ大正一五年一一月二二日松任町会ニ決議シタル本校々舎等寄附ノ件石川県知事ヘ出願ス

昭和二年二月二〇日　松第一七八号ヲ以テ本校ヲ昭和二年三月三一日、石川県ヘ引継ノ件認可ヲ松任町長ヨリ文部大臣ヘ稟請ス

昭和二年三月一五日　収学第三三七七号ヲ以テ二月二〇日附松第一七八号稟請ノ本校設立者変更認可ノ件三月九日附ヲ以テ文部大臣ヨリ認可指令相成リシ旨石川県学務部長ヨリ通達アリタリ

という経過で県移管も本決りとなった。

加藤校長の退職　女子実業学校創立と同時に松任小学校長と兼務で着任され、小学校と同居について、創立に伴う諸問題について強い信念のもとに精魂を傾けられ、生徒達と共に新しい校風の樹立を目ざし、威厳のある中にも生徒達に慕われ大きな足跡を残されたのであるが、小学校も新校舎に落着いて間もない昭和二年二月二一日、退職された。

畠山校長の着任　昭和二年二月二六日、加藤政吉校長の後任として畠山治作氏着任される。

高等女学校と併置　昭和二年四月一日から本校は従来の松任町の経営から、石川県の経営に移管し、高等女学校令に依る高等女学校となり、石川県立松任高等女学校と称することになったため、今年度から女子実業学校の生徒は募集せず、年毎に一学年ずつ減じて昭和五年三月まで高等女学校と併置することとなった。

追悼会

昭和二年三月二四日、松任女子実業学校県移管を機に同校々友会及び同窓会共催で、創立以来在学中、又は卒業後に死亡された一二名の追悼法会を午後一時三〇分から松任町聖興寺で営んだ。参列者は、遺族、職員、生徒、同窓会員等二〇〇余名、住職、中野彰心師と数僧出仕し、畠山校長の弔辞、観無量寿経読経の中を遺族の焼香、在校生総代奥田登代子、同窓生代表横山艶子両姉が弔辞を捧げ、職員生徒の焼香もあって終了した。引続き中野住職の説教を聴いて追悼会を終る。遺族には菓子一箱が贈られた。

女子実業学校の終焉

昭和五年三月一七日、女子実業学校四年生二〇名に対し、第六回卒業証書授与式が挙行された。これをもって女子実業学校は全生徒を送り出し、自然廃校となったのである。

大正一二年創立以来、加藤校長を中心に年毎に学校の規模、内容も充実し、この間に農業科生・商業科生一八五名、研究生二一名の卒業生を送り出し、女子実業学校の名にふさわしい教育の実をいかんなく発揮して、茲に発展的な終りを告げたのである。この間の年度別学級編成は次の通りである。

年度	学年	科	人数	科	人数	担任
大正一二	前期	一年	四五			
	後期		五四			
大正一三	一年	農業科	一七	商業科	二八	
	二年	〃	一三	〃	二九	
	三年	〃	一五	〃	二四	
	四年	〃	二二	〃	二二	
大正一四	一年	農業科	九	商業科	一四	
	二年	〃	一八	〃	一七	
	三年	〃	一一	〃	一三	
	四年	〃	二三	〃	一九	
	研究生		二一			

大正一五	昭和二	昭和三	昭和四
一年	二年	三年	四年
二年	三年	四年	〃
三年	四年	研究生	〃
四年	研究生	〃	〃
研究生	〃	〃	〃
農業科	農業科	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
一	一	一	一
一	一	一	一
四	〇	九	八
六	九	〃	〃
七	〃	〃	〃
九	〃	〃	〃
商業科	商業科	〃	〃
〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃
一	一	一	一
一	一	一	一
八	五	三	二
六	六	六	〃
二	二	〃	〃
七	〃	〃	〃
加藤　のぶ	橋本助太郎	佐藤八千代	佐藤八千代
	古沢己行	古沢己行	〃
	和沢みさを	〃	〃

第六章　石川県立松任高等女学校

第六章　石川県立松任高等女学校

第一節　県立松任高等女学校の創立

一　開校までの経緯

県立移行の経過　前章でも述べたが、大正一二年四月、松任女子実業学校が創立したが、この年は金沢では県立第一高等女学校、県立金沢第二女学校がそれぞれ石川県立金沢第一高等女学校、石川県立金沢第二高等女学校と改称、能登では郡立鹿島・珠洲実科高等女学校が石川県立七尾高等女学校、石川県立飯田高等女学校に、加賀では郡立能美・江沼実科高等女学校が石川県立小松高等女学校、石川県立大聖寺高等女学校とそれぞれ県立に移管して勢揃いしたところであったため、いきなり県立の女学校として出発すること叶わず、順序を踏んで先ず町立の実業女学校として発足し、時機をみて県立へ移行する含みを持っていたのである。即ち大正一二年度は実業補習学校規程により、翌一三年度には早くも実業学校令により二種以上の実業学校の学科に組織変更して大正一五年を迎えたのである。

この四年間は校舎の条件としてはまことに窮屈な小学校との同居であったが、小学校の移築合併によるあけ渡しを機会に、高等女学校令に依る県立高等女学校とすることを計画したのである。而し、当時の世相、県の態度

は数少い実業女学校を高等女学校に変更することに難色を示したため、一時は難航したのであるが当時の田中松任町長はじめ関係者の努力により、大正一五年三月九日、ようやく文部大臣の認可指令あり、念願の県立高等女学校として四月一日より発足の見通しがついたのである。

三月二六日、高等女学校生徒募集を公示し、同二九日に田中町長は町会を招集して女子実業学校県移管に伴う県寄附その他につき決議したのである。これまでの経過を列挙すれば次の通りである。

大正一五年一一月二二日　本校々舎、校地、備品及旧小学校ニ属セシ土地、建物竝四箇年間ニ於テ弐万七千五百円ノ寄附ヲ以テ石川県ヘ移管ノ件松任町会ニ於テ議決ス

昭和二年二月一八日　松学第一六四号ヲ以テ大正一五年一一月二二日、松任町会ニ決議シタル本校々舎等寄附ノ件石川県知事ヘ出願ス

昭和二年二月二〇日　松学第一七八号ヲ以テ本校ヲ昭和二年三月三一日、石川県ヘ引継ノ件認可ヲ松任町長ヨリ文部大臣ヘ稟請ス

昭和二年二月二六日　地方事務官畠山治作氏学校長に補せられ、実業学校の県移管、高等女学校創設に関する諸般校務に当り、以てその基礎づくりをはじめる。



初代校長
畠山治作

明治一六年六月一八日、石川県珠洲郡蛸島に生まる。明治三十年、石川県師範学校卒業。今江尋常小・芦城尋常高等小・小木尋常高等小・飯田尋常高等小各訓導、大正五年三月、羽咋郡視学、同九年四月、石川郡視学、同一〇年県視学。知事官房主事兼内務部教育課、河北郡長、大正一五年、知事官房秘書課長兼知事官房文書課長を経て、昭和二年二月石川県立松任高等女学校長兼石川郡松任女子実業学校長となる。昭和八年三月、退職。

昭和二年三月九日　収学第三三七七号ヲ以テ二月二〇日附松第一七八号稟請ノ本校設立者変更認可ノ件三月九日附ヲ以テ文部大臣ヨリ認可指令相成リシ旨三月一五日石川県学務部長ヨリ通達アリタリ

昭和二年三月二六日　四月一日より高等女学校となるので生徒約一〇〇名を募集する。四月三日まで志願者は願書を提示するよう公示する。

昭和二年三月二九日　午前十時より田中松任町長は町会を招集し、女子実業学校移管に伴う県寄附金決議額、更生その他の為町会を開く。

昭和二年四月一日　昭和二年度本校経費左の通り。

経常費　壱万九千参拾七円拾八銭也

臨時費　壱万七千四拾参円也

本校ハ従来松任町ノ経営ナリシモ本日ヨリ石川県ノ経営ニ移管シ、高等女学校令ニ依ル高等女学校トシ、石川県立松任高等女学校ト称シ、本日ヨリ開校、第壱学年生徒約壱百名ヲ募集シ従来ノ女子実業学校ハ其ノ生徒ノ卒業迄併置スルコトトス

生徒募集の舞台裏

郡民待望の県立高等女学校が松任にできるという喜びの陰に高女第一回の生徒募集には思わぬ苦労が生じたのである。

二学級約一〇〇名の生徒募集であるが、金沢には県立金沢第一高女、第二高女、私立の北陸女学校、金城高女、藤花高女が既に充実した校風、内容を持って、市内は勿論、市外からも志ある者を魅きつけていたのに引きかえ、伝統を持たぬ新設校、女子実業学校の延長、社会不安、附近民の理解不足などが悪条件として揃ったため、勧誘という手を使わねばならなくなったのである。当時を回想した開発先生の言葉を借りれば、

校長の指示で志願生徒入手の割当数如きものが生まれ、その責任を果すための職員の苦悩は大変なものであった。

校門前の石の門柱に生徒募集の掲示が出る二月初旬から日程、方面別、人員配当、小学校六年在籍名簿を基にした予定表を作って、一人乃至二人連れで吹雪をつき、雪道を急ぎながら徒歩で町村、部落別に直接家庭訪問をして勧誘するという具合で、全く真剣そのものであった。当時はまだゴム長靴も、自転車の数も少なく、テクるか、遠方は汽車を利用し、駅中心

に活躍した。時には、門前払いを喰ったり、保険の勧誘員と間違えられたり、訪問先の人に同情されたり、悲喜こもごも、一喜一憂の笑えぬナンセンス……下略

であったという、このような入学勧誘は後二、三回あったそうで、中には金沢の女学校志願を変更させられたと述懐する先輩もあり、まことに開校当時の苦労が偲ばれるのである。

昭和二年四月四、五両日にわたり、一応入学選抜試験が行われたのである。

二　高等女学校の発足

開校式

昭和二年四月七日午後二時から、松任町は、女子実業学校の県移管及び高等女学校の開校式をどのようにするかについて町協議会を開いた。

「移管、開校式は四月下旬と定め、当日は県知事始め、関係町村長、県会議員、町公職者などの列席、記念品をそれぞれ贈る」など協議され、愈々開校の運びとなるのである。これに先だち、四月八日には在校生、すなわち女子実業学校二、三、四学年生による始業式が行われ、入学生を迎える準備をする。翌九日には、入学許可者八五名の松任高女第一回入学式が午前九時から講堂に於て晴れやかに挙行され、玆にめでたく石川県立松任高等女学校は歩み始めたのである。

四月二六日午前一一時三〇分、石川県知事はじめ一五〇名にのぼる来賓を迎えて盛大な開校式が行われた。一二時四〇分、式を終了して、生徒に記念品が配られたが、引続き郡自治公会堂において松任町主催の祝賀会を開き、県知事始め来賓これに出席する。先ず、田中松任町長の開宴の辞にはじまり、白根石川県知事の謝辞が述べられ、祝賀の宴を終了したのは午後二時であった。

四月二七日北国新聞は開校式の模様を

松任高女校　開校式　昨日挙行

本県立松任高等女学校の開校式は二十六日午前十一時三十分、白根県知事守友県視学を随へて臨場し、其他堀代議士、県会議員、竹内農学校長及郡外中等学校長、東松任署長及各官衙長、関係町村長及小学校長、田中町長以下吏員、町会議員、区長等其他関係者百五十余名列席の下に講堂に於て挙式、第一鈴によって畠山校長以下職員生徒及女子実業学校生徒着席し次で知事以下来賓入場、一同敬礼の後中山教諭開式を告げ君が代合唱ありて畠山校長勅語を奉読して式辞を述べ次で白根知事告辞を与へそれより来賓の田中松任町長、県会議員総代吉本永次郎、松宮第一高等女学校長、関係町村長総代林与三郎、関係小学校長岡本良、前町長鉾田俊、町会議員総代室七兵衛、元商議員総代池田敬一、山上恒吉、学務委員総代松崎義恭諸氏の祝辞あり、更に女子実業学校生徒総代として北村百合子の歓喜に満ちた祝辞があって、岡本桂次郎、神田重義、谷光源造、廣田永太郎、本川進、元正吉、平澤巍斉、坂野忠宗、林繁太郎、洲崎外余松、池田耕の各県会議員、杉本砲兵大佐、前校長加藤政吉諸氏の祝電披露がありこれに対して生徒総代小鍛治寿子答辞を致し盛式裡に午後零時四十分閉式し田中町長の挨拶ありて生徒一同へ記念品を贈り引続いて郡自治公会堂において町主催の祝賀会に移り席上田中町長の開宴の辞ありて白根知事謝辞を述べそれぞれ記念品の頒布ありて同二時終了した。

と、報じておりその盛会を窺うことができる。

本校はこれより四月二六日を創立記念日と定め、毎年この日に創立記念式を行って開校当時を偲び、その発展に努めたのである。殊に昭和一一年には創立一〇周年、昭和二二年には創立二〇周年の記念式並にその行事、事業を意義深く行うのである。

開校式の折、生徒総代として答辞を述べた小鍛治寿子は、この日の感激と併せて開校当時の感想を次のように述べている。

来年は創立百周年とか御同慶に存じます、お便りの件、誠になつかしい思い出がございます。

もうあれから四十七年も経ったのでございますね、あの日は、大変いいお天気でございまして、私が読ませて頂いた答辞の第一節は、たしか「花笑い　鳥歌う今日の日に……」と云うのでしたが、正にぴったり、北陸には珍らしい日和でした。県知事をはじめ、多数の来賓をお迎えして行われた式は厳粛なものでした。初代校長畠山治作先生の緊張そのもののお顔も今思い出すことができます。私は、最前列におりまして、答辞の大役に小さな胸をドキ〳〵させておりました。

県知事をお迎えすると云う事は、今では天皇陛下をお迎えするようなもので、前日、教頭の中山先生を県知事に見立て、練習したものでした。

その中山先生も今尚元気で、只今横浜にお住いでいらっしゃいます。私共在京の者とは、年に、一・二回お目にかかっております。その他、創立当時のことを御存じの、加藤先生、宮崎先生（いずれも東京御在住）などもお呼びして、あの当時の思い出を語るのが、只今のたのしみでございます。ただ、残念に思いますのは、私共が学びました校舎、講堂、雨天体操場も、今は、無いそうで思い出は遠くに流れ去った感じでございます。そのうち「緑にけぶる加賀の野に　昔の市の後つぎて……」の校歌ができまして、私が下手な筆で書きましたものが、雨天体操場に張ってありました、今から考えると冷汗の出る思いでございます。朝礼のあと、和服に袴の音楽の先生のピアノに合わせて全員唱和いたしました。

高女の前身、実業女学校の生徒で濃紺の上着に袴姿、一年生は現在のような制服でございました。

実業と高女がまざって学んでいたわけでございますが、別に、いざこざもなく、全員仲よく勉強に体育に励んでおりました、こうして昭和六年三月×日、私共は、第一回の卒業生として巣立ちました。私は卒業式にも、総代として答辞を読ませて頂き、本当に忘れられない、感激多い四年間を松任高女で過させて頂きました。

只今でも折にふれ、あの当時を偲び、なつかしく思っております……。

校地、校舎の整備

女子実業学校が松任女児校から受け継いだ校舎は、明治三六年に建築された木造建築物で既に二三年を経過していた。その損傷も相当なものであり、しかも高等女学校の課程を修めるに足る施設・設備は目下の急務であった。昭和二年現在の校地校舎坪数は左記の通り。

校地坪数　（昭和二年四月現在）

校舎敷地	運動場	農業実習地	其の他	計
五五〇・〇〇坪	九一一・六四坪	三三八・二六坪	八六六・七七坪	二、六六六・六七坪

但し前表中農業実習地三三八・二六は松任町米田初枝よりの借地なり

校舎坪数　（昭和二年四月現在）

本館	講堂	物置二棟	其の他	計
二八六、一二五坪	七八・五〇坪	一五・五〇坪	四一・〇〇坪	七〇七・二五坪

そこで順を追い、必要と経費をにらみ合わせて、校地・校舎整備三ヶ年計画が立てられ、現在の校舎を以て、新築・増築・移築及び模様替えによりその整備に当ったのである。昭和二年から四年までに大きなもので、一年目は雨天体操場、北側校舎及その本館への渡り廊下の新築、二年目は理科・作法教室の模様替え、三年目は家事室の模様替え及び給排水新設工事と左記の通り、物の見事に計画が進められたのである。

三ヶ年計画工事

年度	起工	竣工	場所	種別	経費
昭二	六・二九	九・二七	雨天体操場及生徒昇降口	新築	一一、五五〇円
			職員便所	新築	三七五
			北側校舎及本館への渡廊下	新築	一、三〇〇
			生徒便所	移築	一四〇

			北側校舎	模様替	一〇、〇〇〇
			医務室	模様替	一、五〇〇
昭三	四		農業実習地百坪→運動場に編入地ならし		
	四・二八	六・二八	理科教室	模様替	二、五〇〇
			作法教室	模様替	二、〇〇〇
			講堂入口左側物置	新築	二〇〇
			裏門二箇	改築	
昭四	四	八・　五	農業実習地百十三坪→運動場に編入地ならし	模様替	
	六・一四	八・　五	家事室	新設	
	六・一四	八・二七	排水設備		
	三　未	八・二七	給水設備		
			宿直室前廊下・下溜地埋立	新設	

この三年間に打たれた経常費、臨時費は次の通りである。

昭和二年度　経常費　一九、〇三七円一八　臨時費　一七、四一円三〇〇

昭和三年度　経常費　二二、六六一、五〇　臨時費　二、六四〇、〇〇

昭和四年度　経常費　二四、五六四、五〇　臨時費　二、五六八、〇〇

三ケ年計画は一応竣工したがなお修繕を要する箇所、教材、風致上必要なもの多く、更に、昭和四年から一〇年にかけて次々と修繕、工事を行って校地・校舎の整備が順次なされていった。この間、当局は勿論であるが、生徒の労作も大きかったことが推察される。そして、昭和一〇年頃には校舎内外一応の整備も終って、落着きあ

る学校の姿勢ができ上ったといえよう。

昭和四年から一〇年までの校地・校舎の整備経過は次のようであった。

昭和　四年　全校舎各棟の瓦葺替
北側校舎の東側床釣上げ
本館北側校舎の床釣上げ
南側石垣の改築造
運動場の地盛り、地均し、校庭樹木の植栽等（校友会事業として）

昭和　五年　五月二八日、校地東北隅に堆肥小屋竣工

昭和　六年　六月一三日より各級生徒の労作事業として、校庭南側に池堀り着手し一二月一二日竣工

昭和　八年　四月、泉水隣接の低い水田壱畝四歩を借り受け農業実習地増大（三等米坪五合）理科室北側の檜を境界近くに移植し園芸実習地を作る。
五月、理科標本室隣接の階段下に写真暗室を作る。
七月中旬、理科室北側の礫地を開墾して教材園を作る。
運動場周囲の花壇を作る。
九月、校門内玄関前の花壇を生徒の開墾によって作る。
養鶏（一〇羽）、養兎（二頭）を開始し鶏舎を建築する。
一〇月、第二泉水を堀る。

昭和　九年　校外実習地として田地二百六十四歩を借り全部蔬菜園として使用する。
四月温室建築工事に着手し九月竣工（十年三月十四日県へ採納）
全校舎に亘り十ヶ所の補強工事をする。

昭和一〇年　九月、家庭工作室模様替工事竣工

学校規則の制定　昭和二年三月九日に認可された本校の規則は次の通りである。

第一章　修業年限及生徒定員

第一条　本校の修業年限ヲ定ムルコト左ノ如シ

四年

第一条ノ二　本校ノ生徒定員左ノ如シ

四百名

第二章　学年、学期及休業日

第二条　学年ハ四月一日ニ始り翌年三月三十一日ニ終ル

第三条　一学年ヲ左ノ三学期ニ分ツ

第一学期　四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

第二学期　九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

第三学期　一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル

第四条　休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ

一、祝日及大祭日

二、皇后陛下御誕辰

三、日曜日

四、学校創立記念日

五、夏季休業　七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

六、冬季休業　十二月二十五日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

第五条　学年ノ始終ニ於テハ成績考査、入学準備等ノ為十四日以内教授ヲ欠クコトヲ得

第六条　伝染病予防ノ為必要ナルトキ其ノ他非常変災アルトキハ学校長ハ知事ノ認可ヲ受ケ臨時休業ヲ為スコトヲ得

第三章　学科目、学科課程、教授時数

第　七　条　学科目、学科課程及毎週教授時数ハ第三号表ニ依ル
第　八　条　学科目中外国語ハ随意科目トス
第　四　章　（削除）
第九条、第十条　（削除）
第　五　章　成績考査及卒業
第十一条　各学年ノ課程ノ修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ学業ヲ考査シテ之ヲ定ムヘシ　成績考査ニ関スル方法ハ学校長之ヲ定メ知事ニ開申スヘシ
第十二条　高等女学校令施行規則第五十条ニ依リ授与スヘキ卒業証書ハ第一号書式ニ依ル
第　六　章　入学、退学及休学
第十三条　入学ヲ志願シ得ヘキ者ハ本県ニ本籍ヲ有シ若ハ寄留スル者ニ限ル
第十四条　入学志願者ハ入学願書（第二号書式）ニ入学手数料ヲ添ヘ其ノ最終在学小学校長又ハ師範学校長ヲ経テ志望高等女学校長ニ提出スヘシ
前項ノ小学校長又ハ師範学校長ハ入学志願者ニ関スル調査書（第四号書式）及最終二学年ノ身体検査票（大正九年七月文部省令第十六号ノ様式）ヲ作製シ入学願書及入学手数料ト共ニ之ヲ高等女学校長ニ提出スヘシ
第十五条　入学セシムヘキ員数其ノ他ノ要項ハ予メ公告ス
第十六条　（削除）
第十七条　高等女学校令施行規則第四十一条、第四十二条及第四十三条ニ依ル検定ニ関スル方法ハ学校長之ヲ定メ知事ニ開申スヘシ
第十八条　入学ノ許可ヲ得タル者ハ保証人ヲ定メ誓約書（第三号書式）ニ戸籍謄本ヲ添ヘ学校長ニ差出スヘシ
保証人ハ本県内ニ居住セザルトキハ学校所在地ニ於テ代理保証人ヲ定メ保証人、代理保証人及生徒連署ノ上学校長ニ届出ツヘシ
保証人又ハ代理保証人其ノ住所、族籍、氏名ヲ変更シタルトキハ其ノ都度学校長ニ届出ツヘシ
学校長ニ於テ保証人又ハ代理保証人ヲ不適当ト認ムルトキハ之ヲ変更セシムルコトアルヘシ

第十九条　生徒疾病ニ罹リ三ケ月以上修学スルコト能ハスト思慮スルトキハ医師ノ診断書ヲ添ヘ休学ヲ出願スルコトヲ得
学校長ハ前項ノ出願ニ対シ期間ヲ定メ休学ヲ許可スルコトヲ得
第二十条　生徒退学セムトスルトキハ其ノ事由ヲ具シ保証人連署ノ上学校長に願出スヘシ

第七章　褒賞及懲戒

第二十一条　生徒中学業、操行優等ナル者ハ学校長之ヲ褒賞スルコトヲ得
第二十二条　学校長ハ左ノ区別ニ従ヒ生徒ニ対シ懲戒ヲ加フルコトヲ得
一、戒飭
二、謹慎
三、停学

第八章　授業料及入学料

第二十三条　授業料ハ生徒一人ニ付一箇月金参円五拾銭トス
第二十四条　入学志願者ハ、其ノ出願ト共ニ入学手数料トシテ金参円ヲ納ムヘシ、但シ、本県立高等女学校間ニ於テ転学スル者又ハ再入学ノ者ハ此ノ限ニアラス
第二十五条　一旦納入シタル授業料又ハ入学手数料ハ之ヲ返還セス
第二十六条　学校長ハ授業料ノ納入ヲ怠リタル生徒ニ対シ其ノ授業ヲ停止スルコトヲ得

第九章　寄宿舎

第二十七条　自宅ヨリ通学スルコト能ハサル生徒ハ総テ寄宿舎ニ入ラシム、但シ、当分人員ヲ限リテ収容スルコトヲ得

第十章　補則

第二十八条　本則実施ニ関スル細則ハ学校長之ヲ定メ知事ニ開申スヘシ

（第一号書式）

卒業証書

府県
校印　氏　名
生年月日

右ハ本校ニ於テ高等女学校ノ課程ヲ卒業セリ仍テ之ヲ証ス

年　月　日

石川県立松任高等女学校長位勲爵　氏　名　印

番号

（第二号書式）

入学願書

本籍
現住所
学歴　年　月　日　小学校（尋常）（高等）第　学年（卒業）（修了）（見込）
族称　華族　士族
職業　職業　戸主又ハ何某ノ何女（妹）
志願者　生年月日
氏名

右者今般御校第何学年ヘ入学為致度候ニ付御許可相成度此段相願候也

父兄（又ハ父兄ニ代ルヘキ者）

年　月　日　氏　名　印

石川県立松任高等女学校長　氏　名　殿

（第三号書式）

誓約証書　（用紙美濃紙）

私儀今般入学御許可相成候ニ就テハ謹テ校規竝御示諭等相守リ、専心勤学可仕ハ勿論妄リニ退学、転学等致間敷依テ誓約仕候也

本籍
現住所
族籍及戸主トノ続柄
氏名　印
生年月日

右何某入学御許可相成候ニ就テハ御校規則等堅ク為相守且同人ニ係ル一切ノ事件ハ拙者共ニ於テ引受申可万一本人ニ於テ授業料等ヲ怠納スルトキハ何時ニテモ代納可致候此段保証仕リ候也

年　月　日

本籍
現住所
族籍及本人トノ続柄
職業
保証人　氏名　印
生年　月　日

石川県立松任高等女学校長　氏名　殿

（第四号書式）

調査書

氏名　　学校名　郡　尋常高等小学校第　学年（在学／卒業）

生年月日　大正　年　月　日　　現住所　市

一、学業成績

教科目＼学年	尋常高等第　学年		尋常高等第　学年	
	教科点	学級平均点	教科点	学級平均点
修身				
国語 読方				
国語 綴方				
国語 書方				
算術				
国史				
地理				
理科				
図画				
手工				
唱歌				
体操				
農業 商業 工業				
家事				
裁縫				
外国語				
総点				
成績順位	人中	番	人中	番

一、性行特性

1. 操行
2. 性質
3. 長所

附加事項

同一学年児童総数
同学級上数
当該学校ノ特徴

欠席状況

学年＼日数		
尋常（高等）第　学年		
尋常（高等）第　学年		

備考

大正　年　月　日　卒業（見込）

昭和　年　月　日　卒業（見込）

大正　年　月　日　卒業（修了）

昭和　年　月　日　卒業

4. 短所

一、卒業（修了）後ノ状況

一、家庭ノ状況

一、其ノ他必要ナル事項

一、学校長ノ意見

右ノ通リニ候也

年　月　日　　小学校長　氏　名

注意　採点ハ十点法ニヨルコト、但シ、学級平均点ハ小数第二位迄算出シ、四捨五入シテ第一位ニ止ムルコト

数字ハ凡テ一、二、三等ノ如ク漢字ヲ用ヒルコト

席次ハ同一学級ノモノヲ用ヒ、且、男女別ニスルコト

児童総数及学級数ハ最後ノ一学年ノモノヲ用ヒ且男女合計ノモノニヨルコト

欠席状況ハ最後ノ二学年ニツキ記入シ調査書提出ノ前日迄計算スルコト

家庭状況ハ職業ヲ記入スルコト

其ノ必要ナル事項欄ニハ進学ニ関スル志望ノ確否性能ノ適否等記入スルコト

学校長ノ意見ハ其ノ児童ニツキ総括的意見ヲ書クコト

学科目、学科課程及毎週教授時数

昭和二年四月よりの学科目、学科課程及毎週教授時数は次の通りで、選択科目として実業科三時間が配時されていること、又女子の教養として必須な家事・裁縫の重要視されていることが分る。

学科目、学科課程及毎週教授時数表　（昭和二年四月）

学年	学科目	課程及時数	修身	国語	外国語（英語）	歴史・地理	数学	理科	図画	家事	裁縫	音楽
第一学年	学科課程		道徳ノ要領・作法	講読・作文・習字	発音・綴字及訳解話方及作文・書取	国史本邦地理	算術・珠算	植物・動物	写生画・臨画考案画・幾何画		普通衣類ノ裁方・縫方・繕方	単音唱歌複音唱歌
	毎週教授時数		二	五	三	三	二	二	一		四	二
第二学年	学科課程		同上	同上	読方及訳解・話方及作文・書取・習字	国史・外国歴史・満洲地理・世界地理	算術・代数・珠算	動物・生理・衛生	同上		同上	同上
	毎週教授時数		二	五	三	三	二	二	一		四	二
第三学年	学科課程		道徳ノ要領	講読・作文・文法	読方及訳解・話方及作文・書取	外国歴史世界地理	代数・幾何	鉱物・化学・物理	同上	住居・衣服・飲食物実習	普通衣類ノ裁方・縫方・繕方・ミシンノ使用法	単音唱歌・複音唱歌・楽器使用法
	毎週教授時数		一	五	三	二	三	三	一	一	四	一
第四学年	学科課程		道徳ノ要領・作法	講読・作文	同上	本邦近古史地理概説	代数・幾何	同上		育児・養老・看病一家ノ整理・家事経済・実習	同上	
	毎週教授時数		一	五	三	一	三	三		四	四	

体操	遊戯及競技・体操教練	三	三
実業	農業要項 商業要項	三	三
計		三〇	三
	同上	三	三
		三〇	三
	同上	三	三
		三〇	三
	同上	三	三
		三〇	三

実業科ニハ商業ト農業トヲ課シ之レヲ選択科目トス
外国語ヲ修メサル生徒ニハ此時間ヲ以テ裁縫又ハ家事ノ実習ヲナサシム

校訓の制定　昭和四年三月一四日、久しく研究を重ねていた、本校生徒の指針となる校訓を次のように決定された。

校訓

一、至誠を以て己れの本分を完うせん
二、進んで体力を養ひ意志を鍛えん
三、言行共にその雅正たるを学ばん
四、自らを重んじ貞淑の徳を修めん

本校生徒の指針として、学習・学校行事・生徒間など校内生活は勿論、校外生活に於ては、特に、男女間の交際を戒め、服装に於ても外出の場合は必らず制服を着用することが定められ、映画館など風紀をみだす根源となりそうなところへの出入りを禁ずるなどあくまでも貞淑、一糸乱れぬ女性を目指してその徳を修めることに努めたのである。

第二節　発展期の松任高女

一　充実した学校生活

学科課程、毎週教授時数の改正

昭和五年三月、女子実業学校最後の卒業生を送り、茲に四月から単独の松任高等女学校となり、各学年二学級、八学級編成の学校となったのである。そして、これより先一月三一日付で内申してあった本校学科課程及毎週教授時数改正の件について、四月一九日付石川県令第二六号を以て内申通り通達があったので、今年度より実施となった。

改正の部分だけあげれば次の通りである。

教科	学年及増・減・加時数	改正前　改正後
国語	全学年　一時増	一―三年　五時→六時 四年　四時→五時
英語	三・四年　一時増	二時→三時
地・歴	四年のみ　一時減	二時→一時
家事	三年　一時増	一時→二時
音楽	四年　一時加	○→一時
教育	四年　一時加	○→一時
実業	全学年　一時減	三時→二時

備考

1　第三、四学年ノ英語ハ之レヲ随意科目トシ、英語ヲ修メサル生徒ニハ裁縫ノ実習ヲナサシムルコト

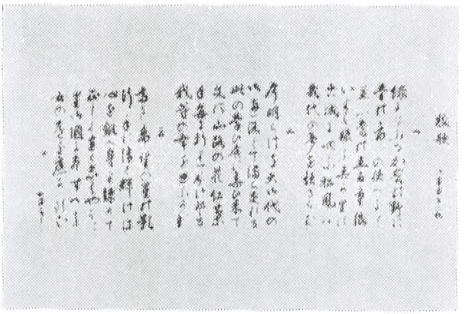
2　第四学年ニ於ケル図画希望ノ生徒ニハ之レヲ科外ニ学シムルコト

また、昭和八年、二年生に英語を課外希望者に一時間課した。これはその頃上級学校志望者が増した為の措置であろうか、又この年から農業は一年から四年まで各一時間全員に、商業は一、二年は珠算、三、四年は理論を各一時間宛課することとなった。農業と珠算を重視したように伺われる。

昭和一四年頃までこの科目と時数が続けられたのである。

校歌、徽章の制定

昭和五年四月三〇日、嚢に第四高等学校教授鴻巣盛広氏に委嘱してあった本校々歌の歌詞ができあがり、早速その作曲を東京音楽学校教授岡野貞一氏に委嘱したところ、同年七月七日にでき上って送られてきた。歌詞は上の通りで、千年の歴史を持つ市場町、松任にあるわが学び舎に集う仲間が互いに学びの道を究め、心身ともに健やかに、正しく、直く、淑やかな女らしさを身につけ、皇御国の為に尽そうという意味を持ち、曲の流れもまことに女学生にふさわしく、これより後、松任高等女学校々歌として、朝会には勿論、機会あるごとに歌い継がれていくのである。



校歌　和澤先生筆

また昭和六年二月一八日、かねて立案工作を委嘱してあった、生徒佩用の徽章が、審査の結果次のように決定し、制服の胸に松任高女生の誇として清楚に佩用されることとなった。中心に高女を表し輪郭には松の緑を象徴している。

立案者　石川県立金沢工業学校教諭
　　吉岡吉太郎

製作者　金沢市新堅町
　　河野小一郎

良妻賢母を目ざして

家庭の女子に須要な教養を身につけるための学習とはどんな学習であったのか、当時を繙いてみる。

謹厳そのものの畠山校長はじめ歴代校長は週一回、修身の時間を担当され、女子に必要な道徳について人格を通しての指導をされ、講堂に於ける朝礼や各儀式などを通しての指導又然り、そして、時代の変遷に伴い、ある時期には月曜朝礼に続いて「孝経、国体の本義」などを素材に全校生徒が人の道、臣の道について先生方の講義を受けた。「身体髪膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり……」と生徒はこれを暗誦して受講、在校中に胸深く修めた薫陶は卒業後、妻となり、母となり、父母に仕えながら世の荒波を乗り切らねばならぬ厳しい実生活の中に大きく生かされているのである。

国語に出てくる教材に文学的なものも勿論多いが内容に於て、女性の知徳を涵養するものが多かった。文を通して感銘深い次の一文がある。



当時の国語教科書

「昭代女子国文　巻三

二一　一樹の蔭　海上龍子

影にそふ形のごとく亡き霊も
君を守りて離れざりけん

茶臼山の和議争でか長へに平和を保たんや。これ固より一時の権謀に過ぎず。軍馬を休めしも束の間にて、再び夏の陣とはなりぬ。関東の寄手大挙して大阪城を囲む。故太閤の余徳を偲びて参集せしもの数万騎に及べども、譜代の士少なくして、多くはただこれ烏合の勇士のみ。

去年の十二月二十二日、和議の御誓文御取交の使として、主命を辱しめず、然も其の威風関東武士の胆を寒からしめ、な

ほ老将家康をして感涙の袖を絞らしめたる木村長門守重成の妻は、真野豊後守頼包の女なり。容姿の美にも弥増し、心優にして操いと高し。

昨日今日夫の気色常に変りて、食事さへ斥け、深き思案に打沈めるを見て、訝しさに堪へず、夫に向ひて、「去年今福の合戦に、君の功名の大なりしには、関東五十万の大軍も驚き侍る。今豊臣氏の武運は朝暮に迫れり。日頃の御高恩に報い奉るは今日なり。然るに、何とて物思はしげにして、食事をさへ斥け給ふぞや。」と問ふ。重成茫爾として打笑み「御身の訝しむも理なり。こは余の儀にあらず。五穀胃に入りて、二十四時を経ざれば消えずといへり。今はいつ討死するか測り難し。されば穢き物を斥けて、潔き心を出さんのみ。」と。夫人これを聞きて欣然として退く。翌朝起き出づれば、こは如何に、夜半の嵐も吹かなくに、難波の春に先立ちて、散行く梅の花一輪、我と我が喉掻切り、見事に自害して夫を励ましたり。重成且つ驚き且つ悲しみつゝ、妻の遺書を見れば、水茎の跡鮮かに、

一樹の蔭、一河の流、これ他生の縁と承り居り候が、さてもをとせの頃ほひ、偕老の契をなしてより、たゞ影の形に添ふが如く思い参らせ候に、此の頃承り候へば、此の世かぎりの御催しの由、蔭ながら嬉しく思ひ参らせ候。唐の項羽とやらんは、世に猛き武士なれど、虞氏の為に名残を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別れを惜しみきとかや。されば、世に望窮まりし妾が身にては、せめて御身の御在世の中に最期を致し、死出の道とやらんにて待上げ奉り候。必ず〳〵秀頼公多年海山の鴻恩を御忘却なきやう頼み上げ参らせ候。あら〳〵かしこ。

妻より

長門守重成様

さても健気なる覚悟やと、疾くに死を決したる重成の心は、妻の自殺によりて益々固く愈々奮ひぬ。今福の合戦に一騎当千と聞えし剛の者木村重成も、元和元年五月六日、遂に其の首を安藤某の手に渡しぬ。

若木の桜は散りても馨の中の蘭麝の薫は長へに世に匂ひて、今に滅びざる天晴れゆかしき重成の最期と共に並び称へらるゝは、其の妻の最期なり。時に重成は二十一歳、妻は十八歳なりき。

数多くの中から一文を挙げたものであるが、多感な乙女が感激に涙してこの文を学び、且つ深く心に泌みて女性としての修養が積まれていったように感ずるのである。

家事、裁縫が重視されたことは勿論で、衣・食・住から育児・養老・看病、一家の整理、経済についての知識

及びその実習で三、四年生になって実習する料理はレパートリーも広くその日から応用できて重宝なものであった。裁縫に至っては幼児の着物から大人の袴まで、単衣・袷・綿入れの裁ち方、縫い方に至る和服が主で男物・女物とこれ又盛沢山なもの、後に洋裁の基礎も加わってきた。選択で英語を選んだ生徒以外は手芸・編物・袋物など裁縫の時間に取り扱わないものについて学んだのである。

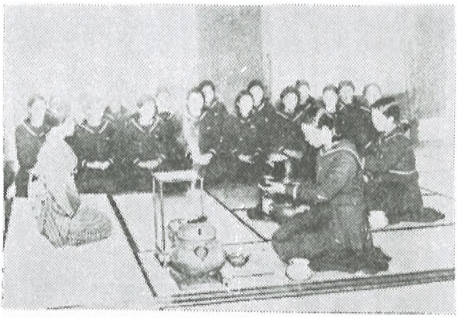
家事室と並んで工作室があったがいわゆる家庭工作である。入学当初に手がけるのが障子張り、桟を刷毛で濡らして。幅一杯の棒にぐるぐる巻きつけて古紙を剝ぎ、きれいに桟を拭いて下の方から順に張る。誠に巧妙な工程ででき上るのに興味が湧き、早速家でもやってみる。次に雨具掛け、本立、衣紋かけ、箱、繰り盆など木工である。この木工には些か閉口だった。それは、先ず鉋のかけ方、刃の研ぎ方、入れ方、鋸のひき方、釘の打ち方、ミシン鋸の使い方など作るものより道具の使い方が大変であった。でも、組み立てが終って、砥の粉、ニスやエナメルなどで仕上げて全工程を終った喜びは又格別でこの体験は誠に貴重で役立ったのである。

今も昔も体育は最も活動的で若さを発散させる時間で体操のほか、陸上・球技などに技を磨いた。これは、課外に庭球部・競技部・水泳部と発展して対外的にも活躍するのである。

又本校の特色でもある実業科に於ては、商業では商業一般・珠算、農業では校地内は勿論、校外にも実習地を求めて園芸・蔬菜・家畜の飼養と幅広く実習を通して身につけていったのである。これは国家の方針でもあったわけであるが、農家出身の生徒は兎も角、町家の生徒には敬遠される場面が多かったことは事実で、勤労の尊さは体験してはじめて身につくことであり、何らかの意味で卒業後にも生かされた筈である。

記録などをたどれば、校地・校舎の充分整わないままに発足した本校では、教材園作りに精を出した。三ケ年計画による校地・校舎の整備にタイアップして開墾による花壇・教材園・池堀りなど実業科の生きた教材として

生徒の前に提供された形、農業科選択の生徒たちが当時、山崎先生の熱心な指導を受けたのである。乃ち、教材園での実習には先生のアイデアによる新品種の植え付けや施肥など、女生徒には流石に手を引っ込める者も多かったが、率先してその手本を示し、生徒も先生に続いて喜々として勤労にいそしみ、きれいな花・緑の野菜にその生産の喜びを味わったのである。



茶　道

昭和八年頃からは生徒全員に農業の時間が充てられて実習地も用意されてからは先輩に負けず畝の作り方から収穫まで励んだのである。又、昭和一五年頃には茄子・胡瓜・トマト、そして西瓜・南瓜まで見事な収穫となり、夏季合宿訓練の時の豪華な食事やおやつとなり、実習中の施肥をいやがり、みみずが怖いと逃げまわったこともすっかり忘れてはしゃぎながら舌鼓を打ったのである。

女の身だしなみとして、課外に修めたものに華道と茶道がある。毎週一時間、この二つを交替に練習した。講師の先生の指導で華道は池の坊流の生花・茶道は江戸千家不白流の作法を受けたのであるが隔週の練習であるから、本当に身につくには今少し続けねばならなかったようである。

通知簿

一、二学期は中間と期末に、三学期は期末のみに考査が行われた。一週間ぐらい前になると職員室の前の掲示板に、その時間割が発表される。大体三日から四日間に亙り、二教科乃至三教科の試験となる。真面目組は発表のもっと前から、呑気組は一夜詰め込みなどそれぞれの性格に合ったスケジュールで勉強の上考査に臨み、考査も終ってホッと一息ついた頃、その成績は通知簿によって伝達される。

1　操行甲、乙上、乙、乙下、丙、丁トシ丁ハ落第トス

2　学科成績各科ハ甲一〇〇点―八五、乙八四―六五、丙六四―五〇、丁四九以下、丁ハ落第点トス

3　平均点ハ五九点以下ヲ落第点トス

これは成績表に記された備考であるが、この基準によって学科の成績は厳然と示されるわけで、丁という評価が実在したかどうか定かではない。続いて、平均点もはっきり一〇〇点満点の八六などと示される。学科成績に並んで操行の欄があるが女生徒にとって、これは重要なポイントとなった筈である。通知簿は四ヶ年通して一冊で成績表の前後に身体検査表、勤惰表があった。当時は一ヶ年間皆勤（遅刻・早退・欠課ヲ通ジテ三回以内）四ヶ年間皆勤（四ヶ年通ジテ遅刻・早退・欠課三回以内）というのがあった。毎学期末には担任の先生に個別でいろいろの批評を頂き、手ずからこれを下されたもので、来学期に備えるべき覚悟を胸にその態度も神妙そのものであった。

昭和一四～一七年学科課程及教授時数　この間多少年度により変更はあったが次表の通りであり、

教科＼学年	一年	二年	三年	四年
修身	一	一	一	一〇・五作
公民			一	一
国語	六	六	六	四・五
外国語	三	二	一	一
歴史・地理	三	三	二	二

教科＼学年	一年	二年	三年	四年
数学	二	三	三	三
理科	二	二	三	三
図画	一	一	一	／
家事	／	／	二	四
裁縫	四	四	一五	一五

	音楽	体操	教育	実業	商	農	家庭工作	総時数
前年までに比して								
一年	二	三	一	一		一・五	〇・五	三一
修一減								
修・作　隔週								
課外に農業実習								
家庭工作）隔週一増								
二年	二	三	一	一		一・五	〇・五	三〇
修一減　数一増								
外一減農業実習・家庭工作隔週一増								
裁縫の時間中随時作法を課す								
三年	二	三	一	一		一・五	〇・五	三二
外一減　裁一増								
課外農業実習・家庭工作隔週一増								
四年	一	三	一	一		一・五	〇・五	三三
外一減　作・国　隔週一増								
裁縫科重要に鑑み一規定外増								
課外農業実習・家庭工作隔週一増								
外国語は三年四年とも随意科であるが英語を修めぬ者は裁縫科を修める。								

重要視された教科がはっきりしてきた。

学　費

高女に学ぶ生徒は、年間一〇〇円以上の学費が必要であった。四円の授業料のほかに旅行貯金、校友会費、課外実習費、清輝会費積立金、副食費など併せて約七円となり、学校へ出す金以外に教科書、学用品、制服や靴、靴などで一〇〇円という金はその頃としては相当大きな額で、昭和一五年頃の学資概算は次の通りであった。

通学状況

生徒は松任町を中心に相当広範囲の地から通学していた。昭和一四年までの卒業生各年度出身町村は次表の通りで

学年＼種別	授業料	教科書	旅行貯金	校友会費	制服靴等	学用品	課外実習費	清輝会費積立金	副食費	計
第一学年	四四、〇〇	九、四九	五、五〇	七、〇〇	三〇、〇〇	二一、〇〇	二、一〇	二、一〇	一一、〇〇	一三三、三九
第二学年	四四、〇〇	一〇、一八	五、五〇	六、〇〇	五、〇〇	二一、〇〇	二、一〇	二、一〇	一一、〇〇	九八、〇八
第三学年	四四、〇〇	八、五八	五、五〇	六、〇〇	一五、〇〇	二一、〇〇	六、三八	二、一〇	一一、〇〇	一一〇、六六
第四学年	四四、〇〇	八、〇四	五、五〇	六、〇〇	五、〇〇	二一、〇〇	一一、五五	二、一〇	一一、〇〇	一〇五、一九

卒業年度＼府県町村	松任	鶴来	美川	野々市	石川	柏野	蝶屋	笠間	宮保	一木	出城
昭和五	三	一	三	二	三	三	一	一	四	四	三
六	五	一	三	一	三	二	一	四	二	二	四
七	五	一	三	三	七	三	一	一	三	五	二
八	九	一	一	三	三	三	一	一	三	三	一
九	八	一	一	三	三	四	一	一	一	三	三
一〇	二	一	一	一	一	一	一	一	一	四	五
一一	一〇	一	一	二	二	一	一	一	二	五	二
一二	一五	一	一	一	四	一	一	五	二	二	三
一三	七	一	三	一	一	二	四	三	三	三	五
一四	一四	一	一	四	一	一	二	二	四	三	六
計	一〇六	一一	一五	八	三一	一七	三三	二六	二三	三三	二四

卒業年度＼府県町村	御手洗	旭	安原	郷	中奥	林中	山島	館畑	林	河内	富奥
昭和五	六	一	一	一	四	三	一	三	一	一	二
六	二	五	一	一	三	四	四	三	一	一	一
七	二	三	一	三	三	六	一	一	一	一	三
八	四	三	一	二	二	三	一	三	一	一	一
九	三	五	一	二	二	三	五	一	一	一	一
一〇	一	一	一	一	四	二	一	一	一	一	一
一一	二	一	一	三	一	一	三	一	一	一	一
一二	九	一	一	二	三	二	四	一	一	一	一
一三	二	一	一	一	三	三	一	四	一	一	一
一四	三	五	一	二	一	二	四	一	一	一	一
計	三四	二五	四	二五	二五	二八	二五	二	一	一	六

押野	二塚	蔵山	能美郡	金沢市	計
一	一	一	二	三	五
一	一	一	二	一	五
一	一	一	一	三	六
一	一	一	四	三	九
一	一	一	二	一	五
一	一	一	五	一	八
一	一	一	二	一	五
一	一	一	一	一	四
一	一	一	一	一	四
一	一	一	一	一	四
一	一	一	一	一	四
一	一	一	二	一	五
一	一	一	一	一	四
一	一	一	一	一	五
一	一	一	二	一	五
一	一	一	二	一	五
一	一	一	二

第四学年	二三	一二	一	三	五	一	一	一八	一	六〇	五七	三	六〇
計	八六	六六	二	二〇	三四	一	一七	一〇二	一	三一九	三三	六	三一九

上級学校への進学

毎年卒業生のうち二〇名前後の上級学校進学者がいた。これは、四年制高女の課程に稍々物足りなさを感じたためであろうか。最も多いのは女子職業専攻科、第一高女の研究科、第二高女の家庭科で何れも一年課程であった。卒業後は殆んど家庭に入り、やがては嫁いだのであるが、中には職業に就く者もあった。教員を志望して女子師範二部、昭和一三年からは女子青年学校教員養成所（のちの青年師範学校）へ、また看護婦を志望して赤十字関係の学校へ進む者もあり、その他大学、専門学校へ進んだ者も少数いた。第一〇回卒業までの進学状況は次の通りである。

学校名＼卒業回数	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計
女子師範二部	—	二	一	一	一	一	一	三	二	二	一四
第一高女研究科	一四	二	一	—	二	二	三	二	—	八	三四
第二高女家庭科	—	—	—	一〇	五	四	一〇	六	三	—	三八
女子職業専攻科	四	六	八	二	二	七	四	三	五	四	四五
石川県立女子青年学校教員養成所	—	—	—	—	一	—	—	一	—	—	二
藤花高女保姆養成所	—	—	—	二	—	一	—	—	一	—	四
第一高女五年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三

	一九	二一	一六	一六	一六	一九	二〇	一八	一四	一九	一六九
北陸高女研究科	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一
東京女高師	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
日本女子大学	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
女子美術専門	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
中京高女専攻科	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
京都女子高等専門	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
富山日本赤十字支部	一	一	二	三	一	一	一	二	三	三	一三
金沢医大附属看護婦養成所	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
昭英学園	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	二
和洋女子専門	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
福井日本赤十字支部	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
帝国女子医学薬学専門学校	一	一	一	一	一	一	一	二	一	二	三
武蔵野音楽学校	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一九	一二	一六	一六	一六	一九	二〇	一八	一四	一九	一六九

生徒数の変遷　松任町史には、女子実業学校の誕生から松任高女に至る経過を当時町民の待望は女子中等教育を受ける者の日に増し、何れも金沢へ通学するの不便よりの声が多かった、松任にもあったならの声が実を結んだのであった。

実現に際していつしか女子の実業教育に主点が置かれた。当時設立に際して種々の事情もあったであろうし、実業教育亦可なりとしなければならなかったが、当時まだ父兄子女共に実業教育を満足しなかった。

此の事は当町子弟の入学に案外期待に反するの現象をみた。然し時は解決して高等女学校となって以来、年年金沢通学を減ずると同時に普及して当町子女の入学激増に向いつつあることは真に悦ぶべきであろう。

年度	一年入学数	二年編入学数
昭和二	八七	
三	七八	五
四	七二	一三
五	五六	一二
六	四七	六
七	四四	九

と、述べているが、決して坦々とした道ではなかったのである。

昭和二年から七年にかけて、生徒増対策として尋常科を卒業して入学する一年生のほかに高等科を卒業して二年生へ編入学することが認められたが、志願者数は伸び悩み、昭和二年から五年まで二学級募集であったのが、昭和六年から一学級募集となり、以後、昭和一三年まで続くのである。そして、昭和一四年度再び二学級募集となり、次第に大世帯の様相を呈してくるのである。開校から昭和一六年までの学級編成並に生徒数は次表の通りである。

年度	学級数	人数	担任	学級数	人数	担任
昭和二	一の一	四一	中原　義勇	一の二	四二	内田　富子
昭和三	二の一 二の一	四〇 三九	橋本助太郎 中原　義勇	二の二 二の二	三九 三九	腰垣　福松 内田　富子・藤本　長信
昭和四	一の一 二の一 三の一	三六 三九 三五	山崎　修一 腰垣　福松 藤本　長信	一の二 二の二 三の二	三七 三八 三四	古沢　已行 竹林やあ子 坂井　サタ

昭和五	昭和六	昭和七	昭和八	昭和九	昭和一〇	昭和一一
一の一	一	一	一	一	一	一
二の一	二の一	三の一	三	三	三	三
三の一	三の一	四の一	四の一			
四の一	四の一					
二八	四八	四四	五三	五六	五六	五六
四一	二八	二八	五〇	五二	四八	五七
三二	二八	三五	二六			
腰垣	中山	小幡	竹屋	加藤	大村	竹屋
加藤	島尾	中原	廣瀬	相川	未松	未松
中原	開発	義勇	清孝	英子	紀栄	敏
福松	随学	初栄	敏	己行	たづ	己行
己行	ユキ	竹屋	平野きよ子	廣瀬	長信	加藤
義勇	吉次	敏	小川国彦	清孝	秀	真田
サタ	栄次		加藤	泰婦美江	村上	紀栄
一の一	一	二	二	二	二	二
二の一	二の一	三の一	四の一	四	四	四
三の一	三の一	四の一				
四の一	四の一					
二八	二	五五	五二	五三	五七	五五
四二	九	二八	二四	五〇	四六	四三
三三	三八	三四				
笹島	藤本	中山	小幡	藤本	高島	藤本
山崎	佐千	加藤	泰婦美江	竹屋	加藤	大村
修一	長代	己行	藤本	小川	己行	たづ
竹林や	信	小川	長信	国彦	廣瀬	長信
ユキ	八	国彦		平野きよ子	清孝	高島
佐藤八千代	中原義勇	随学		（高島敬仁）	竹屋敏	敬仁
						賢秀
						（相川英子）

昭和一二	一 三	五八 五六	藤本 吉田 竹屋 真田	長信 愛子 敏 武	二 四	五六 六〇
昭和一三	一 三	五六 五六	加藤 杉山 真田 外山	己行 菊枝 武造 由	二 四	五八 五六
昭和一四	一の一 二四	五七 五六 五六	加藤 山本 静枝 近藤 繁隆	己行 枝 造	一の二 三	五七 五八
昭和一五	一の一 二の一 三	五七 五七 五六	藤本 藤原 道 穴田	長信 正遠 幸枝 栄蔵	一の二 二の二 四	五六 五七 五八
昭和一六	一の一 二の一 三の一 四	五八 五二 五七 五六	吉村 加藤 武岡 辰 藤原	源次 己行 太郎 正遠	一の二 二の二 三の二	五七 五一 五七	米永 近藤 道	瑠璃 繁隆 幸 枝
							吉村 鈴森 米永 瑠璃 加藤 己行 近藤 繁隆	源次 淑 己行 栄蔵
							未松 道	紀栄 枝
							竹屋 穴田 近藤 未松	敏 蔵 栄 紀 栄隆
							高島 未松 加藤 穴田	敬仁 紀栄 己行 栄蔵

校友会の活動

松任高女の校風樹立の原動力となったものに校友会の活動がある。昭和八年度の校友会組織は次の通りで、会長に学校長、副会長に教頭、各部にはそれぞれ先生が顧問として配属し、各学年から選ばれた代表が、その先生の指導のもとで年間の計画から実施までを担当したもので、学校行事即各部の活動ともいえるのである。年間を通じて繰り拡げられる学芸的・体育的行事について次項で述べることとする。

昭和八年度　松任高女校友会組織一覧

校友会

会長　川岸先生

副会長　開発先生

総務部　開発先生

庶務部　小川先生

庶務係　小川先生

四年　笠間千代子　小谷昌子

三年　沖津朝子

二年　木村俊子

一年　大本文子

会計係　真砂先生

修養部　開発先生

1. 自修会係　開発先生

2. 学級会係　各級主任先生

3. 自治購買係　藤本先生

学芸部　小川先生

1. 図書係　竹屋先生

四年　北野　夏　喜田久子

三年　西川美雪

二年　石黒恵美子

一年　南　澄江

2. 学芸係　平野先生

四年　日向喜代　村上華子

三年　西尾美世子

二年　橋本久子

一年　塗師みゆき

3. 成績展覧係

藤本先生　正見先生　加藤先生　秦先生

4. 音楽係　相川先生　秦先生

四年　安田芳江　坂　一子

三年　橋場智恵

二年　米永千鶴子

一年　中山二三子

運動部　藤本先生

1. 庭球係　藤本先生

四年　林藤愛子　黒川千代子

三年　稲垣みつゑ

二年　佐武よし枝

一年　北村理子

2. 水泳係　廣瀬先生

四年　岩上登美枝　平田婦美

三年　吉本一子

二年　北野美代

一年　西田政子

3. 競技係　正見先生　秦先生　園芸部　広瀬先生

四年　中川泰子　任田可代　園芸係　広瀬先生　各級主任先生

岩本めさ　山田とめ子　四年　東　章子　川東秀子

三年　林　可壽子　永井文子　三年　吉岡道子

二年　小鍛治信子　相木栄子　二年　宮本久恵

一年　戸田小春　高島由栄　一年　西田敏子

主な学校行事

充実した学校生活の中から毎年行われた行事を先ず挙げてみる。乃ち不定期ではあるが国家の現情に即した精神修養のための講演会から、大体定期に行われる諸行事についてみると、

○講演会　昭和五年頃より国際事情風雲急を告げ、満州事変、支那事変と日本に取って試練の幕明けとなるのであるが、国策により、国体の真義を窮め、国民精神を作興し、克己・忍耐・物を大切に……という目標のもとに学校長・教諭は勿論、外部からも講師を招いて、訓話・講演がよく行われている。事変に関連して、陸・海軍人による時局講演もあり、昭和一四年頃までに行われたものの中から主なものを挙げれば次のようで、当時の様子を想像することができる。

年月日	講師名	講演内容
昭二・五・九	山崎英一	精神修養に関する
一〇・一一	大塚春樹	国体に関する
一一・一五	吉永丑松	体育に関する
昭三・四・一二	西園富吉	国民精神に関する
	園田豊禅吉	
昭四・九・一一	畠山校長	式年遷宮に関する
九・一九	畠山校長	国民精神作興に関する
一〇・二一	糸井　登美	克己忍耐に関する
一一・二七	井上　一次	精神修養に関する

昭五・五・二一	村曹長	海事思想に関する	昭一〇年頃	中野勇砲兵大尉	軍縮会議並にロシアの近状に関する
一〇・二七	栗原広道	教育勅語四〇周年に関する	昭一三・七・六	永井柳太郎	時局に関する
一一・一〇	校長・藤本・佐藤各教諭	国産品愛用に関する		川岸校長	支那事変一周年記念に関する
一一・二九	有川ヒサエ	割烹に関する講演・実演	昭一四・一・二五	田中松任駅長	交通道徳に関する
昭六・六・一六	西園富吉	体育に関する	五・二六	有沢少佐	支那事変を続りて帝国海軍の使命
九・二六	島尾教諭	満州事変に関する	八・二〇	五坪茂雄	満州事情について
一〇・七	青山歩兵大尉	満蒙事変に関する			
昭七・六・六	倉重芳嗣	体育衛生に関する			

昭和八年度にもたれた講演会は次の通りである。

一、六月十四日　講談社巡回講演部派遣の安部季雄氏講演
　聴講者　本校生徒、清輝会員、女子青年団員、小学校高等科生
　講演内容　現代日本の情勢を説き婦人の使命に対する覚醒を促し立派な母性たるべきことを念願とするよう高唱され聴者を或は哄笑せしめ或は嘆歔せしめ或は深き反省をなさしめ満堂を魅了せる感激深きものであった。

二、六月十五日　今村政芳氏の理化学応用術実演
　聴講者　本校生徒
　実演内容　イ、木、金属、石、貝に彫刻する法　ロ、硝子切断法　ハ、防水布の製法　ニ、コロタイプ式複写法　ホ、染抜法　ヘ、畳天井板等の洗ひ方、汚点抜き等　ト、磨硝子の製法　チ、硝子、陶磁器の接合

三、六月十七日　台湾人演技
　観覧者　本校生及一年生の母姉
　演技内容　アミ族蕃人男女数名の舞謡、蕃歌高らかに堂も破れんばかりの祝歌、或は熱帯の太陽西に没して月光既に淡き時蕃舎のうちより微かに漏れくる笛の哀調等異国情諸豊かなるものを見聞す。

四、九月十三日　健康週間行事高森校医の講演
聴講者　本校生徒
講演内容　日光浴の恩恵及紫外線に関する通俗的解説
五、十一月七日　思想善導全国講演の工学博士佐藤定古氏講演
聴講者　本校生徒
講演内容　現代日本の三つの重大問題として　一、国際関係　二、経済関係　三、思想問題を挙示し、この三問題を切抜けるがために国民の深く覚悟し強く実行すべき事項を各方面に渉って提唱されたる真理と信仰とに渇仰せる講演。
六、十一月十三日　東本願寺裏方御挨拶
聴講者　本校生徒、清輝会員、一般外来者
御挨拶内容　非常時日本に直面せる国民は共に一致団結して仏の力を頼みまいらせて国難に処せよとの御言葉、国母陛下の御妹君として又日本宗教界の女王様としての尊貴なる御品格、金鈴を振るが如き御声、然かも御行動のうちに慈悲深き平民的御気持を窺うことを得て我等一同はもとより一般外来者随喜の涙に咽びたる次第なり。
七、十二月六日　江見水蔭氏講演
聴講者　本校生徒
講演内容　国粋主義と国文学の深き造詣を内蔵せる氏が多年の薀蓄を傾けて「婦人と趣味」との演題にて話されその内容は底力ある声量と相俟って感銘を与ふ。

○遠足と旅行、四年生の修学旅行　春は新入生を迎えた四月中旬頃、二塚の専光寺海辺とか、ゆったり流れる伏見川両岸のすばらしい花見へと新学期の胸を弾ませて出かけたものである。又、四年生が修学旅行中の留守の間に下級生は小舞子まで強行軍したり、吉崎・永平寺方面とか、倶利加羅方面へ小旅行をしたこともある。秋とも

なれば、三小牛山・鞍ヶ岳・鶴来方面へと四月以来鍛えた身体で強行軍、当時の健脚振りが偲ばれる。

毎年薫風そよぐ五月の佳い日を選び、四年生待望の関東、関西旅行が行われる。昔も現代も等しく学生々活の最後を飾るもので、コースは大体同じく繰返され、二、三名の教師に引卒され、最も大きな小遣い（昭和一二年頃で五円）を懐に、一週間から一〇日間の旅となる。大体、日光・中禅寺湖・東京市内・横須賀・鎌倉・江ノ島・名古屋・二見ヶ浦・伊勢神宮などで特に、東京は女学生にとって憧れの見学場所で五、六名ずつタクシーに分乗して、一〇台余りを連ねる。今なら観光バスというところであろうけど、誠に悠長といえば悠長なもので、上野公園・靖国神社・明治神宮・乃木将軍邸・楠公像・泉岳寺・震災記念堂・浅草・国際劇場・隅田川・デパートなどを見学し、見るもの、聞くものに驚いたり、感激したり、夜ともなれば旅館での友との語らいに花を咲かせ、入浴・宿泊に夢のような時を過し帰りの汽車の中はグッスリ組も多かったのである。

昭和三年一二月一三日から、御大典跡拝観並に京都方面見学のため、一、二年生は数名の教師に引率され、京都で二泊の修学旅行が行われている。

昭和八年四年生関東関西修学旅行　紀行抄

六月三日（晴）　第一日　松任――高崎　平田婦美

暁を報ずる鶏の声も今日に限って一段と楽しげに聞える。幾度か夢に描き友と語り合ひ待ちに待った、修学旅行の日は愈々明けたのである。朗らかに、荘厳に……。新緑の山々が近く寄せては又遠ざかる、青い森は私共を故郷に帰し見送りの諸先生、父様母様の事ども次から次へと思い出させる。富山駅についた時どこか出征の兵士が勇しくも決死の意気で取交す最後の言葉、そこには尊い或る力が漂っていました。私どもは心から感謝を捧げずにはいられませんでした。……

六月四日（晴）　第二日　高崎――日光中禅寺湖　笠間千代

…「今日もお天気がよくてよいわね」と話合ふ。故郷離れて遠い栃木の野を汽車は走っているが私達は少しもそんな気がし

ない。ただ面白さで胸が一杯だった。やがて四時四十五分高崎へ着いた。……

「あらたふと青葉若葉の日の光」これは芭蕉が日光で詠んだ自然美を礼賛した句だといはれますが、東照宮はそれ等の美しい自然を背景にして建てられた別格官幣社で社殿の美麗なことは「日光を見て結構を知れ」と云うの通り人工の美を極めたものだとしみじみ思いました。……関東の麗山男体山を見た時は絵で見る富士山の様に美しくやさしくそびえ立っている姿はなる程麗山だと思ひました。その前にある中禅寺湖の景色のよいことといったら口にもいふ事が出来ない位で皆歓喜の声を上げました。……

六月五日（晴）　第三日　日光中禅寺湖――東京　鍛治　みどり

……十時四分日光発。車中の人となるこれより我が国の学術、文化、交通、政治総ての中心地たる大帝都に向ふのである。……上野々々といふ声が聞えた。皆我先にと下車した。降りて見ればさすがは立派なものだった。プラットホームには出迎えの人或は宿の主人が旗をあげて迎へに出ておられた。……あはたゞしい上野広小路を横切って先づ上野公園内の科学博物館を見学。中に入ると一階は理工学部、二階動物学部、三階植物学部及び地学部とあって私達に多くの新しい知識をあたへてくれた。園内の道に沿って両側には緑色濃き芝生が一面にはびこり塵一つなく掃除されてあった。この交通頻繁な雑沓した帝都の裏にもやはりこのやうな心を静寂にする個所のあるのは都人にとってはどれだけの慰安ともならう。……

六月六日（晴）　第四日　東京市内見学　　日向　喜代

……私達は自動車に貼ってある番号の通りに八台の自動車に分乗した。思った様にふわりとした椅子に腰を落着ける、旅館に「行って参ります」の視線を投げて七時に出発した。自動車は気持好さそうにアスファルトの道路を走る。六月の微風は私達の熱した頬をなでて行く。……ゆるやかな九段坂を上りつめて靖国神社に参拝する。……ここに幾度かの大戦に皇国の為に護国の花と散った忠勇なる武人の永霊が祀ってあると思ふとひとしほ感慨にうたれた。……明治神宮がこんなにきれいに樹木が植えられたのも我が国の青年がこぞってこの事業に従事した汗と涙のたまものだそうです。いかにこの人達否日本全国民が明治天皇の御仁慈をおしたい申したかが伺はれます。……乃木大将、夫人の自刃なされた室を見る。古くなった畳の上に薄黒く血の跡が残ってゐた。そして室のものはすべて質素そのものでよく大将、夫人の質素な生活が思はれもったいなく感じた。……おゝ皇居だ!!　一日も忘れる事の出来ない皇居だ!!　左右に長くつゞいた青々とした堀、それにかけられた二重橋、色濃き松の間に見える白壁の皇居、すべてが絵そのものの如く初夏の青空にくっきりと浮んでゐる。

私達はこれを見た瞬間何とも云へない気分が胸に満ちあふれひとりでに頭の下るのを覚えた。……泉岳寺―浅草―三越、松坂屋……用意してある食膳に急いでつく。今日の食事はいつもより一層おいしい。……

六月七日　（曇雨後晴）　第五日　東京―横須賀―鎌倉―江ノ島

略

六月八日（晴）　第六日　江ノ島―藤澤―名古屋―二見　西村きみ子

……青葉、若葉の春が漂うている。六月の快風が時々車中に舞込みさっと通りすぎる。でも列車は只無心に原野を走る。おゝ懐しき窓外の風景いつまでも……かねて私達のまちこがれて居りましたあの美しき富士の山「雷様を下に聞き富士は日本一の山」といふ歌が思ひ出される。……あゝ何といふ残念な事でしょう。あの美しい日本一の富士を見ないでどうして楽しい旅行のお土産話が出来ましょうと……「田子の浦うち出て見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつゝ」の山部赤人の名句が思ひ出される信濃。の連山、愛鷹山、駿河湾の碧色、羽衣の謡曲で名高い三保の松原――大井川――二見ヶ浦――二見の夜は全く幽寂であった。

六月九日（晴）　第七日　二見―伊勢―名古屋　喜田久子

……日の出を拝まんと急いで海岸に向った。朝の空気は冷たく、吹く潮風も身を切るばかりに冷たい。然しながら寒い中にも心地よい朝でした。……朝食をすませ直ちに宇治山田に向ふ。……清き五十鈴川の流れにて、口すすぎ手を清める。唯ならぬ静寂さに一同一糸乱れず。白い小砂利敷の参道を通って拝殿に向ふ。……名古屋城―熱田神宮―やがて名古屋市は夕闇にとざされる頃、私達は故郷へと向ふ車上の人となった。……

六月十日（晴）　第八日　名古屋――松任　川東秀子

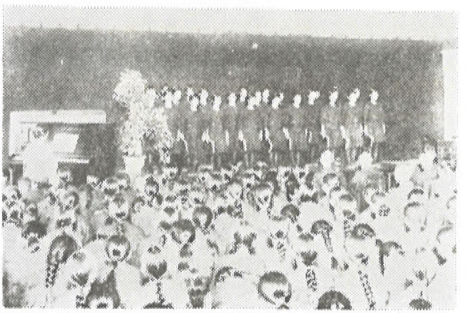
……「米原〳〵」と呼ぶ駅夫のかすかな声を耳にした時は、うつら〳〵眠りについた人もみなその声にパッと目を覚ました。ここで乗り換へする。……加越の境をなす牛の屋トンネルをすぎた。列車はなつかしい北陸の第一歩を踏み込んだのだと思ふとたまらなく嬉しさがこみ上げてくるのを覚えた。……やがて洗面所に行き髪をとき始めた。汽車は容赦もなく加賀笠間についた。……あゝ……私達の胸に秘めた過ぎし旅の印象を繰返し〳〵思ひ浮べてほゝえむ。嬉々とした乙女等は重いトランクを膝の上におろし、あちこちから微笑をもらす。間もなく四時五十二分、いひ知れぬ歓喜のまなこを躍らせながらなつかしの父母います松任の駅におりたった。……

また昭和一五年組の回想によれば

修学旅行も私達が最後の関東関西方面五日間の日程で楽しい思い出がある。東京で頂いたお弁当はポロ〳〵の外米だったことも矢張り戦時色が少しずつ加わってきたことと思いました。

学生時代の映画観賞もなかなか許されなかったあの頃でありましたのに東京の国際劇場で李香蘭主演の〝支那の夜〟を厳しい筈の開発先生、加藤先生引率で許可され、びっくりするやら嬉しいやらで、うっとり李香蘭の歌声に耳を傾けていたものでした。

戦時色を帯びてきたとは云えやはり楽しさ一杯だった様子を伺うことができる。



音　楽　会

○音楽会　昭和三年一一月、町有志、実業学校同窓会員、在校生徒、学校職員の寄附で御大典記念事業が行われたが、新しくピアノが購入されたこともその一つで、その披露をかねた御大典記念第一回音楽会が開催された。以後この時期に毎年盛大な音楽会が行われた。日頃音楽の時間に練習した合唱・斉唱や、独唱・独奏など女学生の音楽は在学中に数多く身につき、女学生愛唱歌として卒業後も事あれば、当時を偲び、レパートリーも広く歌って尽きないのである。昭和八年一一月二八日に行われた音楽会は次の通りである。

龍田の姫が織りなせる錦の眺めも日増しに色褪せて、一葉散り、二葉散り寂しく暮れんとする凋落の秋！　十一月二十八日、しと〳〵と冷い時雨そぼ降る日でありましたが、午後一時より多数の来賓父兄の方々の御臨席を仰ぎ、村上さんの開会の辞があり、楽しいプログラムは繰り拡げられました。　（第九号会誌）

とあり、当日は前音楽の先生であった小幡初枝先生も七尾高女からお出でになって賛助出演され、郡内の小学校（尋常科、高等科）からも協力出演があり、盛大な音楽会であった。プログラムは次のようであった。

第六回　音楽会プログラム

君が代合唱

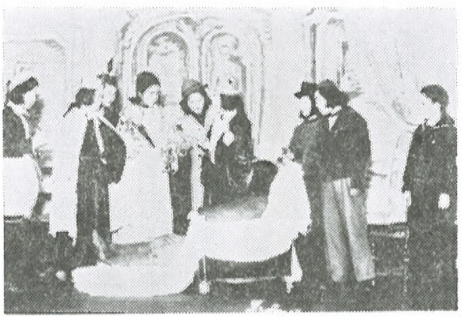
第一部			
第一回	合唱	同朋の歌	全体
第二回	オルガン独奏	エチュード	二年　橋本　久子
第三回	合唱	日出づる国	一年　全　体
第四回	独唱	かもめ	四年　坂　一子
第五回	合唱	わがオールドケンタッキホーム	二年　全　体
第六回	斉唱	波がざんぶりこ、夢	美川校尋四　亀井美智子外六名
第七回	ピアノ独奏	ハッピーファーマー・菫ガボット	三年　橋場　智恵
第八回	独唱	風　鈴	御手洗校尋六　大谷　久子
第九回	合唱	空を護れ	三年　全　体
第十回	独唱	子守歌	二年　相木　栄子
第十一回	斉唱	古るつるべ	白　山　校
第十二回	合唱	ギャザリングホーム	四年　全　体
第十三回	独唱	ジョスランの子守歌	泰　先　生
第二部			
第一回	合唱	非常時日本の歌	二年　全　体
第二回	ピアノ独奏	スコッチソングバリエージョン	二年　米永千鶴子
第三回	合唱	おの山蔭	一年　二十名
第四回	独唱	去り行きし友	四年　安田　芳江
第五回	合唱	森の歌	二年　二十名
第六回	ピアノ連弾		押野校　大澤トシ、安田信子

第七回	合唱	サンタルチア	三年　盛本豊子、橋場千恵子外二十名
第八回	独唱	篠原	押野校　高一　高橋富子
第九回	ピアノ独奏	エチュード	三年　吉本　一子
第十回	独唱	野ばら	相川先生
第十一回	合唱	薄原	松任校高女　安島外子外二十七名
第十二回	独唱	ささ舟	三年　吉田　節子
第十三回	合唱	ホームスイートホーム	三年　全　体
第十四回	ピアノ独奏		七尾高女　小幡先生
第十五回	合唱	ドナウ河の漣	四年　全　体
校歌合唱			

○夏休み作品展　昔も今も問わず、夏休みには多くの宿題に悩まされた。あとから考えれば随分役にも立ち、よい思い出となり、又その時でなければ得られない体験でもあったのであるが……。

休暇あけの九月上旬、夏季作品展が催され、互いにそのできばえを鑑賞し合ったものである。植物採集・昆虫採集・手芸作品・科学研究物など長期に亘る個人研究もあり、グループによる大型のものもあった。そのひとつに、昭和一〇年の夏、二年生全体で、石川県五万分の一の模型を作ったことがある。数名ずつグループとなり、計画された部分の製作である。主な材料はボール紙、五万分の一の地図、彫刻刀などでこれを使って来る日も来る日も暑さと戦っての作業、等高線の彫刻である。二学期に入ってこれが並べられ、エナメルで着色、細部の記入が終って仕上った時の喜びは忘れられないものがあった。

又「常用語選」という漢字練習の冊子を用いて夏休中に三回練習を課せられたことがあったが、それは大変根



学　芸　会

気の必要なことで苦しかったが、この時覚えた漢字が生涯自分のものとして役に立っていることは誠に有難い課題であったといわねばならない。

○学芸会　三月三日、桃の節句の佳き日を選び毎年学芸会が催された。記録に依れば、午前中同窓会、午後から学芸会というスケジュール、勿論父兄も見学した。会場は女学生らしく飾られてムード満点、年中行事の最後を飾る楽しいものであった。呼びものの各級から出される劇は乙女の感傷を盛り込んだ名演技も多くて特に素晴らしく又、当時の学習目標「貞淑な女性」「時局にふさわしい」内容のプログラムであった。

昭和九年三月三日に行われた学芸会のプログラムは次のようであった。

学芸会　プログラム　（昭九・三・三）

君が代斉唱　　全　体
一、非常時の歌　　三年　粟津数栄子
二、食物の選択について　　二年　宮本　久恵
三、曙の子等よ　　四年　日向　喜代・林藤　愛子
四、石川県の気候　　一年　中山二三子外十九名　伴奏　吉本　一子
五、姉　妹　　三年　徳田　シノ
六、ミレーの妻　　二年　喜多　敏子
七、生物界の外的防禦　　三年　稲垣みつ子　伴奏　吉本　一子
八、小　波

九、勿来の関　一年　西田敏子外九名
十、化学実験　三年　山田菅子外六名
十一、ダンス飜る日章旗　二年　中川千代子・石黒恵美子
十二、スピーチ・フラッグ　一年　増田　国子・中村　和子・塗師みゆき
十三、うつくしき　二年　相木栄子外二十名
　伴奏　米永千鶴子
十四、デンマーク婦人とその生活　四年　岩本　めさ
十五、菅公婦人　二年　北坂喜美子
十六、ピアノ独奏ソナチネロイド12番　三年　橋場　智恵
十七、明き浄き直き心　四年　村上　華子
　校歌斉唱

体育面での活躍

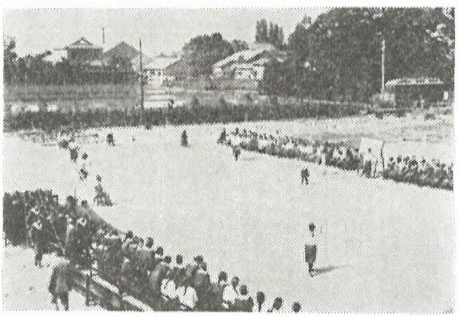
一〇月一〇日前後に行われる秋の運動会は恒例の全校行事であるが、春の運動会、学年対抗の排球、庭球大会など若いエネルギーを発散させるに足るもので、昭和八年頃の運動会種目は次のようなものであった。

十月十四日　第七回秋季運動会

暁の空を破りて轟く一発の花火の音に血湧き肉躍る。待たれし此の日の歓びを轟く胸に秘めて駈け集る。開会を今や遅しと待ち侘ぶる乙女子等の、見よ、緊張せるその顔を、張り裂けんばかりのその肉を。荘厳なる国旗掲揚並びに開会式後全生徒のラジオ体操により演技の幕は切らる。番組順に従い或は勇壮活発なる走技に或は優美曲雅なるダンスは次第に押寄する観衆をして或は手に汗せしめ、或は又恍惚として楽土に遊ぶの感を抱かしめたり。

左に番組及び主なる成績を掲ぐれば

一、国民保健体操（第一）　全　体
二、五十米競走　四　年
三、キックボール　一　年
四、シングルドリブルボール　二　年
五、五十米競走　三　年
六、仕度競走　四　年
七、ダンスオブジョイ　フレンチリール　一　年
八、フットベースボール　三　年
九、五十米競走　二　年
一〇、健康体操　四　年
一一、輪跳び競走　一　年
一二、排　球　紅白選手
一三、五十米競走　一　年
一四、ハードルレース　二　年
一五、ユモレスク（ダンス）　二　年
一六、籠　球　紅白選年
一七、女子用聯盟体操　三　年
一八、扶桑行進（ダンス）　一　年
一九、スカンヂナビヤマーチ　三　年
二〇、五十米競走予選　各学年選手
二一、思い出の日（ダンス）　四　年
二二、綱　引　全　体
二三、国民保健体操（第二）　全　体
二四、自力更生競争　一　年
二五、ボートレース　四　年
二六、ベースボールダンス　二　年
二七、難局打開　三　年
二八、五十米競走決勝　各学年選手
二九、輪跳び競走　二　年
三〇、金波銀波（ダンス）　三　年
三一、買物競走　四　年
三二、連続体操　全　体
三三、ダンスプレアー　椿　一　年
三四、スローエンドキャッチボール　二　年
三五、敷島行進　四　年
三六、四百米継走　紅白選手
三七、三笠行進　三　年
三八、四百米継走予選　小学校女子選手
三九、エヂプトダンス　二　年
四〇、金婚式（ダンス）　四　年
四一、四百米継走決勝　小学校女子選手
四二、キックボール　来賓・男子職員
四三、スプーンレース　同窓生・女子職員
四四、プロネード　全　体



校内庭球大会

以上のプログラムにより、順次進行し夕日西に傾きかけんとする頃盛況裡に閉会す。

当日本校の紅白勝負の結果紅二百九点、白は百九十一点にて紅組の勝となり栄ある花輪を受く。小学校継走の結果一等山島校、二等押野校、三等林中校、四等御手洗校となる。顧るに本年は充分な練習をなし得なかったのでよい成績を示すことが出来なかったのは誠に残念でしたが来年こそうんと絶えざる研究と練習とを積んで清新なる気分と健康の増進とに努めたいと思います。

このほか対外的に行われる左の体育会には本校の選手も出場して大いに活躍した。主なものをあげれば、

○県下女子中等学校庭球大会（六月）　北陸毎日新聞社主催　於　第二高女
○北陸四県女子中等学校生徒庭球競技会（一〇月）
　北国新聞社主催　於　第一高女
○県下女子中等学校体育大会（一〇月）　於　金沢公設グランド
○加賀地区女子中等学校体育大会（昭和一二年から六月）　会場は地区持ちまわりで、生徒数の少ない学校ながら県下の各校に伍してよく活躍、特に金沢公設グランドでの県下女子中等学校体育大会には各種目に選手を送ったのは勿論、選手以外の生徒も弁当持ちでこの会場まで遠足して応援をしたのである。

北陸毎日新聞社主催　県下女子中等学校庭球大会　本校より三組出場、その成績

六月十八日　日　晴

恒例による北陸毎日新聞社主催県下女子中等学校庭球大会は初夏の廣坂原頭女子師範コートに於て開催せらる。本校より三組出場戦績次の如し。

第一回戦

◎女師（大川）四―二 本校（稲垣）
女師（片山）四―一 本校（今本）
女師（山本）四―一 本校（林）◎
◎女師（小林）四―三 本校（黒川）
◎一女（高村）四―一 本校（任田藤）

第二回戦

◎一女（飯田）四―一 本校（任田）

県下女子中等学校体育大会出場選手及種目

九月三十日第八回県下女中等学校体育大会は例年の如く金沢市公設グラウンドに於て午前八時半より開催さる。此の日天高く絶好の運動日和に恵まれ、各校選手の活躍は素より応援団の声援も一段と目覚しきものあり。

当日本校よりの出場選手名及び種目は

五十米	平田	鹿子	永井	文子	前田　静
百　米	披岸	静枝	永井	文子	吉田　敏子
二百米	松田	敏子	平田	鹿子	稲垣みつ子
走巾跳	竹鼻ひさ子		太田	清子	田村　淑子
三段跳	東元	愛子	稲垣みつ子		
走高跳	竹鼻ひさ子		東元	愛子	太田　清子
砲丸投	山田	とめ	北野	美代	買手屋文子
籠球投	山田	とめ	北野	美代	
二百米継走	平田	鹿子	披岸	静枝	永井　文子　竹鼻ひさ子
四百米継走	東元	愛子	平田	鹿子	松田　敏子　竹鼻ひさ子
籠　球	浅田	美枝	島畑ふじ子		澤田　芳子　林　可壽子　小鍛治信子

（補）南　千江子　中野　貞子　増田ます子
排　球　岩本　めさ　吉本　一子　八木　光子　成　外喜子　村上　華子　今村　八重
中村　キヨ　西井　美代　森田　鈴子
（補）西村きみ子　山本　豊子　中村アヤ子　勝島　光子　相木　榮子

尚当大会にて作られたる最高記録は

五十米　七秒一　百米　十三秒六
二百米　二十八秒六　走幅跳　四米六三
三段跳　九米六六　二百米継走　二十七秒五
四百米継走　五十六秒三

また、昭和一五年六月七日、小松に於ける加賀地区体育大会では体操の末松先生が急に退職されてその補充もないままに参加することとなり、それこそ全校一致団結しての出場、そして、バレー、ランニング、綱引競技に見事優勝の栄冠を得ることができ、共々に手を取り合って喜んだのである。

昭和一六年は松任小、昭和一七年は小松で全員徒歩で参加、昭和一八年は大聖寺で選手のみの参加となった。

水泳練習にも海国日本の女性は須らく泳げなければならぬ、というわけで毎年七月下旬になると、夏休みを前に一週間から一〇日間の水泳練習が行われた。場所は、徳光・八田浜・相川海浜で、真夏の砂利道往復六粁ぐらいを真黒に陽やけして通ったものである。

全体のレベルを上げるため、先ず、全生徒がこれに参加することを本体とし、講師を招いたり、級別目標を立ててその達成に努めるなど綿密な計画のもとに練習に励んだことは次の表で伺うことができるのである。

特に松任町に五〇メートルの立派なプールができてからは練習も便利になり、愛好者はシーズン中日暮まで練

習に励んだのである。

◇水泳部記事

世界に輝く水泳国日本、冬のスキーと共に理想的運動である水泳、県下一のプールを控えている我が校、桜も散り四方の緑漸く濃くなる頃から私等は今年こそはと腕を抑へ脚をさすったのでありました。然し不幸にも我がプールは公認とするため工事を起し漸く七月上旬になって開かれたのでした。私等は他校の練習振りを耳にし気が気でなかった。

七月二十二日行はれた中部日本水上大会と八月五日の県下中等学校大会を目標に新陣容を以って練習を続けました。

尚本年は一部選手のみならず全校に水泳の普及を計るため全校の水泳練習会の練習期間を長くし水泳松任高女の目標を高く掲げたのであります。以下本年の動勢を簡単に記して来らん年の飛躍に資したいと思います。

一、水泳練習会（松任プール）

1. 方　法

一、期　日　自七月二十一日至七月二十九日

但し七月二十三日及二十六日休む、尚二十五日は八田浜に遠足海水浴をなした。又二十五日以後は二年以上は随意者

二、時　間　自午前九時半至仝十一時半

三、其　他　詳細なプランを樹てて行ったのでありますが略します。尚本年は予算の関係等により水泳講師を招聘することが出来なかったのは残念でしたが諸先生の御努力とお互の励みによって相当の成績が挙げられたことと信じます。

2. 成　績

一、日々参加数調

学年 / 日次	別	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	計
	練習					
	見学					
	練習					
	見学					
	練習					
	見学					
	練習					
	見学					
	計					

月												
七	三六	一四	三九	七	三三	一二	二二	二七	一二九	六〇	一六三
〃二十一日	三九	一八	三四	七	二九	九	二二	一六	一一三	四〇	一六三
〃二十二日	三五	一四	二八	一五	二五	九	一五	二二	一〇三	五九	一六二
〃二十四日	四三	三	三五	一	四一	〇	二三	六	一四二	一〇	一五二
〃二十五日	九	二二	—	—	—	—	—	—	九	二二	二二
〃二十七日	九	一七	—	—	—	—	—	—	九	一七	二六
〃二十八日	一八	一八	一五	一一	一二	一一	一六	四	七一	四四	一一五
〃二十九日	一九九	八六	一五一	四一	一三〇	四一	九六	七四	五七六	二四二	八一八
計											

二十六日以後の随意練習にも相当出席した。

二、皆勤者及精勤者調

学年	皆勤者	精勤者	計
第一学年	三	七	一〇
第二学年	五	二〇	二五
第三学年	一一	八	一九
第四学年	七	七	一四
計	二六	四二	六八

三、進級者調

学生	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級
一年	—	—	—	—	一	一	—	三	四
二年	—	—	—	—	—	二	四	—	—

三年	一	一	四	—	—	—	二	—	三
四年	—	—	二	二	四	—	一	—	一
計	一	一	六	五	五	三	七	三	七

四、練習前と練習後の相違

開始当日と最終日にテストを行いました。其の成績の大体は次のようであります。

	開始前	終了後
一年	一、浮ク人　数人 二、一〇米位泳グ人　二人 三、其他ハ浮クコトモ出来ナイ	一、殆ンド凡ベテ浮クヨウニナッタ 二、五—一〇米位泳グ　十五人 三、一〇—三〇米泳グ　七人
二年	一、一五米—三〇米位泳グ人　四人 二、三〇米以上泳グ人　三人 三、其他ハ浮ク人ト沈ム人ト半々位	一、五—二〇米泳グ　六人 二、二〇米以上泳グ　七人 三、其他殆ンド浮クヨウニナッタ
三年		一、五二〇米泳グ　九人 二、二〇米以上泳グ　九人 三、其他殆ンド浮クヨウニナッタ
四年		一、二〇米位泳グ人　二人 二、二〇米以上　九人 三、浮ク人沈ム人半々

以上の表で明かなように見学者や休んだ人（病気以外に）相当多いが将来は身体に注意して病気のために出来ない人其他見学の人も一人もなく全校こぞって参加して欲しいものであります。

地元にプールのあることは大きな強味で、毎年行われる各種水泳大会への参加選手の層も厚く各種目に選手を

送り込んで頼母しい限りであった。特筆すべきもののうち、昭和七年七月二二日に行われた北国新聞社主催中部中等学校水上競技大会各種目に選手を送ったことと、わが松任高女のホープ吉本一子さんが個人優勝をされたことである。これに続いて七月三〇日の全日本水上競技選手権大会地方予選で、二〇〇米自由型、一着（三分一四秒）四〇〇米自由型、一着（七分四七秒）の好記録で選手権を穫得、八月一二日から三日間、明治神宮外苑プールでの大会に出場、入賞には至らなかったが世界記録も出たこの大会に出場されたことだけでも大きな意義があったのである。更に、八月二六、二七両日松任プールで行われた、中部日本水上競技大会及第七回明治神宮体育大会水上競技予選で又々五〇メートル、一〇〇メートル自由型に一着、二〇〇メートル自由型に三着の成績をおさめ、九月一六、一七両日宝塚プールでの全日本水上競技大会で関西選手権穫得、九月二三日名古屋市外西清洲プールで関東・関西対抗水上競技会に関西選手として出場されるなど、自由型においては完全に北陸水泳界ばかりでなく日本的選手として大活躍されたのである。次の記録で当時吉本さんと共に活躍した選手たちを知ることができる。

◇　中部中等学校水上競技大会

北国新聞社主催の下に七月二十二日午後女子部が開催されました。私等は新陣容と練習の期間がなかったため十分な自信はなかったけれども度胸試めし腕だめしの心算で出場致しました。参加校は富山の魚津高女と小松、本校の三校でした。

本校当日の出場者は次のような方々です。

五十米自由型　吉本　一子　吉田惠美子
百　米　〃　吉本　一子
二百米　〃　吉本　一子
五十米背泳　黒川千代子　小西智惠子

二百米リレー　吉田惠美子　吉本　一子　高森　祥子　北野　美代

出場選手は最善をつくされましたが時に利あらず入賞し得なかったのは残念でした。吉本一子さんは出場全種目に優勝され個人優勝の栄を得られたのは心強い次第であります。

◇　全日本水上競技選手権大会地方予選

石川県体育協会主催で七月三十日松任プールで開かれました。参加者は皆北陸の覇權を目指し意気軒昂たるものがありました。本校からは吉本一子さんが出場されました。其の成績は次のようであります。

二百米自由型　一着　三分一四秒

四百米　〃　〃　七分四七秒

自由型は殆んど吉本さんの独り舞台で寂しい感がありました。然し好記録を出されいよ〳〵晴れの檜舞台神宮プールに出掛けることになったのであります。

◇　第六回石川県女子中等学校水上競技大会

八月五日松任プールで行われました。参加校は七尾と小松、本校の三校で本校からは次の選手が出場されました。

五十米自由型　平田　婦美　吉本　一子　吉田惠美子

百　米　〃　吉本　一子

二百米　〃　吉本　一子

五十米背泳　小西智惠子　林　可壽子

百　米　〃　同

百　米平泳　岩上登美枝　日向　喜代

二百米リレー　平田　婦美　吉田惠美子　高森　祥子　吉本　一子

成績の本校に関係あるものを摘記すると

五十米自由型　一着　吉本　一子　三六秒七
　二〃　春木　和子　（七尾）
　三〃　春木　節子　（〃）
　四〃　源　明翠　（小松）

百米自由型
一着　吉本一子　一分二六秒一
二〃　春木和子　（七尾）
三〃　源明翠　（小松）
四〃　大野木清子　（七尾）

二百米自由型
一着　吉本一子　三分六秒四
二〃　鶴崎芳子　（小松）
三〃　春木節子　（七尾）
四〃　源明翠　（小松）

五十米背泳
一着　鶴崎芳子　四七秒六
二〃　菊川泰子　（小松）
三〃　伊藤まさ子　（七尾）
四〃　林可壽子　（小松）

百米背泳
一着　鶴崎芳子　一分四七秒四
二〃　菊川泰子　（小松）
三〃　伊藤まさ子　（七尾）
四〃　林可壽子　（小松）

二百米リレー
一着　七尾高女チーム　三分〇秒
二〃　小松チーム
三〃　本校チーム

林可壽子さんは二度ともタッチの差で四着になられたのは残念でありました。尚其他の出場の皆様も全力を尽されましたが時に利あらず惜しいところで敗れたのでした。

当日の得点は本校二一点、小松高女四八点、七尾高女四八点で小松七尾は同点でしたが小松に一着が多いといふ理由で遂に優勝の月桂冠は重ねて小松のものになりました。私達は来る年こそはと苦杯を呑んで堅く〳〵決心したのであります。

◇　全日本選手権水上競技大会

八月十二日から三日間明治神宮外苑プールで行われました。本大会に於ては多くの世界新記録が出たのですが是等の日本的否世界的の人々に伍し我が吉本一子も奮闘されました。二百米と四百米自由型に出場されたのですが番組の運悪く強い組に入れられ又平常の調子も出ず予選にもれたことは返へすく〳〵も残念なことでありました。もっと応援も多く力づける人が沢山あったらと夜遅くプールから帰る道すがら（競泳は殆んど夜間行われた）思うのでした。然し吉本さんも大いに得る所

があったと信じて居ります。

◇　中部日本水上競技大会及第七回明治神宮体育大会水上競技予選

八月二十六、七日松任プールに於いて石川県体育協会及松任町主催で開かれ本校からは吉本一子さんに出場して戴きました。其の成績を摘記しますと次のようであります。

五十米自由型　一着　吉本　一子　三七秒五
　　〃　二〃　稲田　ヌイ（京都二高女）
　　〃　三〃　山本マチ子（　〃　）

百　米　〃　一着　吉本　一子　一分二六秒三
　　〃　二〃　赤塚　淑子（京都二高女）
　　〃　三〃　山本マチ子（　〃　）

二百米　〃　一着　永井　アイ（京都二高女）
　　〃　二〃　赤塚　淑子（本　〃　校）
　　〃　三〃　吉本　一子（本　〃　校）

以上がシーズンに於ける私等の動勢の大要でありますが以上を顧るに種々の事情のため練習充分ならず優秀な成績を収め得たといえないけれども本校水泳部制覇の基礎を作ったことは否めない、尚本校水泳部の重鎮であり誇りである吉本一子さんは本年其の技益々冴え各大会に於て昨年の記録を凡べて更改し自由型に於いては完全に北陸水泳界に君臨さるるに至ったのは私等のほんとに誇りとするところであります。最後に選手の練習に就いて終始熱と技とを以って導いて下さった佐田氏（東北帝大在学）に深甚の感謝の心を棒げる次第であります。

吉本一子さんは卒業間もなく、前県水協理事長で関学時代マニラの極東オリンピックに出場された自由型の泳者、大崎卯藤久さんと結婚され、「一子さんの子は生れた直後から盥の中で泳ぐのではないかしら?」なんて噂されたが、その噂通り、オリンピック選手二人を送り出したおかあさんとなられたばかりでなく、夫婦揃って石川県水泳界の名指導者として大きく貢献しておられるのである。

なお、本校主催で小学校女児排球競技会が毎年、七月中、下旬の日曜日に開催されている。記録に依れば昭和

三年七月、第一回郡内小学校女児排球大会が行われ、以後、昭和一五年、第一二回まで続けられている。

昭和六年には二二チーム、昭和一三年には一五チームと毎年盛会を極め、或年には日が暮れても決戦に至らず、翌週に持ち越されたこともあった。当時女子の球技として広く行われていたことも伺えるのである。

昭和八年に行われた石川郡女児排球大会の記録

七月二十三日午前九時より第五回郡内小学校女児排球大会を本校々庭に於いて開催す。参加校二十三校の処、二校の棄権を見、結局二十一校となる。十七日開催の所雨天のため延期したるは遺憾なりき。今年も又金石校の優勝する処となり、午後五時盛会裡に閉会す。

尚当日の試合戦跡左の加し

一回戦

郷校	3	9	―	15	15	鞍月校○	
鶴来校	3	12	―	15	15	金石校○	
○館畑校	16	17	―	14	15	御手洗校	
額校	5	8	―	15	15	柏野校○	
野々市校	6	16	―	15	18	崎浦校○	
一木校	10	12	―	15	15	犀川校○	
○林中校	15	10	15 ― 13	15	10	中奥校	
松任校	12	4	―	15	15	大野村校○	

二回戦

鞍月校	14	9	―	16	15	金石校○	
○比楽嶋校	15	15	―	10	5	館畑校	
林校	11	13	―	15	15	富奥校○	
柏野校	9	13	―	15	15	崎浦校○	
○犀川校	15	15	―	1	11	出城校	
林中校	5	12	―	15	15	大野村校○	

三回戦

○金石校	15	15	―	13	4	比楽島校	
○崎浦校	15	15	―	11	4	犀川校	
富奥校	11	11	―	15	15	宮保校○	
○大野村校	15	15	―	5	12	林中校	

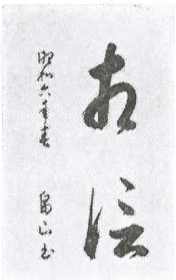
準優勝戦

○金石校	15	15	―	12	6	宮保校	
崎浦校	15	12	9 ― 11	15	15	大野村校○	

優勝戦
○金石校　15　7　15
　　11　15　13　大野村校

初代畠山校長の退職

地方事務官畠山氏が加藤校長の後任として着任されたのは昭和二年二月二六日であった。時恰も女子実業学校の県移管、高等女学校創設という大役が待ち受けている時で、爾来、諸般の校務遂行のために尽力され、女子実業学校の終りを見届け、高等女学校の基礎を立派に作られたのである。氏は長野県視学、県秘書課長、教育行政に精通した方で、共に勤務された開発先生の御回想に依れば「対社会的には少しの隙も見せぬ慎重さをもっておられた。その謹直さ常に威厳を保ち、一挙手一投足にもその人となりを感ぜさせられ、初代校長の生徒に及ぼした影響も大きい。報告文などにも一字一句も忽にすることがなかった……」と結んでおられる。



畠山校長筆蹟

生徒達の受けた感銘も深く、その印象として異口同音に発する言葉は、威厳と慈愛、この二つの偉大な教育精神の権化として実に生徒達から尊敬され、本当にこの偉大な二つの徳が身に備ってこそ真の教育者といえるのではなかろうか。氏は在職中一日として欠勤されたことなく、本校の教育のため全く文字通り粉骨砕身、犠牲的・献身的の努力を払われたのである。恐らく先生の心は寸時と雖も学校のこと、生徒のことが心から消えなかったのではなろうか。

在職六年、昭和八年三月三一日で退職され、郷里珠洲で静かに悠々自適の余生を過されることになったのである。昭和八年四月一六日午後、清輝会主催で畠山校長の送別会が催され、卒業生、在校生に別れを惜しまれ、午後四時〇四分発列車で帰郷の途に着かれた。職員、生徒、清輝会員多数が駅頭に先生を見送ったのである。

第九号会誌は畠山校長退職記念録号となった。その一部を掲載して先生を偲ぶこととする。

思　ひ　出

四年　中　村　アヤ子

私達を過去一年前まで朝に夕にお導き下されました校長先生……入学して以来の間、父と頼み、母ともしたひ、何一つ知らなかった私をこれほどまでに育んで戴きました校長先生、まあ何と思ひ出深いことでありませう。

入学当日の最初の印象として校長先生の威厳があり。そして厳格な中にも愛情の籠ってゐる様子が胸の奥に刻まれて居ます。

或雨の日の事でした。まだ学校へは誰も来て居ない朝早く、びしょ濡れになって校門まで来て校長先生と出会ひました。すると、校長先生は「まあ遠方からこられたと見えて随分濡れてゐますね。傘は其処に広げて置いて小使さんの処へ行って乾しなさい」と入学して日も浅く、ただ一人困って居た時に教へて下さいました。此の親切なお言葉は雨の降る毎に思ひ出されてなりません。

又私達が選手として予念がなかった時、毎日毎日真赤な夕日を背に受けながらまた練習を続けてゐました。其の頃でも校長先生は手を背にくんで向ふの隅、こちらの木蔭とボールの転ってゐるのを拾って来て下されました。

此の慈悲深い校長先生の事を思ひ出すと限りがありません。

女学校を創設されて以来、雨の日も、風の日も一生懸命に学校のために務められて、こんな立派な学校になったのです。この立派な学校を、校風を、校長先生の形見として、いつ〳〵までも立派にして行きたいと思ひます。

ありし日の思ひ出

三年　八　木　光　子

コツ〳〵〳〵廊下を踏む、靴の音……

浄らかな空気に満たされた静かな校内は、なごやかな春の日差ともつれ合って、楽しい母校の情況を思はせる。

コツ〳〵〳〵靴の音はだん〳〵近よって来る。私は、はたと廊下の曲り角で立ち止まった。

黒かばん片手に、ねずみ色の中折帽を行儀よく頭に乗せられ、ステッキを小脇に品よき體をゆったりと前へ運ばせたまふ

人。

「あゝ畠山校長先生」心に叫んだ私は反動的に

「お早うございます」とお礼を致しました。

「お早うございます」先生は、ていねいに帽子をお取りになり、顔に満心の笑を浮べて御挨拶なさゐました。

あゝ。慈父の様な、柔和なまなざし。慈父に満ちたあの笑顔……先生とお別れ致しまして早や一年は過ぎましたけれども、露の朝に、楽しい運動競技に、或は御訓話の際にいつも思ひ出されるのは、あのやさしいまなざしと品のよい笑顔であった。

「ありし日の思ひ出」私は畠山校長先生を思ひ出す毎に此の句を思ひ出すであらう。

二代川岸校長の着任

昭和八年四月一日、石川県女子師範学校から、川岸音二氏が着任された。初代畠山校長の後を受け、その基礎の上に更にその充実を期して努力されたのである。先生の教育に対する所信は次の一文で知ることができる。



二代校長　二川岸音二

明治二三年一二月二日、富山県射水郡老田に生まる。明治四四年三月、富山中学校卒、大正四年広島高等師範学校本科を卒業。広島県世羅女学校・三原女子師範学校・朝鮮公立普通学校・関東庁中学校・旅順中学校・京都府立第三中学校、石川県立第二高等女学校・県女子師範学校・石川県立金沢第二高等女学校各教諭、昭和三年一二月、県女子師範学校付属小学校主事。昭和五年県視学委員を経て、昭和八年三月、石川県立松任高等女学校長となる。その後同十年四月、羽咋中学校へ転任。

須らくかく修養せよ

校長　川岸音二

一、如何なる事を為す場合でも、全精神を打込み渾身の努力をなすべきである。これ本校が「全力傾注」を標語とする所以である。凡そ事を為すに浮調子で精神が打込まれてゐなかったならば、能率の上らざることは勿論其成功は覚束ないので

ある。現代の風潮は青年男女をして「要領さへよくやれば」といふ気分に導いた、非常時に処する道は万事に全精神を打込んで満身の努力を持続する事にある。

二、常に正直正明一點の曇りなき鏡の様に、濁りなき水晶の様に正しく透明な明るい心を持て。正直正明は女性ならずとも人間として要求せらるべきことである。言動に何となく透明さを缺く人であり、心に濁りのある人である。日常心に邪念の現はれた時は直ちに其萌芽を駆逐し透明ならしめる様修養すべきである。心の曇りは利慾疑念から起る。利己慾を捨て人を信ずれば心の曇りが自ら散ずる、女性の心の曇りほど醜いものはない。

三、朝夕必ず皇室を拝し神仏を念ぜよ。生を此の世に得るは皇室神仏の御蔭ならざるはない。自己を虚にし神仏に念ずるは吾身自ら已に神仏となってをるのである。神仏を念ずるは吾が身を誠にする所以である。皇室に感謝し祖先に感謝し之に報ゆる心なくては親に対する孝も亦顕はれることがない。

四、女性の美は柔和温情の豊かなのに存する。優しく温か味があり、心に曇りがない程上品に見えるものがない。温い心は愛の心、他に対しては親切同情となる。家庭和楽の中心となるのである。女性にして之が缺けてゐたなら男性と何等変る所がない。神が男女それ〳〵に特異性を附与せられた趣旨を深く慮ふべきである。子女の家庭教育は母の愛によってのみ深刻な感化が及ぼさるべきものである。実に柔和温情は女性の生命ともいふべきものである。

五、柔和温情優雅は女性の生命であると共に快活で然かも強い確りした心を持つやう修養すべきである。此両性質は決して相反するのではない。優しくといふことは常に他人に反抗せず言ふが儘になれといふことではない。非理に直面しては嶮然として強い心が顕はれねばならぬ、女性の生命たる貞操もこの強い心によってのみ保存せられ、一切の誘惑から逃れ得るのである。質実にして剛健なる態度確固不動なる精神皆之あるによる。由来北陸人は快活さに乏しいと称されてをる。進取快活の気字を養ふやう力めねばならぬ。

六、忠実に働きよく気の利く役立つ女性になれ。知るは行ふの手段である。知識を知識として持ってゐては何等の価値がない、之を身に行ひ利用する所に始めて其価値を見る。人は貴きも賤しきも、将富めるも貧しきも生を此の世に得てをる以上は、それ相当の勤労に服すべきは理の当然である。これ神の命ずる所である。所謂有閑階級とか有閑マダムとかいふ語は非常時日本から駆逐せねばならぬ語である。新聞や雑誌を賑はす有閑マダムの悪徳は日本女性の名誉の為めに強き社会的制裁を加ふべきである。実に勤労は真に生くるの道であって人生幸福の根本である。勤労を愛好するとか、気の利く役

立つ女性になるには、何時でもすぐなれるものではない。学校生活時代から忠実まめやかに働き、日常得た知識技能は惜しげもなく、その都度活用することによって次第々々に養はるべきものである。人に教へられて或は促されてやることでは気の利く役立つ人にはなれない。自発的に細かな所に気を附け気軽に手を下す女性でなければならぬ。

昭和八年六月、「全力傾注」の標語を各教室に、又、「厳粛」を講堂に掲げて弛みがちな校内の気分を緊張させ、常に己れの反省の上に毎日の学習・行動を取らねばならぬことから、全校生に「反省日記」を書かせ、一週一回、担任の教師に見て頂いたのである。

「正直、正明曇りない鏡のような心で、上御一人、神仏を尊び、家にあっては良妻賢母、健康でまめまめしく、勤労を愛好する女性になるよう」教育全体にその精神を生かされたのである。そして、昭和八年から一〇年にかけて、理科室北側の礫地を生徒の作業によって開墾し、教材園を作り、運動場周囲の花壇も生徒の手によって作ったのである。（昭和八年七月）また、校門内玄関前にも開墾して花壇設置（昭和八・九）養鶏（十羽）養兎（二頭）を開始、生徒の当番で世話をする。（昭和八・九より）又一〇月から第二泉水の発堀を始め、昭和九年四月には校外実習地として田地二六四歩を借り、全蔬菜園として使用する。この畑で、畝の作り方から収穫まで実習時間に腕を振ったのである。その後、理科室前に温室を作り益々本格的となる。

当時の生徒は一鉢ずつ菊を受け持ち、真田教諭の指導で開花までの世話をしたのである。又一坪農園といって家の空地等を利用して花や野菜の種子が分配されて、家でもその生産を勧められたのである。お陰で花の名前を覚え、その管理も手掛け、野菜の作り方にも馴れて、生産の喜びと感謝の気持が自然と身についていったのである。

川岸校長が、実践を通してその教育方針を貫かれたことは生徒に取ってまことに感謝せねばならぬことであっ

たといわねばならぬ。

二　本校の歩みの中で

手取川氾濫による水害

昭和九年七月、一週間以上も降り続いた雨のため一一日手取川堤防が決壊し、その沿岸一帯水害に見舞われる。当時この地方から通学の生徒もあり、緊急時態としてその処置に当る。危険を犯して登校した生徒の中には手取川大橋の水に流される瞬間を実際に見て物語る者もいた。

ここに「昭和九年石川県水害誌」より当時の様子を偲んでみる。

一、十一日出水の報を聞き早速手取川沿岸地方の生徒を集め、其の状況を説き訓諭し、自由に帰宅するを禁じ業後生徒の父兄と打合せ危険のない地方の生徒は之を帰し、危険地内の生徒は危険のない地の親戚に宿泊せしめ、其の安全を期し、尚午後開発教諭は減水を待って被害地の生徒の自宅を訪問し生徒の宿泊先を報告し且つ翌日よりの通学等に関し打合せを為した。

二、十二日には手取川沿岸の水害地方面の生徒父兄に対し慰問の手紙十九通を出し、午後開発、廣瀬両教諭は福留、比楽島、川北村の生徒の自宅を慰問し、翌十四日には川岸校長、開発教諭は山島、川北、比楽島、美川、蝶屋の各町村役場、川北、橘、比楽島、美川、蝶屋の各小学校を訪問し其の被害状況を慰問した。

三、十七日には川岸校長、高島、藤本両教諭は第四学年生徒を引卒早朝本校を出発し、橘小学校に至り終日清掃作業に従事し午後五時半頃帰校した。

四、二十七日職員より金拾弐円、生徒より金拾八円弐拾銭（水害地生徒を除く）同窓会より金拾円を醵出、県教育会宛送付し罹災者へ配分方を依頼した。

五、本校生徒中身命に損傷を受けた者は一名もなく床下浸水の者は八木光子外三名である。

川岸校長の転任
米林校長の着任

昭和一〇年三月三〇日、本校二代川岸音二校長は、石川県立羽咋中学校長に補せられた。本校在任わずか二ケ年であるが、その間、初代畠山校長のあとを受け、日々反省の上に、曇りない心をもって常に全力傾注、勤労を尊び、家庭や社会に尽す女性の教育を実践的に推しすすめられた。今からその成果をというところで惜しいことである。校庭に真白でいかにも清潔な感じの温室や校舎のまわりの花壇、蔬菜園、家畜など川岸校長を偲ぶに足るものであり、その功績誠に偉大なものを感ずるのである。

川岸校長の後任として、石川県女子師範学校教諭米林秀秋氏を本校三代校長として迎える。



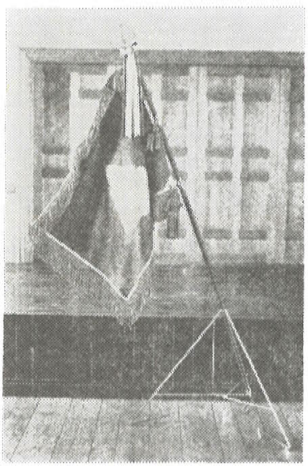
三代校長
米林秀秋

明治二五年八月二一日、金沢市上石伐町に生まる。大正四年三月、広島高等師範学校本科卒業。福井市立福井商業学校、岩手県立遠野中学校、大阪冨田林中学校、大正八年、県立金沢第二中学校、県立金沢第二高等女学校、昭和八年県女子師範学校各教諭を経て昭和一〇年三月、石川県立松任高等女学校校長となる。

創立十周年記念

昭和一一年、創立十周年を迎える。昭和二年創立以来、確固たる教育信念のもと堂々と築いた校風・環境・内容共に充実し、天下の松任高女として対外的にも大きく活躍していたのである。この年の記念行事、事業を挙げれば

記　念　式　四月二六日午前九時より挙行、知事代理、学務部長ほか来賓多数参列
祝　賀　式　四月二六日午前一一時半より
物故者追悼会　四月二六日午後一時より願念寺に於て
同窓会総会　四月二六日午後三時半より



校　旗

校旗樹立式　一〇月八日十周年を記念して新調したもので紫紺の地色、中心に校章が燦然と刺繍され、まわりの飾りも美しく立派な校旗であった。

ピアノ披露音楽会　一一月一六日、十周年を記念して念願のグランドピアノが新調され、例年の時期にその披露を兼ねて行われたのである。この日は、県下中等学校の音楽の先生をお招きして盛大に行われた。生徒の合唱・独唱・独弾のほか来校の音楽の先生方全員による合唱もあり、マイルス先生伴奏、フニクリフニクラなど軽快巧妙な演出は流石にすばらしく、生徒達を魅了した。これから講堂に常置され、朝礼の校歌斉唱、音楽会、学芸会、授業にも大いに活用された。

運動場整地・籠球・庭球・排球コート整備・図書棚二個・大鏡二面・ミシン十台・電気アイロン十一台新設。

各地で活躍する卒業生

第一回から第一〇回までの卒業生を送り出した昭和一五年現在の府県別分布状況は次の通りで、松任町中心に最も多く、北は樺太から、遠くは朝鮮・満州に及び、それぞれの地で力強く活躍している。

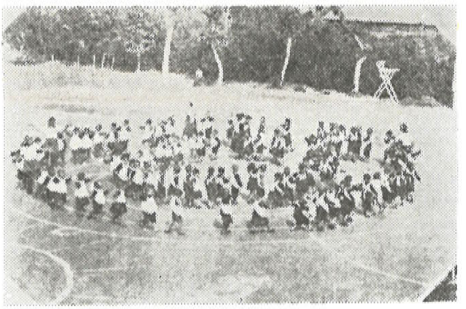
卒業年度 / 府県町村	昭和五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	計
出城村	—	—	—	—	三	四	二	四	五	五	三
一木村	—	三	一	二	二	三	二	二	三	二	一九

卒業年度 / 府県町村	昭和五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	計
林中村	四	—	—	—	三	—	—	五	三	四	一七
宮保村	一	二	二	二	一	三	一	三	三	一	一七

鹿島郡	河北郡	江沼郡	能美郡	金沢市	松任町	二塚村	石川村	富奥村	柏野村	蔵山村	郷村	林村	旭村	山島村	蝶屋村	御手洗村	舘畑村	野々市町	鶴来町	笠間村	美川町	中奥村	安原村	河内村
一	一	三	四	二	七		一								一	三		一	三	一	一	一		一
	一		二	四	五					一	二		三	二	一	二			一	五	二			
		二	二	二	四		二	二	一		一		二					一	二	三	一		二	一
	一	一	四	三	二	一	二		二				二	一	一	三							一	一
			二	四	五		二				二	一	三	三	二	一							一	一
一	一			六	三						一		一		一							三	一	
			一	三	一〇		二		二		二	一	二	二		二					二		二	
			一	二	一四		三		一		二		一	二		七	一	一				三		
				三	八		一		二	一			一	一	四		四	二		二	二	二		
				五	三		四		一		二		五	四		二	一			一		一		
一	四	五	六	六一	九〇	一	一七	二	九	二	三三	四	一八	一五	一〇	二二	七	六	六	一〇	七	一四	五	二

計	不詳	朝鮮	満洲国	樺太	北海道	大連市	神戸市	東京市	大阪市	京都市	神奈川県	千葉県	滋賀県	愛知県	福岡県	福井県	富山県	兵庫県	新潟県	長野県	鳳至郡	羽咋郡
三五		二		一				四	三								一	一				
四九		二	一		一	一		二	一	一							一	一		一		一
六六	二	二	三		一	一	一	三							一		一					
四四	二						一		一						一		一					
四四	二		一					一	一								三			一		
四三									一		一		一								一	
四〇			一	一								一										
五八		一	一					二	一				一								一	
五〇																	三					
五七				一				二									四					
三五三	六	七	七	三	二	三	一	一五	六	一	一	一	一	二	一	一	三	二		一	三	一

慈光幼稚園の開設　私立慈光幼稚園は寺院を利用していたのであるが、昭和九年本校同窓会に移管経営となり、六月二〇日開園式を挙げる。これより、北校舎一階の教室を園児の為に当て、玄関も新しく作られて毎日可愛いい姿が見られるようになった。秋の運動会にもおゆうぎなどで番組を賑わしてくれたのである。



かわいい園児たち

松任高等女学校同窓会私立慈光幼稚園

創立	昭和九年四月一日	
設立者	石川県立松任高等女学校同窓会	
職員	園長	米林秀秋
	主事	開発吉次
	保姆	田中ふみ
	保姆	北村すて
	保姆心得	春秋周子
	園医	高森友正
幼児数	一一四名	
保育料	月金壱円	
保育年限	二ヶ年	
経費補助	松任町一三〇円	

家政講習会　郡内女子教育のレベルを上げるため、昭和二年一一月二四日から二九日までの五日間、第一回家政講習会が催された。高等小学校卒業の女子で、郡内の一校下から三名乃至四名が選ばれてこれに参加し、大体、五〇名から六〇名の級となって受講、女子一般の教養を目指す内容で、講師は主として本校教諭之に当り、外部からも期間中何名かの講師を招いたようである。

毎年六月と一一月の二回、五日間ずつ実施され、昭和一二年一一月二五日から二九日の間行われた。第一九回

家政講習会まで続けられた記録が残っている。

本校同窓会の歩み

昭和六年三月一七日、本校卒業生の同窓会を創設し、直ちに従来本校に付設されていた女子実業学校卒業生の同窓会と合併して之れを「清輝会」と名付け、その発会式を午後一時から挙行した。

七月二六日午後二時から清輝会総会を開催、本年度経費予算等を決議する。又一一月一六日には午後一時から校友会と合同主催で講演会を開催、講師暁烏敏師より精神修養に関する講演をきく。

昭和七年　一月二三日　午後二時三〇分より、新年総会を開催
同　年　七月二三日　午前一一時から粟ケ崎遊園地で定期総会を開催
同　年一一月　五日　清輝会主催で洗濯講習会を二日間本校で開催
同　年一一月　七日　同じく同会主催で割烹講習会を二日間本校で開催
昭和八年　四月一六日　清輝会主催で前畠山校長送別会開催、午後四時〇四分発列車で帰郷の途に着かれる先生を職員、生徒、清輝会員駅頭に見送る。
昭和九年　六月二〇日　私立慈光幼稚園本校同窓会に移管経営となりその開園式を挙げる。

清輝会創設当時の記録であるが、以後卒業生の心のよりどころとして年々定期の総会、行事を行い受け継がれてきたのである。

終戦後学制の改革により、松任高女も発展的な終りを告げ、新制松任高校となり、清輝会も発展的に六星同窓会に吸収されたのである。そのいきさつについては色々あるがこの程度に留めておくこととする。

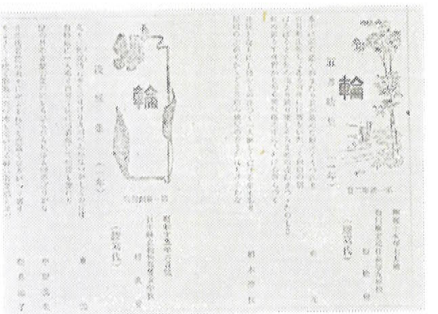
短歌会

文芸活動のひとこまとして詩・短歌・俳句もよく詠まれたが、昭和一五年頃、藤原正遠先生の指導を得て短歌会が生れた。歌集「輪」の発行となり、全校生徒が短歌を詠むことに喜びを持

ち、旅行の思い出や日常小さなことにも意を留めて、豊かな心を養ったのである。正遠先生の「輪」の編集後記に、

如何によい材料があっても、心の鏡が曇ってゐたら、歌は生れない。心の鏡の曇ってゐるといふは、心が落ちつかず、魂が沈潜出来てゐないといふ意味である。ただ雑務に追ひまはされて、じっと自分の魂と相語る時を殆ど持ち得ないこのごろの生活を私は全く寂しく思ふ――　六月廿五日

とあり、知らず知らずのうちに魂の教育を受けた生徒達が戦争の間も荒れ果てた終戦の頃も結婚してからも、フッフッと浮んでくる短歌に喜びも悲しみも托せられ、心の中にゆとりを持つて生活を楽しむことができたのである。



機関紙「輪」

短歌

二年　小幡喜代

お習字の清書のときの腹立たし
書けば書くほど拙くなりゆく

四年　番野喜美子

珍らしき料理ならひて帰る日は
母にみせたく心いそげり

四年　坂　一子

飛石のかくるるまでに落葉して
秋深まれば心さびしも

俳句

二年　中島和子

正月を待って障子も張られけり

三年　吉岡道子

白き息見えてこの里冬近し

四年　林藤愛子

朝日さす枯木の花は散りにけり

学校日誌抄　開校から一四年頃までの学校生活の一部を記してみる。

昭和二年度

四月　八日　九時より北村一教諭、真砂書記新任式
四月　九日　九時より第一回入学式、八五名
四月二六日　一一時より本校開校式、自治公会堂で祝賀式
五月　四日　八時三〇分、全校二塚村専光寺浜へ遠足
五月　九日　山崎英一氏、精神講話
六月二四日　第一限後学芸会～排球競技会
七月二五日～二八日　御手洗村徳光海岸で水泳練習
一〇月一一日　皇明会主事大塚春樹氏、顧問吉永丑松氏国体に関する講話
一〇月一九日　九時より運動会
一一月二四日～二九日　第一回家政講習会
三月一七日　女子実業学校生三四名の第四回卒業証書授与式

昭和三年度

四月　四日　腰垣福松教諭新任式
六月　六日　八時出発、金石方面遠足、四時三〇分帰校
七月　三日　汽車通学生のため各駅毎に世話係一名宛置くことを定む
九月二八日　秩父宮殿下御結婚当日につき八時から両殿下の御高徳に関する謹話、一〇時より、奉祝運動会

一〇月　七日　午後一時より御真影奉戴式
一〇月一〇日　生徒の自治・協力に依り善美なる校風の振作を期して自修会
一〇月三一日　午前一〇時より音楽科を主とした学芸会
三月一四日　生徒褒賞規程成る、久しく研究を重ねた本校々訓決定

昭和四年度

六月　四日　全校生徒小舞子海岸まで往復徒歩で遠足
七月一一日～二〇日　一〇日間松任水泳プールで全校生徒水泳練習
七月一四日　本校主催第一回小学校女児排球競技会
九月一九日　第五限、国民精神作興、公私経済緊縮に関する合同訓話
九月三〇日　業後全校生徒に対し前回訓話に関する実行事項につき説示せり
一一月二七日　一〇時より雨天体操場で加越能勤王維新会主催井上一次氏講演正午終る

昭和五年度

四月三〇日　第四高等学校教授鴻巣盛広氏により校歌々詞成る
五月一六日　午後一時より小松教祐氏の単独オーケストラ演奏あり小学校など来聴
八月　五日　県下女子中等学校水泳大会町プールで開催、選手出場
九月　五日　全校生徒航空母艦見学のため金石へ、激浪のため乗り移れず海岸より遠望
九月三〇日　本日より業後に於ける各学年別運動日割を設けて実施す
一〇月一三日　本日より月曜日講堂で朝礼を行い校歌斉唱を行うこととす

一二日　八日　一一時より全校野々市放送所見学
二月一六日　四年生一同畠山校長、佐藤教諭引卒、県立盲聾唖学校見学
二月一八日　県立金沢工業学校教諭吉岡吉太郎氏考案の校章決定
三月一六日　午後二時より第一回卒業証書授与式、知事田寺俊修、視学官及川彌平、県会議員吉本永次郎、橋場仕三郎其の他町村長、小学校長、父兄など多数来賓あり盛大

昭和六年度

六月二九日　四年一同、加藤教諭引卒金沢市公会堂で奥田女子裁縫講習会出席
七月　七日～一一日　五日間第一学期考査
九月二六日　午後一時より島尾教諭より全校生満州事変に関する講話あり
一〇月二三日　全校生鞍ケ岳へ遠足
一〇月三〇日　第一限全校生、教育勅語の謹書をなす
一月　八日　本日卓球設備、二台を整う
二月　三日　日支事変応召の藤本教諭歓送式、二月七日征途につく
二月一九日　四年生一同、畠山校長、中原教諭引卒金沢地方裁判所へ公判傍聴

昭和七年度

四月二六日　午後一時一〇分より第六回創立記念式、式後金浦氏外一名の余興狂言
六月　三日　生徒の自治訓練と学用品購求のため購買部を設ける
一〇月二六日　午後一時三〇分より第二回写生大会を開催

三月　三日　本校教育後援会開催、昭和六年度決算、昭和八年度予算決定、午後学芸会及生徒成績展
昭和八年度
四月　七日　午前畠山校長告別式、午後川岸校長新任式
四月一〇日　国際聯盟脱退に関する詔書奉読式
七月　中旬　理科室北側礫地を生徒の作業で開墾して教材園に、運動場周囲に花壇を作る
八月三〇日　理科教室、暗室などに電気設備を完成せり
九日より　養鶏（一〇羽）養兎（二頭）を開始、鶏舎建築
昭和九年度
四月より　校外実習地として田地二六四歩を借り全疎菜園として使用す
六月二〇日　慈光幼稚園開園式
一〇月三〇日　教育勅語御下賜記念式挙行
昭和一〇年度
四月　八日　一一時川岸校長告別式
四月　九日　一一時米林校長新任式
五月二七日　軍艦旗掲揚式
九　月　中　全校舎一〇箇所補修工事、家庭工作室の模様替工事完了
昭和一一年度
四月　前年度卒業生及父兄寄付の工作台一六台新調

五月　一〇周年記念事業として運動場の整地を行い庭球、排球、籠球コートを改造
六月　図書棚二個　大鏡二面備付
八月　ミシン一〇台備付
一〇月　八日　九時より校旗樹立式挙行、式後運動会
一〇月　電気アイロン一一台備付
一一月一六日　ピアノ披露一〇周年記念音楽会開催
一月より　学校副食施設をなし昼食副食物配給開始

昭和一二年度

五月一二日　四年生藤本、加藤教諭引卒関東関西地方修学旅行に出発
五月一三日　自転車置場増築工事完了
六月　七日　加賀地方女子体育大会
七月　五日　生徒昇降口のペンキぬりかえ
七月二六日　若宮八幡神社参拝、在満将兵武運長久祈願
一二月一一日　南京陥落祝賀旗行列
一二月二三日　皇太子殿下御誕辰祝賀式

昭和一三年度

四月二一日　朝香宮殿下当町八ツ矢町で奉迎
四月二九日　校庭に国旗掲揚柱建て本日掲揚式

五月二〇日　徐州陥落祝賀行列
六月　四日　朝会に皇太神宮遙拝式を本日より行うこととする
六月二一日　本日より一週間貯蓄報国週間
七月　三日　真田教諭生徒数名引卒出羽町陸軍病院へ薬花草移植奉仕作業
七月一七日　石川県青少年勤労報国隊結城式、金沢市出羽町練兵場で挙行、開発教諭出席し隊旗受領

昭和一四年度

六月二二日　新川氏の「蒲団仕立講習」開催上級生、清輝会員受講
八月一〇日　四年生の生花講習
一二月一六日　県衛生技師によるマントー氏反応検査注射全校生
一月二六日　大雪のため通学不能となり一週間臨時休校
二月一一日　紀元二六〇〇年奉祝街頭大行進

昭和一五年度

四月　六日　家事室に学校副食用のかま一台備付完了
五月　九日　第一〇回卒業生、卒業記念奉仕作品五〇点愛国婦人会石川県支部へ寄付
七月　三日　一年生母姉会、七九名出席

以降別記につき略

第三節　戦時下の松任高女

一　戦争前夜時代

忍び寄る戦争の足音

関東大震災以後、世界大恐慌の波は日本にも押し寄せて世は緊縮時代となり、人心を緊張させたのであるが、昭和五年頃から更に国際関係風雲急を告げ、満州事変・支那事変と日本にとって試練の幕明けとなるのである。そして、国民精神作興に関する実施事項が示され、皇民錬成の教育へと進み出し、昭和七年上海に飛火してわが郷土師団の出征、恩師藤本先生、生徒の父や兄の応召出征、当駅通過の出征兵士の見送り、宮様方の地方視察に伴う歓送迎とあわただしく、楽しい学園生活の中に戦争を身近に感ずる日が多くなり、まさに、戦争前夜の無気味さが漂よい始めたのである。即ち、昭和五年一〇月には秩父宮殿下、一一月には梨本宮殿下、昭和七年八月には閑院宮両殿下、一〇月には東久邇宮殿下それぞれ御来県或は御通過と、そのたびに奉送迎申し上げたのである。

昭和七年一〇月二九日、福井県で陸軍特別大演習に統監として御台臨遊ばされた天皇陛下の御親閲式には、本校生徒代表二五名が畠山校長以下職員数名に引率されて光栄の御親閲を賜わったのである。この日の感激を当時四年生であった村上華子さんは次のように述べている。

御親閲に浴して

村上華子

汽車の疲れも一夜の眠りに打消して、私共二十五名は今日の御親閲を楽しみに、午飯もそこ〳〵に戴いて、急足で式場へ向ひました。そして幾つかの町を通過ぎて、やつと式場に着いた時にはほつと一安心致しました。

入口には、いかめしい顔をしたお巡りさんが二三人警備していらつしやいました。さすがの大広場も数万人の人の群。否整然とした隊形が続いてゐました。向ふの禿山にも丁度苔の生えてゐる様に、多くの人の頭が黒くなつて見えました。暫く休息して居りますと愈々時間も迫つて合図の花火がドーンと耳をも擘く様な勢のよい音を立てゝ秋空高く上りました。その刹那の森厳さ……。

満場人なきが如く森として、ガサと言ふ物音一つ聞えない。

私共の体はまるで人造氷の様に硬くなるのを覚えました。そしてマイクからの報道は次々と時刻を告げてをります。恰度腕時計が三時廿八分をさした時に、遙か向ふのきれいに飾られた御門の所に、畏しこくも　聖上陛下の御車がいとも静かに現はれました時、人々のまなこは一斉に、其所に注がれました。君が代の奏楽が始まりますと、満場粛然として皆が最敬礼を致しました。畏くも　聖上陛下　あゝ待ちに待つた、此の光栄に浴する時が来たのであると思つた時今まで張り切つてゐた気分が一層緊張するのを感じました。

愈々陛下が玉座に御上り遊ばされました時いともうるはしい龍顔を拝し奉り、あゝ我々九千万のくにたみの父君にわたらせられますのであると思つた時には、もつたいなさに、只々感激の涙を催しました。

あゝ尊き御英姿よ……。と心から拝み奉りました。暫くして分列式が始まりました。今まで物音一つしなかつた満場には、元気に充ちた勇しい号令が静かな空気を漂はせて響き渡りました。と同時に、午后の太陽の光を受けて多くの銃剣が閃光の如く一度にさつときらめきました。第一部隊の行進が始まり、次から〳〵と動く様遠くから見て居りますと、丁度荒磯に打寄せる白波の様に、多くの足が一斉に規則正しく動き出しました。地面は丁度地震の様に上下に揺れ動いて立つて居るのもこはい位でありました。洵に意気天に冲すとでも申しませうか本当に、何とも譬へ様のない立派な分列式で御座いました。次に我々の奉唱部隊の行進が始まりました。今こそ北陸女性の溌溂たる意気を示さなければと胸の高鳴るのを覚えました。元気一杯、足並高く陛下の御前近く進みました。最敬礼の号令の掛つた時には、我にもあらず、人にもあらず只々尊さに胸がふさがるばかりでございました。いとも尊い龍顔を拝し奉り、奉唱歌は力一杯腹の底から歌ひました。あゝ謹んで顧みます時、御裳濯川の流をうけ給ふ聖天子を今日のあたり拝み奉る事の出来る光栄と幸福を思つた時、私の体は硬くこはば

つて、感激の涙が目をうるほしました。
やかて万歳三唱の声は天をも地をも、揺り動かすばかりでした。本当に感激に充ちたあの声今でも耳の奥深くに響いてをります。

昭和八年、国際連盟脱退、一一年日独伊防共協定成立、一二年芦溝橋事件勃発、この年の一二月南京占領と愈々戦争の様相を呈して、南京陥落祝賀の旗行列となる。一三年には国家総動員法発せられ、徐洲、漢口を占領してその都度祝賀行列、一四年の紀元節には全町各種団体大行進を行って大いに志気を鼓舞されたのである。一五年大政翼賛会、日独伊三国同盟締結、一六年日ソ中立条約締結、遂に東条内閣成立して太平洋戦争勃発を迎えるのである。

忍び寄る戦争の足音、すべてが軍国調一色にぬりつぶされ、それでも昭和一四年頃までは静かな雰囲気であった学園も、それ以後制服も作業衣となり、国策にそう雄々しく健気な戦時体制下の女学生へと変身していったのである。

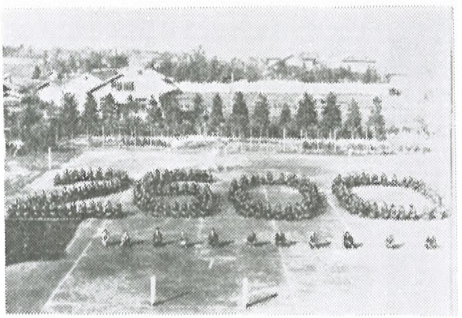
昭和一三年から一六年にかけて学校内に於ける戦争への足音をたぐってみると次のようである。

国旗掲揚柱の設置　昭和一三年四月二九日
皇太神宮遙拝式　昭和一三年六月四日より朝会に行うこととなる。
貯蓄週間始まる　昭和一三年六月二一日より。
陸軍病院慰問　昭和一三年七月三日、出羽町陸軍病院へ薬草花苗移植。
石川県青少年勤労報国隊結成式　昭和一三年七月一九日、金沢出羽町練兵場に於て挙行、報国隊旗受領。
勤労報国作業　昭和一三年七月二一日～七月二八日
白衣縫製　昭和一三年八月二一日、本校生徒の奉仕作業により、総数三二〇枚……九師団へ発送。

愛国子女団総会　昭和一四年五月二日、学校長、生徒代表（三須末栄、山上芳枝）上京して愛国子女団総会にのぞむ。
戦病死者遺族慰問　昭和一四年五月八日、本校在校生徒の父兄、戦病死者遺族を班別で慰問する。
傷病兵慰問学芸会　昭和一四年五月二〇日、泉野陸軍病院分院傷病兵慰問学芸会を本校で行う。
勤労奉仕作業　昭和一四年七月三日、全校職員生徒、金沢飛行場で勤労奉仕作業。
一斉勤労作業日　昭和一四年七月一七日、県下一斉勤労作業日、金石街道の除草作業、成田県知事之を巡視される。
青少年学徒に勅語御下賜　昭和一四年八月一八日「青少年学徒に賜わりたる勅語」午前一一時生徒正門前に之を奉迎する。
合宿講習　昭和一四年八月二二日、各学年一泊の合宿講習開始。
慰霊祭参列　昭和一四年九月二〇日、日本赤十字社石川県支部主催本校出身蛯谷操姉（応召看護婦病死）の慰霊祭に学校長、卒業生代表参列。
合宿訓練　昭和一五年八月二二日、各学年交互に合宿訓練。
県民体力強化運動週間　昭和一五年九月一九日より実施。
銃後奉公強化運動　昭和一五年一〇月七日より各種行事を行う。
報国団の結成式　昭和一六年四月二二日、校友会を改組して報国団としその結成式を行う。
標語を旗に書く　昭和一六年四月、「皇運扶翼」「臣道実践」「全校一心」「職域奉公」の標語を旗に書き講堂に備え付ける、尚大文字で「承詔必謹」も掲示する。
出征者、戦死者を祭る　昭和一六年四月、生徒の家庭中出征者、戦死者の写真を蒐め、講堂の神棚近くに額入りとして掲げ黙禱、祈願、礼拝を行うこととする。そして、一人・二人と戦死の悲報がもたらされると、その写真は黒枠で縁取られていった。

紀元二千六百年

昭和一五年、時恰も紀元二千六百年の輝やかしい年に当り、国を挙げての記念の催しが色々行われた。本校でも、興亜文庫の新設、ブラスバンド編成があり、体育祭に全校生徒による「2600」の人文字が校庭に書かれてアルバムに残る記念スナップとなった。この年の行事には次のようなものがある。



2600年人文字

二月一一日　紀元二千六百年奉祝街頭大行進、この年は二月に入り降り出した豪雪で山あり谷ありの町内の道を、鼓笛隊を先頭に祝賀大行進を行った。

四月二九日　北国新聞社主催、二千六百年奉祝北国学生聯盟女子部記念音楽会が催され、四年生これに参加する。

八月　三日　二千六百年記念白山登山、松任高女創設以来始めての壮挙で、武岡先生を隊長に、開発、藤原、加藤先生に引率され、四年、三年の有志に卒業生二名が加わり総員二六名、霊峰白山を目ざして意気揚々と出発、御来迎は天候の都合で見られなかったが、素晴らしい落日、峯に咲く可憐な草花に、白山を満喫して下山したのである。

一〇月一九日　紀元二千六百年奉祝鍛錬大会。

一一月　八日　県主催紀元二千六百年奉祝展覧会（見学の為全校生金沢へ遠足）

一一月一〇日　午前一〇時から皇紀二千六百年奉祝式を行い、宮城外苑からの中継放送を拝聴。

一一月一二日　当町学校合同で紀元二千六百年奉祝旗行列。

一一月一六日　紀元二千六百年奉祝音楽会。

一一月二〇日　永田碧堂氏の「日の丸国旗とその歴史」の講演拝聴。

一二月二六日　同窓会主催紀元二千六百年奉祝、教育勅語御下賜五十周年記念式並に恩師謝恩式挙行、会員多数これに参加する。

運動会も鍛練大会と呼ばれるようになって二年目、この年も気合のこもったその名にふさわしい鍛練大会であった。

一〇月一九日、最上級生の準備、進行、指揮、会場整理に至る緻密な計画のもとに繰りひろげられた。半袖白

の運動着に襞のついた紺のブルマー（ダンスの時はスカートに早がわりする）素足のいでたちである。

プログラムも戦時色の濃いものが多く、全校生徒の握り拳を固めての「健国体操」に始まり

清新の血は朝日と燃えて　見よ高らかに伸びゆく日本
ああ我ら御国の楯ぞ　強き意志もて磨き競わん
力、力、くろがねの力

の歌に合わせた「若い力」の体操は実に若さ溢れるものであった。また、両手に日の丸の小旗を持っての「愛国行進曲」、上級生の白鉢巻も凛々しい直心影流、折敷の構えに始まる薙刀の「基本型」も、やまとおみなの心意気を示したものであった。

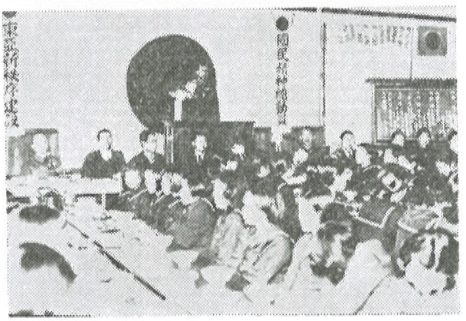
紅白対抗で争われる「二人三脚」「むかで競争」「八百リレー」「運搬競争」などこれまでの種目とかわりないが内容としては運搬競争など砂袋を抱えて走るという時代を感ずるものであった。綱引きは何といっても得点を左右する総力結集種目であるだけにその力の入れ方も凄かった。会場前方の得点板にその都度掲示される点数にみんなの目が注がれたのである。

勇壮なこの大会に和やかさとやさしさを添えたのはスカートにはき替えてのダンス「荒城の月」やお姉さまも加わってのかわいい園児の「おゆうぎ」であった。大会の最後を飾るものは鼓笛隊の「紀元二千六百年」演奏に合わせ、校旗を先頭に全校生徒堂々の「分列行進」である。膝を高く上げクラス別に米林校長に向って「頭　右」の号令一下、一斉に見つめる瞳には戦時下の女学生の頼母しさが溢れていた。

恩師の出征

戦争を身近に感じたことの中に恩師の出征がある。

藤本長信先生は昭和一二年八月から昭和一四年一二月一七日まで上海事変に昭和一八年一月



恩師の出征送別会

一四日から終戦まで大東亜戦争に陸軍主計中尉として前後二回の応召はまことに御苦労なことでその入隊の時には職員、生徒心からの歓送をしたのである。

武岡辰太郎先生は昭和一六年八月から終戦まで、高多信久先生は昭和一六年七月一五日から昭和一七年一二月までと昭和一九年八月二日から終戦までの二回応召されたのである。又月輪彰慰先生、喜多育治先生も昭和一九年から終戦にかけて応召、どの先生も大東亜戦争最も熾烈を極めた終戦までを闘い抜かれその間学校に残った職員、生徒はいい知れぬ緊張が漲り任務を果して無事帰還されることををひたすら祈ったのである。

宣戦布告

昭和一六年一二月八日、第四限講堂に於て英米に対する宣戦布告の詔勅及び東条首相の講演放送をきく、そして一二月一〇日には宣戦の詔書拝読式が行われた。

昭和一七年からは毎月八日を「大詔奉戴日」と定め、この日には詔書奉読式、若宮神社、忠魂碑参拝をして出征兵士を偲び、困苦欠乏に耐える精神養成の一端として日の丸弁当で我慢することになった。乃ち、白い御飯に赤く丸い梅干という簡素なもの、副食品をがまんすることが当時の美徳と考えられたのである。

本土初空襲

昭和一七年四月一八日、米機の本土初空襲（京浜・関西の両地域）無気味なサイレンの音は本当の警戒警報であったのである。各々部署につく、この日こそ全国民が戦争の実感をひしひしと感じ、「何くそ、負けるものか」と歯ぎしりしたのである。この日以後、本土の重要地域が次々と空襲さ

れ、その度に唸る警戒警報やラジオに耳を傾けながら仕事や学習に従事しなければならなくなったのである。

昭和一七年七月二六日、空襲時ガラスの破片による負傷防止のため、第一中隊員は動員され、窓硝子全部に防弾テープ貼りを実施した。

又校内各所に防火用の砂袋、バケツが準備され非常時に備えた。

二　戦局の変転とともに

戦時編成

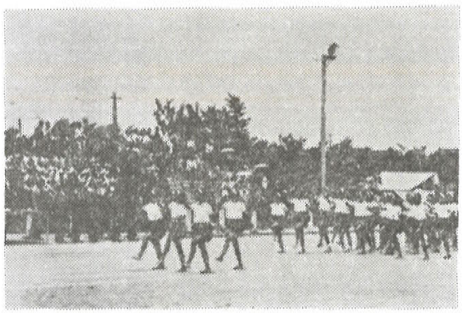
昭和一六年九月一九日～二六日にかけて動員準備体制をとるため、報国隊編成、警備団編成、学校防衛団編成、報国隊の自転車隊編成を完了する。ひとたび動員下れば、この編成でそれぞれ部署につき、行動開始の構えをとることができるようにした。また、一七年四月から学校看護婦を報国団で雇傭することとなった。

また、昭和一七年四月から全学年を中隊・小隊編成とする。乃ち、学校長は大隊長、先生は中隊長・小隊長となり次のような編成であった。

年度	編成内容	編成内容
昭一七	第一中隊（四年・三年）　中隊長　藤本　長信	
	一小隊　四ノ一　五七　藤原　正遠	二小隊　四ノ二　五七　道　幸枝
	三小隊　三ノ一　五二　打田　幸夫	四小隊　三ノ二　五一　加藤　巳行
	第二中隊（二年・一年）　中隊長　近藤　繁隆	
	一小隊　二ノ一　五八　油谷　周次	二小隊　二ノ二　五七　西出きよ子

三小隊　一ノ一　五一　吉村　源次	四小隊　一ノ二　五〇　吉野　志佳		
昭一八			
第一中隊（四年・三年）　中隊長　高多　信久			
一小隊　四ノ一　四五　藤原　正遠	二小隊　四ノ二　四五　道　幸枝		
三小隊　三ノ一　五五　高多　信久	四小隊　三ノ二　五六　加藤　巳行		
第二中隊（二年・一年）　中隊長　近藤　繁隆			
一小隊　二ノ一　五一　油谷　周次	二小隊　二ノ二　五二　鞍　恵子		
三小隊　一ノ一　五七　吉村　源次	四小隊　一ノ二　五六　吉野　志佳 喜多　育治		
昭一九			
第一中隊（四年）			
一小隊　一組　藤原　正遠 （油谷周次）	二小隊　二組　道　幸枝		
第二中隊（三年）			
一小隊　一組　高多　信久 福浦　耕介	二小隊　二組　加藤　巳行		
第三中隊（二年）			
一小隊　一組　泉　松雄	二小隊　二組　栃尾喜美子		
第四中隊（一年）			
一小隊　一組　吉村　源次	二小隊　二組　鞍　恵子		
昭二〇			
第一中隊（一年）			
一小隊　一組　油谷　周次	二小隊　二組　吉村　源次	三小隊　三組　栃尾喜美子	
第二中隊（二年）			

一小隊　一組　川上　重次	二小隊　二組　鞍　恵子	三小隊　三組　近藤　繁隆	
第三中隊（三年）			
一小隊　一組　泉　松雄	二小隊　二組　松内　紀子		
第四中隊（四年）			
一小隊　一組　福浦　耕介	二小隊　二組　加藤　巳行	専攻科小隊　道　幸枝	



分列行進

で、学校内外での団体行動には右の編成による呼称をしたのである。昭和一七年四月二六日の創立記念日には校庭に於て全員の分列式を行い、学校長はその親閲を行った。運動会にも必ず分列行進が行われ、足音も整然と高く、隊長裂帛の「第〇中隊、第〇小隊、頭右!!」の号令はあたりにこだまし、その颯爽とした姿には銃後の乙女の心意気が健気にうかがえたのである。

体力錬成　戦時下の乙女は先ず体力が優れなければいけないということで各種行事や運動によりその錬成に努めたのである。

白山登山　昭和一五年紀元二千六〇〇年記念の白山登山が行われたが、これに続いて昭和一七年七月三一日、白山登山隊二三名が出発する。以後何回か計画され、乗りものも不自由な当時、女の足で頑張ったのである。

乾布摩擦　乙女の恥らいから最初の頃は鍛錬時間になると教室で女らしく行ったのであるが、昭和一六年以後は雨天体操場で全校生一斉に行い、体操の先生、男の先生などがかえって恥

かしそうにしておいでたとか……後、風邪をひかなくなったことは事実のようである。

雪中行軍　昭和一八年一月二二日、旭村倉部海岸まで雪中行軍を行った。

血液検査　昭和一八年九月一七日から四年生を皮切りに順次血液検査を行う。勿論、非常時に備えてである。

体力検定　昭和一八年九月一八日、千米速行、全校生徒参加で実施する。

明治神宮予選学徒錬成大会　昭和一八年九月二三日、金沢市公設運動場で、明治神宮予選学徒錬成大会が行われ、本校から選手五名派遣されたが、大変立派な成績をおさめ、まことに、戦時中の快挙であった。団体・個人ともに次の通りであった。

団体	一等	松任高女	一九二五点	個人	一等　徳村　房子（松任高女）　四八五点
	二等	金沢第一高女	一八六七点		二等　志摩富美子（大聖寺高女）　四三八点
	三等	羽咋高女	一七八一点		三等　伊東　銀子（松任高女）　四二六点

二四粁行軍　女子体力章検定特別種目、二四粁行軍を実施する。

体錬科　昭和一八年からこれまでの体操が体錬科と呼称されることになった。内容には体操・武道・教練があり、武道では薙刀があった。直心影流、運動会の種目にも加わり、白鉢巻姿で「正眼の構え」「八相の構え」などから裂帛のかけ声も勇ましく「動」に移る姿は勇壮そのものであった。また、教練の筆頭は「分列行進」、まさに学徒の名にふさわしい、正々堂々たるものであった。この体錬科は当時三時間の体操から四時間に増加されたのである。

陸海将兵、傷病兵の慰問　戦酣となり学校生活の中に銃後の乙女の真心を披歴する時が来たのである。先ず陸海将兵、傷病兵の慰問である。記録によれば、昭和一六年七月一二日、慰問の手紙三八〇通、絵画二

○○余枚を金沢師団司令部に提出して郷土出征部隊にその発送を依頼している。昭和一六年一〇月五日には慰問文四〇〇通を満蒙開拓青少年義勇軍に発送、昭和一六年一〇月一一日には慰問文、書画各四〇〇点を出征将兵に発送、昭和一七年七月九日には慰問文四〇〇通発送、昭和一七年六月二〇日と昭和一八年五月一三日の二回、慰問の人形を作って金沢海軍人事部経由で海軍将兵に発送を依頼している。又、昭和一八年二月七日、この日は日曜日であるが一年生と四年生の生徒で金沢泉野陸軍病院を訪れ、劇や音楽で傷病兵の慰問を実施している。なお昭和一八年一一月二日には山中海軍病院療養所へ慰問文、絵画多数を贈るため四年生はここまで自転車行進をしている。翌一九年三月三一日全校生徒の手に成る慰問のアルバム四一冊を県に委托し、第一線部隊へ贈る。

農繁休校

昭和一六年から終戦まで、春の田植期に五日間、秋の収穫期に一週間を農繁休校とし、食糧・飼料の増産、収穫援助をしている。又、農園のない生徒はその附近の部落で設置している託児所へ臨時保母さんとして手伝いに派遣され、又軍人遺家族に対する稲刈奉仕も休校以外の日にどんどん続けたのである。

農家出身でない生徒の稲刈は大変であった。或遺家族の家での稲刈で不注意にも小指の一関節を切り落としてしまい、みんなで落ちた指を捜すという悲痛な一劇もあったとか、無理な仕事に対しても決して不平をいう者はなかった、というより言えなかったのである。こうしていることが戦勝につながるのだという信念に燃えていたのである。

病衣、軍衣縫製

昭和一三年にも白衣を縫っているが、昭和一六年五月二六日から二九日にかけて傷痍軍人の病衣を一五四枚縫い、石川療養所へ納入、昭和一七年七月には金沢五一部隊の軍衣を縫うためその材料が次々と搬入されている。



白衣縫製

裁断された布と糸が与えられ、一糎の間に四～五の針目で縫うこと、糸はむだ使いせぬこと。縫い方にも注文がついて緊張した心で一生懸命縫い、仕上ると先生の検閲を受けてはじめて製品となる。ミシンの調子の悪い時、又布の使い方を間違えたりして何回もほどいて縫い直さねばならぬこともあったのである。でも、傷ついた軍人や出征兵士の着用する衣類と思えばひとりでに緊張し、互いに助け合って心をこめて仕上げに励んだのである。

鉄屑の献納　軍需資源としての金物は早くから大切にされていた。家庭でも使い古した釘でもコツコツと貯えて供出し、貴金属に至っては強制的に供出を余儀なくされたが、公共の施設にも愈々実施されるようになった。昭和一六年一〇月二六日、校内にある鉄屑を軍需資源として献納するため、窓の敷居のレールを全部竹製に取り替え、その代金として三〇円が収入となった。重さ三九〇キログラムであった。又昭和一七年一一月二〇日、報国隊所有の外套掛具はじめ鉄屑など一箱供出、昭和一八年二月一一日には、古レコード三貫、古鋼鉄二三六匁、古雑誌等を再生活用協会宛発送する。なお昭和一八年一一月一二日には、補助貨幣供出状況調査が実施された。

銃後の活躍　昭和一七年頃から銃後の護りを固めるため種々の活躍をした。

増産活動

昭和一七年　九月　七日　本校農場の稲刈を行い米三俵供出する。

昭和一七年一〇月二一日　全校生草刈勤労作業、以後も続けられる。

昭和一八年　七月二二日　大根、白菜などの種子を生徒に分配し、家庭に於てその増産に参劃させる。
昭和一八年一二月二六日　収穫を祝い全校会食を行う。
昭和一八年一二月二八日　第二学期終業式のあと休暇中製縄作業を課す。
昭和一九年　五月一〇日　陸軍々用地（安原）三〇〇〇坪に於て食糧増産並に勤労報国の目的を以って使用許可される。
昭和一九年　五月より　校地内空閑地を開墾して、大豆、南瓜などを栽培しその増産を図る。又、国道の松並木の石原の空間を打ち返して大豆を植えるなど精を出す。

安原に於ける陸軍々用地の使用には、先ず、開墾から始めねばならなかった。

遠い道を徒歩で汗だく、途中湧き出る水に喉を湿しながら、やっと到達すればそこに待つ仕事は、松林を畑地にすることで、その労力たるや大変なもの、のこぎり・スコッパ・鍬などを使って先ず松の根を堀り起すのである。小枝を払い、根元を深く堀って倒す。今から考えれば到底女にできる仕事ではないが当時の真剣さがこれをやり遂げさせたのであろう。やっと整地されたところへ、芋苗を植え付けたのは、昭和二〇年の六月頃、その後は大きな穴に湧き出る水を汲んで苗を育て、その増産に励んだのであるが収穫の喜びを味わうには至らなかったのである。

当時増産活動を指導された吉村源次先生は「晴耕雨読」の精神を全生徒に徹底して督励されたのである。



米の収穫

勤労奉仕　昭和一八年八月二、三両日は松金線沿線の除草作業、同二三日は堆肥用草刈作業、同一一月二日午後一時から

三時まで乾草用草刈作業が実施されているが、馬草刈りは夏休みの宿題であったし、八田浜での塩田作業、酷熱下、自転車やリヤカーを使っての砂運びも今から考えれば尊い体験であったといわねばならぬ。

町葬に参列　昭和一七年一一月八日と昭和一八年三月八日の二回、戦死者の町葬に松任在住の生徒は参列し、昭和一八年九月八日、米林成秋、米林太治氏の町葬にも生徒は参列してその冥福を祈り、遺骨出迎えには駅から学校まで全校生徒が並んで出迎えたのである。

慰霊感謝法会　昭和一七年一二月一日、前田利為侯はじめ生徒父兄陣没英霊の慰霊感謝法会が厳修され全校生之に参列する。

銃後後援ハガキ・徽章販売　昭和一七年一二月五日、一中隊の生徒之を引き受ける。

蚊帳修理　昭和一八年二月一一日、軍隊から委託された蚊帳三〇〇張の修理、補綴を行い、午后三時半までに予定数を完了する。

弾丸切手購入　昭和一八年六月一五日、希望の生徒に分配する。

国防献金　昭和一九年一月一五日、勤労による乾草売上代金一〇〇円也を国防献金する。

軍隊の接待　昭和一九年に入ってから二月二一日、二五日、二九日に東部四九部隊及自動車隊、五二部隊が宿営演習で本校に於て休憩し、昼、夜食などを接待する。又三月三日に、第四学年生は東部四九部隊へ一日入営して色々見学して帰校した。

戦時の学習

戦時一色、食糧不足、人手不足の当時では学習よりも戦争に勝つことに重点が置かれ、昭和一九年に至っては毎朝授業は一限のみとなってしまった。内容は全体に亘ることが原則のようであったが、地理・歴史の学習が多かったようである。

講堂で朝礼の時、戦地からの便りが読んで聞かされ、千人針が教室にまわってくれば学習や作業に優先してこれを結び、出征兵士の死線を越えられることをひたすら祈ったのである。

教育勅語は小学校で、軍人勅諭は女学校で暗記はもとより清書のテストも行われた。又、教科書も一時はなか

ったり、考査の時の答案用紙がなくて採点済みの紙の裏が利用された。

家事の実習で、おにぎり・すいとんの使り方や、野草や蝗を材料にした栄養たっぷりの時雨煮なども教えられ、裁縫には縫糸が不足して配給となり、体練場の端から端へ走って三回分が一人分の配給であった。

学習と並んで大切な増産活動も、一九年に至っては食糧ばかりでなく、軍需品の生産に向けられるようになり、学校工場と称して、竹剣作業や、電纜線工作業となった。これは、アジロあみの航空機補助タンクの材料となるもので、はじめのうちは上級生の仕事であったものが、次第に下級生に及び、床ぶとんを家から持参し、毛布を腰に巻き、白い鉢巻も凛々しくその生産に励んだのである。そして、その作業場は雨天体操場から、講堂、教室まで使用されるようになった。

学習と生産が学徒の勉強となったその頃の学校生活の楽しみは、休み時間に友達があちらこちらに寄り添って歌うリバイバルソングであり、軍歌であった。当時、音楽の時間には、外国曲は除かれてこれまでの教材より軍歌が多かったのである。

「大君の御楯とただに思う身は、名をも命も、惜しまざらなむ」と詠まれた山本五十六元師の歌や、アッツ島サイパン島玉砕の歌など胸迫るような歌ばかりであった。

昭和一八～二〇年
学科課程及教授時数

非常時下特に昭和一八年から二〇年にかけて学習に先行して増産活動・軍需品の生産に意を注いだ頃の学科及教授時数は次の通りで、当時の女学校の様子を窺うことができる。教科の呼び方も、〇〇科の〇〇となっている。

教科＼学年	一年	二年	三年	四年
国民科 修身公民	一	一	一	一
国民科 国語漢作	五	五	五 一 三	四
国民科 歴史地理	三	三	二	二
理数科 数学	三	三	二	三
理数科 生物	三	三	二	三
家政科 家政	二	二	三	四
家政科 育児保健被服	四	四	四	四
体錬科 体操	四	四	四	四
体錬科 武道				

教科＼学年	一年	二年	三年	四年
芸能科 音楽	一	一	一	一
芸能科 図書工作	二	二	二	
実業科 商業農業	一	一	二	一
基本教科に充つべき時数	三〇	三〇	三三	三三
増科教科 教育外国語修練	二 二	二 三	三	一 三
総時数	三五	三五	三六	三六

専攻科

昭和二〇年度に専攻科が増設された。それは、決戦期を乗り切ることが最大の目的であったとも推察される。現に四月以来終戦まで高女の先輩として生産活動の先導をつとめ、終戦を迎えて後一ヶ月、九月三〇日を以って修了したのである。この日修了証書を手にしたのは三〇名である。

四月以来設けられた学科課程及教授時数は次の通りであった。

修身　一　国語　三　数学　三　理科　三　家政　六

其の他は選択科目とする。

戦時の服装

昭和一七、八年頃からは物資も不足し、学校に於ては作業の時間が多くなり、制服はあっても殆んど作業服で過すようになった。家庭にある古着を使って上級生に縫って貰った国民服と称する上衣にモンペ姿である。加藤先生・道先生に習って作った自作のモンペを勝手に恰好よくしようとして襠を小さくつめ、いわゆるスラックス型にしようとして注意されたこともあるとか？　先生方も男の先生は国防色の国民服、女の先生も和服に袴の姿から標準服へと変身されていったのである。

贅沢は最も許されないことで、腕時計は持たない、革靴も履かないで、白い木の台に赤い鼻緒をすげた下駄履き、校内では、ズックが不足して藁ぞうり履きとなる。鞄も何時のまにか木口を使った布製の袋、帯芯で作ったリュックを持つようになり、空襲が心配になるようになってからは、登校の際は防空頭巾も携行したのである。

戦時の入学試験

昭和一七年以後の入学試験は誠に簡素なものとなったようで、紙不足のためか筆記試験はなく、口頭試問によったようである。当時受検した生徒の脳裏に忘れられない問題として

一、神風は吹くか。
一、職域奉公とはどんなことか。

など、ほかにも多くの問題があったのであろうが、戦時の学校や社会の要請がどんなものであったか窺い知ることができる。

戦争完遂のために挺身

戦局の進展とともに学園にも愈々非常時態を乗り切るために乙女の積極的な協力が必要となってきた。昭和一八年一二月二六日、昭和一八年度卒業生による勤労挺身隊結成、昭和一九年四月一四日には学徒義勇隊が編成され、大東亜戦争完遂のため勤労学徒として挺身することになったのである。その主なものを挙げれば

○鈴鹿海軍工廠挺身隊　先ず昭和一八年一二月末に結成された勤労挺身隊の出動である。昭和一九年三月一一日この年卒業予定者による挺身隊の壮行会がこの日の午後若宮神社に於て挙行された。第一出陣であるだけに送る者も送られる者もその緊張は大したもので雄々しく悲壮感に溢れていた。続いて三月二五日、金沢市此ノ花小学校に於て県合同の壮行式が行われたあと夜行で任地三重県鈴鹿市鈴鹿海軍工廠に向け出発したのである。翌二六日午前八時、加佐登駅下車、徒歩三〇分で鈴鹿市岡田第二海軍宿舎に落着く。三月下旬の朝晩の鈴鹿おろしの冷たさは初めて家を離れ、学舎を巣立った乙女たちには一しお身にこたえたのである。

その後約十日間の練成期間を経て各職場へ分散配属される。乃ち

総務部	一名
火工部弾　工場	一一名
〃　信管工場	九名
〃　庁舎	六名

一部隔週夜勤（後七時～前七時）のある現場へ配属された人もある。

一年間の勤務を終えた昭和二〇年に入ってからは戦局は日々苛烈の度を増し、軍の要望に応えて動員期間を更に一年延長となる。延長勤務に入る前に全員に対し一週間の慰労休暇が与えられて各自帰郷した。回想によればこの休暇は寿命の伸びる思い。その喜びはたとえようもなく有難く貴重なものに思えたそうである。

休暇後は再び精励、毎日飛来するB29の飛行雲を怨めしくにらみつつ一日々々が命の切れ目という思いの毎日であったのである。出勤服装は防空頭巾と防毒面を携行して、長靴履きであった。

家庭の事情などで帰郷退職した人もあり、終戦時には二〇名程になっていた。終戦後は、残務整理などもあ

り、帰郷したのは八月二〇日であった。

松任高女女子挺身隊員名

番野　冨美　五間長良子　南　寿美江　池野ミヤ子　中田　登代　紺　美代子　武谷　澄子
辻　和子　中田喜美子　茅納　待子　武田　文枝　高田　久子　古野　和子　平松　雅子
加藤　郁子　長瀬美智子　福田　洟子　南手　静子　村岸美和子　増田　友江　前田　雪江
相木　澄代　宮本　米子　村本　重子　村中　孝子　森　令子　表　和恵　安原恵美子

○朝日航空へ学徒動員　昭和一九年四月一七日、学徒動員により本校第四学年生徒一〇〇名は朝日航空工業株式会社配属となり、能美郡福岡製作所へ勤務し寄宿舎に宿泊して航空機補助タンクの製作に従事する。

福岡製作所は寺井駅から四粁程南にあり、紡績工場だったものが軍需工場に変ったもの、村はずれに油に汚れた薄暗い工場の棟が幾棟も続いていた。そしてその寮に寄宿して仕事をするのであった。

仕事は竹を材料にして二メートル位の長さの円錐形の飛行機の燃料を入れる補助タンク作りであった。みんなは、竹工部・木工部・塗装部などに分れた。

竹工部　竹を細く薄く剝ぎ、それを畳一枚位の網代に編んで舟底型に接着剤で固め、タンクの外側を作る仕事。

木工部　タンクの胴体の骨組を作る。

塗装部　タンクの内側と外側に強い和紙を張り、その上へ、渋や、色々の塗料を塗って油が漏れないようにする。何分ザルに油を入れるようなもので、針で突いたような小さい穴でも油が漏れるので、本当にむずかしい仕事、それこそ汗と涙の結晶で作り上げ最後にスカイブルーで綺麗に仕上がる。

仕上った補助タンクが次々と戦場へ送り出される度に祈るような気持、粗末な作業衣にモンペ姿の学徒たちは一般の工員たちと変わりないようであったが、学徒としての誇は、白い鉢巻と、作業衣の真白な衿カラーで象徴されていたのである。

毎日の仕事に疲れた心や体を癒すため、訪れた先生が彼女たちを夕方から寺井の浜へ散歩に連れて行き、静かな夕暮の海を眺めて、ホット一息つかせて下さった。又暑い夏の夜、工場の人達と学生と合同で慰安会を催し、それぞれ得意の踊を披露してみんなの喝采を浴び、日頃の苦労をしばし忘れて過したのである。でも、親元を離れて暮したことのない学徒たちには一週一度の休暇が本当に待ち遠しくて、毎日暦の日を消して土曜日を待ったのである。週末になると昼食を執るまも惜しく、寺井駅まで駈足で急いだ。食糧不足の折柄玄米に大豆の混った御飯一杯に、お汁と鰯一尾という粗末な食事であるから、月曜日になると、母親に作って貰ったおにぎり・おはぎ・いり豆など（これとて無理をして整えたもの）両手に持てるだけぶら下げての工場帰り、友達と分け合って賞味したのである。

○学校軍需工場で学徒動員　昭和一九年一〇月一日、朝日航空出動の四年生が帰校して学校軍需工場とし、講堂・工作室を工場として福岡で覚えた重い鉈を片手に、竹剝作業が続けられた。昭和二〇年四月一日からは専攻科一学級増加し、在籍三一名により軍需生産作業に従事、毎日一時間宛授業が行われた。又、昭和二〇年六月一一日から第二学年、第三学年約三〇〇名に動員が下り、松任製作所々属の電纜、線工作業学校工場が開設された。この作業には工場から社員数名が配属されてその指導に当った。

竹剝作業では町内の竹業者が動員されて、生徒達に作業のしやすいように、長さをきめたり割ったりの援助があり、学校工場も雨天体操場から講堂まで使用されるようになった。ずらりと並んだ生徒達の前に材料が配

られると、ナイフを使って手先も器用に、その肉部を¼ぐらいの薄さに剝ぐのである。指先をちょっと舐めてさっと剝ぐ手際は馴れてきての話で、最初のうちは指先が切り傷だらけになったようである。

余話ではあるが、材料の届かぬ日など、竹屋さんを講師にすばらしい竹製品の作り方を習って、その製作にせめても忙中閑ありと、楽しんだひとときもあったとか？　そのうち竹屋さんも動員されて更に人手不足となり、大きな竹の束を松任駅まで取りに行かねばならなくなった。恐らく屈強な乙女が選ばれたのであろう。竹の材料を長いまま二人一組となって、肩に手拭をのせて担いだそうで校舎の横の雪の中に一杯積まれていた太い竹の緑色が、とても印象的だったのである。

松任工機部へ学徒動員　昭和一九年三月二四日から四月四日まで、最上級生が半数交替で、松任工機部に於て勤労作業に従事し、毎日教諭二名がこれに附添い監督をした。

米林校長の退職と柴原校長の着任

昭和一九年三月三一日、本校三代校長米林秀秋氏は依願退職された。昭和一〇年三月着任以来九年の長きに亙る。

風雲急を告げつつあるとはいえ、本校としては最も充実し、生徒は学園生活を満喫している時であった。昭和一一年は、創立十周年記念の年で、四月二六日の創立記念日以来数々の記念事業や行事を行い、昭和一五年、紀元二六〇〇年を迎える頃から戦争を身近に感じ出し、以後、未曾有の大東亜戦争に突入したため、これまで経験したことのない戦時体制下の学校を経営しなければならなかった。大切な部下の応召による出征、生徒の父兄の出征や戦死、その上、生徒達を銃後の学徒隊として挺身させなければならなかった。この間のできごとは前例のないことだけに容易ではなかった。今、戦争熾烈を極めてその前途も確認できない時退職されることは断腸の思いであったろうと察する。

米林校長の後任として、石川県立大聖寺高等学校長柴原雄吉氏が本校第四代校長として着任された。



四代校長
柴原雄吉

明治二六年四月八日、石川県能美郡湊村に生まる。大正二年三月、石川県師範学校本科第一部卒業。今江尋常高小を振り出しに、浜尋常高小・県師範学校・金沢第一高等女学校・七尾中学校・小松商業学校・小松高等女学校各教諭、昭和一三年五月、石川県立大聖寺高等女学校長を経て、昭和一九年三月、石川県立松任高等女学校長、昭和二三年四月、石川県立松任高等女学校長事務取扱、石川県立松任高等学校普通部長となる。

本土決戦に備えて

防空部署配置訓練　昭和一七年四月一八日本本土初空襲以来、防空に対してはいろいろの訓練が行われてきた。学校内には所々に防火用砂袋が積まれ、防火用水のバケツも併せて何時でも使用できるように準備された。B29来襲の頻繁になった昭和一八年一一月二九日から一週間、防空部署配置訓練が行われ、いざという時、機敏に安全な行動をとり生命を護る練習が行われた。

空襲を告げるサイレンが鳴ると素早く防空頭巾を被り、先ず、校庭の木の陰に避難、最早、竹槍や薙刀を振りまわす暇もなくなっていた。三角巾による応急処置訓練も併せてよく行われた。

戦時校訓の制定　昭和一九年一一月三日、戦争も苛烈を極め、サイパン玉砕、山本五十六元帥の戦死、快報より悲報が多くなり、地図に張りつける日の丸の旗の数もめっきり減り出しても、神国の必勝を信じ、戦争完遂のためいやが上にも志気を鼓舞する意味で新しく校訓が制定された。

一、学徒ハ至誠尽忠ノ精神ニ徹スヘシ
一、学徒ハ礼儀ヲ重ンジ温雅貞淑ナルヘシ
一、学徒ハ修文練武質実剛健ナルヘシ

防空壕構築　昭和二〇年四月一八日から校地周辺、いわゆる運動場の東側から北側にかけてL型に防空壕構築作業が開始された。これは空襲の際全生徒が待避するためで、あわせて防火用大水槽も数ヶ所に埋められた。

この防空壕は生徒の手で堀ったのであるが、切角堀り上げて完成と思いきや一夜の雨で脆くも潰れ、又堀りなおして炭俵に土をつめて壕のまわりを固めようやくできあがった。しかし、この壕も外から丸見えではいけないということで、まわりに、かぼちゃ、ごこくいもなどを作り、その蔓を壕の上に這わせて一面に覆ってカムフラジー、実れば給食の材料として一挙両得としゃれこんだが、全部で一〇個以上も構築したのである。

大聖寺上空に敵機襲来の空襲警報のサイレンが鳴り渡り、一度だけ本番に駈け込んだことがあるが、このほかにも避難訓練、警戒警報で飛び込んだことが度々あり、じめじめした壕の天井に数匹の蛙が共に避難していた？とか、今にしてはユーモラスにきこえるが、当時には切実感が漲っていたのである。

戦時委託生の転入　昭和二〇年六月一日、戦時委託生六四名の転入式が行われた。戦時体制下で母校を離れた生徒達である。このほか、疎開による転入生もあり、各学年ともこれまでの二学級から三学級に殖えてどの教室も超満員の大世帯となった。この生徒達も早速本校生徒の中に解け込み、共に戦争完遂までと頑張ったのである。

三　終戦を迎えて

終戦の詔書煥発　昭和二〇年八月一五日、大東亜戦争終戦の詔書煥発される。無条件降伏、本日をもって学徒隊、学校工場は解消となる。

全く予期しない八月一五日の終戦の報は、無我夢中で銃後の学徒として戦い抜いてきた女学生には余りにも大

きなショックであった。一五日は休みで、一七日、父兄会並に生徒が召集され、大東亜戦争終結の聖旨伝達が行われた。生徒達は号泣し、教室に帰ってからも暫らくは泣き止まなかった。言葉でいい表わされない口惜しさが胸を締めつけ、全く、放心状態であった。

張りつめた心に、肩にがっくりと穴のあいたようなところへ「米兵が上陸して女性は危い、夜の一人歩きはしないように」などのデマが飛んで一時は思想的にも誠に不安な状態であったが、この日から兎に角復興に起ち上がらなければならなくなったのである。

戦い終って　一億総火の玉となり、聖戦完遂の理想のもとに衣・食・住すべてを我慢し、「欲しがりません勝つまでは……」をスローガンに、来る日も来る日も緊張の連続、勉強よりもお国のための勤労に身を捧げて、その辛ささえ感じないで戦中を過した乙女たちが、昭和二〇年八月一五日正午を境に、これまでの緊張から解き放されたその解放感は譬えようのない寂寞さで身を締めつけられ、じっと瞑目して一歩を踏み出さねばならなかったのである。

学校工場、其の他　戦争も酣となった昭和一九年頃から、学校即軍需工場、生徒即勤労学徒として一年有余非常体制を続けたのであったが、昭和二〇年八月一五日をもって解消となり、同月二九日から戦時施設の解消作業が開始された。無気味なサイレンによる警報で飛び込んだ防空壕に直撃を一度も受けなかったことが、せめても、不幸中の幸いで運動場にL型にずらりと構築された一〇個以上の壕を一鍬々々複雑な気持で埋めていったのである。

戦時施設の解消開始　防空壕の内側は食糧増産の畠として使用されていたのであるが、壕を埋めた後は次第に整地して運動場へと復帰していった。

戦時委託生の廃止

戦時委託生として、又疎開で本校に転入したのはつい三ヶ月前の六月であった。戦争最も苛烈を極めた時期に同校の生徒達と行動を共にし、今、無条件降伏という名の終戦を迎えて同校を去る委託生を待つ、学校や、家庭は果して完全な状態であったのであろうか？　八月三一日、帰る喜びと別れる悲しさを秘めた送別式が挙行された。

第四節　新教育制度とともに

一　新気運みなぎる学校

授業の再開

昭和二〇年九月、戦後の学校が始った。文部省は「今後ノ教育ハ益々国体ノ護持ニ努ムルト共ニ軍国的思想及施設ヲ払拭シ平和国家ノ建設ヲ目途トシ……」といっていたのに対し、G・H・Qは先ず戦時中の教科書の本文の中で、軍国主義に関する箇所を削除する通牒を出した。修身、歴史、国語、地理などの書物の中で、軍国主義に関する箇所を墨で消すのである。これまで大切に馴れ親しんだ教科書に黒々と線を引いた。歴史などは最もひどく国体の護持どころではなかった。さらに一二月三一日の指令で修身、日本歴史、地理の授業は停止され、再開までは新聞の記事、論説などを教材として討議法による授業が行われることになった。二一年に入って再開されたが教科書は間に合わず、うすいパンフレットのような暫定教科書で学習しなければならなかった。

終戦までの一、二年は毎日一時間の授業しかできなかったのであるから、今こそその不足分を補うのだと、一

戦時委託生の廃止

戦時委託生として、又疎開で本校に転入したのはつい三ヶ月前の六月であった。戦争最も苛烈を極めた時期に同校の生徒達と行動を共にし、今、無条件降伏という名の終戦を迎えて同校を去る委託生を待つ、学校や、家庭は果して完全な状態であったのであろうか？　八月三一日、帰る喜びと別れる悲しさを秘めた送別式が挙行された。

第四節　新教育制度とともに

一　新気運みなぎる学校

授業の再開

昭和二〇年九月、戦後の学校が始った。文部省は「今後ノ教育ハ益々国体ノ護持ニ努ムルト共ニ軍国的思想及施設ヲ払拭シ平和国家ノ建設ヲ目途トシ……」といっていたのに対し、G・H・Qは先ず戦時中の教科書の本文の中で、軍国主義に関する箇所を削除する通牒を出した。修身、歴史、国語、地理などの書物の中で、軍国主義に関する箇所を墨で消すのである。これまで大切に馴れ親しんだ教科書に黒々と線を引いた。歴史などは最もひどく国体の護持どころではなかった。さらに一二月三一日の指令で修身、日本歴史、地理の授業は停止され、再開までは新聞の記事、論説などを教材として討議法による授業が行われることになった。二一年に入って再開されたが教科書は間に合わず、うすいパンフレットのような暫定教科書で学習しなければならなかった。

終戦までの一、二年は毎日一時間の授業しかできなかったのであるから、今こそその不足分を補うのだと、一

年分を半年でと急ピッチに進めたり、馴れない討議法に戸惑いがあったりして生徒の一部には反感を持つ者もあり、放課後グループで映画を見に行ったり、故意に掃除をサボって抜け出す者もあり、大きな目標を失った一途な乙女たちには余りにも大きなショックであったようで、不満が爆発してストライキを企てるような不穏の空気に一時は包まれた。

学習の内容に於て、これまで最も重要であった、修身、日本歴史、体操に加えられていた武道、教練、修練が廃止され、新に、自由研究が加わり数学、裁縫、英語各一時間が増加して週三四時間となり、平静に戻そうとした授業は大転換の再開となった。それでも、少しずつ治まっていった。

その頃、学校の恐れたものは軍政隊であった。これは、進駐軍が各府県の民主化推進のために設けたもので、ジープで不意に学校を訪れ、校内の隅から隅まで見てまわり、例えば薙刀や軍国主義の図書などないか検べた。このため当時学校に保管されていた戦時中の書類や、歴史図書などを隠し切れず焼却したものもあり、その後の学習に必要な資料の損失も多かったのである。

戦後の学科課程及教授時数　昭和二一年から二三年までは最も複雑な教科課程でその内容も定かではない。記録に従って載せれば

昭和二一年度	武道、教練を廃止して体操	三
	修練を廃止して自由研習	二
	毎週教授時数	三四
昭和二二年度	修身、公民、日本歴史廃止	
	数学、裁縫、英語各一増加	

毎週教授時数　　三四

昭和二三年度　併設中学校は新制中学校課程
高等学校は新制高校課程
生徒の選択科目により理数科、文科系と家政科系に分れる
毎週教授時数　　三四

新生の学園生活

女学校にも新しい学園生活が始まった。それは、戦争で打ちひしがれた混迷から起ち上った新生への息吹きであり、自由という名の解放でもあった。云いたいことは自己の意見として憚ることなく発言し、興味があれば特技としてこれを深めることのできる時代が訪れたのである。

学友班を組織しての弁論会が美川小学校や笠間小学校を会場に行われたのは昭和二一年一月のことである。又自由研究、一人一人が研究発表して表彰するなど意見発表の機会が多くなったが、男女同権による選挙で女代議士第一号として米山久子女史の踊り出たのもこの年のことであり、一一月一一日には新憲法公布記念講演の講師として来校している。生徒自治会が誕生して全校生徒の投票によって役員が選ばれ、自主的にその運営をするようになったのも少し後のことである。又、昭和二三年二月一一日の紀元節行事として歴史研修班の討議会が行われている。

クラブ活動が開始されて情操的にも緩い足どりで身につくようになった。

何年振りかで修学旅行も復活したが、二一年に行われたものは米一合持参による永平寺一泊旅行で、それでも生徒には大変な喜びで楽しかったようである。

白山登山隊が勇躍出発の途についたのは二一年七月二三日のこと、一四名の参加生に四名の教師が引率し、霊

峰で久し振りに心身を浄めたのである。又、運動場の整地を始めたのが、二一年七月一二日からで、芋や南瓜畠のあとを運動場に復活して、スポーツへの意欲が燃え出し、これからあと、スポーツの交流も激しくなっていった。

学芸会も盛んになり、その名も大学芸会と呼び、町ではマドロスの曲が流れ、踊りに楽しみを求める風潮があったので幾分その影響もあったようである。上級生、下級生の交際が盛んとなり、男女間が急に解放され交際上色々の問題が取り沙汰されるなど民主々義を本物にすることはそうたやすいものでなく、先生の指導も大変であった。

服装にしても作業衣から制服に、下駄ばきからぼつぼつ靴になり、軍隊払い下げの毛布が暖いオーバーになるなど、女学生らしいスタイルへと戻っていった。

こうして稍々軽佻の嫌いある中にも楽しい学園生活を呼び戻して、昭和二一年三月二八日には第一六回、同二二年三月八日には第一七回の卒業式が意義深く挙行された。万感胸に去来して「蛍の光」も涙にかき消されて歌にならなかった。それは戦中を一心に戦い抜き、やがて、かつてない終戦の激動の中で今から楽しい女学生々活をと思う間もなく巣立たねばならぬ乙女のくやし涙ではなかったであろうか。

帰農

戦後に残された深い爪あとの中に食糧難がある。学習も正常化を目ざしている時であったが昭和二一年の五月の田植期、六月の麦刈期、九月の稲刈期には五日から一週間の帰農が許された。

二学制改革

新制度への不安

昭和二二年三月の教育基本法学校教育法によって、六・三・三制度は確実となった。その頃から、これまでの高等女学校がこの制度ではどのように扱われるか問題となり、いろいろ論議された。新制中学として、又高等学校としてか、悲劇的、楽観的観測が交錯した。殊に、新学制が男女共学を建前としたものであることから、風紀の頽廃を予言しているかのように考えられ、女子高校となることを切に望んだ。

当時発足（昭二三・一・一五）をみたP・T・Aも共学の高等学校になったのでは危険この上なしと判断してその請願を計画した。学校側では加藤、道両教諭、P・T・A側も宮本会長を出して石川軍政隊へ向ったのである。ところが、金沢駅へ降りたとたん「一切解決した」ことが判明してそのまま帰校となった。一切解決の意味は当方の意図に反し「凡て事終れり」有無を言わさぬ結論が待っていたのである。

このため県下の公立高校は全部男女共学となった。地域によっては、関東、北海道の一部に公立女子高校の残った地区もあったが、当地の軍政隊は強かったと云わねばなるまい。

心配された共学も、校舎の都合で現在在校の生徒が巣立つまではこの校舎で女の学園をまもることができ、むしろ生徒には男女共学に対する興味をそそることとなった。

創立二十周年記念

新学制の発足をみた昭和二二年四月二六日、創立二十周年記念式典が挙行された。勤続職員の表彰式並びに成績品展覧会、祝賀会も併せて行われた。この日、清輝会総会ももたれている。

続いて二七日には祝賀音楽会舞踊会、二八日には、金沢美専校長森田亀之助氏による記念講演会が催された。

五年制高女の卒業式

昭和二三年三月一二日、第一八回の卒業式が挙行された。この時の五年生は実に複雑な卒業をしている。前年昭和二二年に大部分のものは四年制女学校の卒業生となり、その時、残った二五名がこの日五年制女学校の卒業生となり、更に残った三名が翌年、高等学校第一回卒業生となったのである。さらに三月二四日、三年生のために併設中学校第一回卒業式が行われた。六三三制で女学校の三年は併設中学校として扱われたからである。この日、中にはさまった四年生は最も気の毒で、四年間女学校に通いながら、四年終了の証明しか与えられず、他日、善処することを約されたままとなった。

三　綜合制松任高校へ

新制高校の発足

昭和二二年四月一五日、松任高等学校（普通部）の開校式が挙行された。この年は最も複雑な編成となったわけである。

乃ち、併設中学三年生（三組）高校一年（三組）高校二年（三組）高校三年（三名）と一応高校一年から三年まで揃った。しかし、高校二年は、高校二年生と呼ばれたり、高女五年生と呼ばれたり、二つの呼ばれ方をしたのである。

この年の六月二日に松任中学一年生の二組に本校別館階下二教室が貸与され、女の学園へ校種は異るとは云え男子が出入りすることとなった。先ず、男子用便所が付設されたことは当然で特記に価するものであろう。又更に、九月六日から、松任高等学校定時制普通部の授業が開始され、女生徒の下校後、二階の教室がこれに使用されることとなった。当初は職場では係長クラスの人が生徒として学び、休憩時になると廊下に灰皿を用意しなければならなかったのである。

最後を飾る諸行事

新学制となっても例年行われた諸行事は次々と実施された。昭和二三年度は何れも、この校舎で行なわれる行事の最後を飾るものであり、順を追ってとどめる。

四月二七日から久し振りに修学旅行が復活し、高校二、三年生による関西旅行が実施された。

一〇月一日　恒例の運動会が新制度下らしく華やかに行われた。

一〇月一六・一七日　珍らしくバザーが催された。

一〇月二二日　第二回国体（金沢会場）に日頃鍛えたソフトボール選手が勇ましく出場、記念のバッチを手にする。一大壮挙であった。

監督　川上重次先生、幸山、森先生

キャプテン　木村　弘子　　マネージャ　村田　道子

選手　投手　由田　文子　　捕手　荒木久美江

西村タカ子　奥浜　慶子　城戸口久子　徳多　泰子

増田美千子　高本　和　本江　和子　中西　華子

正見　明子　大垣　和子　田中　朔子　南　葉子

高井　沢子　手取冨美子　由田　文子　安島　裕子

梶　末子　小倉　静子　　補欠　亀川志津子



高女最後の修学旅行

当時のソフトボールチームは県下でも強力チームとして知られ、選手たちも自信満々であった。第二回国体金沢会場でも活躍したが翌年第三回九州会場にも出場して後輩へとタッチしたのである。このようなわけでこれを応援する生徒の中からソフトボール選手を讃えて「ソフトボールの歌」を作り校内でよく歌った。

一、さみどりの空は　いや晴れて　　作詞　新村敦子
基線は映ゆるグラウンド　　作曲　枷場先生
白いセーラが目にしみる　　ほか生徒有志
今日ぞ映えあるわれらが試合
いざいざ行かん　高らかに
希望の夢を打ち上げん

二、略

一一月一一日　音楽会が盛大に行われる。

二四年三月一日　学芸大会が例によって華やかに行われる。

松任高女最後の卒業式　昭和二四年三月七日、高校第一回卒業式（普通科三名）同三月一九日、高女第一九回卒業式が挙行された。

昭和一九年、戦争苛烈を極めている四月入学した生徒たちである。戦時下の学徒として終戦まで、戦後は混迷の中にも学習が再開され、スポーツで若さを発散させ、民主々義の自由を得て女学生らしい生活を取り戻し、学制改革によって高校二年生とも高女五年生とも呼ばれて玆に卒業を迎えた、松任高等女学校最後の卒業生八八名である。

戦後の学級編成　昭和二一年から二三年は学制改革により併設中学校、五年制高女、新制高校と複雑な編成となり在学の生徒でも戸迷うことが多かった。

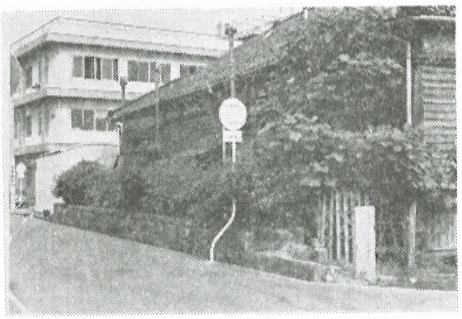
次にその編成を挙げれば、

年度	学級	人数	担任	学級	人数	担任	学級	人数	担任	備考
昭和二二	一の一	六〇	福浦　耕介	一の二	六〇	喜多　育治	一の三	六〇	松内　紀子	
	二の一	六一	三田　二郎	二の二	六一	加藤　巳行	二の三	六〇	栃尾喜美子	
	三の一	五三	川上　重次	三の二	五二	油谷　周次	三の三	三三	鞍　恵子	
	四の一	六二	泉　松雄	四の二	六二	道　幸枝				
昭和二三	併設中学校									
	二の一	五八	福浦　耕介	二の二	五七	喜多　育治	二の三	五九	栃尾喜美子	
	三の一	六一	三田　二郎	三の二	六一	森　松男	三の三	六〇	加藤　巳行	
	高女									
	四の一	六四	川上　重次	四の二	三三	小関　達人	四の三	三三	穴太　郁子	（五年制実施一年目）
	五	二五	近藤　繁隆							
昭和二三	併設中学校									
	三の一	五七	福浦　耕介	三の二	五六	月輪　彰慰	三の三	五六	永井　久恵	
	高等学校									
	一の一	四〇	三田　二郎	一の二	三八	森　松男	一の三	三七	加藤　巳行	（高女五年とも云う）
	二の一	二四	川上　重次	二の二	三六	小関　達人	二の三	三五	木村　郁子	（高校制度最初の三年生）
	三	三	道　幸枝							

四むすび

この学び舎に集い来て

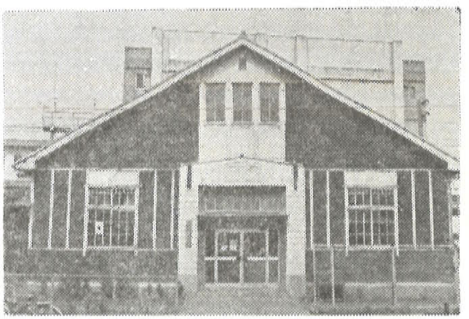
昭和二年四月松任町立女子実業学校の県移管を機に、県立松任高等女学校として発足以来二二年、戦前、戦中を良妻賢母を目指す楽しい女の学園として、また、苦しくとも銃後の護りを果す勤労学徒の学園として、創立以来作られてきた校風とともに意義深く受け継がれてきた。そして、かつて経験したことのない敗戦の洗礼を受けた本校が、一時はその目標を失い棹をなくして波に漂う学園にさえ見えたが、昭和二二年の教育大改革によって一大転換を余儀なくされながらも、一応平和な学園の姿を取り戻し、この校舎に留まることができたのである。



カラタチの垣根越しに見える講堂

その間、初代畠山校長をはじめ、川岸、米林、柴原歴代の校長を戴き、多くの先生方の温い薫陶を受けて、この校門を巣立った生徒は一二六七名、女子実業校を併せれば一四五二名となる。編成は、一学級乃至三学級と年により変遷し、女子実業時代に研究生、高女時代に専攻科を見た年もあった。

学科課程に於ても、時の流れにより少しは改正をみても、底に流れる女の道を磨くことにおいては一貫し、戦後の学制改革の前に発展的な幕を閉じることになったのである。昭和二四年四月からは、名実ともに男女共学の松任高等学校としてこの校舎を後にし、次の教場へと吸収されたのである。



昇降口の見える雨天体操場

当初、松任高女として使用する期間、県へ寄付されていた校舎であるから以後、松任町の管理するところとなり、松任町立松任中学校に使用され、組合立松任中学校々舎にこれが移ってからは、更に松任町立幼稚園としてその面影を留めていた。町村合併を行ってからは松任町役場を皮切りに、福祉センター、消防署建設のため、雨天体操場がそのままの姿で講堂に隣接して、主な校舎は惜しくも取り払われた。松任市になってからは町役場も市役所となり、昭和四九年度には、更にその市役所に隣接して、働く婦人の家が並んでまさに近代庁舎の建ち並ぶ、松任市公衙地帯となった。通い馴れたこの校舎を今に留めているものは、カラタチの垣根越しに見える精神修養の場として厳粛そのものであった講堂と、毎日、登下校の際使用した昇降口のある雨天体操場がこれら庁舎の後に、市立幼稚園として二棟並び、外見だけは懐し

卒業生人数一覧

女子実業	1回	45名
	2	21〃
	3	34〃
	4	38〃
	5	27〃
	6	20〃
計		185名
研究生		21名
松任高女	1回	59名
	2	54〃
	3	69〃
	4	48〃
	5	47〃
	6	45〃
	7	41〃
	8	58〃
	9	50〃
	10	57〃
	11	57〃
	12	54〃
	13	107〃
	14	89〃
	15	110〃
	16	114〃
	17	97〃
	18	23〃
	19	88〃
計		1,267名
両校計		1,452名

昭和20.9.30 専攻科修了生	30名

い昔の姿を残している。この雨天体操場も近く取り壊しの憂き目にあることは淋しい限りである。

また、校前で年中色を変えず生徒たちを迎えてくれた、緑の松と、暑い夏の日、木蔭を作って北風も涼しくしばし憩いのひとときを過させてくれた、欅の大木が庁舎の前にその姿を留めて、幾代の夢を語りかけるように聳えている。

校舎はいかに変わろうとも、高い希望を持って、心を鍛え、身を練り、正しく、直く、しとやかに、世のため人のために尽そうと校歌で歌った卒業生は、地元松任市を中心にして、各地に散らばりながらも、級会などで今なお固い友情で結ばれて、それぞれの運命を甘受し、恩師、同窓生とともに育くまれた校風を今に生かして、家庭に、社会に活躍している。儚くも、既に幽明境を異にする恩師、同窓生の在りし日を偲びその冥福を祈りながら、この学び舎に集い来た人達の再会を願い、今後更に発展されることを祈念してむすびとする。

付　記――松任高女制服の変遷――

当初の頃



上下とも紺色夏は上衣が白となる。衿は時により白カバーをかける。

戦前



上下とも紺色のセーラー。白線二本。夏は上衣が白で袖口と衿だけ紺色となる。ネクタイ金茶色の紐・運動着上白・下臀つきブルマー

戦後



上下とも紺色のセーラー。白線二本。夏は半袖白・衿紺色ネクタイ金茶色絹布、夏は金茶色の紐・運動着上白・下紺色ブルマー

第七章　総合制石川県立松任高等学校

第七章　総合制石川県立松任高等学校

第一節　新学制の発足

一　新教育の成立

米国教育使節団の来日

敗戦後の精神的な混乱を整理し、戦前の教育を否定し、因襲を引きずりながらも、少しずつ新しい教育の理念が芽ばえて行った。

昭和二一年は、極度の物資不足に、急激なインフレーションが高進（金融緊急措置令―新円切り換え、二一年二月）し、生きるのがせいいっぱいという時であったが、教育上の改革については、具体的な段階に入った。

二一年三月、米国教育使節団が来日し、連合軍最高司令部（G・H・Q）民間情報局教育課、日本側教育者委員、各種職域代表者と協議の末、報告書をG・H・Qに提出し、四月七日これが発表された。報告書には、教育の目的および内容・教育行政・教授法および教師養成教育・成人教育・高等教育についての具体的な提言がなされており、戦後の教育改革の指針となったのである。

政府はこの勧告に基づいて、二一年八月内閣に「教育刷新委員会」を設けた。この委員会は、教育に関する重

要事項を調査・審議し、日本教育を理念、制度内容の全般にわたって根本的に刷新する方法を立案し、総理大臣の諮問に答えることを目的としていた。二四年六月に教育刷新協議会と改称され、二七年廃止されたが、その間において、教育理念および教育基本法に関すること、学制に関すること、教育行財政に関することなど最も重要な事項が答申された。

教育三法の制定　教育刷新委員会の答申に基づいて、教育基本法（二二年三月）、学校教育法（二二年三月）教育委員会法（二二年七月）などが制定された。

教育基本法は、日本国憲法の精神にのっとり、新しい日本の教育のあり方を明示したもので、明治以来教育の根本とされてきた教育勅語にかわるべきものとして制定された。教育の目的を「人格の完成を目ざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成」とし、その他、学問の自由・教育の機会均等、義務教育・男女共学・学校教育・社会教育・政治教育・宗教教育・教育行政についての基本原則を明示している。

学校教育法は、学校教育の全体系を教育基本法の精神にのっとって再編成するために制定された。それは、学校の種類及び修業年限を、小学校六年、中学校三年、高等学校三年、大学四年、その上に大学院をおくといういわゆる六、三、三、四制とし、従来の複雑な学校体系を単純化したこと、義務教育年限を、従来の小学校六年から、これに中学校三年を加えて九年にしたこと、差別的女子教育を撤廃し、全面的に男女共学としたこと、教育の機会均等で、高校・大学において定時制・夜間制・通信制を認め、勤労者に対しても就学の機会を与えたことなど、新教育の学校構成を具体的に示したものである。

教育委員会法は、中央集権的、画一的であった従来の教育行政を、公正な民意を反映し、地方の実情に即した

教育行政に改めるべき、他の行政機関から独立した教育委員会を設けること。都道府県と市町村と二つに分け、それぞれ地方住民の選挙によって選ばれた委員からなる合議制の行政機関とする（教育委員の公選制は昭和三一年六月官選制に改められた）ことなど、民主的な教育行政が行われるように制定されたのであった。

二　新制高校創設期

設置準備

昭和二二年二月、文部省は新学制実施方針を発表し、小・中学校は二二年度、高等学校は二三年度、大学は二四年度から実施することとした。

本県では、文部省の勧奨により二二年三月、「新学制準備協議会」をつくり、当面の中学校の校数・統合・教員の増配等について審議答申しているが、二二年四月より六・三制の移行が始まった。ついで六月には、「教育刷新協議会」が前述の内閣のそれに刺激されて設けられ、県の諮問に答えて、新教育に関する一般的事項や、高校設置に関する根本方針を答申している。さらに県議会教育民生委員会は一一月頃から、高校設置についての具体的な事項について活発な活動を始めた。このようにして県でまとめられた高校設置案の概要は次のようであった。

一、市・町立・組合立は設置者にまかせる。

二、中学校・高女を合併して男女共学の普通高校とするが、それぞれ男子部、女子部とする。（例金沢一、二、三中を男子普通、県一、二女を女子普通）

三、実業学校は男女共学とする。（例県工、金商）（松任一校として農業部と女子部）

これを「総合制、男女共学」の新教育の方針から見ると、単に旧制中等学校を高等学校に昇格したというだけ

で、ほとんど旧来の枠を出ないものであり、GHQの指令を受けて、地方の教育改革に努力していた石川地方軍政隊のとうてい容認出来るところではなかった。

軍政隊民間情報教育課の指導

軍政隊のうちで、教育方面を担当したのは民間情報教育課（C・I・E）で、石川県教育に最も大きな影響を与えたのは、アトキンソン、オスボン、マーチンの三人であった。特にC・I・Eの課長であったオスボンは、共学や、中等学校の新制中学への校舎転用、中等学校間の統合を強く主張し、県と数回折衝を重ねたのである。この強い態度に押され、二三年三月に至って県は、C・I・Eの満足するような設置案を作製した。これによると、金沢市立工業及び女子普通高一校を除いてすべて共学とし、金沢に普通（家）三、工芸・商業各一、小松に普通（家）、実業（商・工）、農業各一、七尾に普（家）・商、実業（農・工）各一、大聖寺に普（家）一、松任に普（家）・農一、津幡に普（家）・農一、羽咋に普（家）一、飯田に普（家）一、輪島に普（家・工）一、宇出津に水（普）一、柳田に農（普）一となっている。新制高校の設置の見通しのたった三月一五日、自らジープを駆って、学校の教室を調べ、収容可能数を算定したりするなど精力的な活動をしたオスボンが転勤し、マーチンが責任者となった。県はこの後前述の設置案よりかなり後退した案で妥協させ新制高校の発足を迎えることになった。

新制高校の設立

前述した二〇校の他にその後認可された組合立、町立の三校に、私立の五校を加えて二八高校が二三年四月一五日から開校式を行ない授業を開始することになった。各高校の状況は次表の通りである。

新制高校一覧　（昭和二三年四月）

新制高校	利用校舎	旧制中等学校
金沢一高（男、普）	一中	一中、二中、三中
金沢二高（女、普）	一女	一女、二女
金沢三高（男女、普）	二女	市一女、市二女（二中、三中、一中）
金沢工芸高（男女、工）	工業	県工
金沢商高（男女、商）	金商	金商、市商
小松高（男女、普）	小中 小女	小中、小女、市女、寺井女
小松実高（男女、工・商）	小工	小工、小商
小松農高（男女、農）	小農	小農
七尾高（男女、普）	七中 七女	七中、七女、市七女
七尾実高（男女、工・商）	七工 七商	七工、七商
七尾農高（男女、農）	七農	七農
大聖寺高（男女、普）	大中 大女	大中、大女、錦女
松任高（男女、農・普）	松農 松女	松農、松女
津幡高（男女、農・普）	津農 津女	津農、津女
羽咋高（男女、普）	羽中 羽女	羽中、羽女

新制高校	利用校舎	旧制中等学校
輪島高（男女、普）	輪中 輪女	輪中、輪女、門前女
飯田高（男女、普）	飯中 飯女	飯中、飯女、宝立女農
宇出津高（男女、水）	宇水	宇水、宇女
柳田高（男女、農）	柳農	柳農、町野女
穴水高（男女、農・普）	穴農	穴農
富来高（男女、農・普）	富農	富農、富女
鶴来高（男女、普）	鶴女	鶴女
金沢市工高（男女、工）	市一工	市一工、市二工
金沢高校（男、普）	金中	金中
尾山高（男女、普）	尾中	尾中
金城高（女、普）	金城女	金城女
北陸女学院高等部（女、普）	北陸女	北陸女
藤花高（女、普）	藤花女	藤花女
盲学校高等部		
聾学校高等部		

松任高校の誕生

前掲の表の通り、本校は昭和二三年四月、松任農学校と松任高女を合併して、男女共学の高等学校として発足した。しかし教場は二つに別れ、元松任農学校に本部および農業部、元松任高女に普通部が設けられた。松任高女校長柴原雄吉が校長事務取扱、普通部長に、松任農学校長事務取扱加藤祇が農業部長に任命された。また教官は農学校、高女の教諭が高校教諭に昇格したが、教場が二つに分かれているため、時間割にしたがって両方の間を往復したのである。

生徒は、この年の三月、旧制農学校、高女の五年、四年、三年を卒業または終了する生徒から、それぞれ高校三年、二年、一年に入学したのである。入学の状況は次の通りである。



高女から高校への進学者

課程	性別	一年	二年	三年	計
農業	男	二一七	一七四	八三	四七四
	女	四	一七	三	二四
普通	男	二一二	一九一	八六	四九八
	女	一一九	九四	三	二一六
計		一一九	九四	三	二一六
					七一四

入学はもちろん無試験であったが、前掲の表の示すように、高校進学者は少く、特に高校三年に入るべき旧制五年卒業見込者は旧制のままで卒業になるので、農業課程においてわずか約三〇%の進学率であった。また高女は二一年度は四年で卒業となったので、この時にほとんどが卒業し、翌二二年度五年制となったが、五年に進級したのは二五名、さらに高校に進学したのは

わずかに三名に過ぎなかった。このような進学の低調さは、この頃の経済状況にもよるが、新教育を軽視し、旧制中等学校卒も高校卒も社会的な地位や就職のための資格については同程度に見なされるのであろうという実利的な風潮による。

難波校長の着任

新制高校とはいえ、発足当初においては本校は松農の延長であった。これに普通課程を合わせ、男女共学を実らせなければならない。また新しい農業教育の息吹を吹き込んで近代的に改編しなければならない。このような観点から初代校長には、農業教育に造詣の深い青年師範学校長難波得三が選ばれた。二三年八月二五日着任され、同時に松任農学校及び松任高女校長を兼任された。そして創設の混乱を乗り切り新教育の理念の具現に努められ、本校の基礎を固められたのである。



初代校長　難波得三

明治二九年八月一七日、宮城県仙台市に生まる。大正二年東京帝国大学農学部農学科を卒業。東京帝国大学農学部講師・宮崎高等農林学校教授。昭和一二年、東京農業教育専門学校教授・岡山青年師範学校長、同二一年五月、石川青年師範学校長を経て、同二三年八月、石川県立松任高等学校長兼石川県立松任高等女学校長となる。同二四年三月、金沢大学教育学部教授に転任。趣味音楽・俳句。

併設中学

昭和二二年新制中学が発足したと同時に旧制中等学校の募集は停止されたが、前年の二一年度に入学した生徒は、二三年新制高校が発足した時、中学三年となったのである。校舎施設等の関係もあり、母校にそのまま収容し、母校教師により授業が行われた。これが併設中学である。本校では、農業部に一三五名、普通部に一六五名、計三〇二名であった。

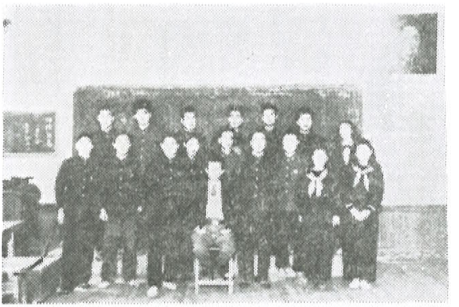
三　新制高校の再編成

三原則

新制高校の設置について、軍政隊が県に提唱したものは、「小学区制」「共学制」、「総合制」のいわゆる三原則であった。しかし、本県では前掲「新制高校一覧」の通り、実質的に共学となったのは金沢三高と飯田高校だけで、他は男女校舎を別にしているとか、工業と商業、普通と農業が別校舎であるとかして、実質的には三原則に従ってはいなかったのである。

東海・北陸地区軍政隊民間情報局の責任者として着任したジョンソンは、その前任地において、徹底的に三原則の実施を強要し、「ジョンソン旋風」と呼ばれたのであるが、地元軍政隊もこの旋風の東上とともに、本県に対する勧告を強めたのである。

このようにして、二三年一一月から発足した教育委員会によって新制高校再編成準備が進められ、二四年三原則による再編成計画が決定を見、四月から実施に移されることになった。



第1回卒業生（農業課程）

第一回卒業式

二四年三月七日、高等学校第一回の卒業式が、第一教場馬場町校舎講堂において行われた。男女共学は名のみで第二教場（高女校舎）に分かれていた普通科女子生徒は、この日始めて一堂に会したのである。戦争最中（一八年）に入学し、ゲートルやモンペ姿で学徒報国隊として勤労奉仕、食糧増産に励んだ、少年少女の一途な愛国心も終戦とともに踏みにじられ、一八〇度の転換を余儀なくされ、心の整理もつか

ないまま一年間の高校生活を終えて高校を巣立つのである。感慨は一入であったであろう。

この日卒業証書を手にしたのは、普通課程女子三名、農業課程（農業科）男子二五名、同（園芸科）男子一四名、同（農林科）男子一九名、同（畜産科）男子一四名、同（女子農業科）三名であった。

明石校長の着任と松任高校の再編成

高校再編成計画が各学校に示され、準備に忙殺されている二四年三月三一日、難波校長は金沢大学教育学部教授として栄転されるため退職され、同日付で津幡高校長明石与作が本校校長に任命された。



二代校長
明石与作

明治三四年九月二六日、石川県石川郡美川町に生まる。大正一二年三月、石川県男子師範学校一部を卒業。第一〇臨時教員養成所を修学し、美川小学校訓導・愛媛県立松山城北高等女学校・石川県立輪島中学校・県立小松中学校各教諭、県立大聖寺高等女学校長・津幡高等女学校長を経て、昭和二四年三月石川県立松任高等学校長となる。二八年三月、県立小松実業高等学校兼小松城南高等学校長に転任。

四月一日より本校は普通・農業・商業の四課程を設置する総合制、男女共学の高等学校として再発足した。教場が不足していたので、もとの松任高女校舎を分校として一年生の授業にあて、二年、三年はもとの松任農学校校舎で授業を行うことにした。また小学区制が実施されたが、二四年六月一六日付石川県公報によると、金沢市及び加南地区については次のようであった。

金沢泉丘高校
　金沢市十一屋・野町・中村・富樫・三馬・米丸・新竪校下及び菊川校下の犀川以南、長町校下の片町電車線路以東、石川郡内川村

金沢二水高校
　金沢市長町・長土塀・松ヶ枝・芳斎・長田・戸板・大徳・二塚・金石・大野・諸江・鞍月・潟津・粟崎・大浦・松寺校下
金沢桜丘高校
　金沢市此花・瓢箪・馬場・森山・小坂・千木・夕日寺・百坂・浅野校下及び味噌蔵、材木校下の天神橋より大手町に至る大通り以西（但し並木町は全町）材木校下の浅野川以北
金沢菫台高校
　金沢市崎浦・石引・菊川・味噌蔵・材木校下、石川郡犀川・湯涌谷村、河北郡浅川村
工芸高校
　特定の区域を定めず。
小松高校
　小松市及び能美郡。但し能美郡川北村に現住するものは、松任高等学校に入学することができる。
大聖寺高校
　江沼郡。但し月津・矢田野・那谷村に現住するものは小松高等学校に入学することができる。
松任高校
　石川郡内川・犀川・湯涌谷村を除いた区域。但し美川町・蝶屋村に現住するものは小松高等学校に、北陸鉄道石川線の通過する町村並びに金名線の沿線の村に現住するものは金沢泉丘高等学校に入学することができる。
金沢市立工業高校
　特定の区域を定めず。
鶴来高校
　石川郡鶴来町、河内・吉野谷・鳥越・尾口・白峰・蔵山・館畑・山島・林・富奥・能美郡川北・山上・久常村の区域を二重学区とする。

この小学区制の実施により、他校から転入する生徒が多数あった。その概略は、一高―四八名、二高―九名、

三高―三名、金商―二四名、工芸高―一名、石川師範予科―一名、金城―一名、小松―六名、柳田―一名、金市工―一三名、小松実―二名、その他八八名であり、これらと再編成前の本校生徒を加えて八一四名となった。

その後、旧松農の寄宿舎を普通教室に改装して収容力の増加をはかり、一年生を収容して一〇月一〇日に分校を閉鎖し、設備の移転を行い、元の普通部と農業部の統合を完了した一〇月一七日を創立記念日と定めた。

第二節　新制高校の教育内容

一　教育課程

教育課程の特色　新制高校の教育課程の特色は、選抜教科制と単位制および大教科がとられていること、また教科学習とならんで特別教育活動が重要な内容をなしていることにあるといえよう。そこでまず選択教科と単位制についてみると、選択教科制は、新制高校が旧制中学校、高等女学校、実業学校などの統一されたものであることから、生徒の多様な進路に対応した教育課程がとられるべきであること、生徒の主体性を尊重し、各科の興味や資質に応じた教科を選択させ、個性的な成長を図ろうという二つの要求を満たすためのものである。ただし、国民一般共通に要求される教養として国語九単位、一般社会五単位、保健体育九単位の計二三単位は必修とされた。その上に、一般社会以外の社会一科目五単位、数学一科目五単位、理科一科目五単位の計一五単位を選択必修とし、高校を卒業するためには、三年間に上記必修三八単位のほかに四七単位の科目を選択し、合計八五単位以上の履修が必要とされた。一単位とは、ある教科について、一週間に一時間の学習を一

三高―三名、金商―二四名、工芸高―一名、石川師範予科―一名、金城―一名、小松―六名、柳田―一名、金市工―一三名、小松実―二名、その他八八名であり、これらと再編成前の本校生徒を加えて八一四名となった。

その後、旧松農の寄宿舎を普通教室に改装して収容力の増加をはかり、一年生を収容して一〇月一〇日に分校を閉鎖し、設備の移転を行い、元の普通部と農業部の統合を完了した一〇月一七日を創立記念日と定めた。

第二節　新制高校の教育内容

一　教育課程

教育課程の特色　新制高校の教育課程の特色は、選抜教科制と単位制および大教科がとられていること、また教科学習とならんで特別教育活動が重要な内容をなしていることにあるといえよう。そこでまず選択教科と単位制についてみると、選択教科制は、新制高校が旧制中学校、高等女学校、実業学校などの統一されたものであることから、生徒の多様な進路に対応した教育課程がとられるべきであること、生徒の主体性を尊重し、各科の興味や資質に応じた教科を選択させ、個性的な成長を図ろうという二つの要求を満たすためのものである。ただし、国民一般共通に要求される教養として国語九単位、一般社会五単位、保健体育九単位の計二三単位は必修とされた。その上に、一般社会以外の社会一科目五単位、数学一科目五単位、理科一科目五単位の計一五単位を選択必修とし、高校を卒業するためには、三年間に上記必修三八単位のほかに四七単位の科目を選択し、合計八五単位以上の履修が必要とされた。一単位とは、ある教科について、一週間に一時間の学習を一

高等学校教科表　（昭和22年度学習指導要領昭和26年改訂）

教科		教科別総時数（単位数）	学年別の例 第１学年	第２学年	第３学年
国語	国語 甲	* 315(9)	105(3)	105(3)	105(3)
	国語 乙	70(2)～210(6)	70(2)	70(2)	70(2)
	漢文	70(2)～210(6)	70(2)	70(2)	70(2)
社会	一般社会	175(5)	175(5)		
	日本史	175(5)		175(5)	
	世界史	175(5)		175(5)	
	人文地理	175(5)		175(5)	
	時事問題	175(5)		175(5)	
数学	一般数学	175(5)		175(5)	
	解析(1)	175(5)		175(5)	
	幾何	175(5)		175(5)	
	解析(2)	175(5)		175(5)	
理科	物理	175(5)		175(5)	
	化学	175(5)		175(5)	
	生物	175(5)		175(5)	
	地学	175(5)		175(5)	
保健体育		315(9)	105(3)	105(3)	105(3)
芸能	音楽	70(2)～210(6)	70(2)	70(2)	70(2)
	図画	70(2)～210(6)	70(2)	70(2)	70(2)
	書道	70(2)～210(6)	70(2)	70(2)	70(2)
	工作	70(2)～210(6)	70(2)	70(2)	70(2)
家庭	一般家庭	245(7)～490(14)	245(7)	245(7)	
	家族	70(2)			70(2)
	保育	70(2)～140(4)		70(2)	70(2)
	家庭経理	70(2)～140(4)			140(4)
	食物	175(5)～350(10)		175(5)	175(5)
	被服	175(5)～350(10)		175(5)	175(5)
外国語		175(5)～525(15)	175(5)	175(5)	175(5)
農業に関する教科		1,645(47)以内		1,645(47)以内	
工業に関する教科					
商業に関する教科					
水産に関する教科					
家庭技芸に関する教科					
その他の職業に関する教科					

備　考

1　この表に示すもののうち、次の教科は、すべて生徒が、これを履修しなければならない。

(1)　国語（＊印）・一般社会・体育

(2)　社会（一般社会を除く）・数学・理科のそれぞれの教科群において生徒の選択する各一教科

2　学校は週当り三〇乃至三六時限、年三五週以上、すなわち毎年一、〇五〇時限以上一、三三〇時限以内、授業または指導を行わなければならない。最低は週当り三〇時限であるができれば週当り三三時限以上とすることが望ましい。夜間および定時制の課程においては年一、〇五〇時限を下ることができる。

3　職業課程においては、必要な場合に適当な時間数の実習を八五単位外に課し、または、これを週三三時間をこえて課することができる。

4　職業課程においては、備考1に示すもの以外に履修する社会・数学および理科の単位数を必要に応じてこの表に示す数よりも減少させることができる。

5　教科別総時数の欄の括弧外の数字は、教科毎の三年間に授業すべき総時限数を示し、括弧内の数字は、それだけの時限の授業をした場合の教科の単位数を表す。

6　学年別の例の欄の括弧外の数字は各学年においてそれぞれの教科を指導すべき時限数を表わし、括弧内の数字はそれだけの時限の授業をした場合の教科の単位数を表す。

年間に三五週以上満足に修めた場合の学習をさすもので、選択の多様性に対して統一的な基礎を定めるために採用した方法である。また大教科制とは、社会科や理科がそうであり、一科目の授業時数を二年以上に分散せず、一年間にまとめて実施するもので、週五時間の五単位科目を多くし、調査・観察・思考・発表・討議などの問題解決を主なねらいとする新学習方法をとり入れるために採用されたものである。

従来の教育課程が国家の必要ということから、生徒の必要や適性、興味などを無視して、文部省が画一的に教

高等学校職業教科表　（昭和24年学習指導要領昭26年改訂）

教科			単位数
農業に関する教科（実習を含む）	農業	総合農業	12～36
		農業種芸	2～20
		農産業工芸	2～20
		農業一般	2～20
		農業加工	2～20
		農業土木	2～20
		農業経営	2～10
		農業一般	2～10
		農業生産	2～20
		農業加工	2～10
		農業経営	2～15
	林業	林業一般	2～15
		林産業	2～10
		造園	2～20
	農業に関するその他の教科		
工業に関する教科（実習を含む）	工業一般	実習	10～37
		実習	10～37
		実習	10～37
		実習	10～37
		図学	2～20
		象学	3～10
		学	2～10
		料	3～15
		質	2～10
		鉱	3～5
		鉱	2～15
		金	2～10
		料	2～15
		画	2～10
		計	3～10
		案	3～15
		工	3～15
		工	3～5
		造	3～10
		作	3～15
		作	3～15
		作	2～15
		績	5～15
		色	3～15
		織	5～15
		業	3～15
		刷	3～15
		装	3～5
		器	2～10
		器	3～15
		力	3～15
		信	3～15
		機	3～15
		械	2～15
		般	2～5
	機械工業	電気一般	2～5
		電気通信	2～10
		電気工場	2～5
		電気経営	2～5
		電気管理	2～5
		電気鉱山	2～5
		電気史	2～5
		電気工芸	2～5
		電気規格	2～5
		電気法規	2～5
	工業に関するその他の教科		
商業に関する教科（実習を含む）	商業	商業一般	2～5
		文書実務	2～5
		珠算及び商業計算	2～6
		タイプライティング	2～5
		速記	2～5
		統計調査	2～5
		貿易実務	2～5
		商業経済	3～10
		商業金融	2～5
		経済品	2～5
		商簿記計算	2～5
		法規	2～15
		商業外国語	2～5
	商業に関するその他の教科		5～15
水産に関する教科（実習を含む）	水産一般	水産一般	3～10
		水産生徒	4～15
		水産海洋	3～5
		水産業用物理	10～20
		海洋運航	4～20
		漁船造船	3～10
		水産製品	10～20
		水産化学	10～15
		水産微生物	3～5
		水産病害虫	3～5
		水産増殖	10～20
		水産簿記	3～10
		水産関係法規	2～10
		水産経営	2～15
	水産に関するその他の教科		
家庭技芸に関する教科（実習を含む）	家庭一般	家庭一般	6～15
		保育実習	6～20
		保育実習	4～10
		保育児童	3～5
		小児栄養	3～10
		小児食品	3～10
		栄養献立	3～10
		食物調理	5～15
		被服炊事	3～15
		被服経済	3～10
		被服材料	3～15
		被服経理	2～10
		色彩	2～6
		意匠	2～12
		仕立	6～21
		手芸	3～15
	家庭技芸に関する其他の教科		2～5
その他の職業に関する教科			

科目・時間数・内容などを定め、これを生徒に押しつけていたのにくらべると、生徒の主体性を大幅に認め、各自の個性能力を十分に発揮できるとともに、生徒の生活経験に基づく自主的な学習活動ができるようにつくられたのが特色である。

このような新教育課程が本校にも取り入れられた。次表のように生徒も各自の進路や資質に応じた教科を選択したのである。

25年度入学者教科表　(○は必修)

(1)　普　通　課　程

教科		単位	履修例1			履修例2		
			1年	2年	3年	1年	2年	3年
国語	国語甲	○ 9	3	3	3	3	3	3
	国語乙	2		2	2	2	2	2
	漢文	2			2			
社会	一般社会	○ 5	5			5		
	日本史	5			5			5
	世界史	○5 5		5				
	人文地理	5			5		5	
	時事問題	5						5
数学	解析Ⅰ	5	5			5		
	幾何	○5 5		5				
	解析Ⅱ	5						
理科	物理	5						
	化学	○5 5		5				
	生物	5	5			5		
	地学	5			5			
保健体育		○ 9	3	3	3	3	3	3
芸能	音楽	2～6						
	図画	2～6	2					
	書道	2～6	2	2		2	2	2
	工作	2～6						
外国語	英語	15	5	5	5	5	5	5
職業	一般家庭	7～14					7	
	家族	2						
	食物	5						5
	保育	2						
	簿記・会計	3					3	
	珠算						2	
履修単位計			30	30	30	30	32	30

(3)　商　業　課　程

教科		単位	履修例 1年	2年	3年
国語	国語甲	◦ 9	3	3	3
	国語乙	2			
社会	一般社会	◦ 5	5		
	日本史	5			
	世界史				
	人文地理			5	
	時事問題				
数学	一般数学	5	5		
	解析Ⅰ	5			
	幾何				
理科	化学	5	5		
	生物	5			
保健体育		◦ 9	3	3	3
芸能	音楽	2			
	図画				
	書道				
	工作				
外国語	英語	5	5		
商業	商業英語	6		3	3
	商業経済	9	3	3	3
	商業計算	2		2	
	簿記	10		5	5
	文書実務	2〜5		2	3
	商業実践	3			3
	金融	2		2	
	珠算	2〜5	1	2	2
	法規	5			5
履修単位計			30	30	30

(2)　農　業　課　程

教科		単位	履修例 1年	2年	3年
国語	国語	◦ 9	3	3	3
社会	一般社会	◦ 5	5		
	人文地理	5			5
数学	一般数学	5		5	
理科	生物	5	5		
	化学	5		5	
外国語	英語	3		3	
保健	体育	◦ 6	3	3	3
芸能	音楽	2			
	図画	2	2		2
	書道	2			
	工作	2		2	
農業	総合農業	12	12		
	畜産	2〜4		2	2
	林業	1		1	
	土木	2		2	
	耕種	5〜8		5	3
	園芸	2〜7		2	5
	農業経済	3			3
	農産加工	2			2
	保護	2			2
	獣医	2			
	森林土木	3			
	林業経営	3			
	林産加工	3			
商業	簿記	2			
	珠算	2			
履修単位計			30	33	30

(4)　家　庭　課　程

教科		単位	履修例 1年	2年	3年
国語	国語甲	◦ 9	3	3	3
	国語乙	2	2		
社会	一般社会	◦ 5	5		
	日本史	5			
	世界史				
	人文地理			5	
	時事問題				
数学	一般数学	5	5		
	解析Ⅰ	5			
	幾何				
理科	化学	5			
	生物	5	5		
保健体育		◦ 9	3	3	3
芸能	音楽	2～6			
	図画	2～6			
	書道	2～6	2	2	2
外国語	英語	2～6			2
家庭	一般家庭	14	7	7	
	食物	10		5	5
	被服	10		5	5
	手芸	2			
	家族	2			2
	保育	3			3
	意匠	2			
商業	珠算	2～6		2	2
	簿記	3			3
履修単位計			32	32	30

社会科教育

新教育課程の中で、大きくクローズアップされたものは社会科教育である。これは従来の教科課程の中にみられなかった教科であるとともに、新教育による新しい人間像形成への期待が社会科によせられたからである。

社会科は前掲の教育課程にみられるように、一般社会・日本史・世界史・人文地理および時事問題の教科群であるが、なかでも中心となるものは一般社会であった。この社会科および一般社会は、生徒の経験や生活上の問題をもとにして、これを理解し、正しい態度と有能な技能を養成することに目標がおかれた。このことはわが国の従来の教育が、学科本位、教科本位の型にはまった画一的教育や学習に陥っていた傾向があって、人々の生活をもとにした自由な人間教育や社会のための人間教育が閑却された。教育の重点が、あまりにも国家生活を中心

にしたために、真に自由な学習や社会人としての教育が軽視されていたこととときわめて対照的であり、ここに戦後の日本教育における社会教育の新しい意義があったといえよう。従って、民主的新日本建設のために社会科は最も重要な意義のある教科としての意味をもったわけである。しかし、社会科が発足時めざした目標や方法も、入学試験の問題などもからんで、知識中心・教科書中心のいわゆる講義式へとしだいに傾斜していくようになった。

二　新しい農業教育

農業教育の新しい観点

敗戦による日本の社会的変革は、きわめて大きなものであったが自然を基礎にした営みである農業の分野には、急激な変化は起り得なかった。耕地面積や、それに対応する人口の増減、さらに、農業を取り巻く産業構造にも、その基本的条件においては大きな変化はなかったから、従来の小規模経営を前提とした自営者の養成を主眼とする農業教育に、大きな変化を加える必要は起らなかった。ただ、従来の農業教育には国策の要請という教育体系が、教科以外の分野に強く織り込まれており、また、教科教育の点でも個別的な各教科の体系的知識を偏重するというきらいもあったので、政治的な変革を機会として、新しい観点から、教育課程が再編成されることになったのである。

新しい農業教育の目標は、およそ、次のようである。

第一に、民主社会の有為な形成者であること。

第二に、科学性と社会性に裏付けられた、合理的な経営感覚を持つ農業技術者および農業自営者の養成。

第三に、地域社会の構成員として望ましい資質を備えた農業経営者の養成。

総合農業

新制高等学校の農業教育については、文部省はC・I・Eの指導を受け、昭和二二年学習指導要領により各県に提示したが、さらに二三年五月、委員会を設けて検討を重ね、二四年一月「高等学校教科課程中職業教科の改正について」として通達した。（前掲「第一項高等学校職業教科表」参照）これまでの多数の教科目を整理統合したこと、「実習」という教科を廃止して、教科の理論と実際の一体化を図ったこと、単位制を採用し、教科目の単位数に幅を持たせたことなどが主な改正点であるが、この時の改正により、新たに「総合農業」が設けられた。この総合農業は、生徒がその土地の良き農民となるために必要な農業に関する知識・技能を総合的に発達させるよう体系づけた教科である。

総合農業は、その名のように多様な内容を含んでいるが、従来に比較して目立つ特徴は、個別的農業教科の単なる寄せ集めでなく、農業の経営を中心概念として、それに必要な教科の知識や技能の外に、共同生活に必要な自主性や社会性、さらに指導性の育成も考慮されて、効果的に構成している点である。

総合農業はおおまかにいって三本の柱で支えられているといえよう。教科の授業、農業クラブ、ホームプロジェクトなどで、いづれにも興味が感じられるが、特に農業クラブには外来的色彩が著しかった。

教科の授業は「総合農業」という名称で行なわれた。教科書は総合農業のサブタイトルがついた「作物」「畜産」「野菜」等となっていて、経営の指導理念に貫かれた編集態度であったから、これまでの個別的な教科の教育から来る相互連関の不徹底や、内容の重復からくる、無駄を避けることもできて、十分、評価すべきものを持っていた。

しかし、「総合農業」の授業を所期の目標通り忠実に実施するには、スタッフの点で必ずしも十分とはいえなかった。これまでの授業は、各分野の専門教諭が個別的に担当したのであるが、新学制になっても、これまでの

スタッフで対処すべきものとされたから、新しい指導理念の下に再編成された総合農業を、十分こなすことができるとは必ずしもいえなかったのである。従って、実際の授業は、総合農業を構成する各分野の専門教諭が部分的に担当して、つぎはぎ状態ながら総合農業の体裁を繕うより方法がなかった。文部省でも、この対策として農業専攻の大学教育機関に総合農学科の学部を新設したが、十分な成果を収めたとはいえないようである。

農業クラブ　農業クラブの導入は、農業教育の体系に新風を送り込んだといえよう。アメリカには FFA (Future Farmer of America) があるが、これを原型として、日本の農業教育体系に採用したのが農業クラブ活動である。アメリカの農業クラブ活動は、明治四一年ホームプロジェクトをマサチューセッツ州のスミス農学校に試行したのが発端となって、大正六年頃から全米に普及され始め、生徒間の種子の交換や新しい家畜の共同購入者などのグループを作り出したが、大正二五年頃には明日の農業 (Farmer of Future) を目ざして州組織にまで発展した。その後、昭和二五年に公法人として認められ、現在は三〇余万の会員を有し二〇〇万人に達する農村青少年を育成している。

日本の学校農業クラブ活動は、戦後CIEの職業教育官ネルソンの助言によって、いち早く新学制下の農業教育に採用されたが、昭和二五年には、全国高等学校長協会農業部会によって全国連盟の結成が決議され、クラブ員代表二〇〇〇余名が参加して日本学校農業クラブ連盟 (F. F. J. Future Farmer of Japan) が結成された。本校からも顧問教師と生徒代表が参加したが、これを機会としてその後のクラブ活動の発展に大変役立ったということである。FFJの活動は、年を追って充実発展したが、主なものをあげれば、同二六年には連盟機関誌「リーダーシップ」が創刊された。また、実る稲穂に富士と鳩の標章やFFJの歌も選定されて、校内にもようやくクラブ活動の雰囲気が強く感じられるようになった。昭和二七年からは指導者養成講座が開催され、夏季

休暇等を利用した講習会やレクリェーションなどが行なわれて、その後の発展に寄与している。特記すべきものに級位検定制度がある。これはクラブ活動の業績を客観的な立場から評価することによって、クラブ員に自信を持たせ、よりいっそう努力しようとする意欲をおこさせる必要から、アメリカのグリーンハンド green hamd チャプターファーマー chapter farmer ステートファーマー state farmer アメリカンファーマー American farmer の級位制度を参考にして、採用されたものである。昭和二六年に基準試案が発表されてから研究が重ねられ、具体化されたものであるが、本校で実施されるようになったのは総合制高校が解体して農業高校に独立してからである。

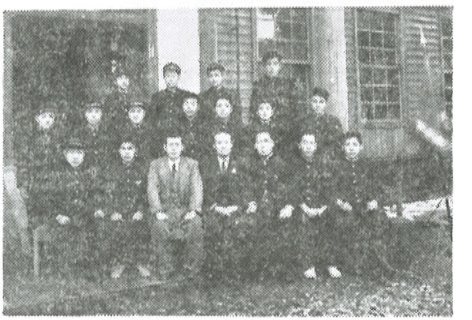
本校の農業クラブは、昭和二四年から活動を始めたが、次のことを活動の指針とした。

第一に、集団生活に於ける指導能力を養うこと。

第二に、地域社会の協同的な仕事に参加し、社会公共に奉仕する態度と力を育成すること。

第三に、農業上の職業的な力を向上し、生活環境を改善する意欲と能力を養うこと。

などであったが、これらの教育活動を通じて、新しい感覚を持ち、しかも農村生活を愛好する中核的な農業経営者を育成することがそのねらいであった。しかし、これを実際の教育課程の展開として消化するには、あまりにも新しい経験であったようである。この活動には一週一時間、年間三五時間が配当されたが、生徒はもちろん指導教諭もとまどいがちで、なかなか、軌道に乗らなかった。本格的な活動に入ったのは、昭和二五年の全国結成大会に出席して活動状況の大要を見聞してからのことであった。当時は、総合制の下で全生徒の参加している生徒会があったが、その組織とは全く別の組織として発足した。活動に必要とする費用は加入した農業科の全生徒で負担したが、クラブ員総数は五〇〇人位で年間四、五〇〇〇円位の予算では、他の運動部等と比較すれば微



農業クラブ第１回校内役員

々たるものであった。農業クラブの部室は旧校舎の工作室わきにあって役員などが集合所にしていたが、正規の活動は主として定期的に行なわれる集会であった。この集会では、各クラブの活動発表やホームプロジェクトの発表のほか、民謡の交歓や寸劇、ＦＦＪ踊りなどのレクリェーションの行事が行なわれたが、測量や農機具の分解の組立てなどの技術競技もあって、最も盛大な年間行事であった。

これらの成果は、県連盟や北陸信越連盟の大会でふるいにかけられ、全国大会でその覇を争うことになっていたから、それを目標に平常のクラブ活動は極めて熱の入ったものになった。特に、生徒の自発的で活発な活動は特筆すべきもので、当時としては顧問教諭の方が押され気味の場合もあったという。当時の研究発表の記録が、新校舎への移転に際して散逸してしまったことはまことに惜しまれる。

ホームプロジェクト

総合農業を支える第三の柱にホームプロジェクト(home project)がある。これは、農業科や家庭科の学習指導法の一つとして、アメリカで体系的に発達し、日本では、第二次世界大戦後の学校教育や４Ｈクラブで広く行なわれるようになった。この教育指導法は、明治三三年にコロムビア大学のＣＲリチャード工作科長によってはじめて提唱されたといわれるが、一般的に認められるようになったのは、マサチューセッツのスミス農学校で、ＲＷスチムソン校長が農業教育にホームプロジェクトとして取り入れて以来のことである。これに類する方法は、日本でも明治三二年、明治四三年頃の農業学校長会

議の議決にも見られるし、そのころ静岡県などにおいて行なわれたヘチマやトウガラシなどの輸出作物としての一坪農業や、一蛾養蚕が小学校などで行なわれたことなどが伝えられている。しかし、この方法が全国的に広がったのは昭和二三年CIEの職業教育官ネルソン（I Nelson）がアメリカ式のホームプロジェクトを伝えて以来のことである。

プロジェクト活動の実施

農業科のプロジェクト活動は「自分達の住んでいる地方の、農業や農村生活等に関するいろいろな問題をよく認識し、この問題を解決するために自分の手で計画実施し、さらに、その成果を反省することによって、自主的実践的な能力および合理的科学的に物事を考える態度を養う」ことが目的とされている。総合農業のホームプロジェクトには、週二時間が配当されているが、当初の教育活動は新しい経験にもかかわらず抵抗なく行なわれたようである。教育の場が生徒の家庭であり、しかも生徒自身が、自主的な計画をたて、それを遂行しながら専門教師の指導助言を得るわけであるから、教室内で営まれる教育活動が、そのまま実地の場に移される観を呈して、たいした困難は感じられなかったのであろう。生徒は自分の家庭を場所として、授業で得た知識や技術を動員して計画を立て、時宜に応じて水稲や野菜、畜産、経営などの専門知識や問題解決の能力などを身につける上に、きわめて有効であった。また教師の監督の下に父兄の協力を受けて進めるので、古い習慣にとらわれやすい農業技術や家庭生活を、直接改善する役割を果たした。

しかし、これもまた教師のスタッフや巡回機動力の貧弱さから、全生徒を対象にひとしく実施するには困難が大き過ぎたので、当初の予想よりは遙かにその範囲を縮小した形で行なうことになった。すなわち、ホームプロジェクトは選択教科とし、さらに、学校から二キロメートル以内の生徒に限定して、実施するようになったのである。この活動は、農業クラブの課外活動とも関連して、その成果は校内発表や県連、北陸・信越ブロックの大

会で争われ、さらに、全国大会に出場する仕組みになっていた。

定時制の課程は、その特殊性から一週間のうち、二日はホームプロジェクトに当てることができたので、時間的余裕に恵まれ、また、生徒数も多くはなかったので、実施上の障害は少なく、全生徒を対象にキメの細かい指導が行なわれて効果を上げた。

三　特別教育活動

ホーム・ルーム　特別教育活動は、教科学習とならんで教育課程の重要な内容をなすものである。これは行動による学習がその本質で、集団行動を通して自立的精神と協調的態度を円満に発達させ、生活に結びついた教育の効果を最も能率的にあげることをねらいとした。特別教育活動にはホーム・ルームや生徒会または生徒集会（アセンブリー）のように、集団生活に必要な自治的訓練を行なうものと、部活動のように、趣味や興味によって、同好者が協力して個性の伸長を図り、同時に集団意識を高めるものとがある。ホーム・ルームは従来の学級編成に代わって採用されたもので、ホーム・ルーム担任（H・R・A）と生徒によって組織され、学校生活に関連ある諸問題について話し合い、相互の親愛と協力によって問題の解決につとめるとともに個人的・社会的な成長を図る機関であった。しかし、教師対生徒という旧式な感情や固苦しさが容易にとれず、教師も生徒も今までの固定した学級観念から抜けきれないという悩みがあり、特に週一時間のロングホームの運営にあっては、重要性は理解できても、未経験なものだけに具体的指導法にとまどいする場合が多く、次第に教師の心の重荷ともなっていった。新制高校が発足して三年を経過しても、この運営がいかに地に着いたものとならず、いかに困難であったかは、「松高新聞」一四号の投書欄に次のような記事が記載されていることからも推察

できる。

学校の今年の目標の一つである〝ホーム・ルームの充実〟により毎週月曜日第四限目のホームの時間に重大な意義が持たせられるのは当然のことである。しかるにこの四月からすでに十回余のホームの時間が過ぎたがこの間に果してどれだけ最大有効にホームの時間として利用されただろうか。

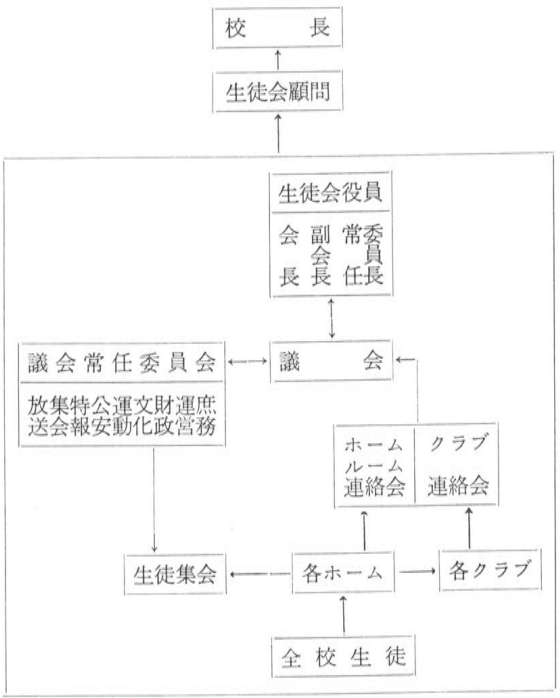
ホームでは計画が作られた。この計画は各そのホームによって民主的に作られた最良のものであった。しかしこの計画がどれだけ実行されたであろうか。ホームの時間になると先生がたくさんの伝達事項を手帳に書きつけてくる。それによってまず計画がくじかれる。またあるときは校内一斉に世論調査が行なわれた。ホームの時間を一体何と考えているのだろうか。私は各ホームの独自の計画にもとづき各ホームの自由に使用できる時間であるのが当然と思う。（中略）われわれの学校生活をたのしく、より意義あらしめるためにわれわれは一致協力してこの貴重な一時間を立派に活用せねばならない。

（二年　E・M生）

生徒会活動

戦後の混乱が落ち着き、自己を取りもどして行った過程において、与えられた自由を満喫し、青春を謳歌する一方においては、自由の限界を逸脱し、いたずらに自治権をふりまわして学校に反発する面もあった。当初自治会の名で発足したものも、このような傾向を排除して、「民主的な学校生活を営み、自由を愛し、責任を重んじ、ほかとの協調性を高め、民主的政治の習慣を身につけ、将来有能な社会人となるための素地を養うための自主的社会活動を行う組織」とするため、昭和二四年度から生徒会という名称に改められた。初めの頃は、生徒会で立案した行事や、その運営に対して活発な意見が提出されたが、そのなかには、クラブ費の配分についての不満など、自己中心的で無責任な言動も多かった。またアセンブリで学校側の処置についての不満をあげて、ディーン（生徒指導主任）に釈明を求めたり、生徒会長が職員室へどなり込むということもしばしばあった。このような傾向も次第に少なくなり、二六年頃から正常な活動が行われるように

生徒会運営組織（昭和27年度）



教科課程内に週一時間配分された生徒集会（アセンブリ）は顧問教諭と生徒会集会委員によって企画運営された。また、後年学校行事となったが、陸上競技大会・運動会、松高祭などは生徒会が主催する最大の行事であった。その他、クラブ活動の統轄、応援団の活動、機関紙「松高新聞」の発行等生徒会は多忙であり、有能な役員を必要とし、そのため役員の改選における立会演説会には各派数名の弁士を立て、ヤジに屈せず堂々と論戦し、あるいは抱負を語り、あたかも弁論大会のような感があった。投票するものも真剣であり、後年に見られるようなったが、反面一般の生徒会員の自主性はおとろえ、生徒会に対する関心も薄らいでいった。

生徒会は全会員から公選された会長（一名）、副会長（男、女各一名）、書記（二名）、会計（二名）からなる執行部と各ホームから選ばれたホーム委員（正、副各一名）からなる生徒議会を中心にして運営され、必要に応じて、各クラブ責任者からなるクラブ連絡会や議員ホーム委員、クラブ連絡会代表からなる常任委員会が開かれ、各種の事業が企画運営された。

な、学科対抗的なものはあまりなかった。

昭和二七年度　生徒会関係行事

区分 / 月	全日制 生徒会	全日制 生徒集会	定時制 生徒会、生徒集会
4	新入生歓迎、選挙管理委員の選出、役員議員選挙、予算編成	新入生対面式、立会演説会、クラブ紹介、生徒会活動に対する公聴会	
5	校内弁論大会、陸上競技大会	弁論大会、応援歌練習、レクリエーション	新入生歓迎会、生徒大会、役員改選、連絡協議会
6	校内球技大会、議会知識普及講座	校内球技大会決勝、講話	ホーム対抗球技大会、会誌発行
7	討論会	討論会決勝、一学期を省みて希望及び会長報告	校内球技大会（日曜）、討論会、加賀地区定時制球技大会（小松市）
8	水泳大会	夏季休暇中におけるクラブ活動報告会	映画観賞、石川県定時制球技大会（金沢市）
9	文化クラブ研究発表会	文化クラブ研究発表会、前半期会長挨拶及会計報告	レクリエーション大会
10	役員議員選挙、運動会、創立記念行事	立会演説会、生徒会に関する公聴会	定時制創立記念行事、講演会、新聞発行
11	松高祭、球技大会	松高祭行事（音楽会、弁論大会、演劇）、球技大会決勝	ハイキング（日曜）、弁論大会
12	珠算大会	珠算大会、講話、本年度の回顧	文化祭参加

1	球技大会	球技大会決勝、新年レクリエーション	石川県定時制弁論大会、講演会
2	討論会	討論会決勝、講話	卒業生予餞会
3	予餞会、年度末整理	予餞会・本年度生徒会活動に関する反省会	卒業生との座談会 レコードコンサート
	年間を通じて　1　校内美化、清掃協力 2　校内放送 3　風紀取締協力 4　機関紙「松高新聞」の発行		

（「学校経営計画」昭和二七年度）

生徒会行事の最も大きなものの一つであり、日頃その活動を発表する機会に恵まれない文化クラブにとって年一回の発表の場であった松高祭について述べよう。

松高祭　昭和二三年本校が新制高校として出発し、農業部と普通部がそれぞれ、元松任農学校、松任高女の校舎を教場として設けられたが、農業部では、この年の秋、松農時代の伝統を継いで収穫祭を行なった。そして、農業に関する展示、農産物の販売・食堂を開設した。これが松高祭の起源となった。翌二四年男女共学の総合制高校となり、文化祭も全校をあげて行ない、文化クラブ関係の展示や演示も加えた。二五年には収穫祭、文化祭を統合して松高祭と称し、「本校における生徒活動の成果と実態を発表公開し、学校内外の批判を仰ぎ、本校教育を進展するとともに、地域社会の産業文化発展に寄与する」という目的を掲げたのである。以来、本校の歴史とともに続きますます隆んになっていったのである。

松高祭の準備にはおよそ一ヶ前からかかり、生徒会で松高祭企画審議委員会を設け、さらに実行委員会を組織

し、予算（生徒会の松高祭援助費）の配分や演示の進行、展示室の配置等企画し実行にうつされた。第三回（二七年一一月）松高祭の状況を松高新聞第二一号によって振り返ってみよう。

第一日。晴天に恵まれた二二日午前九時前、本会場の記念式典と共に郷土、科学、文芸、書道、新聞、映画、絵画、茶華道、手芸、山岳、農業の各展覧会場、食堂、農産物即売所などが一斉に開かれ、農産物は開始一時間にして売りつくすという異常な売行をしめした。また、本会場は記念式に続いて、音楽会が開かれ、ついで二時間にわたって阿坂卯一郎原作・演劇部公演の〝亀裂〟が上演され、午後からは家庭科発表の衣裳劇が行なわれた。また、グランドでは排球、庭球、ソフトボールの交換試合が行なわれ、スポーツファンを喜ばせた。本会場は四時から一千数百の観衆を集めて映画が行なわれ大仏次郎原作の〝帰郷〟が上映され、此日の日程を終了した。

第二日。二三日は土曜日同様好天に恵まれたため、前日以上の人出を見せ、本会場では第二回県下中学校弁論大会が行なわれ、商業実践室では第一回郡下中学校珠算大会が多数の参加者を迎えて行なわれた。また、本会場では昨日と同様に演劇が行なわれ盛大裡にその幕をとじた。

（「松高新聞」第二一号）

生徒達が夜おそくまで展示の準備や発表の練習に青春の情熱をぶつけ、生徒会、農業クラブを中心に全校あげて参加するこの松高祭が、地域の人達にも大きな感銘を与えずにおかなかったことは参観に訪れた人達の数が一万五千余名におよんだことからもうかがい知ることができよう。また生徒にとっても高校生活の忘れ得ぬ思い出の一つになったのがこの松高祭であった。

第三節　学校生活

一　戦後の高校生気質

誇りと伝統

戦前、戦中どこの学校においても、激励や叱責されたりする時学校の誇り、伝統という言葉が、先輩から後輩に、教師から生徒によく聞かされた。具体的には「歴史が古い」、「忍耐力」、「質実剛健」、「相撲が強い」などいろいろな意味になる。これらのものを総合して、その学校の伝統となり、そのような伝統をもつことがその学校の誇りとなるのである。そして生徒は入学と同時にその学校の伝統を受け継ぎ、これを守り、傷つけず、さらに次代に伝えるべき責務を負わされるのであり、その得体の知れない重荷に対する緊張感と、大きな連帯感により、己を律し、無軌道に走らないよう自らを戒めたのであった。

昭和二四年、小学区制の実施により男女共学とともに、いろいろな学校から集まって一つの学校が出来た。松農出身の生徒すら、無批判に古きものを破壊しようとした当時の風潮を受けて、先輩から伝統をよく受け継いでいなかった上に他校から異った目的をもった生徒が入って来たのであるから、松農の伝統や誇りを受け継がせたり植えつけたりすることは無理であったであろう。他校出身者で特に上級生は、母校が二転したのであるから、どちらにも馴じめず、本校が母校であるという実感は湧かなかったであろう。しかし、伝統は受け継ごうとして受け継がれるものではない。また自らがその形成者でもある。本校にはすでに新しい伝統が彼らによって形成されつつあったのである。

アプレゲール

戦後の混乱期に一時「アプレゲール（略してアプレ）」という新造語が使われたが、これは感情のおもむくままに行動する無責任な若者に冠せられたものであった。いつの時代でもこのような若者は見られるのであるが、長い抑圧からの解放と、自由・民主主義のはき違いによって顕著な行動に走り人目についたからである。新制高校の教育内容は前述したように、特別教育活動を通じて人間的な連なりを密にし、個性を伸長させる目標を掲げており、アプレ的傾向の強い生徒に対してホームアドバイザー（ホーム主任）、ディーン（生徒指導主任）の適切なガイダンス（指導）がなされたのであった。

人間関係

軍隊調が徹底した戦争中には、生徒は教師に、下級生は上級生に敬礼し、たとえ形だけであっても長上に対し尊敬し服従することは絶対であり、当然であった。そのよりどころは教育勅語や軍人勅諭であったからである。アプレ的傾向はあったにしても、戦後数年にして、慣習や偏見にとらわれない、合理的な物の見方や考え方を身につけ、生徒自身の価値観は大きく変り、教師や上級生との人間関係にも大きな変化がおこったのである。「三尺下って師の影を踏まず」という封建的道徳はホゴと化し、教師も教壇をおりて、個人の尊厳や自由平等な価値観の支配する人間関係の中で、教育を行なう姿勢がとられ、生徒の教師に対する言動において、友人や同僚に対するのと同様なものも見られ、年輩の教師にはなかなかなじめない感じであった。上級生と下級生の間も同様であったが、このような態度に不満をもつ上級生が下級生にリンチを加えるという事件もときどき起こったのである。

暴力追放

教師のいわゆる指導の鞭も暴力とみなされ、戦後は一切否定された。生徒が自分の非を認めても、父兄が承知しないという事件も起こった。生徒間では、クラブ活動などで先輩が鍛えるためのものも認められないのは当然であるが、このような事件は戦後長く跡をたたなかったようである。

異性問題

共学実施に対して年頃の子供をもつ父兄は県やCIEに対して反対の働きかけを行ない、実施が決定した時医師を招いて性教育を施すなど強い不安を抱いていたのであるが、実際には大きな混乱もなくとけ込んで行った。男子の方がむしろ遠慮勝ちであり、互いに協調し、明るい雰囲気を醸成して行った。男女同権という民主主義のルールを戦前派よりも生徒の方が早く体得したのである。

学生風俗

自由・解放は社会生活や風俗に大きな変化をもたらした。頭髪は丸刈から長髪へと変りつつあったが、学校では長髪を規制した。髪は自然に伸び、三年生は規制からもれるようになった。戦時中の靴（地下足袋）ばきゲートル着用が排除されると物資不足の折から一斉に下駄ばきとなった。洋服に下駄ばきは珍妙なものであるが、誰も不自然とは感じない時代であった。始めは運動靴もなく、校内ではだし、わら草履の者もあった。手さげかばんの者や風呂敷の者もあった。二四年の始め頃まで校章や服装の規定がなく、帽子・校章はそれぞれの母校のものをつけていた。松農あり、一中あり、二中ありというようにまちまちで、松農出身者も白線をはずしていた。女子も同様でセーラ服のえりには白線をつけず、モンペからスカートまたはスラックスに変り、赤ひもの平下駄ばきであった。

二四年、校章、服装が規定され、以後物資が豊かになるとともに次第に規制が細かくされて行った。

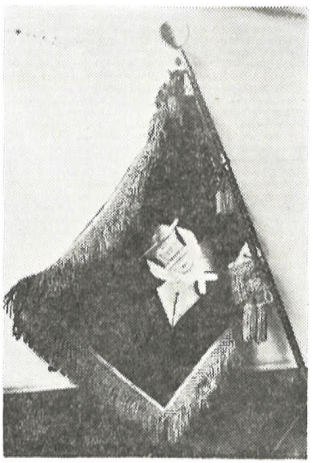
二　校章、校旗、校歌

校章の制定

昭和二四年、難波得三校長の命で、泉松雄教諭は約一〇種類のデザインを画き、職員にはかるとともに廊下に掲示して、生徒職員から公募し、選ばれたものをさらに組み合わせ検討して創作したものである。二組の松葉を組み合わせ高等学校の「高」を浮き上がらせている。松は松任を意味し、

また常緑で、弥栄を念じ、二組としたのは松農と松高女の合併を意味する。なお帽子に、二本の白線を巻いたのは、旧制高校にならったのである。

校旗樹立　昭和二四年、校章の制定にしたがって校旗が作られた。松任高女の校旗の校章を抜いて生地を染め直し、金糸で新しい校章を刺しゅうしたのである。いわば再生であるが、松任高女が松任高校の母体となり、本校とともに生きているという意味に解釈すべきであろう。製作は、金沢市尾張町の村松旗店であった。



校　旗

校歌　昭和二六年の秋、待望の校歌が出来上った。金沢大学教授川口久雄先生に歌詞を依頼したのであるが、先生はわざわざ本校を訪ね、二階の窓から眼下にひろがる加賀平野や、遙か彼方の白山、さらに日本海に眼を転じて構想を練られ、これがそのまま歌詞に生かされて出来上ったのである。また作曲も、先生を通じて、当時東京フィルハーモニー交響楽団の専任指揮者であった高田信一氏に依頼して出来上ったのである。

作者略歴

作詞者川口久雄　明治四三年一二月一四日、石川県金沢市笠市町に生まる。昭和一二年東京文理科大学国文科を卒業。旧陸士・東京文理科大学副手、金沢高等師範学校教授、二四年六月金沢大学助教授を経て、三五年一〇月、同大学法文学部教授（国文学）となる。文学博士。専攻は、日本漢文学・日本比較文学であるが、陸士の時

代より藤村・晩翠以後の近代詩に特に興味をもって研究し、日本詩歌の詞華集たる「日本の珠玉―詩歌編」を編著した。同教授には著書が多いが、著書の多い一部タレントのように能弁ではなく、考え考えしゃべるタイプの人で平安朝から室町文学に関心が深い。古典文学は中国文学の影響が強いので平安朝文学・中世文学の本質を追求するため中国文学の研究もあわせて行なっている。学位論文は「平安朝日本漢文学史の研究」で博士となり、一二〇〇ページに近い大論文、この論文が認められ、三六年九月から一年二カ月間、主として英仏で文部省在外研究員として日本文学にかかわりある敦煌資料の研究調査ならびに、西欧における日本文学研究状況の調査を行なった。主な著者に「平安朝日本漢文学史の研究」（昭36）・「菅原文章・菅原後集」（昭41）・「大江国房」（昭43）などがある。現在金沢大学法文学部教授。

作曲者高田信一　昭和九年東京都に生まる。昭和一八年、東京音楽学校研究科修了。その間、上野耐之に音楽の初歩を学ぶ。藤田喜与子・水谷達夫にピアノを、橋本国彦・下総皖一・フェルマーに作曲をそれぞれ師事する。一六年の第一〇回音楽コンクールに序曲「桜」で第二位入賞、一八年日本交響楽団定期公演には「主題、変奏曲」がローゼンシュトックの指揮で上演。成城合唱団指揮者・日本交響楽団指揮者、東京フィルハーモニーの専任指揮者となる。二六年毎日映画コンクール音楽賞受賞。主な作品に「カプリチオ」「田園組曲」「交響的二楽章」「フルートとピアノの五つの抒情詩」などがある。現在広島大学教授。

三生徒指導

ディーン

昭和二四年四月の新学期から県内小、中、高校にディーン（生活指導係）を置くこととなった。北国新聞二月二日号では、一日に開かれた高校長会議に示された設置要領について次の

ように報じている。

ディーンは各学校の教頭級男女教員が専任となり児童・生徒のよき相談者となるもので、生徒のかきを除いた肉親的立場から教え子の学校内および家庭生活上の悩みの解決、職業指導、しつけの指導、遅刻、早退、欠席者の原因調査と指導などに当るが、自由のはきちがえから最近とくに目立ってきた生徒間の行き過ぎ恋愛、酒やたばこの悪習、生徒・児童間の暴力・脅迫行為などもディーンの活動により一掃されるものと期待されている。

本校では加藤清次教諭がディーンとなり、戦前に見られたような体罰によらない民主的な生徒指導に当ることになったのである。生徒指導には、ホームアドバイザーとこのディーンが車の両輪のように助けあって、明るい学園の建設に努めたのである。この頃の生徒は自主的であり、一般に向学心が強かったのであるが、時代の風潮に染まり、喫煙、外泊等放縦に流れるものもあり、二四年には学校生活の指針が作られ、校章の制定とともに服装も定められた。

服　装　男子は、黒または紺のつめ襟学生服、夏季は上着をとってもよい。帽子には所定の校章をつけ、あごひもなし、二条の白線をつける。女子の制服は冬は黒または紺のサージ、セーラ型でカラーとカフスに三条の白線を入れ、ネクタイは黒の三角布、校章のバッジを左胸ポケットに着ける。スカートはひだをつける。スラックスでもよい。夏季は特別な規定はなく、白服または白のブラウスであった。はきものは黒の短靴であったが下駄ばきを認め、男子は厚歯、女子は平下駄、雨天はゴム長または雨靴であった。雨具や防寒具には特別な規定がなく、オーバやレンコートを着ていたが、物資もそれほど豊富でなく、華美なものもなかった。男子は丸刈であったが三年生は長髪にするものがあり、次第に長髪を認めろという声が多くなった。

二六年、新聞クラブの世論調査によると「長髪はよくない」というのが一年生で五〇%であったが「自由にするべきだ」というのが全体の七〇%であった。

四　進路状況

新制高校発足の頃は、労働運動が激化し、インフレが進行し、それが経済復興の妨げとなっていた。芦田内閣から吉田内閣に変わり、二五年朝鮮動乱が勃発、これが契機となっていわゆる特需景気が訪れ、日本経済は急速に飛躍していった。

こうした背景の中で、社会へと巣立っていったが、経済が次第に復興してきたとはいえ、学校への求人は皆無であった。そこで縁故を頼って就職口を見つけ出すより方法がなかったのである。次表に示すように、卒業生数は年々増加して行ったが、卒業時における就職決定者数は伸び悩み、就職決定率はむしろ減少して行った。学校に対する求人は殆どなく、まれに数名の求人がある度に三年各ホームアドバイザーが集まり推薦者を選考するというありさまであった。

一方、進学については、当時の経済状況から普通課程の生徒でも比較的進学希望が少なかったとはいえ、競争率は激しく、金沢大学の現役合格率は昭和二七年から三〇年は三〇%前後であり、本校でも受験各科目について補習授業を行ない合格率の増進に努めたのであるが、各年一進一退の状況であった。

昭和二七年当時の進路指導をしておられた角野四郎・岩上啓教諭は「就職状態が悪いのは官庁などが行政整理などをして人をへらしているのでなづけるが、進学成績が一昨年度より悪くなったことについてはもう少し生徒諸君の奮起が望まれるところだ」と語っている。

「松高新聞」第二号に次のように記している。

第二学期も今日をもって終り、三年生諸君には高校生活もあと第三学期をのこすのみである。ここに就職・進学期を迎えて、三年生各自は、その準備に一生懸命である。学窓を出て就職する事は一生の門出であり、将来をも決定する重要な問題である。

就職状況（第1回→第4回卒業迄）

年度 / 卒業年数 / 業種	23年度		24年度		25年度		26年度		合　計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	73	5	128	10	201	69	207	88	609	172
農　業	19	2	20	3	65	2	55		159	7
工　業	2		8		8	3	15	6	33	9
商　業	8		12		9	5	32	11	61	16
公務自由業（農協等含む）	34	1	55	3	52	13	15	10	156	27
進　学	4	1	19	2	33	4	30	6	83	13
そ　の　他	6	1	14	2	34	42	60	55	107	100
計	78		138		270		295		781	

進学状況（第1回→第4回卒業迄）

	第一回		第二回		第三回		第四回		計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
理　学　部			1		3		1		5	
工　学　部					3		4		7	
農　学　部	1	1	2		3				6	
法文経済　学部	2		11		12		11		36	1
教育学部	1		4		5	2	7	2	17	4
そ　の　他			1	2	4	2	7	4	12	8
計	4	1	19	2	33	4	30	6	83	13

地域別進学者数（第1回―第4回）

三重	岐阜	山・福井	金沢・富	京都	東京
3		60		7	26

しかし、卒業生の増加、社会事情等から就職問題は年々深刻になって来ている。明春本校を卒業する生徒二四〇名のうち進学を希望するものが六〇名で、そのうち女は一〇名である。一方就職を希望しているものは一一五名で、そのうち女は四〇名であり、就職するものが約五割をしめている。

学校としては完全就職を目指して全力を尽くしておるが、今のところ学校の斡旋による就職のほぼ確定したものは、北国銀行の三名と北陸電力二名、日本交通公社一名、計六名の一割にもたりない。

この他に個人関係の縁故をたどって就職するものが一〇名近くあるものとみられるけれども、現在のところ学校への求人は全くなく、一、二月になれば地元、遠方からいくらかの求人があるにしても、完全就職どころか五割を見る事が出来るかどうかと、学校、卒業生父兄を非常に心配させている。（一二月二四日）

昭和二七年度は、普通科入学の新入生について、進学希望者を普通科甲、就職希望者を普通科乙、女子の家庭希望を普通科丙とし、三年、二年についても同様進学、就職組に分けてクラス編成し、進学・就職戦の激化に対処し、指導の強化を図ったのである。

昭和29年度

大学等合格者数

学校名	数
金沢大学	24
東京美短大	2
東京女短大	2
金沢保育専門学校	3
北陸栄養専門学校	1
国立病院高等看護学院	1
保安大学	1
新潟大学	1
三重大学	1
富山大学	1
岐阜大学	1
東京農大	1
明治大学	3
法政大学	2
日本大学	1
中央大学	1
東洋大学	1
東京電機大学	1
東京工業大学	1
武蔵大学	1
同志社大学	1
立命館大学	2
大阪商業大学	1
神戸商船大学	2
京都女子大学	1
大阪電機通信大学	1
名城大学	1

翌二八年より農業高校に転化するのであるが、生徒会が行なったアンケートによると、「農業高校に切りかえ

られたらどうするか」という質問に対し、普通科甲、乙の生徒の三八%が「他校に転校する」と答えている。在学生については卒業の三〇年三月まで総合制松任高校として普通科が存続するにもかかわらず、進学希望の生徒の中には、教師陣が弱体化するのでないかという不安から、金沢・小松に寄留して転校するものがあった。

右の表はこの年の三月の進学状況であるが、大学進学者に対する夏期休暇中の強化補習授業は第一次（七月二〇日～二四日・二六日～二九日）と第二次（八月二二日～二五日・二七日～三〇日）に分けて、一六日間にわたって行なわれた。

就職難は二九年頃になっても同じで、当時の就職指導係は金沢市内の商店を軒並みにまわり、本校生徒の努力と誠実さを説き、求人開拓に奔走した。会社からは全然相手にしてもらえず、従って個人商店に職場を求めたのだが、本校だけでなく他校も就職難であった。このような担当者の努力にもかかわらず学校斡旋で就職した者は一〇名前後で、他の約九割の者は何らかの形で縁故就職だった。このような状況であったので、ホーム主任は就職希望者に、まず、「縁故就職できる所はないか」と尋ねるありさまで、就職指導係のみならずホーム主任やクラブ顧問なども積極的に、求人の開拓にあたったのである。

この頃の生徒の多くは、事務員を希望したが、企業側が求めた職種との間にズレがあったため、就職をなお一層困難なものにしていた。男子は多くの者が公務員を目指したし、女子は保母の道を選び、働きながら保母資格をとる者が多かった。そして、県外就職する者は少なかった。

五　図　書　館

昭和三年、学友会の御大典記念事業として図書部が新設された。さいわいに昭和二年度卒業生の寄付として書

棚二個、カード箱一個を得たので予算三〇〇円は全部図書費にあてることができた。種々と図書出版社やその他の有志から数一〇冊の寄贈を受けて、蔵書一八〇冊になった。貸出しは毎週火曜日と土曜日の二回とする。昭和三年の予算は二九四円九六銭。昭和四年の学友会からの予算は二四九円三〇銭。昭和六年の予算は一一九円九一銭。昭和九年の予算は、一二五円四〇銭を受けて、一段と図書拡充に努力していった。

蔵書の面では、昭和二四年度に各研究室及び生徒会に分散配架されていた図書を全部ここに集結して、あらたに日本十進分類法の精神に準拠して分類整理を行なった。図書の整備状況は次の通りである。

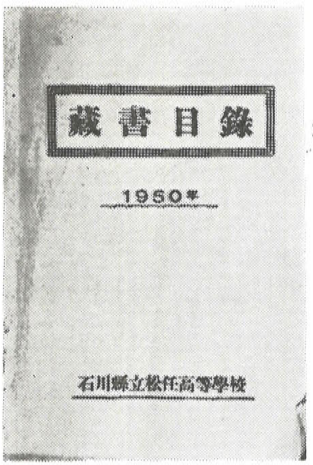
分類 / 年度	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合　計	一人当り	生徒数
二四年総冊数	三九九	二一四	四四七	四七九	七六五	二四〇	七九八	二〇五	二八四	六九九	四、五三〇	五・七九	七八二
二五年増加数	三六	二九	七一	二四三	八四	四七	一〇九	六三	二八	一九〇	九〇〇	一・〇〇	八九八
二六年増加数	六〇九	一九	五二	一九八	五二	一九	五二	三五	三五	一〇六	一、一七六	一・二六	九三三
合　計	一、〇四二	二六二	五六九	九二〇	九〇一	三〇六	九五九	三〇三	三四七	九九五	六、六〇六	七・〇八	九三三

このほかに継続購読している雑誌二〇種類がある。

昭和二六年三月一日、他校に見られない「蔵書目録」が刊行された。この事業は画期的なことである。明石与作校長は次のように記している。

新しい姿で学校が発足してからすでに数年たちました。内外を問わず関係をもったお互いの努力が各方面にぽつぽつ実を結びそめてきたことはまことによろこばしい姿であります。

学校図書館も、図書の充実において設備や環境の改善においてはたまた利用の促進において力強く整備を進めてまいりました。たとい理想の峯はなお遠く、かつ、いや高くとも、それを追ひ求めている事は確かだと申されましょう。今回



蔵書目録

『蔵書目録』を刊行し、この学校を中心としたお互の手元におとどけすることに致しましたのも今后より一層の発展の為図書館を知っていただきたい、身近なものに思ってもらいたい内容の赤裸々な姿を念入りに見ていただきたいと考えたからであります。この点をもう少し具体的に申しますと、

第一に、図書館はいかにささやかであっても全員の利用に供さねばなりません。「出来るだけ多くの人々に出来るだけ便利な機会に一冊の本でもより多く読まれるように」との運営の理想達成上こうした目録はまことにかく事の出来ない資料であると信じます。

第二に、この目録があることによって、学校のあらゆる活動の計画が立てられるのに思わぬむだがはぶけ衝突が少くなって行くことにちがいありません。ある意味で燈台の役目ともいえませう。

第三に、図書の充実をはからんとしてここの利用者の全員が当るには無くてはならないものであります。現実のありのままの姿をいろいろの角度から検討されてこそ始めてものがたく、しかもかたよりのない整備がなされます。

最後に、この目録が一般の方々の手元にあるに及んで、学校図書館の一般地方公開という非願成就の手がかりとなって行くであらうという期待も持たれます。ともあれこれを縦横あますところなくおしらべ下さって研究課題の解決、一般教養の向上、はたまた余暇の善用など、これらいろいろの計画立案に一層の便宜となるならば幸いと存じます。かくしてぼつぼつやかましくなりかけた図書館運動の一歩前進に即応したい。　昭和二六年一月八日

このようにして、「蔵書目録」が配布され、索引カードが整備されているので当時図書利用者にたいへん便利さをあたえた。

昭和二七年（一九五二）における本校の図書館施設をのぞいてみたい。

もと県立農学校時代に養蚕実習室として建築された二階建木造延一二〇坪（五間×一二間）の独立建造物が、新制高等学校発足と同時に学校図書館に転用された。転用に伴う改装工事は、経費の関係もあって意のままには進歩せず二七年度をもってほぼ完成された。この喜びを一生徒は「松高新聞」二七・六・一七号の「投書欄」に次のようにのべている。

新学期早々、図書館が拡張されたと聞いて心からよろこんだ。関係各位の御骨折りを感謝する。庭に花壇が設けられたことは二重にうれしい。

（S・ゆきお）

転用状況は、

階下
- 掲示室　（九）　新聞・パンフレット等自由供覧
- 学習室（四五）　学習参考図書自由接架
- 倉　庫　（六）

階上
- 文芸室（一五）　雑誌文芸教養図書自由接架
- 読書室（四五）　（兼集会室）

収容定員は学習室三〇人、文芸室二〇人、読書室八〇人、計一三〇人（在校生徒の約一三％）となっている。

経費は次の通りである。

年度	公費	PTA	PTA（特別施設）	生徒会	合計
二五年	三〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	八二、一〇〇	四六二、一〇〇
二六年	一二二、四〇〇	八三、〇〇〇			二〇五、四〇〇
二八年	一〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇			三〇〇、〇〇〇

松任高校時代における図書館教育目標は、

(1)　利用の促進と有効化

(イ)　新入生の特別指導（分類・索引カード・利用規定）　(ロ)　校内放送参加（毎週月、木曜日）　(ハ)　図書館だよりの発行　(ニ)　読書週間、特殊行事　(ホ)　図書利用カードの調査と統計

(2)　教科学習指導との連携

(イ)　図書館学習時間のとり入れ　(ロ)　学習参考図書の研究（各教科研究部主動）　(ハ)　単元別参考図書目録の編集（社会科日本史、耕種、商業経済、食物）　(ニ)　個人教育ないし自由研究への貢献

(3)　生活指導との連携

(イ)　倫理修養文庫の特設　(ロ)　卒業後の進路計画への寄与（資料の蒐集、供覧）　(ハ)　公民道徳実践の場（自治・公共物愛護・思いやり）　(ニ)　余暇の善用指導　(ホ)　図書館委員の特別指導（奉仕・責任・協力・技術）

(4)　文化活動

図書を語る会、レコードコンサート、論文蒐集（クラブと連携）

(5)　地域社会の奉仕

(イ)　卒業生の利用開拓　(ロ)　ＰＴＡ文庫特設（成人教育委員会主動）　(ハ)　校下小中学校図書館との合同研究協議会　(ニ)　校下町村公民図書館との連携

以上を掲げて、図書館活動を盛んにしていったのである。また、年間活動（二七年度）状況は次表の通りである。

月	旬	行事
四	中	新入生の特別指導
	下	図書館運営委員と図書館委員の選出委嘱
五	上	図書館運営委員会　図書館委員会
	中	第一回購入図書選定
	下	〃図書を語る会〃
六	上	〃図書館だより〃　〃レコードコンサート〃
	中	図書館委員会
	下	〃図書を語る会〃　図書館運営委員会　第二回購入図書選定
七	上	研究論文応募者選定
	中	〃図書館だより〃　〃レコードコンサート〃
	下	利用カードの調査と統計　図書修理
八		特別開館奉仕
九	中	図書館委員会
	下	図書館運営委員会　第三回購入図書選定
十	上	〃図書を語る会〃　〃レコードコンサート〃
	中	〃図書館だより〃　作品展覧会

十一	中	図書館委員会　町村公民図書館との情報交換
		読書週間　〃レコードコンサート〃
	下	図書館運営委員会　第四回購入図書選定
十二	上	〃図書を語る会〃　〃図書館だより〃
	中	図書館委員会
	下	利用カードの調査と統計
一	中	〃恒例かるた会〃　図書館委員会
	下	校下小中学校図書館合同研究集会
二	上	図書館運営委員会　第五回購入図書選定
	中	〃レコードコンサート〃
	下	〃図書を語る会〃
三	上	〃図書館だより〃
	中	事務年度末整理
	下	図書館委員会　利用カードの調査と統計　経営評価

六　クラブ活動の記録

クラブの設立　クラブ活動の目的は、生徒会活動の一環として互いに協力して運動、文化の両面における特

技の発見と技能の練磨とにより各人の性能の伸長をはかることであった。組織は、生徒の自主性によって運営されるもので同好者一〇名以上の参加によって生徒会の承認を得て組織され、授業時間以外に活動し、各部に顧問教師一名をおいた。各年度の部状況をみよう。

昭和二六年度クラブ状況（運動部・文化部）

クラブ名	
運動	野球
	送球
	陸上
	籠球
	排球
	庭球
	羽球
	水泳
	卓球
	自転車
文化	演劇
	文芸
	科学
	絵画
	語学
	郷土
	珠算
	茶華道
	中国研究
	新聞
	手芸
	読書
	倫理
	書道
	映画
	時事研究
	音楽
	弁論

（「松高新聞」第一四号）

昭和二七年度クラブ状況

クラブ名	
運動	野球
	送球
	陸上
	籠球
	排球
	庭球
	羽球
	水泳
	卓球
	自転車
	柔道
	ソフトボール
	山岳スキー
文化	演劇
	文芸
	科学
	絵画
	郷土
	珠算
	茶華道
	弁論
	新聞
	哲学
	映画
	音楽
農業	家庭

（「松高新聞」第一八号）

当時は総合制を反映して生徒会の下に、体育・文化・農業・家庭・実践等のクラブがあったが、農業クラブと家庭クラブは特殊な地位が認められて、独自の活動を行なっていたが、他の部は全生徒に解放されて同好の士が集まり、学業以上に青春の情熱を注いだ。その一断片をのぞいてみよう。

運動部

新制高校となった昭和二三年から二九年頃にかけて本校運動部の基礎が確立された。特に創設の二三年、四年、五年頃の活躍は素晴しいものであった。

昭和二二年八月二三・四・五日の三日間、松任町プールに全国から一、二〇〇名の代表選手が参加して開かれた第二回国民体育大会夏季水上競技大会、一〇月三〇日から一一月三日まで五日間、金沢、小松、七尾、大聖寺の二四会場で行なわれた秋季大会。翌年の二三年に、県高校相撲選手権。昭和二四年、県体相撲、国体女子ソフトボール北信越県予選、県駅伝競走選手権。昭和二五年県金沢城一周耐寒継走選手権、県定時制バレーボール・国体ソフトボール北陸代表決定戦、昭和二六年、県ハンドボール・県女子ソフトボール、県体水上競技、羽球、ハンドボール、国体ハンドボール代表戦にそれぞれ優勝等の活躍はまさに一世を風靡するものであった。そして、どの部も年二回の強化合宿を行ない教室や周辺の寺院、公民館を借りて、インターハイ出場をめざして猛練習したのであった。

その中で、最も花々しい活躍振りを示したのは送球、ソフトボール、排球、陸上競技、羽球、相撲の各クラブであろう。それではこれらの輝かしい成果の跡を振りかえってみることにしよう。

送球

創立は昭和二四年の初夏のころである。新しいスポーツ（日本に入ってきたのは大正末期で戦争中も日独対抗などがあって続いていたが、石川県では新しい競技であった）で新制松任の名を県下に示めすべく創立された。まずは部員獲得であるが、何しろ試合に出た経験者というのは、山本（三高）、宮本（一高）と開発利弘ぐらいなものであった。あとの部員は、バスケット、サッカーなどを少しやっていた程度の全くの寄合世帯で出発した。予算も少なく、ボールは二個、ゴールにはソフトボールのネットを掛け、裸足でランニングという状況であったが、その意気は高く、放課後になると狭いグランド一杯になって、ラ

ンニングパスからシュート練習、バックス・フオワードに別れての攻防戦と、夜の帳がおりるまで猛練習が続けられた。その心意気に感じてか部員の数もふえ、四、五〇名の大世帯になった。

昭和二五年第二回県体育大会（八・一九）に初出場。その時のメンバーは山本、小鍛治、本多、荒川、関川、得田、新谷、宮本、中田、札木、安井、高野、内田、中井、中村などであった。

昭和二六年五月一三日、県下高校春季ハンドボール大会が本校グランドにおいて行なわれ、決勝戦に羽咋高と対戦し三対〇をもって堂々と晴れの栄冠を勝ち得た。八月一九日、第三回県体優勝。

一回戦　本校　2―0　泉丘高
二回戦　本校　7―0　小松高
決勝戦　本校　3―0　羽咋高



西日本ハンドボール選手権大会

昭和二七年七月二九日、西日本選手権大会（藤井寺競技場）に出場。九月七日、国体ハンドボール県大会に優勝。国体北信越予選決勝戦に富山中部高に惜敗。全日本学生チャンピオンの関西学院大学を招き、合同合宿をする。

昭和二八年七月二九日から八月二日までの五日間、藤井寺球技場で開かれた西日本ハンドボール選手権大会出場。一回戦西京高を皮切りに、大阪の鳳高、兵庫の明石高、大阪の北野高とつぎつぎに関西の強豪を連破し、ついに決勝戦まで進出したのである。この決勝戦も第三延長戦までもつれこみ、あわや時間切れで同率優勝かという直前に一点を追加され、中国の雄、山口高校に優勝をゆずる。メンバーは笠野主将を中心に、茶谷、村中、野坂、

石次、森、山崎、谷口、新矢、高桑、源田、北村、清水が大活躍し、石川県では初めての第二位の栄冠をかちとったのである。八月二四日、第五回県体で、男子優勝を得る。

ソフトボール　創立は不明だが、昭和二四年九月二四日国体女子ソフトボール県予選大会で、初の栄冠に輝いた。九月二四日、国体女子ソフトボール北信越予選で優勝を得た。そして、国体女子東京大会に出場。神宮で夕方からの開会式には、三〇〇〇発の打上げ花火が空を彩どり天にも昇るようないい気持であったという。

昭和二五年九月一〇日、国体ソフトボール県予選、九月一八日、国体北陸代表決定戦にそれぞれ優勝した。九月下旬の全国女子名古屋大会出場。

昭和二六年五月一三日、県女子ソフトボール大会が金沢市工高グランドで行なわれ優勝した。一回戦は一一対三で飯田高校を、二回戦は五対四で泉ケ丘高校を、準決勝で九対二で二水高校を、決勝で一〇対三で小松高校をそれぞれ破ったのである。

昭和二七年九月七日、第四回ソフトボール国体予選に優勝して、国体仙台大会出場。

排球　昭和二四年四月一四日、県定時制バレーボール大会で優勝した。昭和二五年五月一四日、県定時制バレーボール大会二連勝した。部は、明るい性格、強い意志をつくることをモットーとし、その目的達成のために努力していった。部員二〇名。

陸上競技　昭和二一、二年といえば経済的にも家庭的にも大きくゆれ動いた時代で、全国的に浮浪者がうようよし、深刻な食糧不足のころで、空腹を満たすことがなによりも優先していた時期で、スポーツどころではなかった。したがって、スパイクを求めるには古道具屋をあさり、学校の物置きを捜

し、駅伝の練習は素足で走り、試合にはシューズのかわりに、白足袋の裏に布切れを縫い付けるなどした苦しい時代であった。練習も今日のように科学的な練習方法もなく、ガムシャラに走るだけが練習で、市村、伊藤、大川（旧姓室）の三人が松任、小松間往復を試みたのがこのころである。しかし、半田教諭を迎えてからは練習方法も改善され、昭和二二年の大聖寺・金沢間の駅伝に、宿敵工芸高校（県工）の三連覇をはばむことはできなかったが、前年の九位から一躍二位にくいこみ、半田教諭赴任一年で全国大会出場権を獲得した。こうして、良き指導者を得た陸上部は、第一期黄金期の基礎を着々と築いた。

現在の高校駅伝の前身である、昭和二四年一月五日の全国駅伝大会には、どうしても入賞するのだと全員半田教諭の自転車伴走で、毎日の練習では一五キロ以上走破、元日返上で走りぬいたかいあって、全員ベストコンディションで大阪へ乗り込んだ。レース当日は、小雪がちらつき、われら雪国の者には、絶好のコンディションであった。スタートの室はトップと接戦を演じ、なだれるようにして五位で藤田（河村故障欠場のため代走）に中継したが、この時、予想以上の室の健闘のため、藤田は走る準備をしておらず、そのため一八位まで落ちたが、その後、宮崎、清水、井上、荒川の力走で五〇余チーム中一六位でテープを切った。第二区中継の不手際や、河村の故障による欠場がなければ、一〇位以内入賞の実力を備えていただけに残念であった。

その年、金沢高校から長距離の二ツ橋、短距離の林藤の転校で陸上部は更に充実し、昭和二四年六月一九日の県下高校選手権には室が八〇〇メートル、一五〇〇メートル二種目に優勝、宮永もやり投げに優勝し、補強した二ツ橋、林藤も予期以上の活躍をし、それぞれ北信越大会に出場、ここでも一一〇メートルHで林藤が六位、一五〇〇メートルで室が優勝、ともに七月の全国高校大会に出場、林藤は予選で三位となり失格したが、一五〇〇メートルで室は堂々全国の精鋭を相手に四分一六秒二の好記録で三位に入賞（この日の記録は昭和三八年まで県

高校記録であった）全国高校選抜東西対抗に出場した。こうして、ロードレースばかりでなくグランドでも松高の活躍が目立ってきた。その年の大聖寺、金沢間の駅伝は、当時、全国勤労者駅伝や駅伝のメッカ九州の遠征で活躍、全盛期にあった一般の松任工機との争いが焦点であった。しかし、横山、宮崎、井上、河村、二ツ橋、荒川、室のオーダーで常勝松任工機に一分七秒差をつけ三時間一一分の好記録で完全優勝をかざった。

この時、松任・寺井間一三キロで展開された松任工機のエース大岩と二ツ橋の死闘は、今なお駅伝オールドファンの語り草となっている。こうして全国大会の優勝を目指し精進したかいもなく、高校駅伝は通信ロードレースに変り念願を果たすことができなかった。昭和二五、六、七年は、ロードの優勝から見放され、かわって林藤を中心に金古、高島、川端、島、中村、増田、相木らによってグラウンドの活躍が目立ち、とくに短距離・林藤は昭和二六年金沢の全国高校大会での活躍が認められ、その年の全国高校東西対抗に選抜（本校では二人目）され一一〇メートルHで一五秒三で三位に入賞した。二七年には林藤、金古の主力選手の卒業にもかかわらず、北陸三県大会で、男子総合二位となった。

羽　球　昭和二六年、第三回県体育大会は、八月一七日から三日間、金沢市、松任、七尾を会場として、高校一五校の代表千余名が力と技を展開した。部は小将町中学校で行なわれ、男子は本校が優勝した。昭和二七年六月二九日、県新人大会で、女子の部優勝する。目標は、打倒二水とする。

相　撲　昭和二三年七月二四日、県高校相撲選手権大会優勝。八月二一日、第一回県体の相撲の部で優勝。昭和二六年五月二五日頃の相撲部の様子をのぞいてみよう。

緑増す学園の一角に肢股を踏む音も勇しく、肉弾相打つ堂々たる体格に斗志満々の猛練習を続ける相撲部、来たるべき第三五回学生相撲大会には必勝を期し、松農時代の伝統と歴史を遺憾なく発揮すべく十数名の部員が山崎マネージャー以下一

丸となってこの日より本格的練習に入ったものである。さて、練習土俵を眺めた選手陣を予想すると、まづ主将に岡田君、中堅に宮島君、それに先鋒として斗志満々相撲巧者の竹田君があり、続くは態度敏感な宮永・堀田君等がある。現存旧力士立田野関その他多くの先輩諸兄が実地指導に腕は一層磨かれている。放課後三時半より六時までの規則正しい猛練習に汗と油にまみれながら来たるべき大会に備えている。

今大会の試合方法として予選は三回戦で最高得点順に一六校が選ばれ、決勝はトーナメントで行なわれる。（「松高新聞」第一三号）

昭和二七年、第三六回、日本相撲連盟主催、全国学生相撲大会は伝統三五回の歴史に輝く金石海浜から新設の平和台相撲場に移され、六月一日午前七時三〇分開会式に引き続き花々しく熱戦の火ぶたが切られた。初夏らしい微風のそよぐこの会場は、四方ゆるやかなスロープにかこまれた後の方に犀川の清流が一望される。地元金沢、七尾、小松などから押し寄せる観衆はざっと四万、出場校は一都二府二七県八四校で母校の声援のもとに栄えある優勝をめざした。本校は、優秀三二校に入り、第一回戦は和歌山耐久高を、二回戦は、昨年の優勝校高知商業高を倒し、準々決勝に福井県大野高と対戦二対一で破れた。

優秀三二校トーナメント

第一回戦

本校　2（○○北岸　竹田宮永　よりきり○栩うわてなげくびなげ　土野東岐）1　耐久高

第二回戦

本校　2（○○北岸　竹田宮永　おしだし○山川うわてなげこしくだけ　崎浜口）1　高知商高

準々決勝

本校　1（竹田くりだし○　○宮永うわてなげ　北岸うわてなげ○）2　大野高

文化部

多くの文化部があるが資料が乏しいので、ここに演劇・郷土クラブを掲げる。

◇演劇　すでに昭和二六年七月一四、五日の両日、高文連・金沢大学・高等師範学校共催第三回県下高校演劇コンクールに初めて出演している。公演題目は「どん底」（ゴーリキ作）。場所は金沢大学理学部講堂であった。審査の結果、伊藤武雄賞を受賞。九月九日、ＪＯＪＫ主催の放送劇コンクールが開かれ、本校も参加した。そのころ、松任周辺の催しには積極的に参加したため、日常の練習はたいへんなものであったに違いない。三〇年代に入ってから、この演劇コンクールも六月から夏休暇にかけて開催されるようになったため、二学期の松高祭で同じものを上演できるようになった。概してこの部は、先輩後輩の結びつきが強い。近年のコンクール公演題目を掲げると次の通りである。現在、部活動が存在しない。

昭和二七年（一九五二）　亀裂（阿坂卯一作）
昭和二八年（一九五三）　乞食と夢

◇郷土　生徒らは俗に「穴掘クラブ」と称しているように、本格的な「穴掘り」が行なわれたのは昭和二五年以後のことである。

昭和一二年三月一二日、鏑木勢岐・平岡栄雄らによって石川郡富奥村末松の寺院跡を発掘し、土器、布目瓦などの遺物と金堂基礎の石敷や塔礎石根石が発見されたり、昭和二五年七月一一日、資料科学研究所員大和久震平は、沼田啓太郎の案内で石川郡旭村、御手洗村の各遺跡を踏査するなど本校周辺で遺物の発見がつぎつぎにみつかるという風土の中に、郷土クラブの活動が本格的に動きだした。この時のクラブ顧問は、宮本又久教諭（現在

金沢大学教育学部助教授・近代史専攻）で、地元研究者が学術的な面で大きな刺激を受けた年であった。すなわち、縄文土器編年研究に一つの指針を与えられた山内清男博士（当時東大講師）と弥生式土器編年に新しい知識を注入された杉原荘介博士（当時明大助教授）の両専門学者の来県である。山内博士は久保清氏宅の上山田・気屋遺跡出土品を中心に検討し、全国的な編年の中への位置づけを示して帰られた。また、小松市八日市地方遺跡の発掘を目的に来県された杉原博士は、同遺跡出土品と柴山出村遺跡出土品の編年観を説明して帰京されたのであった。

ところで、七月下旬には、大聖寺高校考古班とともに上野与一（本校卒業生）・牧野隆信両先生の指導で黒瀬町通称御坊山の円墳三基を発掘し、一方墳より横穴式石室（礫槨）、二方墳より竪穴式石室（直刀、刀子、鉄鏃、石枕など）を検出した。クラブにとってははじめての体験であり、忘れがたい想い出であった。八月一七日から二三日の七日間、部員は、上野与一、高堀勝喜らの指導で矢田野村字戸津の須恵器窯址を発掘した。

昭和二六年四月、教師生活二年目の若き情熱をもった山崎昭教諭を迎えて地道な活動を続けた。この年の特筆すべき点は、クラブ結成初めての単行本第一集「江沼郡矢田野村戸津窯跡調査報告」を刊行し、他校の郷土クラブに刺激を与えたのみでなく、石川考古学研究会や日本考古学界に大きな寄与をしたのである。

昭和二七年の夏休暇を二週間前にして、クラブ員は、今夏の調査をどこにするかを山崎顧問を中心に検討した結果、「能登島調査」ということになった。能登が選ばれた理由は、朝鮮や満州に近い能登は、文化的には東日本、西日本の文化の交流点として関西以西の古い文化と関東以北の新しい文化とが交錯、歴史的にはかって大きな力をもっていた日本海交通における半島としての役割を占め、裏日本の中心として大陸との交渉も深かった。また伝説などからみると出雲との密接な関係も推定され、クラブ員に興味をそそいで決まったのである。七月二

九日から八月二日までの五日間、山崎顧問引率のもとに、野崎小学校を宿泊所として、「能登島調査」を本格的に行なった。能登島の島人の生活・職業・年中行事・言語・結婚年令・教育・農具について各班調査し、特に農具や言語について詳細に調べたのがユニークであった。ここに「言語」の一部を掲げる。

標準語	能登島の方言	石川郡の方言	標準語	能登島の方言	石川郡の方言
男	わろう	おとこ	茶の間	おく（おうえ）	おい
女	めろう	めろ	囲炉裏	へんなか	いりり
娘	あんま	たあた	マッチ	ヘッジン	マッチ
私	あちや（おっちや）	わて（わし）	写真	サシン	しゃしん
お前	いな	われ	小皿	てしょ	ござら
朝	あさぎり	あさ	風呂敷	ばんかけ	ふるしき
朝食	あさい	あさめし	大きい	まあそい	でかい
昼食	へんま	ひるめし	眉毛	あいげ	まいげ
夕食	ようたい	よめし	違う	べっちゃ	ちごう
夕方	よさがた	ひのくり	半日	へなか	ひなか
欲しい	ほしたい	ほしい	火葬場	さんがり	もどじょ
馬鹿	でこすけ	だら	馬鈴薯	ざいも	じゃがいも
柔い	じうい	やあこい	悪く言う	げなす	けなす
いたずら	てんご	わりこと	海	うんなか	うみ
無暗に	あやめに	やたらに	海水	おつしょ	うつしょ
お寺	ごぼう	おてら	井戸端	いなはた	いどばた
行きなさい	いかさっせ	いくまっし	そんなに	そんどな	そねに

（「能登島調査報告」石川県立松任高等学校郷土クラブ）

恒例の全校あげての最大の行事である「松高祭」が、一一月二二、三日の両日盛大に行なわれ、わがクラブは、能登島の調査を発表して一般者に大きな反響を呼んだ。発表コーナーでは説明者を置き内容の充実に寄与したのが新しき進歩であろう。

第四節　定時制の課程

一　定時制の設置

定時制の設置　定時制高校教育は、憲法、教育基本法による教育の機会均等の原則にのっとり、勤労青少年に高等学校の教育を受ける機会を与えるためのものである。すなわち、勉学に対する意欲と能力を持ちながら、諸種の事情により勤労に従事している青少年に対し、機会均等を実質的に保障しようとして設けられた制度である。定時制課程には、毎日、夜間に授業を行なうものと、週に何日か、昼間に授業を行い、農繁期などに休業日を設けるものと二種類あり、発足当初は、前者を夜間の課程、後者を定時制の課程と称していたが、後には、両者を同様に定時制の課程とかえている。

教育課程は、教育の機会均等の趣旨から通常課程と同じ原則が適用されているが、時間数が少ないことから修業年限は四年以上と定められている。また、学校から遠い地域の勤労青年の就学の便をはかるために、分校の制度が設けられた。本県において、定時制の教育が本格的に取りあげられるようになったのは、新制高校が発足した昭和二三年四月である。まず、県教育部で原案が作成され、これを石川県議会教育民生委員会、その他で審議

恒例の全校あげての最大の行事である「松高祭」が、一一月二二、三日の両日盛大に行なわれ、わがクラブは、能登島の調査を発表して一般者に大きな反響を呼んだ。発表コーナーでは説明者を置き内容の充実に寄与したのが新しき進歩であろう。

第四節　定時制の課程

一　定時制の設置

定時制の設置　定時制高校教育は、憲法、教育基本法による教育の機会均等の原則にのっとり、勤労青少年に高等学校の教育を受ける機会を与えるためのものである。すなわち、勉学に対する意欲と能力を持ちながら、諸種の事情により勤労に従事している青少年に対し、機会均等を実質的に保障しようとして設けられた制度である。定時制課程には、毎日、夜間に授業を行なうものと、週に何日か、昼間に授業を行い、農繁期などに休業日を設けるものと二種類あり、発足当初は、前者を夜間の課程、後者を定時制の課程と称していたが、後には、両者を同様に定時制の課程とかえている。

教育課程は、教育の機会均等の趣旨から通常課程と同じ原則が適用されているが、時間数が少ないことから修業年限は四年以上と定められている。また、学校から遠い地域の勤労青年の就学の便をはかるために、分校の制度が設けられた。本県において、定時制の教育が本格的に取りあげられるようになったのは、新制高校が発足した昭和二三年四月である。まず、県教育部で原案が作成され、これを石川県議会教育民生委員会、その他で審議

し、五月に一応内定、ついで、石川県新学制実施準備協議会にはかられて原則的な決定をみたあと、七月に設置要綱が内定したので、県当局は七月二九日付「石川県公報」で、定時制入学者募集要綱を示すところとなった。

この年は、第一学年の該当者のみを募集し、九月に入学式を迎えたのである。

本校では、馬場町校舎を中心校として、普通科（夜間）と農業科（昼間）を、美川町旧美川水産を分校として水産科（夜間）をおいて生徒を募集し、合計六六名の生徒を入学させた。主事は岡田一郎教諭、分校の係（主任）は中田半二教諭であった。また中心校の教諭は本校普通部、農業部の教諭がこれにあたった。美川分校では、普通科目は本校普通部教諭が担当したが、水産科目は、県水産試験場美川分場職員が担当し、年が若いので生徒の方が年上という珍現象がおこり、このためか退学者が続出し、翌二四年から水産科を廃止して普通科（夜間）を設けた。主事はかわって月輪彰慰教諭となり、中心校普通科主任を兼務した。農業科は鐘ケ江英夫教諭が主任となり、美川分校は米岡栄一教諭が主任となった。また美川分校校舎は二四年美川小学校に移ったが、美川中学が新築された翌年の四月から、美川中学校に移ったのである。

二　定時制の変遷

定時制の歩み

向学の志を燃やして入学してきた生徒の入学前の学歴も年令もまちまちであった。次の第一表・第三表に見られるように、入学前の学歴ではやはり新制中学卒が大半を占め、年令でも全日制の生徒と同じ年令の生徒が圧倒的に多かったが、一九歳以上の生徒も三割以上を占め、なかでも三〇歳の生徒も一名見られたのである。

一方、農業課程の生徒は全員自営農業であったが、普通課程の生徒の職業もまた種々で、第二表に見られるよ

第1表　年　齢　調　査　（昭和27年度学校要覧）

年齢＼性			15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計
中心校（普）	男	66	5	8	7	6	8	8	4	5	5	2	4	2	1			1	
	女	4	2			2													
分校（普）	男	45	6	12	7	4	2	9	2			1		1		1			
	女	1			1														
中心校（農）	男	72	15	22	15	14	5	1											
計		188	28	42	30	26	15	18	6	5	5	3	4	2	2	1	1	1	

第2表　勤務先調査（農業科は全員農業につき略す）

区分＼勤務先＼性別		国鉄松任工場	鉄道	会社	官公庁	郵政	商店	電通	自家営業	税務署	その他	計
中心校（普）	男	25	4	5	1	5	13		8		5	70
	女	1		1			1			1		
分校（普）	男	4	5	15	3	3	1	3	8		3	46
	女										1	
計		30	9	21	4	8	15	3	16	1	9	116

（昭和27年度学校要覧）

第3表　入　学　前　の　学　歴

区分＼学歴＼性別			高小卒	青年卒	新中卒	旧中卒	技能養卒	その他	計
中心校 普通	男	70	13	5	33	3	8	3	
					4				
中心校 農業	女	72			72				
分校 普通	男	46	3	3	31	1	5	2	
	女				1				
計		188	16	8	141	4	13	5	

（昭和27年度学校要覧）

うに、国鉄松任工場に勤務する生徒が一番多くそれにつぐものとしては一般民間会社、商店に勤める生徒、自家営業についている生徒であった。

このような生徒達は、年令も職業も異にしながら、勉学しようという強固な同じ目的のもとに相互に励ましあいながら高校教育を享受していったのである。

定時制の教育課程は、発足当初は専任の教諭の数も少なく、設備も乏しかったので、全日制に見られるような自由選択制は一般にとられなかった。次表はその教育課程の一例である。

定時制の教育課程　（選択はなく学級単位とする）

科目		単位	普通科 1年	普通科 2年	普通科 3年	普通科 4年	農業科 1年	農業科 2年	農業科 3年	農業科 4年
国語	国語甲	9	3	3	3		3	2	2	2
	国語乙	5			3（なし）	2				
社会	一般社会	5	5				2	3		
	世界史	5		5（なし）						
	日本史	5			5					
	人文地理			（5）	5（5）					
	時事問題	5				5			2（3）	3
数学	一般数学	5					2	3（2）	（1）	
	解析Ⅰ	5	5							
	解析Ⅱ	5				5（なし）				
	幾何	5		5（5）	（5）					
理科	生物	5	2	3			3	2		
	物理	5				5（なし）				
	化学	5			5（3）	（3）		3	2	
保健体育		9	3	2	2	2（3）	3	2	2	2
英語		15	4（3）	4	4	3（2）				
農業	耕種	10					2	2	3	3（2）
	園芸	8					2	2	2	2
	農産加工	4							2	2
	畜産	6					2	2	2	
	農業経済	3								3
	農業土木工作	6							3	3
	ホーム・プロゼクト	8					2	2	2	2
合計		88	22	22	22	22	22	22	22	22
課外活動		8	2	2	2	2	2	2	2	2

※（　）は本年度実施、他は永久計画

（「昭和27年度学校要覧」）

この教育課程の中で、全日制の農業科でも取り入れられたものであるが、ホームーブロジェクトこそ定時制農業教育を象徴するものであった。生徒は家にあって、原則的に週午後三回、巡回教諭の指導を受け、生徒自身の選定したテーマに取り組み、農業技術の向上をめざすとともに、農業経営に汗したのであった。定時制発足当初在学された小坂政栄教諭は、「このホーム・ブロジェクトによって、何事も自分の方で、自分の力でやろうとする気力と忍耐力を植えつけられたのが、本当に有意義であった。」と回想されている。次表はホーム・ブロジェクト指導計画の一例である。

指導計画表

	3			10			9			
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	下
		10	17 24				5		22	
		農休					農繁期休業			
	畦塗り 苗代の手入と設計 温床育苗・管理			秋耕 裏作野菜の管理			温床土準備 米の調製出荷 水田利用野菜の播種			紫雲英播種 稲刈
				換羽期の管理 豚の種付			産卵期の飼料			
	←苗・苗（第七回）育苗・温床指導→			←管理（菜回）野六及作（第裏			→作裏田（回五）水（第刈・稲導指			←
	プロジェクトの計画 プロジェクトの評価			一人一研究整理 プロジェクト記録簿点検 一日　始業			二二日　出校日 五日　出校日			水稲検見

（「昭和35年度学校要覧」）

昭和35年度　ホームプロジェクト

月	4			5			6			7			8	
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中
農休と出稼	8		21			23	4	10	18	24		20		13
	農			繁期休業										
プロジェクト指導要項 栽培	野菜の定植 本田起耕 苗代管理 夏野菜播種 野菜温床管理 苗代準備・播種			水田中耕除草 田植開始 露地野菜播種			玉葱の収穫 穂肥の施用 人参の播種 止草 病虫害防除 水稲追肥			病虫害防除 冬取甘藍播種 余蒔キウリ播種			白菜の播種	
プロジェクト指導要項 飼育	緑飼青草の利用 中びな管理 子豚の飼養 飼育の整備			子豚の去勢			梅雨期の管理			駄鶏陶汰 防暑管理			乾草調製	
予定回数と巡回目的	←苗代（第一回）本田と管理→			→耕起	←田植（第二回）及管理→		←水田（第三回）裏作穂肥→			←水稲（第四回）病虫害除草→				
備考	立札の作製 プロジェクトの計画（一年） 実習服注文 八日入学式始業式			プロジェクト記録簿点検						研究物の提出 地域別総合見学			水田裏作の計画 十三日出校日	

定時制の生徒にとって、勤労と勉学を両立させていくことは並みたいていのことではなかった。特に普通課程の生徒にとっては、夜間通学であり、一般の人々が自分の時間を楽しんでいる時に、仕事に疲れた身体に鞭打って通学しなければと気持をひきたたせ、肉体の疲労以上に精神的負担に打ち勝つこの努力は並みたいていではなく、その上肉体的精神的誘惑に打ち勝ち得たとしても、職場の関係で学校に来たくても来れないこともあったのである。この間の思いを田野武が、

苦難をのり越えての四年間、勉学にいそしみ、仕事に打ち勝って来ました。四年間というものは長い様に思いますが毎日毎日空腹とネムサをこらえながら通学している四年間はアッと過ぎさってしまいます。四年の間病気せず健康であったことは僕の一番の幸福でしょう。入学当時三〇名弱の人数でスタートしましたが現在一六名になりました。僕は思うに四年間を通じ夕食を忘れる程に真剣に勉強していたら今の僕はなかったろうと。適当にサボリ、適当に勉強したからこゝまで続いたのだろう。

昼の仕事で疲れた躰に、ネムイ目をこすりこすり空腹と寒さに震え勉学に志す、〝何の為に勉学しなければならないのであろうか。果して僕達の教養が実社会に間に合うだろうか。自分はいったい何になろうとしているのだろうか。人間生まれた以上それぞれ多少の欲望的地位を求めている。そして僕達は将来に希望を持ち現実に苦しむ。将来のために現実を犠牲にしなければならないのだろうか……疑問だ。僕達は苦しい中からも通学し、皆んなより以上に知識を得ようとしている。……（生徒会誌「夕映え」第一四号）

と述べている。また生徒それぞれの大変な努力にもかかわらず、各種の事情により、中途退学するものが、昭和三三年度から昭和三六年度の学年別在籍生徒数の変化をみて見ると、農業課程では昭和三三年度入学者数四八名が昭和三六年度に三八名に、普通課程（中心校）では、二〇名が八名に、普通課程（分校）では、三三名が二一名に減少している状態を示している。この減少状態からも勤労と勉学の両立がいかに困難なものであったかが推察できる。

昭和33年～36年度　定時制学年別在籍生徒数

年度＼課程＼学年＼性別	農業（中心校）											
	1			2			3			4		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
33	48		48	40		40	34		34	18		18
34	44		44	46		46	34		34	29		29
35	37		37	38		38	40		40	30		30
36	4		4	30		30	35		35	38		38
	普通（中心校）											
	1			2			3			4		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
33	18	2	20	9	7	16	13	12	25	11	1	12
34	8	8	16	12	1	13	8	4	12	12	2	14
35	19	7	26	4	5	9	12	1	13	7	3	10
36	3	3	6	13	8	21	4	6	10	7	1	8
	普通（分校）											
	1			2			3			4		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
33	23	10	33	30	8	38	8	8	16	12	7	19
34	22	8	30	18	9	27	25	8	33	8	8	16
35	26	8	34	16	6	22	15	7	22	23	7	30
36	15	4	19	20	6	26	16	6	22	14	7	21

（昭和33～36年度の学校要覧による）

教科以外の面でも幅広い教養を養い公民的素養を身につけさせようという配慮のもと、普通課程では、文化部としては、読書部、音楽部（時として文化部を分かたないこともあった）が、運動部として羽球、卓球、柔道の各部が農業課程にあっても、柔道、畜産、野球、相撲、羽球などの各部がそれぞれ設置された。短かい時間に限られた人数の中での活動ではあったが、高校生活の尊い思い出を胸中深くきざみこませ、躍動する青春のエネル

ギーが凝集され、その喜びが感得される場として部活動が作用したのであった。また一年間の生徒会活動の主なものは次表に示すようなものであった。

定時制農業課程生徒会
活動実施内容

月　日	内　　容
4.14	各クラブ加入調査
21	生徒総会
5.12	農業クラブ代議員会
6.20	石川県高等学校定時制総合体育大会参加
7.22	農業視察
8. 1	幹部講習会
15	北陸４県高等学校定時制体育大会参加
9.28	体育祭の選手選出
10. 3	石川県高等学校定時制通信教育文化祭出品
4	石川県学校農業クラブ技術競技大会参加
11.21	松　農　祭
22	
24	定時制球技大会
12.21	生徒会立会演説会・選挙
1.19	生徒会後期総会
2.14	定時制球技大会

（「若土18号」―昭和40年度）

定時制普通科課程生徒会
活　動　内　容

月　日	内　　容
4.11	対　面　式
20	生徒総会
5.20	代議員会
6.25	第２回中心校・分校交歓球技大会
7.18	代議員会
9.15	役　員　会
20	討論会（ホーム対抗）
28	映画観賞（路傍の石）
10.15	松　高　祭
16	
18	分校・中心校合同運動会
11.23	県文化祭に出場
12.22	クリスマスパーテー（全員出席）
1.19	生徒総会
24	新年度役員改選

（「夕映15号」―昭和35年度）

定時制が発足し、昭和二七年に始めて普通科男子二九名（中心校二一名、分校八名）、女子一名（中心校）、農業科男子一二名の第一回の卒業生を送り出したのであったが、普通科は昭和三八年度高校生急増対策の一環として新設された松任高等学校へ移籍された。一方、農業科にあっても、昭和二八年の総合制高校の解体にともなって、設立された松任農業高等学校に併置されることとなった。しかし、地元で活躍する有能な農業人を世に送り出した農業科も、いわゆる三八急増対策等によって全日制の門が広くなったことや、中卒者の進学率の高まりとともに、かってのように経済的理由で進学をあきらめ就職するというケースも少なくなり、また一方、農業の合理化が進んだことによって、今までのように子供の労力を当てにしなくても、一・五ヘクタール余りの耕地規模の農業は十分やっていけることなどから、昭和四一年度の入学者は四名に減少し県下の定時制高校への入学者にあっても、昭和三三年に定員を割ってから減少しつつあった。ついに昭和四二年四月、本校定時制の農業科の生徒募集を停止するに至ったのである。最後に農業課程に学んで、農業に生きる決意をどのように固めたかを一生徒の声を次に掲げてこの項を終ろう。

……農業高校の本当の行き方は何んであるかということを考えると、それは考えるまでもなく、自営が目的ではないでしょうか。それなのに、他産業に比べて遅れている農業に見切りをつけて、進んだ他産業に飛んでいったのでは、ますます農業はおくれ、発展する余地がなくなるでしょう。まして農業高校に学ぶ者がことさらに、サラリーマンにあこがれるとしたら、いったいだれが農業をするのでしょうか。女、年寄り、子供だけでは進んだ農業は期待できません。……日本の農業はそんなにいやな職業でしょうか。悪いところがあれば改善すればいいではありませんか。また、農業が他の職業により劣っているなら、どうしたら合理的にできるか、所得をふやすことができるか考えて見ようではありませんか。（中略）

最後に〝農家に生まれ、土に親しみ、農高に学んだ〟これ以上の好条件はないはずだ。そして〝やる気〟を持って、力強く大地を踏みしめていこうではありませんか。（「若土一八号」、上田章）

第五節　変容する新制高校教育

一　高校三原則の後退

総合制の解体

昭和二五年の朝鮮戦争をきっかけに、日本の政治、経済は急激な変ぼうをとげていった。政治的にはサンフランシスコ体制の中に組み込まれ、経済的には特需により急速な経済拡大が行なわれ、のちの驚異的な繁栄を指向しはじめていたが、この中に新教育の再検討が行なわれ始めた。

総合制の長所を生かし、これを維持してゆくためには、地域による学校差を解消し、各課程の施設設備を充実することが必要であった。しかし、いわゆる名門校の解消というような能力的格差は学校単位としては減少したが、一校内における課程別の格差はかえって増大し、志望者の偏りが著しくなり、実業課程不要論も出て来た。また、乏しい教育予算の枠内で総花的に設備を充実させることも困難であり、産業教育の振興のため、昭和二六年「産振法」が成立したが満足な援助は望めなかった。地域社会や、産業界の総合制に対する不満は以上のような情勢から生まれ、総合制が緒についたばかりの昭和二五年、はやくも非難の声が聞かれるようになった。

本県におけるこのような動きは、二五年頃から地元関係者が七尾高校商工科の独立、松任農高単独設置（第八章の項を参照されたい）の陳情、二六年になって商工会議所から金沢商業高単独設置の陳情があいついで県教育委員会になされ、ついに二七年一月八日の教育委員会で二七年度から小松実高、七尾実高の分離を決定した。二八年は本校、二九年に七尾農高と引き続き分離または転化が決定して行き、ごく一部をのぞいて県内の総合制

は崩壊した。

年度	分離または転化した高校	母体高校
二七	小松実高	小松高（分離）
	（定）小松城南高	
	（定）金沢中央高	二水高（分離）
	七尾実高	七尾高（分離）
	（定）七尾城北高	
二八	松任農高	松任高（転化）
二九	七尾高	七尾実高（分離）
		小松実高（農業課程廃止）
三一	柳田農高	柳田高（転化）
	宇出津水産高	宇出津高（名称変更普通課程の定員減）
三四	金沢商高	堇台高
		二水、桜丘、泉丘高（商業課程廃止）

小学区制の解体・共学制の後退

昭和二五年には全国三四府県にわたって実施された小学区制は年々減少し、三〇年にはわずか七県、中学区制は二五県となり、全国的に大学区制の傾向が顕著になって行った。本県では、二八年に本校が農業高校に転化したため、必然的にこの区域内の普通課程や商業課程への希望者を金沢などへ進学させなければならなくなり、通学区域を変更することとなり、これが小学区制解体の直接の動機となった。また共学制は二七年頃から全国的に後退が始まった。本県でも、旧制中学が高校になったところでは男子が多くなり、旧制高女が高等学校になったところでは女子が多くなるという傾向が現われた。大学進学の場合の男女の志望の違いや、就職の場合の職種の選択の仕方が男女で違うということもあるが、共学制後退の直接の契機になったのは総合制や小学区制の解体にあるといえよう。

二　本校の転化

農業教育の危機感

本校の前身である松任農学校は全国でも最古の歴史をもち、農業教育の名門校として自他共に許していた。生徒は石川郡を中心にして全県にひろがり、農家はもとより農家以外の有力者の子弟が集まり、卒業生は県内各階層にわたって活躍していた。新制中学が発足した昭和二二年度は約八九〇名、五つの科を設置していた。二三年新制高校が発足した時は、これらの科を統合して農業課程とし、これまでの科は専修のコースとなり、高校再編成の行われた翌二四年は普通課程約三四〇名、商業課程約四〇名、農業課程三五九名、更に二五年度は、普通課程約五三〇名、農業課程約二三〇名、商業課程約八〇名、と農業課程の普通課程に対する割合は激減し、このままに放置することは農業教育、ひいては農業の将来に暗雲を投げかけるものとして憂慮されたのである。単独農高として設備を充実し、農業に専念出来る環境づくりを作るべきだ。という声が盛り上った。

松任高校の終焉

昭和二八年四月、松任高校の生徒募集を停止し、松任農業高校が誕生した。門柱には黒々と新校名を書かれた標札がかかげられ、新しい校名の下に希望に胸ふくらませて新入生が入校した。在校生達は矢張り後輩として彼等を暖かく迎え、入学式の翌日の四月九日従来通り対面式を行った。翌年も同様であった。陸上競技大会、松高祭、運動会は盛大に行われた。かくて三〇年三月第七回にして最後の卒業式が終り、全日制普通科一一四名、農業科六四名、農林工学科五四名、農芸化学科二四名、商業科三八名、定時制普通科中心校八名、同美川分校一〇名、定時制農業科一八名が巣立って行った。

第八章　石川県立松任農業高等学校

第八章　石川県立松任農業高等学校

第一節　本校の成立

一　成立の経過

独立設置運動　総合制高校が実情にあわない幾多の矛盾を含み、特に実業教育振興上障害があるとの観点から各界の不評を買い、実施の当初から改編の動きが生じることになった。本県では昭和二四年の末、宇出津高校の水産学校設立の陳情、二六年の小松高校より商工部分離独立の要望など相次いで実業高校の単独設立の要望となって現われた。

このような動きは、本校では二五年に農業短大設立運動（第二節参照）として始まった。そして二六年、短大設立運動が崩壊し、専攻科設置（第二節参照）と本校の独立設置運動へと転向した。

二六年一二月一七日、石川郡自治公会堂で石川郡町村会の定例会議が開かれ、松任農業高等学校設立期成同盟会が誕生した。その組織は次のようであった。

会　長　林　孫吉郎
副会長　正見　二郎　古田　五月

常任委員　中島　栄治　宮田　官　任田　市平　福田　三次　庄田　弘之　吉田　源治
藤田　彦市　朽木定次郎　荒木　徳雄　中田　栄寿　山田　秀喜　末田　鉄一
松野　徳三　松原　助治　北市　永作　倉重　芳嗣　樫野　一治　北村　敦丸
松下　与一　玉田　秀弥　宮本　清松　安達　滝雄　荒木　与逸　中野　義雄
山腰　茂雄　長山　定雄　木津三之丞　古源　栄美　灘波　徳三　松原　一秀
今井　豊　毛利　義男　北田　助次　池田　音　宮野　弥吉　仲川　朝慶
橋本　吉郎　黒川　孝二　山森　敬三　山原　七郎　山崎　賢一　加藤　祇
顧問　笠森　伝繁　浜上　耕三　谷本与三次郎　今西　恒　杉原　杉善　中村　清人

同年一二月一九日、第一回の会合がもたれ、設立の促進が画策された。この中にあって中心的な役割を果たしたのは、松任農業教育振興会と石川郡町村会であった。

しかし、この会の前途は安易なものではなかった。たとえば、既存の松任高等学校に対して、当時の校長や普通科教諭の立場を考慮して、外郭団体だけで運動を推進しようとした意図も、農業教育振興会の名を借りた旧松任農学校同窓会が、明石校長の排斥運動を行なっているというわさとなってあらわれるという予期せぬ支障もあった。また、この運動にとって一番困窮したのは対松任町との関係であった。松任町においても、松任高等学校の農業課程を独立させて、農業高校を一校設置する案に対して、基本的には賛成なのであるが、それに付随して生じる普通高校の廃止には強い反対があった。それは郡下の小中学校長や子女の進学先を憂うる父兄達も同様であった。当時の町財政では、松任町に普通高校と農業高校の二校は実現不可能だったのである。そこで期成同盟会でもこのことを考慮し、農業高校独立設置と普通課程進学志望者の便宜を図った学区制変革の要求を、柴野

和喜夫知事、大河良一教育長に強く働きかけた。

松任農業高校の発足

昭和二七年一二月一三日に高等学校再編成計画・設置課程変更の件で臨時に教育委員会議が開かれ、松任高校は昭和二八年度から農業課程だけの学校として、松任農業高等学校と改称することを四対三で決定し、設置課程は農業課程・農林工学課程・農芸化学課程・農業経済課程・家庭課程の五科が決定の運びとなった。もちろん、現存の普通・商業・家庭課程の生徒の卒業するまで（昭和三〇年三月三一日）は松任高校を存続させることになった。さらに同日、懸案の学区制度改革案が審議された。第二学区の金沢市内における四高校の選抜方法が中心議題になって論議が行われたのであるが、結局五対二という採決で、小学区制から中学区制に切り替えることに決定した。

第一学区　（加賀市・江沼郡・小松市・能美郡）
　大聖寺高・小松高・小松実高
第二学区　（石川郡・金沢市・小松市）
　松任農高・鶴来高・泉丘高・二水高・桜丘高・辰台高・津幡高
第三学区　（羽咋郡・鹿島郡・七尾市・鳳至郡・輪島市・珠洲市）
　羽咋高・富来高・七尾高・七尾実高・七尾農高・穴水高・輪島高・宇出津水産高・柳田農高・飯田高
特別学区　（全県）
　県立工業高・金沢市立工業高

農業に関する課程	農業科	一〇〇名	
	農林工学科	四〇名	
	農芸化学科	四〇名	
	農業経済科	五〇名	
家庭に関する課程	家庭科	二〇名	

本校は第二学区となったが、農林工学・農芸化学・農業経済課程については全県一区となった。四月一日より松任高等学校

の募集を停止し、石川県立松任農業高等学校として新しく発足し、前掲のような定員により志願者を募集した。

四月八日、農業科一〇〇名、農林工学科四〇名、農芸化学科三六名、農業経済科四八名、家庭科一三五名に対して、金子信一校長心得より入学の許可があり、ここに、新しい歴史と伝統を築くべき第一期生が誕生した。

飯倉校長の着任

新しい農業教育の開拓にはむしろ教育に経験のない農業関係人ということで、県福祉事務所長飯倉薫が選ばれ、六月、初代校長として着任された。



初代校長　飯倉薫

明治三九年一〇月二日、金沢市水溜町に生まる。昭和九年北海道帝国大学農学部農業経済科を卒業。昭和一一年北海道庁農林主事補、昭和二四年羽咋地方事務所長、昭和二七年県福祉事務所長を経て、昭和二八年六月、石川県立松任農業高等学校長兼松任高等学校長となる。同三一年三月、病気のため休職。趣味狩猟・スポーツ・絵画

明治九年以来の伝統を受け継ぐ本校は、単に伝統の中に埋没することなく、新しい躍進を遂げなければならない。外面温厚で、茫洋とした氏は、内部に鋭利な批判精神と、創造の情熱を秘められ、一歩一歩本校発展の礎を築いていかれたのである。

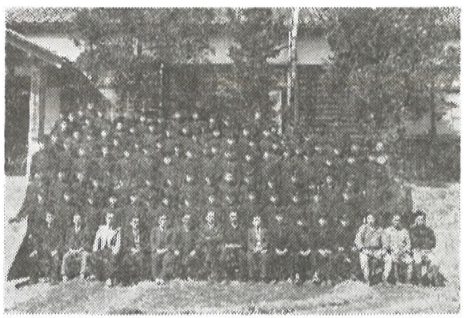
伝統はたしかに尊重されねばならぬ。
しかし単に過去に支配され、過去と共に生きるものであってよいものであろうか。即ち価値判断の基準を現存のものにおき、それのみ維持し、保存しようというものであってよいものであろうか。然らば何故なれば——。
伝統こそ進歩、創造の歴史であり、進歩、創造こそ新生松任農高の生命であるから。

飯倉　薫

二　小松実高農業部の併合

小松実業高校の独立　昭和二二年から始まった新学制により、県立小松農学校は昭和二三年四月から県立小松農業高等学校として発足したが、いわゆる「高校三原則」の徹底の上から、小松実業高等学校とともに小松高等学校に統合され、二四年四月から再発足した。しかし、総合制に対する批判から、二七年一月の教育委員会において、二七年度から小松・七尾両市に実業高校を創設することが決定され、小松高校の工業・商業・農業・家庭の課程を串町に分離し、小松実業高等学校が独立復活した。

農業部の廃止　しかし、設置後わずか二ヵ月しかたたぬ昭和二七年六月一四日、県教育委員会は、農業課程のある校舎に合併したらという県の意向を検討したが、付属試験田約一町歩の点が困難となり、これを松任高校に統合してはという方針を打ち出した。これに対して小松市教育委員会や学校側は猛烈に反対し、農業科ＰＴＡも翌一五日に移転反対協議会をひらき、今後も強く反対運動をくりひろげることを決めた。


小松実高農業部解散記念（昭29.3）

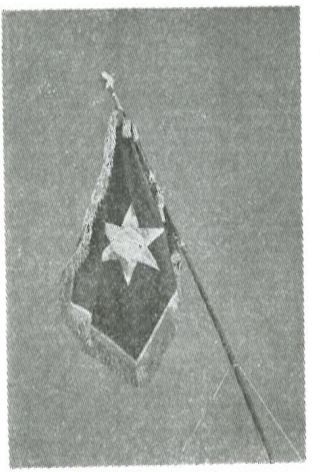
昭和二九年になると、県の財政緊縮から小課程の改廃統合が進められ、小松実業高校農業部の廃止も余儀なくされた。これによって、在学中の農業部の生徒のうち、その年に二年生になるものは、三一名が松任農業高校へ、一名が県立工芸高校へ転学、実高・商業科へ一二名、電機科へ一名、機械科へ一〇名、紡績科へ三名が移った。また、三年生になるものは、四七名が松任農業高校へ、二名が小松高校普通科へ、一名が小松城南高校へとそれぞれ転校した。これは、農業部廃止という特別な場合であるため、生徒の希望通り受け入れたいという教育委員会の態度によるものだが、移転改廃反対運動を推進していた人

達の努力の結果によるものでもあろう。

三　発足期の農高

校章・校旗・校歌

松任高校が存続した昭和三〇年三月まで、校章は松任高校のものを引き継ぎ、卒業を待って新しい校章を制定した。本校は松任農学校の後継者として、その校章であった「六星」を用い、中心の「農」に代って「高」を配した。校旗は松任高校の校旗の生地を再び染め直し、校章を刺しゅうした。地色は紫紺である。松任高女より三代に亙って受け継がれたことになる。校歌は川口久雄作詞、高田信一作曲の松任高校校歌「青雲の……」がそのまま受け継がれた。



校旗

制服と襟章

男子制服は詰襟のいわゆる学生服に校章を押したボタンをつけ、帽子はあごひもなし二条の白線をつける。女子の制服は冬服、合服、夏服の三種とされた。

服装

服装は校の内外を問わず、常に端正でなければならない。型、色ともに普通の学生服が良いので、華美なものや、ひと目を引くものはさけなければならない。

□服装の基準

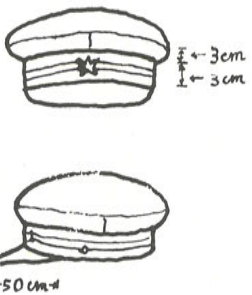
男子　黒または紺の詰襟とし、所定のボタンをつけ、上着の左襟に襟章をつける。

学帽およびズボンは図のようなものであること。（学帽は購買部扱いの型のものとする）あごひもを取り、白線（二条）











は縫いつけておくこと。耳章はその位置につけておくものとする。

女子　黒または紺のサージ、セーラー型でカラーとカフスに白線を三本入れる。ネクタイは黒の三角布、バッジは左胸ポケットの上に着ける。スカートは膝のかくれる程度とし、スラックスの場合は黒または紺のサージで、裾巾は二〇センチを限度とする。

夏季（六月中旬～九月中旬）はブラウスを、中間期（五月中旬～六月中旬および九月中旬～一〇月中旬）はウェスキットを着用する。ブラウスは白ブロードで七分袖または半袖とし、ウェスキットは黒または紺サージを用いるものとする。

□シャツ・ブラウス・ズボン

男子は襟付きシャツ、または開襟シャツとし、女子は制服のもので、いずれも白色のものとする。色もの、柄もの、レース使用のものなどは認めない。女子は冬期間スラックスを使用することは認められる。マンボ型のズボンは禁ずる。シャツ（ブラウス）を着用したときは、ズボン（スカート）の内側に入れておく。

□防寒具

型・色（女子は紺）ともに学生らしいものであること。オーバーやコートの類は少くとも膝頭まであるもの。トッパー（女子）、ジャンバーは認めない。防寒具（手ぶくろ、首まきを含む）は授業時間中に許可なく使用してはならない。

□靴下

女子のストッキングは黒とする　ソックスは男女とも黒色で華美でないものがよい

□頭　髪

男子は丸刈りであることが望ましい　女子はパーマネントをかけないこと。

以上に示された服装容儀以外の異装をなす場合は事前にホーム主任または生徒課に願い出て許可を得なければならない。

校章が制定されたと同時に各学科の略称と襟章が作られた。略称は、各学科の英語名または関連ある語の頭文字をとったのである。また襟章は松任のM字を七宝焼藍色で台とし、その上に学科の略称の文字を白で浮きあがらせた。ただし、女子や専攻科（制服なし）は襟章をつけなかった。

昭和三〇年～五〇年の学科及び略称

農業科（Agriculture）―A、農林工学科・農業土木科（Technical）―T、農芸化学科・農産加工科・農産製造科・食品製造科（Chemistry）―C、農業経済科（Echonomy）―E、家庭科（Home economics）―H、定時制（Part-time）―P、専攻科（Genereal course）―G、農林科（Forest）―F、畜産科（Zology）―Z、造園科（Landscape gardening）―L

施設設備の整備と拡充

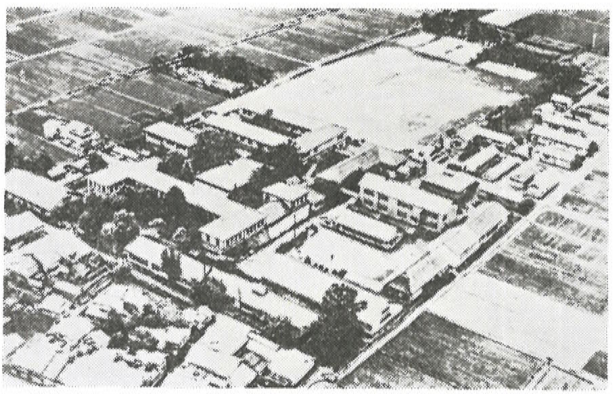
二八年に各学科の整備計画が出来たが、県は財政が困難なため実現は見送られ、わずかに鶏舎が完成しただけであった。この年には、旧寄宿舎二階のミシン室を運動場側一階の二教室に移転拡張し裁縫（被服）室とした。

二九年から三〇年にかけて各種の整備がなされた。主なものをあげると次のようであった。

二九年パステライザー三斗式(五〇万円)が購入され、始めて牛乳の校内販売が始められた。三〇年運動場西側の旧施設をこわし、畜産関係棟が完成した。延建坪一五〇坪平家建、総工費約三〇〇万円、牛房室、乳牛産室、ボイラー室、飼料調理室、飼料倉庫、肉加工室、乳加工室を設け、サイレントカッター、粉細機、ルートカッター等の機械を装備した。この棟の完成により、従来の畜産研究室および畜産関係教室を専攻科教室および農林工

学科、研究室、作物研究室とした。また運動場南西端に豚舎、羊舎が完成した。

温室、農場管理室南側に野菜温室、ぶどう温室、花卉温室が完成した。花卉温室は三〇坪、小さいが冬季暖房用ボイラーを設け、窓は連結開閉式、北陸一を誇るものであった。



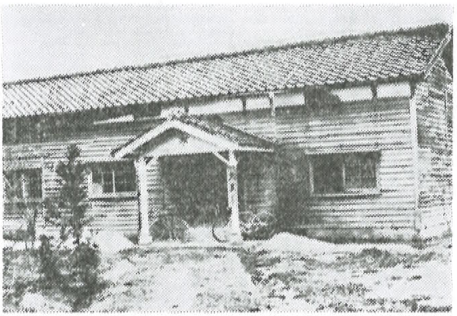
旧校舎全景

製図教室　従来の畜産関係棟を北側に増築した。二段窓により採光をよくするとともに、螢光燈を設け、また映写装置も設けた最新式のものであった。

調理室に付属する試食室を改装して、新型の厨房セットや棚を備えた。また、農場宿泊室・運動部部室を改装して、ミシン室・家庭科教室を設けた。

その他　自転車置場を、控室と第一体育館の廊下わきに、洗濯室・調理室横の通路わきに、第二体育館西側にそれぞれ増設した。また三一年には老化していた放送施設を県費二〇数万円で新設し、放送室を図書館前新聞部室よりもとの職員室内体育用具室に復旧した。

寄宿舎の設置　通学区域の改編により、本校の通学区域がひろがると、寄宿舎の必要性が生じ、昭和三〇年一〇月一七日の育友会の総会で、寄宿舎の設置が議決された。たまたま、一町一三ケ村組合立であった伝染病隔離病院が石川郡中央病院内に統合されたため、その管理棟の無償交付を受け、寄宿舎「北星寮」として



寮　星北

若宮神社寄りに移築改装した。一二月二八日に工事は完了し、翌三一年一月八日、第三学期の始業とともに、始めて寮生一七名を収容した。吉村喜彦教諭が舎監となった。

その後、五月の育友会総会において、追加工事の承認を受け、工費約四〇万円で、玄関・厨房・食堂・水道施設等の改修を行ない、七月完成した。収容人員は一六名、平常は寮生は一〇名位であるが、冬季は遠方の通学生が入寮し満室となる。費用は四一年三月には入舎費一、〇〇〇円、舎費（月額）四、五〇〇円であった。四一年に九十周年記念会館が建設されるまで存続した。

寄宿舎規定は三一年一月九日から施行された。

寄宿舎規定

第一条（設置および管理）本校に左記の寄宿舎をおき学校長の命をうけ舎監これを管理し舎生を監督する。

男子寄宿舎　松任町字布市町

第二条（目的）寄宿舎は自宅から特に通学困難な生徒のために設け生徒相互の協力により責任ある自主生活を営み、舎生の生活の安定および福利の増進をはかりあわせて本校生徒としての品位の向上につとめるを目的とする

第三条（入舎）入舎の時期は原則として毎学年度の始とし入舎しようとする者は所定の手続きにより学校長に願出て許可を得なければならない。在舎の期間はその年度内とし引続き在舎しようとする者は前項に準じその手続きを更新しなければならない。

第四条（舎費の納入）舎生は所定の期日までに遅滞なく舎費を納入しなければならない。

第五条（舎の閉鎖）寄宿舎は長期休業中これを閉鎖する。但し上記期間中において特に必要と認めた場合は臨時に使用を許

可することがある。

第六条（舎生規則）舎生は舎監とともに舎生規則をつくり下記の事項を規定しなければならない。

1　舎生活の自治方針
2　役員に関すること
3　舎内の秩序および風紀に関すること
4　会計に関すること
5　保健衛生および清潔保持に関すること
6　防火防犯に関すること
7　その他舎生の生活に関すること
8　本舎規則の変更に関すること

第八条（規則の承認）前条の規則を認めるとき又は変更するときは、学校長の承認を得なければならない。

第九条（弁償）生徒が舎の建物および物品等を損傷または紛失したときはこれを弁償しなければならない

附則　この規定は昭和三一年一月九日から施行する。

同窓会の統合

石川県立松任農学校六星同窓会、石川県立松任高等女学校清輝同窓会は、総合制松任高校が成立したときは統合されず、新たに発足した石川県立松任高等学校同窓会とおのおの別れて活動していたのであるが、昭和二八年七月一日本校の開校記念式が挙行されたのを期して各同窓会の役員が相謀り、三校の同窓会の結合の努力がなされた。その結果、昭和二八年八月一七日六星同窓会・清輝同窓会・松任高校同窓会は解散し、三校同窓会を統合した新しい「六星同窓会」に発展した。この結成式は旧校舎の講堂で挙行されたが、江沼・能登・関西・関東などから各同窓生が参加し、その人数は講堂にあふれた。その席で

会　長　東田惣外吉（旧六星同窓会より）

副会長　結城房子（旧清輝同窓会より）
〃　飯田照雄（旧松任高校同窓会より）

の諸氏が選任され、役員の選出形式は、今後も、これに習うこととなった。

開校八十周年記念

昭和三〇年は八十周年に当る。そこで、農業教育振興会、同窓会、育友会の合同評議員会をもち、行事について協議した。更に実行委員会へ委員長東田惣外吉同窓会長、副委員長村上作二育友会長、同中島栄治振興会長、増井三吉定時制育友会長）を組織して準備にあたった。

創立記念日は前述の評議員会で審議され、農業高校の開校記念式の行われた日（昭和二八年七月一日）により七月一日と決定した。

八十周年記念行事は予算一四万円で次のように実施された。

一一月一八日　前夜祭
一九日　文化祭
二〇日　八〇周年記念式典、文化祭

一、追悼法会（願念寺）
死亡同窓生・旧職員の霊を慰める。

二、記念式典（講堂）
式辞　東田惣外吉同窓会長
永年勤続職員表彰式　道幸校教諭他十六名、校医・事務助手・農夫・使丁
祝辞　田谷知事・中村教育委員長・長谷川県議代表・郡町村会窪川（事務長）代表・山本（泉丘高長）高校長代表・林（松任中）郡小中学校長代表・西川産振会長・正見松任町長・木戸口生徒会長

三、祝賀会（第一体育館武道場）

直会を挙行。

遠く関西関東からも同窓会員が集まり、その数は六百名を越えた。この記念式にあわせて行なわれた生徒会主催の「松高祭」には、記念式参加の卒業生をはじめ、父兄、付近民など続々と来校し、各クラブ展示会場も食堂も、午後からひらかれた舞踊演劇発表会も、押すな押すなのにぎわいを示した。中でも人気のあったのは、農産物（野菜加工品・肉加工品）即売場でよい売れ行きをみせた。運動場では野球、バレーボール、ソフトボールなどの交歓試合が行なわれた。また校庭のあちこちに、久しぶりに級友と会って思い出を話す和やかな風景を残しながら、盛会裡に幕をとじた。

越の雪　ふみつつ学びしふるさとは
八十路経にけり　弥栄にこそ　　金子　信一

三一年一一月二〇日、「六星だより」第一号が発刊され、八十周年の記念事業に対する寄付者芳名、募金決算書、会員の移動及び会員からの短信を掲載した。以後毎年この刊行が続けられることになった。

竹沢校長の着任



二代校長
竹沢喜太郎

昭和三一年四月、病気療養のため休職された飯倉校長に代って、二代校長として七尾農業高校長竹沢喜太郎が着任された。本校は農業高校として施設は拡充されたとはいえ、校舎はすべて木造であり、生徒数も一学年二学級、全校生徒一〇〇名程度の小規模校であった。

明治二八年九月二三日、石川県河北郡津幡町に生まる。大正五年三月、石川師範学校本科第一部卒業。笠野尋常高小・宇ノ気実業補習学校・米丸尋常高小・石川師範学校各教諭・七塚尋常高小校長・昭和一〇年石川県学務部社会教育課社会教育主事、同一九年、石川師範学校教授、同二〇年、石川県立津幡農学校教諭、津幡農学校長事務取扱、同二二年、県青年師範学校付属中学校主事、同二四年、金沢市立野田中学校長、同三〇年四月、石川県立七尾農業高等学校長を経て、同三一年四月、石川県立松任農業高等学校長となる。昭和三三年三月三一日、退職。

でに使用にたえない程老朽化し、窓ガラスはこわれたまま修繕のいとまもなく、破片は校舎周辺に散乱、伝統に輝く本校に期待をもって着任した竹沢校長も暗然とされたことであろう。早速余暇を見つけてガラス屑拾いや草むしりを始め、学校に出入りの来客に小使いと間違えられたこともあった。この時、本校に抱いた感懐から校舎改築の決意を固められたのである。

本校赴任のため前任校七尾農高を離れるに当り、牛に別れを告げると大きな牛がポロポロ涙を流して見送ったと着任の挨拶に述べられたように、家畜を愛し、朝出勤するや地下足袋にはきかえて畜舎に出かけ、給飼から掃除まで自ら世話をし、さすがきれい好きの豚も恐縮する一方であったという。職員は決裁を頂くために書類をもって校長室に出かけ、順番をついて校長が現われるのを待ったのである。舎外の掃除で草むしりをすると、校長の命でこれを畜舎に運び泥とほこりを洗う。校長はこれを自ら釜に投じて煮立て豚の飼料とされた。しかし、この多忙な日常はやがて、校舎改築運動の渦に巻き込まれて行ったのである。

人間はともすると、自分自身かけがえのない尊い存在であり、自分には他の人の真似のできない力がどこかにひそんでいることに気づかず、案外つまらないものの様に考えがちである。動物の世界にも生存競争はある。しかし動物は劣等意識に悩まされることはない。……中略……己にもやれる。己がやるんだ、こうした気持で内の力をかりたて、前進又前進するとこそ若いものに与えられた特権である。

竹沢喜太郎（昭和三年七月「松高新聞」第三五号）

第二節　専攻科

一　短大設立運動

でに使用にたえない程老朽化し、窓ガラスはこわれたまま修繕のいとまもなく、破片は校舎周辺に散乱、伝統に輝く本校に期待をもって着任した竹沢校長も暗然とされたことであろう。早速余暇を見つけてガラス屑拾いや草むしりを始め、学校に出入りの来客に小使いと間違えられたこともあった。この時、本校に抱いた感懐から校舎改築の決意を固められたのである。

本校赴任のため前任校七尾農高を離れるに当り、牛に別れを告げると大きな牛がポロポロ涙を流して見送ったと着任の挨拶に述べられたように、家畜を愛し、朝出勤するや地下足袋にはきかえて畜舎に出かけ、給飼から掃除まで自ら世話をし、さすがきれい好きの豚も恐縮する一方であったという。職員は決裁を頂くために書類をもって校長室に出かけ、順番をついて校長が現われるのを待ったのである。舎外の掃除で草むしりをすると、校長の命でこれを畜舎に運び泥とほこりを洗う。校長はこれを自ら釜に投じて煮立て豚の飼料とされた。しかし、この多忙な日常はやがて、校舎改築運動の渦に巻き込まれて行ったのである。

人間はともすると、自分自身かけがえのない尊い存在であり、自分には他の人の真似のできない力がどこかにひそんでいることに気づかず、案外つまらないものの様に考えがちである。動物の世界にも生存競争はある。しかし動物は劣等意識に悩まされることはない。……中略……己にもやれる。己がやるんだ、こうした気持で内の力をかりたて、前進又前進するとこそ若いものに与えられた特権である。

竹沢喜太郎（昭和三年七月「松高新聞」第三五号）

第二節　専攻科

一　短大設立運動

総合制松任高校に含まれている農業科に対する希望者が極端に減少するという、農業教育面における憂慮すべき現象が起きてきた。これは結果として、農業後継者が少なくなることにつながってくる。

しかも、二四年に金沢大学が発足したが、農業県石川としては、さびしいことに農学部ができず、農業界をリードする中堅を育成できないという問題まで起きてきたのである。

農業関係者にとって、農業教育が十分でないというもの足りなさから、高校を卒業したものに、さらに、一段と高い専門教育を授けるために、二年制農業短大を設立し、地方の農業研究センターにしようという動きが活発になったのも、将来を考えた結果として当然の成り行きであった。

促進同盟会の結成

この動きがついに、二五年八月二六日、金沢市仙石町の県教育会館で、「石川県農業短期大学設立促進同盟会結成式」をあげるところまでこぎつけ、翌年四月に開校することを満場一致で決議した。ただちに、政府、県、県議会などに猛運動を起こすことになって教育界をにぎわす話題となったのである。

設立期成同盟会の役員には、委員長として県農業復興会議議長の笠森伝繁を推薦し、副委員長として杉野県農事講習所長、田谷県指導農協連合会長、吉本県町村会長、福田石川郡村会長の四氏を迎え、総会は東田松農金沢支部長を座長に推し、会則の決定をみた。

戸田金大学長、森田美大学長、上田女子短大学長、宮下北国新聞社社長、五坪元代議士ら、各界一〇余氏から祝辞と激励のことばがよせられ、盛会裏に終わったのである。

農業短大の構想と設立中止

設立準備会が構想している農業短大は二年制（二学級二四〇名収容）で、七〇年の歴史と日本有数の設備を誇った旧松任農学校の設備を最大限に利用するため、松任高校内に併置し

ここに大学としての機能を充実してゆくもので、新設大学に比べ臨時費はいちじるしく少額にとどまるが、それでも初年分は二、八四七万円、第二年度以降は毎年一、九八五万円を予想している。そのうち、一、四〇〇万円は地元寄付で充当し、他は県費を予想している。短大の学科目として、一般教養科目（九四単位）、専門学科は農学関係（一一一単位）畜産関係（一六単位）林業関係（一四単位）実習（四〇単位）で、旧松任農の実習地のほか、県下の各農業試験施設を利用するもので、教授は一般教養部に三名、専門学科一四名、助教授三一名、助手二三名、講師一三名が予想されており、将来は金大に移管、大学農学部に昇格する夢をいだいた計画であった。

ところで、九月二二日、小松市議会が短大誘致を満場一致で可決し、松任や小松の激しい誘致合戦が展開された。

九月二六日に開かれた石川県農業短期大学設置協議会小委員会で、県側が予算化をしぶり、松任案の一、四〇〇万の地元負担の裏付け、設備、人件費その他の計上費の内容不備が指摘された。また、松任町の財政困難等により、結論として設立問題は白紙にもどし松任側は確実な計画をつくりなおし、むこう一年間の調査期間を設けるということになり、翌年四月の開学は絶望となる事態を迎えた。

この結果、設立期成同盟会を中心とする運動は、運動費の減少と相まって下火となっていった。

以後、県を中心とする短大調査協議会では、二七年四月開校を目標に兵庫県立農業短大や滋賀県立農業短大の調査を行ない、全県下を教場にする案、北陸三県にまたがる案等をつくるなど検討を加えていった。その間、七尾も短大誘致に乗り出したが、結局、学生一人当たり三〇万円、設立には一億円以上が必要であり、当時の県財政ではむずかしく農業高校設立の方がよいという意向で、二六年一二月の県議会で農業短大の設立問題は中止と決定したのである。

二　専攻科の誕生と苦難の道

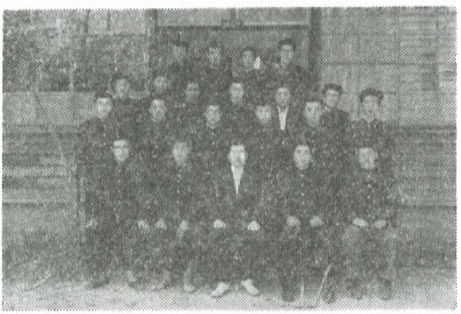
専攻科の併設

新制農業高校の設立を期して組織されていた期成同盟会は、その前身が農業短大誘致のための運動組織であったので、新農高の独立設置を強力に押し進めていくと同時に、短大設立の含みをもった運動であったが、設立がむずかしくなった。そこで、短大にかわるものということから、新農高の独立にあわせて専攻科の併設が推進された。

二七年一二月一三日にひらかれた臨時教育委員会で、松任高校から松任農業高校への切り替えが決定されると同時に、全国の農業高校においては、山梨県立農林高校、福岡県立福岡農業高校、秋田県立金足農業高校など数校しか例のない専攻科の設置が決定される運びにまで進んだのである。しかし、教授陣容・教育課程・金沢大学との関係・入学資格問題・卒業生の資格問題・年限・定員・入学希望生徒の有無等が絡んでなかなか実施されるにいたらなかった。以後、これらの問題について研究協議が続けられ、また、在校生及び卒業生について入学希望調査を行なった。二九年二月八日、県教育委員会から前田学校教育課長、寺西課長補佐、吉野主事らの出席のもと本校でひらかれた専攻科設置研究協議会の最終案をもとに、新年度より専攻科を発足させることにした。

発足が決定されたのが遅く入学試験が行なわれたのは四月一五・一六日で、試験科目は、国・数・英・理・社・総農および面接であった。合格発表は四月二〇日で一六名が合格した。五月一日専攻科第一回入学式が、中谷教育長、難波金大教授等の臨席のもとに挙行された。

入学者の出身校は、松任高校を中心に小松高・小松城南高・泉丘高・羽咋高・輪島高というように全県下にわたっている。



専攻科第一期・二期生

教授陣容は、本校教諭の他に金沢大学、農事試験場などから講師として次の方々が教鞭をとられた。

石井俊之・難波得三・新谷賢太郎・沢田清・近江静雄・熊木義房・木戸睦彦
浅井喜久雄・相内俊雄・佐藤幸平・池屋重吉

二九年の専攻科概要は次の通りである。

1　教育方針

高等学校の基礎の上に、農業に関する学理とその応用とを教授研究し、教養の豊かなる農業指導者を育成すると共に、農村文化の進展に寄与せしめんとする。

2　教育課程

群	教科目	単位数
一般教養科目	英語	2
	人文地理	2
	法学概論	2
	社会学	2
	哲学概論	2
	倫理学	2
	統計学	2
	化学	2
	物理学	2
	経済学原論	2
専門科目	農業協同組合論	2
	応用昆虫学	2
	測量学	2
	農業土木学	2
	作物学1、2	8
	育種学	2
	植物病理学	2
	農業気象学	2
	農政学	2
	農業経営学1、2	4
	園芸学	4
	土壌学	2
	畜産学	4
	肥料学	2
	農村社会学	2
	農産製造学	2
	農業経済学	2
	生物化学	2
	栽培学実験	2
	土肥実験	2
	生物化学実験	2
	農場実習1、2	4
	卒論	4

県下一円から入学してきた生徒達は、短大・大学なみの学生生活を頭に描いており、卒業後の資格についても短大卒程度のことを期待していたのであったが、何ら資格がないということが判明すると、一年終了とともに退学したり、農事試験場に併設の農業講習所にかわる者などもでてきた。入学者も二年目から減少、四年目からは激減していった。

一年制へ移行

そこで、専攻科不振の原因・専攻科の今後のあり方・教育課程の内容・専攻科に魅力をもたせるための方法・生徒・父兄・地域社会の要求にこたえる方法などについてしばしば、校内で協議がもたれ、時には、県教育委員会から寺西、張江、吉野氏らを招くなどして問題の打解を図ろうとした。しかし、これという名案もなく、このままではつぶれてしまうという恐れもでてきたため、何とか急場をしのぐという意味で、三四年四月よりいままでの二年制を一年制とした。一般教養科目を大幅に減らし、農業経営科目に重点をおいて進めていくことにした。しかし、依然として停滞は続き、三九年まで入学者数は一ケタ台という状態であった。極端に生徒数が少ないということは、すべての面に支障をきたした。専攻科専任教諭が配置されない。県から予算をもらおうにも相手にしてくれない。農業教育振興会や育友会からのわずかな補助では講師も十分に頼めないなど多くの問題があった。

そのころの生徒の一人は次のようにいっている。

> 全日制の授業にもぐりこんで講義を聞いたり、全日制の生徒と一緒に実習を行なったりで、そのうち学校にきても図書館で自習することもしばしばあった。

このような専攻科の暗黒時代ともいえる時期に、多大な情熱を注ぎこみ、専攻科の礎を築いたのは、吉村喜彦北井又衛、盛田義弘、本田政夫教諭らであった。

三六年の専攻科概要は次の通りである。

1　教育目標

高等学校卒業後農業経営に従事しようとする者に対し、農業経営の合理化に必要な学理と経営技術を実地について研究させるとともに、農村人としてより高い教養を身につけさせることにより、将来農村の中堅的、指導的人材を養成することを目標とする。

2　教育方針

卒業後、直ちに自立農業経営者および農業共同組織等の運営担当者、指導者として、農業と共に生きる精神陶冶と農業の合理化により農村を豊かにしようとする信念の確立と合理的な経営技術を研究把握せしめ、更に農業共同化の推進に関する基礎的理論や実際を体得せしめるにある。従って、教科および実習も方針に副うように編成し卒業後活動せんとする農村社会の実態や自家経営の実態を把握させ経営技術を体得せしめるため県内外の視察実習、研修実習および自家経営実習を行なうほか、専攻制研究に相当多くの時間を費やすものとする。

3　教育課程

教科目	単位
栽培汎論	3
畜産〃	2
土壌肥料学	2
作物保護学	2
農業経営学	3
農業経営演習	2
農村社会学	2
農業経済学	2
農業政学	2
農業協同法論	3
簿記学	3
特別講義	2
自家経営実習	2
経営専攻	3

三　専攻科の充実・発展

自営者養成

三五年から高度成長経済の時代に入り、それを受けて農業基本法が制定され、自立農家の育成がうたわれた。農業教育の面では、自営者養成の強化が叫ばれ、三九年以降、国の援助によって、寮をもった自営者養成高校が整備、拡充されることになった。

わが専攻科では、それ以前に自営者養成を打ち出してはいたが、十分なものとはいえず、三六年の教育課程の変更を経た。三九年、国の施策に便乗する形で、自営者養成教育の充実・強化を図るため、再度、教育課程を変更した。それはHPの指導、経営診断および実習体験を重視していくことであり、特に全国各地の先進農家で約一ヵ月間、農業技術の体得や農家生活の体験をする県外実習を大黒柱にするというものであった。

三六年頃から漸増の傾向をみせていた生徒入学者数は四〇年には一五名と倍増し、さらに、四一・四二年には三〇人、二九人と一挙に定員を一〇名も上回る盛況となってきた。以後、募集停止が行なわれる四六年まで毎年定員近くの入学者があった。

入学・卒業状況

入学年度（卒業年）	入学者数（卒業者数）	入学定員	修業年限
29(31)	16 (15)	50	2年
30(32)	8 (3)	50	
31(33)	12 (9)	50	
32(34)	2 (0)	20	
33(35)	2 (2)	20	
34(35)	3 (2)	20	1年
35(36)	3 (1)	20	
36(37)	5 (3)	20	
37(38)	5 (5)	20	
38(39)	6 (5)	20	
39(40)	7 (6)	20	
40(41)	15 (15)	20	
41(42)(43)	30 (7)(20)	20	
42(44)	29 (27)	20	2年
43(45)	22 (19)	20	
44(46)	14 (14)	20	
45(47)	15 (15)	20	
合計	194(168)		

グリーンクラブの誕生と再び二年制へ

このような生徒増という明るい情勢に、県としても捨てておけず、専攻科行事の予算化を考えざるをえなくなってきた。しかし、最後まで全日制高校のように制度化されたものとはならなかった。

新校舎に移転した四〇年には、旧全日制農場のほかに専攻科独自の経営農場が設置され、いままで農高生に肩身の狭い思いをしながらやってきた実習・実験の問題も解消された。

さらに同年、専攻科卒業の同窓生によるグリーンクラブという研究会的組織が誕生し、側面から専攻科の発展を援助した。

グリーンクラブの概略は次の通りである（関係分のみ）

目的と事業

第八条　本会は会員相互の親睦と研修を図り、母校専攻科の発展に寄与することを目的とする。

第九条　本会は前条の目的を達成するために左記の事業を行なう。

一、講演会、講習会及び研究会の開催
一、視察見学の実施
一、健全なる農村社会生活・文化生活の確立
一、その他本会の目的達成に必要な事項

専攻科の充実と共に、一年間では十分な教育が行なえないという声が内外から起こり、石川県農業教育振興会（会長・吉本作次）、松任町、専攻科生徒の父兄、松任農業高校などの数回の陳情の結果、四二年四月より二年制が復活することに決定した。

また、この時から専攻科業務のみに専念できる専攻科専任教諭がおかれることになり、橋本勝衛、中村喜彰がこれにあたった。

さらに、専攻科教育を非常に重視した橋本龍太校長を迎えて、専攻科はより一層の飛躍をとげたのである。

同年七月六日、専攻科のＰＴＡである専攻科振興会が一四年目にして、ようやく結成された。（初代会長は松農出身の清水俊彦）その席上での校長挨拶をみると

一　専攻科教育を、本校教育の中心としていきたい

二　百周年記念までには、農業高専の設置に努力したい。

と、意気込みの程がうかがわれる。

校長参加の巡回指導

夏季休暇に入った七月二四～八月三日にかけて、三名の教師が専攻科充実の参考資料を得る目的で、東北・中部地方の専攻科、農業短大等の視察旅行をジープを運転しながら行なった後、一二月一五日～二三日にかけて、四国・中国・東海地方へ冬季県外派遣実習巡回指導及び調査、見学旅行を実施し、校長自らがジープに乗り込んで陣頭指揮を行ない、実習地における生徒の実態を把握するとともに生徒を激励したのである。

一人で激しい労働をしながら他人の中での生活を、約一ヵ月間も体験するのは、ほとんどの生徒が初めてで、生徒の多くは、巡回指導の教師の来る日を待ち望んでおり、教師の顔をみると〝ホッ〟とした表情をみせたものである。

この時に、校長までが来てくれたということは、実習生徒に何十倍の勇気を与えたことであろう。（四四年の北海道巡回指導にも校長は参加した。）

他県の生徒の中には、つらくて逃げ出した者もいたらしいが、わが専攻科には、どの年にも、この様な生徒は一人もいなかった。真面目に努力した生徒が多く、受け入れ先農家の評判は良かった。現在も親戚づきあいをしている者がかなりあり、中には、新婚旅行で研修農家へ行き花嫁に実地教育して見せた者もいる。

県外派遣実習が終ったあとは研究会がもたれ、各自レポートにまとめあげ、後輩の参考になるよう現在でも保管されている。



精農家のH・P指導

ホームプロジェクト

予算額も十分とはいえないまでもかなり増加し、四五年頃には約二〇〇万円くらいとなり、当初、育友会等から一、二万円くらいもらっていただけということがうその様であった。このため、教授陣も短大並みに充実してきたのである。一般教養科目では、大学教授、助教授クラスを主体に、専門科目では、専攻学習を徹底し、自営に密着した〝わが家の経営改善をいかに図るか〟を目標にして学校での実習は廃止し、HPの経営実習一本槍とした。そのために、野菜・水稲・花・畜産・果樹等の部門別にそれぞれ専門の精農家、試験場技師、普及員等が巡回指導を行なうという、きめのこまかい体制も整えることができたのである。加賀地方一円の生徒のもとを、巡回指導するためにはどうしても、自家用車の必要性がありながら予算上の制約から県の払い下げジープやレンタカーを駆使しての苦心の指導であった。

四四年の専攻科の概要は次の通りである。

1　教育目標

高等学校卒業後、農業に従事しようとするものに対し、合理的農業経営を修得させ、農村生活の向上を推進しようとする。たくましく清新はつらつとした農業者の育成を目標とする。

2　教育方針

教育目標達成のため、あらゆる農業指導機関および地域社会と緊密なる連けいを保ち、経営理論の研究、県内外の視察委託実習および経営実習を通じて

(1)　農業者としての自覚を深め、農業近代化の意欲と実践力を養う

(2)　農業の企業化に必要な経済的知識および能力を養う

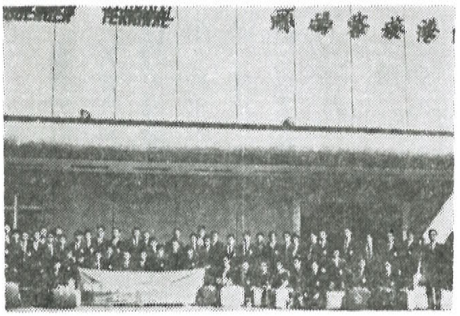
(3)　地域農業の組織化、共同化および農村生活改善の推進者としての資質向上を図る。

3　教育課程

群	教科目	単位数
一般教養科目	哲学	2
	倫理学	2
	政治学	2
	歴史学	1
	経済学	2
	法学	1
	農業地理学	2
	文学	1
	時事問題	2
	農業統計学	1
	生物化学	2
	体育	2
専門科目	農業経営学	4
	作物生理生態学	1
	農薬時論	1
	農業機械	4
	農業簿記	2
	農村社会学	2
	農民心理学	1
	農村衛生学	1
	農学実験	4
	委託実習	1
	ホームプロジェクト	16
	専攻	8
	卒論	2

資格試験

専攻科の特徴の一つに、資格試験を受けさせるということがあった。ブルドーザーや農用トラクター等は、特別講習会から免許取得まで徹底して行なった。また、毒物・劇物・危険物取扱者試験についても、非常勤講師として来校していた農業試験場の川瀬英爾先生の熱心な指導で、ほぼ全員が合格した。この資格試験を取るということは、「その時、それほど大事には思っていなかったが、現在になって非常に役立っている。」と卒業生の多くは語っている。



台湾旅行

海外旅行

専攻科を語る時、一言ふれざるをえないものに二度の海外旅行がある。

農業自営者は毎日、土や作物・家畜を相手に汗にまみれる生活を繰り返しているのであるが、その重労働性や農場・畜舎に縛られるということから、どうしても視野の狭さを克服しにくいのである。ともすれば、国内の政治、経済、その他の社会動静さえ十分に把握しきれないうらみもある。国際経済時代を迎えて、農業もその例外でありえないとすれば、これからの農業自営者は時代を先取りするくらいの思考力、視野の広さの必要性が痛感されるのである。

このようなことをふまえてみれば、実習的旅行でなく観光的旅行であったとしても、海外旅行ブームがまだ到来していない時期に、殻を破って外に出ていくことは非常に勇気のいることであり、それを敢えてやったことに大きな意義があったと言えるであろう。

第一回は、四三年一二月一四日～二二日にかけて行なわれた台湾旅行で、橋本、中村教諭を引率者として五三

名の参加があった。

第二回は、四七年一月八日～一三日にかけて、肥田教諭引率のもと、一一名の参加者によって行なわれた香港マカオ旅行である。

外国を見ることによって、また外から日本や日本人を考えてみることによって、その良さ、悪さを再認識したということを最大の収穫に、数々のチンプレーとともに楽しい思い出として参加者一同の胸にいつまでも焼きついているのである。

農業特別専攻科

わが専攻科が、いかに充実した存在であったかということは、次のようなことでも証明されるのではないかと思われる。

文部省は、「農業高校を卒業しても、就農した者が自営者として定着するまでの精神面・技術面・経営面における不安を解消するため、卒業後、ひきつづいて高校の指導を受けていることが多い。」（農業年鑑）この事実を重視し、これに答えるため、四五年より農業特別専攻科を毎年、数校ずつ、約一億円の予算で設置していくことにした。その当時、全国に専攻科の数は十指に満たず、最も整備されていたのが本校の専攻科であった。それで、専攻科を農業特別専攻科のモデルにしたいということで、全国校長会で詳細な内容報告がなされた。全国農協会からも調査団が来校し、また、四五年設置の千葉県茂原農業高校、四七年設置の富山県中央農業高校等からも視察団が来校した。

さらに、四五年一〇月、茂原農業高校で行なわれた第一回農業専攻科研究協議会でも本校専攻科の成果を披歴し、多くの学校に多大の参考資料提供を行なったのである。

このことから考えてみれば、農業特別専攻科の多くは松任ナイズされているわけで、専攻科がなくなった現在

も、その魂は全国各地の専攻科の中に脈うっているといえるのである。

四　農業短大の誕生と専攻科の発展的解消

農業短大設立への道

昭和四三年は、ちょうど〝明治百年〟にあたり、石川県は、単に過去をふり返るのではなく、ここを起点に将来を再検討する年とした。また、記念事業の一つとして、自営農業後継者を育てる「県立農業者大学」を設立する構想を発表した。どのような形が一番望ましいかの検討を目的に、知事の諮問機関として農業高等教育施設設置懇話会（座長・西外居）を設けた。同年一〇月四日の第一回を手はじめに四四年三月二八日まで、計七回の会議と全国八ヵ所の農業関係大学の視察を行なった。同会は「新しい農業に対処する青年に高度の勉強の機会を与えるため県立農業短期大学を早く設置されたい」と、中西知事に答申した。

これを受けて県は、五月三〇日具体的な設立準備事務局を発足させた。五回の委員会が開かれ、同答申を受けて県は、四六年四月、農学科六〇人の定員の農業短大をスタートさせることにした。設置場所については、最終的に、野々市町末松地区となったが、ここに至るまでには、かなりの紆余曲折があった。

簡単にその経過をたどってみると、農村地区にとっては、農業短大は非常に魅力のある施設であることから、奥能登から加賀までの各市町村が誘致運動に乗り出した。

しかし、基本方針である教育・研究・普及の〝三位一体〟を実現するためには、結局、本校舎は金沢周辺にならざるをえないということで、最後まで残ったのは、松任、野々市、津幡町などであり、特に、松任と野々市の

誘致合戦は熾烈をきわめた。

松任町は、四四年六月二五日の町議会で、

一　松任は石川農業の中心地

一　九〇余年の歴史を持つ松任農高が町内にあり、農業教育の〝素地〟ができているので、この地に農業短大を設立すべきである



松任農高の昇格案

石川県農短大　関係者で動き活発

誘致決議、市制施行とからむ

開学目標は46年春

設立準備小委できめる

同窓会、立ち上がる

欠陥車トラの巻

の理由から農業短大誘致を満場一致で決議した。

わが校でも農業短大設立の構想が出ると同時に誘致が叫ばれ、四四年六月二六日、六星同窓会緊急役員会が開かれた。その席上で、

一　松任は県下の中心地

一　九四年の歴史をもっているが、近年になって農業のレベルが上がり、高校程度の農業教育では満足できない

一　同じ歴史をもつ札幌農高は、すでに北大農学部に昇格している―

などの理由から、農業短大に昇格させ、その代わり、同短大の一部に現農業高校を付属高校として存続させる方向で強力に働きかけることにした。

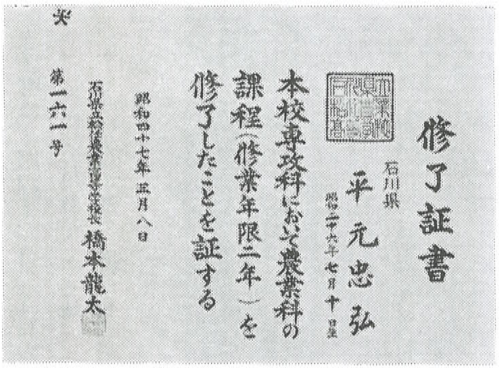
松任町も、この案にもろ手をあげて賛成し、農業高校周辺の水田、約一万平方メートルを買収、農業短大実習地に当てる準備をした。このように、松任町、六星同窓会が一丸となって誘致運動を展開していったのである。しかし、松農昇格案では、

一　希望にもえた学生に専攻科的印象を与える。

一　実験、研究施設が不十分である。

一　農業高校定員の変更により、その分、他校に配分する必要があるなど高校教育全般に影響を与える。

などの意見も出され、三位一体論を重視した結果、農業試験場や農業講習所の実習地がある野々市町が好ましいという準備委員会の意向により、松農昇格案は見送られたのである。


修了証書

石川県

平元忠弘

昭和二十六年七月十日生

本校専攻科において農業科の課程（修業年限二年）を修了したことを証する

昭和四十七年三月八日

石川県立松任農業高等学校長　橋本龍太

第一六一号

松任農業高校関係者が長年待ち望んだ農業短大が設立されたり、専攻科も使命を全うした上で、発展的に解消されるということは、大いに慶賀すべきことであるというものの、設置場所が松任農業高校の地でなかったことに、痛恨の思いがするというのが、関係者一同の正直な気持ちであった。橋本校長は「文部省の農業特別専攻科設置の声が二、三年早かったら、全国で一番先に指定されることは間違いなかったし、そうすれば、農業短大もできていたか、どうかも、わからない。」というのはこのあたりのことを意味しているものと思われる。

専攻科の終焉

農業短大が開学した四六年四月から、専攻科の生徒募集を停止し、翌四七年三月、最後の卒業生一五名を送り出し、十八年間に及んだ専攻科の門は閉じられた。

総計一六八名の卒業生の多くは、農業自営もしくは農業関係機関・農業指導機関等の農業関係分野で、中堅人として、時としては、リーダー的役割を担いながら縦横の活躍を続けている。すなわち、自営者養成という専攻科教育の精神は、十分に生かされているといえるのである。

以上の点から、いくつかの苦情、批判があったとしても、専攻科の歩んできた方向は、間違っていなかったし、存在価値も十分にあったといえるのである。

第三節　本校の発展

一　馬場町校舎改築

改築運動の経過

明治三五年、石川県立農学校として、総額五万円をもって新築した校舎は、幾千の人材を育成し既に六〇有余年の星霜を経て、石段にまで水が溜るほどの歴史を刻み込んでいたのであ

松任農業高校関係者が長年待ち望んだ農業短大が設立されたり、専攻科も使命を全うした上で、発展的に解消されるということは、大いに慶賀すべきことであるというものの、設置場所が松任農業高校の地でなかったことに、痛恨の思いがするというのが、関係者一同の正直な気持ちであった。橋本校長は「文部省の農業特別専攻科設置の声が二、三年早かったら、全国で一番先に指定されることは間違いなかったし、そうすれば、農業短大もできていたか、どうかも、わからない。」というのはこのあたりのことを意味しているものと思われる。

専攻科の終焉

農業短大が開学した四六年四月から、専攻科の生徒募集を停止し、翌四七年三月、最後の卒業生一五名を送り出し、十八年間に及んだ専攻科の門は閉じられた。

総計一六八名の卒業生の多くは、農業自営もしくは農業関係機関・農業指導機関等の農業関係分野で、中堅人として、時としては、リーダー的役割を担いながら縦横の活躍を続けている。すなわち、自営者養成という専攻科教育の精神は、十分に生かされているといえるのである。

以上の点から、いくつかの苦情、批判があったとしても、専攻科の歩んできた方向は、間違っていなかったし、存在価値も十分にあったといえるのである。

第三節　本校の発展

一　馬場町校舎改築

改築運動の経過

明治三五年、石川県立農学校として、総額五万円をもって新築した校舎は、幾千の人材を育成し既に六〇有余年の星霜を経て、石段にまで水が溜るほどの歴史を刻み込んでいたのであ

る。その間に増設や一部改修がなされたが、今や修繕の余地なく危険校舎として、幾度か全面改築の陳情がなされるようになった。

昭和二八年五月、校舎改築期成同盟会が組織され、陳情や請願が行われ、七月の県議会で採決をみたのであるが実現には至らなかった。次いで、三一年三月には校舎改築促進同盟会と改められ、六星同窓会・育友会・農業教育振興会が一体となり、陳情請願をし、県議会でも再度採決をみたにもかかわらず実現をみなかったのである。ここにおいて、竹沢校長は、同窓会・育友会・振興会・松任町議会・区長会・単位農協長ら各団体を結集し、一本化した組織を結成することを決意し、以後数回の準備会を経て三二年一一月、新しい期成同盟会の結成大会を開催する運びとなった。

大会には、経過報告に続いて規約・決議・人選などが行われた。会長に町議会議長本保斉治、副会長に副議長水野博次、六星同窓会長東田惣外吉、育友会長北田助次、農業教育振興会長中島栄治が選ばれ、宣言文が読み上げ採択された。そして最後に「我等は松任農業高等学校校舎改築に関し、これが実現にあらゆる協力を惜しまず、昭和三三年度に着工し速かにその完成を期す」と決議されたのである。

松任町全戸にビラを配り、町内各所にポスターをはって町民を鼓舞し、各層の人々をこの運動に共鳴させ、育友会は改築資金として年額一〇〇万円を積立てるなどの努力をしたにもかかわらず、県当局の腰は重く三三年度中に着工完成という計画は遅々として進まなかったのである。田谷充実知事のいう「石川県の農家は平均八反の耕作面積であり、これを次の世代に平等に分けていたのではママがくわれん。国際商品化され、米国その他外国の米・麦と競争出来るか。……米の統制撤廃も遠くはない。大日ダムを作って、オッサを電気屋に変えて、裏作でママを喰おう、というが皆さんの拍手を得られん。流水客土の問題も強く主張しているが、土が年寄になって

いるというのに、反対される。皆さんの農業に対する感覚にズレがありませんか。この感覚を捨ててもらわんと学校建てて、学校出ても誰も百姓にならん。……石川県は教育費に三六%を使い、北陸三県では一番だ。戦後はずっと高校は建てておらず、自分は赤字を克服して、七年計画を立てて徐々にやっていくつもりだ。今二水高校をたてているが、次に金沢工業の予定である。……」また「松任農業高校だけが老朽しているわけではないのだから」というのが改築の実限を阻む理由であったのであろう。

松村校長の着任と改築の具体化

校舎改築に苦闘された竹沢校長は、その曙光を見ることなく昭和三三年三月退職され、代って鶴来高校校長松村茂が第三代校長として着任された。



三代校長
松村　茂

明治三八年三月二〇日、石川県小松市に生まる。昭和四年東京高等師範学校理科二部を卒業、広島高等師範学校、同一一年西華高等女学校各教諭、同一二年入隊、同二二年飯田高等学校、同二四年小松高等学校各教諭を経て同三〇年鶴来高等学校長、同三三年松任農業高等学校長となる。石川県高等学校農業部会長兼任、その後、小松高等学校へ転任。
趣味　俳句・柔道

着任以来、校長の念頭には、本校の現実と校舎改築運動の進展とが休む間なく交錯し、出張の折りも付近の農業高校を訪ねて「どの学校も清潔で、建設の意気に燃え、農場のみならず、校地全体を農業高校的美観と活用に努めている。また、どの学校も農村家庭科を設置し入校者も増加している。そして、施設を充実し、生産と加工・製造に力を入れ効果をあげていることなど」を感じ、本校の進むべき方向についての示唆を得ようと努められたのである。

卒業記念のアルバムにのせるから、何か一言書いてくれといわれた。下手な文字が写真にまで残っては恥を残すものだと

思ったが、心をきめてなれない毛筆で次のように書いた。「正しく強く。何が正しいのか、誠実に努力する人にのみこの答が与えられると思う」これは誰の言葉でもない。センエツだが自分のモットーともいうべきことを書いたのである。

松村　茂　（昭和三四年三月「松高新聞」第五〇号）

三三年一〇月に二水高校が落成し、小松に実業高校農科実現の声があったり、羽咋、七尾両高校に改築機運が出て来たりして、改築運動に焦りの色が出て来たが、次第に構想は具体化された。一二月には土地と地元負担金について協議が進められ、翌三四年二月、校長は、「現在地で改築を行なう。三四年度中に地元負担と危険校舎に対する国庫補助をもって改築の一歩を踏み出す」旨発表した。そして、毛利義男松任町長が就任した。その協力により、地元との意見が一致し、県および教育委員会との協議を進め、三四年中に本館延七〇〇坪の改築具体案が成立したのである。

高橋校長の着任と本館落成

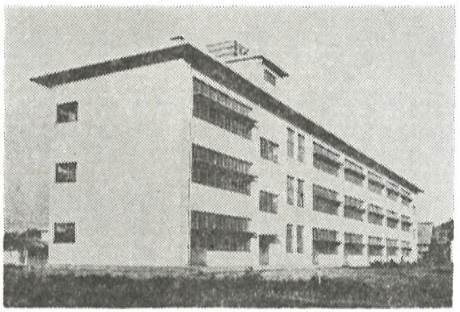


平十校八代四高橋長

松村校長は在任わずか一年で小松高校へ転任となり、代って津幡高等学校長高橋八十平が本校第四代校長として三四年四月着任された。

明治四一年一月一二日、石川県羽咋郡に生まる。石川師範学校、昭和一四年日本大学文科を卒業。同一五年浅草高等実践女学校、同一六年石川県立金沢第二女学校、同石川県女子師範学校、同一九年和歌山青年師範学校、同二〇年六月茨城師範学校、同二三年石川県立羽咋高等学校各教諭、同二七年飯田高等学校長、同三二年四月、津幡高等学校長を経て昭和三四年四月、石川県立松任農業高等学校長となる。

着任して間もない五月、校舎改築期成同盟会総会がもたれ、会長に毛利松任町長、副会長に福田喜代司六星同窓会長、橋本外喜雄育友会長、中島農業教育振興会長、今村重栄松任町議会副議長などが選ばれ、新しい局面の展開をはかることとなった。



馬場町新館

三四年五月定例議会において、第一年度（三四年）九教室、第二年度三教室、第三年度六教室、第四年度特別教室及び管理棟建築の計画にもとづき、第一年度分一、五二四万円を予算化することとなり、この年の一二月二四日校舎西側の敷地において地鎮祭を行ない、引き続き工事が開始された。しかし、第一期・二期工事には便所もないので、さらに県に対して強力に折衝し第三期工事を繰り上げて三五年度に実施することになった。工事は真柄組によって進められ、二月二四日竣工した。鉄筋三階建、建坪六一六坪、一八教室を収容する本館である。総工費は約三、〇〇〇万円、このうち、育友会による寄付は一、二五〇万円にのぼり、熱情の結晶の一棟であった。

早速第二体育館より木造の廊下を仮設して新館をつなぎ、翌年卒業する上級学年を一ヶ月余りであるが収容したのである。

二　三浦町現校舎の新築

吉野校長の着任

高橋校長は新館一棟の完成を見て三六年三月七尾農業高校校長として転任され、代って七尾農業高校校長吉野進が本校五代校長として三六年四月着任された。吉野校長は松任農学校から松任高校時代本校教諭としてまた農業高校となってからは教頭として本校に勤務されたことがあり、本校にとって縁が深く、また農業教育には自他共に許す識見と、経験をもっていられたのである。



五代校長
吉野　進

明治四四年一一月二日、宮崎県西都市に生まる。昭和四年宮崎県立妻中学校、昭和七年三重高等農林学校林学科卒業。昭和七年八月、宮崎県農林技手、内務部林務課、昭和一〇年岩手県立水沢農学校、同一三年島根県立松江農林学校、同一六年石川県立松任農学校各教諭同二六年三月、石川県学校指導課指導主事、同三三年、石川県立松任農業高等学校教頭同三四年七尾農業高等学校長を経て、昭和三六年四月、石川県立松任農業高等学校長となる。三九年七月、文部省教育視察団として欧米視察。趣味　カメラ・散歩

「真理は時流におもねらないところにある」どんな時勢でも真理（正しいこと……としてもよい）は必ず存在するが、何が真理かの判断が問題なのである。情に棹させば流されるが、意地を通せば「天のじゃく」視される。理・情・意の総合力が判断を下すところに真理が在ると思うのである。　吉野　進　（昭和三九年三月「まつのう」創刊号）

三六年度は新館一階と二階にそれぞれ第二、第三職員室を設け、卒業学年の農業科二クラス、農林科、農業土木科、農産加工科、農業経済科各一クラス、家庭科三クラス、定時制一クラスと、二年農業経済科一クラス、家庭科三クラス、一年家庭科二クラスを新館に設け、余裕の出来た旧館の教室はロッカー室とした。（三七年度も同様。第二体育館にロッカーを移動した）

新天地を求めて

改築第一棟は落成したが、前途にはいろいろ困難な問題が横たわっていた。その一つが校地の問題であった。文部省の設置基準によれば、校地二五、六三六坪、運動場八、一八二坪であるが、実状は一九、二八六坪で、しかもその中に民有地一三、五三九坪が含まれている。この民有地の買収を未解決のままにしては、校地の拡張は至難なことであった。このような問題などから、改築促進とは別に「移転」という考えが浮かびあがって来た。改築と移転とは矛盾するようであるが、大きく発展するためには、この両者は実は以前から平行して運動の中にあったのである。農学校の将来を心配した田谷知事は「農学校の敷地の

問題が解決しない現状において、いたずらに、手狭い現在地を固執しなければならない理由は一つもない。新時代が要求する農業、斜陽と呼ばれる屋台骨を、立て直さなければならない運命を荷なう新しい農業具現の道場は、新天地にこれを求むべきである」。と述べているが、本校の移転が企画されたのはこの田谷構想によるのである。ちなみに、三八年に石川県農業試験場が、押野地区から野々市町に新築移転されたのも、この構想によるものである。

当初は、木津町一帯を候補地として、橋本育友会長が中心になって交渉に当り、二五、〇〇〇坪の校地買収の目安がほぼ出来あがったところで、旧松任町から移転反対の火の手があがった。そこで再び計画を練り直し、当初の案よりも、松任旧町に近い三浦町に決定した。入手出来た校地は二〇、〇〇〇坪であった。

竣工と移転　三七年一二月五日、馬場町一棟建築の時と同様雪風寒い三浦町曠野に青竹を立て地鎮祭を行い、引き続いて第一期工事本館の建築が始まった。工事は田島建設、竣工は翌年の一〇月であった。引き続き兼六建設により第二期工事に着手、翌三九年五月三一日、二号館、体育館、農場建物群が竣工した。

本校の移転新築が決定した一方では、松任高校の設置が決まり、先に完成した馬場町新館一棟を含めた本校校舎を使用することになり、三八年四月新入生が入学、新館を使用することになった。庇を貸して母屋をとられるといった感もあったが、まもなく移転の準備に忙殺されることになった。三九年五月二五日から数日にわたって机・椅子・段ボール箱を満載したトラックが、三浦・馬場町間を往復し、積み方、おろし方、受取り方が手際よく荷物を始末して行ったが、運び込まれた荷物は体育館や教室に雑然と積まれ、その整理に数日を要したのである。恐る恐る開いた紙包みから、穴があいて捨てたはずのやかんが出て来たり、途中でこわれてしまったガラス

建　築　の　概　要

1　校　　地

総　面　積	58,274.47㎡（17,628坪）……（国有地を含まず）
運動場面積	13,365.31㎡（ 4,043坪）
実習地面積	21,064.49㎡（ 6,372坪）

2　構　造　規　模

本　　館	鉄筋コンクリート造3階建	2,982.150㎡（ 902坪）
2　号　館	鉄筋コンクリート造2階建	1,239.750㎡（ 375坪）
3　号　館	鉄　骨　造	384.190㎡（ 116坪）
体　育　館	鉄筋コンクリート造	777.000㎡（ 233坪）
農場1号館	鉄　骨　造	892.700㎡（ 270坪）
農場2号館	鉄　骨　造	540.780㎡（ 164坪）
昇降口及び渡廊下	鉄骨鉄筋コンクリート造2階建	476.520㎡（ 144坪）
温　　室	鉄　骨	336.960㎡（ 102坪）
そ　の　他（更衣室・自転車置場・葡萄室・鶏舎等）		564.498㎡（ 170坪）
合　　計		8,187.548㎡（2,476坪）

3　主　要　施　設

本館1階

校長室兼応接室	1室
事　務　室	1室
職　員　室	1室
放　送　室	1室
保　健　室	1室
相　談　室	1室
会議室兼専攻科教室	1室
図　書　室	1室
司　書　室	1室
普通教室	2室
宿　直　室	1室
用務員室	1室

本館2階

芸　術　室	1室
理科講義室	1室
理科準備室	1室
理科実験室	1室
普通教室	6室

本館3階

普通教室	10室

2号館1階

微生物実験室	1室
天　秤　室	2室
無　菌　室	1室
食品分析室	1室
食・微準備室	1室
材料試験室	1室
電　気　室	1室
ボイラー室	1室
農業管理室	1室

2号館2階

製　図　室	1室
暗　　室	1室
農業実験室	1室
化学実験室	1室
製図準備室	1室
化学準備室	1室

3　号　館

農産加工管理室	1室
農産加工室	1室

3号館		農場2号館	
製パン室	1室	飼料庫	2室
麹室	1室	育鶏室	
製品物置貯蔵庫	1室	豚房	1室
畜産加工管理室	1室	物置	1室
牛乳加工室	1室	控室	1室
肉加工室	1室	牛乳取扱室	1室
冷蔵室	2室	豚飼料調理室	1室
農場1号館		牛飼料調理室	1室
畜産作物管理室	1室	牛舎	
園芸林業管理室	1室	昇降口及び渡廊下2階	
農薬調整室	1室	生徒会室	1室
肥料室	1室	タイプ及び家庭室	1室
園芸林業資材室	1室	購売部	1室
園芸収納室	1室	体育館	
収納作業室	1室	男子更衣室	1室
農業機械準備室	1室	女子更衣室	1室
農業機械実習室	1室	体育用具室	2室
大農具室	1室	体育準備室	1室
穀物貯蔵庫	1室	控室	1室
更衣室	3室	温室	
食堂	1室	鉢物室	1室
浴室	1室	熱帯植物室	1室
農場宿直室	1室	切花室	1室
生徒宿泊室	1室	繁殖室	1室
恒温室（地下）	3室	作業室	1室
		野菜室	1室
		葡萄室	1室

4　経費	建築費	188,502,000円
	敷地買収・整地費	36,967,000円
	その他（地質調査費・設計委託料等）	6,698,280円
	合計	232,167,280円
5　工程	着工・昭和37年12月1日　竣工・昭和39年5月31日	
6　設計	石川県建築課・マサミ建築設計事務所（第2期工事）	
7　監査	石川県建築課	
8　施工	田島建設株式会社（第1期工事）	
	兼六建設株式会社（第2期工事）	
	付帯工事（衛生・暖房）北菱電興株式会社・（電気）株式会社ンマコー商店・（温室）東海園株式会社	

器具のかけらが出て来たりした。

校舎落成式　三九年九月吉野校長は教育事情視察のために欧米に旅立ったが、その帰朝を待って、一一月一二日、盛大な落成式を新装なった体育館で挙行した。

山戸県建築課長の工事報告に続いて、寺西県出納長が中西陽一県知事の式辞を代読「新校舎の落成を期として、いよいよ農業教育の重要性を認識され、着実にして研究的な産業人の育成に努められて、本県の農業教育のセンターとしての使命を達成するとともに、今日の新しい時代のもとに、国家社会が要請するところの人材教育の充実にいそしまれるよう希望する」と述べられた。続いて鈴木県教育委員長の挨拶、工事関係者（田島建設、兼六建設、シマコー商店、北菱電興、マサミ建築設計事務所、東海園）に対して感謝状と記念品が贈られる。県議会議長作本博、県立学校長代表菊地計一、松任町長毛利義雄、衆議員議員坂田英一、育友会長橋本外喜雄氏より祝辞を戴いた。これらを受けて、吉野校長が感謝と決意の挨拶を述べ、ついで生徒代表土坂哲夫生徒会会長が「私達は新校舎に恥じないように教養を身につけ、産業の発展に力を入れ、本校の伝統松農精神を受け継ぎ良き社会人となるよう決意します」と決意を表明したのである。

式に続いて、多数の来賓を招いて、体育館で祝賀パーティが催され、この間恒例の松高祭を一二日（展示会）一三日（講演会―「宇宙の話」―金沢大学理学部教授千田勘太郎、映画会（「石川の四季」「宮本武蔵」）と行ない、一四日は体育祭を催した。

開校九十周年記念　校舎新築移転の整理のため、準備が間に合わず、創立九十周年記念行事の実施は翌年四一年一〇月とし準備が進められた。募金、名簿、年史の編集は前年より開始され、一一月には記念会館建設の計画が立てられた。四一年一月には、記念事業実行委員会（委員長橋本助男同

窓会長）副委員長橋本外喜雄育友会長、酒尾孝之振興会長、石地与四太郎教頭）が発足して準備が進められ一〇月開催された。記念行事及び記念事業の概要は次のようであった。

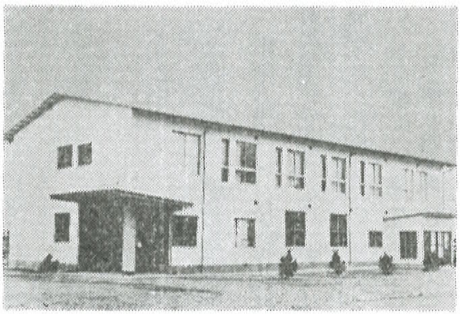
記念行事　一二日　記念体育祭
一四日　前夜祭（O・Bスポーツ交歓会、火祭）
一五日　其香碑移築竣工並に慰霊祭
記念式典（記念式、永年勤続者、同窓会功労者・工事関係者表彰（感謝状贈呈）
祝賀会
一六日　記念講演会（京都大学教授柏祐賢「農業の近代化」）
演奏会（楽団シャープサウンズ）
一四日～一六日　松農祭（展示会・即売会・食堂）

記念事業　記念会館建設、同窓会員名簿発刊、開校九十年史発刊、記念植樹

記念式典には、県知事代理安田県総務部長、県議会議長代理作本県会議員、任田教育長、坂田衆議員議員ら多数の来賓の祝辞があった。式中永年勤続者三三名に対し表彰状と記念品が贈られた。被表彰者は次のようであった。

吉野　進（一六・六）年	紙谷久之（一七・一）	新谷郁永（一三・六）	
石地与四太郎（一六・〇）	藤田崇宜（一六・三）	織田一（一三・六）	
額俊一（二〇・〇）	山崎昭（一五・七）	吉村武（一二・九）	
泉松雄（二二・九）	久保淳三（一五・四）	松井芳雄（一二・六）	
本田政夫（二一・六）	平田慶実（一四・六）	池田博（一二・六）	
平野外喜平（二〇・七）	喜多重正（一四・六）	岡本春樹（一二・六）	
作本秀雄（一七・六）	安川雅章（一三・一〇）	肥田保久（一二・六）	

山脇　茂（一二・〇）
金山顕光（一一・五）
蔵和子（一五・六）
宮田　禊（一五・六）



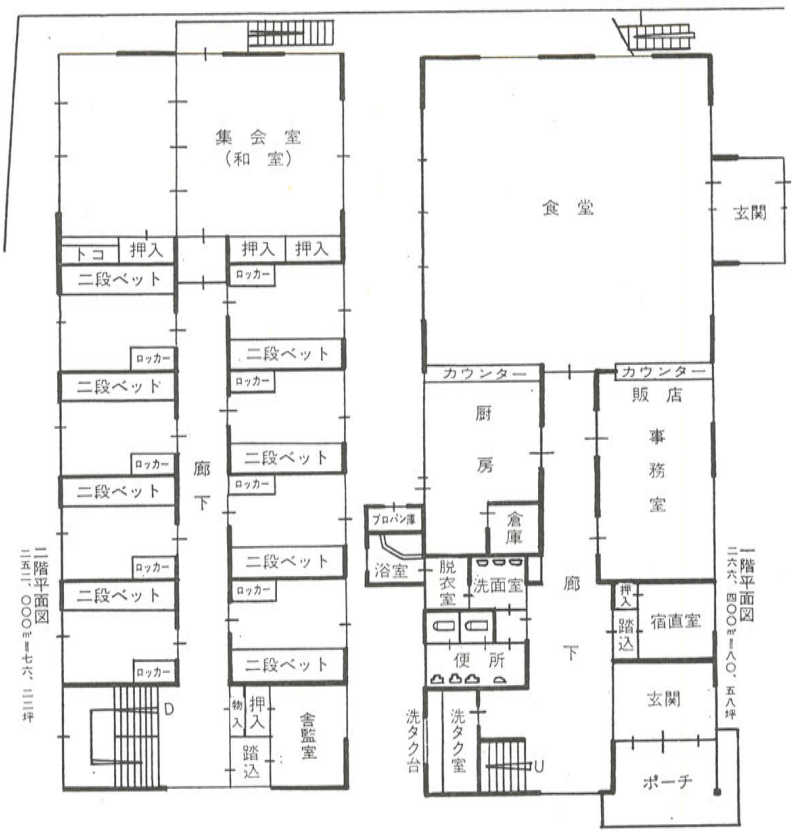
九十周年記念会館

木戸浦五作（一二・六）
中田　実（一二・六）
谷　正則（一〇・六）
粟　富美枝（一四・五）
角田外茂男（一九・四）
得田金市（二一・一）
永井助雄（一五・六）
斉川源左衛門（二七・六）

記念会館は、同窓会・育友会の合同事業として、校地と別に買収した四〇〇坪に、松井建設設計事務所設計、兼六建設施工で、総工費約一、二〇〇万円、四一年六月着工、同年一〇月竣工した。鉄骨づくり、外装はモルタル、内装は木造で、二階建、生徒食堂及び寄宿舎にあてるべく施設が充実された。食堂は一一〇人、寮は四人部屋が八室で三二名の収容人員であった。部屋の配置及び施設は次の図のようであった。

記念植樹には「だいおうまつ」「このてがしわ」及び同窓会員内村又一寄贈の「ひとつばたご（一名なんじゃもんじゃ）」が植えられた。

なお、このとき寄贈された書画には、中西県知事「天行　健」、坂田英一農林大臣「農学」の書と、同窓会員寅若繁「農婦」、宮田耕一「田園風景」の絵画がある。


集会室
（和室）
トコ
押入
押入
押入
二段ベット
ロッカー
廊下
食堂
玄関
カウンター
カウンター
販店
厨房
事務室
倉庫
プロパン庫
浴室
脱衣室
洗面室
便所
廊下
押入
踏込
宿直室
玄関
ポーチ
洗タク台
洗タク室
物入
舎監室
D
U
二階平面図
二五二、〇〇〇㎡＝七六、二三坪
一階平面図
二六六、四〇〇㎡＝八〇、五八坪

記念会館平面図

三　施設の拡充

三浦町移転後、運動場整備のため赤土が運ばれ、全校生徒が日割りに従って整地作業にいそしみ、校舎周辺の環境整備は着々と進行した。移転当時、植えられたプラタナスが、青い葉を広げ、学園らしい雰囲気が出来て行った。一方、九十周年を記念し、総合制高等学校時代から年々卒業生が就職していた東京の中川製作所から英国製一〇〇馬力の大型トラクターが寄贈された。農業機械化の花型として、農場実習に威力を発揮しはじめたのを始め、運搬具もオート三輪に代って四輪トラックが登場した。以後設けられた主な施設を列挙すれば次のようになる。

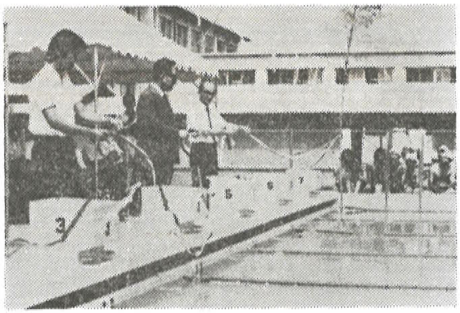
水理実験室　四一年一〇月、三号館の畜産加工実習室を延長して、建坪六〇坪平屋建が完成し、同一二月に開水路装置が設けられ、さらに翌年一二月、管水路装置が完成した。県下唯一の装置であり、農業土木科の実習施設である。

果汁濃縮プラント　四三年度県単独事業として、八五〇万円で設置された果汁濃縮プラントは、密封低圧型・低温加熱方式で、製品の色がよく、ビタミンなどの栄養低下が防止出来る全国最新の装置で、食品製造科の加工実習に使われ、市場にあるトマトジュースと比べものにならない優良な製品が作られるようになった。

温室　四六年度産業教育振興補助費により、本館前に、鉢物室・切花室・繁殖室・標本植物室三七九・五㎡、ボイラー室・作業室等付属建物八二・五㎡が新設され、移転当時建てられた温室は野菜用とされるようになった。

水泳プール

県土木部設計・高田産業施工、四八年四月着工、七月竣工、プールの面積、縦二五m・横一七m、八コース、循環式浄化装置の新型プールが、体育館と本館の間に、男女脱衣室、機械室とともに完成した。七月一六日、中西石川県知事臨席、作本県会議員、県教育委員会保健体育課長代理平野外喜平、二ツ木松任市助役ら来賓を招き、職員・生徒一同プールサイドに整列して、プール竣工式が行われた。県知事挨拶、県会議員・同窓会長祝辞、学校長挨拶に続いて寺田茂育友会長、本尾生徒会長が謝辞を述べた後、知事・学校長・生徒会長がプールサイドに張られたテープをカットする。これより、県水連徳田茂男により、水難防止と水泳上達を祈念してお祓いがなされ、しずしずと式泳が行われた。そして、この後生徒ホーム代表が試泳を行って閉会となった。



プール竣工式

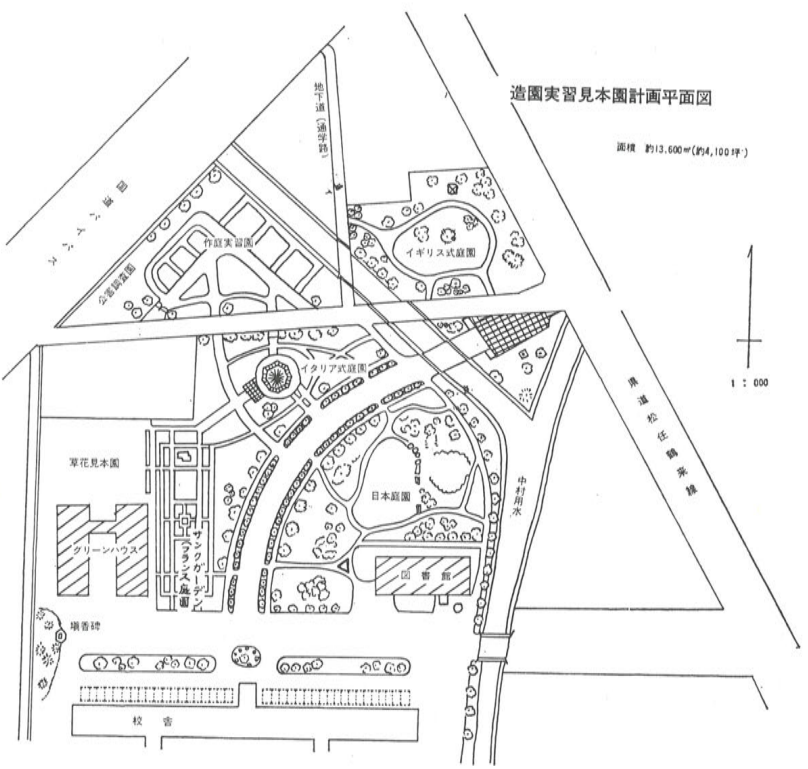
木津農場

三九年三浦町移転後も、馬場町の農場実習地三四、八六二・八〇九m^2は、第二農場として使用していたが、四三年これを県に移管し、代りに木津町に一八、九七五m^2を買収して、水稲及び飼料作物の実習地とした。そして実習地へ生徒輸送用にマイクロバスを購入した。

通学路・メインストリート

本校への入口は鶴来街道より本館に向っての砂利道であったが、鶴来街道より西に折れ、造園実習見本園を縦断して正面玄関に向かうメインストリート（巾八・三m）と、国道バイパス（八号線）地下道より、記念会館東側を経て、生徒昇降口に向かう通学道路（巾五m）が四九年に完成した。

造園実習見本園　学校前に国道八号線が開通すると、環境保全という観点から、学校と八号線間の土地を学校用地として買収する計画が盛りあがった。県の了解を得て、四三年より買収に着手したが、中野久男育友会長らの努力にかかわらず、交渉は難航した。しかし四五年地主の理解と好意により一六、〇〇〇平方メートルを購入できた。その後造園実習見本園とする計画が立てられ、百年記念事業の中に組入れることとし、県の予算を待って、石川県健民公社村田秀作技師の設計、立花造園（日本庭園）、中部緑地株式会社（洋式庭園）の施工により、五〇年四月着工した。



四　設置学科・教育課程の変遷

農業経済課程・家庭課程

昭和二八年から農業高校となった本校には、全日制に「農業」「農林工学」「農芸化学」「商業」「普通」、定時制に「普通（夜間）」（本校・美川分校）と「農業（昼間）」（本校）の課程があった。総合制が解体し、全日制の普通課は募集を停止したが、定時制の方はそのまま存続した。そして、新たに「農業経済」と「家庭」課を設置した。しかし、全くの新設ともいえなかった。つまり「商業課程の教科科目を変更し「畜産」「農業経済」「耕種」などの農業科目を加えることにより農業経済課程に転化した。

家庭課程については、もと普通課の中に甲（進学コース）、乙（就職コース）、丙（家庭コース）の三コースがあって、このうちの丙コースには「商業経済」「簿記・珠算」の商業科目と「一般家庭」「保育」「食物」「家族」「手芸及意匠」「被服」などの家庭科目がふくまれており、この丙コースから転化したといえる。農業経済課程は農業協同組合などへの進路を考えたものであったが、経済の変動から商業的色彩が濃くなって行った。家庭科は発展し、三〇年に一年から三年までの生徒がそろった時、「家庭」と「被服」の両コースに分化したのである。定時制の変遷については、第七章に述べられているのでここでは省略する。

農業高校に転化した頃の教育課程は次ページの表のようであった。

教育課程の編成

教育課程の編成には、生徒の能力、適性、進路に応じ、また地域の要望や、設置学科の特色を生かした教育が出来るよう配慮しなければならない。そのためには、設置学科に適した専門的な科目を配し、普通科目においても専門的科目の履修の基礎となる科目を配すると共に、生徒の適性（個性）

当時の教育課程　（昭和28年度入学者）

農芸化学課程

教科・科目＼学年		1	2	3
国	国語甲	3	3	3
	国語乙		｝・2	
	漢文			
社	一般社会	5		
	人文地理			5
数	一般数学	｝5		
	解析Ⅰ			
	幾何			2
理	物理		5	
	化学	5		
保	保健体育	3	3	3
芸	図画	｝2	｝・2	
	音楽			
	書道			
外	英語	3	3	3
農業	耕種	3		
	畜産	2		
	製造機器	2		
	園芸		2	
	土と肥料		4	
	加工		5	
	生物化学		3	
	分析化学		3	
	畜産加工			3
	特殊加工			2
	農業経営			2
	醸造			3
	食品分析			2
	作物加工			3
	応用微生物			｝2
	土肥実験			
計		33	33	33

農林工学課程

教科・科目＼学年		1	2	3 林	3 土
国	国語甲	3	3	3	
	国語乙		｝・2	2	
	漢文				
社	一般社会	5			
	人文地理			5	
数	解析Ⅰ	5			
	解析Ⅱ		5		
	幾何			・5	
理	物理		5		
	生物	3			
保	保健体育	3	3	3	
芸	図画	｝2	｝・2		
	音楽				
	書道				
外	英語	3	3	3	
農業	耕種	3			
	畜産	2			
	地質	2			
	製図	2			
	林業生産		3	3	
	測量		5		
	農業機械		4		
	農業経済			2	
	材料施工				2
	設計				2
	土地改良				3
	農業水利				3
	橋梁工学				・5
	林業経済			4	
	森林土木			3	
	保護砂防			・5	
計		33	33	33	

農業課程

教科・科目＼学年		1	2	3
国	国語甲	3	3	3
	国語乙		｝・2	
	漢文			
社	一般社会	5		
	人文地理			5
数	一般数学	5		
理	物理			2
	化学		5	
	生物		5	
保	保健体育	3	3	3
芸	図画	｝2	｝・2	
	音楽			
	書道			
外	英語	3	3	3
農	総合農業	(12)	(12)	10
	栽培	8	3	
	畜産	2		
	農業工作	2		
	飼育		3	
	土と肥料		2	
	果樹		1	
	蔬菜		3	
	保護			2
	農学実験			2
	野菜			｝3
	作物			
	経営			
計		33	33	33

農業高校に転化

農業経済課程

教科・科目＼学年		1	2	3
国	国語甲	3	3	3
国	国語乙		・2	
国	漢文			
社	一般社会	5		
社	人文地理			5
数	一般数学	5		
数	解析Ⅰ			・2
理	生物		5	
保	保健体育	3	3	3
芸	図画	2	・2	・2
芸	音楽			
芸	書道			
外	英語	3	3	3
農	耕種	3		
農	畜産	2		
農	農業工作	2		
商業	経済原論	3		
商業	珠算	2	2	
商業	農業経済		3	
商業	簿記		3	3
商業	金融		3	
商業	協同組合原論		2	
商業	文書実務		2	
商業	タイプライター			‥2
商業	実務演習			2
商業	法規			… 5
商業	商業計算			2
商業	会計			3
商業	実業英語			‥2
家庭	保育			… 3
家庭	手芸			… 2
計		33	33	33

家庭課程

教科・科目＼学年		1	2 家	2 被	3 家	3 被
国	国語甲	3	3		3	
国	国語乙		・2		2	
国	漢文					
社	一般社会	5				
社	世界史		2		3	
数	解析Ⅰ		5			
理	化学		3		2	
理	生物	5				
保	保健体育	3	3		3	
芸	図画	2	・2		2	
芸	音楽					
芸	書道					
外	英語	3	3		3	
農	園芸	3				
農	飼育	2				
家庭	一般家庭	7				
家庭	食物		5	3		
家庭	食物Ⅱ				5	2
家庭	被服		3	5		
家庭	被服Ⅱ				2	7
家庭	被服概説			2		
家庭	意匠			2		
家庭	家族				2	
家庭	保育				3	
家庭	手芸					3
家庭	意匠・手芸				2	
商業	簿記		2			
商業	珠算		2			
計		33	33		33	

に応じるよう、自由選択科目を適当数配するのが理想的な形といえよう。しかし、生徒数や、施設・教員数によって制約を受け、大学のような自由な選択は望めない。総合制が始まった当初の大単位(一科目の単位が大きい)、自由選択制から次第に小単位、固定化の傾向を強くしていったのは、これらの制約によるものであった。

農林科と農業土木科

高校進学率の増加とともに社会情勢も著しく変化したため、次第に学力が低下し、これが問題視されるようになった反面、職業教育の重要性が叫ばれるようになり、文部省は相いついで学習指導要領の改訂を行なった。二七年一二月教育課程審議会が発足し、この答申にもとづいて学習指導要領三一年度改訂版が公刊され、三一年四月から学年進行で実施された。教育課程編成の基準は必修教科三九単位、職業に関する教科三〇単位以上、卒業に必要な単位数を八五単位以上などとし、一般に教科科目数を増加し、各科目の単位数を少なくした。また選択教科制を改め類型を設けた。夏季実習、農場当番等は、あらかじめ教育計画をたて「特別実習」として、これに相当する単位数を与えることが出来るようにした。本校では、三一年度から農林工学課程の中に「林業コース」と「土木コース」を設け、更に三二年度からこれを独立させて「農林課程」と「農業土木課程」とした。また農芸化学課程の名称を変更して「農産加工課程」とした。普通科目では五単位がほとんど三単位になり社会科に「社会」が必修となった。農業教科では農業課程で「ホームプロジェクト」の二単位が「総合農業」に吸収され、農林課程で「農業一般」をなくし、その他の科目の単位数を減らし「総合農業」が加えられた。

通学区域の改正

三一年から三二年にかけて、全県的に市町村合併が進み、県立高校の通学区域の錯綜がめだってきたので、県教育委員会では、三一年一月、通学区域規則の改正を告示した。これによって本校の「農業課程」「農業土木課程」「農産加工課程」「農業経済課程」は全県一区となり、「農業課程」「家庭課程」は第一、第二学区となった。

松任普通高校の誕生

戦後復員、引揚で一時にふくれあがった人口についでベビーブームの到来となり、その波はその後の社会に大きな問題を投げかけて行った。小学校にあふれ、やがて中学校、そして進

学率の漸増と相まって高校進学者の激増となって現われた。昭和二九年度は全国の高校進学者が八三万であったが、三五年度は一〇六万、三八年度には一七〇万に達したのである。本県では中学卒業者が二九年度一万八〇〇〇、三八年度は三万を突破することになった。PTAは大会において「高校生急増対策の完全実施」を決議して県に要望した。県教委は三六年に高校の新設・教室の増設計画を発表、三七年開校した羽咋工業高校をはじめ新設五校、その他四校について増設したのである。

松任高校は三八対策の一環として、普通課程を新設し、これと本校の家庭課程・定時制普通課程を吸収して三八年四月、本校馬場町校舎内に誕生した。

校門には両校の標札がかけられた。吉野校長以下数名の教諭には兼務が発令され、やがて任田松任高校長の着任と共に、正面ホールを中心に左右に分かれて、両校校長、そのわきに各事務室が位置し、同居することになった。また松高職員室は新入生と共に新館に入り、本校職員室は農業土木棟と農場管理室に移り三浦町新校舎の建築を待ったのである。

三八改訂

国民経済の発展、産業界の発達は学歴尊重の社会構造と相まって高校進学率を著しく増加させ、学力の低下や道徳性の低下を嘆かせることになった。産業界の発展に対応出来る科学教育、特に三二年一〇月ソ連の人工衛星打ち上げ成功に刺激された我国の科学教育の反省などにより文部省は小・中・高一貫した教育体系の検討を始めた。三三年に小・中学校の学習指導要領を改訂し、高等学校は三八年度から実施すべく、三五年一〇月改訂学習指導要領を公刊した。改訂の要点は「課程の特色を生かし、生徒の能力、適性、進路等に応じた教育が出来るようにすること」として、普通科目に「古典甲」、「古典乙」、「世界史A」「世界史B」など多くの類型を設けたこと。中堅産業者を目指して必修単位数を多くし、普通科目四四単位、職

業科目三五単位としたこと。女子は原則として「家庭一般」を必修としたこと。社会科の科目として「倫理・社会」を設け、道徳教育を充実強化したこと。「教科・科目」「特別教育活動」のほか「学校行事」を設け、その指導が適切に行われるようにしたことなどである。しかし、この改訂に対し「矛盾が多く、差別教育、反動的」という反対の声もあった。

本校では一般には「古典甲」「英語A」などをとり入れ、専門科目の基礎となる教科目については、農業土木科に「物理B」、農産製造科に「化学B」とした。また、農業科・農林科に配置されていた「総合農業」を廃止して全学科に「総合実習」を配置した。

畜産科の設置

旧農学校時代「獣医畜産科」、その後、「畜産科」として多くの有為な人材を育成したのであるが、戦後は廃止されていた。これが畜産界からの要望があり、地域酪農の振興を目標として三八年度に復活した。また「農産加工科」は再度名称を変更して「農産製造科」となり、農林科においては、林業自営者の減少と木材販売関係の求人増加を配慮して、二年生より二つの類型を設け林業経営を主にした「林業コース」と、販売を主にした「木材商業コース」とした。

また、「農業経済科」は一般産業界からの求人が多く、「商業科」と同一視される傾向が強くなり、三八年度以降の募集を停止することとなった。前述のように松任高校の新設により、「家庭科」二、三年生、及び「定時制普通科」二、三、四年生を移籍した。通学区域の改正で三九年一月、本校各学科とも、「全県」となる。

造園科の設置

日本経済の飛躍的な発展、自動車の増加、三九年のオリンピック東京開催等により道路が整備拡充され、レジャーブームが叫ばれるようになった。また一方では産業発達のひづみとしての各種公害、自動車排気ガスによる大気汚染が問題となり、都市計画・緑地計画が真剣に考えられるようにな

った。また、生活に余裕が出来たため石ブーム、庭園ブームが始まった。このような背景のもとに農林科を改編して「造園科」とし、四一年度以降入学者に適用することとした。ただし、二、三年生では「造園コース」と「林業コース」とし「木材商業コース」を廃止した。

橋本校長の着任

病気療養のため退任された吉野校長に代って、昭和四二年四月七尾農業高校校長橋本龍太が本校第六代校長として着任された。



六代校長　橋本龍太

大正五年三月五日・金沢市に生まる。昭和九年松任農学校農科一種卒業。昭和一四年千葉高等園芸学校本科を卒業、昭和一四年タキイ種苗（株）技師、同一五年奈良県立磯城農学校教諭を振り出しに、同一七年石川県立松任農学校、同一九年小松農学校、小松商業学校各教諭・同二五年県農事試験場技師、同三三年県教育委員会指導主事、同三七年柳田農業高等学校長、同四〇年七尾農業高等学校長を経て、昭和四二年四月、石川県立松任農業高等学校長となる。趣味、音楽鑑賞・園芸

本校の前身松任農学校の出身であり、かっては母校に教鞭をとられたこともあり、本校に多大の愛情をもって、教育の根幹にふれる問題や農業教育のあり方を検討して、新機軸を生み出し、本校教育に新風を吹き込まれたのである。

知謀泉のように、計画は斬新・精確にして壮大、実施にあたっては明快にして果断、その信条とするところは「精確」、創造性豊かな近代的感覚溢れる人柄で、本校教育に並々ならぬ情熱を注がれる反面、趣味に生きる人でもあった。

「太陽が花を彩るように、趣味はさまざまな色に人生を飾る。」

この言葉のうち、趣味のところを芸術に置きかえると、イギリスの数学者ジョン・ラボックの言葉になるのだが、私はあ

えて「趣味」といいたい。

昭和の初めころは、人生五〇年といわれていたのが、最近は人生七〇年になってきた。医学の進歩と、食生活や生活環境の改善などのおかげであろうが、こうなってくると、この長い人生を、どうやって送るかに、考えをめぐらせる必要があろう。

まあなんとかなるだろうとか、ケ・セラ・セラと呑気に構えている人が多いようだが、それでよいのだろうか。

『人生―二つの永遠の間のわずかな一閃（カーライル）』と、悟りともあきらめともつかないようなことを考えて、投げてしまう人生では、なんともったいない話である。

食べて寝て、あくせく働いて、それだけで終ってしまう人生ならば、なんと味気ないものかを訴えたい。あるいは、人生の終着点近くへ来て、やっと人生の意義を考え、あわててみたって情けないことではないか。

その終着駅近くに及んだとき、「俺の人生は、まあまあそんなに悔もなかったよ」といえる人生を、ぜひ一人でも多くの人に踏んでもらいたいものである。

たった一度しかない、くりかえしの不可能な貴重な人生であるからこそ、さまざまな色で飾るべきなのだし、それゆえに趣味をもつことの、意外に重要な意味を信じてほしいのである。

『あなたの趣味は？』ときかれて、さてどう答えたらよいかと迷う人を、気の毒に思う。

一つより二つ、二つより三つ、多彩なご馳走に、諸君の食欲をかきたててほしい。

君の人生は、君のものだから……。

（橋本龍太　昭和四六年三月「まつのう」第八号）

教育課程の多様化

理科教育・産業教育合同審議会は文部省の諮問に答えて、四二年八月「職業教育の多様化―新学科の設定について」、ついで同年一〇月「理科・数学に重点を置いた理数科の設定について」が、それぞれ文相に答申された。そしてこれにもとづき文部省は職業教育の多様化については、農業に関する学科の「森林土木科」の他、工業、商業、水産、家庭に関し一六学科を新設した。

本校ではこのような動向を見るまでもなく、四二年四月本校に着任した橋本校長は、一年にわたって練り上げた改訂教育課程を示し、四三年度以降入学者に適用することとしたのである。これは、農業土木科以外の各学科について二年生より二つの類型をもつという徹底した多様化であった。四三年度の管理計画に示された各学科の教育計画は、次のようであった。

①　農　業　科

自営者養成のための学科であって、機械営農コースと園芸コースをもち、一年生では両コース共通の基礎的農業関係科目を学ぶが、二年生からそのどちらかのコースへ進む。

a　機械営農コース（男子むき）

稲作を主とし、これに野菜を添えた水田営農の先進的機械化により、七けた農業を確立させるための知識と技術を修得させる。

したがって、経営規模が比較的大きい農家の子弟の入学が望ましい。

b　園芸コース（男女共通）

施設園芸（ビニールハウス、温室の経営を主体にする園芸）を主としこれを露地野菜、果樹、草花および稲作・基礎技術を添えて、農地利用の高度化による自立経営を確立させるための知識と技術を修得させる。

②　畜　産　科

自営者養成のための学科であって、酪農コースとかきん（家禽）コースをもち、二年生からそのどちらかのコースへ進む。

a　酪農コース（男子むき）

水田酪農だけでなく丘陵地酪農をあわせ、これに稲作を添えて、本格的酪農経営に関する知識と技術を修得させて、その経営者や技術指導者を養成する。

b　かきん（家禽）コース（女子むき）

鶏、豚に限らないで、七面鳥、あひる、きじ、カナリヤなどから愛がん用動物飼育、養魚など、趣味と実益をかねて副業的経営以上の成果を期待できるような知識と技術を修得させる。

したがって、農家のムコ取り子女をはじめ、将来、農家の主婦となる可能性のある子女の入学が望ましい。

③　造　園　科

関連産業への就職希望者および、その経営者を養成する学科であって、造園コースと林業コースをもち、二年生からそのどちらかのコースへ進む。

a　造園コース

近年とくに重要性を増した都市計画や公共施設、個人住居の環境整備など、造園関係の知識と技術は要求度が高いので、これらの需要に応ずることができる経営者と技術者を養成する。

b　林業コース（男子むき）

主として木材とその加工品の生産や林業経営などの知識と技術を修得させ、これらに関する業務に従事する技術者を養成する。

④　農業土木科（男女共通）

関連産業への就職希望者を養成する学科であって、主として土地改良および農地の開発・保全に関する知識と技術を修得させ、時代の要請に応じて進展している国土開発の一翼を担う技術者を養成する。

⑤　農産製造科

関連産業への就職希望者を養成する学科であって、食品化学コースと製造加工コースを持ち、二年生からどちらかのコースへ進む。

a　食品化学コース（男女共通）

食品についての関心や変遷と進歩には著しいものがあり、食品の成分・分析・栄養・食品衛生や発酵生産、食品の細菌検査などの分野に関する技術者を求める声に応じるため、これらに関する知識と技術を修得させる。

b　製造加工コース（男女共通）

農畜産物はもとより食品添加物も含めて、食品の加工と貯蔵や、加工工場経営に関する知識と技術を修得させる。

また各学科、コースに配された教科・科目、単位数は次のようであった。

昭和43年度入学者教育課程

農　業　科

		単位	I	II 機農	II 園芸	III 機農	III 園芸
国語	現代国語	9	3	3		3	
	古典甲	2		2			
社会	倫理	2					
	社会経済	2		2			2
	世界史A	3				3	
	日本史	0～3		・3			
	地理A	3	3				
数学	数学IA	6	3	3			
	数学IIA	2					2
理科	物理A	3		3			
	化学A	3	3				
	生物	3	3				
保体	体育	7	3	2		2	
	保健	2		2			
芸術	美術I	2	2				
	書道II						
外国語	英語A	3～9	3	・3		・3	
普通教科計		55～58	23	20		12～15	
農業	作物	3～8	3	2		3	
	畜産	0～2		・・2			
	土肥・肥料	0～2				・・2	
	農業機械	2～6	2	2		2	
	農業土木	0～2				・・・2	
	農業経営	4			2		2
	野菜園芸	3～8	3		2		3
	果樹園芸	0～2			1		1
	草花園芸	0～2			1		1
	造園	0～3				・3	
	農業政策法規	0～2				・・2	
	専攻実習	6		2		4	
	総合実習	17	5	6		6	
商業	計算実務	0～2		・・2			
	統計実務	0～2				・・・2	
職業教科計		50～53	13	16		21～24	
特別教育活動		6	2	2		2	
総計		114	38	38		38	

注：機農は　機械営農コース

造　園　科

		単位	I	II 造園	II 林業	III 造園	III 林業
国語	現代国語	9	3	3		3	
	古典甲	2		2			
社会	倫理社会	2			2		
	政治経済	2					2
	世界史A	3					3
	日本史	0～3		・3			
	地理A	3	3				
数学	数学Ⅰ	6	3	3			
	数学ⅡA	2					2
理科	物理A	3			3		
	化学A	3	3				
	生物	3	3				
保体	体育	7	3	2		2	
	保健	2		2			
芸術	美術Ⅰ 書道Ⅰ	2	2				
外国語	英国A	3～9	3	・3		・3	
普通教科計		55～58	23	20		12～15	
農業	園芸	2	2				
	農業機械	0～3				・3	
	測量	5	3	2	1		
	育林	3～4	3				
	伐木運材	0～4			1		3
	林産製造	0～2					2
	木材加工	0～2			2		
	森林経理法規	0～4					4
	造園計画	0～4		2		2	
	造園材料施工	0～7		2		5	
	都市計画	0～2				2	
	造園美術	0～4		・・2		・・2	
	専攻	6		2		4	
	総合実習	17	5	6		6	
商業	計算実務	0～2		・・2			
	統計実務	0～2				・・2	
職業教科計		50～53	13	16		21～24	
特別教育活動		6	2	2		2	
総計		114	38	38		38	

畜　産　科

		単位	I	II 酪農	II 家禽	III 酪農	III 家禽
国語	現代国語	9	3	3		3	
	古典甲	2		2			
社会	倫理社会	2		2			
	政治経済	2					2
	世界史A	3					3
	日本史	0～3		・3			
	地理A	3	3				
数学	数学Ⅰ	6	3	3			
	数学ⅡA	2					2
理科	物理A	3		3			
	化学A	3	3				
	生物	3	3				
保体	体育	7	3	2		2	
	保健	2		2			
芸術	美術Ⅰ 書道Ⅰ	2	2				
外国語	英語A	3～9	3	・3		・3	
普通教科計		55～58	23	20		12～15	
農業	作物	4	2	2			
	園芸	0～3				・3	
	畜産	2	2				
	農業機械	2～4	2	・・2			
	農業経営	4		2		2	
	家畜栄養飼料	2				2	2
	家畜衛生	2				2	2
	飼料作物	2	2				
	畜産加工	0～2				・・2	
	酪農	0～5		2		3	
	家禽	0～5			2		3
	専攻	6		2		4	
	総合実習	17	5	6		6	
商業	計算実務	0～2		・・2			
	統計実務	0～2				・・2	
職業教科計		50～53	13	16		21～24	
特別教育活動		6	2	2		2	
総計		114	38	38		38	

農業土木科

		単位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
国語	現代国語	9	3	3	3
	古典甲	2		2	
社会	倫理社会	2		2	
	政治経済	2			2
	世界史A	3			3
	日本史	0～3		・3	
	地理A	3	3		
数学	数学Ⅰ	5	5		
	応用数学	6		3	3
理科	物理B	5	3	2	
	地学	2	2		
保体	体育	7	3	2	2
	保健	2		2	
芸術	美術Ⅰ	2	2		
	書道Ⅰ				
外国語	英語A	3～9	3	・3	・3
普通教科計		56～59	24	19	13～16
農業	測量	6	4	2	
	応用力学	5	2	3	
	農業土木設計	5			5
	材料施工	3	1	2	
	水理	4		2	2
	農業水利	3			3
	土木製図	0～3			・3
	専攻	6		2	4
	総合実習	17	5	6	6
職業教科計		49～52	12	17	20～23
特別教育活動		6	2	2	2
総計		114	38	38	38

農産製造科

		単位	Ⅰ	Ⅱ 食化	Ⅱ 加工	Ⅲ 食化	Ⅲ 加工
国語	現代国語	9	3	3		3	
	古典甲	2		2			
社会	倫理社会	2		2			
	政治経済	2					2
	世界史A	3					3
	日本史	0～3		・3			
	地理A	3	3				
数学	数学Ⅰ	6	3	3			
	数学ⅡA	2					2
理科	物理A	0～3		・・3			
	化学B	6	6				
	生物	0～3		・・3			
保体	体育	7	3	2		2	
	保健	2		2			
芸術	美術Ⅰ	2	2				
	書道Ⅰ						
外国語	英語A	3～9	3	・3		・3	
普通教科計		55～58	23	20		12～15	
農業	農産加工	5～8	3	2	2		3
	畜産加工	2～5		2	2		3
	応用微生物	3～6	2	1		3	
	食品化学	4～7	3	1		3	
	製造機器	0～2					・・2
	農産加工経営	0～3					・・・3
	食品衛生	0～3					・・・3
	栄養	0～2		・・2			
	食品	0～3					・3
	専攻	6		2		4	
	総合実習	17	5	6		6	
商業	計算実務	0～2		・・2			
	統計実務	0～2					・・2
職業教科計		50～53	13	16		21～24	
特別教育活動		6	2	2		2	
総計		114	38	38		38	

注：食化は　食品化学コース
　　加工は　製造加工コース

専攻科教育課程表

	科目	履習単位数 1年	履習単位数 2年
一般教養科目	哲学	2	
	倫理学		2
	経済学	2	
	法学		2
	政治学		2
	歴史学	1	
	文学	1	
	時事問題		2
	生物学	2	
	体育	1	1
	小計	9	9
必修専門科目	農業経営学	2	
	農業経営演習		1
	農業簿記		2
	農業政治学		2
	農村社会学		2
	農業心理学		1
	作物生態学	1	
	農薬特論	3	
	農業気象学	1	
	農業機械学	1	
	農業実験	2	2
	農業実習	2	2
	小計	20	20
専攻選択科目	稲作	4	4
	野菜	4	4
	観賞植物	4	4
	果樹	4	4
	畜産	4	4
	小計	4	4
	卒論	1	1
	派遣実習	1	1
合計		35	35

定時制農業科教育課程

教科	科目＼学年	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
国語	現代国語	3	2	2	
	古典甲		2		
社会	倫理・社会		2		
	政治・経済			2	
	世界史A			3	
	地理A	2			
数学	数学Ⅰ	5			
	数学ⅡA		2		
理科	特理A			3	
	化学A		3		
	生物	3			
保体	体育	2	2	2	2
	保健	1	1		
芸	書道Ⅰ		2		
外	英語A	3			
	小計	19	16	12	2
農業	作物	2	3		2
	園芸	2	3	3	3
	畜産	2	3	2	2
	農業経営		2	2	2
	土壌肥料			2	2
	農業機械			2	
	作物保護				2
	農畜産加工				2
	総合実習	4	2	3	2
	小計	10	13	14	17
特	ホーム・ルーム	1	1	1	1
	小計	11	14	15	18
	合計	30	30	27	20

備考：1、2、3年生在籍生徒なし
（募集停止）

専　攻

学習指導要領（四五年一〇月）によれば「総合実習」の目標は、「生産や経営管理に関する一貫した総合的な技術の習得」や「農業技術の発展に応じて、農業の生産、経営の合理化を図り、協同、責任、安全を重んじ、農業および農村の向上発展を図る実践的な能力と態度を養う」ことであるが、往々にして、単なる個々の技術の習得や、生産にのみとらわれて、農場運営の便宜のための生産実習に終りがちである。また、特に職業に関する学科に強調されるべき、「能力・適性・進路に応じた」教育が施されず、いろいろな制約により画一的になりやすい。このようななかからは、農業技術の発展に応じられるような創造性豊かで、向上発展を図る意欲的な実践人は育成できない。

そこで本校では、総合実習の一環ともいえる農業クラブの専門分会活動（作物班・野菜班など）を通じて、教師の指導のもとに単独またはグループによるプロジェクト学習を行なって、欠陥を補うようにして来た。しかしこの活動は同好の生徒のみのものであり、また、放課後の活動でもあることから問題の解決にはならなかった。

橋本校長は、この専門分会活動を一歩前進させ、「専攻」という教科科目として教育課程内に位置づけしたのである。「専攻」の目標は次のように示された。

(1) 主として農業に関する科目において履習した実習・実験などの成果と自己の進路希望など併せ考え、自ら題目を選定して研究し、その成果をまとめあげさせ、これに伴う専門的な学習の理解知識を深め、技術の習熟度を高めさせる。

(2) 農業の生産技術や経営の合理化を企だて、自ら問題解決を図ろうとする自主的実践的な能力や態度を養う。

その内容として

(1) 作物、野菜、草花、果樹、土、肥料、農業機械、植物防疫、農業経営に関するもの。

(2) 乳牛、豚、鶏、特殊動物、飼料作物、畜産加工に関するもの。

(3) 造園計画、造園材料、造園施工、都市計画、森林土木、育林、林産製造、森林経理に関するもの。

(4)　食品化学、応用微生物、作物加工、園芸加工、畜産加工に関するもの。
(5)　水利、材料施工、測量に関するもの。

とされている。

前記の教育課程表の通り、四三年度入学者に対しては、三年四単位、二年二単位としたが、四一年度、四二年度入学者に対しても教育課程の一部を改訂して、四三年度において三年（四一年度入学）四単位、二年（四二年度入学）二単位として実施した。四四年度さらに改訂して、三年（四二年度以降入学）三単位とし、四五年度では、農業科・畜産科のみ二年で、一単位とし、他学科は二年では実施しないことに改められた。そして、翌四六年度以降、全学科について二年の専攻は実施しないこととなった。二年では専攻学習のための基礎的な学力が不十分であるというのがその理由である。

コース制の後退

農業の成長が他産業に比し伸び悩み、その格差が増大するや、農業機械化による余剰労力が生じたのと相いまって、農業収入の不足分を農外収入に求めんとして、若年層から順次他産業に出向く者が増加し、「ジイちゃん」「バアちゃん」「カアちゃん」の三ちゃん農業と呼ばれる傾向が生じて来た。専業農家から第一種兼業に、更に第二種兼業にと落ち込み、農業に対する意欲は次第に失われて行った。このような情勢を反映して、高校進学者の多くは普通高校志望で占められ、農業高校への志望は漸減し、次には激減して行った。本校では、各科五〇名の定員から四一年度は四五名に、四二年度から四〇名になったが、定員を割る学科は四四年度から目立ち始め、四五年度には畜産科の合格者はわずか一六名という事態になった。教員の構成上からも、コース制の維持は困難となり、四五年度から農業科にわずかに形を残すだけで、これを廃止するの止むなきに至った。

四八改訂

三八改訂以来高校進学率は更に増大し、九〇%以上に達しようとするとき、学習内容不消化の声はますます増大し、学校格差もまた深刻化して、無気力、学校不適応型の高校生も少なくなくなった。文部省は三八改訂の原則を更に進め、学校生活にうるおいを与えるべき、教科以外の教育活動を改善充実すべく、四八年度以降実施として四五年一〇月学習指導要領を改訂した。その要点は「教科・科目」と「教科以外の教育活動」との二領域によって教育課程を編成すること。必修教科・科目の種類及びその単位数を減少し、普通科男子では一一、または一二科目四七単位、女子は一二、または一三科目四七単位、専門教育を主とする職業学科の男子は一一または一二科目四二単位、女子は一二または一三科目、四六単位となった。生徒の能力・適性・進路に応じることが出来るように「数学一般」「基礎理科」「初級英語」「英会話」などの科目を新設するとともに職業教育の多様化に対応して多くの科目を新設した。農業に関する科目については「農業土木」「農産加工」「畜産加工」などの四科目を廃止した。新たに「農業施設」「農家経営」「食品製造」「食品製造衛生」「土・土質」「造園管理」など一〇科目を新設した。「各教科以外の教育活動」を改善しクラブ活動を原則として週あたり一単位時間履修させることとしたことなどである。

本校では、ほぼ現行（五〇年度）と同様の教育課程を編成したが、クラブ活動は全学年一単位を他校にさきがけて四七年度より実施した。

農産製造科はこの改訂により四八年度入学者より「食品製造科」と改称することになった。

各年度入学定員と生徒数　（　）内は一年生在籍数　四月末

学科／年度	農業	畜産	農林工学	農林	造園	農業土木	農芸化学	食品製造	農業経済	家庭	定時制 農業	定時制 普通	専攻科	全日制在籍総数	定時制在籍総数	専攻科在籍総数	全校生総数
二八	一〇〇(一〇〇)		四〇(四〇)			四〇(三六)		五〇(四八)	一一〇(一一三)	四〇	六〇			三二七(一年のみ)			
二九	〃(七五)		〃(三八)			〃(一八)		〃(四五)	〃(一三七)	〃	〃	五〇(一七)		六七(一二年のみ)	一七		
三〇	〃(九六)		〃(四〇)			〃(三一)		〃(四七)	〃(一一九)	〃(一三一)	〃(五五)	〃(六)		九六八	三三三	三	一、一三三
三一	〃(一〇一)		〃(四〇)			〃(三六)	農産加工	〃(五〇)	〃(一三一)	〃(四四)	〃(五七)	〃(一三)		九三六	二七三	一五	一、一三三
三二	八〇(九五)		四〇(四三)		四〇(四四)		四〇(四六)	四〇(四〇)	三五(一三六)	〃(四四)	八〇(六七)	二〇(一二)		一、〇七一	二九六	一〇	一、二七七
三三	〃(九〇)		〃(四二)		〃(四一)		〃(四六)	〃(四七)	〃(一三七)	〃(四八)	〃(五三)	〃(一二)		一、一四六	三〇九	二	一、四五七
三四	〃(九一)		〃(三九)		〃(三七)		〃(三八)	〃(四六)	〃(一二一)	〃(四四)	〃(四六)	〃(一三)		一、一八七	三一五	五	一、五〇三
三五	〃(八七)		〃(三九)		〃(四一)		〃(四五)	〃(四〇)	〃(一三九)	〃(三七)	〃(四〇)	〃(一三)		一、一六一	三一一	三	一、四七五
三六	〃(六六)		〃(三三)		〃(三七)		〃(三七)	〃(三五)	九〇(七四)	〃(四)	〃(一五)	〃(一五)		一、一〇三	二四〇	五	一、二七六
三七	〃(八九)		〃(四〇)		〃(四四)	農産製造	〃(四三)	〃(四四)	〃(九八)	〃(四三)	〃(五一)	〃(一五)		一、〇〇〇	二六一	五	一、二六六
三八	五〇(五四)	五〇(五一)	五〇(五一)		五〇(五一)	五〇(五三)				五〇(四三)	〃(六)			七〇四	二三	六	八三三
三九	〃(五四)	〃(五三)	〃(五一)		〃(五六)	〃(五〇)				五〇(四〇)	〃(七)			七六〇	二八	七	八八五
四〇	〃(五二)	〃(五〇)	〃(五〇)		〃(五一)	〃(五三)				五〇(四三)	〃(一五)			七五五	二三四	一五	八八四

第四節　生徒指導と図書館活動

一　生活指導

生徒指導部

生徒個々の人格の形成の場としての学校教育には、教科の授業や、ホームルーム、学校行事、生徒会活動など特別教育活動（教科以外の教育活動）のように集団的な活動を通じてこれを行

第四節　生徒指導と図書館活動

一　生活指導

生徒指導部

生徒個々の人格の形成の場としての学校教育には、教科の授業や、ホームルーム、学校行事、生徒会活動など特別教育活動（教科以外の教育活動）のように集団的な活動を通じてこれを行

なう場合と、直接生徒個人を対象としてこれを行なう場合とがある。前者はともかくとして、後者は多数の生徒を対象にして全般にわたってこれを行なうことはなかなか困難である。また、教師は教科学習の指導者であると同時に生活についての指導助言者でなければならない。生徒指導部は、生活指導について統一的な方針のもとに行事を企画し、生徒に対して集団的に、または個々に指導、助言を行なうとともに、ホーム主任や各教師に対しても、その指導方針を指示し、助言、忠告を行なう指導センターである。

本校では、生徒指導部は生徒指導（ホーム・ルームを含む）、生徒会（集会、クラブ指導を含む）、農業クラブ・家庭クラブ等広汎な部門を統合していたが、次第に分化した。四一年には一五学級以上設置している学校については必ずカウンセラーを置くこととなり、五月にカウンセリングルームを設け、安川雅章教諭が初代カウンセラーとなった。このカウンセラーは生徒個人を対象に悩みの相談を受け、助言、忠告を行なうもので、その業務の特殊性ということで四三年度より生徒指導部から独立した。また、農業クラブは四三年度より、生徒会は四四年度分化したが四九年度より再び生徒指導の中に含まれることとなった。

昭和二〇年代から三〇年代初期にかけては、生活物資が次第にでまわるようになり、服装を整え、高校生としての品位を高め、規律を守るという点に力が注がれ、三二年には下駄ばき登校禁止が打ち出された。また校舎が古く大小の建物が複雑に配置されていたので、校舎の愛護、美化が叫ばれる一方では、喫煙防止のため、公安委員の週番を作り、校内巡視を強化した。

三九年新校舎に移転すると生徒玄関に下駄箱を配置し、校舎内はスリッパー履きとなった。駅からの距離も遠く自転車通学の生徒が多かったが通学距離によって自転車通学を制限し、徒歩を奨励した。

長髪の自由化は生徒の関心事の一つであり、生徒指導の悩みのたねでもあった。各代の生徒会は執ようにこの

問題を生徒指導係に繰り返し、四一年には全校生徒のアンケートをとり自由化を要望し、最高学年については二学期以降認めるということになった。四二年、さらに新しく着任された橋本校長との話し合いにより、問題は解決し、同年の二学期より全学年について自由化となった。長髪の自由化にしたがって帽子をかぶらないものが増加し、四五年には生徒会がとりあげる前に生徒指導課においてアンケート調査し、検討して着帽は強制しないということになった。

四〇年代に入って新しく登場したのは交通問題である。自動車の増加とともに交通事故がうなぎのぼりに増加し、大きな社会問題となった。四一年より本校でも交通安全指導が行なわれたが、自転車通学や徒歩通学を対象としたものであった。しかし、高校生でも免許のとれる原動機付自転車や自動二輪車についても、その普及とともに安全指導の必要が生じ、四五年から警察の係官による交通講話、さらに四八年度より警察または業者による二輪車安全運転教室が開かれるようになった。

各年度の生徒指導主任およびカウンセラー主任は次のようであった。

年度	生徒指導主任	カウンセラー主任
28	岡田　一郎	
29	〃	
30	〃	
31	〃	
32	〃	
33	〃	
34	小関　達人	
35	〃	
36	石地興四太郎	
37	〃	
38	〃	
39	〃	
40	山脇　茂	
41		安川　雅章
42	平田　慶実	〃
43	金山　顕光	泉　松雄
44	〃	〃
45	山崎　昭	〃
46	長谷川　昭	喜多　重正
47	〃	〃
48	喜多　重正	横浜　哲夫
49	田村　昌俊	三宅伯二郎
50	〃	古野　春秋

生徒心得と生徒指導計画

「生徒心得」は時代の変遷と、生徒の気質の変化に対処して、少しづつ改訂されて来た。昭和四九年度に再検討して、一部改正された生徒心得は次のようである。

生徒心得

一　服装等について

服装は、次に掲げるものを着用し、すべて質素を旨とする。

(ア) 男子制服は、黒の詰めえり学生服に所定のボタンをつけ、左えりに所定のえり章をつける。夏期（六～九月）は上衣を着用せず、白カッターシャツか白半そでカッターシャツを着用し、すそはズボンの内側に入れる。

(イ) 男子制帽は、黒色学生帽（本校購買部扱いの型）に所定の白線を縫いつけ、所定の校章と所定の耳章をつけ、あごひもはつけない。ただし白線の間隔は五ミリとする。

(ウ) ズボンは制服と同じ黒色とし、極端に巾の広いものや狭いものは禁ずる。

(エ) 女子は所定の服を着用し、左胸部に所定のバッチをつける。夏期（六月中旬～九月中旬）はブラウスを、中間期（五月中旬～六月中旬、および九月中旬～一〇月中旬）は所定のベストを着用する。

(オ) 女子のスカートは所定のものを着用し、長さはひざ頭程度とする。冬期間黒または紺のスラックスを使用することを認める。

(カ) くつ下、手袋、腹巻、マフラーなどは華美でないものを使用する。特に発色の強いものは禁ずる。

(キ) レインコートは所定のものを着用し、防寒コートは華美なものは禁ずる。

(ク) 通学には男女とも黒または茶の短ぐつをはく、ズック（白・黒・紺色）での登校を認める。また雨天や冬期に雨ぐつ（ブーツ）またはゴム長ぐつを使用することはさしつかえない。

(ケ) 校舎内では必ず所定のスリッパまたはズックを使用し、外ばきと区別する。

(コ) 調髪は学生らしく清楚な髪型であること。

(サ) カバンは華美でない学生かばんとし、サブバックとしてナップサック（黒または紺）またはスポーツバックの使用を認める。
(シ) 装身具（ペンダント、指輪、時計鎖バンドなど）は禁ずる
(ス) 上記以外の服装容儀で、登下校するときは、生徒手帳の異装届けにより願い出てホーム主任の許可を受けなければならない。
(セ) 部活動時の服装は、部単位で決められた服装とし、華美になってはならない。

二　禁止事項について
次のような行為は禁ずる。
(ア) 飲酒・喫煙。
(イ) 暴力、脅迫、とばくなど。
(ウ) 生徒相互間の金銭や物品の貸借。
(エ) 喫茶店、マージャン荘、ダンスホール、パチンコ店などの遊戯場、その他たまり場と思われる場所への出入り。
(オ) 交友間の外泊。
(カ) モーターバイク、自動車等の無免許運転。
(キ) モーターバイク、自動車等の貸借。
(ク) 自転車の二人乗り及び貸借。
(ケ) ロッカーの中に教科書など学用品を置くこと。

三　届け出等について
(ア) 自転車で通学するものは、ホーム主任に申し出て、自転車通学申請書に必要事項を記入し保護者署名押印のうえ、係の先生に提出して所定の自転車登録証の交付を受け、自転車のテーブルミラーのすぐ上部につける。ただし自転車登録証は実費を支払わねばならない。
(イ) モーターバイク、自動車等の登下校は禁ずる。しかしモーターバイクについてはやむをえない理由があれば許可することがある。

(ウ) アルバイトは所定の申請書にて保護者よりホーム主任を通じて申請し学校の許可を得て、学校の交付する許可証を携帯しなければならない。（但しアルバイトは休業中に限る）

(エ) 学校内外で金品を募集したり、物品を売買するときは事前にホーム主任または係の先生の許可を受けなければならない。

(オ) 学校内外を問わず、生徒の集会を催すときは、事前にホーム主任、または係の先生の許可を受けなければならない。

(カ) 印刷物の発行や校内に掲示、はり紙、陳列、配布などをする場合は、あらかじめホーム主任または係の先生の許可を受けなければならない。掲示、はり紙はすべて許可印を押し所定の場所に張ること。

(キ) 遺失物、拾得物は直ちにホーム主任、または係の先生に届けなければならない。

(ク) 住所、姓名、保護者、などに変更や移動があったときには、直ちにホーム主任に申し出なければならない。

(ケ) 証明書などが必要なときは、前日までにそれぞれ係に申し出なければならない。

(コ) 校舎や校具はたいせつに取扱い、万一誤って破損、亡失したときは、直ちにホーム主任または係の先生に届けなければならない。この場合その一部、または全部を弁償しなければならないことがある。

四　一般事項について

(ア) 常にことばづかいに気をつけ、生徒として恥かしくないよう行動しなければならない。

(イ) 生徒は登下校のさいは、生徒昇降口より出入りする。

(ウ) 校内では定められた時間および場所以外で飲食してはならない。

(エ) 登校後は授業終了まで外出してはならない。やむをえない用事で外出するときは、ホーム主任または授業担任の許可を受ける（外出届に認印してもらう）

(オ) 定められた下校時刻以後に残るものは、ホーム主任、部顧問など当該教師の許可を得なければならない。

(カ) 図書館を利用するものは、図書館利用規定をよく守らなければならない。

(キ) 身体に異常あるときはホーム主任、保健主事、養護教諭などに申し出ること。

(ク) 毎月進んで健康相談を受け、自己の健康管理に務めること。

(ケ) 学用品その他所持品には、学年、組、氏名を明記しておくこと。

(コ) 校具、施設設備ならびに設備品を放課後使用するときは、あらかじめ係の先生の許可を得てから使用し、使用後はよく整とんしておかなければならない。

(サ) 日曜、祝日、休日などに登校して、校舎、校具、運動場などを使用するときは、当該教師の指導のもとに行なわなければならない。

(シ) 校舎内外の清掃は別に定めるところによる。

(ス) 火災その他非常のときの行動は別に定めた規定による。

(セ) 考査を受ける態度は常に公明正大で、不正な行為があってはならない。

(ソ) 欠席、欠課、遅刻、早退、見学などをするときは下記の手続きをとる。

・欠席をするときは事前に欠席届けを保護者なつ印のうえ、ホーム主任に提出する。緊急やむをえない場合には保護者より学校に電話で連絡し事故のやんだ後直ちに提出する。

・病気のため一週間以上の欠席をするときは、医師の診断書を添える。

・欠課は事前にホーム主任及び教科担任に申し出る。

・遅刻、早退のときはホーム主任に申し出て、届出用紙に認印してもらい、教科担任に提示すること。

・見学するときは教科担任に理由を申し出る。

(タ) 夜間の外出は急用のないかぎり慎むようにし、特に異性と行動をともにしなければならない場合には他人の誤解を招かないようにする。

(チ) 校外における男女交際は、家人の了解のもとに行なう。

(ツ) 水泳、登山、スキー、サイクリング、キャンプなどの野外活動には単独の行動は慎み、あらかじめ計画を申し出て許可を受ける。場合によっては指導者の同行を求めることがある。

(テ) 交通道徳をよくわきまえ、不注意により自他ともに災害を招くことのないように注意する。

(ト) 自動車学校へは春季休業中に通うことが望ましい。

(ナ) 次の場合における欠席、欠課、忌引などは精勤に関係がないものとする。

・公共交通機関の事故などでやむをえないと認められる場合の欠席、欠課、遅刻。

・伝染病発生のため登校を停止された場合
・受験、公式試合、就職などで特に学校から欠席、欠課が認められた場合。
・忌引の場合　服忌は下記に示す期間とする。

父母	7日以内
祖父母兄弟姉妹	3日以内
曾祖父母、おじおば、いとこ	一日

(ニ)　家族または同居者に、法定伝染病が発生したときには、その旨を届けて出校を見合わせる。

昭和五〇年度生徒指導計画は次のようである。

生徒指導計画

(1)　生徒指導の方針

(ア)　あらゆる機会を通じ、生徒と教師との接触を多くし、生活実態をは握し生徒理解に努める。

(イ)　個々の生徒の学校生活における目標を明確にさせ、個性の伸長を図り、特技を持つように指導する。

(ウ)　集団としての人間関係を尊重し、規律の維持の重要性を自覚させるとともに共同生活の楽しさを味わせる。

(2)　要　領

◎　教科外教育活動（特別教育活動）

(ア)　ホームルーム

(a)　教師と生徒のコミュニケーションの成立をはかり、きびしい躾けのなかにもなごやかな家庭的ふんい気を醸成するように努める。

(b)　全生徒にじゅうぶんな個別指導の機会を与えると同時に、集団的協調の精神を養う場とする。

(c)　学校管理・校風刷新・生活善導の基礎とする。

(イ)　クラブ活動

(a)　時間割内の必修クラブ活動とし、全教師をアドバイザーとして配し、全学生一括して行う。

(b)　健全な趣味や豊かな教養を培かい、個性の伸長を図るとともに、心身の健康を助長し余暇を活用する態度を養う。

(c)　生徒もアドバイザーも互に楽しみつつ、活動し心のふれあいを深める。

(ウ)　生徒会活動

(a)　民主的社会の習慣およびその実際を学ばさせる。

(b)　遵法精神を養い、公徳心を高める。

(c)　生徒の自主性を尊重するとともに、学校や地域社会と協力して行動する社会性を養う。

(エ)　生徒集会

(a)　集団組織の育成とその活用を図り、集団への連帯感、所属感を高め自制・自治の力を養成する。

(b)　各種行事の実施によって教養や娯楽の機会に接せしめ、円満な常識と豊かな情操のかん養に努める。

(c)　学校行事、生徒会集会、農業クラブ集会等、随時組み合せて実施する。

◎　個人指導

(ア)　生徒指導資料の整備研究により、家庭と連絡を密にし、面接指導の機会を多くする。

(イ)　自主的な日常生活の設計をたてさせ、個々に指導助言する。

(ウ)　学習、保健上などに困難点を持つ生徒を適切に指導する。

◎　校外生活指導

(ア)　交友関係、家庭環境およびその教育方針、希望等を調査し、生徒の実態をは握して、それぞれ適応した指導対策を講ずる。

(イ)　高・中学校指導連絡協議会と協力し学校間生徒指導の連絡を密にする。

(ウ)　校外関係機関と協力し、非行の防止、交通安全指導を行う。

(3)　生徒指導の重点事項

(ア)　校内生活

(a)　労を惜しまず、公共に奉仕する精神を養い、物を大切にする習慣を身につけるよう努力する。

(b)　個人のロッカーを定め私有物の整理整頓を指導する。

(c)　私有物にはすべて記名をし、混同しやすいものは学年別に色分けする。

(b)　教育相談室（カウンセラー室）を整備してできる限り生徒の利用しやすいようにする。

(イ)　校内外巡視等

(a)　盗難予防、非行防止等のため適宜校内巡視をする。

(b)　校外における服装、態度等の厳正を期し、非行防止のため、随時校外を巡視する。

(c)　交通整理ならびに交通道徳のかん養に努め、あわせて、通学時における服装・態度の厳正を期し、遅刻等怠業の防止に役立てる。

(d)　校舎内外の清掃区域を定め、毎日放課後、自主的に清掃し、月一回、一斉の大清掃を実施する。

(e)　常時、服装および携帯品に注意し、定時ならびに臨時に服装検査を行う。

(f)　自転車に登録番号をつけさせ自転車通学の適正と安全を期する。

(g)　交通機関利用困難な生徒には登下校時のバイク通学による許可制をとっている。

必修クラブ　昭和四八年度より実施される新しい学習指導要領では、教科以外の教育活動を整備統合するとともに、クラブ活動を授業内にとり入れ、週一単位時間を配し、学年進行とした。本校では四七年度より全学年にわたって実施することとし、田村昌俊教諭を主任とするクラブ活動運営委員会を設けて、具体案を練り、四七年四月より実施にふみ切った。その目標は「健全な趣味や豊かな教養を培い、個性の伸長を図る。心身の健康を助長し、余暇を活用する態度を養なう。グループ活動の中で協調性や自主性を養なうと共に、教師と生徒との心のふれあいを深める。」とし、アドバイザー（教師）と生徒の希望により二〇余りのクラブを設定した。翌年度からは生徒会部活動を生徒会関係クラブとしてこのなかに加え、運営の円滑化を図った。

時間割の編成において、このクラブ活動及びホームルーム、生徒集会を土曜日に集中し、週五日制に移行する一策とする橋本校長の構想により、クラブ活動審議委員会を設けて検討したが、問題点が多いということで実施にいたらなかった。

二　進路指導

進路指導係　卒業後の進路の決定は、生涯の方向を決めることであり、学校教育においてもゆるがせにできない問題である。生徒の適性、能力、志望と保護者の志望とが一致するように、助言が必要である。そのためには進路調査、指導に加えて、就職志望者については、職場の開拓、求人の紹介、進学志望者については、学力の向上等、多様な業務がある。

本校では二〇年代から三〇年代の初頃は、生徒指導部の中に、就職、進学係が含まれていたが、三〇年代の中頃から進路指導課として独立し、この中に就職・進学・調査・統計の各係をおいて業務を分担するとともに、業務内容を強化して行った。各年度における進路指導係は、次のようであった。

各年度進路指導係

年度	主任	係
28	岡田一郎	太田・石地
29	〃	石地・田中
30	藤田誠一	
31	〃	北
32	高畠信次	
33	〃	長谷川・平田
34	〃	山崎・四柳
35	〃	山崎・越野
36	久保淳三	山崎・藤谷・越野
37	岡田一郎	山崎・田中・瀬川
38	久保淳三	米岡・山崎・田村・山口
39	〃	山崎・田村
40	平田慶実	山崎・田村・高野・安宅
41	〃	山崎・田村・安宅・小林
42	織田一	山崎・田村・小林
43	長谷川昭	長永・田村
44	〃	長永・田村・久保・島田
45	〃	町田・西浦
46	本田政夫	町田・西浦
47	〃	新屋・山村・大蔵
48	町田邦夫	山村・神保・平野
49	〃	横浜・神保
50	〃	近藤・山岸

空欄は不詳

就職と進学

農業高校となってからは、進学志望が減り、それに代って自営志望が増えたが、就職志望も年々増加し、特に女子の就職志望が多くなった。しかし、昭和三〇年代に入っても就職難は続き、三四、三五年頃になっても、卒業生の就職している企業はもちろんのこと、金沢市内、更に関西、関東にまでも足を伸ばして、就職指導係やホーム主任が求人開拓のため歩きまわった。この頃日本経済が高度成長を遂げる

大学名	33年	34年	35年
三重大学	0	0	1
岐阜〃	0	1	2
千葉〃	0	0	1
東京農業〃	4	7	6
麻布獣医〃	1	0	2
国学院〃	0	1	0
拓殖〃	0	0	1
大阪商業〃	1	0	0
大谷〃	0	1	0
中京〃	1	0	0
金沢美術〃	0	1	0
亜細亜〃	1	0	0
日本体育〃	1	0	0
協同組合〃	0	1	0
金沢女子〃	3	4	2
栄養専門学院	1	0	3
金大看護学校	1	2	2

卒業学年度 / 就職先		公共企業体	農林関係団体	土建測量関係	食品工業関係	金属機械関係	金融関係	デパート・商事	木材・製紙・繊維・染色	その他	合計
33年度	A	8	1	0	0	3	0	1	3	8	24
	F	5	1	5	0	2	0	0	0	1	14
	T	5	1	6	1	1	0	1	1	0	16
	C	2	1	0	12	2	0	0	1	2	20
	E	6	1	1	4	5	2	5	2	13	35
	H	5	4	2	3	1	0	8	17	0	48
34年度	A	4	1	1	1	4	0	0	3	2	16
	F	4	1	3	2	4	0	2	4	0	20
	T	19	0	5	0	5	0	1	8	0	34
	C	2	0	0	13	2	0	1	5	1	24
	E	4	0	1	0	5	3	6	0	0	29
	H	2	6	0	8	5	0	25	8	8	62
35年度	A	2	1	2	3	4	0	3	3	1	19
	F	5	0	0	1	0	0	2	3	1	12
	T	7	0	14	1	9	0	1	2	0	34
	C	2	3	0	13	3	0	2	4	2	33
	E	7	0	0	1	15	0	8	5	2	38
	H	3	6	1	13	11	2	28	15	5	84

（但しA：農業、F：農林、E：経済、H：家庭）

ようになって、就職戦線に変化のきざしがみられ、県外からの求人もふえた。

図表に示したように、本校では、進学する生徒は極めて少ない。普通高校に比べ、農業高校では受験科目についての履修単位は少なく、進学には不利である。しかし、入学後成績の伸びのよいことから、国立大学農学部において、農業高校出身者に受験時ハンディを認めるところもあり、毎年数名の合格者を出していたのであるが、工業の躍進にともなって工学部の設置が増加し、これらの大学にも工学部が設置されるや、次第にこのハンディが認められなくなり、三六年頃より、全くその門は閉ざされてしまった。

この頃、これらの大学や卒業生の就職先を夏休みを利用して関東、中京、関西と訪ね歩いた。この職場訪問は、勤務状況や定着状況、労働条件、安全管理を実地について調査し、就職先に対する要望や、翌年度の斡旋先を決める上に参考となり、進路指導係の重要な仕事の一つであった。また、夏休みを中心にして、模擬面接や、就職模擬試験を実施するなど、この頃の年間行事であった。

四〇年代に入ると、好景気が続き、設備投資がふえ、求人難時代となった。就職については安易な感をもつようになった。四〇年代末のドルショック、オイルショックや金融引き締めの影響で、企業も、求人に対しては慎重な態度をとるようになったが、四九年度では就職希望者をはるかにうわまわる求人があり、完全就職となった。しかし、五〇年度においては、就職希望者に対する職業適性検査、面接指導、就職模擬試験等を実施し、生徒の就職に対する意識を高め、来るべき就職難に備えている。

昭和四九年度卒業生（五〇年三月卒業）の進路状況は次の通りである。

昭和49年度卒業生進路状況

学科 / 進路	農業	畜産	造園	農業土木	農産製造	計
大学	5	2	4	5	1	17
短期大学	7	6		1	2	16
各種学校	2	4	2	5		13
就職	16	12	27	25	34	114
自営	3	2	3		1	9
未定	2	1	2		1	6
卒業者数	35	27	38	36	39	175

自営者

二八年、農業高校としてふさわしい各種の学科を設置して再出発した本校の主体は農業科にあり、一時は各学年二クラス編成で、一学年に一〇〇名の生徒をもち、農業自営を目ざしていたが、産業の情勢の変化と共に、生徒数は減少し、またその進路も、次第に農業経営者から、技術者、つまり、関連産業への就職へと転じて行った。他の学科についても同様であるが、特に農業科、畜産科においては、農業関係の大学、短大への進学者が増加し、高度の技術の修得を希望するもの、または農家の経済的、労力的余裕から生じた潜在自営者（完全な離農ではなく、両親が年老いた後就農するもの）となっていった。

本校の五〇年度の進路指導計画は次のようである。

(1)　進路指導の方針

(ア)　各学科の教育目標を明確に自覚せしめ、自主的に将来の進路と適応性を見出す態度を養う。

(イ)　学習指導、生活指導と連携し、生徒の興味・関心を調査するとともに、各種検査により個人資料を収集し、生徒理解を深める。

(ウ)　個人資料および生徒との面接、相談により客観的に総合評価を行い、自主的に適正な進路を決定し得る助言を行う。

自営者数の変遷

農林工学		農林→造園		農業土木		農芸化学→農産製造		商業→農業経済		家庭		普通		計	
自営数/卒業数	%	自営数/卒業数	%	自営数/卒業数	%	自営数/卒業数	%	自営数/卒業数	%	自営数/卒業数	%	自営数/卒業数	%	自営数/卒業数	%
27/54	50					13/24	54	8/38	21	13/49	27	30/94	41	163/394	41
18/52	35					12/35	34	12/44	27	93/120	78			206/358	58
2/35	6					4/26	15	5/40	13	59/87	68			114/205	56
7/40	18					7/29	24	12/44	27	88/115	77			177/319	55
6/35	17					8/33	24	12/49	24	78/130	60			175/344	51
		10/38	26	5/41	12	6/41	15	7/41	17	56/133	42			151/388	39
		11/37	30	1/37	3	8/45	18	3/43	7	41/134	31			126/385	33
		3/35	9	0/36	0	1/38	3	6/43	14	26/139	19			66/369	18
		4/36	11	3/39	8	2/37	5	5/39	13	28/135	21			81/371	22
		1/31	3	0/34	0	2/36	6	4/32	13					32/191	17
畜産		6/38	16	0/42	0	0/36	0	0/43	0					40/245	16
20/50	40	3/48	6	0/49	0	5/49	10							49/250	20
8/44	18	5/45	11	0/53	0	2/43	5							50/239	21
13/49	27	1/48	2	1/48	2	2/46	4							40/243	16
13/38	34	3/35	9	1/38	3	1/24	4							40/178	22
7/31	23	3/33	9	0/38	0	4/40	10							27/182	15
5/37	14	2/33	6	0/31	0	2/36	6							17/179	9
3/18	17	3/27	11	0/29	0	1/21	5							10/134	7
1/16	6	1/32	3	0/26	0	2/33	6							7/140	5
0/16	0	1/33	3	1/34	3	0/30	0							7/149	5
2/27	7	1/38	3	0/36	0	1/39	3							5/175	3

学科 / 事項 / 年度	農業	
	営業自数 / 卒業数	%
29	46/64	72
30	71/107	66
31	44/63	40
32	63/91	69
33	71/79	73
34	67/94	71
35	62/89	70
36	30/78	38
37	39/85	46
38	25/38	43
39	19/86	22
40	21/54	39
41	35/54	65
42	23/52	44
43	22/43	51
44	13/40	33
45	8/42	19
46	3/39	8
47	3/33	9
48	5/36	14
49	1/35	3

(2)　要　領

(ア)　学科主任およびホーム主任との連絡を密にし、テキスト「農高生の進路」をロングタイムに利用し、進路についての自覚を促す。

(イ)　進路志望調査、各種検査の実施により個人資料を収集整備する。

(ウ)　求人開拓を行なうとともに、求人情報を整理し、求人企業者の意向を調査、研究する。

(エ)　自営・就職・進学のための相談室を設け、適正な助言を与えやすくし、生徒の志望を明確化する。

(オ)　就職・進学模擬試験を適時行ない、学力および態度の向上をはかる。

(3)　本年度の重点事項

(ア)　個々の生徒の適正に応じた進路指導を重視する。

(イ)　進路相談室を充実する。

三　図書館活動

運営機構

図書館は、図書館主任・研究員・図書館司書・図書館運営委員会・図書委員会によって、管理運営されている。昭和二八年度から昭和五〇年までの図書館主任・研究員は次の通りである。

年度	主任	研究員
二八年	綿谷勝以	土橋・宮永・北
二九年	綿谷勝以	
二〇年		
三一年	加藤清次	英顕秀・吉田藤弥
三二年	小関達人	北堯三・内藤幸一
三三年	松雄	吉村・蓑地・北本・吉岡
二四年	泉 松雄	越野・小倉・藤谷・吉村
二五年	泉 松雄	長谷川・藤谷・四柳・瀬川
三六年	泉 松雄	長谷川・池上・石川・小島
三七年	泉 松雄	加藤・長谷川・石川・小島
二八年	泉 松雄	吉村・長谷川・吉村・西
三九年	泉 松雄	織田一
四〇年	泉 松雄	織田一
四一年	泉 松雄	鹿角延夫
四二年	泉 松雄	鹿角延夫
四三年	鹿角延夫	古保勲
四四年	三宅伯二郎	古保勲
四五年	山脇茂	金山顕光
四六年	山脇茂	金山顕光
四七年	町田邦夫	町田邦夫
四八年	長谷川昭	山根公
四九年	山根公	山根公
五〇年	山根	中田仁

（「石川高校図書館」）

ここで、図書館の動きを断片的にながめてみたい。

昭和三九年、織田　一研究員は、「本校における社会科教科別図書リスト」を作成した。本年度の予算は次のとおりであった。

予　算

予算総額	県費	校費	PTA	図書費	生徒会	繰越金
三七〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇		二七〇、〇〇〇			

予算支出

(%)

図書費	雑誌費	人件費	事業費	設備費	維持費	視聴覚費	予備費	渉外費	運営費	教科費
六七・六	一二・一		三・五	八・一		三・二	五・四			

図書、雑誌、新聞数

図書総冊数	生徒一人当冊数	購入雑誌数	寄贈雑誌数	購入新聞数	寄贈新聞数	図書委員	計
八、八七六	一〇	一三	八	一	三	三七(男) 一(女)	三六

昭和四〇年、織田　一研究員は、「学習参考書目録」を作成した。この年、泉　松雄主任は、「図書館の管理運営」と題して、研究発表を図書館大会で行なった。その資料をのぞいてみたい。

図書館の状況

(1)　施設設備　図書館の施設は校舎の西北端に位置し、閲覧室（三七・五坪、収容定員五五人）、書庫（一〇坪）に、およそ一〇、〇〇〇冊を蔵書としている。

(2)　図書予算　毎年三～五万円の増額が行なわれて、本年度は四〇万円が充当されている。

○ＰＴＡ費　三〇万円

◇図書費	八〇％	二四〇、〇〇〇	
参考図書	三〇％	九〇、〇〇〇	
教養図書	一六・七％	五〇、〇〇〇	
教授図書	一三・三％	四〇、〇〇〇	
雑誌、新聞	一六・七％	五〇、〇〇〇	
製本、修理	三・三％	一〇、〇〇〇	
◇施設費	三・三％	一〇、〇〇〇	



図書閲覧室

◇雑　費　六・七%　二〇、〇〇〇
◇事業費　六・七%　二〇、〇〇〇
◇予備費　三・三%　一〇、〇〇〇
○県　費　一〇万円
◇図書費　七〇%　七〇、〇〇〇
継続図書　一三・七%　一三、七〇〇
新規図書　五六・三%　五六、三〇〇
◇施設費　三〇%　三〇、〇〇〇

(3)　記念図書　現存している開校初期の図書中には、農芸化学の写本や農学に関する原書が多く見受けられるところから、往時の学問に対する意欲のなみなみでなかったことが察知されて〝大いなる明治〟に、いまさらながら敬意の念を抱くのである。

本校に学ぶ後輩にこれらを見る機会を与え、向学の精神を直接に受け取らせたいと考え、書架二基におよそ五〇冊を選択して「記念図書」とし、新校舎への移転を契機に閲覧室に展示して、特別閲覧の機会を与えるように取りはからっている。

(4)　蔵書状況　その概要は、閲覧図書（約六、〇〇〇冊）、資料図書（約一、五〇〇冊）、稀用図書（約二、五〇〇冊）である。現在の蔵書の状況は下記の通り。

種別＼分類	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会科学 3	自然科学 4	工学 5	産業 6	芸術 7	語学 8	文学 9	計
閲覧図書	七七八	三九九	六五四	二三九	四六〇	三四三	一〇五〇	三五五	一六七	二八四	五六三九
資料図書	九七	五八	一六二	二一八	二三三	五七	三五〇	四二	五七	二六四	一五三二
稀用図書	一六〇	一二〇	二三七	五二五	三六〇	一五二	五二六	九二	八六	二八四	二五三五
計	一〇四五	五七九	一〇四三	九八二	一〇四三	五五二	一九二六	四九〇	三一〇	一七三六	九七〇六

（昭和四〇年第一学期末調査）

(5)　蔵書比率　蔵書比率については、実業高校に関する文部省の基準比率が特に定められていないので、学科学習内容に特色があり、これに即した図書の選択や構成を整える必要から、昭和二八年度教育課程の改訂を機会に試案として作成したものである。文部省基準比率（普通高校対象）に全国農校冊数比率を参照し、昭和三八年度本校教科課程換算比率を参考に、現有蔵書比率を基にして望ましい線を考察し、手近かな目標としている。

種別＼分類	総記 0	哲学 1	歴史 2	社会科学 3	自然科学 4	工学 5	産業 6	美術 7	語学 8	文学 9	計
文部省	八・〇	五・〇	一三・〇	一〇・〇	一五・〇	五・〇	五・〇	七・〇	七・〇	二五・〇	一〇〇・〇
全国農校	七・一	三・九	九・一	一〇・三	一一・五	六・〇	一七・六	四・六	四・四	二五・七	一〇〇・二
本校蔵書	五・八	三・二	一〇・五	三・七	一二・五	五・五	二一・四	五・六	三・四	二〇・〇	一〇〇・〇
本校比率	六・〇	三・〇	九・〇	一〇・〇	一五・〇	五・〇	二三・〇	五・〇	五・〇	一九・〇	一〇〇・〇

本校現有蔵書比率については、沿革史の概要に掲げているように、昭和二三年（一九四八）より昭和二七年

（一九五二）まで総合制高校時代を経ているので、その間の事情が蔵書構成上にあらわれている。

管理運営

(1)　図書課　図書館の管理運営は、学校管理運営機構のうちに、教務、生徒、進路、保健、農場などと並んで図書課がおかれており、主任教諭、係教諭五人、事務員一人、計七人が企画運営、宣伝紹介、選考購入、読書指導、調査統計図書整理、庶務会計などの係を分担して、図書委員会活動の指導にあたっている。図書課の係活動については、役割が甚だ地味で煩瑣なために継続担当することを望まれない状況であっては、図書館活動の進歩改善が図りがたいので、なるべく三年くらいはかわらないよう要望している。

(2)　図書運営委員　全般的な図書館活動の態勢として、図書運営委員会が学期毎に開催されている。運営委員は教科群より選出された六人の委員より構成されている。委員選出状況は下記の通りである。

国語、社会	一人
数学、理科	一人
保体、芸術	一人
英語、商業	一人
農林、土木	一人
畜産、農製	一人

(3)　図書委員会　図書館の活動役割の性質上から、図書委員会の組織をもち、図書課指導のもとに図書委員会(月一回)を開催し、分担の係活動と当番活動を行なっている。図書委員会の組織的活動を円滑に行なうために、正副委員長、書記、各係長などによる小委員会の補助組織を設けている。必要な場合には当番長を含めているが、別に当番活動を充実するために当番会議を開催している。図書委員は各学級より選出された二名の総数四二名で、任期は一年であるが、活動内容の上から、なるべく継続するように望んでいる。本年度からは図書委員希望生徒の募集を行なって、一段の活動充実を図っている。

(4)　図書館利用規定　図書館の利用規定については、生徒手帳に次のように掲載されている。

一　図書貸出に関すること

A　貸出は、参考図書は始業時より四時三〇分まで（後期時限は四時まで）の間に行なう。教養図書は三時二〇分より四時三〇分まで（後期時限は四時まで）の間に行なう。（ただし、土曜日は一時までとする。）

B　貸出期間については、参考図書は二日間（月曜日貸出しの場合は水曜日に返却のこと。）教養図書は三日間（月曜日貸出しの場合は木曜日に返却のこと）とする。

a　各自借用カードに記載し、借出書とともに係員に提示する。

b　返書は各自が係員に提出し手続きを確認する。

c　図書の貸出しは一人一回一冊する。

d　教養図書は再貸出しの手続きを認める。（一回）

e　禁帯出書は館外へ持出すことはできない。

f　長期貸出しは必要と認めた場合に限る。

二　図書閲覧に関すること

A　図書館の開館は始業時より午後五時まで（後期時限は四時三〇分まで）とする。（ただし、土曜日は始業時より午後一時までとする。）

B　館内心得事項

一　閲覧は手を洗って行なうこと。

二　館内では脱帽静粛のこと。

三　服装態度に品位を保つこと。

四　かばん、防寒具は持参しないこと。

五　施設、器具類は移動しないこと。

三　団体利用に関すること

A　団体利用は事前に了解を得ること。

B　授業中の団体利用は教師指導のこと。

四　図書館の施設器具の館外持出しは原則として認められない。

(5)　活動組織の骨子

(イ)図書館活動の内容として、先づ、読書意欲を盛り上げるためには、どうしたらよいであろうか。(ロ)図書館へ来させるための新鮮な魅力をつくるには、どうしたらよいだろうか。(ハ)秩序ある爽やかな利用を行なわせるには、窮屈にならないように、どう調和したらよいであろうか。(ニ)利用状況をつかむには、どうしたらよいだろうか。(ホ)そのために図書委員はどんな活動が必要であろうか。以上、このような要請から出発した活動の積み上げが行なわれている。将来は、小委員会において図書委員会活動を立案計画上、指導を受けて自主的に役割を果たすことができるようにまで育成したいと考えている。活動組織は、なるべく継続実施して次第に成績が向上するように、また、委員会活動に定着して委員が交代しても受け継いでやり易いように工夫配慮している。

(6)　係活動の概要

◇企画運営　図書館管理計画、予算の編成、図書館運営計画（図書館活動予定表・書類整備の立案）、図書委員会指導計画（図書委員分担表・当番委員心得）、諸規則の立案、図書館道徳の指導計画。

◇宣伝紹介　新着紹介プリント（月二回）、展示計画（月二回）、視聴覚活動計画（年三～五回）、読書会指導、新着資料紹介（月一回）

◇選考購入　図書購入予算資料の作成、図書選考資料の作成（県費図書〈年三回〉、参考図書〈年三回〉、教養図書〈年三回〉、希望図書〈年三回〉、蔵書統計の作成と観察（新旧更新計画・分類別整備計画）、図書充実状況表、図書案内パンフレット選別。

◇読書指導　読書の栞プリント〈月二回〉、図書時報発行〈年二回〉、推薦図書選定〈年三回〉、読書会指

導〈月二回〉、参考図書利用指導（〈年五回〉、図書リスト活用、年間図書利用計画表〈全生徒〉）
◇調査統計　読書傾向調査プリント（月一回）、ホーム個人別貸出状況（月一回）、図書貸出利用表彰資料作成、読書アンケート資料（年一回）、業後閲覧状況表（月一回）、推薦図書利用調査（年三回）
◇図書整理　当番整理活動の指導〈月二回〉、書架別冊数調査〈月一回〉分類別冊数調査（年三回）、〈カード照合、不在図書、製本図書調査、除籍図書調〉、資料総合運用計画、図書委員会指導。
◇庶務会計　受入事務、書類整理、支払事務、館内整理、貸出と返書。

(7)　学校行事としての図書館活動　この面の図書館行事については、特に意を用いるべきであると考えている。これまでに実施してきたものをあげれば次の通りである。

第一学期　時の記念日標語課題と表彰、校内俳句大会の課題と表彰
第二学期　読書感想文の課題と表彰、読書アンケート調査、図書貸出利用優秀ホーム表彰
第三学期　校内かるた大会と表彰

最近は中止したものもあるが、これにかわるものを考えている。優秀なものには表彰を行なうと共に、図書館に対する関心の喚起に役立てている。

主な図書館日誌

昭和二八年度
五月　二日　読書世論調査
二月　七日　図書委員一〇数名は、綿谷勝以先生、杉森潤郎先生に引率されて小松高校図書館を訪問した。

昭和三三年度

四月二一日　開館

四月二六日　第一回図書委員会が行なわれ、津田紀禎（委員長）、中島紀子（副委員長、森　泰昌（調査係長）、岡田紀夫（宣伝係長）、北田　武・北村寿志・福田育生・大杉拾三・内田尚一・北岸　毅（当番長）の役員が決まる。委員は六組に分かれ、勤務は週二回で、一回は図書の貸出、返済に従事し、他の一回は書物の整理修繕等にあたる。更に全員が㈠調査、㈡宣伝、㈢詮衡のいずれかの係に属し、それぞれ月報の刊行、館前のホールの装飾、展示、図書の選択を分担掌握する。

五月六・七日　花壇の整備、花苗の植付

おりからの五月晴れを利用して、業後男子委員の手により、図書館南側花壇の土盛り、草むしりが行なわれた。翌日は、紙谷久之先生の御厚意により御世話いただいたマリーゴールド・コスモス・カンナ・ハゲイトウ等を、泉、吉村両先生の御指導により次々に植えつけた。

昭年三六年度

一月一〇日　業後、第三学期図書委員活動について小委員会を開き、各係長より活動予定発表と連絡協議が行なわれた。

四月　一日　校舎改築育友会負担金の見返りとして、昨年度に引き続き二〇万円（県費図書予算）計上された。

六月二〇日　校内俳句大会は、塩田紅果先生を迎えて行なわれ、優秀句を表彰した。その後、塩田紅果先生の講演と座談会を開催。

天　遠蛙今日も事なく夜深し　　3E　宮川正徳

地　刈りおえて麦笛を吹く小昼時　　3H　小西和枝
人　夕どきは忙しきものよ花菖蒲　　3E　本多和子

六月二四日　午後二時、教職員五名、委員一八名の二水高校図書委員が来館。研究懇談会と農場見学を実施。五時有意義に終了。
七月二八、九日　全委員交代で敬愛の蔵書を虫干（図書館蔵書虫干）。
九月二二日　読書会（啓明会）。
一一月　七日　読書調査。

昭和三九年度

四月一六日　松農、松任高、統合図書委員会開催。移転時までの暫定的な開館態勢を整えた。
五月二五日　新校舎図書室への著書移転開始。昨年来、数次の蔵書梱包活動に松任高委員諸君の御協力を深謝。
六月　一日　新図書室開設。委員諸君の奮励は見事であった。
七月二〇日　終業式後、時の記念日標語入賞者表彰。読書感想文課題。
八月二九日　夏休み中の後期開館を終了。涼風に読書生の快適な姿が続いて、嬉しい一コマであった。
九月　七日　読書のしおり（第八号）、新刊紹介（第二号）、読書傾向調査（第四号）を配布。
九月一六日　図書委員会を開催。第二学期活動予定表により協議。
一〇月　一日　環境整備委員会活動により、窓越しに「黄金ヒバン並列植樹」清雅にながめられる。
一一月一七日　第五限、特活時に、読書週間にちなみアンケート実施。翌日業後より、第三次図書室整備活動

を行ない、基盤を整えた。収容定員五六名。

一二月　八日　　図書特報（第一四号）の原稿調達。

昭和四八年度

一　新刊ニュース掲示板設置　図書運動の一環として、今年度より新刊の案内を徹底するために、生徒玄関休憩室の前に新刊ニュース掲示板が設けられた。

二　図書館教養講座ひらく　今年度はじめて「図書館教養講座」を七月二二日午後二時一五分から、図書館閲覧室で開きました。講師は、山根研究員にお願いして「松任農業高校の歴史について」という演題で一時間話された。受講者は三一名と少なかったですが、たいへん有意義だった。

三　読書会再スタート　ここ数年、休会になっていた読書会は、今年度から再会して年間三回行なわれた。

四　本田先生「農業及園芸」寄贈　昭和二〇年四月一〇日から本校の教育発展に助力された本田政夫先生が四月から、七尾農業高等学校教頭に栄転されたのを機会に、農業関係の貴重な雑誌「農業及園芸」（昭和一三年一〇月号～昭和四七年六月号）を寄贈された。図書館では製本にして多くの利用を待つ。

五　図書館に三書庫開設　六号室の狭い一室に山のように埋もれていた蔵書が毎日利用されなく泣いてる状況を見た山根研究員は、図書委員と協議して整理することに意見が一致。六月一六日から六号室にある蔵書整理。九月一三日から図書館の古典整理。その書の収容能力の場所なく七号室借用。六号室、七号室を分類に分け整備。一一月六日にほぼ完成。一一月七日　橋本竜太校長来館され、書庫巡覧。六号室にある残り書物を心配され、八号室の利用を受ける。一一月二九日　職員会の席上、長谷川図書主任より先生方に三書庫開設が知らされる。すなわち、第一書庫は国文、英文、歴史、家政学、数学関係。第二書庫は農業、商業経済、教育史料、

辞典関係。第三書庫は生徒会誌をはじめ、学外からの寄贈誌等を収める。

昭和四九年度

四月一八日　業後三時一〇分より第一回図書委員会を開催。利用規定、当番委員心得、委員分担表、活動予定表等について協議。第一次図書整理活動を行なう。

五月　八日　読書傾向調査・希望図書調査を三年ぶりに全生徒を対象に行なう。

五月　九日　第四回図書委員会で、読書傾向調査・希望図書調査資料の集計を行ない、今後の運営方針を検討。

五月二三日　一年生を図書館に案内して、図書館利用について説明。

五月二九日　業後図書館和室にて「青春を語る会」を開催。青春の生き方、学校への希望等について語り合う。

七月一五日　第七回図書委員会開催。第二次図書整理活動を行なう。雑誌の利用者目立つ。

七月一八日　第一回読書会。

七月二〇日　「図書時報」（第二四号）配布。調査集計発表・随想「私の青春時代」（橋本校長先生）等好評を博す。

八月　九日　県高校読書会が白山青年の家にて行なわれ、本校から浜　良介君が本校代表して参加。

九月一七日　第八回図書委員会を開催。第二学期活動予定により協議。第三次図書整理活動を行なう。

一〇月　九日　業後図書館和室にて「青春を語る会」を開催。高校時代について話し合う。

一〇月一一日　第二回読書会開催。

一〇月二三日　第一六回校内読書感想文コンクール最終選考委員会（長谷川・藤田・三宅・山根・中田仁各教諭）で入選者発表。

一〇月二四日　読書感想文コンクール入選者を二カ所に掲示し、栄誉を称える。

一一月　一日　農業文化祭を利用して、校内貴重図書を公開する。

一一月二七日　晩秋の午後一時二〇分、松任若宮神社を中心に松任文学散歩をし、郷土の文学者の足跡をたどる。文学的雰囲気に浸ってさわやかな気分であった。二一名参加。（山根・中田仁両教諭引率）

一二月二四日　第一六回読書感想文コンクール入選者の表彰式を校長室にて行ない、橋本校長が〝地道な活動だが、しっかりと頑張って下さい〟と入選者に激励される。

昭和五〇年度

一月三一日　第三回読書会を開催。

三月　七日　「図書時報」（第二五号）刊行。読書感想文コンクール入選者の作品を紹介。

三月二九日　橋本校長・窪田武徳七尾農高校長・二口事務長が、図書館・書庫を巡覧される。

四月一五日　業後三時二〇分より第一回図書委員会を開催。利用規定、当番委員心得、委員分担表、活動予定表等について協議。委員長山田朋之、副委員長村中政信、巻埜和弘が選出された。事業として、「図書分類カード作成」を中心に、読書会、文学散歩、その他等を決めた。

四月二一日　糠雨の降りそそぐ午前一一時一〇分、小松市矢田野町、宮川精一先生宅へ、橋本龍太前校長・山根図書館主任・岡田実習教諭・小柳助手・小山技能員・和泉主事・成谷主事の八名が訪問して一二五〇冊の愛蔵書の寄贈を受ける。

四月二三日・二四日　一年生を図書館に案内して、図書利用・図書分類位置について説明を行なう。
五月　八日　委員一年の会を昼食時を利用して、各係（統計係・広報係）を選出。宮川文庫の整理方法について協議。

「図書時報」主要目録

作品題目	執筆者	発館報名	発行年月日
読書週間に当って	長瀬徳男	松高読書通信4	昭28・11・10
図書月報刊行の言葉	森　泰昌	図書月報1	昭33・6・24
図書館の歴史	板谷　光	図書月報3	昭33・9・30
読書の意義	高橋八十平	図書時報5	昭34・6・25
われわれの読書生活について	板谷　光	図書時報5	昭34・6・25
読書雑感 ―随想―激励	吉村喜彦	〃	〃
躍進を目指して	泉　松雄	〃	〃
再び読書について	泉　松雄	図書時報6	昭35・2・25
冬こそ読書の好季節	高橋八十平	図書時報7	昭35・7・15
読書について	北井又衛	図書時報8	昭36・2・20
わたしの三猿論	西田邦子	〃	〃
心の姿勢	吉野　進	図書時報9	昭36・7・18
温古知新	泉　松雄	〃	〃
高校生の短歌	油野利彦	〃	〃
	四柳嘉照	〃	〃

私の事始	小関達人	〃	〃
読書の視野をもっと広く	鳴戸良一	図書時報10	昭37・3・7
我輩は図書である	由水敬子	〃	〃
読書随想	藤田誠一	図書時報11	昭37・7・20
読書会	加藤正一	〃	〃
農業クラブと図書館	岡本春樹	〃	〃
家庭クラブと図書館	西要子	〃	〃
スポーツと図書館	表一成	〃	〃
新入生から見た図書館	今村芳子	〃	〃
『知性』について	泉松雄	図書時報12	昭38・3・20
図書館活動と私達のかんがえ	福田利昭	図書時報13	昭38・9・1
読書漫筆	寺尾義臣	〃	〃
読書の人間形成	吉野進	図書時報14	昭40・1・20
趣味と図書館	中村正志	〃	〃
私の読書視野	小谷口幸司	図書時報15	昭40・7・13
農業クラブと図書館	山行雄	〃	〃
人生と読書	石地与四太郎	図書時報16	昭41・10・11
図書選考について	長谷川昭	〃	〃
青年時の読書を悔いる	池田博	図書時報17	昭42・9・18
読書断想	橋本龍太	〃	〃
読書しよう	中本次雄	〃	〃
禅に生きる沢木興道	田村義明	〃	〃

高校時代に読んだ本	松本博光	〃	〃	〃
テレビと読書	池田博	図書時報18	昭43・7・10	〃
古書の話	山脇茂	図書時報19	昭44・1・30	〃
ふれること踊ること	鹿角延夫	〃	〃	〃
考え方	根津能久	図書時報20	昭44・7・18	〃
春宵	寺島恒機	〃	〃	〃
日曜日	堀栄子	〃	〃	〃
読書雑感	西要嗣	〃	〃	〃
弁当	三宅伯二郎	〃	〃	〃
命を大切に	森岡高	図書時報21	昭45・1・26	〃
読むということ	橋本龍太	図書時報23	昭49・1・20	〃
心の旅路	長谷川昭	〃	〃	〃
柳田国男と石川県立農学校	山根公	〃	〃	〃
図書館で	埜谷喜代子	〃	〃	〃
私の青春時代	橋本龍太	図書時報24	昭49・7・20	〃
読書雑感	坂野下みよ子	図書時報25	昭50・3・9	〃

読書会

昔から「故きを温ねて新しきを知る」（『論語』）の諺の如く、ここに、本校読書会の流れを繙ときたい。

現代におけるテレビの普及は目をみはるばかり、日本でもすでに全国推定四百万台に及ぶという。世帯数を約二、〇〇〇万とみるとき、五軒に一台の普及率である。しかも数年ならずして、八百万台に達するだろうと三三

年の新聞に記してある。昭和三三年四月、泉昱夫君を中心とした図書委員によって、懸案の「読書会」が組織された。この時は、委員だけのものだった。

昭和三四年四月から、同好生徒によって活動を開始することになった。図書館としては読書会を全校生に展開しようとしていた。四月二〇日に「規約し、活動方法が検討された。「規約」第一条はこの会は読書活動によって人生の諸問題を討議し究明するを目的とするとした。現在熱意ある一二名の会員で組織し、今年の第一回が五月二〇日に行なわれた。使用テキストは、小林多喜二の「蟹工船」をとりあげ時代思潮作品の内容を探究した。その後、「野菊の墓」・「三四郎」・「心」・「生活の探究」などを主なテキストとした。特に、一一月三〇日、物理教室においての読書会は実に有意義だった。島木健作の「生活探究」は主人公である駿介が、農村生活の中に自らをおいて、その中から真実の生活の在り方を描いたもので、主人公の生活に対する考え方を学び、また、大正末期から昭和初期の文学史の流れを知る上に意義があった。泉　松雄・藤谷昭教諭を助言者に、田島善日出・宮西敏夫・中村三吉・山本静江・坂谷光・武部靖之・窪田富枝・任田和子・東川久子・山崎早苗らが参加した。また定時制普通科では西井外志久・浜本が中心に読書クラブを盛んにした。なお研究日には会員が発表。討議方式をとることを目差す。研究内容は、「図書時報」または掲示板によって知らせることにした。しかし、悩みは会員がクラブに所属しているため、種々の事情により研究活動が重複して意の如く会合をもてないことがあった。

昭和三五年には、「波」（山本有三）、「腕くらべ」（永井荷風）、「伸子」（宮本百合子）、「方丈記」（鴨長明）・「車輪の下」（ヘルマンヘッセ）等の作品を通して読書会は次第に活発になっていった。ある生徒は、「この読書の世界は無限大の奥行きと広さを有する。しかし、はたして一生のうちにどれだけの本を私達は読む

ことができるだろう。読書会を通して視野を広めたい」と述べている。また、六月二二日、二三日、二四日の三日間は実に楽しく盛会であった。西本正一や加登を中心にテキスト「阿部一族」（森鴎外）を使用した。最初は静かだったけれど後半に入ると活発な話し合いとなり、連日時間のたつのも忘れて六時近くまで夢中で話し合った。散会の時はその場の雰囲気が惜しくて、次回はなるべく早く開くようにという注文がしきりにでたことがあった。読書会指導の藤谷教諭は「読書会が生まれて三年目になるが、関心をもち研究する生徒がサークルのリーダーになって討議し発表することは極めて頼もしいと思っている。とにかく読書し、感想を思い切って述べられる意欲がどの生徒にもあってほしいものだと思う。たとえ平凡な問題でも堀りさげて考えてみる思索力を養ってゆかねばならぬ」と述べている。

昭和三六年一月、「阿部一族」（森鴎外）の研究をすすめた。殉死の問題が一番重要視された。真剣な良い意見・感想の出たことはたいへんよかった。しかし、内容が非常にむずかしかったせいか、「もう少し平易な本が望ましい」という意見も出された。そういうせいか一年生の出席は少なかったようであった。当時、会員だった徳野は、「私達が自分一人で楽しむのも良いけれどもそれをもう一歩広めるため、教養を豊かにするため、人生を有意義に生きるため、それにはやはり〝仲間〟があった方がよいと思われます。とにかく、本を読もうと意欲のある人は、この会に入るべきだと思います。そこで親しく語り合い、お互いに意見を交換したらよいと思います。そうしたら、みんなの意見も聞かれ自分の考えも進んでくると思います。」と述べている。六月一四日には、「狭き門」（アンドレジード）をテキストとした。先ずヒロイン、アリサの生き方、思想は果して妥当か、また、なぜ恋人ジェロームがアリサを偶像視して行動的立場を取り得なかったかという点に意見が集中し、それぞれ現代人の立場から同じ世代の者としての批判がのべられた。

昭和三七年一月二四日、初会合を打出しに、月二・三回の読書会を持った。はじめのうちはまごついたが、二月頃には会の雰囲気が盛り上ってきた。この会の面白さは何といっても各人が感想を発表し、それについてお互いに種々と討論するところにある。時に会員二八名が脱線して思わぬ方向に発展することもある。使用したテキストは「放浪記」（林芙美子）・「車輪の下」（ヘルマンヘッセ）・「友情」（武者小路実篤）へと続く。四月二二日、二三日の二日間は男女二六名が参加して、「暗夜行路」（志賀直哉）を探究した。この会には、宮崎綾子・北信也・岡本敏子らが中心に活動した。五月一八日に「野菊の墓」（伊藤左千夫）を使用し二五名の参加をみた。若杉慧の「エデンの海」とヘミングウェイーの「キリマンジャロの雪」を九月から一二月までの期間に深く探究した。青年と一女学生との恋愛的感情の処理や人生に対する問題の解決などを深く考える問題を提起しあった。八月二〇日に、「読書のしおり」（第一号）が発行された。その中に、読書会の活動報告。中山芳子、尾崎智子ら六名が書評を発表。読書会活動をしている北村邦雄は「昭和三三年に読書会が発足され、当時は会員数二〇名で意気込みも高くスタートされ、実によく頑張って、よい基礎が作られた。おかげで、現在は会員意識も固く都合の悪いところがあっても意欲でカバーして、集まってくれるため、徹底して開くことも困難ではありません。今後の希望としては、他校との交歓などを開いて、私達にない良点を取り入れてもっと充実した厚味のある読書会を作り上げて行きたい」とのべている。また、指導する加藤教諭は、「気楽にのびのびと読書をたのしみ話し合い、研究して、次第に量とスピードをあげて、しっかりしたものにしたい」とのべておられる。会員二八名は互いに努力し励ましあいながら活動をした。

昭和三八年四月に、上野瑠美子、上田俊憲、北村邦雄らは、「現代は自主性の時代です。皆さん。さざえの殻に閉じこもっていては駄目です。進んで、この喜びの大きい読書会に入り、メンタルエージの成長を図ろうでは

ありませんか」と二五名の会員を代表してアピールしている。読書会は新しい試みとして、松任高校と合同で会員四〇名の参加のもとに今年の活動を開始した。A・B班の二グループに分かれ、全員が同じ本を購入せず、二種類の本を相互に交換し合って読む仕組みで経費を有益に使おうというアイデアである。第一回目は、「友情」・「女の学校」が選ばれ会員一同は、こうだ、ああだと活発な意見を出し合っていた。「破戒」・「罪と罰」・「若きいのちの日記」・「風と共に去りぬ」・「伊豆の踊り子」・「ロザリオの鎖」をテキストに使用した。「読書のしおり」に、笠野つや子、松本健二ら二〇名が書評を発表した。

昭和三九年は年間一三回行なわれた。二一名の会員は黒本を中心に活発な読書会活動をした。「彼岸過迄」（夏目漱石）・「草枕」（夏目漱石）・「女の学校」（ジイド）・「狭き門」（ジイド）をやった。特に「あすなろ物語」に長時間費やして意見交換があった。「生命ある日」（塩瀬信子）も香りの高い有意義な会合であった。「読書のしおり」に、下村正耕・藤村澄子ら一九名が書評を発表した。

昭和四〇年を迎え、三一名の会員は楽しい雰囲気の中で、なごやかに読後感の交換を行ない、ともに考え、よりよい人生行路の探究をモットーに、四月二〇日に第五回読書会を開く。武者小路実篤著の「友情」とシュヴァイツァ著の「水と原生林のはざまで」を課題とした。前者は、青春期におけるわれわれ若者の生き方、考え方を暗示させ、後者は、原生林の医師となった著者の第一次アフリカ滞在の貴重な記録を探る。このごろ「読書会」は「本校における文化活動の一環として、独立した姿勢で推進していることを認識して頂きたい」と宮本正武はいっている。松本博光、古保勲教諭の指導のもとに、読書会の場所「芸術室」や専攻科教室は電灯がつく時もあった。六月二八日に金沢文学会を行なった。「読書のしおり」に中谷健、小谷幸司、石田が書評を発表した。

昭和四一年一月二〇日、一年定時制教室で、「山の音」（川端康成）の読書会をはじめとして、「我が愛を星

に祈りて」・「車輪の下」・「氷点」・「若い日の生き方」・「こころの瞳」・「愛と死を見つめて」・「陽の当る坂道」等を一年農業土木科の教室で書物を読破して互いに意見を交換した。「読書のしおり」に寺田茂、中井潔ら六人が書評を発表した。

昭和四二年　海道正は「輝く瞳は、読書によって一段と光りを増して生き生きし、何事も吸収したい私達に、図書は心の友になってくれます。読書会がありますから進んで入会して下さい。」と呼びかけ、鹿角延夫、浜屋襄二教諭の指導のもとに、一月三〇日初会合があった。テキストとして、「華岡青洲の妻」・「さらばモスクワ愚連隊」・「竜馬がゆく」等を探究した。図書館主任の鹿角教諭は読書のすすめを強く主張した。「読書のしおり」に、津田弥生、村田洋一ら九名が書評を発表した。

昭和四三年は、西尾政明が中心に「読書会」を運営した。四月二七日の新緑のころ、一三名は卯辰山・兼六園方面へ文学散歩に出かけ、室生犀星、泉鏡花、徳田秋声の文学碑を巡って歩いた。会の指導者古保勲教諭の解説は楽しかった。八月一八日、金沢市湯涌町の江戸村へ出口秋一、西村稔、元尾玉枝ら数名が参加した。「銀の匙」（中勘助）を中心に「海を見ていたジョニー」（五木寛之）らその他のテキストを使用し、一三回の読書会を行ない、地道に活動していった。

昭和四八年四月、山根研究員は、ここ数年間、休会になっていた読書会を今年度から再会しようと思いたち、一年生中心に呼びかけ一年生の松尾信、高本早苗を中心に活動を開始した。第一回読書会は六月二二日一年造園科教室において参加者三一名が机を囲んで「舞踏会」（芥川龍之介）を探究した。明治の文明開花期を背景としたこの作品をいろいろな角度から追求して有意義な会であった。第二回読書会は七月二二日午前一〇時四〇分から、図書館閲覧室に一九名の生徒が集まり、テキスト「城の崎にて」（志賀直哉）を使用した。まず、死の状況

描写やその死についての感想を抜き出させ、蜂・ねずみ・いもりと三つの小動物を通過するにつれて、死に対する想念が漸層的に、しだいに高次のものへと昇華していく点を互いに意見交換した。また、情調的、情緒的な面についていえば、〝静かさ・寂しさ・落ち着いた雰囲気〟などといったことばで表現できるものが、この作品の基本的色調として終始貫かれているということにも気持を生徒に感じさせ、しかもその基本的情調は、あの三つの小動物を目撃する以前から、すでに作者の身辺に漂っていたということも見落とすことのないように山根研究員は助言していった。九月八日午後二時から第八回金沢地区高校合同読書会に、松尾　信、高本早苗、浜　良介が参加した。第三回読書会は、九月一八日授業後、一年造園科教室に一四名の生徒が参加して、テキスト「鼻」（芥川龍之介）を使用して行なわれた。「鼻」は生徒諸君におなじみで、「今昔物語集」から取材した王朝物である。鼻をもてあました二つの理由、自尊心を回復するための方法、鼻の治療のありさま、矛盾した二つの感情等について一時間半ばかりをついやして追求しあい、活気みなぎる会であった。助言者は山根研究員だった。

昭和四九年七月一八日第一回読書会が「投網」(一)を使用して行なわれた。三一名の参加者をみた。「投網」の巽　辰吉は語り手の「私」よりは、小学校で二、三年上級の子供であるが、作品の中にあらわれる時は、常にその眼の光に特徴があり、それだけが強調して描かれている。小学校時代の巽　辰吉は、「私」たち下級生が川で泳いでいると、箱眼鏡を水面にあて、鉾を持って上流から下ってきて、「じろりとこちらに一瞥を投げるだけで、取るにたらない下級生などは完全に黙殺していた」と描かれている。……というふうに、順にあらすじを追って意見交換をした。一〇月一一日、第二回読書会開催。今年度はじめて買求した集団読書テキスト「走れメロス」を使用して行なわれた。農業土木科三年教室は三九名の参加を見た。「走れメロス」は正義と友情の美しさをうたいあげた作品である。文章は簡潔で力強く、構成はドラマチックで、全編に躍動的なリズムがみなぎって

いる。元尾昭男、北村浩一らを中心に、正義の人、信実の人メロスの心理描写を追求しあった。昭和五〇年一月三一日第三回読書会を開催。集団読書テキスト「高瀬舟」（森　鴎外）を使用した。食品製造科二年の教室には二八名の生徒が参加した。歴史小説の代表的傑作「高瀬舟」の安楽死問題を互いに追求しあい、楽しい一時間一五分の会であった。助言者は、山根　公、中田仁教諭であった。

第五節　学校行事

戦後新教育の著しい特色は、教育の主目標を全人的人間形成においた点である。その意味は学校教育が従来のように、単に教科学習に止まることなく、さらに進んで情緒的・社会的・趣味的・娯楽的・職業的な肉付けを行なうことによって、人間形成の完璧を期そうということである。その形成に大きく貢献するものの一つに学校行事等がある。これは「学校が計画し実施する教育活動とし、生徒の心身の健全な発達を図り、あわせて学校生活の充実、発展に資する。」ことを目標とし、人格の全体的発達と深く関連するものとして教育課程を構成する重要な一領域となっている。

本校では、およそ次のように行われて来た。

学校行事（昭43年度学校管理計画より）

4月	始業式、入学式、対面式、新入生しつけ教育、身体診断、測定、健康診断、講演会
5月	マラソン大会、予防接種、避難訓練、交通教室
6月	スポーツバッジテスト、走ろう会
7月	走ろう会、保健講話、終業式、学校登山
9月	始業式、水泳大会、走ろう会、避難訓練
10月	運動会、走ろう会
11月	駅伝競走、走ろう会、農業学文化祭、修旅行
12月	避難訓練、走ろう会、終業式
1月	走ろう会、始業式
2月	籠球大会、保健講話
3月	走ろう会、柔道大会、卒業式、終業式

いる。元尾昭男、北村浩一らを中心に、正義の人、信実の人メロスの心理描写を追求しあった。昭和五〇年一月三一日第三回読書会を開催。集団読書テキスト「高瀬舟」（森　鴎外）を使用した。食品製造科二年の教室には二八名の生徒が参加した。歴史小説の代表的傑作「高瀬舟」の安楽死問題を互いに追求しあい、楽しい一時間一五分の会であった。助言者は、山根　公、中田仁教諭であった。

第五節　学校行事

戦後新教育の著しい特色は、教育の主目標を全人的人間形成においた点である。その意味は学校教育が従来のように、単に教科学習に止まることなく、さらに進んで情緒的・社会的・趣味的・娯楽的・職業的な肉付けを行なうことによって、人間形成の完璧を期そうということである。その形成に大きく貢献するものの一つに学校行事等がある。これは「学校が計画し実施する教育活動とし、生徒の心身の健全な発達を図り、あわせて学校生活の充実、発展に資する。」ことを目標とし、人格の全体的発達と深く関連するものとして教育課程を構成する重要な一領域となっている。

本校では、およそ次のように行われて来た。

学校行事（昭43年度学校管理計画より）

4月	始業式、入学式、対面式、新入生しつけ教育、身体診断、測定、健康診断、講演会
5月	マラソン大会、予防接種、避難訓練、交通教室
6月	スポーツバッジテスト、走ろう会
7月	走ろう会、保健講話、終業式、学校登山
9月	始業式、水泳大会、走ろう会、避難訓練
10月	運動会、走ろう会
11月	駅伝競走、走ろう会、農業学文化祭、修旅行
12月	避難訓練、走ろう会、終業式
1月	走ろう会、始業式
2月	籠球大会、保健講話
3月	走ろう会、柔道大会、卒業式、終業式

一　松高祭と農業文化祭

松高祭と松農祭

第七章で述べた通り、「松高祭」は総合制高校時代に登場し、隆盛を極めて地域の名物となった。農業高校となっても、内容・名称は継承され、三八年、現在の松任高校が誕生した翌々年の四〇年に、紛らわしいというので、「松農祭」と改められた。

松任農高となった始めの頃は、内容は総合制の頃と変っていない。三一年度の第七回松高祭を振り返ってみよう。

組織　企画委員会　全日制（一九名）、定時制（三名）、専攻科（一名）
　　実行委員会　総務、演技、展示、宣伝、運動、ホーム連絡、品評会、整備、食堂、販売
予算（松高クラブ援助費総額）八〇、〇〇〇円（各クラブ活動費以外）
期日　一一月一七日・一八日
内容　展示（一七日・一八日）教室
　　絵画展、写真展、書道展、文芸展、新聞展、科学展、農機具展、畜産展、野菜・果樹展、被服・手芸展、茶華道展、農林工学展、農産加工展、山岳展、県下小中学校新聞コンクール
　　演示　一七日・一八日　講堂
　　演劇「次郎案山師」「蚊遣火」舞踊
　　県下小・中学コンクール　一八日
　　珠算大会、弁論大会
　　即売、農産物品評会、食堂
　　スポーツ（OBとの親睦試合）一八日
　　相撲、柔道、ハンドボール

この年は、前年に開校八十周年記念事業を行ない、多少予算を縮小しているが、一時中断していた品評会を復活したり、OBとの親睦試合を強化したり、意欲的に取りくんでいる。農業高校となってから数年を経ているのに、まだ総合制時代から完全にぬけ切れないという悩みが、農業クラブ関係の生徒から訴えられている。翌年の三二年度では、家庭科の人形劇が製図室で催され、教室は子供達でいっぱいになり、劇中の人形と一緒に歌うというように盛りあがった風景も見られた。

三三年度には、「松高祭の意義」に対する検討がなされた。そして「地域社会への貢献やサービスよりも、生徒自身の教養を高め、地道な研究を助長する方向へ進むべきだ」「一部の生徒（生徒会執行部、展示関係クラブ、食堂・即売関係生徒など）のみのものでなく、全体の生徒が参加する形にすべきである」という反省のもとに、展示を中心にし、即売、県下中学校の各種大会・品評会を中止した。また食堂は、純益を上げて松高祭運営の資金に充てるためにノルマがかけられていたので、「学校からの援助費を多くし、食堂の規模を縮少する」など改革がなされた。しかし、このような改革の意義は必ずしも達成されたとはいえなかった。

馬場町校舎一棟が新築された三六年度では、一〇月一五日より三日間にわたって開かれた。これを行なうために一ヵ月前から審議委員会を設けて企画を練り、全体としての規模は縮少するが、より充実度の高いもの、農業高校にふさわしいもの、という目標を掲げたが、展示内容はやはり一夜づけの借りもの資料に過ぎず、自分達の体験した成果や、実用性に富んだ研究が欠けていた。演技についてもマンネリ化し、独創性のあるものが見当らず、テレビの影響から来た寸劇や、紅白歌合戦が会場を湧かせたにすぎなかった。三七年度には、食堂も開かれなくなり、いわゆる「すっきりした形」となり、「外より内へ」が徹底されたようであるが、当然ながら一般客は遠のき、さびしいものになった。しまいには展示まで縮少したらという意見も出て来るようになった。

三九年度は校舎落成記念行事の一環として行なわれたので、特別なものとなったが、家庭科がなくなったこと、文化部関係クラブが減ったこともあり、展示では学科の紹介が中心となり、全体としてはさびしいながらも「農業」に重点が移ったという点で意義があった。

四〇年の松農祭に行なわれた京都大学教授柏　祐賢先生の講演「これからの農業」は、なかなかの好評で、翌年の九十周年記念講演も、重ねて同教授に依頼することとなった。

四一年の九十周年記念松農祭は、昔にかえって多彩なものとなった。展示では、「絵画展」「書道展」「写真展」「ＪＲＣ展」「農芸科学・園芸クラブ展」「各学科紹介写真展」「華道展」に「郡下小中学校生徒作品展」が華を添え、新しいところでは「ステレオ・コンサート」「ビデオコーダー実演」が行なわれた。また、完成した記念会館の案内をかねて、二階和室で茶会が催された。しかし、何といっても久し振りで再開された「食堂」と「即売」が人を集めた。



農業文化祭

農業文化祭　四二年度から始まった「農業文化祭」は、「松農祭」を受け継いだものとしては、あまりにも飛躍したものであった。橋本校長は先ず農業文化祭開催の意義を「日頃の学習や研究の成果を、地域社会との交流の場で問うことによって、地域社会における本校の存在意義と農業教育の将来に及ぼす効用を、生徒各自がそれなりに自覚して、地域農業の開発に寄与したいという夢を育てることを根本とし、あわせて、若者のエネルギーを、農業文化祭の各行事を通して精一ぱい発散させ、もっ

て青春を謳歌させその感激を心に刻ませること」として、「金が無いから出来ないというのはおかしい。行なうことによって金をひねり出せばよい」という一見無謀な予算構想をもって実施するか否かを尋ねられた。これは橋本校長の強い意欲と、卓抜したアイデアによるものであり、その具体的な構想が明らかにされると、一抹の不安を残しながらも実施と決定したのである。そして、さらに生徒の意見も加味して、細部にわたる内容が煮詰められて行った。

第一回農業文化祭は、「広告は取るな」「育友会からの援助もなし」「生徒会はノータッチ」という「無」から出発した。展示等の経費はすべて、食堂及び即売の収入でまかなうという、文字通りの独立採算であり、赤字は絶対に許されない。文化祭全体の台所である即売、食堂は必死であった。このようにして、四二年一一月三、四の両日にわたって開催された。内容は次表（六七一頁）のようであった。

宣伝にも力を入れた。学校前には三箇所のアドバルーンがあげられた。チラシが付近民家へ、また宣伝と即売をかねた移動販売車（トラック）がスピーカをつけて町村を走った。満載した白菜・じゃがいも・たまねぎなどがたちまち売り切れ、白菜などは在庫が底をつき、生徒の家の畑に植えているものを急遽仕入れて間に合わすという売れ行きであった。マスコミも一役買ってくれた。新聞に会場のようすが紹介され、テレビにも写し出されたからである。会場は好天にめぐまれ、一万を越える人達でごった返した。中西知事も見学に来校し、驚嘆されたのである。

翌四三年度以降、展示部門の種類を多少変更したり、会場の変更があったりしたほかは、ほぼ同様の内容で、一一月三日を中心に開催された。ただ、四五年度より専攻科生徒が減り、その活躍が期待されなくなると、全体の予算を縮少しなければならなくなった。専攻科は「うなぎ釣り」「バーベキュー（その後瓦焼きとして定着し

第 1 部

農業改善教室……〝伸びゆく石川農業の姿〟と題して石川県農業の現状、10年後の石川農業の姿、石川農業開発、兼六早生の不稔現象
土と肥料教室……石川県の水田土性分布とその特徴
肥料の基礎知識と消費量のうつりかわり
病害虫と農薬教室…今年の主な病害について、その発生時期および防除対策
生活の科学教室……飲料水と食品の貯蔵について
飲料水については、その種類と松任を中心にした伝染病
食品の貯蔵については、貯蔵（包装）容器と冷蔵庫を中心に研究
農業機械教室……耕起、代かき機の今昔と題して、原始時代より原子時代に至る耕転作業機の変遷が一目でわかる珍品をズラリと展示
農林特産物教室……県内・県外の有名特産物を陳列し、その生産環境をたづね、その特徴を知っていただく
専門コース施設・設備公開…温室、畜舎、肉加工室、水理実験室など

第 2 部

校 史 紹 介……旧時代の写真、古書、こっとう的価値のある数々の珍品を展示して本校90年の歩みを紹介
学 科 紹 介……農業、畜産、造園、農産製造、農業土木、定時制、専攻科の各学科の活動機械の各クラブの活動状況を写真展示により紹介
農業クラブ活動紹介…作物、園芸、畜産、造園、農芸化学、草花、農業土木、農業機械の各クラブの活動状況を写真展示により紹介
生徒会活動紹介
…美術クラブ…先輩の残していった作品を目標にして、その美事な業績に追いつき、更に追い越そうと、力強く、密度のある作品を公開
…書道クラブ…個性ある達筆
…写真クラブ…連続5年中部日本ナンバー1の伝統をもつ本校写真クラブの決定的瞬間の数々を展示
…華道クラブ…男子主体の現役、O・Bが力を合わせての現代自由華、三種生けなど、池の坊流
…茶道クラブ…流儀は表千家と固苦しいが、形式にこだわらず、気楽な雰囲気での茶会。男子手前も拝見できる
…J・R・C…キャンプファイヤーの仕方、アイバンク、救助法、点字訳表など
…P・F・C…クラブ内容紹介説明、世界各国の宇宙切手やオリンピック切手、雑誌、国内外の手紙など、この機会でなければ見られない珍品を展示

第　3　部

海外移住展……主として中・南米への移住民の活躍を写真によって紹介
ぼくらの作品展……郡内小中学校生徒のすぐれた図画、工作、書道、手芸などの展示
余　技　展……安田県総務部長、山腰県厚生部次長、中島野々市町長、宮田松任町長、橋本学校長をはじめ同窓会員、本校職員の余技、収集品、趣味展
なお、8ミリ映写会も行なわれる
盆　栽　展……菊花とりどり。盆栽の初歩から奥伝まで
苗木や盆栽の即売もいたします
盆　石　展……松任愛石会会員の特別出品
古　物　展……有名な松美会の賛助出品があり、二度と見られないような貴重な文化財が数多く展示される
造形・芸術展……本校の各学科毎に1教室をあて、思いのままの創意工夫をこらした造形芸術が展開される。今年度文化祭の引出物の1つ。ご期待を乞う

映画会案内（体　育　館）
3日｛午前9時～12時……大いなる黒部　隠し砦の三悪人
午後1時～4時……新しい農業のために　隠し砦の三悪人
4日｛午前9時～12時……南極再会の記録　暖春
午後1時～4時……シルクロードの旅　暖春

食堂案内（記念会館食堂・微生物実験室）
松農カレー¥100　松農うどん¥40　すし¥100
特製コーヒー¥30　特製ミルク¥30
特別吟味の味と特別奉仕の量で、皆様方の御来校をお待ちします。
御休息は喫茶部でどうぞ。

茶会案内（記念会館階上和室）
3日のみ　一服40円

即売会（運　動　場）
野　菜……にんじん、ごぼう、さといも、ばれいしょ、たまねぎ、その他
果　物……みかん、りんご
苗　木……55品目
鉢　物……18品目
農産加工品……カステラ、カルピス、ドーナッ、ラーメン、かんづめ、紅茶
スーパーよりも安く、品質極上のものを販売いたします。

バーベキューコーナー（運　動　場）
トン肉、鶏肉の野趣味豊かな焼肉の味をお試めしください。

つり堀コーナー（運　動　場）
うなぎのつり堀です。つりのおもしろみを味わってください。

た）」など、奇抜な着想で人を集め、機動力を生かして宣伝販売に奮闘し、予算をうわまわる収入をあげていたからである。

四八年度は学校農業クラブ全国大会が金沢を主会場にして行なわれ、事務局校として学校を挙げて準備に当ったので、校内だけを対象に、収穫祭・家畜慰霊祭を主として行なっただけであるが、四九年度再開した。

二　修学旅行

戦後の社会的混乱からようやく立ちなおり、戦前の安定期に近い生活水準に戻ると、修学旅行が復活し、二五年頃から一部の学校で実施されるようになった。昭和二七年一二月一二日に明年度三年生修学旅行実施準備委員会を設置した。この委員会は学校・生徒・父兄の意見を十二分に受け入れ慎重に協議されて、時期・行先・実施日程・経費等を決定して修学旅行目的を達成するために計画準備する。昭和三三年三月二五日、九州方面と関東方面の二コースに分けて三年生に実施し、以来数年、二コースが続いた。そのころ、県教委は、修学旅行時の健康管理の徹底を指示し、さらに修学旅行基準を制定し（県教委規則一七号）、各学校にこれが準拠を要請することとなった。その内容を要約すると、まず修学旅行の目的は学校教育の活動の一環として教科学習を直接経験によって拡充すること、旅行期日は高校では五泊六日以内を原則とすること、旅行実施は当該学年の生徒数の八〇％以上の参加を要すること、引率者は生徒三〇人に教師一人が付き添い、女子生徒参加の場合は婦人教師の付き添いを必要とすること、経費は積立金制により五、五〇〇円程度とすること、その他保健衛生、事故防止、引率者の注意など多岐にわたって指示されている。

昭和三三年は、九州方面は三月二〇日から二六日、生徒二六七名（経費六、〇〇〇円）。関東方面は四月二〇

日から二五日、生徒一二六名（経費五、〇〇〇円）で対象は二年生であった。



高崎山にて

旅程の跡

長崎（九州方面）

長崎は坂の長崎オランダ屋敷と歌にまでなった南蛮文化の輸入地として又原爆都市としても有名だが、この長崎で「三四郎」ではないが驚いたものに二つある。それは坂の多いことと、自転車の風変りなことだった。前車輪は太く、ハンドルも低く横に開いて、見るからに異様なものであった。又長崎は異国情緒も強く大浦天主堂や崇福寺においてもそれが伺える。又原爆の爆心地には平和記念像が建てられていて、これは右手を上方にあげて原爆の脅威を示し、左手は永遠の平和をすすめする姿である。又国際文化館というビルディングが建てられており、六階建のスマートなものでその中には原爆の資料等が保存されてあった。この長崎で最も強く感じられたのはその災害の復興が目ざましいのに感心した。

佐久間ダム（関東方面）

佐久間ダムは天竜川に造られた発電用のダムであり、我々の行った時は雪と強風の中であったが、ダムの堰堤の高さが百五〇米で、これに使用した材料を道路舗装に用いれば東京～大阪間を五寸の厚さで舗装が出来、又この人造湖を満水すると諏訪湖の二倍の水を貯水出来るという雄大なダムの眺めは想像以上のものであった。このダムに立っての印象は唯人間の力の偉大さを深く感じるだけであり、天竜の自然と近代科学最高の技術で造られた佐久間ダムとが調和された美しい眺めが我々多数の見学者の胸に刻み込まれた。

（松高新聞「旅行記」昭和三三年七月）

その後、修学旅行については委員会を設け、十分討議が行なわれながら実施し、昭和四一年度までの旅行目的は「生きた社会の政治・経済・文化の実態を直接見聞し、これらを批判、研究して既習の知識を総合発展させ、今後の正しい判断力と社会常識を身につけ、団体生活の中の一員としての行動的訓練を体得し、社会人としての

望ましい生活態度を養うこと。」という柱が立てられ、実施後、その反省の上に立ち、事前指導・現地の指導・事後指導を行った。昭和四二年以後の旅行目的は、「学生生活の楽しい思い出の一つであります。この意味から広く社会の政治・経済・文化の実態を知り、これからの人生を豊かにする上に大いに役立てこの機会に生徒間の親睦を深め、明日の学校生活のエネルギー源とするよう心掛けると共に集団の中の一員としての自覚を持って責任ある行動と秩序を守ろう」とし、実施時期、目的地を多少変更し、今日に至っている。昭和四二年の修学旅行から、県教委の指導もあり、生徒の疲労度も考慮して五泊六日の範囲で行なうことになった。

修学旅行実施状況一覧

年度	引率団長	学年	旅行先	日程
35	石地	3	関東	5.21 ～ 5.26
	藤田誠	3	北九州	5.21 ～ 5.26
36	小関	3	関東	5.20 ～ 5.25
	石地	3	北九州	5.20 ～ 5.26
37		2	関東	2.23 ～ 2.26
	藤田誠	2	北九州	2.23 ～ 2.28
38	小関	2	南九州	2.20 ～ 2.26
	加藤	2	南九州	2.21 ～ 2.27
40	山脇	2	中国・北九州	2.21 ～ 2.27
41	池田	2	学科別関東	10.31～11.15
42	石地	2	山陽・北九州	11.7 ～11.13
43	松井	2	山陽・四国	11.7 ～11.12
44	泉	2	東北	9.20 ～ 25
45	長谷川	2	山陽・北九州	11.11～11.16
46	喜多	2	山陽・北九州	11.10～11.15
47	山崎	2	山陽・北九州	11.26～12.1
48	紙谷	2	山陽・北九州	11.5 ～11.10
49	藤田	2	南九州	10.12～10.17

しかし、現在の修学旅行には、旅行の低廉化・見学地の精選・集団生活などの指導法・自然に親しむ等種々と改善されなければならない問題をかかえ、昭和四九年度に、修学旅行委員会（喜多重正委員長）を設け、再検討し、新たに、昭和五〇年度から生徒の自主的学習がコースに取り入れられた。

三　その他の学校行事

学校遠足

春秋の二回、ホームの親睦のため学年または学科単位で実施しいる。昭和三四年の秋の遠足のコースをのぞいてみよう。

一年生は那谷寺法皇山方面、二年生倶利伽羅方面、三年は東尋坊方面行楽の一日を過ごした。

那谷寺法皇山

松任駅九時四〇分発の上り列車に一年生全員が乗り込み車内はワァワァ、キャアキャアと大変な混雑である。遠足気分を満載した列車は一〇時二〇分動橋駅に着き、ここから徒歩で約一時間、最初の目的地である法皇山へ向った。加藤先生の「この法皇山は千二三百年以上も昔の私達の祖先の墓で、横穴式の前方後円墳であります」との説明も、もどかしく弁当にパクついた。この後、約五〇分歩き待望の那谷寺へ、紅葉も色づき始め、白い岩肌をバックにした本堂がわびしさをただよわせて、何もかもすべてが印象的な光景だった。

倶利伽羅方面

古戦場などの史跡を見学したり雄大なながめに感嘆していたが、徒歩コースが多かったためはじめは足どりも軽かったのが、だんだんつかれをみせ自然の観賞などをするところではなかった人たちもいたようだ。

東尋坊方面

三年生は最上級生であるというので金津駅から観光バスを利用し東尋坊、ラッキョ工場、松島水族館などで楽しんだ。ただ楽しむだけではいけないというので先生の各解説に耳をかたむけていた。

柱状摂理とか盤状摂理とかの岩石の呼び名も、またこのような岩石が全国で数少ないというのも始めて知って感心してい

た人が多かった。またラッキョ栽培地では数十町歩の広さのラッキョ畑を持っているというのに、みんな大変驚いたようであった。

学校登山

登山道徳が乱れがちになって、正しい登山のあり方を指導者のもとに直接体験し、不屈の忍耐力、精神力を養う。また、山の自然に親しむことを目的として開始された本校の学校登山は、昭和二五年以来、毎年実施されている。時期は、夏山シーズンで天候の最も安定している七月下旬から八月上旬が設定された。

登　山　実　施　表（昭26～37年）

年度	期　日	日　程	経費
26	7.23～25	松任―鶴来―白山下―白峰―室堂	600
	8. 1～3	松任―富山―粟巣野―室堂―地獄谷温泉	700
29	7.25～27	第1日（松任―富山―粟巣野―弥名滝―弘法―天狗―地獄谷 第2日（地獄谷―立山―別山―剣御前―地獄谷―追分―滝見―ブナ―粟巣野―松任）	300
30	7.22～24	同上コース	1500
31	7.23～25	同上コース	1700
32	7.22～24	同上コース	1700
33	7.24～26	同上コース	2000
36	8.1～3	松任―富山―千寿ケ原―美女平―弥陀原―天狗平―地獄谷―立山	2200
37	7.24～26	同　上	2200

参加者は、毎年五〇名内外の生徒と引率教諭により、パーティが編成されている。目的地としては、当初は立山が多く、一時立山、白馬岳、白山と交互に実施したこともあるが、今は毎年白山となっている。

立山登山記　　藤井　弘

私達松任農高の四十余人のパーティーは七月二十四日朝立山に向って出発した。汽車・電車・ケーブルカー・バスに約四時間ゆられて弥陀ヶ原に着いた。いよいよ自分達の足で標高三〇一五米の立山頂上まで登るのである。あざやかな服に重そうなリュックを身につけた若い人達で山じゅう活気がみなぎっていた。山こそ若いエネルギーを思う存分発散させる所だと僕は思った。弥陀ヶ原から約一時間登った時山は私達の足を疲れさせた。私達はこの時が一番つらかったが頂上から下りて来た人達にはげまされながら登ったのでそれ程苦にしなかった。（中略）一の越で一泊した私達一行は翌朝三時頃起床して防寒具を身に付け懐中電灯の明かりを手に持ち頂上に向った。頂上に着いた時空一面薄赤色だったが太陽が見え始める約五分程前になると空一面真赤な色に変化した。今日も昨日同様に晴れた良い天気だったので富士山や浅間山や白山など日本でも有名な山々が見えた。その景色に見とれていた私達一行は御来迎を拝むことを忘れかけ様とした程だったが無事念願の御来迎を拝めたことは私達にとってこの上にないみやげ物になった。（下略）

（松高新聞「立山登山記」昭和三七・一〇・一七）

陸上競技会

ホーム対抗でトラック、フィールドに記録を競う本校第一回の陸上競技大会が実施されたのは、昭和二九年であった。

第一回校内陸上競技大会は去る十三日快晴に恵まれ時々微風もなびくという絶好のコンディーションのもとに運動場で挙行された。この大会は秋の運動会と共に一つ新たに〝陸の祭典〟が設けられ、学期末考査も済み、ホット一息の生徒諸君を喜ばせた。特に開会式に当っては、集合は何時になく迅速に行なわれ、選手も名誉と意気に燃をたぎらせ健康な一日を屋外で送った。午前はまず百米競走より始まり続いて順調に種目が進められ、最後に本校呼び物のマラソンが本校―倉光―平松―林中小前―倉光―本校の約六キロのコースを約二〇〇の選手で覇が争われた。午後は砲丸投げより八百米競走まで、夏を知らす蝉の声を聞き乍らホームの名誉のために奮闘し、十六種目にわたる競技を無事終了して午後三時頃終了した。引き続

いて表彰式が行われ、全校総合優勝の一年男子藤田（崇）Hに持ち回りの優勝楯が授与された。

（松高新聞「陸上競技大会終る」第三〇号）

その後四六年から金沢市陸上競技場で行なうようになった。

運動会　運動会は、生徒たちにとって学生生活の大きな想い出の一ページである。

秋空は我々の熱と意気を激励するかのように青く澄みわたり、その大空へ若きエネルギーを代表する数発の花火が打ち上げられ、大会の火ぶたが切られた。今年は趣向を少しかえ、青、白、赤の三組に分かれて熱戦が繰り広げられた。この三分割の方法は他のホームとの親善という意味において有意義であったと思う　しかし経済科の方で同ホームの男女が二分され応援の方法に困ったという風景も見られたが、これは少し考えてほしかった。プログラム最初は女子生徒のタルコロガシにはじまり演技種目三十回に達した。種目数が多かったせいか午前の部における進行が遅れたけれども役員の活躍と生徒の協力により回復した。内容についても毎年同じようなものが見られたが、遅乗り競争や先生方による紅白玉入れもあり会場をわかせた。また待望のフォークダンスは三年男子を交えて楽しく行なわれた。

ヨチヨチ競争・百足競争・パン食い・騎馬リレーなどをはじめ、俵運搬リレーや野良仕事などの農業高校らしい種目も見られた。応援合戦も工夫をこらしたものが見られた。また大会の花といわれる伝統ある仮装行列が運動会の最後を飾るにふさわしく、人生さまざま、平和大行進、巡礼、アリババと盗賊、トルコの兵隊、白虎隊、おもちゃの兵隊、近衛兵と多彩でクラスの創意を集めた面白い行列となった。

（松高新聞「成功だった運動会」第六三号昭和三六年）

宿泊研修　四六年七月の宿泊研修研究会（主任山脇教諭）の報告をもとにして、二年生が修学旅行の間に一年、三年について二泊三日で実施することになった。名称は「グループトレーニング」とし、その目的は「規律ある団体生活のなかで、教師と生徒との心のふれあいを深め、生徒相互間の友愛精神の育成をはかる」ことであった。場所は北陸三県下の諸施設「ユースホステル・民宿・寺院など」で、費用は五、〇〇〇円以内、ホーム単位で行なうこととした。各ホームで細部の計画を立て、一一月一〇日から一二日にかけ

て実施した。概要は次のようであった。

ホーム	一A	一Z	一L	一T	一C	三A	三Z	三L	三T	三C	女子
行先	能登半島一周	能登島	能登恋路海岸	富山県井波町	能登のろし	能登中島	奥能登	奥能登	福井県	金沢市寺町	福井県
宿泊	穴水青年の家・輪島ユースホステル	能登島民宿	飯田民宿	井波町瑞泉寺	のろし民宿	能登中島国民宿舎	珠洲郡折戸民宿鳳至郡柳田鍛治旅館	輪島国民宿舎	芦原共済組合宿舎	寺町長久寺	永平寺・足羽山ユースセンター
引率	東・綱屋	寺島・平野	徳山・古保	根津・山崎	森岡・三宅	西浦・大蔵・本田	古野・川上	町田・石井	井上・芝田	太田・近藤	長谷川・中本・高井

昼は、グループ別で見学し、夜はその発表をしたり、テーマを出し合って討論するなど、各ホームで「グループトレーニング」の趣旨に合うよう、日程を工夫し、成果があった。女子については、宿泊に女性の付き添いが必要であるということもあったが、日頃特別な女子教育が出来にくい現状から、この機会にという配慮があって、ホームから切りはなし女子だけのグループを編成したのである。女生徒はこの意味が理解出来ず校長室に押しかける一幕もあったが、次の感想文のように、有意義な行事であった。

永平寺で思ったこと　　千田　妙子

まず第一に坐禅である。

朝三時四十分頃に起され、名前は忘れたが、あの黒い小さな坐ぶとんを持って坐禅を組みに行ったことはよかったが、いざひざの上に足をあげてすわっていると、体がふるえてくるし足は痛くなるしまつでした。さらにお坊さんがだんだん近ずき自分の後にきたときなどなおいっそうふるえがひどくなった。今だになぜふるえたのかわからない。しかし修業僧は毎日

それをやっているのであるから、私がやっていた坐禅はたいへん短いのである。

何分おきか知らないけれどよく鐘が遠くの方でなっていたのを、まだおぼえている。それに坐禅の中でも一番心に焼きついているのは坐禅を組んでいた時の足の痛さと体のふるえで、なんども足をおろしたりしていて、さいごに一回注意されたことと私の近くで太鼓をならされたとき一瞬体がとんだかと思うほどびっくりしたことでした。しかし坐禅をしたことを後悔はしなかった。むしろ、もう一度やりたいと思ったほど言葉にあらわされない気持になった。（「反省の記録」）

四　農業クラブと家庭クラブ

農業クラブの歩み

総合制時代においては農業クラブは、組織の上でこれを生徒会と切り離すことは、運営上むずかしく、農業高校となってからも、一体化した形がとられていた。生徒は生徒会員であると同時に農業クラブ員でもあった。その活動の内容は異質のものであり、県連・北信越ブロック・全国連盟と対外的なつながりを持っている関係で、両者を完全に融合することには無理があった。本校には更に家庭クラブもあり、経費、人員の点で三つに分けることはいずれかを弱体化させることにつながるものであった。この頃の農業クラブは、予算の不足に悩まされ、クラブ員一人あたり一〇円を、生徒会費と別に徴収した。二九年度には、新設のクラブがあったのと、運動クラブの活動強化のために、農業クラブ援助費は前年度の八三、〇〇〇円から、一〇、〇〇〇円に減額された。農業クラブでは総会に、クラブ費を二〇円に値上げする案が上程されたが、役員の努力にもかかわらず否決されてしまった。農業クラブ活動はピンチに追いやられたわけである。翌年度は各研究分会をそれぞれ独立した生徒会クラブとして予算を配分したので、この方のピンチをきりぬけたが、組織的には完全に生徒会に統合された形となった。

三〇年の各クラブは、運動関係クラブが一五、文化関係クラブが一二、農業関係クラブが四、家庭関係クラブ

が二であった。三一年から次第に研究分会活動が盛んになり、作物・果樹・花卉・畜産・農機具・農芸化学・蔬菜の六クラブとなった。

三三年度には、果樹・花卉の代りに測量ができ、全国大会に備えて技を磨くこととなった。この年の一〇月、全国大会の予選を兼ねる第七回農業クラブ北信越大会が本校を会場として行なわれた。この頃から発表の方法が近代化され、クラブ活動発表にスライド、映画や図表が多く使われ、発表者からの注文が多く、会場設営に当った生徒の苦労は大変なものであった。その為本校で準備していたレクリエーションの舞踊と人形劇をカットしなければならなくなり、設備の不十分さを嘆き、今後は発表技術について研究が必要であることを痛感させられたのであった。またこの年は産業振興会主催の第五回産振展が金沢丸越デパートで開かれた。本校から水稲電研育苗器や、農産物加工品が出品された。この電研育苗器は作物クラブが中心になって製作したもので、農業技術の先端を行くものとしてなかなか好評を博した。

昭和30年度農業クラブ行事

6月	実物鑑定競技
8月	病虫害の防除に付近へ部落へ出動
	青森県へじゃがいもの収穫実習に出動
9月	関東・近畿に実習生派遣
	研究発表大会
	技術競技石川ブロック大会
10月	全国大会参加
	全国大会報告会・反省会
	実物鑑定競技大会
12月	級位検定

この頃の年間行事は、およそ上記の表のようであった。

これから以後、三六年には、農業土木、農機具、農芸化学、林業、畜産、草花、園芸、野菜、作物の八クラブとなり、少しずつ変更があった。年間行事はほぼ同様であった。

組織は対外的な県連代議員は別ではあるが、従来は生徒会の常任委員会の中に、各ホームから選出された農業委員、運動委員、文化委員、家庭委員でそれぞれ組織された委員会（農業委員―農業クラブ委員会・家庭委員―家庭クラブ委員

会）が含まれるというように、生徒会と一体となっていたが、四二年度からはまず、学校の校務分掌上、その係の教師は生徒会係から独立し、さらに四三年度からは、「農務」の係の中に含まれたのである。そして、農業クラブ活動としての行事は「総合実習」の一環として取り扱われるようになった。農業クラブの専門研究分会の活動も、新設の教科科目「専攻」の中に吸収され、完全に生徒会と別の組織になったのである。

全国大会

日本学校農業クラブ全国大会は、昭和二五年東京都で、日本学校農業クラブ結成大会が開かれて以来、毎年場所をかえて開催されて来た。本校では昭和二七年第三回から出場した。各年度の開催地及び本校の出場状況は次表の通りである。

回数	年度	会場地	担当ブロック県連盟	主なる要項・変更事項	本校出場種目
1	25	東京都	東京都連盟	日本学校農業クラブ連盟結成大会	
2	26	大阪市	近畿ブロック大阪府連盟	FFJの歌発表 意見発表実施	
3	27	東京都	関東ブロック東京都連盟	FFJの舞踊発表	プロジェクト発表（アヒルの水田放飼について）
4	28	名古屋市	東海ブロック愛知県連盟	技術競技をこの年より開く耕うん機操作競技、鶏の解体競技実施	耕うん機操作競技、レクリエーション競技（FFJ踊り、郷土舞踊）
5	29	東京都	関東ブロック東京都連盟	技術競技に測量競技をとり入れる	耕うん機操作競技、測量競技
6	30	高松市	四国ブロック香川県連盟		耕うん機操作競技、測量競技、レクリエーション競技

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
東京都	仙台市	甲府市	広島市	東京都	鹿児島市	新潟市	東京都	札幌市	大津市	前橋市	山形市
関東ブロック 東京都連盟	東北ブロック 宮城県連盟	関東ブロック 山梨県連盟	中国ブロック 広島県連盟	関東ブロック 東京都連盟	九州ブロック 鹿児島県連盟	北信ブロック 新潟県連盟	関東ブロック 東京都連盟	北海道ブロック 北海道連盟	近畿ブロック 滋賀県連盟	関東ブロック 群島県連盟	東北ブロック 山形県連盟
耕うん機操作競技を止め、発動機分解組立競技を実施、FFA代表出席	技術競技に家畜審査競技を実施　FFA代表出席		レクリエーション審査廃止、記録映画を始めて製作、人物交流によりFFA代表来日	創立一〇周年記念大会、記念事業FFP代表、中華民国代表出席			各種発表に意見発表を加える	技術競技に農業実物鑑定競技を始めて実施	女子代表者会議開かれる、会則改正運営細則制定	農業鑑定競技に林学科、食品化学科を加える。	「クラブ員の集い」を始めて実施
発動機分解組立競技、測量競技、プロジェクト発表、クラブ活動発表	発動機分解組立競技、測量競技	発動機組立分解競技、測量競技、クラブ活動発表	測量競技	測量競技	測量競技、家畜審査競技（優秀一〇校に入る）	測量競技	測量競技	測量競技、鑑定競技（三位に入賞）	プロジェクト発表	家畜審査競技	測量競技、発動機分解組立競技、プロジェクトA発表

19	20	21	22	23	24	25
43	44	45	46	47	48	49
岐阜市	松山市	東京都	岡山市	熊本市	金沢市 富山市 福井市 坂井町	岩見沢市
東海ブロック 岐阜県連盟	四国ブロック 愛姫県連盟	関東ブロック 東京都連盟	中国ブロック 岡山市連盟	九州ブロック 熊本県連盟	北信越ブロック 石川・富山・福井県連盟	北海道ブロック 北海道連盟
農業鑑定競技に農業土木科加わる	総会の構成を単位学校農業クラブの会長とする。各県木の記念植樹	ＦＦＪ結成二〇周年記念式を行う				
測量競技、プロジェクトA	農業鑑定競技（農業科畜産科）、測量競技プロジェクトB発表	農業鑑定競技	測量、農業鑑定競技	プロジェクト発表、農業鑑定競技（農業園芸、畜産、農業、土木）、レクリエーション（白峰はいや節）	プロジェクトA発表（最優秀）	プロジェクトB発表（最優秀）

第二四回全国大会は北信越ブロックで担当することに決定し、開催地は各種の事情から北陸三県（石川・富山・福井）で引き受けるという初めての方式で実施されることとなった。昭和二六年決定と同時に石川・富山・福井各県は視察団を、岡山市で開催の第二二回全国大会へ派遣し、大会準備の第一歩を踏みだした。その年の一二月二七日、本校において第一回の準備委員会を開き、大会事務局を本校に、富山会場事務局を中央農高に、福井会場事務局を坂井農高にそれぞれ決定した。次に大会組織・各県分担事項・会期・主催者・予算等協議し、事実上準備段階に入った。なんと言っても運営上の基本姿勢が重要視される関係上、クラブ員自身の手によって大会

の運営を行なうことができるように、事前の日常活動にその趣旨徹底をはかると同時に、計画の段階からクラブ員代表を参加させた。その間一糸みだれぬ統制のもとに、三県は連絡をとりながら着々準備を進めた。第二三回熊本大会の開催に、大会事務局は視察団（石川一六名・富山八名・福井八名）を派遣し、その細部にわたる視察調査を分析し、万全の準備態勢を一層深めた。

四八年一月には公募の大会スローガン「農クで拓け緑の日本」「友情の手と手で結ぼうわれらの農ク」が発表になり、また大会ポスターもでき名実ともに大会色が一段と濃くなった。五月、全国連盟理事会・代議員会には正式に、細部運営について説明を終り、予備調査申込書を全国六〇〇余の単位クラブ宛発送を開始した。一方大会アナウンサーの合宿練習を日本放送協会の協力により実施し万全を期した。大会参加者は約四、〇〇〇名と推定し、宿泊・輸送・見学係は日夜を分かたず懸命の努力を払い、また、各会場共に本番同様の準備に大童で、ブラスバンドも合宿練習に入り、一段と技の練磨につとめた。その頃三県会場事務局の連絡打合せ会が頻繁にもたれ着々準備も進み、最後の仕上げも近い感じすら見えるようになってきた。八月に入ると申込み者の発送、関係機関との細部交渉・全国連盟との打ち合わせなど夏休みも返上で事務処理に没頭した。

八月末日金沢市観光会館で大会リハーサルを実施し各校の協力態勢を固めるとともに大会実施上の大きな自信をもった。また富山県においては、測量競技・家畜審査競技、福井県では、農業鑑定競技とそれぞれリハーサルを実施した。一方、大会参加出場申込みは〆切日になっても完結せず、本部は大変苦労していた。宿泊係は三、〇〇〇人の処理を一手に受けて連日旅館との折衝と割当に忙殺された。

いよいよ本番近くになると、大会誌（八、〇〇〇部）、記念バッジ（五、〇〇〇ケ）の納入。一〇月二一日大会本部は、金沢市に移動し、大会参加者は続々と金沢・富山・福井の各会場に到着した。



第24回農ク全国大会

大会は二三日、石川会場における各種発表によって開幕し、二四日開会式・歓迎のつどい、富山会場、福井会場における技術競技、鑑定競技など多彩な内容が円滑に進行し、二六日の閉会式をもって閉幕した。この間、県内のクラブ員や職員は各会場の係を分担するほかに、広報・記録・販売斡旋・球護・警備などの係に分かれて活躍し、金沢主会場付近は遠来のクラブ員、引率の職員、県内の各係や見学団など五、〇〇〇人が満ち溢れ、大会一色に塗りつぶされた。

大会二日目、開会式の模様を振りかえってみよう。

十月二四日、昨日のときどき雨がパラつく北陸特有の天候とはうってかわって青空の広がる好天気となりました。

午後二時、会場の金沢市観光会館の大ホールの舞台は、菊、バラ、カーネーションなどの草花で飾られ、清楚な気分がほのかにただよっています。やがて、会場の照明が消され、ざわめきが少し残る中に、石川県連盟クラブ員五〇名による、ブラスバンドのファンファレーがくらやみを引き裂くように高らかに鳴り響くと、金糸・銀糸で刺しゅうされた孔雀絵のどん帳があがり、スポットライトを浴びて、FFJのマークがくっきりと浮かび、本大会のカラー、日本海のライトブルーをバックに新鮮な印象を与えました。

「ただいまから、第二四回日本学校農業クラブ全国大会の開会を宣言します」と、北海道・旭川農高の笠谷栄司君が開会を宣言しました。

全国連盟旗および、各県連盟旗の入場です。FFJマーチと会場全員の拍手にのって前田由美子さん（石川・松任農高）の先導、黒沢明秀君（同）の手にした全国連盟旗、朝木妙子さん（同）の後衛を先頭に、来年度全国大会開催地の北海道、そして青森、岩手と北から順に入場していきます。最後に開催地、富山・福井・石川と北陸三県が入場してくると、一きわ

大きな拍手。秋田・能代農高の佐々木隆雄君の開式のことばがあり、君が代斉唱について、会長の栃木・那須農高、大竹伸市君が「農業は国民全体の問題で単に農民だけの問題ではありません。とくに後継者問題は大きく、私たちは真剣に見つめ、また考えなければなりません。クラブ員のみなさん。この大会を通しての見聞、その他を各単位クラブに持ち帰って、大いに生かしてください」と、力強くあいさつしました。また、代表の都立園芸高校長の小星先生は「本大会の各種行事に、日常の活動の成果を十二分に発揮してください。また、組織活動としての、この大会の特徴を通して、全国津津浦浦のクラブ員の友情と連帯感を深めて、将来にわたっての農業に農業関連産業に、若い力を発揮していただきたい」と述べられました。

石川県教育委員会、文部大臣、農林大臣など、各界からもあたたかい祝辞をいただきました。全国高等学校家庭クラブを代表して、石川県連会長からは「一人ひとりは小さな力でも、多くの力を合わせれば強くすばらしいものになるのです。この大会を通じて全国のクラブ員のみなさんが、ますます心を通じ合い、活発な活動をすすめていかれるものと確信いたします」と心のこもった祝辞をいただいた後、卒業生代表として、農業に従事されている林友次さん（石川・松任農高卒）の、実践の上に立った力強いあいさつがあると、思わず会場全体から割れるような拍手が湧きあがりました。

祝電披露　特級位授与者披露があり、ＦＦＪの歌を全員で斉唱。最後に、愛知、西尾実業高の山下雅也君の「この盛りあがったムードを十月二六日の閉会式までわれらクラブ員の手でさらに盛りあげていこうではありませんか」との、閉式のことばで、三時一五分開会式は終了しました。

（「リーダーシップ」昭和四九年一月号）

大会の日程は次のようであった。

第二四回日本学校農業クラブ連盟全国大会日程

一〇月二三日（火）石川会場　金沢市観光会館

常任理事会・理事会	大集会室	第一談話室
大会役員会	〃	第四集会室
代議員会・顧問代議員会	〃	第五集会室

クラブ活動発表	
プロジェクト発表Ａ・Ｂ・Ｃ	
意見発表	

一〇月二四日（水）石川会場		
総　　会	北陸放送会館3Fホール	クラブ活動発表
		プロジェクト発表A・B・C
開　会　式	観光会館ホール	意　見　発　表
歓迎のつどい	〃	
一〇月二四日（水）富山会場		
測　量　競　技	〃	福井会場開始式
家　畜　審　査　競　技	〃	福井会場歓迎のつどい
富山会場開始式	〃	クラブ員交歓会
一〇月二五日（木）石川会場		
プロジェクト発表A	観光会館ホール	プロジェクト発表C
意　見　発　表	市中央公民館ホール	クラブ活動発表
〃	北陸放送会館ホール	プロジェクト発表B
一〇月二五日（木）富山会場		
測　量　競　技	県営陸上競技場	女子クラブ員代表者会議
〃	〃軟式野球場	農業鑑定競技
〃	〃補助グランド	
家畜審査競技	中央農高	
一〇月二四日（気）福井会場		
市体育館	農業会館ホール	
〃	観光会館ホール	
〃	北陸放送会館ホール	
	市中央公民館	
一〇月二五日（木）福井会場		
北陸放送会館ホール	坂井農高	
農業会館ホール	福井農林高	
観光会館ホール		

一〇月二六日（金）石川会場			
意見発表	中央公民館ホール	意見発表	北陸放送会館ホール
閉会式	観光会館ホール		

家庭クラブの歩み

総合制松任高校時代（昭和二七年度）普通科は甲、乙、丙三つのコースに分けられた。このうち丙（家庭）コースは家庭婦人の育成を目的としたものであり、この生徒が主体となって、生徒会文化部の一つのクラブとして家庭クラブが誕生した。二八年農業高校が成立し家庭課程が設置せられ、家庭クラブに所属する生徒も増え、活動も盛んになった。三〇年には、農業クラブと同様、全校的な組織となり、県連や全国連盟という校外の組織に加入した。校内においては生徒会と連絡をたもち、ホーム会の家庭委員によって家庭委員会が構成され、この代表が生徒会の常任委員となった。また各研究グループは家庭クラブの研究分会であると同時に、生徒会クラブの文化部に属して予算の配分を受けた。

三一年度は被服・手芸クラブ、調理クラブ、三六年度は被服・手芸クラブ、茶道クラブ、華道クラブ、食物クラブ、舞踊クラブ、保育・家族研究会、家庭経営研究会と多彩なクラブに発展した。

家庭クラブは正しくは学校家庭クラブといい、アメリカの Future Home maker of America（F・H・A）に由来し、未来の家庭建設者の集まり、即ち高等学校家庭科生徒の集まりとなる。我国ではF・H・J（Future Home maker of Japan）とも呼ばれ、その目的は次のようである。

一、家庭科に関する価値を認識し興味を深める。

二、家庭生活、社会生活の改善向上をはかる意欲と実践力を養う。
三、自主的、科学的な生活態度を養う。
四、勤労を愛し、社会に奉仕する態度を養う。
五、各学校間の連絡を密にしてクラブ活動を発達させ、ひいては国際親善に寄与する。

家庭クラブの活動

活動は大きく三つに分けられ、これを列挙すると、
一、教育的なもの　諸施設（文化住宅、諸生産工場、文化会館）の見学、展示会の開催
二、社交的なもの　招待会（父兄、友人、先生、他校クラブ員）を行なう。
三、奉仕的なもの　福祉施設（養老院・孤児院）の慰問、奉仕。農繁期保育所への協力、災害地への見舞い
老人幼児の招待会の開催、諸行事へのおくり物など。

昭和三七年度の家庭クラブ行事は次のようであった。

四月　上旬　緑の羽根募金
　二四日　家庭クラブ総会
五月一七日　料理コンクール
六月一六日　座談会「親と子の会」
七月二四日　社会見学（金大医・家裁・松本日光舎）
　二八日　奉仕活動（梅光会）
八月二・三日　家ク全国大会参加
　二〇・二一日　県家ク連幹部養成講座（白山公民館）
九月　八日　座談会「先輩を囲んで」
一〇月一三・一四日　松高祭
　家庭展
　座談会「農村生活のあり方」
　（農業クラブと共催）
一〇月二二日　校内研究発表会
一一月一八日　県家庭クラブ連研究発表会
一二月　四日　実物鑑定
一二月　下旬　奉仕活動

校内落書き消し　　二月　　ル）
針箱設置（校内ユースセンター、松任駅、松任バスターミナ　　機関誌発行

第六節　生徒会と部活動

一　生徒会

組織と会則

農業高校発足当時は、農業クラブや家庭クラブを包含しており、副会長に男子一名、女子一名があり、それぞれ農業クラブ長、家庭クラブ長を兼ねており、またホーム会の中に農業委員や家庭委員があり、これらは常任委員会の組織の中に入っていた。しかし、農クや家クの研究活動が活発となり、対外的なつながりも活発化した。そして次第に分離する傾向が見られ、四二年度からは総合実習やホームプロジェクトとして教科との関連が密接になったので、完全に生徒会から独立した。その他の改編としては、松任高校時代に新聞部・放送部が単一のクラブとして出発し、昭和三一年度から生徒会直轄の部として、生徒会新聞局、放送局となった。

運営組織は三〇年代とほとんど変っていないが、現在の概要は次のようである。

まず、全会員より選出された役員（会長一名、副会長一名、書記・会計各二名）が執行部となり、ホーム会より選出された文化・体育・放送・公安各一名、図書・保健各二名が常任委員会を組織して各々の部門で活躍す

校内落書き消し　　二月　　ル）
針箱設置（校内ユースセンター、松任駅、松任バスターミナ　　機関誌発行

第六節　生徒会と部活動

一　生徒会

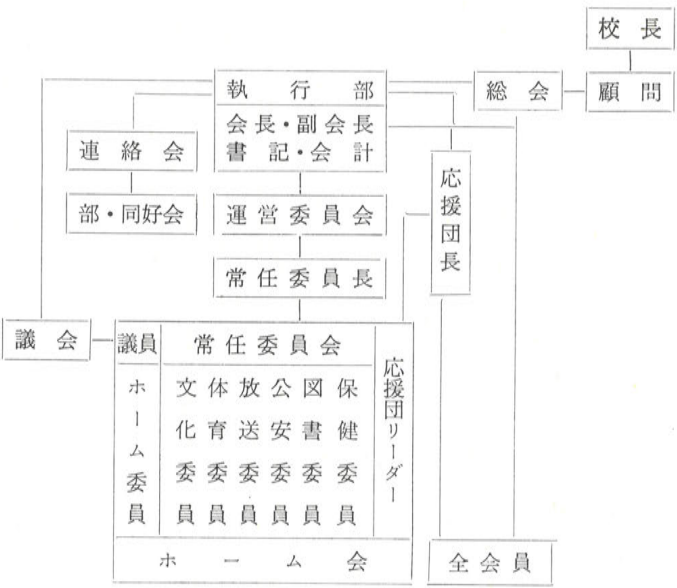
組織と会則

農業高校発足当時は、農業クラブや家庭クラブを包含しており、副会長に男子一名、女子一名があり、それぞれ農業クラブ長、家庭クラブ長を兼ねており、またホーム会の中に農業委員や家庭委員があり、これらは常任委員会の組織の中に入っていた。しかし、農クや家クの研究活動が活発となり、対外的なつながりも活発化した。そして次第に分離する傾向が見られ、四二年度からは総合実習やホームプロジェクトとして教科との関連が密接になったので、完全に生徒会から独立した。その他の改編としては、松任高校時代に新聞部・放送部が単一のクラブとして出発し、昭和三一年度から生徒会直轄の部として、生徒会新聞局、放送局となった。

運営組織は三〇年代とほとんど変っていないが、現在の概要は次のようである。

まず、全会員より選出された役員（会長一名、副会長一名、書記・会計各二名）が執行部となり、ホーム会より選出された文化・体育・放送・公安各一名、図書・保健各二名が常任委員会を組織して各々の部門で活躍す

生徒会運営組織（昭和50年度）



る。また、ホーム会より選出された正副各一名のホーム委員が議員となって議会を構成し、各ホームの意見を反映させるというしくみである。応援団は執行部直轄であるが、団長は全会員より、リーダーはホーム会より選出され、団員は全会員となっている。

昭和四七年一月一部を改正した現行の会則は次のとおりである。

生徒会会則

第一章　総　則

第一条　本会は石川県立松任農業高等学校生徒会と称する。

第二条　本会は本校生徒全員をもって組織し、本校職員を顧問とする。

第三条　本会は会員相互の協力と職員の援助とにより、学校の教育方針について、知能の啓発、専門分野の研修、人格の向上、健康の増進、個性の進展を図るとともに、自主的かつ建設的に学校生活を推進して、校風の刷新向上に努める

第四条　本会は前条の目的達成のため、諸種の行事

およびその他必要な事業を行なう。

第二章　総　会

第五条　総会は全会員によって構成され、会員がこれを召集し本会の最高議決機関であり、会の重要事項を決定する。

第六条　総会は、議会が必要と認めたとき、または全会員の四分の一以上の要求があった場合に開かれ、決議を行なう。

第七条　総会は全会員の三分の二以上の出席によって成立する。また議決には出席者の過半数を必要とする。

第八条　総会の議長は会員の推薦したものがこれに当たり、副議長一名と書記二名は議長が指名する。

第三章　ホーム会

第九条　ホーム会は本会活動の基盤として、本会の目的に従い、ホームの自主的運営を図る。

第十条　ホーム会の役員は、正ホーム委員・副ホーム委員および文化委員・体育委員・公安委員・各一名、保健委員・図書委員各二名によって構成される。

第十一条　正ホーム委員および副ホーム委員は議員として議会に出席する。

第十二条　他の八委員は各常任委員会に所属して、その義務を果たさなければならない。

第十三条　ホーム会の役員の任期は第十九条の議員のそれに準ずる。

第十四条　ホーム会の役員はそのホームの無記名投票により選出される。

第十五条　ホーム会は毎月一回以上の会合を持つことができる。

第十六条　ホーム会の指導はホーム主任がこれに当たる。

第四章　議　会

第十七条　議会は本会の議決機関である。

第十八条　議会は各ホーム会により選出された二名の議員により組織され、各議員は一票の票決権を有する。

第十九条　議員の任期は半か年とし、特別の場合を除き兼任を認めない。ただし再選は妨げない。

前期は三月から八月まで、後期は九月から二月までとする。ただし、新たな執行委員会および議会が成立するまでは、前役員および前議会がその職務を遂行する。

第二十条　議員は議会で行なった演説討論または表決について、議会外で責任を問わない。

第二十一条　議員は互選によって議長、副議長各一名を選出する。

第二十二条　議会は毎月一回召集される。ただし必要の場合は議長がこれを召集する。

第二十三条　議会は総議員の三分の二以上の出席によって成立し、議決は出席議員の過半数によるものとする。ただし可否同数のときは議長がこれを決する。

第二十四条　議員には本会における議決事項をホームルームで報告しなければならない。

第二十五条　本会は必要に応じて委員会を設置することができる。

第二十六条　議会は会議その他の手数および内部の規律に関する規則を定め、また議場内の秩序を乱した議員を懲罰することができる。ただし議員を除名するには出席議員の三分の二以上の多数による議決を必要とする。

第二十七条　議員が辞任しようとする場合、ホームの過半数以上の承認を必要とする。

第二十八条　議員の除名が成立した場合または議員が辞任した場合は、一週間以内に後任議員を選ばなければならない。

第二十九条　議会が解散した日より二週間以内に議員の選挙を行なわなければならない。

第三十条　議会は議案の調査審議のために参考人の出席あるいは記録の提出を求めることができる。

第五章　役　員

第三十一条　本会には下記の役員を置く。

会　長	一名	副会長	一名
書　記	二名	会　計	二名
応援団長	一名	常任委員長	六名

第三十二条　会長、副会長、書記、会計および応援団長は、全会員の無記名投票により選出される。ただし選出された役員は学校長の信認を受けなければならない。

第三十三条　各常任委員長は会員中より会長が推薦し、議会の承認を必要とする。

第三十四条　常任委員長のうち放送委員長は各ホームから選出された放送委員のほかに、全会員中より局員若干名を指名することができる。ただし会長の任命を必要とする。

第三十五条　会長は本会を代表し会務を総理する。

第三十六条　副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときにはこれを代行する。また副会長は部連絡会および同好会連絡会の長となる。

第三十七条　各常任委員会の委員長は、それぞれ所属の委員会を総理する。

第三十八条　役員の任期は半か年とし、改選期は一月、七月の二回とする。ただし応援団長は一か年の任期として、改選期は一月とする。

第三十九条　役員が辞任しようとするときは議会に申請し、その三分の二以上の承認を必要とする。また第七条の規定に該当する多数の要求があった場合は辞任しなければならない。

第六章　常任委員会

第四十条　常任委員会は、ホームの文化・体育・公安・放送・保健・図書の各委員により構成され下記の任に当たる。

一　文化委員会は本会の文化活動の企画執行に当たる。

一　体育委員会は本会の体育行事の企画執行に当たる。

一　公安委員会は本会の風紀美化問題および秩序を維持し、これらの企画執行に当たる。

一　放送委員会は本会の視聴覚活動の企画執行に当たる。

一　保健委員会および図書委員会については別に定めるところによる。

第四十一条　各委員会は適時会合をもち、記録保持はその委員長が当たり、各委員会には指導教官一名を置く。

第七章　運営委員会

第四十二条　運営委員会は、執行部（会長、副会長、書記、会計）および議長、副議長ならびに各常任委員会の委員長によって構成される。

第四十三条　運営委員は議会と常任委員会の連絡事項について調整する。

第八章　特別委員会

第四十四条　第二十五条の規定により特別委員会が設置されたときは、議会の要求に応じて重要事項を企画審議する。

第四十五条　特別委員会は目的達成後解散する。

第九章　連絡会

第四十六条　会長は、校内部代表および同好会代表と連絡会を開き、部および同好会活動の調整を行なう。
第四十七条　部および同好会の連絡会には部および同好会の代表者が出席しなければならない。

第十章　財　政

第四十八条　会員は定められた会費を納めなければならない。
第四十九条　議会は毎期末に会計監査委員を委嘱し、会計簿を監査しなければならない。
第五十条　予算は二月中に原案を作成し、三月の定例議会において承認を得ることを原則とする。
第五十一条　本会の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第十一章　反　省　会

第五十二条　反省会は全会員によって構成され会長がこれを召集する。
第五十三条　本会は毎期末に当該期間における議会の運営状況をはじめ、各運営委員会および生徒会活動全般にわたって、反省し、もって将来の生徒会活動のいっそうの進展を図る。

第十二章　顧　問　教　官

第五十五条　本会に対する顧問教官は若干名とし、それぞれ必要な会合に出席して指導助言を与える。

第十三章　修　正

第五十五条　会則の修正は議会の三分の二以上の同意によって可決され、総会の承認を得る。
第五十六条　部、同好会の規約および選挙方法のほか、運営に必要な規約は議会によって別に定める。
第五十七条　総会および議会により決定された事項は学校長の承認を得なければならない。

付　則

本会則は昭和四十七年一月一日より効力を有する。

活　動

執行部　全体を統轄し、各種行事の企画・運営にあたる。

選挙管理委員会　前期（七月）、後期（一月）の役員の改選を行なう。
体育委員会　運動会、球技大会、陸上競技、水泳大会、マラソン大会等校内スポーツ大会の企画運営に学校、執行部と共に活躍して来た。
文化委員会　講演会、弁論大会、俳句会。三九年三月廃刊となった松高新聞に代って生徒会機関紙として、「まつのう」が創刊され、毎年一回発行している。
放送委員会　各種伝達、各種行事のアナウンスを行っている。
図書委員会　図書の閲覧について貸出、返却に関すること、図書館の整理美化・図書の実態・図書館利用状況調査、新刊購入図書案内等の広報活動、読書会の企画等を行なう。
公安委員会　校内風紀取り締まり、遅刻者防止運動等行なって来た。
保健委員会　校内美化清掃、保健関係各種検査補助、保健統計資料の作製等の活動
応　援　団　毎年五月応援練習、その成果を全国高校相撲大会に発揮して来た。

〝がしんしょうたん幾星霜栄えある今日の戦いに、勝ちたるわれらの頭上に勝利を飾る優勝旗〟――力強い男女混声の合唱が、きようもわき起ってくる。紅潮したほほを寄せて歌う若人たちは早くも大会の興奮にひたり、紫錦台上にひるがえる黒ワシの優勝旗がそのまぶたに焼きついているようだ。六月はじめからはじめた応援歌の練習も早や二ヵ月、女生徒の方が熱心でソプラノが勇壮なメロディにうるおいをそえている。今年新調した応援旗はブルーの地に二本の白線が走り、中央に校章を浮き出している鮮やかなもの。応援歌も旧松農時代のものをそっくり受けつぎ「若葉に風」「白山おろし」など古い卒業生にとってもなつかしい曲七編がいまも歌われている。大会前日には全校そろって鎮守の宮へ必勝祈願し、当日は定時制を合せて全生徒千百名がブラスバンドを先頭に応援にくりこむというが、伝統古き名門だけに卒業生や石川郡民にも熱心なファンが多く、これらの校外組をまじえた応援ぶりは会場でもひときわ花やかな存在になるだろう。

（「高校相撲金沢大会」北国新聞S30・7・27）

活動経費　生徒会費として一人あたり月額三〇〇円を徴収して活動費用にあてているが、生徒数の減少と、物価の値上がりにより、十分とはいえず、本校発足時にくらべると活動内容は縮少されて来た。

四九年度決算額と、五〇年度予算額は次の表のとおりである。

昭和49年度　生徒会会計決算書
昭和50年度　　同　上　予算書

収入の部

項目	49年度決算額	50年度予算額	備考
会費	1,793,280	1,782,000	300×12×会員数
繰越金	83,039	124,967	
雑収入	7,703	3,033	利子など
合計	1,884,022	1,910,000	

支出の部

項目		49年度決算額	50年度予算額	備考
執行部費		943,285	873,000	
内訳	議会費	17,350	7,000	
	負担金	58,075	60,000	
	派遣費	398,485	400,000	
	応援団費	27,900	30,000	
	一般執務費	7,180	8,000	
	文化委員会	1,400	4,000	含発送費
	体育委員会	21,075	35,000	
	放送委員会	200	3,000	
	公安委員会	220	1,000	
	機関誌	270,000	250,000	
	記念品費	96,200	55,000	1人当り360円
	諸費	45,200	20,000	慶弔費
部費		815,770	1,000,000	
内訳	野球	219,100	250,000	
	剣道	74,600	90,000	
	排球	85,500	100,000	
	庭球	39,500	50,000	
	蹴球	90,000	100,000	
	卓球	45,480	60,000	
	吹奏楽	67,200	72,000	
	相撲	1,600	6,000	
	スキー	87,410	97,000	
	美術	6,690	20,000	
	羽球	44,800	55,000	
	陸上	46,670	60,000	
	柔道	7,220	10,000	
	部予備費		30,000	
予備費			37,000	
次期繰越金		124,967	0	
合計		1,884,022	1,910,000	

二　運　動　部

各部設置状況　昭和二九年、三一年、三六年、四六年の各年度の運動クラブ活動登載は次のようになっている。

昭和二九年度
野球・送球・排球・陸上・相撲・柔道・籠球・山岳スキー・器械体操・羽球・水泳・庭球・卓球・ソフトボール

昭和三一年度
野球・相撲・器械体操・卓球・送球・籠球・陸上競技・山岳スキー・ソフトボール・水泳・剣道・庭球・排球・羽球・柔道

昭和三六年度
野球・陸上・相撲・籠球・羽球・山岳スキー・排球・庭球・水泳・卓球・柔道・ソフトボール・送球・剣道

昭和四六年度
野球・陸上・相撲・羽球・排球・庭球・卓球・柔道・剣道・蹴球・スキー

現在は、野球・陸上・相撲・羽球・排球・庭球・水泳・籠球・卓球・柔道・剣道・蹴球・スキー以上一三部である。

昭和二八年度から四九年度において、花々しい活躍を示したのは、相撲・野球・ソフトボール・陸上競技・庭球・剣道・排球・羽球・送球・スキー等であろう。しかし、資料が乏しいので、どうしても回想風の記録にならら

ざるを得ないことをお断りして、いくつかの部をのぞいてみたい。

相撲部　昭和三三年伝統を誇るわが部は、一年生八名、二年生二名、三年生六名で構成し、毎日放課後三時から六時までの三時間、汗のにじみ出るほど練習をする。六月一一日の第四二回高校金沢大会に好成績残せず、六月二九日県相撲選手権大会を目指して努力し、本校は優勝をさらった。

昭和三四年に、全日本高校相撲選手権大会（大阪市）、同三五年には、選抜高校相撲高知大会に出場して、優秀一六校入りを果たした。

昭和三八年大雪の中を相撲場で猛練習を続け、五月一九日一週間後に高校相撲金沢大会を控え、松任町オカリヤ特設相撲場で、加賀地区高校相撲大会が行なわれ、団体優勝した。メンバーは村野、森田、中川、西野、徳田だった。西野は個人第二位獲得。

昭和四一年五月二二日、松任町おかりや相撲場で、出場一一校参加のもとに加賀地区高校相撲大会が行なわれた。その結果、団体優勝した。個人の部で山崎が優勝した。メンバーは木下、南、岡本、山崎、川崎だった。

野球部　最もめざましい活躍を見せたのは、昭和三八年度だった。第二八回春季北信越高校野球大会県予選が四月二〇日から五月一一日の各土曜、日曜、祭日を利用して、県営兼六園球場に二四校が参加して行なわれた。準々決勝で金沢市工に勝ち、本大会に出場権（泉ケ丘・金沢高・小松実高）を獲得し、準決勝に臨んだが、金沢高に惜敗した。本大会は五月一九、二〇日の二日間、五月晴れの下に、兼六園球場で八校参加して行なわれた。第一回戦で福井県代表の若狭高校と対戦し三対八で敗れた。夏の大会までの試合数は八勝七敗に終った。夏の全国大会県予選では二回戦で昨年度優勝校金沢高と対戦し惜敗した。この大会後



三年生の部員は部より去った。続いて金沢地区新人大会に二水と戦い一〇対五と大勝した。秋季大会県予選が始まり、本校は勝運に乗じ三回戦まで進んだが、羽咋と対戦し惜敗した。

ソフトボール部　昭和三〇年、昨年は大いに振い、今年も本校では女子の期待出来る唯一のクラブとして認められるようになり、昨年の選手も一年生と共に元気一杯。第九回県下ソフトボール大会は小松高校に敗れはしたが現在敗因であった不足を解消するために顧問安川雅章教諭の指示を受けて猛練習。

昭和三二年八月九日、一〇日の第九回県体に本校から、伊藤八重子、倉本良子、松田美紀子、熊谷紀子、鹿田紀久子、宮本瑞子、松浜智子、吉村紀子、新谷紀子、平田久美子をおくった。部員数一二名。

昭和三六年、部長の川崎昭子（三Ｈａ）は次のようにいっている。「伝統をもつ部は部員一四名なので、二チーム作れず新入生を入れてがんばりたい。私たちはチームワークをとり、部員全員が一つになって部発展につくし責任感と忍耐力を養い、その力を勉学に働かせて、よりよいクラブ、人間を築き、多くの交歓試合を行なっていきたい」（「松高新聞」第六二号・五月二七日）とはりきって地道に努力していった。

陸上競技部　昭和二八年は短距離の徳井　武、長距離の山村外志雄の台頭で県高校大会で、八〇〇メートルリレー一分三九秒二（県高校新）などの優勝をふくめ、短距離の活躍で総合第三位となりさらに六月の北陸三県高校には、四〇〇メートルで増田が五四秒五の大会新、八〇〇メートルリレーでは相木・増田・中村・徳井のメンバーで一分三七秒七の大会新、県高校新でともに優勝、総合でも四位となった。なお二八年一月の耐寒リレーでは増田、新納、中村、島のオーダーで五一分三〇秒の大会新で二度目の優勝をかざった。この年以後、二九年の二百、四百メートルの徳井の目ざましい活躍はあるが、陸上部の低迷が数年続いた。しかし昔日の活躍をよみがえらそうと、先輩、後輩一丸となって努力を重ねたかいあって三一年一月一一日、第二〇

回県駅伝競走選手権大会（全国駅伝県予選を兼ねる）は、午前一一時のスタートで開始、小雨模様の秋空も一二時ごろからさわやかな晴天となり、二二チーム一六〇余名の選手が沿道に並ぶ部落民の声援のうちに加賀平野を北上、力走に力走して人垣にうまった北国新聞社前の決勝点にゴールインした。その結果本校は優勝確実とまでいわれていたが、強敵七尾実高に負けてしまった。タイムは二時間二〇分四八秒の好タイムだった。メンバーは竹内幸夫・長瀬紀昌・田中昭一・浜村隆二・高畠正信・北　外男・吉田教信であった。

昭和三二年、長期間の冬季練習によって強い体力とシーズンへの基礎を養い、今年こそとクラブ員全員は毎日三時二〇分から五時三〇分まで守田顕三顧問をはじめ、先輩の方から良き指導を受けて練習に精をだした。第二一回県駅伝競走選手権大会は、一一月一〇日、午前一一時動橋駅前―金沢北国新聞社前（四二・一九粁）間のコースで力走。昨日のくもり空もからりと晴れ上り、刈り取られた加賀路を縦断し、一路金沢へと沿道に並ぶ部落民の熱心な声援に選手達を活気づけ力走に力走を重ねた。松農は三位という好成績をあげた。

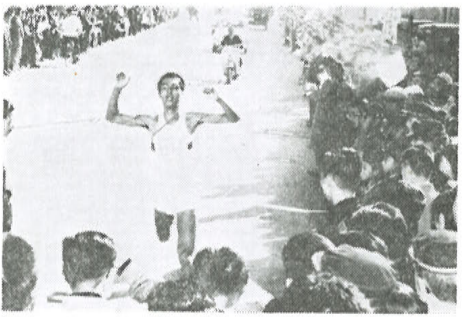
一位　七　実　二時間二六分二〇秒四　　二位　津幡高　二時間二六分四〇秒四

三位　松任農　二時間二七分五九秒四

昭和三三年、この期から七連勝のスタートと同時に第二期黄金期の基礎を築いていった。第二〇回県耐寒継走選手権大会は、一月二六日、第二部（高校）三一チーム旧尾山城のコースで行なわれた。からりと晴れた天候とはいえ、雪ぬかるみの道を、若さにあふれる熱と力のレースを展開した。本校生徒の絶大なる声援に答え二位に大差をつけて五年振りに優勝をなしとげた。八月八、九、一〇日の三日間、下関市営陸上競技場で行なわれた第一一回全国高等学校陸上競技大会に、本校から浜村・牛若・桜井が出場した。八月一六日七尾市城山競技場で行なわれた県体には、部から六名出場し全員が入賞した。県駅伝競走大会県予選が一一月九日に行なわれたが優勝

した。

昭和三四年　第二三回県耐寒継走選手権大会が一月二五日に行なわれ三年連続優勝した。ことしの県下スポーツシーズンの最後をかざるにふさわしい、第二一回全国高校駅伝競走大会県予選は、一一月一五日午前一一時から加賀市動橋―金沢市南町北国新聞社前四二・一九五キロのマラソンコースで盛大に開催された。二一チーム一四七名の各高校選手達は日本晴れの空のもとで若人らしく力に満ちあふれたレースを展開した。本校は大会前から優勝候補の筆頭にあげられていたが、予想にたがわず最初からトップに立ち、途中実践商に首位を奪われたこともあったが、最終区間最後の一キロで本校の石田選手は猛烈にスパート、首位を奪いかえして堂々二連勝の栄冠を勝ち得た。



駅伝大会

沿道には至る所にところに仕事の手を休め、または日曜の仕事をさいた人々が人垣を作り〝がんばれ松農〟の声援を送った。一方本校でも伴走車をくりだし部顧問の守田教諭やマネージャーその他関係者が同乗、選手を励ました。レース後、北国、毎日両新聞社から優勝旗が授与され、一二月二七日大阪のマラソンコースで行なわれる全国大会に晴れの県代表として出場することになった。

大会での記録は二時間二三分三一秒で昨年を下回ったが、一区の藤　順了・四区の上野邦彦・六区の上野明次三選手が区間優勝者となった。

昭和三六年二月一九日、第二三回県耐寒継走選手権大会で松農Aチーム優勝。第二五回県駅伝競走選手権大会

は一一月一九日行なわれ、第二部高校対抗の部で本校が輝く四連勝をとげ、〝駅伝松農〟の名を遺憾なく発揮した。当日は鉛色の空の下で木枯しが顔をなで駅伝には絶好のコンディションであった。タイムは昨年を三分四二秒上回る二時間二五分三秒で、翌二〇日は優勝旗授納式が開かれ全校あげて健闘を祝いあった。当時の部顧問守田教諭は「四連勝出来伝統を守ることが出来たのが何よりうれしい。これもみな選手の〝和〟のたまものだと思う」とインタビューに答えてくれた。

昭和三七年一月二一日、県耐寒継走選手権大会に松農A優勝。一一月一七日県高校駅伝大会に五連勝に輝やく。

昭和三八年三月一七日、旧金沢城一周第二五回県耐寒継走選手権大会に優勝。一一月一七日、県駅伝競走選手権大会に六連勝の栄冠を得た。

昭和三九年、第二八回県高校駅伝大会兼全国大会予選が行なわれた。今年は例年と異なり、初の折返しコース四二・一九キロが採用された。これは公認マラソンコースである。スタートは金沢市営グラウンド。午前一一時三〇分に二六人のランナーが一斉にスタート。糠雨の降りそそぐ中を軽快な足をけった。ことしの陸上界では、本校が絶対優勢という保証はなかった。ところが前半三区間で岡口・森・浅野の頑張りによって予想をはるかに上回る七連勝の偉業をとげたのである。これも伝統による相性というものだろう。タイムは二時間二〇分四四秒であった。

昭和四〇年、第二七回を迎えた新春恒例の耐寒継走大会は、一〇日午前一〇時五〇分から金沢市寺町台を一周する一二・一キロのコースで、新雪を踏み、小雪をついて行なわれた。松農Aは三八分一八秒という快記録で、小松実に四連勝をはばまれた昨年の雪辱を遂げた。現在では、山村外志雄教諭は第三期の黄金時代をつくろうと努力されている。

庭球部

昭和三二年の部は、放課後は火の燃えるような猛練習を続け、部員は「今年こそ頑張るぞ！」といい、男子一五名、女子一二名は岡田一郎顧問と山マネージャーとともに力を合せた。七月二七日、静岡県浜松市において開催された東日本高校軟式庭球選手権大会に、東　文雄、中浦芳明組が本校初の県代表として出場した。次いで、昭和三四年一〇月二五日から六日間、東京都を中心に行なわれた第一四回国体に、本校から竹内・伊井組が出場した。昭和三五年度は、部員二〇余名は、自己の趣味を生かし、技術の向上を計り、八月二七日第一五回高校男女軟式庭球大会県予選に男子の部で優勝した。

剣道部

昭和三三年八月九日、秋田市山王体育館で開かれた全国大会に、本校は予選成績一勝一敗で決勝に進めなかったが、福田敏雄・増川将昭らの活躍はみのがせない。また県体において、準決勝に五対二で泉丘高を、決勝で大聖寺高を四対三で勝ち、初優勝を遂げた。

排球部

昭和三三年　第九回県体が八月九、一〇日の両日行なわれ、本校から男子は、西尾外与志、伊藤喜之、安田哲夫、神田政憲、浅井紀明、浅野義明、小倉洋一、池田　恒、村井芳夫を、女子は、湊三重子、菊田道子、得田泰子、川上信子、吉藤和子、北　文江、藤田春枝、中村幸子、土谷増子をそれぞれ派遣した。

昭和三三年　第一〇回県体が八月一七日に行なわれ、男子は第三回戦で、女子は一回戦で敗退。六人制バレーを行なうという報に、これから少しずつ勉強し、練習していった。部員三五名。

昭和三六年、井須　清、本多和子両主将のもとに、部員二八名は毎日約二時間をここ一、二年間の不振を挽回すべき技術の向上、チームワークの養成に励んでいった。基礎練習、実戦的練習、交歓試合、そして大会に〝一戦必勝〟をモットーに一致団結し強大なファイトを秘めた。

昭和四〇年、前年四月に赴任した田村昌俊教諭の好指導にめきめき部員は力を伸ばし、五月五日、春季バレーボール大会兼北陸三県予選大会で、羽咋高校に破れたものの、第三位に輝やいた。

一回戦　本校2―1宇出津　　準決勝　本校0―2羽咋工
二回戦　本校2―0小松
三回戦　本校2―1県工

春季大会、新聞には県工が優勝の最右翼と書いてあった。勝ち進めば準々決勝で県工と当たる。当たって砕けよう。全力をだした。県工に勝ったのだ。次の羽咋工業には勝てない。原因は何か、相手だって人間ではないか、前年度インターハイ・国体出場チームだからというので萎縮してしまうのではないか。たしかにそうなんだ。コンプレックスだ。それでそんな気持ちをはらいのけて次の機会まで練習を続けようと話し合い練習を続けた。（「クラブ活動反省記」まつのう）

六月二七日　県高校選手権大会兼全日本六人制選手権大会県予選が金城高体育館で行なわれた。本校はよく頑張り第二位を獲得した。

一回戦　不戦勝
二回戦　本校2―0七尾
三回戦　本校2―0松陵工
四回戦　本校2―0二水

準決勝　本校2（15―13／15―8）0桜丘
決勝　本校0（8―15／11―15）2泉丘

決勝戦で泉丘と対戦した。NHKのラジオで中継放送。アナウンサーがわれわれにいろいろ質問するのだ。ちょっとしたスター気取りになった。完全にあがってしまった。二位の松農よくがんばったと誰れもいってはくれ

ない。（「まつのう3」下道茂信主将）

八月五日、第二十回国体バレー競技県予選会が行なわれた。第三位に輝やく。

一回戦　不戦勝　二回戦　本校2―0飯田　三回戦　本校2―0金商

四回戦　本校2―0七商

準決勝　本校1　13―15　15―10　9―15　2大聖寺

昭和四一年四月二五日　県春季大会が参加校三三チームの下に行なわれた。一回戦不戦勝、二回戦　本校2―0柳田農、三回戦　本校2―1寺井、準々決勝　本校2―0金商、準決勝　本校1―2泉丘　以上の結果、第三位となる。六月五日、県インターハイ予選は参加三五チームを数えて熱戦を展開。一回戦　不戦勝、二回戦　本校2―0七尾農、三回戦　本校2―0北陸大谷を破り準々決勝に進出したが、輪島高に二対〇で敗北した。

むし暑い体育館の中で、ボールだけを追い油汗を床に落し、目標に歯をくいしばった。やがて素直な、自然にできたような明るい一つの輪ができた。田村監督は「優勝しなければいかん。二位になら一回戦で負けてしまえ！」

（「クラブ活動一年間の回顧」まつのう4）

という厳しい声に三年生三人、二年生三人のレギュラらは国体出場を目指していった。八月一〇日、いよいよ県体兼国体予選がやってきた。第一回戦　不戦勝、二回戦　本校2―0七尾、三回戦　本校2―0小松商、準々決勝　本校2―0泉丘、準決勝　本校2―1小松工、決勝　本校0―2県工　という戦いだった。今年度は年間優秀校に輝やき、部の歴史上に足跡を残した。一一月二七日の高校新人大会では第三位。一二月一一日、松任町スポーツセンターにおいて部員は大松博文監督の指導を受けた。

昭和四二年四月一六日、春季大会が行なわれた。第一回戦　本校2―0輪島、二回戦　本校2―0羽咋工、準決勝に進出して、県工に二対〇で敗北して涙を流す。インターハイ予選が五月七日、三四チーム参加のもとに好ゲームがいくつもみられた。本校は、一回戦　不戦勝、二回戦　柳田農を、三回戦　錦丘を、準々決勝　羽咋工業をそれぞれ破り、準決勝に進出したが、泉丘に、七―一五、一五―四、一五―一三セットで第三位。

優勝旗をこの手にと。それだけを思い練習に火花を散らし、つらく苦しい修行であったが涙が落ちたって泣くものかと、それぞれの心に聞かせてつらぬいた事も、前向きの姿勢を裏返し一ケ月位練習が乱れ、前の姿勢にもどすのにつらく当たる風が憎かった……（「クラブ一年の足あと」まつのう5）

昭和四七年一一月一七、八両日　県加賀体育館で、県新人大会兼第四回全国高校選抜優勝大会加賀地区大会で、本校は第三位。国体予選第三位となっている。

羽球部　昭和三一年九月二〇日　県高校新人大会個人の部で、今川が小松実高の部員に二対一で敗れたが、個人二位は部にとって大きな業績であった。昭和三三年一一月二三日、県新人大会で宮本が個人の部で優勝した。

送球部　昭和三一年にはユニホームとストッキングを購入し、石川県送球界の王者の位置をねらう。北陸大会県予選では、練習不足が原因で一回戦で敗北。部員一八名。七月二七日、県立工芸高校と交歓試合を行なう。

本校4（2―3 2―0）3県工芸

昭和三二年、第九回県体には次の選手をおくった。本　幹男、本屋弥寿男、高田幸男、中西喜孝、赤沢与章、吉田　稔、今坂　博、沢田順一、西村孝信、石黒邦男、高畠栄治。

昭和三四年、高畠部長を中心に一年一五名、二年五名、三年九名、計三〇名で部形成。県体第二位、国体予選二位で、近年まれな好成績をあげる。当時の顧問は前田一男教諭であった。

昭和三六年には春季県ハドンボール大会で、本校は輝やく優勝の栄冠を得た。

昭和三九年は、伝統の力は強く、村井主将を中心に、石田、島口、原田、四月朔日、中川、伊藤、平、種池、管本、直谷等がよくまとまり、四月一九日、国体県予選で優勝。第一五回全日本高校選手権県大会（六・二八）優勝して、八月、長野県上田市で開かれた全国大会出場、一回戦青森高を六点差で破りながら、二回戦で関東の名門、足利高に惜敗した。八月二二日の県体で第二位を得た。

昭和四〇年一〇月三日、北信越高校県大会予選に第二位。

昭和四二年、県高校選手権大会が六月四日に行なわれ、第三位を獲得した。当時の顧問は長永勇教諭であった。

昭和四六年、本年度の部を通して回顧してみたい。「第一に、チームワークの問題である。部員全員が、みなばらばらな行動をとったことだ。その具体的な例としては、冬期練習で全員がそろったのは数少なく、かぞえるほどしかなかったことである。又、冬期練習と同様に長期間練習においても、個々個人がちぐはぐな行動をとっていたことである。第二に精神面の問題である。大量点を取られたときなどは一人一人が、がたがたとくずれプレーが緩慢になったことなど、ややリードしていても、つまらないところで点差を縮められたり、逆に点を入れられ、逆点されたりしたときなどは、精神面の甘さがはっきりとあらわれたからである。以上のことが、この一年間で感じた事で、悪い点ばかりあげたようだが、これらの点を重点にして、一、二年生は、顧問横浜哲夫教諭の下に頑張っていってもらいたい。」（まつのう」八号）と部長は述べているが、部員不足で発展的解消された。

各年度部顧問一覧（昭和三三年〜五〇年）

部／年度	野球	陸上	相撲	籠球	羽球	山岳スキー	排球	庭球	水泳	卓球	柔道	ソフトボール	送球	蹴球	スキー
33	藤田誠	守田	森田	盛田	米岡	在田	藤宮永田	越野	横川	小嚢島地	中林	安川	前田		
34	藤田瀬広	守田	森井田松	横川	米岡織米	在田	藤宮永田	越野	柳作本	嚢地本橋	林中本橋	安川	前田		
35	広瀬	守井田長	森田	大野	米岡本橋	建部	藤宮永田	越野	作本	嚢地島小	林中本橋	安建川部	前田		
36	田広村瀬	守井田長	森田	大野	米建岡部	建部	藤宮永田	越鈴木野	作本	小島	中林	安建川部	前田		
37	田村	守田	平野		道米岡	徳山	藤宮永田	大鈴木野	作本	小島	中林	安建川部	長永		
38	杉田村田	徳山	中本		鹿角	徳山	小林	山口	松本	瀬川	中本	安川市	長永		
39	杉田	徳山	雄谷	廃止	鹿角	徳山	田村	西	山口	小西	中本		長永		
40	三宅平田	徳山	雄谷		鹿角	芝田	田村	西	松本	小西	中本	廃止	長永		
41	三宅平田	徳山	雄谷		鹿角	芝田村	田村	西	音	小西	中本		長永	吉村	

部／年度	野球	陸上	相撲	籠球	羽球	山岳スキー	排球	庭球	水泳	卓球	柔道	ソフトボール	送球	剣道	蹴球	スキー
42	青木	副田	雄谷	—	鹿角	徳山	田村	谷内	島田	加藤	中本	—	長永	三宅	—	—
43	平田・青木・島田	徳山副田	石井	—	平野	—	寺田村島	谷内	宮田	松本	中本	—	小林	三宅	東	—
44	青井上木	平徳山野	雄谷山崎	—	小喜多林	—	小林寺田村島	大又蔵	芝宮田	紙根谷津	中本石井	—	長永町田	三宅	森東岡	—
45	井上青木	平山野崎	雄谷	—	古保	—	寺田村島	徳又山	宮田	西根浦津	中本石井	—	町田横浜	三宅	森東岡	—
46	青木・井上・額	平山野崎	雄谷石井	廃止	小林屋綱	—	寺田村島	徳又山	—	横根浜津	中本	廃止	—	三宅登	森近藤岡	徳東山
47	井上	守田	雄谷	—	川上	—	田村	千田	—	根津	石井	—	—	三宅	森岡	東
48	青木	平山野村	雄谷山根	—	黒川田上	—	作田本村	千宮下田	—	岡根田津	綱屋	—	廃止	三上登宅	森岡	東
49	亀田・茂田・高志木	山村	山根	—	親川谷上	—	作田本村	千田・宮下・中田	—	根津	綱石井屋	—	—	三上登宅	森岡	東
50	亀志田	親山谷村	山根	作本	佐野	—	作田本村	千中田田	宮幡田	根津	高綱木屋	—	—	上桂登田	近藤泉	東森岡



奮斗する本校選手

スキー部

本校は昭和二六年一月の冬季大会スキー競技会に初参加して以来、本田、村西、浮田、吉田らは、二九年まで距離競技のうち継走競技を独占して本校の名を高めた。同三九年には、徳山教諭ら四名が集まって、翌四〇年に第一回選手権を開く運びになった。そして門村和一、元尾文二、清水一男、元尾昭男ら有能な選手を世におくりだした。その陰には、徳山俊介、東　保之教諭らの熱心な指導はみのがせない。

三文化部

各部の設置状況　昭和二九年度、三一年度、三六年度、四六年度の文化クラブ活動登載は次のようになっている。

昭和二九年度
音楽・写真・科学・絵画・演劇・文芸・郷土・珠算・茶華道・弁論・新聞・映画・家庭・書道・放送無線。

昭和三一年度
被服手芸・調理・美術・音楽・科学・演劇・茶華道・ダンス・文芸・映画・弁論・カメラ・実践・書道・JRC・PFC。

昭和三六年度

音楽・写真・美術・実践・人形劇・書道・華道・茶道・舞踊・文芸・地歴・科学。

昭和四六年度

茶道・美術・ブラスバンド・華道。

右の部は、結成された動機と時期が当然あるはずであるが、今、それを詳らかにすることはできない。そして皆その時活発な動きをしていたのかというとそうではない。大別すれば、生徒中心型、教師主導型、名称存在型と分けられたようだ。では現在と少しも変わりがないではないかと思われそうであるが、概して今よりは生徒の自主性に裏づけられていたようだ。生徒の自主性という面からみて、部活動が変貌し、停滞ぎみになったのは、全般的にみて松任高校新設等の生徒急増の昭和三八年前後が境のように思われる。もちろん、その後も生徒の自主的積極的活動によって支えられる部もあるが、全般的にみて停滞ぎみであることは否めない。

以上が文化活動の概況である。次からいくつかの部の歴史を、その活動のピーク時に焦点をあわせてのべてみたい。しかし、資料が乏しいので、どうしても回想風の記録にならざるを得ない。

地歴部　昭和二八年九月、金沢市郊外の二塚にある古墳、その他の遺跡を調査したその結果、部の課題として、「現在の稚日野部落の西方に塚田と呼ばれる田があり、そこからマガタマ、その他の豪族の副葬品と思われるものが掘り出されているので、もう一つ塚があったのではなかろうか。」という説をたてて帰校した。

昭和二九年三月九日、部第二集「能登島調査報告」（一七ページ）を刊行した。内容は、島の人・職業・年中行事・言語・結婚年令・教育・農具にわたってまとめられている。

昭和三三年一月一八日、松任小学校四年生は、字安田地内国道八号線わきで、広告塔建設のために掘り返えさ

れた土砂中から弥生式土器（土師器か）を採集して話題となる。松任町の千代尼遺跡・羽咋吉崎次場遺跡調査に参加した。一一月の松高祭には〝先史時代の社会と文化〟をテーマとした。

昭和三五年に各校の熱意と高堀勝喜本部幹事の肝いりではなばなしく高文連郷土部が発足した。吉岡康暢（前本校社会科教諭）副部長の努力で、共同研究・夏季合同研究会・研究会誌「会報」を主骨とし活動を開始した。当時の部の顧問は、金山顕光教諭。現在県下における考古発掘のために努力した人である。主な論文には、「加賀三浦遺跡の研究」（昭42）・「古代遺跡と埋蔵文化財」（昭44）・「末松廃寺跡調査について」（昭33）等がある。

高文連郷土部の共同研究は、「年中行事における地域社会の諸様相」の統一テーマを取り組み、その全体指導に、山下久男（現在加賀市歴史民俗資料館専門委員）・今村充夫（現在石川県郷土資料館副館長）らがあたった。本校部員は金山顧問指導のもとに「松任周辺の史蹟」を研究テーマとして部員一同努力した。一二月頃に、第三集「松任史跡」を刊行した。内容は一一ページで、県社松任若宮八幡神社・松任金剣神社・松任城・坂本山本誓寺・聖興寺・千代尼などである。

昭和三六年三月一日に、石川県高校文化連盟郷土部の創刊号「会報」に「年中行事における地域社会の諸様相」が特集されて、各校からすばらしい成果を発表している。本校からは、第四集「石川平野における農村の年中行事」を寄稿して農村行事を明確に視覚化した。この時の部員は、東　輝夫、長　修、紺屋文夫、半村民雄、森田みよ子、中垣祥子、新谷菊枝、北村栄子、村中保枝、中田秋枝らその他七名が活動していた。五月、野々市町の高村誠孝は末松廃寺址付近の水田用水路中から、和同開珎（銀銭）一枚を採集。七月には、「金沢城」をテーマに当地を訪れて石川門とその防備、内堀、外堀、金沢城の修築、辰己用水、極楽橋と宮腰往来等について研

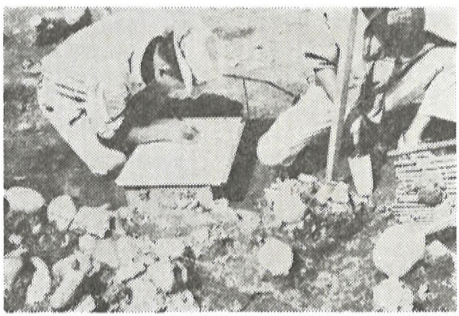
究した。その成果を秋に第五集「金沢城」（一一ページ）として刊行した。西野幸一、村井太美雄、西川智子、中村和歌子、徳野孝子、森永恭子、大西勝良、和田実徳、小倉　修らが活躍した。

昭和三七年は、幾世紀もの間地中深く埋もれてきた祖先の足跡である遺跡遺物を通して、庶民生活を復元しようという部員一丸となって、「松任町の歴史と文化」をテーマとした。古くから加賀平野の中心として栄えた松任、その町名の由来は、いつごろからどのようにして限りなく等疑問の念がわく。時代は移って奈良朝末期、ここは末松、穀倉平野の中に白山を仰いで青空にくっきりとうかぶ高層寺院、移り変る世に従い、今もなおその遺構を残す末松廃寺。天下の名将、上杉謙信の大軍に攻められても、なお屈しなかった松任城、加賀千代尼の句とその生い立ちなどを、高作一枝、安川　茂、中川俊嗣、川向吉暢、島野利昭、徳浜和夫、富田　弘、吉田健一、倉重悦子、古源藤子、山崎幸枝、林　静子らが中心に調査した。九月からは、縄文式時代と弥生式時代の文化階段を重点に活動し、クラブ員相互の理解を深めて一人一人が密接に話し合えるものにしようとして「新松任町史」を発行しようということで二五名に分担して汗を流して調査した。

昭和三八年三月、石川県高校文化連盟郷土部「会報」第三号に「松任町の歴史と文化」と題して発表した。内容は、松任町名、松任城、松任出城、千代尼、末松廃寺となっている。五月に、金山顧問は御手洗海岸砂丘の畑地下に弥生期から古墳時代にわたる包含層がのびていることを確認した。同月に第六集「新松任町史」（四〇ページ）を刊行した。ふるさとのことを学ぶ好資料となる。八月一日から一三日まで、島野利昭、富田　弘、吉田健一、橋爪義信、高本伸一、横井孝志、太田義樹、高野浩一、本倉忠信、沢村　勇、徳田　仙、上坊寺良正の部員一二名は、高堀勝喜、浜岡賢太郎らの指導のもとに羽咋高校、七尾高校郷土研究クラブ員らとともに、次場遺跡の発掘に参加した。弥生中・後期土器および土師器の良好な資料を得たほか、各種石器・小型仿製内行花文鏡・

石組状遺構・溝状遺構などを掘り出した。一〇月五、六日の両日、金山顧問らは末松廃寺址の予備調査を行なった。以後、一〇月一二、一三、一九、二〇日。一一月二、三日に試掘を続けた。一〇月八日に、第七集「末松―加賀国分寺址と加賀国造所―」（一〇ページ）を刊行した。この末松廃寺の発掘は、これから三ヵ年計画によって野々市町の主催で翌年から本格的発掘を行なうことに決定された。部員は「古きをたずねて新しきを知る」という精神のもとに、これからも発展する部であるように努力して行きたいと願っている。

昭和三九年三月、石川県高校文化連盟郷土部「会報」第四号に、「松任町御手洗海岸における泥炭層の研究」を六ページにわたって発表。金山顧問の指導のもとに、古代史、測量の方法、写真のとり方、図解の作り方、土器の復元法を学習した部員たち。九月九日、松任町三浦地内に移転新設された本校の敷地整備作業中、県道松任鶴来線に東面する地点より遺物が発見された。たまたま作業に従事していた部員によって採集された土器片に着目した金山顧問は、直ちに石川考古学研究会の高堀と吉岡に通報した。この間整備作業は継続され遺物包含層が攪乱されていったが、のちの第一調査区から出土した多量の遺物中には、青磁、白磁片、緑釉土器あるいは鞴羽口、鉄滓、砥石が含まれ、また第三調査区では三層におよぶ包含層の存在が確かめられて、遺跡の重要性が次第に認識されるようになった。部員は遺物の散逸を防ぐとともに、緊急調査の必要性を痛感したが、何分遺跡の中枢部が学校の塵芥処理場予定地であったために作業は急速に進歩、遺跡過半部の湮滅はさけられない情勢となった。



三浦遺跡の発掘

昭和四〇年七月三〇日から八月一二日まで、金山顧問らを中心に本校地で発見された古墳時代前期から平安時代後期にいたる遺跡の発掘を行ない、平安後期における初期武士階級の居宅と思われる建築址の一部や奈良期および平安後期の標式的土器など多数の好資料を得た。この発掘では、池田　勉、太田義樹、沢村　勇、高本伸一、高野浩一、田中外記枝、本西外美ら二五名が汗を流して頑張った。その中の一人、池田　勉（三年農産製造科）は次のように回想している。

生徒宿泊および体育館を宿舎として作業に従事した調査員、調査助手、生徒はのべ三三三名（四七名）にのぼり、部はこの間、ずっと体育館で合宿を行なったわけです。三日に一回、夜開かれる発掘会議で自分たちの意見を述べ、先生方の意見を聞いたりして、古き時代の人々の生活を想像するのがなんともいえない楽しみの一つでした。

このような楽しみの反面、日中の発掘作業はひどいもので、はじめは天気がよかったが、日がたつにつれて疲れがでてきて、しまいには自分たちで話をするのさえ面倒になってきました。それでも、この発掘はどうしてもわれわれが主体としてやり抜かねばならないという信念をもって塩をなめたりして頑張り通しました。このような苦しい最中に部の先輩の方たちがきてくれ、一生懸命に汗を流して手伝ってくれました。その時は本当に嬉しく、私たちに美しい母校愛というものをしみじみ見せてくれました。（「三浦遺跡発掘に参加して」まつのう第三号）

一〇月九日から一四日まで、部員は掘立柱址（三浦遺跡）の緊急発掘を実施した。

昭和四一年九月二三日から一〇月二〇日まで、奈良国立文化財研究所技師河原純之らの指導で、史跡末松廃寺址第一調査を行なう。部も参加。今次の調査では塔址、金堂址発掘に重点がおかれ、遺存した根石から推定して三間等で一辺一〇・八メートル（三・六尺）の塔が推定された。

昭和四二年七月二一日から八月一八日まで、文化財保護委員会坪井清足、亀井正道らの指導により、末松廃寺址第二次発掘調査が行なわれた。主として回廊・中門・南大門・講堂址などの解明作業を中心に発掘したが、門

址などを明らかにすることはできなかった。この末松廃寺址の調査より以前の三月二五日から四月三日にかけて、金山顧問らの指導をうけて、能美郡辰口町字徳久通称西山丘陵上に所在する西山八号墳の発掘調査を行ない、凝灰岩質切石積みによる横穴式石室を精査、玄室内より須恵器・土師器・直刀・刀子・鉄鏃・金属耳環を採集した。参加した部員の一人は「山の上で虫にさされ、うるしにかぶれ、雨でずぶぬれになりながらの測量。朝早く、夜はあたりが真暗になるまでスコップと移植ごてを握って働く。そういう苦しい中にも金山先生をまじえて夜遅くまでの討論会は楽しかった」と顧みている。

昭和四三年三月二〇日から四月九日まで和田山古墳群の調査を行なった。三・八号墳の墳形実測・六号墳（既掘）の再発掘、九号墳部の墳裾発掘による墳形確認、一二号墳の発掘が主なものであり、九号墳の長方形墳であることや、八号墳が方形墳の可能性の強いことも明らかとなり、さらに方形周溝墓の存在も確認された。主体部を発掘した一二号墳（円墳）は木棺直葬と推定され、副葬品として直刀一、鉄鏃九を得た。一〇月一四日から二四日、御経塚縄文遺跡の一部が近く金沢バイパス路線工事のため壊わされることになったため発掘、晩期土器多数のほか、石冠、石錘などの石器と甕棺土拡墓などを検出した。

昭和四四年九月一二日、宮永遺跡（古墳時代前期に属する竪穴住居一戸）九月二三日、竹松遺跡の調査、一〇月四日から一三日にかけて、宮永古墳時代集落遺跡の本調査を行なう。一一月一日、相川新遺跡調査。

昭和四七年、部名称存在型に陥り、発展的解消してしまった。

昭和四八年四月、前任校で地歴部の顧問をしていた山根　公教諭が転任してきた。先生の主な論文には、「加賀俳人成田蒼虬の研究」（昭年47）・「加賀能登の虫送り概観（昭47）・「加賀千代女の人柄と句風俳論」（昭42）・「松任地方の食物について」（昭49）等がある。山根教諭は、地歴部がなくなったことを残念がって、な

んとか伝統を持ち、学界に寄与してきた地歴の灯を再びともしたいという願望から「郷土研究サークル」という名称で、サークル員を五月に募ったところ、一、二年一〇名が賛同してくれた。そのリーダーが太田謙次であった。毎月例会を開き、「松任の昔話」・「松任地方の盆踊唄」・「松任の左義長」等、その他について意見交換、発表をしたりした。七月二二日から二五日まで、「松任市柏野地区の歴史・民俗」を調査した。

昭和四九年二月、石川県高校文化連盟郷土部「会報」第一二号に「荒屋柏野の寺社由来記」を一〇ページにわたって発表した。四月、吉本義徳をリーダーに、サークル員九名は野々市末松廃寺跡を見学。五月、「三浦遺跡」について研修。六月、加賀の民謡の暗唱。作業唄収集。

七月、夏休暇を利用して、農業文化祭に展示する松任地方の民具を採集。一一月、二年ぶりの盛大なおまつり農業文化祭に七八点の民具を展示した。

昭和五〇年二月、石川県高校文化連盟郷土部「会報」第一三号に「松任市柏野歴史年表（上）―古代から大正末期」を発表した。四月、必修クラブに二年目の「郷土研究クラブ」が継続を機会に「郷土研究サークル」は解消した。

文芸部

昭和三一年一一月三日、第六回石川県高校短歌俳句大会が金沢市教育会館で行われ、本校から中江寿男・中垣順子・南　静枝・新　順子・笹島外栄・市田栄津子・中田千恵子・瀬川邦夫・松田外誉子・新　喜美子ら文芸部員が参加した。中江は俳句の部で入賞した。

温室を出る暖風や秋深し　　寿男

昭和二一年に、「松苑」第一集を創刊してから、地道に文芸活動してきた。松苑第一一集を見ると美谷一夫教諭を顧問として活動は目ざましいものがあった。美谷一夫顧問の主な論文には、「口碑伝承の記録文芸化につい

て―神道集の場合―」（昭42）がある。「松苑」第一一集昭和三年の編集委員には、松原健一・飯田幹雄・中垣順子・野本沙代子・村田喜久子があたり、内容は、創作六篇・随想一四篇・短歌抄一八篇・詩八篇・五〇ページからなっている。平田悦子・村西静子・高井外世子・街道孝志らの分厚な作品が目立った。

昭和三二年一一月、堀江悌三顧問の指導を受けた文芸部員が第七回石川県高校短歌俳句大会に参加して、次の人が入賞した。

兼題（近詠・雑）

佳作　コスモスの白さ少女の髪光る　塩田紅果選　瀬川郁夫（松農）

人　稲うけて稲架間に低き母の丈　西村公鳳選　中江寿夫（松農）

佳作　コスモスを病室に活け青年期　瀬川郁夫（松農）

秀逸　へびの尾の静々消えて野菊叢　杉原竹女選　伊藤喜之（松農）

席題（紅葉）

特選　天　高台に紅葉あかるき建設地　塩田紅果選　瀬川郁夫（松農）

地　薄紅葉少年工のちぢれ髪　瀬川郁夫（松農）

昭和三四年一一月二〇日に「松苑」第一三集の名を得て、文化委員会は「松苑」を発刊した。内容は、梶井基

次郎の人間性・学習の意義・調理講習会・喧嘩・時の流れ・俳壇・短歌等三〇ページに収めている。第九回県高校短歌俳句大会（高文連・文芸部主催）が行なわれ、本間外志久が透逸（田村公鳳選）に選ばれた。

夜長の灯壁に蛾しかと雨の降る　　外志久

昭和三五年、文芸部の顧問池上啓成教諭は「師走を彩る街頭の宣伝、ショーウインドのデザイン等々年末の街は何か意欲的である。幼児が紙と鉛筆とで楽書に自己満足する段階から始まり、政界を見ても、新聞を見ても、雑誌を見てもみなそうである。人間ほど意欲的な動物はない。してみるとこれは人間の本能なのであろう。最近の学生は作文を嫌がるが、これは嫌なのではなくて日頃の練習が足りないからなのであって、書きたいのが本音である。だから人間は、どこかでなんとか自己表現をしようとする。人前で猫をかぶる者でも家で、筆の立つ者は筆で、口の立つものは雄弁で、自己を表現しようとする。だから巧拙は別として、自己を端的に表現できる人間は幸福である。」と述べ、名称「松苑」にかわって、新しく「残像」が一月一五日に発刊された。



文芸誌「残像」

残像　目次

巻頭言　文芸クラブ顧問…池上啓成…(1)
小品―父と娘　高橋和子…(3)
甘　柿　大窪明子…(5)
創作―初　芽　中村雅子…(6)
白玉の影　横川政栄…(10)
俳句　宵　暗　……(19)
詩　光　……(20)
共通課題作文　水　滴　……(23)
詩　信号機　……(30)

創作　青芽のゆくえ　中垣ひろみ…(36)
峡谷　松本輝公…(44)
紀行文　一人旅　松村泰長…(55)
小品　史子の嗚咽　西田邦子…(59)
論文　何故農村へ嫁にいかないか　山本静江…(62)

右の文芸誌「残像」に目を通すと、ソツのない作品は多いけれども我々の心に肉迫し、何か激しく訴えるもの、感動させるもの、高校生らしい溌剌さがあふれているものが少なく、その様な作品をつくづく欲しいと思った。中でも「水滴」に興味があった。〝水滴〟というもののとらえ方の見事さ、水滴の描写の美しさがあふれていて強く印象に残る。随想として扱った「何故農村に嫁に行かないか」は、農村合理化とその内面を考えたところなど、周囲にあり、しかもそれをしっかりと見つめたものでなければいえず、優れたものだと思う。第一〇回県高校短歌俳句大会において、席題「矚目」が与えられ、本間外志久君が入選。

秀逸　秋晴れや少女の夢は画布に満つ　外志久

一二月二〇日に「松苑」が三〇ページで発行された。文芸部では、松井弘文・村本亮衛・松村泰良・山本静江・西田邦子・宮田淑子・徳田建夫・黒枝凌子ら二六名は一丸となって健筆をふるっていった。その後、文芸部は発展的解消した。

昭和四一年一月、文芸部同好会一一名で発足した。四月、「わだち（轍）」という創刊号が発刊された。小雨降るアスファルトの舗道を車が通っ走る。その車輪が、次々と幾何学的な同形を描きながら車輪を追う、そんな情景を想起しながら「轍」という名称がついた。顧問に松本博光教諭を迎えた。

PFC部

別に「郵便友の会」ともいう。平和・教養・社会奉仕の三つを会員活動の信条として、いわゆる大衆通信方法によって、言語および表象による思想の交流を通じて、国内的または国際

的な協力を促進すること、そして、それが青少年学生の手によって行われることによって現代教育の目的達成の一助にもすることを目標としている。昭和二四年六月五日、名古屋で全国組織が結成され、本校はいつ加盟したかはわからないが、昭和三五年には加盟している。昭和三八年四月、山口　哲顧問とともに、会員一同新しい気持で出発し、目標に従って集団文通、交換会が持たれてきた。当時の主な出来事を次に掲げる。

昭和三八年四月二〇日～二三日展示会、七月部員相互親睦会、一〇月小松高校との交換会

昭和三九年四月海外文通展、六月松任高校ＯＦＣとの交換会、一一月笠間中学校・松任高校との松任地区ＰＦＣ結成

昭和四二年に、毎年、農業文化祭に活動を広報しているが、部員五名は、部内容紹介説明・世界各国の宇宙切手やオリンピック切手・雑誌・国内外の手紙など、この機会でなければ見られない珍品を展示。（農業文化祭）

現在部は解消している。

ＪＲＣ部　英語の「青少年赤十字クラブ」の略称がＪＲＣである。博愛奉仕、親善を平素の目標としている。昭和三五年には部は活動している。この部の足跡をここに掲げる。現在、部は存在しない。

昭和三八年、四月ＪＲＣ総会、六月フォークダンス練習会、一一月ＪＲＣ展示会・応急処置の講習

昭和三九年（一九六四）六月下旬仏子園訪問、一二月二四日仏子園訪問

昭和四二年四月緑の羽根募金運動、五月仏子園訪問（松任高校と共同）、六月インド飢餓援助募金運動、七月全国体育大会金沢大会でバレー部・バスケット部の受付、九月仏子園を訪問して花壇をつくる。一一月文化祭でキャンプファイヤーの仕方、アイバンク、救助法、点字訳表など。一二月小松高校との交換会

昭和四三年五月小松高校との交換会、九月松任高校との交換会、一一月松任高校との交換会、一二月仏子園訪

問して餅つき会

昭和四四年五月松任高校との交換会、七月金沢錦丘高校との交換会、九月手すり清掃、一一月仏子園訪問

映画部

映画部の目標は、「映画芸術の研究並びに映画によって文化の向上発展を図り、全体の福祉を増進する」こととした。その後地道な活動をしていった。昭和四一年松任高校合同で〝さらばアフリカ〟の割引券を発行した。昭和四二年二月に映画部は解散した。しかし、西田と他の一人は新しく映画研究部を結成したが活動しなかった。昭和四三年に、「映画研究部」から「映画研究会」と名称を変えて、「よい映画を安く見よう」をモットーに活動していった。昭和四五年三月に部は解消した。高文連映画観賞には積極的に参加した。ここに映画テーマを掲げることにしたい。

昭和二八年（一九五三）　落ちた偶像、ワニの王国
昭和二九年（一九五四）　麗わしのサブリナ、別れの曲
昭和三〇年（一九五五）　暴力教室、大いなる希望、もず。
昭和三一年（一九五六）　沈黙の世界、赤い風船、生きていてよかった。
昭和三四年（一九五九）　お早よう、今日もかくてありなん、連邦警察、黄色い大地
昭和三五年（一九六〇）　秋日和
昭和四一年（一九六六）　栄光への脱出、シエルプールの雨傘、ベケットキューポラのある街
昭和四二年（一九六七）　太陽がいっぱい。ピンクの豹、バニーレークは行方不明、二十才の恋
昭和四三年（一九六八）　冒険たち、HELP、ハムレット、気狂いピエロ
昭和四四年（一九六九）　俺たちに明日はない、コレクター、鉄道員

昭和四五年（一九七〇）　異邦人、男と女、天国と地獄、昼下りの情事

写真部

昭和三九年に中部日本学生コンクールが行なわれ、参加一四四校中わが写真部は最優秀学校賞を獲得し、特選入選をほとんど独占した。通算四度目である。顧問の安川雅章教諭は「三六枚のフィルムの中、三〇枚は記念撮影で結構、残りの六枚ぐらいは自分の思うものを思う通りに撮って来い」常にいわれた。高文連美術展六点出品、校内写真コンクールを主催、吉野校長欧米視察旅行スナップの整理等を行なった。昭和四〇年中部日本学生コンクールで、参加一〇〇余中、わが部は通算五度目の最優秀賞に選ばれた。昭和四二年一一月三、四日の両日の農業文化祭で、部は連続五年中部日本ナンバワンの伝統をもつ決定的瞬間の数々を展示した。また、今年は個人活動から全体活動へという旗じるしのもとに撮影旅行や他校との交換会などを行ない部員の親睦と技術向上を計ってきた。昭和四五年に名称存在型となり、現在は解消している。

美術部

昭和三九年八月、金沢大学構内で行なわれた高文連写生大会に参加した。一一月、農業文化祭や高文連美術展に出品、昭和四二年（一九六七）一一月三、四の両日、先輩の残していった作品を目標にして、その見事な業績に追いつき、更に追い越そうと、力強く、密度のある作品を公開した。文化祭には重要な役割を果たしてきた功績はみのがせない。昭和二五年に部が創設されて以来、はじめて昭和四三年に金沢市北国画廊部クラブ展を開催して盛大であった。入場者一、〇〇〇名を越えた。北国アマチュア展、松任美協会展、高文連美術展などに出品。今年は、石膏デッサン、外に出ての風景写真画（水彩・油絵）、室内静物画でクラブとしては特に、絵画の基本ともいわれるデッサンを徹底的に行なった。部員二四名。昭和四四年から昭和四九年にかけて、主にデッサンを中心に活動して現在に至る。

書道部

昭和三九年中本恕堂講師を顧問として、毎週木曜日に練習し、文化祭や書道展に出品した。中本恕堂は、加賀千代の研究家として知られ、著書には、「千代尼聚考」、「千代尼の一生」、「加賀の千代」、「千代尼遺墨集」等がある。部員一五名は毎週五回練習した。そして、毎年開かれる書道展には必ず出品した。ここに、出品した主な展覧会の名を掲げておく。

昭和二八年　総合展覧会（石川県工高）
昭和二九年　九月　展覧会ポスター展
　一〇月　第四回総合展覧会（県工高）
昭和三〇年　八月　絵画展会（丸越ギャラリー）
　一〇月　第五回総合展覧会（県工高）
昭和三一年　八月　絵画展覧会（丸越ギャラリー）
　一〇月　第六回総合展覧会（県工高）
昭和三四年　七月　書道、写真展
　一一月　総合展覧会（大和ギャラリー）
昭和三五年一一月　総合美術展覧会（大和ホール）
昭和四一年　一月　書道展（社教センター）
昭和四三年一一月　総合美術展覧会（県社教センター）
昭和四四年一一月　総合美術展覧会（県社教センター）
昭和四五年一一月　総合美術展覧会

実践部　部は珠算・タイプ・簿記の部門に分かれて、それぞれ活動した。簿記は昭和二九年一一月、第三回総合競技大会が三校が参加して小松実業高校で行なわれ、本校は第三位に入賞した。個人の部で、北山は優勝し、部の名を高めた。タイプは、昭和三九年、ガタガタのタイプで修繕につぐ修繕で猛練習をした。タイプライター検定試験（全国商業高校連盟主催）に一〇名全員で合格した。一級タイピスト試験で二名合格した。毎週火曜日を休日としてその他の日は練習に励んでいる。練習時間は三時一五分から四時三〇分前後約一時間としている。

吹奏楽　昭和三九年、四万円余りの弱小予算で、大バス、小太鼓修理の二点を、ほかの必要な楽器をあきらめ、とくにブラス編成上重要なこの二点をなんとか購入し修理した。卯辰山での全国相撲大会、兼六園での野球大会、体育祭で演奏する。昭和四六年九月二〇日第三五回合同音楽会（金沢短高校）のブラスバンドの部に初出場した。昭和四七年、中日コンクール初出場。部の創立は昭和二〇年頃で現在、母校で教壇に立つ小坂政栄顧問は熱心に指導しておられる。

華道部　昭和三九年四月から、毎週水曜日に田中芙美子講師にきていただいて蔵　和子（養護）教諭の二人の指導者に恵まれて、男女部員は精励した。昭和四二年一一月三、四日の両日、男性主体の現役、ＯＢが力を合わせての現代自由華、三種生けなど、池の坊流で一般者に披露した。部員一五名だったのが、昭和四三年に男子三七名、女子一一名の計四八名が「美」を大切にして真剣に花を生けた。現在部は地道に活動している。

茶道部　昭和三九年毎週金曜日に、特別教室で金山教諭や古保　勲教諭の指導のもとに練習に修養に励む、文化祭では、流儀は表千家と固苦しいが、形式にこだわらず、気楽な雰囲気の茶会を行なった。

演劇部　昭和二九年七月一日開校記念日を祝して、五月下旬から林　黒土作「春雷」と「天国泥棒」を練習中であったが、七月一九日午後一時から研究発表した。キャストは、乾　貞一・松川栄子・松原健一・西村弥寿子・蔀生修二・宮永賢一。スタッフは、上野昭一（舞台監督）・岸山泰広・原凱男（装置）・喜成久美・松井弘美（照明効果）・木村悦子・北村喜久代（音楽効果）・江沼和枝（メーキャプ）であった。昭和三〇年度は「契機」を公演。昭和三一年には、榊原政常作「次郎案山師」・林　黒土作「蚊遣火」が公演された。同三二年は、「笛」と「ながあめ」の二つで、「笛」は実際にないとも限らない一家の状態を根かな葉までわかりやすく語り合っていた。その中にさまざまの滑稽をまじえて人目を引きつけていたようだった。部員の汗水たらした結果を披露し観客を喜ばせた。

放送部　昭和二九年四月に部が結成された。三一年六月、生徒諸君からコールサインを募集していたが、M・A・Rに決定された。このMARを和訳するとMは松任であり、Aは農業で、Rはラジオでこれだけでラジオ松農となった。一一月一一日に放送局開設。場所は、職員室の一角で元の体育用具置場を改築し、そこに新しく購入した諸機械を設置したもので、とにかく、放送可能な体制になったといえる。この頃ほとんどの学校では校内放送設備が完備し、充実した学校放送を行なっているにもかかわらず、本校では設備、とくに機械が古びていたため、講演、総会の時の雑音には特に関係者諸君の頭痛の種となっていた。翌一二日、校内放送開始。放送内容については、朝はニュース、昼は次の番組を立てて放送した。月曜日（クラブ巡り）・火曜日（先週の話題）・水曜日（先生に問う）・木曜日（娯楽の時間）・金曜日（ホームだより）・土曜日（図書館だより）で当時はたいへん好評だった。



新聞部

昭和二三年五月一五日、「松高新聞」創刊号が新聞部から発行された。

昭和二八年八月、「松高新聞」第一六号が県新聞コンクールに入選。三四年一二月二一日、第五四号から、生徒会新聞局発行となった。

昭和三五年八月、「松高新聞」第六一号が県新聞コンクールに佳作となる。昭和三六年八月、「松高新聞」第六二号が努力賞をうける。三八年三月でもって廃刊となる。

各年度部顧問一覧（昭和三三年～五〇年）

	英語	民謡
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		
43		
44	田村	山脇
45	安川	山脇
46	西浦	岡本
47		
48		
49		
50		

| | | |



四　農高ごよみ

生徒の学校生活に刺激と潤いを与えた小事件を「松高新聞」・会誌「まつのう」から拾ってみよう。

牛乳処理機が設置され、牛乳の校内販売が始まった。（昭29・7）

昭和三〇年度使用教科書の展示会は七月三日から一二日まで図書館文芸室で行なわれる。（昭29・7）

かねてから水稲早期栽培の最先端をゆくものとしてその成果が期待されていた水稲立体苗代が本校で試験された。一年農業科生五名が肥田教諭、宮田助手の指導でビニールハウス内に電熱育苗した。苗は順調に生育している。（昭33・3）

始めてけい光灯を教室に備える。他校で使っていた中古品であるが、明かるさ抜群、視力の低下を防ぎ、学習効果の向上が期待される。（昭33・6）

サイレンに代って、授業の開始・終了の合図にチャイムを設置。三五年度卒業生の寄贈によるものである。（昭36・5）

第二室戸台風により全壊した自転車置場を、新たに鉄骨で建設する。（昭36・12）

三月の職員会議で女子のコート類は、型は自由であるが、色は紺に統一された。（昭36・5）

二六日、新校舎への移転完了、いよいよ六月一日より新校舎で授業を開始、明かる過ぎて、しっくりしない。（昭39・6）

校舎内スリッパ履きとなる。一年黄色、二年緑色、三年茶色と色別けとなる。（昭39・6）

二〇Wのパイオニアステレオが全校生徒を集めて公開される。すばらしい迫力に圧倒される。（昭39・6）

旧校舎から持って来たロッカー（木製）を廃棄して、生徒昇降口に下駄箱が設けられる。何でも新しいものはよいが、容積がたらないという声しきり。（昭39・6）
遅刻防止のため、公安委員会で週番を作り昇降口に立つ。（昭39・9）
オリンピック東京大会も間近い九月三〇日、聖火石川県に入る。聖火リレー正走者として、本校西出清隆が選ばれた。全校生徒は日の丸の小旗をもち、田中付近で聖火を迎えた。（昭39・9）
畜舎わきに畜魂碑が建立され、八日入魂式を行なう。（昭41・2）
生徒会反省会で長髪問題が提案される。生徒課は最高学年は二学期以後自由、他の学年は従来通り丸刈りと回答。（昭41・3）
中庭の造園工事は三九年度卒業生より三期にわたる卒業生寄贈として着工され、第一期工事を完了した。（昭41・3）
優勝旗、優勝カップ、楯の飾り棚を設置した。（昭41・5）
走ろう会始まる。全校生徒、教員一丸となって走る。（昭43・6）
スチール製ロッカーを設ける。（昭47・4）
記念会館食堂を廃止し、図書館とし、一日開館する。（昭47・5）

第七節　本校の現況

一　教育方針と学校運営

橋本校長の退職と窪田校長の着任　昭和五〇年三月橋本校長は開校百年記念を目前にして、「健康上余力を残しておきたい」ということで退職され、かわって四月、七尾農業高校校長窪田武徳が本校第七代の校長と

旧校舎から持って来たロッカー（木製）を廃棄して、生徒昇降口に下駄箱が設けられる。何でも新しいものはよいが、容積がたらないという声しきり。（昭39・6）
遅刻防止のため、公安委員会で週番を作り昇降口に立つ。（昭39・9）
オリンピック東京大会も間近い九月三〇日、聖火石川県に入る。聖火リレー正走者として、本校西出清隆が選ばれた。全校生徒は日の丸の小旗をもち、田中付近で聖火を迎えた。（昭39・9）
畜舎わきに畜魂碑が建立され、八日入魂式を行なう。（昭41・2）
生徒会反省会で長髪問題が提案される。生徒課は最高学年は二学期以後自由、他の学年は従来通り丸刈りと回答。（昭41・3）
中庭の造園工事は三九年度卒業生より三期にわたる卒業生寄贈として着工され、第一期工事を完了した。（昭41・3）
優勝旗、優勝カップ、楯の飾り棚を設置した。（昭41・5）
走ろう会始まる。全校生徒、教員一丸となって走る。（昭43・6）
スチール製ロッカーを設ける。（昭47・4）
記念会館食堂を廃止し、図書館とし、一日開館する。（昭47・5）

第七節　本校の現況

一　教育方針と学校運営

橋本校長の退職と窪田校長の着任　昭和五〇年三月橋本校長は開校百年記念を目前にして、「健康上余力を残しておきたい」ということで退職され、かわって四月、七尾農業高校校長窪田武徳が本校第七代の校長と

して着任された。



七代校長
窪田武徳

大正五年九月二五日、鹿児島県名瀬市久里町に生まる。昭和一三年三月、鹿児島高等農林学校林学科を卒業。同一三年、宮内省帝室林野局勤務、同二〇年、鹿児島農林専門学校助教授、同二一年、石川県立七尾農学校教諭、同四一年、県立七尾農業高等学校教頭、同四五年、県立七尾農業高等学校校長を経て、昭和五〇年四月、石川県立松任農業高等学校校長となる。趣味　園芸。

窪田校長は本校の分身ともいうべき七尾農高に三〇年近く勤務され、農業教育のベテランである。温厚な人柄であるが、その内に秘めた高い識見と情熱を本校教育に具現して、経済成長の谷間にある農業の進むべき道を示し、農業に対する意欲の低下、ひいては生徒数の減少など本校の前途によこたわる暗影を打ち払い、百年の歴史に発展の一ページを加えられるよう期待されている。

教育目標・教育方針　橋本前校長が四三年に示され、さらに五〇年度窪田校長が踏襲された教育目標及び教育方針は次のとおりである。

教育目標

教育諸法令の趣旨に準拠して、文化国民として享受すべき基本的高等教育ならびに農業に関する専門的教育を施し、もって国家社会の有為な形成者として必要な資質を養う。

教育方針

(1)　創造性をかん養し、能力、体力、気力の兼備助長に努める。

(2)　言行の一致に徹し、近代社会のよき実践人を造る。

(3) **教育課程**　一般教養とともに、農業の専門的技能の習熟を図り、特技の習得に努めさせる。四八年四月大改訂し、四九年に一部改訂した。五〇年度以降入学者に適用する教育課程は次表の通りである。

教科・科目 ＼ 学年・単位		畜産科 I	畜産科 II	畜産科 III	農業科 I	農業科 II	農業科 III
国語	現代国語	3	2	3	3	2	3
	古典I甲		2			2	
社会	倫理・社会		2			2	
	政治・経済			2			2
	世界史			3			3
	地理A	3			3		
数学	数学一般	3	3		3	3	
	数学I			・2			・2
理科	物理I		3			3	
	化学I						
	生物I	3			3		
保体	体育	3	2	2	3	2	2
	保健		2			2	
芸術	美術I	2			2		
	書道I						
外	英語A	3	・2	・・2	3	・2	・・2
農業	作物			・2	3	・・2	・・・2
	畜産	3	2	4			M2
	農畜産加工			・・2			・・2
	農業機械	2	・2		2	M2	・・・2
	農業経営		2	2		・2	
	野菜園芸		3			2	2
	家畜栄養・飼料			3			
	家畜衛生		M2	M2			
	飼料作物	2					
	専攻			3			
	総合実習	5	5	4	5	5	4
家	家庭一般		F2	F2		F2	F2
教科外活動		4	4	4	4	4	4
合計		36	36	36	36	36	36

・，・・，・・・は選択のペア，　Mは男子，Fは女子

造園科				
教科・科目 ＼ 学年・単位		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
国語	現代国語	3	2	3
	古典Ⅰ甲		2	
社会	倫理・社会		2	
	政治・経済			2
	世界史			3
	地理A	3		
数学	数学一般	3	3	
	数学Ⅰ			・2
理科	地学Ⅰ		3	
	生物Ⅰ	3		
保体	体育	3	2	2
	保健		2	
芸術	美術Ⅰ	2		
外	英語A	3	・2	・・2
農業	園芸		・2	・・2
	測量	3	M2	・2
	造園設計	2	3	3
	造園材料	3	3	
	造園施工		2	3
	造園管理			3
	緑地計画			M2
	専攻			3
	総合実習	4	4	4
家	家庭一般		F2	F2
教科外活動		4	4	4
合計		36	36	36

農業土木科				
教科・科目 ＼ 学年・単位		Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
国語	現代国語	3	2	3
	古典Ⅰ甲		2	
社会	倫理・社会		2	
	政治・経済			2
	世界史			3
	地理A	3		
数学	数学Ⅰ	6		
	応用数学		3	2
理科	物理Ⅰ		3	
	地学Ⅰ	3		
保体	体育	3	2	2
	保健		2	
芸術	美術Ⅰ	2		
	書道Ⅰ			
外	英語A	3	・2	・2
農業	測量	5	4	
	農業土木設計			4
	材料施工		2	
	応用力学	2	2	
	水理		M2	M2
	土・土質			2
	農業水利			3
	農地開発		・2	
	専攻			3
	総合実習	2	4	4
工	環境計画			・2
家	家庭一般		F2	F2
教科外活動		4	4	4
合計		36	36	36

設置学科・定員・学区・生徒数・学級編成

昭和五〇年度設置学科・定員・学区

課程／学科／学年	全日制 農業	畜産	造園	農業土木	食品製造	合計
学区	全学区					
計	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	一二〇	六〇〇
Ⅲ	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	二〇〇
Ⅱ	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	二〇〇
Ⅰ	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	二〇〇

食品製造科	学年・単位／教科・科目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
国語	現代国語	3	2	3
	古典Ⅰ甲		2	
社会	倫理・社会		2	
	政治・経済			2
	世界史			3
	地理A	3		
数学	数学一般	3	3	
	数学Ⅰ			2
理科	物理Ⅰ	3	3	
	化学Ⅰ			
	生物Ⅰ			
保体	体育	3	2	2
	保健		2	
芸術	美術Ⅰ	2		
	書道Ⅰ			
外	英語A	3	・2	・・2
農業	食品製造	3	2	3
	応用微生物		3	3
	食品化学	5	3	3
	製造機器		M2	M2
	食品製造衛生		・2	
	食品製造経営			・・2
	専攻			3
	総合実習	4	4	4
家庭	食品			・2
	家庭一般		F2	F2
教科外活動		4	4	4
合計		36	36	36

昭和五〇年度生徒数（四月八日）・学級編成

学科＼学年	性別	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計	学級
農業	男	三二	三四	二八	九四	三
	女	一	一	○	二	
	計	三三	三五	二八	九六	三
畜産	男	二九	一八	一六	六三	三
	女	三	二	○	一五	
	計	三二	二〇	一六	六八	三
造園	男	二五	四一	三六	一〇二	三
	女	○	○	一	一	
	計	二五	四一	三七	一〇三	三
農業土木	男	四三	四〇	四二	一三五	三
	女	○	○	○	○	
	計	四三	四〇	四二	一三五	三
食品製造	男	三七	二七	二四	八八	三
	女	六	六	三	一五	
	計	四三	三三	二七	一〇三	三
合計	男	一六六	一六〇	一四六	四七二	一五
	女	一〇	九	四	二三	
	計	一七八	一六九	一五〇	四九五	

職員組織・校務分掌

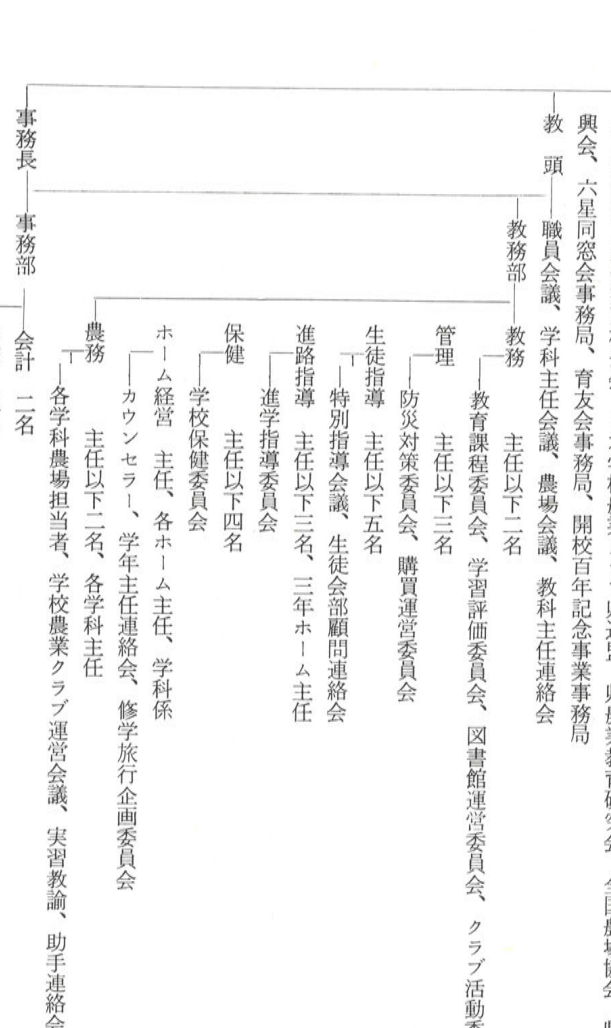
昭和五〇年度職員組織

性別＼職名	校長	教頭	教諭	養護教諭	実習教諭	兼務教諭	非常勤講師	技芸講師	小計
男	一	一	三六	二	二	二	二	二	四四
女									
計	一	一	三六	二	二	二	二	二	四四

性別＼職名	事務長	主事	技師	技師（技能員）	主事（学務員）	嘱託	警備員	臨時傭人	小計	合計
男	一	二	一	二	一		二	一	一二	六二
女									七	一〇
計	一	二	一	二	一		二	一	一九	七二

学校医	学校歯科医	学校薬剤師
一	一	一
一	一	一
一	一	一
一	一	一
一	一	一
一	一	一

昭和五〇年度校務分掌表



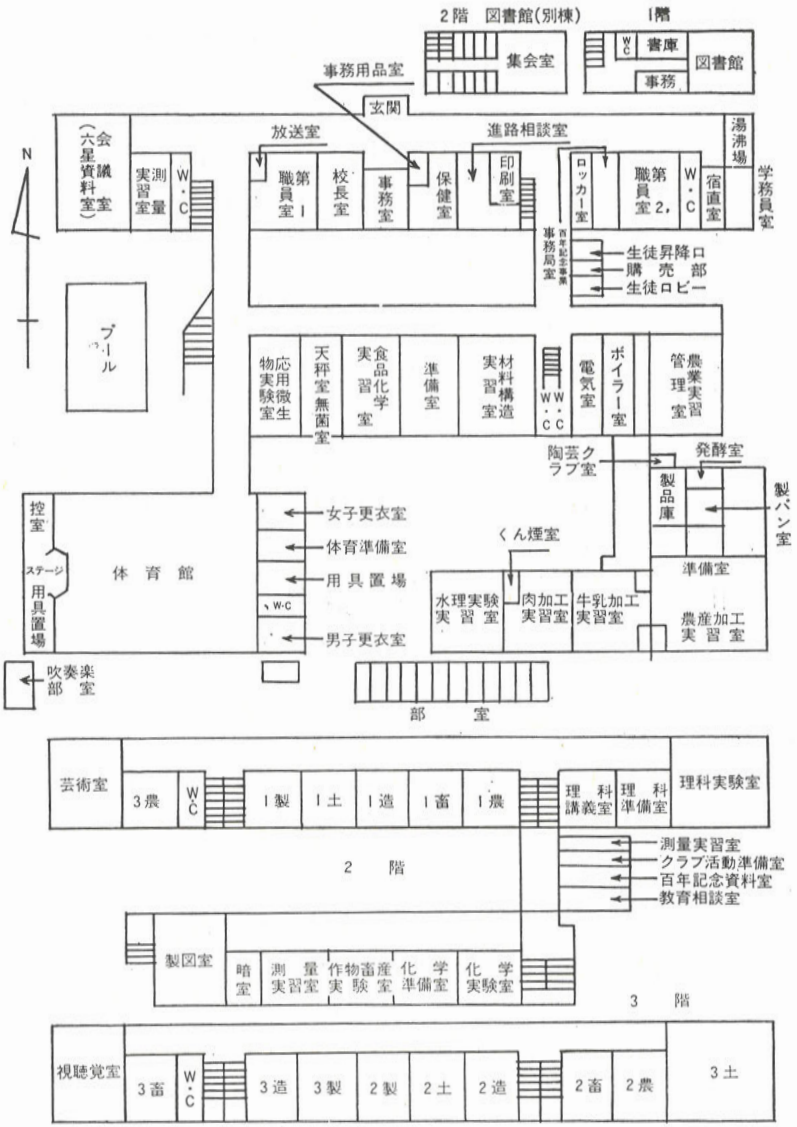
二　施　設

校地・建物の面積　校地　校舎敷地　二五、五三一㎡、運動場　一一、五一三㎡、農場　五五、五三一㎡（本校農場三六、一六〇㎡、木津農場　一八、九七五㎡）校地合計　九二、一七九㎡

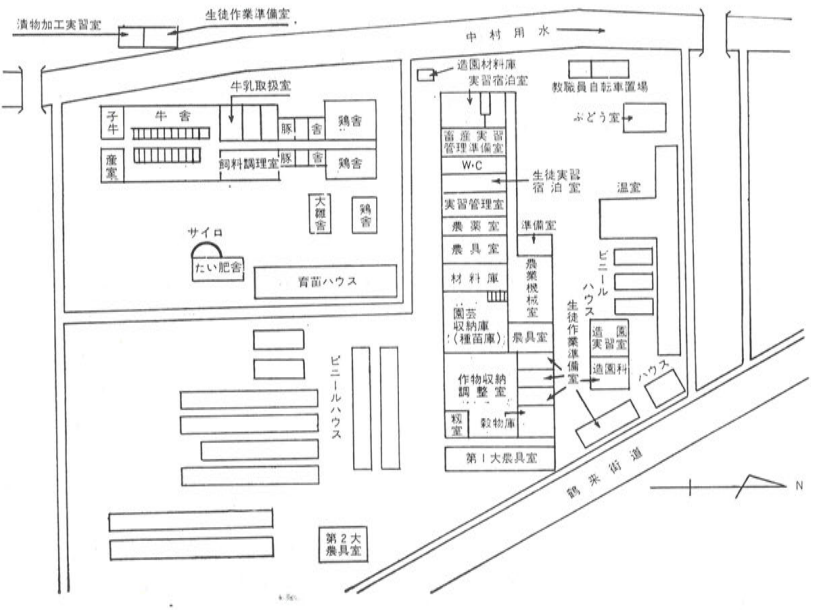
建物　九、五五一・四五㎡（木造　四八四・八一㎡、非木造　九、〇六六・六四㎡）

施設の種類と配置　次の図（校舎施設配置図、農場建物配置図、校地及び農場配置図、木津農場見取図）の通りである。

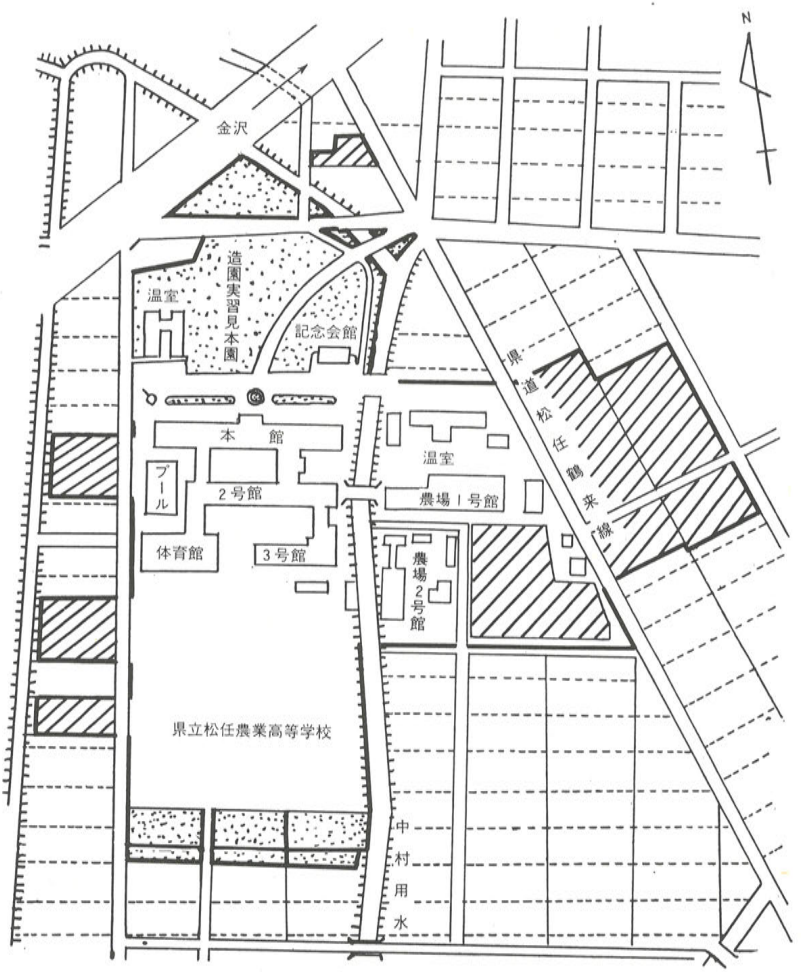
校舎施設配置図


2階　図書館(別棟)
1階
集会室
WC
書庫
図書館
事務
事務用品室
玄関
放送室
進路相談室
湯沸場
N
会議室(六星資料室)
測量実習室
W・C
職員室1
校長室
事務室
保健室
印刷室
ロッカー室
職員室2
W・C
宿直室
学務員室
事務局室
自己記念事業
生徒昇降口
購売部
生徒ロビー
プール
物応用微生実験室
天秤室無菌室
食品化学実習室
準備室
材料構造実習室
W・C
電気室
ボイラー室
農業実習管理室
陶芸クラブ室
発酵室
製品庫
製パン室
控室
ステージ
用具置場
体育館
女子更衣室
体育準備室
用具置場
W・C
男子更衣室
くん煙室
準備室
水理実験実習室
肉加工実習室
牛乳加工実習室
農産加工実習室
吹奏楽部室
部室
芸術室
3農
WC
1製
1土
1造
1畜
1農
理科講義室
理科準備室
理科実験室
測量実習室
クラブ活動準備室
百年記念資料室
教育相談室
2階
製図室
暗室
測量実習室
作物実験室
畜産実験室
化学準備室
化学実験室
3階
視聴覚室
3畜
WC
3造
3製
2製
2土
2造
2畜
2農
3土

農場建物配置図

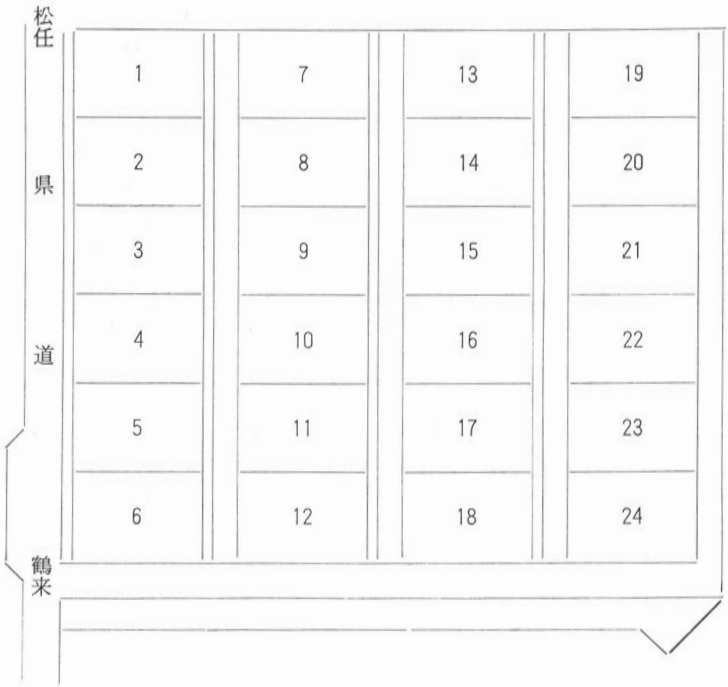

漬物加工実習室
生徒作業準備室
中村用水
牛乳取扱室
子牛
牛舎
豚舎
鶏舎
産室
飼料調理室
豚舎
鶏舎
大雛舎
鶏舎
サイロ
たい肥舎
育苗ハウス
ビニールハウス
造園材料庫
実習宿泊室
教職員自転車置場
ぶどう室
畜産実習管理準備室
W・C
生徒実習宿泊室
温室
実習管理室
農薬室
準備室
農具室
材料庫
農業機械室
園芸収納庫（種苗庫）
農具室
ビニールハウス
生徒作業準備室
造園実習室
造園材料
ハウス
作物収納調整室
籾室
穀物庫
第1大農具室
鶴来街道
N
第2大農具室

校地および農場配置図


N
金沢
造園実習見本園
温室
記念会館
県道松任鶴来線
本館
プール
2号館
体育館
3号館
温室
農場1号館
農場2号館
県立松任農業高等学校
中村用水

三行事計画

木津農場見取図





農場風景

昭和五〇年度の年間行事計画はおよそ次のようである。

学校行事等年間計画 (1)

種別／月	学校行事						その他
	儀式的行事	学芸的行事	体育的行事	保健的行事	旅行的行事	勤労・生産的行事	教務管理
4	始業式 入学式			心電図検査 身体計測	学年別遠足	舎外大掃除	校具整備 ロッカー整備
5			マラソン大会 高校総合体育大会	血圧測定 耳鼻科検診 歯科検診 聴力検査		大掃除	第1次考査
6		歌唱指導	陸上競技大会	色覚検診 内科検診 日脳予防接種		大掃除	読書会
7	終業式	音楽鑑賞	球技大会 登山教室			大掃除	第2次考査 読書感想文募集
8							県高校合同読書会
9	始業式		水泳大会 講話	視力検査		大掃除	選択教科予備登録
10	開校100年記念式典	フォークダンス指導	運動会	健康相談 成人病検査		大掃除	第3次考査 後期授業開始 校内貴重図書展示会
11		農業文化祭講話			修学旅行	大掃除	中学との懇談会
12	終業式	レコードコンサート				大掃除	第4次考査 図書整理
1	始業式	音楽会	スキー教室			大掃除	
2						大掃除	3年第5次考査 学検事務開始 読書会
3	卒業式 終業式	講話	柔道大会	1・2年血圧測定		大掃除	1・2年第5次考査 図書時報発行 学力検査 予備入学

学校行事等年間計画 (2)

種別 / 月	その他					
	指導		進路	農務		その他（育友会）
	指導	生徒会		農務	農業クラブ	
4			進路調査		農ク・オリエンテーション	総会 役員会
5	性格心理検査 服装検査	応援練習	一般職業適性検査（3年） 進学模擬試験 オリエンテーション 進学模擬試験開始		農ク全国代議員会	
6	自転車検査				農ク意見発表会・プロジェクト発表会 農業鑑定競技会	親・子・教師対話の会 役員会
7	服装検査	生徒会反省会	就職常識作文テスト 求人情報発行 模擬面接	夏季特別実習	校内リーダ研修会 県連リーダ研修会	地区懇談会
8					北信越リーダ研修会	
9	自転車検査 服装検査	生徒会役員選挙	就職常識作文テスト 就職推薦開始 模擬面接		農ク県連大会	
10						役員会
11	自転車検査				農ク全国大会 各教科プロジェクト発表会	研修視察
12	服装検査		国公立推薦入学者選考	農ク総会 専攻レポート提出		
1					校内プロジェクト発表会	役員会
2		生徒会反省会 生徒会役員選挙	一般職業適性検査（2年）		県代議員会	役員会
3	服装検査		進路調査（2年）			監査

ロングホーム年間計画

学年／月	第1学年	第2学年	第3学年
4	オリエンテーション ホーム役員選挙 自叙伝	ホームルームのあり方 遠足の計画 L・H年間計画	ホームルームのあり方 遠足の計画 最上級生の誇り
5	L・H年間計画 学習について 共同生活について 性格検査	高校生活について 自分をみつめる 球技大会 マルチテスト	進路について 音楽鑑賞 職業と人生
6	音楽鑑賞 高校生の生活プラン 農ク意見発表について	青春について ホームコンサート 生徒との距離	読書 進路の選択 ソフトボール
7	クラス反省 夏休みの心得	交通事故について 夏休みの心得	面接について 作文（就職）
9	水泳会 ホーム役員選挙 文化祭を我々の手で 服装検査	夏休みの反省、体験発表・ホーム役員選挙 読書会 服装検査	夏休みの反省 ホーム役員選挙 運動会準備 服装検査
10	読書会 文化祭を迎えて	修学旅行計画 〃	芝生の中で語る、散歩 文化祭をむかえて
11	サッカー大会 趣味について モラルについて	〃　諸注意 〃　反省	音楽鑑賞 個性について バスケットボール
12	レコード鑑賞 冬休みの心得	男、女交際について 冬休みの心得	自己診断 二学期の反省
1	問題討論会 〃 〃	レコード鑑賞 ゲーム大会 自由と規律	今年の計画 読書 社会への出発
2	予餞会準備 青春の悩み ホーム役員選挙	進路について 職業適性検査 ホーム役員選挙	高校生活をふりかえって
3	友情について 1年間の反省	進路調査 1年間の反省	

四　校　則

本校の校則は、昭和三八年以来、一部改正が度々行なわれて来たが、昭和五〇年四月、新しく作りかえられたので次に示しておく。

石川県立松任農業高等学校規則

第一章　総　則

（目　的）

第一条　石川県立松任農業高等学校（以下「本校」という。）は、石川県立高等学校規則（昭和三七年石川県教育委員会規則第三号）の定めるところにより、中学校における教育の基礎の上に心身の発達に応じて、高等普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。

（課程、学科及び生徒数）

第二条　本校に置く課程、学科の種類及び生徒数は、次のとおりとする。

課程	学科＼学年	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	計
全日制	農業	四〇	四〇	四〇	一二〇
	畜産	四〇	四〇	四〇	一二〇
	造園	四〇	四〇	四〇	一二〇
	農業土木	四〇	四〇	四〇	一二〇
	食品製造	四〇	四〇	四〇	一二〇
	合計	二〇〇	二〇〇	二〇〇	六〇〇

（修業年限）
第三条　本校の修業年限は、三年とする。
（通学区域）
第四条　本校の通学区域は、石川県立高等学校通学区域規則（昭和三三年石川県教育委員会規則第一号）の定めるところにより、全県一区とする。

第二章　学年、学期及び休業日

（学年）
第五条　学年は、四月一日に始まり翌年三月三一日に終る。
（学期）
第六条　学年を分けて、次の三学期とする。
第一学期　四月一日から七月三一日まで
第二学期　八月一日から十二月三一日まで
第三学期　一月一日から三月三一日まで
（休業日）
第七条　休業日は、日曜日及び国民の祝日に関する法律（昭和二三年法律第一七八号）に定める日のほか、次のとおりとする。
(1)　学年始休業日　四月一日から四月七日まで
(2)　夏季休業日　七月二一日から八月三一日まで
(3)　冬季休業日　十二月二五日から一月七日まで
(4)　学年末休業日　三月二五日から三月三一日まで
(5)　本校創立記念日　七月一日
(6)　その他石川県教育委員会（以下「委員会」という。）において必要と認める日。
2　前項各号に定めるもののほか、校長が必要と認めて、委員会の許可を得て定める日。

第三条　教育課程及び授業時数

（教育課程及び授業時数）

第八条　本校の教育課程は、学習指導要領並びに委員会の定める基準により別表のとおりとする。教育課程表に示された単位については、一単位時間を五〇分とし、一箇学年三五単位時間として計算するものとする。

第四章　単位修得・課程の終了及び卒業の認定

（単位認定）

第九条　生徒は、本校の教育課程に従って、各教科、科目を履修し、各教科以外の教育活動を行なうものとする。

2　学校は、生徒が学校の定める指導計画に従って各教科・科目を履修し、その成果が教科・科目の目標からみて満足できると認められる場合には、その教科、科目について履修した単位を認定する。この場合、一科目を二以上の学年にわたって分割履修したときは、学年ごとに、その教科、科目について履修した単位を修得したことを認定するものとする。

3　校長は、成績不良で進級させることが不適当と認めた生徒について、当該学年を再履修させることができる。

（卒業及び終了）

第十条　校長は、本校教育課程に従って履修した各教科、科目のうち、八五単位以上を修得し、各教科以外の教育活動の成果が満足できると認め、卒業を認定する。

2　前項に規定する卒業までに修得しなければならない各教科・科目の単位は、次の表(1)または表(2)のとおりとする。

表(1)

普通教科・科目	四三単位以上
職業教科・科目	総合実習及び専攻をふくみ四二単位以上

表(2)

普通教科・科目	五〇単位以上
職業教科・科目	総合実習及び専攻をふくみ三五単位以上

3　校長は前項1によって、卒業を認定した者には、卒業証書を授与しなければならない。
4　校長は、生徒の退学又は転学に際し、特定の教科及び科目を終了したと認めたときは、修了証書を授与することができる。
5　卒業又は修了の時期は三月とする。

第五章　職員組織

（職員組織）
第十一条　本校には、校長・教頭・教諭・養護教諭・実習教諭・実習助手・事務長・主事・技師その他必要な職員を置く。
2　前項の職員の定数は、委員会が別に定める。

第六章　入学・退学・転学及び休学

（入学）
第十二条　入学募集人員、入学者の選抜の方法その他入学に関し必要な事項は委員会の公告による。
2　入学を志願する者は、入学願書（第三号様式）を、その最終在籍中学校長を経て本校校長に提出しなければならない。
（誓約書）
第十三条　入学を許可された者は、許可された日から二〇日以内に誓約書（第四号様式）に住民票を添えて、校長に提出しなければならない。
2　前項の誓約書には、保護者及び保証人が連署しなければならない。
（保護者及び保証人）
第十四条　前条の保護者は、入学を許可された者の親権を行なう者（親権を行なう者のいないときは、後見人又は後見を行なう者）とし、保証人は独立の生計を営む成年者で、学校所在地に居住する者であることを原則とする。
2　校長は、保証人が適当でないと認めたときは、これを変更させることができる。
第十五条　保護者又は保証人が死亡その他の事由で、その資格を失ったときは、新たに保護者又は保証人を定め、すみやかに校長に届け出なければならない。
2　保護者又は保証人が、住所、氏名を変更したときは、すみやかに校長に届け出なければならない。

（退学及び転学）

第十六条　退学又は転学しようとする生徒は、その事由を具して、保護者及び保証人と連署の上、校長に願い出なければならない。

（転　入　学）

第十七条　転入学を願い出た者については、校長は、その事由調査の上、相当学年に入学を許可することができる。

（再　入　学）

第十八条　退学をした者又は学籍を除かれた者が再入学を願い出た場合には、校長はその事由を調査の上、相当学年に入学を許可することができる。

（休　学）

第十九条　生徒は、疾病その他の事由によって欠席が引続き三日以上にわたると認められる場合には、校長に休学を願いでることができる。

２　休学の許可を受けようとする生徒は、その事由を具して、保護者及び保証人と連署の上、願い出なければならない。

３　休学の期間は、欠席の期間を通じ二年以内とする。

４　休学の許可を受けた日から三日以内に休学の事由がなくなった場合は、その事由を具し、校長に休学の取消しを願いでることができる。

５　校長は、前項の願い出があったときは、その事由を調査の上、当該休学の許可を取消すことができる。

（復　学）

第二〇条　休学中の生徒が、事由の消失によって、復学を願い出た場合には、校長は、その事情を調査の上、相当学年に復学を許可する。

第七章　授業料及び入学学力検査手数料等

（授業料等の額）

第二一条　授業料、入学学力検査手数料及び入学金の額は石川県条例の定めるところによる。

（授業料の納入）

第二二条　授業料は、毎月分納するものとし、所定の日に納入しなければならない。ただし休学が全月に及ぶときは、その月の授業料は徴収しない。

2　月の中途において、退学、入学又は復学した者は、その月の授業料を納入しなければならない。

（未納者に対する処置）

第二三条　校長は、授業料の納入を怠った生徒に対して登校を停止することができる。

2　未納が三ケ月以上に及ぶ場合は、学籍を除くことがある。

第八章　ほう賞及び懲戒

（ほう賞）

第二四条　校長は、他の範と認められる生徒を、ほう賞することができる。

（懲戒）

第二五条　学校は、教育上必要があると認めるときは、生徒に懲戒を行なうことができる。

2　懲戒は、退学・停学・訓告その他とする。

3　退学・停学又は訓告の処分は、校長が行ない、その他の懲戒については、校長が別に定める。

4　校長は、前項に規定する退学又は停学の処分を行った場合には、すみやかに委員会に報告しなければならない。

付　則

この規則は、昭和五〇年四月一日から施行する。

第八節　開校百年を迎えて

昭和五〇年は、石川県勧業所において農学科が開設されてから数えて一〇〇年にあたる。この間に、校舎はもちろん、所在地、校名、規模、教育内容等幾多の変遷を経て、一五、〇〇〇有余の青年、子女が学び、巣立って

第二二条　授業料は、毎月分納するものとし、所定の日に納入しなければならない。ただし休学が全月に及ぶときは、その月の授業料は徴収しない。

2　月の中途において、退学、入学又は復学した者は、その月の授業料を納入しなければならない。

（未納者に対する処置）

第二三条　校長は、授業料の納入を怠った生徒に対して登校を停止することができる。

2　未納が三ケ月以上に及ぶ場合は、学籍を除くことがある。

第八章　ほう賞及び懲戒

（ほう賞）

第二四条　校長は、他の範と認められる生徒を、ほう賞することができる。

（懲戒）

第二五条　学校は、教育上必要があると認めるときは、生徒に懲戒を行なうことができる。

2　懲戒は、退学・停学・訓告その他とする。

3　退学・停学又は訓告の処分は、校長が行ない、その他の懲戒については、校長が別に定める。

4　校長は、前項に規定する退学又は停学の処分を行った場合には、すみやかに委員会に報告しなければならない。

付　則

この規則は、昭和五〇年四月一日から施行する。

第八節　開校百年を迎えて

昭和五〇年は、石川県勧業所において農学科が開設されてから数えて一〇〇年にあたる。この間に、校舎はもちろん、所在地、校名、規模、教育内容等幾多の変遷を経て、一五、〇〇〇有余の青年、子女が学び、巣立って

行った。この一〇〇年を記念するため、昭和四八年より六星同窓会が中心となって準備を進め、記念行事や、特別事業が計画された。その概要は次のようである。

一、記念式典等
　前夜祭・記念式典・物故会員の追悼法会・祝賀パーティ・記念講演会等

二、開校百年史等の刊行
　県農業講習所・県農学校・県立農学校・松任農学校・松任実業女学校・松任高等女学校・総合制松任高等学校・松任農業高等学校を含めた開校百年史の刊行、卒業生回想録を集めた六星百年誌の刊行等

三、同窓会員名簿の発刊

四、特別記念事業
　記念庭園（造園実習見本園）の造成、記念碑建立、記念植樹、記念校門建設

百年の歴史をもつ学校は全国でも稀である。その起源を同じくして、終りを全うし得ないものは多い。本校とて、常に坦々たる栄光の道を歩き続けたのではなく、栄枯盛衰を繰り返して来たのである。ただ苦難の時代において、これを乗り越える先見の明と勇気を維持し続けて来たのである。この故にこそ、本校百年の歴史は尊く、これを記念することは意義深い。

しかし、この百年の記念が単に追憶に終ってはならない。百年の歴史の中から、営々として積み上げられた伝統を汲みとり、これを受け継ぎ、さらに新しい建設の意欲をふるい立たせなければならない。

本校の発展の前途は限りなく、今この一区切りに辿りついたに過ぎない。この百年の区切りをさらに次の百年へ向って、一歩を踏み出す出発点としたい。

付

録

校歌、校章

石川県立農学校校歌

富田文雄作歌

一、山紫に水清き
　我が学び舎に集ふ群
　朝な夕なのいそしみに
　蕪城が丘にそそり立つ
　高き理想を胸にして
　向上の道進むなり

二、湧き立つ血汐青春の
　林に森に野に山に
　風立つ空は入相の
　胸に驕慢手に力
　脂と汗のそそぐとき
　精舎の鐘に暮れてゆく

三、孤灯の下の励みには
　夜半の窓の冥想には
　若き命の朝ぼらけ
　優れし人の後慕い
　囁く星の黙示聞く
　東の空に光りあり

四、彼とひとしく享けし種
　ああ驕慢と歓喜の
　土またさらにかんばしき
　花咲きやがて実るとき
　利鎌に散るや瑞穂の香
　石川県立農学校



◎県立農学校
◎県立松任農学校時代

明治36年９月29日、生徒服装規定が制定された時のもので、〝松農〟のシンボルであった。



◎県立松任高等学校

戦後、学制が改革されて１年後、昭和24年４月に制定されたものである。



◎県立松任農業高等学校

昭和28年４月発足した独立農高の徽章として、昭和30年４月に制定されたもので、現農高生の帽上にも異彩を放つ。
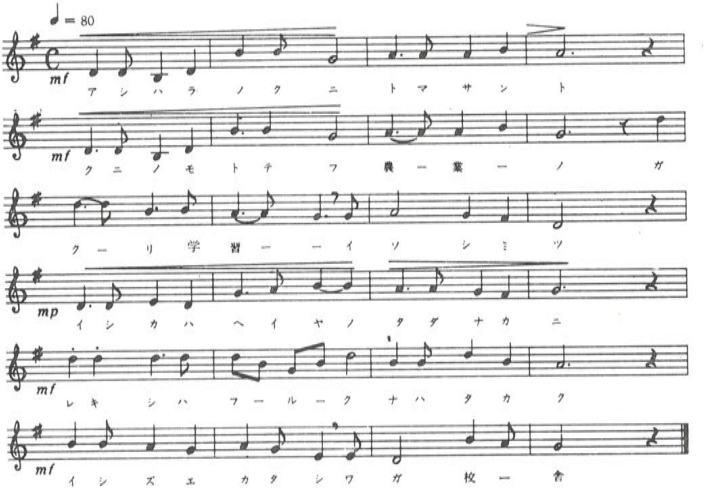


◎松任高等女学校徽章

昭和６年２月18日審査の結果校章と決定し生徒の左胸に佩用された。昭和11年創立10周年を記念して新調の校旗にも中心に刺繍された。中心に高女を表わし、輪郭は緑の松を象徴している。

石川県立松任農学校校歌

八波則吉 作詞
信時　潔 作曲



一、葦原の国　富まさんと
国の本てふ　農業の
学理学習　いそしみつ
石川平野の　中央に
歴史は古く　名は高く
礎堅し　我が校舎
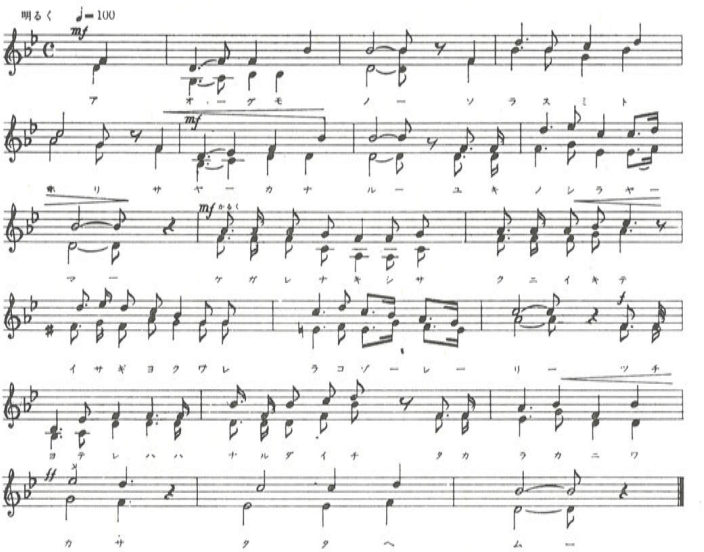
二、校舎の窓に　仰ぎ見る
越の白峯の　朝日影
男子の意気と　爽やかに
怒濤逆巻く　北海の
雲に輝ふ　夕附日
若人の血と　燃ゆるかな

三、春は耕す　実習地
夏は耘る　蔬菜園
黄金波うつ　秋たけて
祭の太鼓　賑はしく
雪に甕に　冬ごもる
家畜の群も　慕はしや

四、あゝ　北陸の一聖地
千代尼生れし　松任の
松の緑の　とことはに
愛と汗とに　身を浸す
健児が責務　人間はば
富国強兵　これぞこれ

石川県立松任高等学校
石川県立松任農業高等学校　校歌

川　口　久　雄　作詞
高　田　信　一　作曲
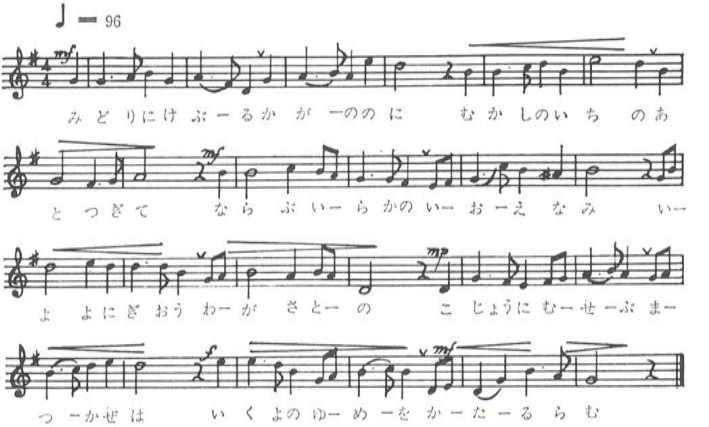


一、青雲の　空澄みとほり
さやかなる　雪の白山
けがれなき　思索に生きて
いさぎよく　我等こぞれり
土よ照れ　母なる大地
高らかに　若さ讃へむ

二、眼のかぎり　しぶきあげつつ
日本海　波こそ騒げ
揺がざる　学びにつとめ
眉あげて　我等こぞれり
潮とわけ　真理の泉
新しき　光り讃へむ

三、加賀野行く　水は浄らに
花霞む　千代尼のあとよ
時しらぬ　松の翠よ
いただきて　我等こぞれり
星と澄め　心のおくが
ひとすじの　気はく讃へむ

石川県立松任高等女学校校歌

鴻巣盛広 作詞
岡野貞一 作曲



一、
緑にけぶる　加賀の野に
昔の市の　後つぎて
並ぶ甍の　五百重波
いよよ賑ふ　吾が里の
古城に咽ぶ　松風は
幾代の夢を　語るらむ

二、
今明らけき　大御代の
御恵あみて　みち足れる
この学び舎に　集い来て
文の山路の　花紅葉
手毎に折りて　分け登る
我等の幸を　思ふかな

三、
高き希望の　星の影
行手に清く　輝けば
心を鍛え　身を練りて
正しく直く　しとやかに
皇御国に　尽すべき
女の道を　磨かなむ

応援団団歌集

○加賀野の果

1. 加賀野の果の山澄みて
　我が学舎の庭広し
　自由の鐘の響く時
　つどえる友は千余人
2. 文化の国を築かんと
　真理を追いてたゆみなき
　若き生命や白嶺の
　雄々しき姿さながらに
3. 正義と愛に結ばれて
　巡る三とせの友垣や
　久遠の理想胸に秘め
　我らが行手際もなし

○北嶺仰ぐ

1. 北嶺仰ぐ田園に
　若人の意気みなぎれり
　理智のまなこに火は燃えて
　我等が前途照すなり
2. どとう逆巻く西海は
　我等が前に押し寄せり
　かのわだつみをのりこえて
　究理の道に進むなり
3. ああ松風のそよぐもと
　熱血たぎる我が健児
　栄ある歴史作らんと
　誓う我等の意気高し

○若葉に風

1. 若葉に風のかおる時
　つづみの空にひびく時
　竜勇虎術備えたる
　我等が選手雄叫ぶよ
2. 彼に蹴速の術あらば
　我等に宿ねの力あり
　百万の敵何のその
　雄叫ぶ我等の選手いざ
3. 栄冠期して我がものぞ
　振えや虎のその力
　振えや竜のその手だて
　振えや振え我が選手

○凱歌

1. がしんしょうたん幾星霜
　競える今日の戦いを
　勝ちたる我等の栄冠に
　勝利を飾る優勝旗

2.
この重鎮の我が選手
角界のはしゃ我が選手
万才松農我が選手
万才松農我が選手

○見よ北海

見よ北海の波の如
若き血潮のほとばしり
壮快なるや我が選手
勇壮ならずや我が健児
応援の歌の響くところ
縦横無じんに突破せよ

○あわれ弱者

あわれ弱者となるなかれ　我が松農の健男児
清き二条の白線に　連ねる我等の精鋭に
近き未来の栄光の　はしゃの権威を歌わずや

○白山嵐

1.
白山おろしを身に受けて
朝に夕べに錬えたる
見よや我等のこの意気を
知らずや我等のこの腕を
どういわをかむところ
ちゅう天高く熱砂とぶ
ああ斗わん時いたる
若人の意気いざ燃ゆる

○白嶺嵐

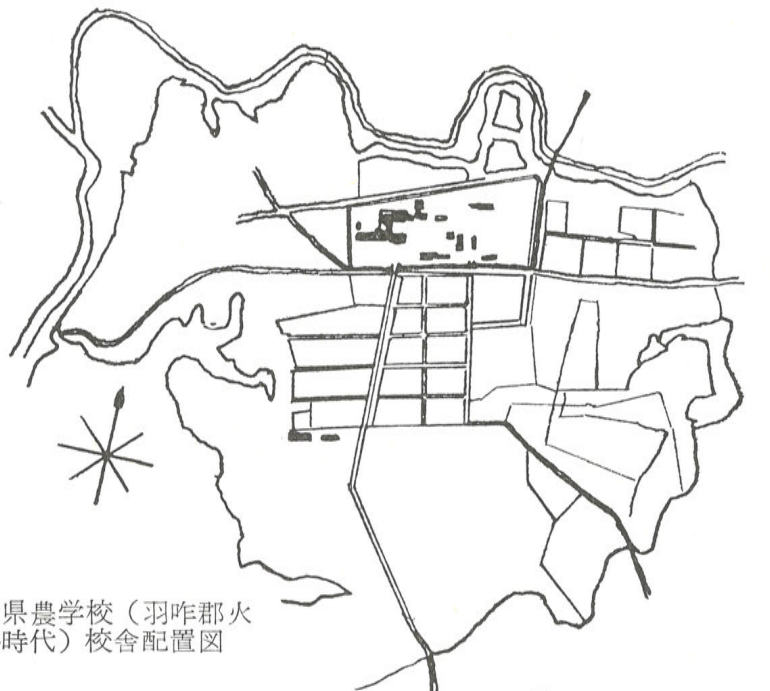
1.
白嶺嵐に鍛えたる
松農健児しこを錬り
今やおそしと待ちかねて
竜虎の意気はおどるなり
2.
常盤かきわに色増して
光り輝やく我が校の
栄誉の旗に歌響く
月の桂を仰ぎみよ

○日頃秘めたる

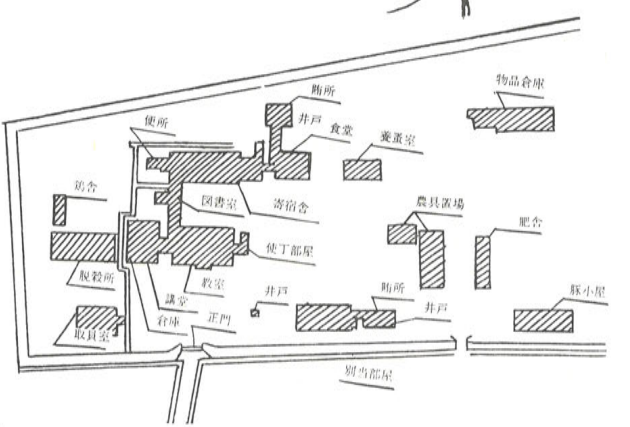
1.
日頃秘めたる金剛の
力振うは今日なるぞ
抜山がい世豪勇の
戦闘場に振い立て
暴虎ひょう河の強敵を
葬れ健児我が選手
2.
光り輝く栄冠は
必ず我が手に帰すものぞ
奮闘努力心しめ
倒れて止むの覚悟もて
土俵の上に松農の
威力を振え我が選手

校　舎　平　面　図

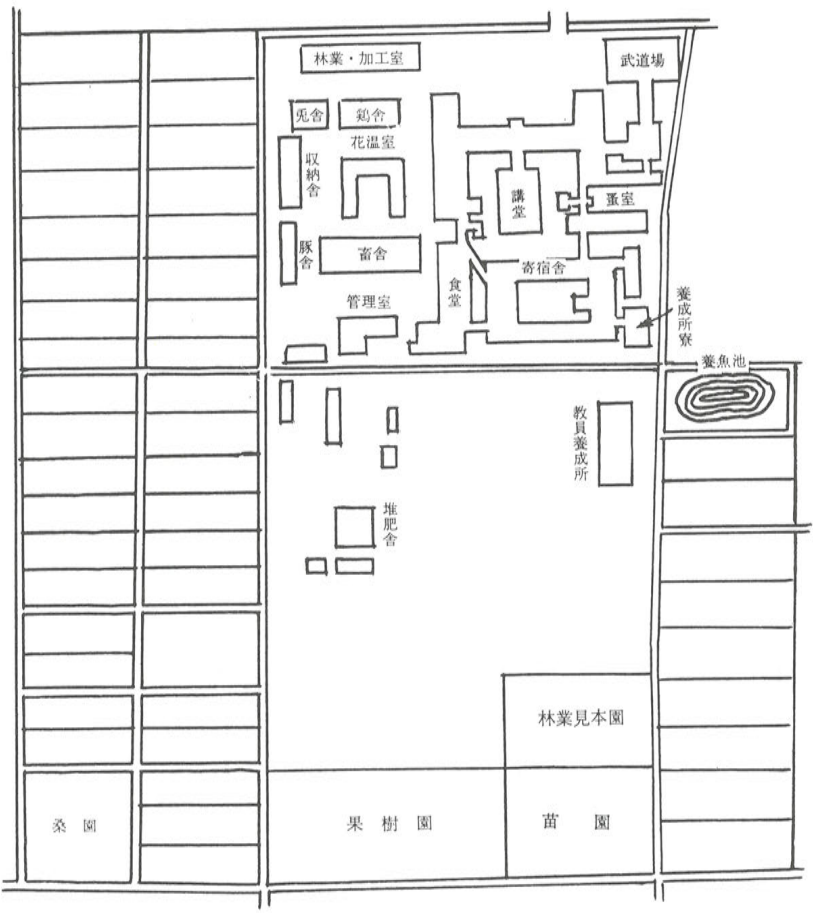
石川県農学校（羽咋郡火打谷時代）校地全図



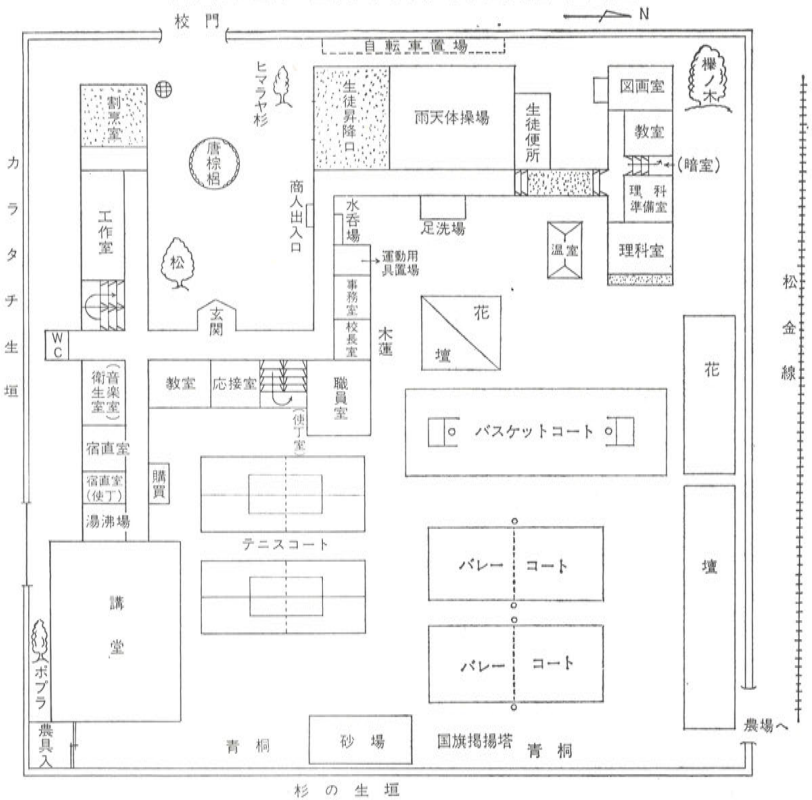
石川県農学校（羽咋郡火打谷時代）校舎配置図

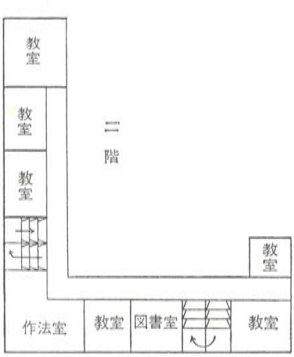


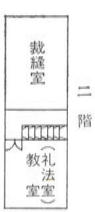
石川県立農学校
石川県立松任農学校　校地校舎平面図



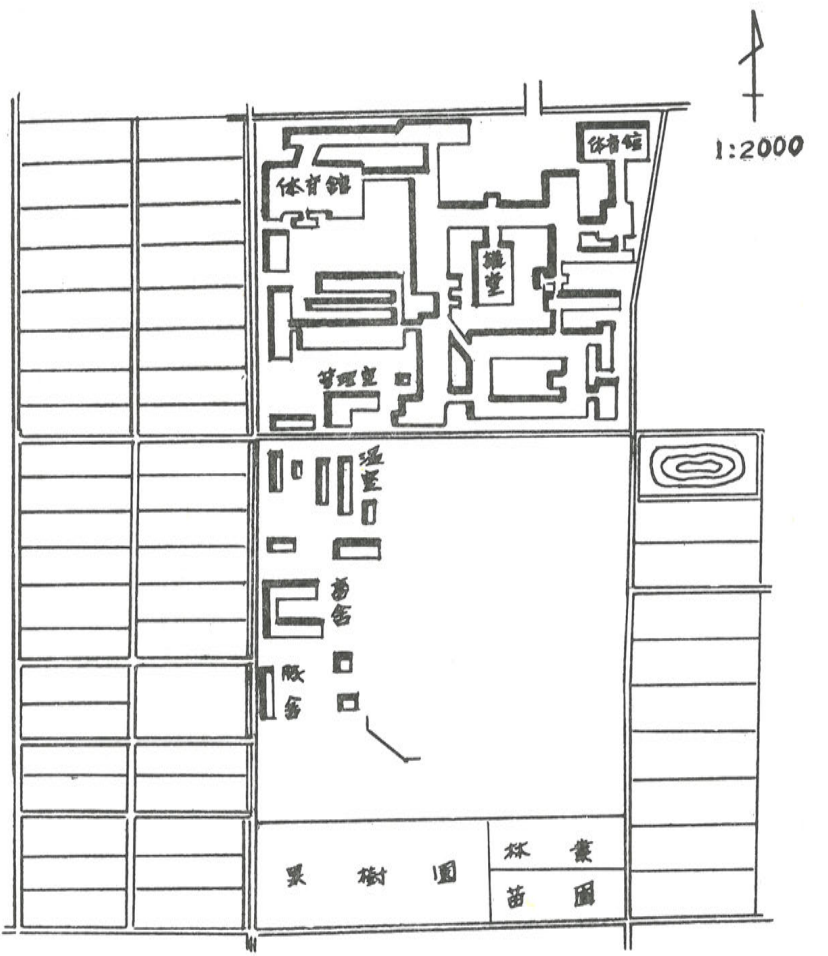
石川県立松任高等女学校地校舎平面図







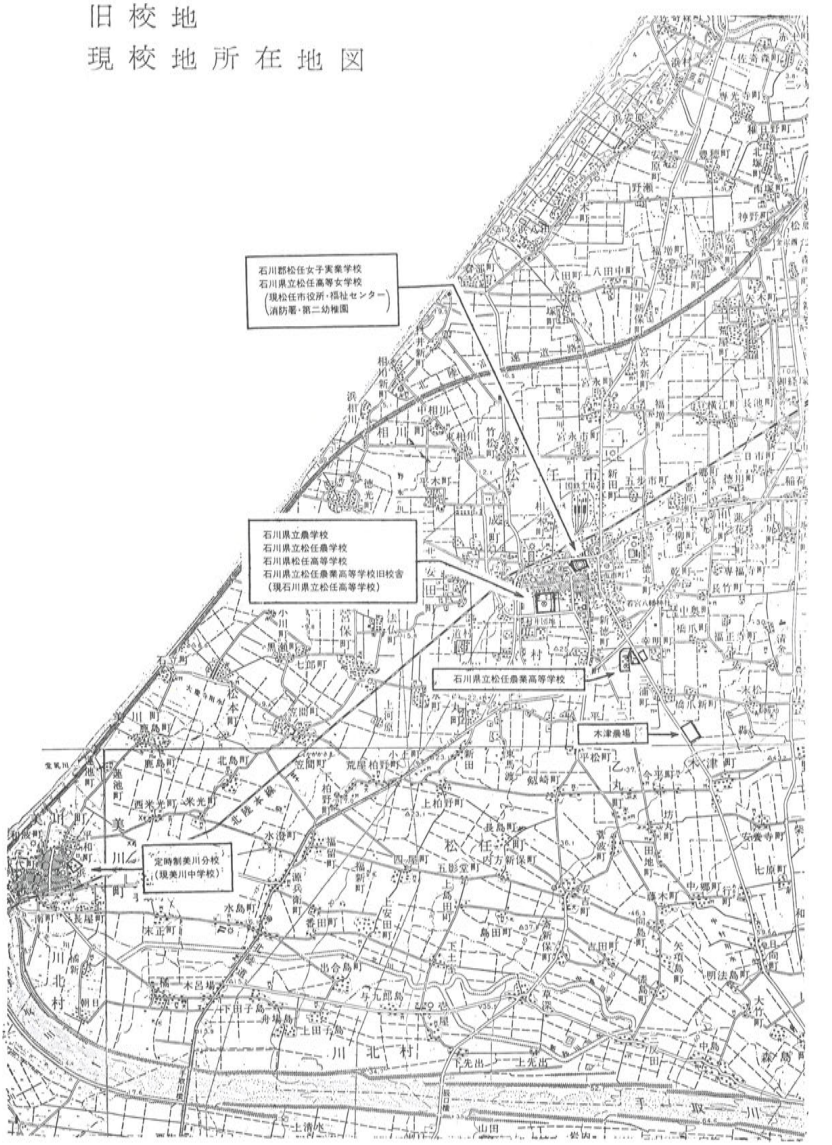
石川県立松任高等学校
石川県立松任農業高等学校(旧校舎)　校地校舎平面図



現校舎校地平面図



旧校地
現校地所在地図


石川郡松任女子実業学校
石川県立松任高等女学校
（現松任市役所・福祉センター）
（消防署・第二幼稚園）
石川県立農学校
石川県立松任農学校
石川県松任高等学校
石川県立松任農業高等学校旧校舎
（現石川県立松任高等学校）
石川県立松任農業高等学校
木津農場
定時制美川分校
（現美川中学校）

歴代所長・校長

石川県勧業所農学科

氏名	在任期間
総轄　吉崎宇一	明九・一二―明一〇・一

石川県農業講習所

氏名	在任期間
総轄　吉崎宇一	明一〇・一―明一三・七
初代　渡辺譲三郎	明一三・七―明一四・一一
二代　黒柳大六	明一五・二―明一五・九
三代　岩田忠益	明一五・九―明一六・六
四代　湯浅則和	明一六・六―明一七・二

石川県農学校

氏名	在任期間
取締　吉崎宇一	明一九・六―明二二・三
初代　吉崎宇一	明二二・三―明二三・三
二代　草野正行	明二三・四―明二四・二
三代　湯川温之	明二四・二―明二五・六
四代　富田輝象	明二五・六―明二五・七
五代　斉藤十郎	明二五・九―明二六・七
六代　中村純郷	明二六・八―明二八・七
七代　松平康保	明二八・七―明二九・三
八代　村崎常治	明二九・四―明三〇・三
九代　沢村真	明三〇・七―明三一・一一
一〇代　織田又太郎	明三一・一一―明三三・三
一一代　高田鑑三	明三三・五―明三四・五

石川県立農学校

氏名	在任期間
初代　高田鑑三	明三四・五―明三五・四
二代　高鳥容孝	明三六・五―明四〇・七
三代　山中良治	明四〇・七―大二・四
四代　楢林林二郎	大二・五―大五・一〇
五代　高橋昌	大五・一〇―大六・七
六代　三宅鏗吉	大七・三―大一〇・六

石川県立松任農学校

氏名	在任期間
七代 富田文雄	大一〇・六
八代 竹内秀雄	大一二・一二
	大一五・三

石川県石川郡松任女子実業学校

氏名	在任期間
初代 竹内秀雄	大一五・四
二代 五坪茂雄	昭五・六
三代 山崎賢一	昭一九・四
兼任 難波得三	昭二三・二
	昭二三・八
	昭二四・三

石川県立松任高等女学校

氏名	在任期間
初代 加藤政吉	大一二・三
二代 畠山治作	昭二・二
	昭五・三

氏名	在任期間
初代 畠山治作	昭二・四
	昭八・三

石川県立松任高等学校

氏名	在任期間
二代 川岸音二	昭八・四
三代 米林秀秋	昭一〇・四
四代 柴原雄吉	昭一九・四
兼任 難波得三	昭二三・八
	昭二四・三

石川県立松任農業高等学校

氏名	在任期間
初代 難波得三	昭二三・八
二代 明石興作	昭二四・三
兼任 飯倉薫	昭二八・六
	昭三一・三

氏名	在任期間
初代 飯倉薫	昭二八・六
二代 竹沢喜太郎	昭三一・四
三代 松村茂	昭三三・四
四代 高橋八十平	昭三四・四
五代 吉野進	昭三六・四
六代 橋本龍太	昭四二・四
	昭五〇・三

旧教職員一覧

金沢区方勧業場・石川県勧業所農学科

氏名	職名	在任期間
島田直允	栽培所掛員	明九・四　不詳
吉崎宇一	総轄	明一〇・一二　(農講)一
渡辺譲三郎	教授	明一〇・一二　(農講)一
中村重管	理	明九・一二　(農講)一

石川県農業講習所

(農講)…石川県農業講習所

氏名	職名	在任期間
吉崎宇一	総轄	明一〇・一　不詳
渡辺譲三郎	教授所長	明一〇・一　明一三・七
中村重管	理	明一〇・一　不詳
杉江秀直	助取締教授書記	明一〇・一一・一二　明一四・一二・一三
寺本清一	助教	明一〇・一　不詳
山口冨造	助教心得書記	明一〇・一　明一九・三
河波有道	教授	明一一・四　明一九・三
鹿田三郎	助教	明一一・四　明一九・三
松波幸三郎	掛員	明一二・一一　明一三・九
小林壽	(兼)教授	明一二・一　不詳
遠藤高朗	掛員	明一二・一一　不詳
宮口安躬	助教心得	明一三・七　明一九・三
佐久間義三郎	教授(教諭)	明一三・八　明一九・三(県農)
今井善一	所長心得	明一四・一一　明一五・二(県農)
吉田嘉十郎	教授(教諭)心得(助教諭)	明一三・九　明一六・一
泉正男	書記補	明一三・一二　不詳
内田兌事	助教諭試補・書記養蚕教授	明一四・一一　明一九・三(県農)
木村弥太郎	書記	明一四・一二　不詳
黒柳大六	所長	明一五・二　明一五・九
船越小三郎	教諭	明一五・二　明一八・二
岩田忠益	所長	明一五・九　明一六・六
得田耕	教諭	明一六・一　明一九・三

石川県農学校

（兼）…兼務　（県農）…石川県農学校

氏名	職名	在任期間
湯浅則和	所長	明一六・六
浅木茂三郎	補助教員	明一六・八―明一九・三
得能通孝	所長心得	明一七・二―不詳
長五郎	教諭	明一九・三―明一九・三（県農）
杉江秀直	書記	明一九・四―明一九・九
佐久間義三郎	教諭	明一九・四―明二〇・九
吉田嘉十郎	助教諭	明一九・四―明二〇・九
内田兌事	書記	明一九・四―明二一・八
長五郎	教諭	明一九・四―明二三・三
吉崎宇一	取締（校長事務取扱）	明一九・六―明二三・三
	校長	明二二・三―明二三・三
篠原秀作	助教諭	明一九・九―明二〇・一一
青木存	書記	明二〇・三―明二一・三
高橋成信	補助教員書記	明二〇・四―明二八・
中村佐平	補助教員	明二〇・四―明二二・三
永井登	助教諭	明二〇・六―明二三・一
山田忠人	助教諭―教諭	明二〇・九―明二八・一二
佐藤亀太郎	助教諭	明二一・二―明二六・三
西田伝三	書記・助教諭	明二一・四―明二三・三
牛村一氏	教諭	明二一・四―明二三・三
菅谷釭三郎	助教諭	明二一・四―明二〇・五
三原平蔵	助教諭試補	明二二・三―明二三・三
三瓶長次郎	養蚕教授（嘱）	明二二・四
野村由信	書記・助教諭試補	明二三・五―明二三・一〇
豊田康太郎	講師（嘱）	明二三・二―明二五・四
草野正行	校長	明二三・四―明二四・二
島崎文三郎	助教諭試補	明二三・四―不詳
神山盛親	助教諭試補	明二三・四―明二四・四
岸秀実	書記・助教諭試補	明二三・四―明二三・九
楠正	書記	明二三・九―明二四・八
福島錬太郎	書記・助教諭	明二三・一〇―明二六・七

湯川温之	校長	明二四・二	明二五・六	横山久四郎	教諭
谷村久松	教諭	明二四・三	不詳	松平康保	校長
出島小三郎	助教諭	明二四・一〇	不詳	山田登代太郎	教諭
竹内粂男	助教諭	明二四・一〇	明二八・四	湯地彦二	教諭
姉崎義徳	書記	明二四・八	明二六・四	村崎常治	校長
堀與三郎	助教諭	明二五・一	明二五・七	駒田小次郎	養蚕教授(嘱)
稲場嵩	養蚕教授(嘱)	明二五・二		中浦藤吉	書記・教諭
竹村統	書記	明二五・五	明一九・三	井田鑒吉	教諭
松本虎太郎(三上)	助教諭	明二五・八	明一九・四	坂常三郎	校長事務取扱教諭
富田輝象	校長	明二五・六	明一五・七	向後治左ェ門	助教諭
斉藤十郎	校長	明二五・九	明一六・七	渡辺和三郎	書記
功力直道	教諭	明二六・三	明一七・一	中村速見	書記・補助教員
飯田精一郎	養蚕教授(嘱)	明二六・四	明一六・七	国田貞	書記・補助教員
高田小十郎	助教諭	明二六・八	明三〇・一	塩屋亀良	助教諭
中村純郷	校長	明二六・八	明一八・七	中野中	養蚕教授(嘱)
土生吉太郎	書記	明二六・一〇	明一九・九	青柳浪三	教諭
石堂清彝	教諭	明二七・二	明三四・(県立農)五	浅沼嘉重	教諭
小塚聡八郎	養蚕教授(嘱)	明二七・四	明二七・八	沢村真	校長

教諭	明二八・六	明一九・七	
校長事務代理	明二九・三	明二九・三	
校長	明二八・七	明二九・三	
教諭	明二八・九	明三〇・九	
校長	明二九・四	明三〇・三	
〃	明二九・五		
養蚕教授(嘱)	明三二・四		
書記・教諭	明二九・五	明三四・(県立農)五	
教諭	明二九・八	明三〇・四	
校長事務取扱	明三〇・四	明三〇・五	
教諭	明二九・八	明三〇・七	
校長事務取扱	明三〇・五	明三〇・七	
助教諭	明二九・九	明三〇・二	
書記	明二九・一〇	明三〇・三	
書記・補助教員	明三〇・三	明三一・五	
書記・補助教員	明三〇・三	明三一・二	
助教諭	明三〇・三	明三〇・一一	
養蚕教授(嘱)	明三〇・四		
教諭	明三〇・五	明三一・二	
教諭	明三〇・六	明三一・三	
校長	明三〇・七	明三一・一一	

氏名	職名	在任期間
野崎彦次郎	書記	明三〇・九
上田栄次郎	教諭	明三〇・一〇
河野省一郎	助教諭	明三〇・一二
平野秀勝	書記・助教諭心得	明三一・三
小林文泰	学校医（嘱）	明三一・四
井波次作	教諭	明三一・四
松崎嘉蔵	教諭	明三一・四
豊永狷介	助教諭	明三一・八
織田又太郎	校長	明三一・一一
宇野家治	教諭	明三一・二
新地吉太郎	教諭	明三一・四
工藤祐山	教諭	明三一・四
後藤基一	書記	明三一・四
向田有中	教授（嘱）	明三一・五
太田仙次郎	教諭	明三一・五
三宅為作	助教諭	明三一・五
酒井茂三郎	教諭	明三一・六
祐泉登	助教諭	明三一・七
石場正行	助教諭	明三一・三
村上幹當	校長事務取扱	明三一・三
山下盛治	教諭	明三一・五
高田鑑三	校長	明三一・五
宮川重太郎	教諭	明三一・七
南部彰義	書記・助教諭	明三一・七
草場栄喜	教諭	明三一・七
下江源三郎	教諭	明三一・八
三善幾久太郎	教授（嘱）	明三一・九
本保常次	助教諭	明三一・九
高安源太郎	助教諭	明三一・三
明三一・五	明三一・五	明三一・六
明三一・六	明三一・六	明三一・六
明三一・六	明三一・六	明三一・六
明三一・六	明三一・六

| | | |

氏名	職名	在任期間		氏名	職名	在任期間	
高柳力太郎	教諭	明三九・一	明四〇・九	水野勝太郎	教諭	明四四・八	大五・一二
河村清太郎	書記	明三九・五	明三九・七	津隈武夫	書記	明四四・九	明四五・一
高尾興三松	書記	明三九・七	明四〇・一	湯浅尚志	書記	明四五・二	大二・四
桜田丑雄	教諭	明三九・八	明四二・一二	浜岡賢了	教諭（兼・農教養）	明四五・六	大九・一
達久太郎	助教諭	明四〇・一	大六・四	倉谷麻治郎	教諭心得	明四五・六	大六・三
高橋将久	書記	明四〇・二・大八・四	大六・三・一五・三（松農）	楢林林二郎	校長	大二・五	大五・一〇
大津節男	教諭	明四〇・四	明四四・六	辰巳重蔵	教諭	大四・一	大六・四
井上晋一	教諭	明四〇・四	大五・四	松原多喜男	書記兼農教養・農補書記	大四・一〇	大七・一二
西村均	助教諭心得	明四〇・四	明四一・三	北山直	書記	大二・五	大四・一〇
山中良治	校長	明四〇・七	大二・四	川崎信五郎	教諭心得	大五・六	大六・三
大中兼吉	教諭	明四〇・一〇	大六・一〇	高橋昌	校長	大五・一〇	大六・七
加能恒三郎	教諭	明四一・五	明四二・三	三浦長一郎	教諭校長事務取扱	大五・一二・一一	大一三・四・二
廣瀬勘次郎	教諭	明四一・七	大七・四	中俣直義	教諭兼農教養教諭	大六・三	大九・四
小林求吉	教諭	明四二・三	明四三・五	河田正俊	教諭	大六・四	大六・一一
高谷（木谷）三良	教諭（兼・農教養）諭	明四二・七	大九・四	伊藤廣三郎	教諭校長事務取扱	大六・四・七	大七・一一・一〇
小田春太郎	教諭（兼・農教養）諭	明四二・五	明四五・五・五	田中庫十郎	教諭	大六・四	大六・一二
手塚為吉	教諭（兼・農教養）	明四三・六	昭二・六				

| | | |

氏名	職名	在任期間	
山岸博	柔道教師	大一一・四	大一一・一二
藤盛光雄	教諭	大一一・六	大一五・三（松農）
曾山直高	教諭（兼・実補教養）	大一一・六	大一五・三（松農）
村田曠	柔道教師	大一二・一	大一五・三（松農）
横浜勘蔵	教諭（嘱）	大一二・二	
舟木十郎	教諭（兼・実補教養）	大一二・五	大一五・三（松農）
小松誠三	教諭心得	大一二・五	大一四・八
江藤安太郎	実補教養教諭（兼・本校）	大一二・七	大一五・三（松農）
美馬住二	教諭（兼・実補教養）	大一二・九	大一五・三（松農）
竹内秀雄	校長兼実補校長	大一二・一二	大一五・三（松農）
堀内嘉雄	武道教師	大一三・四	大一五・三
四戸宗夫	教諭（兼・実補教養）	大一三・四	大一四・一〇
松岡興太郎	教諭教諭（兼・実補教養）	大一三・五	大一五・三（松農）
高畠信二	教授（嘱）	大一三・六	大一五・三（松農）
松下栄太郎	教諭（兼・青教養）	大一三・七	大一五・三（松農）
西川義能	教諭	大一四・三	大一五・三（松農）
本田他喜男	教諭	大一四・六	

氏名	職名	在任期間	
大筆又蔵	教授（嘱）	大一四・四	大一五・三（松農）
倉橋尚	配属将校	大一四・七	大一五・三（松農）
得田孝二	教授（嘱）	大一四・九	大一五・四
鈴木謙五郎	教諭	大一四・一〇	大一五・四
山本敬三	（兼）教諭	大一四・一二	

石川県立松任農学校

氏名	職名	在任期間	
倉重吉次郎	学校医	大一五・四	昭六・九
高橋将久	書記（兼・農）	大一五・四	昭二・三
荒木与逸	補教諭（兼・実）	大一五・四	昭二・一一
中野義隆	教諭（兼・実）	大一五・四	昭一九・四
小林重美	教諭補教養（兼・実）	大一五・四	昭一五・八
藤盛光雄	教諭	大一五・四	昭一四・六
曾山直高	教諭（兼・実補教養）	大一五・四	昭七・一
村田曠	柔道教師	大一五・四	昭二・一〇
舟木十郎	教諭（兼・実補教養）	大一五・四	昭一八・

| | | |

氏名	職名	在任期間
長田健	教授（嘱）教諭（兼・実）補教養	昭四・一一・六・四
青山熊吉	配属将校	昭四・八
宮井定義	教授（嘱）論	昭五・八・一〇・一
金子信一	剣道教師	昭六・三
	教諭（兼・実）補教養	昭六・五・二二・四
宮川精一	教諭（兼・青）教養	昭六・八
平田吉宗	農夫	昭六・四
橋本寿重	実補教授（嘱）	昭六・九
倉重芳嗣	校医（嘱）	昭六・九
田中一郎	教諭心得	昭六・九
佐々木吉雄	教授（嘱）教諭（兼・青）教養	昭七・六
江山正美	教諭（兼・青）教養	昭七・八
石母田菊三	教諭（兼・実）補教養	昭七・八
天田音三郎	教諭（兼・実）補教養	昭八・一
岩本常吉	書記（兼・実）補教養	昭八・一
野崎静雄	教諭（兼・青）教養	昭八・三
森川清	教諭（兼・実）補教養	昭八・三
石原琢郎	教諭（兼・実）補教養	昭八・三
木佐貫重元	教諭（兼・実）補教養	不詳
青山熊吉	配属将校	昭八・三
水内重三	教授（嘱）	昭八・八
牧野文一	配属将校	昭八・三
高橋虎鹿	兼・配属将校	昭九・三
田島外男	教諭	昭九・三
山崎賢一	教諭長	昭九・四・一九・四
高梁佐太郎	配属将校	昭九・八
国井靖夫	教諭（兼・青）教養	昭九・一〇・五
金田義務	教諭（兼・青）教養	昭一〇・五
県登一郎	教諭（兼・青）教養	昭九・四
山中増太郎	教諭心得（兼・実）補教養	昭九・六
守成一	校医（嘱）医（嘱）	昭九・六・一二・三
高佐太郎	配属将校	昭九・八
国井靖夫	教諭（兼・青）教養	昭一〇・一・一六・五
金田義務	教諭（兼・青）教養	昭一一・三
県登一郎	教諭（兼・青）教養	昭一一・五・一四・一一・九
山中増太郎	教諭心得（兼・実）補教養	昭一〇・一一・一九・一二
守成一	校医（嘱）医（嘱）	昭一一・三
高佐太郎	配属将校	昭一一・三
国井靖夫	教諭（兼・青）教養	昭一一・五・一六・五
金田義務	教諭（兼・青）教養	昭一一・三
県登一郎	教諭（兼・青）教養	昭一一・五・一四・一一・九
山中増太郎	教諭心得（兼・実）補教養	昭一〇・一一・一九・一二
守成一	校医（嘱）医（嘱）	昭一一・三
高佐太郎	配属将校	昭一一・三
国井靖夫	教諭（兼・青）教養	昭一一・五・一六・五
金田義務	教諭（兼・青）教養	昭一一・三

岩井隆盛	山本功	橋本敏郎	藤盛光雄	加藤運平	村上一二	田中米夫	広瀬清孝	室賀孝治	奥谷忠次郎	佐山嵓	坂長作		松田二三夫	水上政次郎
嘱託	助教	教授（嘱）教養	教諭	配属将校	書記	教授（嘱）	教諭（兼・青）教養	学校歯科医	教授（嘱）	教諭（兼・青）教養	書記（兼・青）教養	教諭（嘱）	書記	本校・青教養教授（嘱）
昭一一・一〇・三	昭一一・一〇・五	昭一一・一〇・六	昭一一・一〇・九	昭一一・一一・三	昭一一・一一・三	昭一一・一一・九	昭一二・一・三	昭一二・一・四	昭一一・一一・九	昭一二・一・三	昭一二・一・五	昭一二・一二・九	昭一二・一・五	昭一二・一・九
昭一二・一・三	昭一三・一・四	昭一三・一・二	昭一二・一・四	昭一三・一・四	昭一二・一・四	昭一一・一・九	昭一六・一・三	昭一四・一・二	昭一四・一・一〇	昭一三・一・一	昭一三・一・五	昭一三・一二・五	昭一五・一・三	昭一四・一・一
本田次雄	吉田一郎	坂野博暉	中村清人	板坂平太郎	宮前正旭	村本石雄	廣島武雄	酒井長森	東孝朔	辻弥一郎	橋場芳	渡部貞良		山中歳一
教授（嘱）	教授（嘱）	配属将校	剣道教師	教諭（兼・青）教養	教諭（兼・青）教養	教諭（兼・青）教養	青教養教諭	本校・青教養書記心得	教諭（嘱）心得	本校・青教養書記	配属将校	本校・青教養教諭（嘱）		教諭心得
昭一二・一一・一一	昭一二・一一・一一	昭一二・一二・一二	昭一二・一二・一二	昭一三・一・一六	昭一三・一・一	昭一三・一・一	昭一三・一・五	昭一三・一・五	昭一三・六・三	昭一三・一・九	昭一三・一・九	昭一三・一〇・一	昭一七・三	昭一三・一一・一
昭一三・二・二	昭一五・三・三	昭一三・九・九	昭一四・三・三	昭一四・一・一〇	昭一四・四・四	昭一四・一・一〇	昭一五・四・四	昭一七・三・八	昭一四・一・一	昭一四・三・三	昭一四・一・一	昭一四・二・二	昭一七・八	昭一五・三・三

氏名	職名	在任期間		氏名	職名	在任期間	
囊毛忠義	教諭	昭一三・一一	昭一五・一一	岡野行雄	教諭（兼・青教養）	昭一五・四	昭一五・一二
島次郎	教諭	昭一四・二	昭一五・四	渡辺次一	教授（嘱）	昭一五・四	昭一六・三
高橋登	本校・青教養教諭（嘱）	昭一四・三	昭一四・一二	辻権三郎	書記心得	昭一五・四	昭二三・三（松高）
手取屋昌子	書記心得	昭一四・三	昭一四・七	加藤秖	教諭	昭一五・四	昭二三・三（松高）
飯田覚	教諭	昭一四・三	昭一八・三				
石地幸雄	教諭	昭一四・三	昭一四・一一	中田正男	教授（嘱）教諭	昭一五・五	昭一九・三
畠重明	本校・青教養書記心得事務助手	昭一四・四	昭一二・一二	竹沢喜太郎	教授（嘱）教諭	昭一九・三	
斉川源左衛門	歯科医（嘱）	昭一四・四	昭一三・三（松高）	神沼春雄	青教養教授（嘱）	昭一五・五	昭一九・三
大中俊吉	教諭（兼・青教養）	昭一四・五	昭一七・一（松高）	宮本清松	教諭	昭一五・八	昭一八・一
本田他喜男	教諭（兼・青教養）	昭一四・六	昭一八・三	吉松孝雄	教諭	昭一五・一〇	昭二三・三（松高）
新谷賢太郎	書記心得	昭一四・一〇	昭一五・三	大池明信	教諭	昭一五・一一	昭一七・九（松高）
川崎政雄	本校・青教養教授（嘱）	昭一四・一〇	昭一五・一〇	武田弘	教諭（兼・青教養）	昭一五・一二	昭二二・九
	教諭	昭一五・四	昭一七・三	南美津為	看護婦	昭一六・二	昭一七・四
横山勇	教諭	昭一五・三	昭一一・三	吉野進	教諭（兼・青教養）	昭一六・三	昭二三・三（松高）
若林春二	教諭心得	昭一五・三	昭一八・九	若林政義	教諭（嘱）教諭	昭一六・三	昭二〇・一
加藤春水	本校・青教養教授（嘱）	昭一五・四	昭一五・一一	中谷知敬	教諭（兼・青教養）	昭一六・四	昭二〇・三
				田中勝雄	教諭	昭一六・四	昭二二・四

| | | |

氏名	職名	在任期間
本保重明	教授（嘱）・教諭心得	昭一九・六
宮坂達男	教諭	昭一九・七 昭二〇・一二
山田君子	看護婦	昭一九・八 昭一九・一二
番野与正雄	教授（嘱）	昭一九・九
松本純一	教諭	昭一九・九 昭二〇・九
桑野恭介	教諭	昭一九・九 昭二一・一一
卯辰平四郎	教授（嘱）	昭一九・一一 昭二〇・一二
裏野弘	教諭心得	昭一九・一一 昭二三・三（松高）
大瀧信次	教授（嘱）	昭二〇・三 昭二二・三（松高）
小林勝	教授（嘱）	昭二〇・三 昭二〇・七
佐藤節郎	教諭	昭二〇・三 昭二〇・一一
福本国子	教諭	昭二〇・三 昭二三・三（松高）
伊藤五十子	教諭	昭二〇・三 昭二三・三（松高）
油谷静子	事務助手	昭二〇・三 昭二三・三（松高）
中辻勝平	教授（嘱）	昭二〇・四 昭二二・三（松高）
岡田一郎	教授（嘱）	昭二〇・四 昭二三・三（松高）
北村健二	助手	昭二〇・四 昭二〇・五（松高）
若松伊三郎	小使	昭二〇・五 昭二三・三（松高）
本田政夫	教諭	昭二〇・四 昭二三・三（松高）
磯野三郎	教諭	昭二〇・八 昭二三・三（松高）
得田金市	農夫	昭二〇・九 昭二三・三（松高）
岡田源一	教諭	昭二〇・一〇 昭二一・一（松高）
北川よし子	看護婦	昭二〇・一〇 昭二三・三（松高）
津沢安太郎	教授（嘱）	昭二一・三 昭二三・四（松高）
中山隆	教諭	昭二一・三 昭二三・三（松高）
安田修	教諭	昭二一・三 昭二三・三（松高）
桜谷与平	教諭	昭二一・四 昭二三・三（松高）
平野外喜平	教諭心得	昭二一・三 昭二三・三（松高）
月輪みゆき	技芸教師（嘱）	昭二一・四 昭二三・三（松高）
番義男	教諭	昭二一・九 昭二三・三（松高）
菊池和雄	教諭	昭二一・九 昭二三・三（松高）
金子直祐	教諭	昭二一・一〇 昭二三・三（松高）
額俊一	教諭	昭二一・一〇 昭二三・三（松高）
上田太郎	教諭	昭二一・一二 昭二三・三（松高）

農教養…石川県立農業教員養成所
農　補…石川県立農業補習学校
実補教養…石川県立実業補習学校教員養成所
青教養…石川県立青年学校教員養成所

氏名	職名	在任期間	
本田嗣男	教授（嘱）・教諭心得	昭二三・一	昭二三・三（松高）
前田亀雄	教授（嘱）	昭二三・三	昭二三・九（松高）
高崎利助	手	昭二三・四	昭二三・四（松高）
太田良章	助手	昭二三・四	昭二三・四（松高）
宮本高明	教授（嘱）教諭	昭二三・四	昭二三・四（松高）
太田葉子（旧姓）	給仕	昭二三・四	昭二三・四（松高）
伏見チカ	教授（嘱）	昭二三・五	
松原重雄	教諭心得	昭二三・八	昭二三・八（松高）
中島登喜男	教諭	昭二三・九	昭二三・九（松高）
橋本勝衛	教諭	昭二三・一一	昭二三・一一（松高）
高畠信次	教授（嘱）	昭二三・一一	昭二三・一一（松高）
渡辺吉郎	教諭	昭二三・一二	昭二三・一二（松高）
喜多重正	教諭	昭二三・三	昭二四・三（松高）
難波得三	（兼）校長	昭二三・八	昭二四・三（松高）

松任女子実業学校

氏名	職名	在任期間	
加藤政吉	校長	大一二・三	昭二・二
田村秀三	教諭	大一二・四	大一四・三
加藤のぶ	教諭	大一二・四	昭二・三（高女）
橋本助太郎	書記・教諭	大一二・四	昭二・三（高女）
中野義隆	教授（嘱）兼教諭	大一二・四・一	大一三・三・三
佐々木正利	教授（嘱）教諭	大一三・三	大一四・四
金子幸	教授（嘱）教諭	大一三・三	大一四・三
佐藤八千代	教諭	大一三・三	昭二・三（高女）
和沢みさを	教諭	大一三・三	昭二・三（高女）
内田富子	教諭	大一四・三	昭二・三（高女）
加藤巳行	教授（嘱）教諭	大一四・四	昭二・三（高女）
中原義男	教諭	大一四・四	昭二・三（高女）
中山随学	教授（嘱）教諭	大一五・四	昭二・三（高女）
池田敬一	学校医	大一五・四	昭二・三（高女）
畠山治作	校長	昭二・二	昭二・三（高女）

（嘱）…嘱託　（高女）…石川県立松任高等女学校

石川県立松任高等女学校

氏名	職名	在任期間
畠山治作	校長	昭二・四・八―昭三・三
加藤のぶ	教諭	昭二・四・三―昭四・三
橋本助太郎	教諭	昭二・四・四―昭四・一
中野義隆	兼教諭	昭二・四・三―昭三・三
佐藤八千代	教諭	昭二・四・七―昭三・三
和沢みさを	教諭	昭二・四・八―昭三・三
内田富子	教諭	昭二・四・三―昭三・一〇
加藤巳行	教諭	昭二・四・二四―昭三・三
中原義勇	教諭	昭二・四・八―昭三・三
中山随学	教諭	昭二・四・八―昭三・三
池田敬一	学校医	昭二・四・四―昭四・七
北村一	教諭	昭二・三・五―昭五・五
藤本長信	教諭	昭二・四・二四―昭六・六
真砂甚作	書記	昭二・四・二四・一〇―昭三・三
腰垣福松	教諭	昭三・三―昭六・
秋山直中	教諭	昭三・三―昭六・六
坂井サタ	教諭	昭三・一〇―昭七・三
山崎修一	教授(嘱)教諭	昭四・一―昭七・一
竹林やゑ子	教諭	昭四・三―昭六・一
小幡初栄	教諭	昭四・三―昭八・八
粟田常太郎	茶道教師	昭四・五―昭五・七
高森友正	学校医	昭四・九―昭一三・三(松高)
開発吉次	教諭	昭五・三―昭一六・六
清水仁三郎	技芸教師	昭五・三―昭一七・三
島尾ユキ	教諭	昭五・四―昭七・三
得永季文	教授(嘱)	昭五・五―昭六・一
清水正三	技芸教師	昭五・八―昭九・三
瀬尾永敏	教諭	昭六・三―昭八・三
小川国彦	教諭	昭六・六―昭九・四
橋源次郎	教授(嘱)	昭七・一―昭八・二
松田武	教授(嘱)	昭七・三―昭七・六
久末操	教諭	昭七・三―昭八・三
竹屋敏	教諭	昭七・三―昭一三・四

| | | |

氏名	職名	在任期間		氏名	職名	在任期間	
米永瑠璃	教諭	昭一五・三	昭一七・三	田伏亮	教授（嘱）	昭一七・六	昭二二・三
斉川源左衛門	歯科医	昭一五・三	昭二三・三（松高）	沖田精一郎	教授（嘱）	昭一七・九	昭一八・四
鈴森淑	教授（嘱）	昭一五・三	昭一七・三（松高）	尾形稚松	教授（嘱）	昭一七・一〇	昭二〇・三
武岡長太郎	教諭	昭一五・四	昭二二・三	枷場佳子	教諭	昭一七・一〇	昭二三・三（松高）
高多信久	教諭	昭一五・七	昭二〇・一二	鞍恵子	教諭	昭一七・一一	昭一八・三
田中婦美	教授（嘱）	昭一六・四	昭一八・三	喜多育治	教諭	昭一八・四	昭二三・一二
油谷周次	教諭	昭一六・六		月輪彰慰	教諭	昭一八・四	昭二三・三（松高）
細畑シズ	教授（嘱）	昭一六・八	昭一七・三	大岸嘉次郎	教授（嘱）	昭一八・五	昭二二・三（松高）
池上鋼太郎	教授（嘱）	昭一六・九	昭一七・三	佐々木正枝	助手	昭一八・五	昭二三・三（松高）
北原三枝	衛生婦	昭一七・三	昭一七・六	泉松雄	教諭	昭一九・一	昭二三・三（松高）
打田幸夫	教諭	昭一七・三	昭一八・三	柴原雄吉	校長	昭一九・三	昭二三・三（松高）
西出きよ子	教諭	昭一七・三	昭一七・一〇	福浦耕介	教諭	昭一九・三	昭二三・三（松高）
吉野志佳	教授（嘱）	昭一七・三	昭一八・一二	栃尾喜美子	教諭	昭一九・三	昭二三・三（松高）
吉村幸一郎	教諭	昭一七・四	昭一八・一二	松田紀子	教諭	昭一九・八	昭二三・三（松高）
今井虎夫	教授（嘱）	昭一七・三	昭一七・一〇	川上重次	教諭	昭二〇・三	昭二三・三（松高）
石木一雄	教授（嘱）	昭一七・三	昭一七・一〇	岡田一郎	教諭	昭二〇・四	昭二三・三（松高）
安田可祝	助手	昭一七・三	昭二二・三	平木よし子	助手	昭二〇・五	

石川県立松任高等学校

（松高）…石川県立松任高等学校

氏名	職名	在任期間
三田二郎	教諭	昭一〇・八
宮本外喜子	看護婦	昭一一・三
森松男	教諭	昭一一・三（松高）―昭一三・三（松高）
穴太郁子	教諭	昭一一・五
橋本久子	教授（嘱）	昭一一・八
幸山彰一	教諭	昭一二・三
永井久恵	教諭	昭一二・三
小関達人	教諭	昭一二・三（松高）―昭一三・三（松高）
半田利男	教諭	昭一二・八
難波得三	（兼）校長	昭一三・八
柴原雄吉	普通部長 校長事務取扱	昭一三・四―昭一三・四
加藤稔	教諭・農業部長 校長事務取扱	昭一三・四―昭一三・四
金子信一	教諭	昭一三・四―昭一八・三（農高）五
	校長心得	昭一八・三
盛田喜久弥	教諭	昭一三・四
斉川源左ヱ門	歯科医	昭一三・四
北崎信次	使丁	昭一三・四
道幸夫	教諭	昭一三・四―昭一七・一〇
畠重明	事務補佐	昭一三・四
辻権三郎	書記	昭一三・四
平田吉宗	農夫	昭一三・四
宮本清松	教諭	昭一三・四
岩上啓	教諭	昭一三・四
吉野進	教諭	昭一三・四
裏野弘	教諭	昭一三・四
福本国子	教諭	昭一三・四
伊藤五十子	教諭	昭一三・四
油谷静子	事務助手	昭一三・四
岡田一郎	教諭	昭一三・四
若松伊三郎	使丁	昭一三・四
本田政夫	教諭	昭一三・四
磯野三郎	教諭	昭一三・四
		昭一六・三（農高）四
		昭一八・三（農高）三
		昭一八・三（農高）三
		昭一八・三（農高）三

氏名	職名	在任期間		氏名	職名	在任期間	
北川よし子	看護婦	昭二三・四	昭二五・三	松原重雄	教諭心得	昭二三・四	昭二六・三
得田金市	農夫	昭二三・四	昭二八・三（農高）	中島登喜男	教諭	昭二三・四	昭二六・四
中山隆	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）	橋本勝衛	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）
安田修	教諭	昭二三・四	昭二四・三	高畠信次	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）
平野外喜平	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）	渡辺吉郎	教諭	昭二三・四	昭二四・三
菊池和雄	教諭	昭二三・四	昭二四・一（農高）	喜多重正	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）
桜谷與平	教諭	昭二三・四	昭二四・三	能千吉	教諭	昭二三・四	昭二四・九（農高）
金子直祐	教諭	昭二三・四	昭二三・六	近藤繁隆	教諭	昭二三・四	昭二五・三
半田利男	教諭	昭二三・四	昭二四・三	高森友正	校医	昭二三・四	昭二八・三（農高）
月輪みゆき	技芸教師	昭二三・四	昭二八・三（農高）	横川徳次	使丁	昭二三・四	昭二六・三（農高）
番義男	教諭	昭二三・四	昭二四・三（農高）	道幸枝	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）
額俊一	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）	吉村源次	教授（嘱）	昭二三・四	昭二四・一〇（農高）
本田嗣男	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）	栃場佳子	教諭	昭二三・四	昭二四・三（農高）
高崎利助	手	昭二三・四	昭二六・四（農高）	月輪彰慰	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）
太田良章助	手	昭二三・四	昭二六・六	佐々木正枝	事務助手	昭二三・四	昭二八・三（農高）
宮本高明	教諭	昭二三・四	昭二八・三（農高）	福浦耕介	教諭	昭二三・四	昭二四・三（農高）
太田葉子	給仕	昭二三・四	昭二八・三（農高）	松内紀子	教諭	昭二三・四	昭二四・三

| | | |

氏名	職名	在任期間		氏名	職名	在任期間	
角野四郎佐	教諭・事務補	昭二四・三	昭二八・三（農高）	吉田美津枝（奥田）	教諭	昭二五・三	昭二七・三
中村孝講	師	昭二四・三	昭二四・一〇	山崎昭	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）
加藤清次	教諭	昭二四・三	昭二八・三（農高）	前田一男	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）
作本秀雄	教諭	昭二四・三	昭二八・三（農高）	田中司	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）
石地與四太郎	教諭	昭二四・三	昭二八・三（農高）	若林孝之助	助手	昭二五・四	昭二六・三（農高）
墨田廸彰	教諭	昭二四・四	昭二五・三（農高）	中村晃助	助手	昭二五・四	昭二六・七
小水真喜美	教諭	昭二四・四	昭二五・一〇	田中恵美子	看護婦	昭二五・五	
中山静	講師	昭二四・四		奥鶴晃照	講師	昭二五・六	昭二八・三（農高）
蒔田正人	助手	昭二四・四	昭二四・五	西久夫	教諭	昭二五・七	昭二八・三（農高）
今村雪世	教諭	昭二四・八	昭二六・一二	藤田崇宣	講師・教諭	昭二五・七	昭二八・三（農高）
宮崎豊松	講師	昭二五・二	昭二八・三（農高）	松田信子	事務助手	昭二五・八	昭二八・三（農高）
太田了介	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）	久間秀彦	教諭	昭二五・八	昭二六・九（農高）
綿谷勝以	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）	藤円充	教諭	昭二五・九	昭三一・三
鏑木悠紀夫	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）	富永瑠璃子	教諭	昭二五・一〇	昭二七・九
平田慶実	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）	徳村佑市	教諭	昭二五・一〇	昭二七・三
粟津達吉	教諭	昭二五・三	昭二八・三（農高）	古屋利之	講師	昭二五・一一	昭二七・三
川口宇一郎	講師・教諭	昭二五・三	昭二七・三	新谷耕造	教諭	昭二六・四	昭二七・三

| | | |

石川県立松任農業高等学校

（農高）…石川県立松任農業高等学校

氏名	職名	在任期間
福田久子	給仕	昭二七・八―昭二八・三（農高）
面　隆司	技能用務員	昭二七・八―昭二八・三（農高）
奥沢　実	助手	昭二七・九―昭二七・一二（農高）
宮本敦子	助手	昭二七・九―昭二八・三（農高）
寺尾孝子	教諭	昭二七・一〇―昭二八・三（農高）
山脇　茂	教諭	昭二八・一―昭二八・三（農高）
安川雅章	教諭	昭二八・一―昭二八・三（農高）
金子信一	教諭	昭二八・四―昭三二・三
道　幸夫	教諭	昭二八・四―昭三八・三
岡田一郎	教諭	昭二八・四―昭三八・三
本田政夫	教諭	昭二八・四―昭四八・三
平野外喜平	教諭（組合専従）	昭二八・四―昭四三・三
額　俊一	教諭	昭二八・四―昭三三・四
本多嗣男	教諭	昭二八・四―昭二九・三
宮本高明	教諭・講師	昭二八・四―昭三二・八
橋本勝衛	教諭専攻科	昭二八・四―昭三七・三
高畠信次	教諭	昭二八・四―昭四六・三
喜多重正	教諭	昭二八・四―昭三八・三
道　幸枝	教諭	昭二八・四―昭三八・三
月輪彰慰	教諭	昭二八・四―昭三八・三
小関達人	教諭	昭二八・四―昭三八・三
泉　松雄	教諭	昭二八・四―昭四六・三
平田吉宗	農夫	昭二八・四―昭三一・一一
斉川源左衛門	歯科医	昭二八・四―昭四二・三
北崎信次	用務員	昭二八・四―昭三八・三
油谷静子	主事補	昭二八・四―昭三八・三
若松伊三郎	使丁	昭二八・四―昭三一・一
得田金市	農夫・用務員	昭二八・四―昭四二・三
月輪みゆき	技芸教師	昭二八・四―昭三三・三

| | | |

氏名	職名	在任期間
高村良巖	教諭	昭二八・四～昭三四・三
宮田禊	助手・教諭	昭二八・四～現在
蔵和子	養護教諭	昭二八・四～昭四四・三
永井助雄	用務員夜警	昭二八・四～昭四六・三・昭五〇・三
村本達爾	教諭	昭二八・四～昭二九・三
田中清太	講師	昭二八・四～昭三〇・三
久保淳三	教諭	昭二八・四～昭四五・三
高井志津子	主事	昭二八・四～昭三八・五・昭四五・四～現在
高島誠一	教諭	昭二八・四～昭二九・三
伊藤茂治	教諭	昭二八・四～昭二九・三
北尭三	教諭	昭二八・四～昭三三・三
北井又衛	教諭	昭二八・四～昭三二・四
長井百合子	教諭	昭二八・四～昭三七・三
森田昭三	教諭	昭二八・四～昭三八・三
吉村喜彦	教諭	昭二八・四～昭三九・三
粟冨美枝	主事補	昭二八・四～昭四三・一二

氏名	職名	在任期間
梶川繁	助手	昭二八・四～昭三四・三
福田久子	給仕	昭二八・四～昭三〇・七
面隆司	技能用務員	昭二八・四～昭四〇・一
宮本敦子	事務助手	昭二八・四～昭三一・一
山脇茂	教諭	昭二八・四～昭四七・三
安川雅章	教諭	昭二八・四～昭四六・二
飯倉薫	校長事務取扱・校長	昭二八・四～昭三二・六・昭三三・七
徳山広	教諭	昭二八・四～昭三四・三
喜多三衛	教諭（非）講師	昭二八・四～昭三四・三・昭四二・五
藤塚秀洞	講師	昭二八・四～昭三八・三
石川俊枝	教諭	昭二八・四～昭三八・三
新谷郁永	教諭	昭二八・四～昭四三・三
吉田藤弥	教諭	昭二八・四～昭三八・三
織田一	教諭	昭二八・四～昭四三・三
守田顕三	教諭	昭二八・四～昭四八・三
海野敏子	講師	昭二八・四～昭三八・三

| | | |

氏名	職名	在任期間
谷　正則	助手・実習教諭兼務	昭三一・三 昭四六・四 在現
竹沢喜太郎	校長	昭三一・四 昭三三・三
美谷瑛子	事務見習	昭三一・四 昭三二・一二
石田悌三	教諭	昭三一・四 昭三五・六
中本信子	教諭	昭三一・四 昭三八・三
高田文子	教諭	昭三一・四 昭三八・三
平田慶実	教諭	昭三一・四 昭四六・三
横川　健	教諭	昭三一・四 昭三九・三
居村もつ	臨時職員	昭三一・一〇 昭三五・三
美谷　勇	用務員	昭三二・一 昭四四・一三 在現
内藤幸一	教諭	昭三三・四 昭三三・三
在田秀雄	教諭	昭三三・四 昭三五・三
古野春秋	教諭	昭三三・四 昭四七・三 在現
中田三郎	教諭	昭三三・四 昭三八・三
中林敏之	教諭	昭三三・四 昭三八・三

氏名	職名	在任期間
倉重芳嗣	校医	昭三一・四 昭三八・三
吉岡康暢	教諭	昭三一・五 昭三四・三
小坂政栄	助手・実習教諭	昭三一・六 在現
藤田外之助	助手	昭三一・七 昭三四・四
篠原三郎	教諭	昭三一・九 昭三四・三
小島智伸	教諭	昭三一・九 昭三八・三
松村　茂	校長	昭三三・四 昭三四・三
吉野　進	教諭・教頭・校長	昭三三・四 昭四二・三 昭三六・四
池上啓成	教諭	昭三三・四 昭三七・三
藤谷　昭	教諭	昭三三・四 昭三八・三
越野外至雄	教諭	昭三三・四 昭三七・三
長谷川　昭	教諭	昭三三・四 昭四九・三 在現
真田一冨	校医	昭三三・六 昭四五
瀬川良夫	教諭	昭三三・七 昭四〇・三
高橋八十平	校長	昭三四・四 昭三六・三
加藤正一	教諭	昭三四・四 昭三六・三

建部守栄	教諭	昭二四・四	昭三七・三	
大野郁夫	教諭	昭二四・四	昭三七・九	
四柳嘉照	教諭	昭二四・四	昭三八・三	
柏木勝人	講師	昭二四・四	昭三四・一〇	
中正隆	講師	昭二四・四	昭三六・三	
小林昭一	技能用務員	昭二四・四		
広瀬稔	教諭	昭二四・四	昭三八・三	
清水亨夫助	手	昭二四・六	昭三六・六	
開発吉次	講師	昭二四・一一	昭三七・三	
北田正幸	講師	昭二四・一一	昭三五・三	
小川国彦	教諭	昭二五・四	昭三七・三	
寺尾義臣	教諭	昭二五・四	昭三九・三	
藤岡弘	事務長	昭二五・四	昭四三・三	
作井春美	給仕	昭二五・四	昭三七・五	
正見玲子	教諭	昭二五・九	昭三六・三	
鈴木郁代	教諭	昭二六・四	昭三八・三	
田村義明	教諭	昭二六・四	昭四五・三	
西村外志雄	講師	昭二六・四	昭三七・三	
山上二美雄	講師	昭二六・四	昭三八・三	
川西信一	助手	昭二六・六	昭四四・三	
青木信孝	学校薬剤師	昭二六・四	現在	
石次武雄	事務長	昭二七・四	昭四〇・三	
中村喜彰	講師	昭二七・四	昭四五・九	
新谷善治	教諭	昭二七・四	昭四一・三	
市川春枝	教諭	昭二七・四	昭三八・三	
相坂一成	教諭	昭二七・四	昭三八・三	
小西優	教諭	昭二七・四	昭四二・三	
長永勇	教諭	昭二七・四	昭四五・三	
徳山俊介	教諭	昭二七・四	昭四八・三	
久間和恵	事務補助	昭二七・五	昭三八・三	
奥村明美	給仕	昭二七・六	昭三九	
山口哲	教諭	昭二七・九	昭四三・三	
中本文雄	教諭	昭二七・四	昭四二・三	
高野成三	教諭	昭二七・四	昭四一・三	
西孝治	教諭	昭二七・四	昭四二・三	
鹿角延夫	教諭	昭二七・四	昭四四・三	

氏名	職名	在任期間
古保勲	教諭	昭三八・四～昭四八・三
杉田弘巳	教諭	昭三八・四～昭四〇・三
清水百合子	主事	昭三八・四～昭四五・三
南郁枝	主事補	昭三八・四～昭四三・三
中本二三	講師	昭三八・四～昭四〇・三
田中芙美子	技芸講師	昭三八・六～現在
吉田正則	技能用務員兼学務	昭三八・九～昭四七・三
芝田克彦	教諭	昭三八・一〇～現在
松本博光	教諭	昭三九・四～昭四四・三
田村昌俊	教諭	昭三九・四～現在
西要嗣	教諭	昭三九・四～現在
雄谷藤男	教諭	昭三九・四～現在
安宅庸夫	教諭	昭三九・五～昭四二・三
太田外行	技能用務員	昭四〇・二～昭四六・三
三宅伯二郎	教諭	昭四〇・四～昭五〇・三
音誠一	教諭	昭四〇・四～昭四二・三
浜屋襄二	教諭	昭四〇・四～昭四三・三
音順子	主事	昭四〇・四～昭四六・三
小林佐一	教諭	昭四一・四～昭四六・五
川向邦雄	主事補	昭四一・四～昭四二・一
副田忠	教諭	昭四一・四～昭四三・八
中本次雄	教諭	昭四一・四～昭四七・三
又博喜	事務長	昭四二・四～昭四八・三
青木滋	教諭	昭四二・四～昭四九・二
加藤実	教諭	昭四二・四～昭四六・三
谷内忠悦	教諭	昭四二・四～昭四四・三
島田昭夫	教諭	昭四二・四～昭四五・三
平野茂紀	教諭	昭四二・四～現在
大蔵捷直	教諭	昭四二・四～現在
瀬尾了好	講師	昭四二・九～昭四三・三
海野外茂次	技能員	昭四三・一～現在
辻秀男	事務長	昭四三・四～昭四四・三
橘龍雄	教諭	昭四三・四～昭四四・三
太田脩	教諭	昭四三・四～現在

東保之	教諭	昭四三・四	現在	綱屋保治
石井嘉之助	教諭	昭四三・四	現在	近藤哲夫
黒田省三	助手・実習教諭	昭四三・四	現在	高木伸也
岡田外茂行	助手・実習教諭	昭四三・四	現在	小柳浩一
寺島恒機	教諭	昭四四・四	昭四七・三	上登正人
井上清光	教諭	昭四四・四	昭四八・四	渡辺甫
町田邦夫	教諭	昭四四・四	現在	新村牧子
根津能久	教諭	昭四四・四	現在	新屋昌良
森岡高	教諭	昭四四・四	現在	山村勢一
宮下博	助手	昭四四・四	現在	亀田肇
堀栄子	養護教諭	昭四四・四	昭四七・三	千田武弘
藤田房江	主事	昭四四・四	昭四六・三	江幡元清
羽柴恒	事務長	昭四四・四	昭四五・三	志茂克
長谷川和久	教諭	昭四五・四	昭四六・三	源田優
横浜哲夫	教諭	昭四五・四	現在	二口信従
角田邦久	事務長	昭四五・四	昭四七・三	木島雅子
和角弘	主事	昭四六・四	昭四九・三	小山与一
川上清続	教諭	昭四六・四	昭五〇・三	坂野下みよ子
東保之	教諭	昭四六・四	現在	綱屋保治
石井嘉之助	教諭	昭四六・四	現在	近藤哲夫
黒田省三	助手	昭四六・四	現在	高木伸也
岡田外茂行	技能用務員助手	昭四六・四	現在	小柳浩一
寺島恒機	手	昭四六・五	現在	上登正人
井上清光	医	昭四六・	現在	渡辺甫
町田邦夫	主事補	昭四七・四	昭四八・三	新村牧子
根津能久	教諭	昭四七・四	昭四九・三	新屋昌良
森岡高	教諭	昭四七・四	昭四九・三	山村勢一
宮下博	教諭	昭四七・四	現在	亀田肇
堀栄子	教諭	昭四七・四	現在	千田武弘
藤田房江	教諭	昭四七・四	現在	江幡元清
羽柴恒	教諭	昭四七・四	現在	志茂克
長谷川和久	教諭	昭四七・四	現在	源田優
横浜哲夫	教諭	昭四七・四	現在	二口信従
角田邦久	学務員	昭四七・四	現在	木島雅子
和角弘	技師	昭四七・四	現在	小山与一
川上清続	養護教諭	昭四七・六	現在	坂野下みよ子

氏名	職名	在任期間	
神保　肇	教諭	昭四八・四	昭五〇・三
井田徳久	主事	昭四八・四	昭五〇・三
山村外志雄	教諭	昭四八・四	現在
山根　公	教諭	昭四八・四	現在
作本敏彦	教諭	昭四八・四	現在
佐野　烈	教諭	昭四八・四	現在
古川和子	主事	昭四八・四	現在
山岸昭則	教諭	昭四九・四	現在
親谷栄一	教諭	昭四九・四	現在
中田　仁	教諭	昭四九・四	現在
和泉邦夫	主事	昭四九・四	現在
渡辺純子	技用	昭四九・一〇	現在
窪田武徳	校長	昭五〇・四	現在
香城哲隆	教諭	昭五〇・四	現在
桂田　敬	教諭	昭五〇・四	現在
中泉俊一	教諭	昭五〇・四	現在
成谷和宏	主事	昭五〇・四	現在

現教職員（昭和五〇年五月現在）

氏名	職名	在任期間	
埜谷喜代子	図書事務	昭四八・六	現在
武田和子	学務補助	昭四五・一〇	現在
北田かず子	購買部補助	昭四六・九	現在

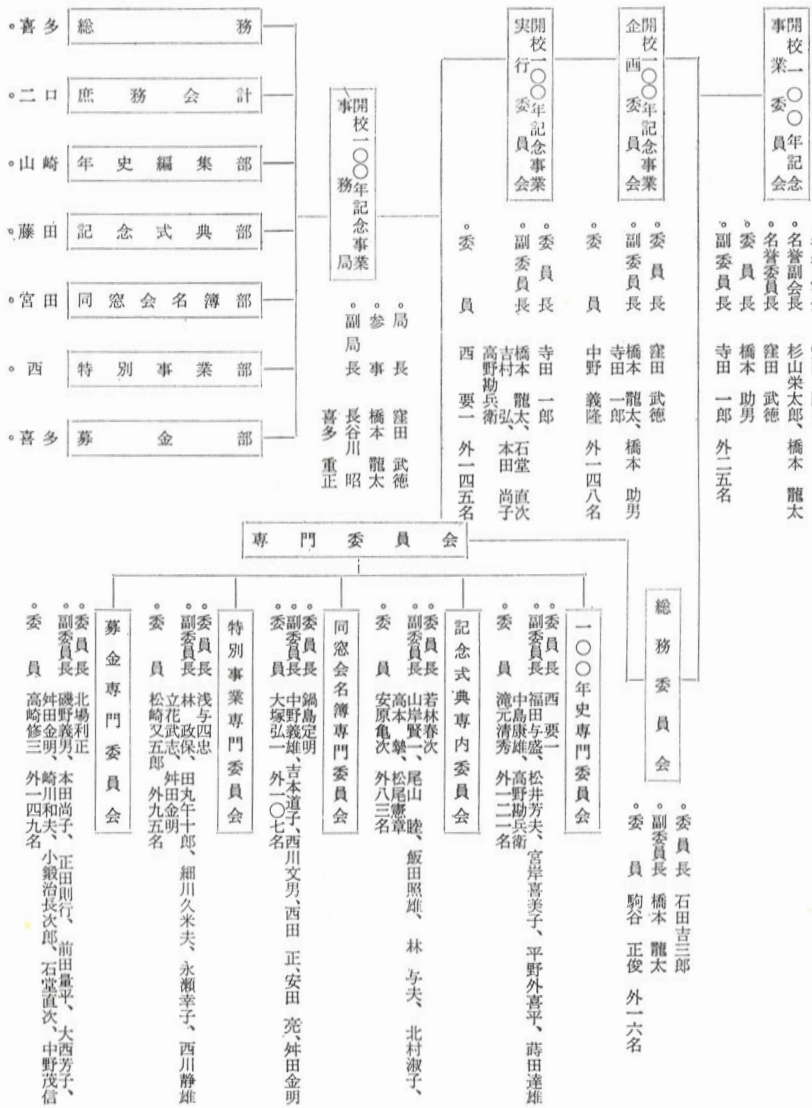
氏名	担当	着任年月	現住所
窪田武徳	校長	昭五〇・四	野々市町大平寺
長谷川昭教	頭	昭三三・四	金沢市兼六元町一五の一四
喜多重正	農業（畜産）	昭三二・三～三三・三	松任市石同新町四四の二
古野春秋	農業（畜産）	昭三六・四～五〇・四	〃　相川新町
藤田崇宣	農業（農業土木）	昭二七・六	石川郡鶴来町日向町和五八の一
山崎　昭理	科	昭二五・三～三三・四	松任市北島町
香城哲隆	社会	昭五〇・四	金沢市四十万町二の三七〇の一
宮田　禊	農業（農業）	昭二六・四	能美郡川北村中島ワ二四七
町田邦夫	社会	昭四四・四	金沢市上荒屋二丁目一二一

中田　実	農業（農業）	昭二九・四	小松市一針町ワ七三	石井嘉之助	農業（造園）	昭四三・四	松任市石同新町ヱ六〇の五
田村　昌俊	保健体育	昭三九・四	石川郡野々市町本町二丁目一七の二一	山根　公国	語	昭四八・四	〃　横江町九〇七の二三
西　要嗣	農業（農業）	昭三九・四	加賀市熊坂町四の二七	根津　能久	農業（農業土木）	昭四四・四	〃　村井町一九四
山村外志雄	保健体育	昭四八・四	松任市八ツ矢町三〇五	森岡　高	農業（食品製造）	昭四四・四	金沢市城南二丁目一の二〇
雄谷　藤男	農業（造園）	昭三九・四	金沢市南新保町ホの一	作本　敏彦	保健体育	昭四八・四	中島ハウスB
小坂　政栄	農業（農業）	昭三二・六	松任市相川新町二〇	佐野　烈	農業（造園）	昭四八・四	石川郡鶴来町道法寺町へ一〇
芝田　克彦	農業（農業土木）	昭三八・一〇	〃　成町二六一　成田アパート	綱屋　保治	農業（農業）	昭四六・四	能美郡川北村土室ヌ七一の二
平野　茂紀	農業（畜産）	昭四二・四	能美郡寺井町牛島ロ二三〇	親谷　栄一	農業（食品製造）	昭四九・四	金沢市扇町一三の九　山の上町二五
太田　脩	農業（食品製造）	昭四三・四	松任市馬場町五二	桂田　敬国	語	昭五〇・四	〃　の三二
横浜　哲夫	数学	昭四五・四	金沢市石引二丁目三の二八	中田　仁国	語	昭四九・四	加賀市庄町ル一七一
亀田　肇理	科	昭四七・四	能美郡川北村与九郎島八一一二	中泉　俊一	数学	昭五〇・四	石川郡野々市町二日市
千田　武弘	英語	昭四七・四	金沢市粟崎町二の三二九	坂野下　みよ子	養護	昭四七・六	〃　鶴来町新町ワ九一番地
山岸　昭則	数学	昭四九・四	石川郡野々市町新庄九九五	黒田　省三	実習教諭（畜産禽）	昭四三・四	〃　〃　八二一六の二
大蔵　捷直	農業（農業）	昭四二・四	金沢市寺町三丁目一五の二九	岡田外茂行	実習教諭（農業土木）	昭四三・四	〃　米永町一一一
江幡　元清	英語	昭四七・四	〃　馬替一丁目二三	源田　優	助手（畜・酪農）	昭四七・四	〃　出合島町八五
東　保之	農業（農業）	昭四三・四	石川郡鳥越村出合ホ六二	木戸浦五作	助手（農・草花）	昭二九・四	小松市串町せ一六
近藤　哲史	農業（食品製造）	昭四六・四	金沢市高尾町ウ一の二七	高木　伸也	助手（農・農機）	昭四六・四	金沢市額谷町ホ一六
志茂　克	社会	昭四七・四	石川郡野々市町押越一二〇	宮下　博	助手（農・野菜）	昭四四・四	松任市七郎町一七

開校百年記念事業委員会会則及び組織一覧

氏名	担当	着任年月	現住所
上登　正人	助手（食品製造）	昭四六・五	能美郡川北村山田先出
小柳　浩一	助手（造園）	昭四六・四	松任市四ッ屋町七一
二口　信従	事務長	昭四七・四	石川郡美川町神幸町ヲ二六
高井志津子	主事	昭二六・一一〜三八・五・四五・四	松任市鍛治町七八の二
古川　和子	主事	昭四八・四	〃　横町四四
和泉　邦夫	主事	昭四九・四	小松市安宅町ヨ三七
成谷　和宏	主事	昭五〇・四	金沢市額新町二丁目七八
角田外茂男	技能員	昭二三・四	松任市馬場町ロ一七の二
美谷　勇	学務員	昭四七・四	〃　成町六四二

氏名	担当	着任年月	現住所
海野外茂次	技能員	昭四三・四	石川郡美川町長屋町イの一
木島　稚子	学務員	昭四七・四	松任市徳丸町六二三
小山　与一	技師	昭四七・四	石川郡野々市町本町四丁目一七の八
渡辺　純子	技能員	昭四九・一〇	金沢市専光寺タ二四
禁谷喜代子	図書事務	昭四八・六	松任市東町一番町三一
武田　和子	学務補助	昭四五・一〇	〃　倉光町一八一
北田かず子	購買部補助	昭四六・九	〃　笠間町
渡辺　甫	校医	昭四六・四	〃　村井町
斉川　登	学校歯科医	昭四三・四	〃　八日市町二一
青木　信孝	学校薬剤師	昭三六・四	〃　東一番丁二


開校一〇〇年記念事業委員会
名誉会長　安田　陞明
名誉副会長　杉山栄太郎、橋本　龍太
名誉委員長　窪田　武徳
委員長　橋本　助男
副委員長　寺田　一郎　外二五名
開校一〇〇年記念事業企画委員会
委員長　窪田　武徳
副委員長　橋本　龍太、橋本　助男
寺田　一郎
委員　中野　義隆　外一四八名
開校一〇〇年記念事業実行委員会
委員長　寺田　一郎
副委員長　橋本　龍太、石堂　直次
吉村　弘、本田　尚子
高野勘兵衛
委員　西　要一　外一四五名
開校一〇〇年記念事業事務局
局長　窪田　武徳
参事　橋本　龍太
副局長　長谷川　昭
喜多　重正
総務　喜多
庶務会計　二口
年史編集部　山崎
記念式典部　藤田
同窓会名簿部　宮田
特別事業部　西
募金部　喜多
専門委員会
一〇〇年史専門委員会
委員長　西　要一
副委員長　福田与盛、松井芳夫、宮岸喜美子、平野外喜平、蒔田達雄
中島康雄、高野勘兵衛
委員　滝元清秀　外一二一名
記念式典専内委員会
委員長　若林春次
副委員長　山岸賢一、尾山　睦、飯田照雄、林　与夫、北村淑子、
高本　巣、松尾憲章
委員　安原亀次　外八三名
同窓会名簿専門委員会
委員長　鍋島定明
副委員長　中野義雄、吉本道子、西川文男、西田　正、安田　亮、舛田金明
委員　大塚弘一　外一〇七名
特別事業専門委員会
委員長　浅与四忠
副委員長　林　政保、田丸午十郎、細川久米夫、永瀬幸子、西川静雄
立花武志、舛田金明
委員　松崎又五郎　外九五名
募金専門委員会
委員長　北場利正
副委員長　磯野義男、本田尚子、正田則行、前田量平、大西芳子、
舛田金明、崎川和夫、小鍛治長次郎、石堂直次、中野茂信
委員　高崎修三　外一四九名
総務委員会
委員長　石田吉三郎
副委員長　橋本　龍太
委員　駒谷　正俊　外一六名

開校百年記念事業委員会規約

第一章　名称及び事務所

第一条　本会は石川県立松任農業高等学校開校百年記念事業委員会と称する。

第二条　本会の事務所は石川県立松任農業高等学校内に置く。

第二章　目的及び事業

第三条　本会は石川県立松任農業高等学校開校百年記念事業を企画し、その実現をはかることを目的とする。

第四条　本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

一　石川県立松任農業高等学校百年史の編集と発刊。

二　石川県立松任農業高等学校六星同窓会会員名簿の編集と発刊。

三　石川県立松任農業高等学校開校百年記念式典の挙行。

四　石川県立松任農業高等学校開校百年記念式典の付帯事業や特別事業の実現。

五　その他本会の目的達成のための必要な事業。

第三章　会　員

第五条　本会の会員は石川県立松任農業高等学校六星同窓会会員、石川県立松任農業高等学校育友会会員、石川県立松任農業高等学校教職員及び本会の趣旨に賛同する個人ならびに団体をもって構成する。

第四章　役　員

第六条　本会には下記の役員を置く。

委員長一名、副委員長若干名。委員若干名、幹事若干名、会計監査二名。

第七条　本会の役員の任務は下記のとおりとする。

一　委員長　本会を代表し、一切の会務を総理する。

二　副委員長　委員長を補佐し委員長事故あるときはこれを代行する。

三　委　員　各種委員会（企画委員会、実行委員会、総務委員会、専門委員会）を編成し重要事項の決定や事業の実行推進の母体となる。

四　幹　事　事務局を構成し各種委員会より委任された会務を執行する。

五　会計監査　本会の会計を監査する。

第八条　役員は企画委員会において選出し、任期は本会の目的達成時までとする。

第九条　本会には、名誉会長、名誉副会長（二名）名誉委員長を置き、それぞれ安田参議院議員、杉山副知事、橋本前学校長、窪田学校長を推す。

第一〇条　本会に顧問若干名を置く。顧問は本会の目的を達成するための諮問に応ずる。

第五章　会　議

第一一条　本会の会議は企画委員会、実行委員会、総務委員会、専門委員会とする。

一　企画委員会は本会基本方針の審議と最終決定を行なう。

二　実行委員会は本会運営全般の審議と決定を行なう。

三　総務委員会は、それぞれの専門委員会からの提案について連絡調整を図かるとともに全般の円滑な運

営にあたる。

四　専門委員会は、それぞれの部門に関する実施要領案の作成にあたる。

第一二条　本会の会議は委員長がこれを召集し司会する。

第一三条　会議の決議は出席者の多数決による。

第六章　会　計

第一四条　本会の経費は関係団体の協力金、寄付金その他の収入をもって充てる。

第一五条　本会の会計は、記念事業開始時より目的達成時までとする。

付　則

○本規約は、昭和四八年七月二八日より施行する。

○本規約は、昭和五〇年四月一六日一部改正する。

沿革史年表

年号	年	学校沿革	社会の動き
明治	5	五月、金沢区に「金沢区方開拓所」を設置。	学制発布。新橋横浜間鉄道開通。金沢県七尾県を併合し石川県とす。県庁を美川におく。
	6	五月、「金沢勧業試験所」と改称。	地租改正。徴兵令を布告。県庁を金沢に移す。
	7	八月、金沢区上柿木畠の旧壮猶館跡に移転。	民選議院設立建白。台湾事件。石川師範学校創立。
	8	三月、「金沢区方勧業場」と改称。	津田仙、学農社を創立。小学生満六歳～一四歳迄と定める。歩兵七連隊金沢に設置。松任郵便局設置。
	9	四月、同場内において同場職員による農業講話を始める。十二月四日、同場を石川県に移管し「石川県勧業所」と改称し、農学科を設け農業実習の技術指導者を養成する機関とする。本県一一等出仕、吉崎宇一が総轄となる。これをもって本校の創始とする。	男二〇歳を成年と定める。石川県啓明学校創設（中学教員を養成）。
	10	一月二五日、同場内に「石川県農業講習所」を設立し、修業年限は上等科二ヶ年、下等科一ヶ年とし生徒を募集する。旧金沢藩厩跡（七、八〇〇歩）を付属栽培所とし、育苗、養蚕、養蜂、牛馬の取り扱いの理論と実習を教授。	西南の役。博愛社創設。東京開成学校・東京医学校を合併し「東京大学」を創設。
	11	九月、明治天皇御巡幸の際、果実、蔬菜を天覧に供す。	駒場農学校開校。内務省勧農局に紅茶製場を設ける。

年号	年	学校沿革	社会の動き
明治	12	九月、下等科を廃し、すべて修業年限を二年（正則）と定め、別に変則現業科を設立し、実地研究を希望するものには、修業年限は定めず一年または半年終了とする。一七日、開所式を挙行。	学制を廃し教育令を制定。府県令公布。石川県議会開く。松任にコレラ流行一七一名死亡。
	13	四月、石川郡専光寺浜に蘆粟（砂糖もろこし）栽培地二町歩、石川郡蔵屋敷跡に実習地を設ける。六月、師範学校（金沢仙石町）の地所三反歩を借用し、実習地にあてる。七月、初めて所長をおき、渡辺譲三郎所長となる。	刑法公布。身分上の差別なくなる。
	14	一〇月、農業生徒（正則）の修業年限を三ヶ年とする。	政党内閣制を建議。手取川洪水。府県立および町村立書籍館設置廃止規則制定。
	15	初めて水田を設ける。 八月、正則（修業年限三ヶ年）は本科二ヶ年（第五学級より第二学級）、専修科一ヶ年（第一級）とし、専修科は養蚕、製糖、農芸、農用製造化学、牧畜の内、一科を履修。変則（修業年限二ヶ年）生徒は育苗、養蚕、製糖、栽培の四科のうち一～二科を履修することとする。	自動車発明。石川郡役所オカリヤへ移転。宮内省編集の「幼学綱要」を、文部卿および各参議に下賜。大隈重信ら立憲改進党結成。
	16	文部省より教授品下賜。	天気予報開始、「農学校通則」を制定。
	17	二月、県内公立小学校教員第一回農業講習会開催。	地租条例制定。「文部省報告」廃刊。
	18	宮内省及び農商務省より教授資料下賜。	府県制公布。内閣官制なる。手取川洪水。文部省局課を改置。「矢田部良吉・外山正一ら「ローマ字会」を創立。森有礼、初代文部大臣に就任。文部省局課を改置。種痘規則を制定。

明治						
19	20	21	22	23	24	25
三月一九日、石川県農学校と改称。四月一日羽咋郡東土田村字火打谷串田野に移転。予定校舎敷地二、〇〇〇坪、実習平地一一二、〇〇〇歩。山地二〇、〇〇〇歩。羽咋郡柳田村に水田一町八反歩を借用し、出作実習地とする。六月、吉崎宇一本校取締りとなる。折田文部省学務局長、芳川内務次官来校視察。七月、校舎及び教職員生徒両寄宿舎落成。本年開墾した実習地二四、九一四歩。	五月、岩村本県知事来校視察。一一月、文部大臣森有礼、文部諸官吏、本県書記官郷田兼徳、学務課長檜垣直右等臨校視察。一二月、第一号館落成。	規則を改正し、修業年限を三ケ年とし中等学校の認定を受ける。	一〇月、修業年限を三年として学課の程度を進め、実習時間を制定し、文部省より中学校課程以上のものたるを認定される。別に耕種、養蚕の二撰科をおき、修業年限は甲を一ケ年、乙を一期間として家業を授く。	八月、獣医科別科規則制定（修業年限二ケ年）。開業獣医師の養成を目的とする。本県知事船越衛右臨校視察。一二月、文部視学官檜垣直右臨校視察。	一月、勅語を下賜せられ奉読式を挙行する。三月、二又川より本校農場に至る水路の建設に着工し、六月完成する。六月、御真影拝戴式。九月、岩山本県知事来校巡視。	八月、農商務省農務局次長佐藤秀顕来校巡視。一〇月、文部視学官檜垣直右来校。一一月、大日本農会幹事池田謙蔵来校幻灯会を開く。
小学校令公布。帝国大学令公布。東経一三五度子午線時を日本標準時とする。東京帝大設立。地方官制を公示。「農学校通則」を廃止。東京農林学校設置（駒場農学校・東京山林学校を合併）。	農学会創立。金沢に第四高等学校創立。学位令公布。県模範農場において耕地整理実施。	市町村制公布。「君が代」を国歌と定める。高田久兵衛耕地整理着工。東京朝日新聞創刊。	帝国憲法公布。衆議院議員選挙法公布。土地台帳規則を公布。東海道本線全通。金沢市制。	教育勅語発布。尋常小学校義務設置なる。帝国議会開く。北陸に米騒動。東京農林学校を帝国大学に合併し、農科大学を設置。郡に郡視学、市町村に学務委員を置く。	府県制。郡制実施。教育勅語の解説書「教育術義」を刊行。日本鉄道青森―上野全通。手取川洪水。野々市大火。	横井時敬種籾塩水選法案出。第二次伊藤博文内閣成立。

年号	年	学校沿革	社会の動き
明治	26	一〇月、三間正弘本県知事本校巡視。	実業補習学校規程公布。農商務省農事試験場を東京西ヶ原に設置（石川県も七月設置）。北国新聞発刊。
	27	九月、物部省参事官寺田勇吉、本県知事三間正弘本校巡視。	日清戦争起こる。高等学校令公布。実業補習学校の教科用図書について定める。
	28	三月、富山県知事荒川邦蔵、本県松平康保と共に本校参観。篤農家を招き蘭草栽培方を教授させる。	下関条約。豊田佐吉自動織機発明。札幌農学校、文部省の直轄となる。
	29	三月、規則を改正し、獣医学別科を獣医学科（定員五〇名）とし修業年限を農業科（一〇〇名）と同じく三ヶ年とした。また選科は養蚕と耕種の二科とし修業年限を一ヶ年とした。四月、能美郡小松町字小馬出町に移転し、公会堂をもって校舎とする。	煙草専売となる。第一回オリンピック開催（アテネ）。無線電信発明。手取川大洪水。ウンカ被害甚大（坪四合）。農商務省所管の蚕業試験場を蚕業講習所と改称。大日本教育会改組して帝国教育会と改称。
	30	教員会議規則制定。一一月、撰科を廃し短期の農事講習科を設け、各郡に臨時教場を設け、出張教授を行なう。	金貨体位制。京都帝大創立。「師範教育令」を公布。福井―小松汽車開通。水田馬耕始まる。学校教員の政論禁止に関する訓令。「学校清潔方法」の標準を定める。
	31	二月、本年の実習地三町七反三歩とする。御真影を県に奉安。三月学校医設定の訓令を受ける。火打谷付属地事務は県の直轄となる。四月、初めて小林文泰学校医が嘱託される。家禽舎豚舎手術棟を新築する。五月、畜舎当番生心得五ヶ条、生徒心得細則、寄宿舎規則制定。	小松―高岡汽車開通。松任駅設置。手取川大洪水。犬養毅文部大臣に就任。
	32	一月、生徒の喫煙を禁ずる旨知事より訓令。二月、実業学校令公布。（勅令第二九号）。四月、農学校規則改正（県令第二五号）。補習科を創設し主として普通学を授け、上級農学校志望者の便にし	耕地整理法公布。東京―大阪電話開通。「中学校編制及設置規則」を制定。「図書館令」公布。農業学校規程を制定。初めて全国農業

明治					明治
	33	34	35	36	37
修業年限二年以内とする。六月、寄宿舎を一ヶ所増設し、公認下宿を廃止す。端艇一艘寄贈せらる。実業学校令公布により、実習時数を減じ実習地若干を民間貸与す。また体操科加設され、実習地の内一、二〇〇坪を体操場に充当す。	三月、生徒定員農学科（一五〇名）、獣医科（五〇名）を改正し、両学科を通して二五〇名とする。織田校長を追慕し、生徒八名留任に関する陳情書を知事に提出し、同盟休校をする。七月、総額五万円を三ヶ年に於いて支出し、松任町に校舎を新築する旨、臨時県議会において決定。	五月二日、石川県立農学校と改称（県告示一四六号）。	三月、新校舎落成。一三日から二四日まで松任町の新校舎へ移転。実習地七、〇〇〇坪、運動場一、二〇〇坪は付近民より借用す。一〇月、同窓生発起人となり「同窓唯心会」設立し、会誌創刊号発刊。	校舎新築落成式挙行。	三月、農業講習科を廃す。四月、本校規則（県令第二七号）を定める。農科、獣医科をおき修業年限は三ヶ年とし、定員両科通して三〇〇名とする。本校に補習科（二年）を置き、高等の農学校に入ろうとする者のため普通科目を補習せしむることありとした。創立記念日を明治一二年石川県農業講習所開所式の日を記念し、九月一七日とする。
学校長会議が開かれる。	北清事変、産業組合法公布。未成年者喫煙禁止。金沢に電灯つく。学校生徒の喫煙を禁止。	八幡製鉄所操業開始。金沢医専校創立。大日本農会付属東京農学校を東京高等農学校と改称。	日英同盟、平民新聞発刊。「中学校教授要目」を制定。シベリア鉄道開通。夜学奨励。「実業学校教員養成規定」を制定。教科書疑獄事件起こる。	小学校国定教科書制度。東京市内電車開通。馬場町大火（六四戸全焼）実業学校令を改正。専門学校令を公布。	日露戦争始まる。米国セントルイス万国博覧会開会。金融界混乱。松金馬車鉄道しかる（馬一九頭、馬車一四台）。農業学校規程を改正。学校生徒徴兵猶予に関し、特典乱用者の取り締りにつき訓令。

年号	年	学校沿革	社会の動き
明治	38	六月、文部省視学官中川謙二郎来校。田中代議士来校満韓視察談。	日本海海戦。ポーツマス条約日露講和なる。硫安硫曹使用始まる。文部省戦後教育の方針について訓令。
	39		樺太北緯五〇度以南受領。南満州鉄道KK設立。学生の思想風紀につき訓令。輸出米検査所松任にできる。
	40	三月、本校出身戦死者記念碑除幕式挙行。四月、暁烏敏師講演。移転五周年記念祝賀会を行なう。	小学校六年制なる。足尾銅山ストライキ。国語調査委員会「送仮名法」刊行。経済恐慌。平民新聞発刊。
	41		戊申詔書発布。石川新聞発刊。文部省「戊申詔書」について訓令。
	42	五月、清国教育視察団来校。六月、法制局参事官柳田国男来校。日本全国農事会幹事牛村一来校。九月、東宮殿下本校へ行啓。	新聞紙法公布。関西大地震。石川郡図書館完成。文部省、直轄学校に対し講演会・記念会・運動会等の指導監督につき訓令。文部省、学校施設に関し地方の実情を考慮し実用を主とするよう訓令。
	43	一月、大日本農会付属東京高等学校長横井時敬博士来校講演。七月李家知事来校。校旗樹立式を行なう。	韓国合併。日英博覧会（ロンドン）。帝国農会創立。帝国在郷軍人会創立。白瀬中尉ら南極探険隊出発。文部省高等小学校の実業科目（農業・商業）を重視すべきことについて訓令。
	44		工場法公布。米五斗俵を四斗俵に改める。松任で国内産業博覧会開く。甲種程度の実業学校の修身教授要目を制定。

正	元	45	七月三〇日、明治天皇崩御、三一日奉悼式を挙ぐ。
	2		四月、皇太后陛下崩御につき奉悼式。五月、朝鮮内地視察団六三名来校。六月、熊谷本県知事来校。
	3		一〇月、御真影拝戴式。一二月、御大典跡拝観のため、職員生徒一同京都へ修学旅行。
	4		皇后陛下御真影奉戴式。六月、福島陸軍大将本校にて講演会（本校および近隣の学校生徒、官吏来聴）。
	5		三月、獣医科を廃す。六月、長尾文部省督学官来校視察。
	6		四月、師範学校卒業者を修業年限三年とする。本校付設石川県立農業教員養成所開所式挙行。
	7		四月、本校付設農業補習学校開校式挙行。石川県農業教員養成所は改正され、養成期間八ケ月を一ケ年になった。
	8		八月、別科講習所を創設し、随時各郡に短期の臨時教室を設け、実業科巡回講習をなす。教育勅語御下賜三〇年記念式挙行。
大	9		

第五回オリンピック日本初参加。清滅び中華民国となる。堆肥の奨励始まる。	
ブラジル移民始まる。稲与三次郎導入。「学校体操教授要目」を制定。	
第一次世界大戦起こる。パナマ運河開通。金石電車開通。実業教育費国庫補助法施行規則改正。	
水稲正条植枠始まる。「実業学校教員養成規程」を改正。	
簡易保険始まる。松金電車開通。文部省内に学校衛生会を設置。	
ロシア革命。ソビエト政府発足。金輸出禁止。暮れから金沢大雪。臨時教育会議、兵式体操の振興に関し、内閣総理大臣に建議。	
大学令高等学校令公布。第一次大戦終結。中橋徳五郎文部大臣に就任。各地米騒動（米一石五〇円）	
国際連盟成立。郵便飛行開通。金沢市電、尾小屋鉄道開通。文部省官制を改正し、「実業学務局」を設置。	
東京上野で初のメーデー。戦後大恐慌。足踏み脱穀機入る。「文部時報」第一号発行。「実業学校令」を改正。高等学校の学生始期を四月と改める。	

年号	年	学校沿革	社会の動き
大正	10	四月、石川県立農業教員養成所を石川県立実業補習学校教員養成所と改称。県主催、産業組合講習会開催。	皇太子殿下御外遊。ワシントン会議。「農業学校規程」を改正(甲種・乙種の区別廃止)。
	11	三月、石川県立農業補習学校を廃す。学制発布五〇年記念式挙行。穀物検査講習会開催。	日本農民組合結成。未成年者禁酒法公布。国語調査会、当用漢字約二、〇〇〇種を決定。能美電気鉄道会社設立。学制頒布五〇年記念式典挙行。
	12	四月、農科第一部(尋常五年制)と農科第二部(高卒三年制)となし、林科(尋常三年制)を置く。	郡制廃止。関東大震災。松任全戸に電灯つく。帝国連合教育会義務教育八年案を決定。
	13		学校配属将校令公布。大日本青年団発足。実業学校に専門学校入学資格を認める。
	14	七月、倉橋尚陸軍歩兵大尉配属将校として着任。九月一三日、創立五〇周年記念式典挙行。会誌記念号を発刊。六月、同盟休校が起った。	普通選挙法公布。東京放送局開始。文政審議会「学校における軍事教育実施案」を答申。テレビ発明。

年号	年	学校沿革	女実・高女沿革	社会の動き
大正	12		三月二三日、実業補習学校令に基づく石川郡松任女子実業学校設立認可さる。四月、松任女子実業学校開校する。修業年限前期二年、後期二年、定員二〇〇名とする。四月二〇日、開校式挙行。	
大正	13	四月、学校規制一部変更、実業学校令及二種以上の実業学科を置く学校の学程により、修業年限四ケ年とし、農業科、商業科を置く。		

大正		昭和			
14	15	元	2	3	4
三月、松任女子実業学校第一回卒業式。六月、学校規則変更、研究生の併置の件認可される。		四月、石川県立松任農学校と改称し、修業年限五年制の林科を廃し、三年制（高卒）を置く。	三月、唯心同窓会を石川県立松任農学校同窓会と改称。		
			三月、学校に属した土地、校舎、備品を県に寄付し、県に移管の件認可される。四月、高等女学校令による高等女学校を設立し、石川県立松任高等女学校と称する。なお女子実業学校は在校生が卒業するまで存続する。修業年限四ケ年、各学年二学級、定員四〇〇名。四月二六日開校式挙行。この日を創立記念日と定める。一一月、第一回家政講習会開催、年二回にて第一九回迄続く。	三月、御大典記念第一回音楽会開催される。以後毎年一一月に行なわれる。御大典跡拝観修学旅行（一、二年）出発。	校訓を制定する。
労働農民党結成。明治神宮体育会始まる。大雪。金沢彦三大火（七四七戸）。「学校体操教授要目」を全面改正。産業組合中央会の産業組合学校設立認可。	東京に地下鉄開通。金融恐慌。中学校・高等女学校、高等学校等の入学試験制度を改正（入試準備の弊害除去のため内申書重視を指示）。		第一回普通選挙。蔣介石中国を統一。ラジオ体操放送開始。松任プール建設。文部省、思想問題に関して訓令。	東京―大阪旅客飛行開始。清水トンネル開通。	

年号	年	学校沿革	女実・高女沿革	社会の動き
昭和	5		三月女子実業学校第六回卒業式挙行。これをもって女子実業学校は自然廃校となる。七月、校歌を制定する。	大日本連合婦人会結成。ロンドン軍縮会議。金沢放送局放送開始。稲平六モチ、動力籾すり機導入。日本農学会創立。農業学校規程を改正（高等小学校卒入学二年制の実業学校を認め、また、学科目、教授時数を改正）。
	6	四月、農科第一部、第二部を農科第一種、第二種と改称する。	二月、生徒佩用徽章を制定する。三月、同窓会「清輝会」発会式。四月、高女一学年を一学級宛募集する。	満州事変起り満州国誕生。金沢で産業と観光博開催。米価暴落（石一六円一七銭）「実業学校公民科教授要目」を制定。
	7	四月、林科を農林科と改称する。石川県立実業補習学校教員養成所の修業年限を三年とし、農学校卒業を入学資格とする。	七月、福井県における陸軍大演習に今上陛下統監として御台臨。生徒代表二五名御親閲の栄に浴する	上海事変。五・一五事件（犬養首相暗殺）小松大火。農漁村の欠食児童二〇万突破。国際連盟を脱退。ヒットラー内閣成立（独）文部省郷土教育講習会を開催。
	8	四月、鹿島郡徳田村に修業年限一年の専修科を置く。	四月、同窓会により慈光幼稚園（保育年限二ケ年）を設立する。七月一一日手取川水害の後、四年生橘小学校へ晒掃作業に出動。	満州国帝政となる。手取川大洪水（九七人死）丹那トンネル全通。北海道十勝農学校塾風教育を開始。三上孝次貴族院で中等教育における英語の教授時数削減論展開。
	9	四月、石川県立実業補習学校教員養成所を石川県立青年学校教員養成所と改称する。九月一七日、創立六〇周年記念式典を挙行する。	校舎補修工事、家庭工作室の模様替工事完了。	青年学校令公布。石川護国神社建つ。動力脱穀機導入。時報サイレン。中学校入学考査に関し試験問題は小学校教科書の範囲を越えないよう通達。
	10			

昭和						
11	12	13	14	15	16	17
一〇月、徳田専修科は、拓務省満州農業移民訓練所に指定されその入所式を行なう。		四月、師範学校卒業者を一年修業する石川県立臨時教員養成所を併置する。		四月、修業年限三年（高卒）の獣医科を設く。徳田村の専修科は七尾農学校となる。	四月、獣医科を獣医畜産科と改称。	
四月、高女創立一〇周年記念式挙行。一〇月、校旗樹立式を挙行。	一月、昼食時副食物配給開始。十二月、南京陥落祝賀旗行列。	四月、国旗掲揚柱を設置する。七月、石川県青少年勤労報国隊結成。隊旗受領。八月、白衣縫製、三二〇枚九師団へ納品。	四月、募集定員を増加し、二学級編成とする。	二月、紀元二千六百年記念奉祝街頭行進、以下年度内に記念行事を種々行う。	五月、傷痍軍人病衣一五四枚縫製、石川療養所へ納入。九月、報国隊、警備団、学校防衛団、報国隊自転車隊をそれぞれ編成。	四月、全学年を中隊、小隊編成とする。学校、看護婦報国団で雇傭。軍衣縫製。九月、学校農場稲刈、米三俵供出する。
二・二六事件（陸軍将校首相官邸を占領）「学校体操教授要目」を改正。	文化勲章制定。日華事変おこる。「学校身体検査規程」を制定。国語のローマ字綴方の統一に関し内閣訓令。「実業学校教授要目」を制定。ヘレンケラー女史金沢へ来る。	国家総動員法公布。メーデ禁止。金沢飛行場開設。大日本農民組合結成。中等学校に支那語を正科として開設。	第二次世界大戦始まる。米穀配給統制法公布。農商務省を設置。七尾市制。	紀元二千六百年式典。米の供出制。大雪。中等学校教科書の五種選定。産業界の要請に応じ実業学校卒業者の上級進学制限措置を訓令。	国民学校令公布。太平洋戦争起る。関門トンネル開通。	学徒出動命令出る。日独伊軍事協定調印。衣料切符制となる。松任に保健所できる。一〇人以上の子持ちに表彰。金沢医科大学に付属結核研究所を設置。

年号	学校沿革	女実・高女沿革	社会の動き
昭和18	四月、修業年限三年（高卒）の拓殖科を設く。	蚊帳三〇〇帳修理。九月、体力章検定、特別種目（二四粁行軍）実施。一二月、一八年度卒業生による勤労挺身隊結成。	国民服制公布。文部省に民族研究所を設置。「中等学校令」を公布。文部省総合防空訓練に際し、学校報国隊の出動に関して通達。
19	四月、石川県立青年学校教員養成所は青年師範学校となり、河北郡津幡町に移転。	三月、鈴鹿海軍工敞挺身隊出発。松任工機部学徒隊作業に従事。朝日航空学徒隊福岡工場へ配属。五月、安原陸軍々用地三、〇〇〇坪開墾さつま芋植え付け。校地空閑地、国道松並木下に野菜、大豆等栽培。十月、学校軍需工場学徒隊生産作業開始。十一月、戦時校訓制定。	学童疎開実施。農業団体法公布。金沢高等師範学校創立。小松―金沢バス開通。国民学校教育の戦時非常措置について通達。
20	四月、修業年限二年の女子農業科を設ける。九月一七日、創立七〇周年記念式典を挙行する。一〇月、上級生が同盟休校する。	四月、防空壕構築作業開始。六月戦時委託生六四名転入。八月、大東亜戦争終結の聖旨伝達。戦時施設の解消作業を行なう。	広島、長崎に原爆投下。国際連合成立。ポツダム宣言受諾無条件降伏。学校放送再開。日本社会党成立。県知事平井章、中等学校長緊急会議を招集し、終戦に処する教育の方法を指示。文部省「終戦に伴う教科用図書取扱方に関する件」を通達。
21	四月、拓殖科を廃し、在学生を農業科に編入させる。	七月、芋、カボチャ畑を運動場に復元。	日本国憲法公布。メーデー復活。農地改革始まる。婦人参政始まる。フィリッピン独立宣言。石川軍政隊が事務を開始。

年号	昭和			昭和	
年	22	23	24	23	24
学校沿革	四月、六、三、三制実施により併設中学二、三年、高女四、五年制の編成なる。四月二六日、創立二〇周年記念式挙行。	四月、併設中学三年、高校一、二、三年編成。四月、修学旅行が復活し、二、三年生関西旅行に出発。	高女第一九回卒業式挙行。これをもって高女自然廃校となる。	四月、学制改革により、石川県立松任農学校校舎を農業部とし、石川県立松任高等女学校を普通部とし、それぞれ、農業・普通の課程をおく。五年制の第五学年及び三年制の第三学年中より希望により、高等学校第三学年に編入、同時に併設中学の制度を置く。九月、定時制の課程を設け、普通部に普通課程、農業部に農業課程を、石川郡美川町に水産課程をおく。	四月、学区制実施により、普通部を農業部校舎に統合して男女共学の総合制高等学校となる。通常課程には普通課程、農業に関する課程及び商業に関する課程を置き第一学年のみ分校（旧普通部）にて授業を行う。定時制水産科を廃止し普通課程とし美川中学で授業を行なう。一〇月、農業部の改装完了により、分校を廃し第一学年を
社会の動き	教育基本法、学校教育法、児童福祉法、労働基準法公布。六・三制実施。新制中学校誕生。インド独立。第二回国体水泳大会松任で開催。	教育委員会法公布。世界人権宣言。国民の祝日定める。福井大地震。県体育協会発足、県議会教育民生委員会で新制高校設置基準と設置学校数決定、県下中等学校は一応全部が転換することになった。県では、新制高校を県立二〇校とし、男女共学制を実施することに決定。（三月）	国立新制大学発足。湯川秀樹ノーベル物理賞。第一回県体開く。インドネシア独立。法隆寺金堂壁画焼失。	生活の苦から、県下新制高校の一年間の退学者数は千名に達す。石川県教育委員会発足。小松実高工業部生徒校長排斥を唱えて同盟休校。一部男女共学（金沢三高・飯田高）で県下二〇高校発足。松任保健所設置。	県教組は二月一日以降、日宿直を拒絶することに決定。衆議院議員選挙実施。金沢大学初の入学者氏名を発表。県立高校入学の無試験制を明年より試験制とすることに決定。松任家畜衛生指導所設置。石川軍政隊民事部長マ

年号	年	学校沿革	社会の動き
昭和	24	本校舎に収容する。一〇月一七日を石川県立松任高等学校創立記念日と定める。	ギー少佐離任。
	25	三月、石川県立松任高等学校同窓会を結成する。八月、石川県教育委員会で松任・小松・宇出津などの実業高校独立話題となる。	警察予備隊発足。朝鮮動乱始まる。金閣寺全焼。ジェーン台風。満年令実施。県立高校の入試に新制度の採用を決定。
	26		対日講和条約調印、児童憲章制定。民間放送始まる。マッカーサ解任。ラジオ体操復活。県立ろう学校の旧松任高女移転案が生じる。
	27	六月、文部省指定産業教育指定校となる。農業に関する課程に農業・農林工学・農芸化学の三課程を設ける。	地方教育委員会発足。水稲手取早生新六号導入。石川県産業教育審議会規則公布。
	28	四月、石川県立松任高等学校の生徒募集を停止する。石川県立松任農業高等学校が設立され、農業に関する課程に、農業科、農林工学科、農芸化学科、農業経済科の四課程および家庭に関する課程をおく。七月一日、石川県立松任農業高等学校開校記念式を行ない、この日を創立記念日とする。八月一七日、石川県立松任農学校同窓会石川県立松任高等女学校清輝同窓会、および石川県立松任高等学校同窓会の三者を統合して六星同窓会を結成する。	町村合併促進法施行、テレビ放送始まる。スターリン首相没（ソ）県教委、県下公立高校の産業教育の施設・設備の実態発表。政府内灘試射場の永久使用を通達。県、第一回町村合併基本計画案を発表。柳田国男が来沢して「民族学と国語教育」について講演。
	29	四月、石川県立小松実業高等校学校農業部廃止により、在校生八〇名、本校に転入する。修業年限二年の農業専攻科を設ける。	鳩山内閣。松金電車廃止。珠洲市制。安田町大火（一三六戸焼）。台風十四号被害大。全高校に職業指導主事を設置。
	30	五月、畜舎、乳加工室、羊舎、温室、製図室等竣工。一一月創立八〇周年記念式典挙行。一二月寄宿舎北星寮移動改築完了。	第一回原水爆禁止世界大会。保守、革新二大政党政治始まる。全国水稲大豊作。

昭和				
31	32	33	34	35
四月文部省指定産業教育指定校となる。一二月、アメリカよりF、F、Aのテニー博士他二名来校。	四月、農業に関する課程のうち、農林工学、農芸化学の二課程を改編し、農林、農業土木及び農産加工の三課程とする。募集定員を変更し、農業科八〇名、農林・農業土木科・農業加工科・農業経済科は各々四〇名、更に家庭に関する課程を一三五名とする。七月、校舎改築に関し、大蔵省係官本校視察。一〇月、生徒の下駄履禁止。一一月校舎改築期成同盟会結成大会。	七月、中谷教育長他五名と現行設置課程の改廃を協議。一一月、松高祭に併せて、高校十周年記念式挙行。	四月、農業専攻科の修業年限を一年に改める。一二月二四日、校舎改築の地鎮祭を行なう。	一月、校舎改築第一期工事着手。一二月二四日新館普通教室一棟落成。
日ソ国交回復。国連加盟決定。柳田高校を同農業高校と改称することに決定。	日本南極観測隊基地設置。内灘試射場返還が正式に通告。ICBM成功（ソ）。人工衛生第一号スプートニク第一号打上げ成功。（ソ）松任役場庁舎完成。県教委勤評実施を表明。NHK金沢テレビ正式放送開始。	文部省小中学校の道徳教育を義務化。石川県立高等学校十周年記念式。人工衛星エクスプローラ第一号打上成功げ（米）。MROテレビ開局。東京タワー完成。修学旅行の基準を制定。白山で第二回全国高校登山大会開催。	メートル法実施。皇太子婚儀挙行。伊勢湾台風。月ロケット成功（ソ）。金沢―東京、大阪即時通話。実業高校設備充実五ヶ年計画を発表（八億余円）。石川県青少年保護育成条例公布。松任スポーツセンターできる。	日米新安保条約調印。三井・三池ロックアウト。全学連国会構内突入。NHK八局カラー放送。松任―美川復線化。北陸に一三年ぶり大雪。

年号	学校沿革	社会の動き
昭和36年	四月、家庭に関する課程の募集人員を九〇名とする。	県教委、三八対策の構想発表（新設四校、増設九校）県下公立高校入試、戦後最低の競争率（平均一・三五倍）ライシャワー駐日大使着任。初の人工衛星船ヴォストーク一号打上げ。高等専門学校設置基準公布。米ソ軍縮共同宣言。室戸台風四〇メートル。農業基本法公布。
37	一月五日、松任町三浦地内に移転新築を決定し、新校舎の起工式を行なう。	石川県立学校管理規則公布。ラオス停戦実現する。高校全入問題県協議会発足。白山国立公園昇格。北陸トンネル開通。
38	四月、農業の体質改善に伴ない農業経済科の募集を停止し、新たに畜産科を設ける。また農産加工科を農産製造科と改称。家庭科二、三年生を新設松任高等学校へ移籍する。全募集人員は全日制（農業科、畜産科、農林科、農産製造科、農業土木科、各五〇名）、定時制（農業科五〇名）とする。	三井、三池鉱ガス大爆発（四五八名死亡）。ケネディ暗殺。米ソ英三国部分核停止条約に調印。通信衛星による日米テレビ中継成功。北陸本線福井―金沢電化完成。大豪雪で一八一センチ、小中一三八休校（1／15～1／27）文部省、警察庁青少年非行防止のための学校と警察の連絡強化を各教委へ通達。
39	五月二六日、石川郡松任町字三浦町に新校舎落成、移転を行なう。一〇月、本校グランドにて石川県畜産共進会開催。一一月一二日、校舎新築落成式を行なう。吉野校長欧米教育事情視察。	東海道新幹線営業始める。第一八回東京オリンピック開く。佐藤内閣発足。中国原爆実験成功。米原子力潜水艦佐世保入港。国鉄能登線全線開通。
40	五月、国旗掲揚塔完成。第一期造園工事（中庭芝生）完了。六月、厚沢文部省視学官来校。	石川県立高等学校の施設等校舎の鉄筋率70％突破。米北ベトナム爆撃開始。朝永振一郎ノーベル物理学賞。

昭和				
41	42	43	44	45
一月、九〇周年記念事業実行委員会発足。四月、農林科の募集を停止して、新たに造園科を設け、各科定員を四五名、定時制四〇名とする。九月、水理実験室完成。一〇月一五日創立九〇周年記念式典を挙行。記念会館落成。京都大学教授柏博士を招き講演。	定時制の生徒募集を停止し、全日制各科定員を四〇名とする。農業専攻科を二年制にする。桑田良雄県教育長学校視察。田中県警本部長ら来校し交通安全教室実施。松任町木津地区に農場買収。	三月、定時制農業科廃止。大農具室完成。元農林大臣坂田英一来校講演。七月、参議院議員安田隆明来校。	三月、漬物加工実習室、造園実習室完成。一〇月、松任町木津地区に農場買収。	六月、全校生徒万国博覧会見学（吹田市千里丘）。一一月、教育委員長中野己之吉来校講演。一二月マレーシア青少年スポーツ局員本校体育クラブ活動視察。松任市木津地区に農場用地買収。実習用マイクロバス購入。
県高校問題協議会「修学旅行の標準コース」等を審議。台風一八号風速八五米新記録（宮古島）。建国記念日を二月一一日とし、政令で公布。初の「体育の日」実施。県教委はじめて教育研究奨励金制度を発表。大日川ダム完成。金沢港起工される。金沢市電廃止。	県農業教育研究会、県立七農高で開催。県教委、入試改善について「三教科入試」実施県を調査。県教委「服務義務の違反について」の文書配布。倶利伽羅バイパストンネル開通。	県教委、新年度高校整備計画（一六億円）を発表。金沢市内の県立高校生の留年（三校で一〇名）問題となる。参議院選挙で無所属の安田隆明当選。県立二高校での送、答辞問題となる。小笠原諸島日本へ復帰。日本最初の心臓移植和田博士成功。メキシコ五輪開幕。川端康成ノーベル文学賞。皇居新宮殿落成。金沢バイパス道一期工事完了。	人類初の月着陸成功（アポロ一一号）。北陸自動車道着工。	新安保条約自動延長。沖縄国政参加選挙。大阪で万国博開かれる。松任市制施行。文部省主催第一回中堅教員研修講座はじまる。

年号	年	学校沿革	社会の動き
和	46	四月、農業専攻科の募集を停止した。記念会館を県に移管し、本校図書館とする。七月、槻木慶雄教育長来校視察。九月、海上自衛隊舞鶴音楽隊来校演奏会を行う。一〇月、国際農村青年交換生と専攻科生徒座談会。本館前温室完成。	公害教育のため、小学校および中学校の学習指導要領の一部改正。農村地域工業導入促進法公布。札幌国際冬季スポーツ大会。国立能登青年の家設置。
	47	四月、教育課程にクラブ活動を加える。五月、東南アジア青少年指導者研修団来校。七月、ブラジルサンパウロ州スザノ市長ら来校講演	日中国交。札幌冬季オリンピック開催。沖縄本土復帰実現。千日ビル火災（一一八名死）北陸トンネル火災。横井庄一グァム島二八年ぶり帰国。高松塚古墳発掘。
	48	二月、ブラジル在任本校同窓森田万三（サンパウロ産業組合顧問）来校講演。四月、学習指導要領の改訂に伴ない、農産製造科を食品製造科に改める。七月、プール竣工式。一〇月、第二四回日本学校農業クラブ全国大会開催（二三～二六日）本校事務局となる。	ベトナム和平実現。金沢火力発電問題もめる。教育の思想調査事件、国会の質問で波紋（金沢）。北陸高速道金沢―小松間開通。県出身力士輪島が大関になる。
	49		国土庁スタート。フォード米大統領来日。小野田さん三〇年ぶり帰国。むつで放射線もれ事故。
昭	50	三月、金沢工業大学助教授湊谷弘柔道六段講演（世界選手権優勝） 七月、畜霊碑竣工。	ベトナム戦争終結。エリザベス英国女王訪日。沖縄海洋博開催。新幹線九州博多まで開通。中西県知事四選。松任若宮体育館完成。

文化・運動対外活動年表

学校	年号	月日	部名	事項
立川農石農	大正九	五・三〇	相撲	第六回学生相撲大会第二部優勝
	一〇	五・二九	相撲	第七回学生相撲大会第二部優勝
	一二	六・三	相撲	第九回学生相撲大会第一部・第二部優勝
	昭和三	六・二	相撲	全北陸中等学校青年団相撲大会第二位
	四	九・一五	柔道	第七回北信越五県中等学校大会第二位
		六・一六	柔道	北陸中等学校少年柔道大会優勝
	五	一一・一	弁論	第四回北陸中等学校弁論大会樫田信三久優勝
		八・四	水上競技	県下中等学校水上競技大会第三位　個人四百米　本田次雄三位　一五百米　本田次雄　二位　二百メドレ　三位（高島・朝倉・橋本・本田）三百メドレ三位（高島・朝倉・橋本）
	七	五・二九	相撲	第一八回学生相撲大会第二部第三位
		八・二三	水上競技	第五回県下中等学校水上競技大会三位　個人二百米　竹中和夫二位　四百米　竹中和夫二位　徳田文雄三位　高飛込み　北村久雄二位
	昭和八	九・四	水上競技	第二回近県中等学校水上競技大会第三位
		八・二七	水泳	中部日本水泳競技大会及第七回明治神宮体育大会水泳競技予選　個人五十米自由型　百米自由型に吉本一子優勝　二百米自由型　吉本一子第三位
高女	八	八・一二	水泳	全日本選手権水上競技大会に吉本一子出場
松任農学校	九	七・八	相撲	県下中等学校学生相撲大会優勝
	一〇	六・二	相撲	第二一回学生相撲大会団体二位　個人金田平進優勝
		七・一〇	剣道	北陸関西学校剣道大会出場
		六・四	相撲	県下青年団中等学校相撲大会優勝

松任農学校

年号	月日	部名	事項
昭和一〇	九・八	相撲	第一〇回全北陸中等学校相撲大会優勝
	一〇・二五	相撲	全国中等学校相撲大会出場
一一	六・七	相撲	第二二回学生相撲大会青年部優勝
一二	五・一〇	相撲	第一回全国中等学校選抜相撲大会個人中野　二位
	五・二三	排球	金沢地区排球連盟春季大会　二位
	七・四	水泳	中部日本男子中等学校水泳大会出場
	七・四	排球	全日本排球大会出場
	七・三一	剣道	北陸中等学校剣道大会　二位
	一〇・二	剣道	県下中等学校武道大会　三位
	一〇・二	排球	明治神宮体育大会排球県予選　二位
	一〇・二	相撲	北陸中等学校相撲大会　二位　個人中田優勝
一三	一〇・一七	排球	北陸排球選手権大会　二位
	一〇・二	相撲	第二四回学生相撲大会　二位
	五・七	排球	全日本排球大会北陸予選優勝
一四	五・二八	剣道	戦傷病勇士慰問相撲大会　二位
	六・四	相撲	県下中等学校剣道大会優勝
			第二五回学生相撲大会　二位　青年部個人東永松優勝
			全国中等学校相撲大会（大阪堺市）に優秀一六校入り
一五	一二・三	陸上	能登一宮・加賀一宮間駅伝競争優勝
		相撲	第二六回学生相撲大会　二位
		相撲	全国中等学校相撲大会予選　個人小谷内優勝
		技能	能登加賀一の宮駅伝競走大会　二位
一六	一二・七	競技	全国中等学校相撲大会　三位
		相撲	全国中等学校相撲名古屋大会　個人大山喬雄優勝
		相撲	第二八回学生相撲大会青年部優勝
一七	六・七	相撲	全国中等学校相撲名古屋大会優勝　個人赤丸義一二位　大山喬雄三位

| 総合制松任高等学校 | | |

年号	月日	部名	事項
昭和二四	一〇・二	野球	県高校秋季野球大会兼東海北陸予選準決勝進出　準決勝小松九―八松任
	一一・二〇	陸上競技	第一三回県高校駅伝大会優勝　三分一一秒
	一一・二三	陸上競技	第四回河北潟一周兼第二九回河北郡青年駅伝大会　第二位
二五	一・八	陸上競技	第一二回金沢城一周耐寒継走選手権　第二部優勝　五五分二七秒
	五・三	ソフトボール	県高校ソフトボール大会準決勝進出　準決勝　泉丘五―四松任
	五・一四	排球	第二回定時制高校バレー大会優勝　決勝　松任二―〇二水高
	五・二八	相撲	第三四回学生相撲大会優秀一六校入り 団体一六校トーナメント 一回戦　松任高四―一飯田高　二回戦　金沢高三―二松任高
	六・一一	水泳	全石川水上競技大会　百米平泳　福田優勝
	六・一七	卓球（女）	北日本卓球大会　単下田第二位
	六・一八	ソフトボール	全日本高校ソフトボール県予選　二位　決勝　泉丘一二―三松任高
	七・一	相撲	全国相撲県予選　個人吉田二位　決勝黒川（輪島）―吉田（松任）
	七・九	水泳	県水上選手権・兼全日本選手権県予選　総合三位　二百米平泳　福田優勝　二百米バタフライ　木下優勝
	八・一九	ソフトボール	第二回県体　ソフトボール　二位 決勝　泉丘九―三松任高（延長八回）
		羽球	バトミントン　二位　決勝　泉丘五―四松任高
		送球	ハンドボール　二位　決勝　堇台二―一松任高
		自転車	自転車　高校対抗実用車　二千米決勝　村松優勝 高校対抗団体追抜き団体優勝 高校対抗実用車　千米決勝　坂本優勝
	六・一一	陸上競技	陸上　一一〇米ハードル　林藤喜久四優勝
		陸上競技	県陸上競技選手権大会　一一〇米高障害　林藤喜久四優勝　八百米リレー優勝
	九・一〇	ソフトボール（女）	国体県ソフトボール予選優勝　決勝　松任高二―〇泉丘

総合制松任高等学校

二六

九・一八　ソフトボール（女）　第五回国体ソフトボール北陸代表決定戦優勝
決勝　松任高八―三雄山高（富山）

九・二四　送球　第五回国体ハンドボール大会県予選　第二位　決勝　小松四―三松任高

九・二四　水泳　近県水上競技大会　二百米平泳　福田優勝

一〇・一〇　野球　県秋季野球・兼北信越野球予選準優勝　決勝　二水一〇―六松任高

一二・二〇　羽球（女）　第二回県女子新人羽球大会　宮下第二位
決勝　志賀（二水）二―一宮下（松任）

一・一四　陸上競技　第三回県金沢城一周耐寒継走選手権　第二位

一・二七　山岳スキー　第三回県体・スキー競技・兼国体スキー予選　長距離本田優勝

二・四　羽球（男）　県バトミントン選手権準決勝進出　準決勝　桜丘四―一松任

羽球（女）　県バトミントン選手権準決勝進出　準決勝　津幡二―一松任高

五・一二　送球　第一〇回県ハンドボール大会優勝　決勝　松任三―〇羽咋高

五・一三　ソフトボール（女）　第四回県女子ソフトボール大会優勝　決勝　松任一〇―三小松

五・二〇　陸上競技　県陸上競技対抗選手権　二百米　金古優勝　八百米リレー優勝

七・一　陸上競技　第二回北陸三県高校対抗陸上競技大会　男子一一〇米中障害　林藤喜久優勝　八百米リレー（相木・高畠・林藤・金古）二位　女子砲丸投げ吉木二美為　三位

七・二五　野球　全国高校野球大会県予選準決勝進出　準決勝　泉丘九―一松任

七・二九　野球　全国高校野球大会北陸大会出場　一回戦　高岡西五―一松任高

八・一九　水泳　第三回県体
水上競技　三百米リレー優勝　百米平泳　木下優勝　二百米平泳　安田優勝
バトミントン優勝　決勝　松任五―二羽咋

羽球　相撲　相撲　三年の部　岡田個人優勝　決勝　岡田　おしだし　太田（津幡）

九・一六　ソフトボール（女）　国体ソフトボール県予選　二位　決勝　泉丘三―〇松任高

一二・一　地歴　単行本「戸津窯跡調査報告」発刊

二七

二・三　柔道　第一回柔道選手権準決勝進出
準決勝　七尾二―一松任高　個人　軽量級　大窪個人優勝

年号	月日	部名	事項
	二・一〇	山岳スキー	第四回県体・スキー競技・兼日本スキー県予選　長距離　本多敏雄優勝
			村西第二位　浮田第三位　リレー優勝（吉田・村西・浮田・本田出場）
	六・一	相撲	第三六回全国相撲（金沢）優秀三二校入りトーナメント
			一回戦　松任二―一耐久高
			二回戦　松任二―一高知商（前年度優勝校）
			三回戦　大野高二―一松任
	六・八	陸上競技	県陸上競技対抗選手権・兼全国選手権県予選　一一〇米障害　川端優勝
	六・一五	羽球（女）	県対抗バトミントン選手権
			女子単　林優勝　決勝　林（松任）二―〇吹田（泉丘）
			女子復　川田・林組（松任）二―一青山・吉田組（松任高）優勝
	六・二九	柔道	県柔道選手権準決勝進出　準決勝　七尾実五―〇松任高
	八・一八		第四回県体
		陸上競技	陸上競技
			一一〇米障害　川端優勝
		相撲	相撲
			一年の部　札木二位　三年の部　宮永優勝
			決勝　久安（七実）―札木（松任）
			宮永（松任）つりだし　角谷（輪島）
	九・七	送球	国体ハンドボール県予選優勝　決勝　松任一四―一二羽咋
	九・一四	送球	国体北陸ブロックハンドボール大会代表決定戦　第二位
			決勝　富山東部九―四松任
	九・一五	籠球	国体バスケットボール県予選準決勝進出
			準決勝　金市工三五―三四松任
	九・一五	自転車	実用車四千米決勝　船木郁治優勝
	一〇・二六	陸上競技	加南地区陸上競技会　四百米　増田優勝　五千米　島優勝
	一一・三	送球	県ハンドボール準決勝進出　準決勝　北星クラブ一一―六松任
	一一・三	弁論	県下弁論大会　川田久夫　第三位
	一一・一六	陸上競技	県駅伝競走選手権　第三位

松任農業高校

二九

一一・三〇	柔道	県柔道選手権　個人大窪準決勝進出
一・一一	陸上競技	準決勝　坂井（二水）払腰　大窪（松任） 県金沢城一周耐寒継走選手権優勝　増田・新納・中村・島出場　五一分三〇秒
四・二六 五・一八	陸上競技 庭球	加入団体対抗陸上競技選手権　二百米　徳井武優勝 県軟式庭球大会　川畑・坂本組、北村・上野組　第二位 決勝　大門・出野（泉丘）四―〇川畑・坂本（松任） 紺谷・坂井（泉丘）四―〇北村・上野（松任）
五・三一	陸上競技	県陸上競技対抗選手権　総合第三位　二百米　徳井武優勝　四百米　増田義秋優勝　八百米リレー（相木・中村・増田・徳井）優勝
六・二一	陸上競技	北陸三県陸上競技対抗選手権　四百米　増田義秋優勝　八百米リレー
七・二四 九・一三 一〇・二三 一二・一〇 一・三一	野球 相撲 新聞 地歴 山岳スキー	松任高優勝　本年度陸上総合第三位 全国野球県予選準々決勝進出　準々決勝　小松実二―一松任 県相撲選手権　個人池田第二位 県学校新聞コンクール入選 「江沼郡矢田野村字戸津古墳発掘報告書」刊行 第六回県体・スキー競技・兼国体スキー県予選　針道秀夫第二位　リレー男子第三位　総合二位
三・九 四・一八 五・二	地歴 籠球（女） 卓球（女）	「能登島調査報告」刊行 県新人バスケットボール準決勝進出　準決勝　大聖寺四七―二松任 県卓球・兼全国学校対抗選手権県予選準決勝進出 準決勝　董台三―〇松任
五・九 六・二〇	送球 陸上競技	県ハンドボール選手権第二位　決勝　金市工五―四松任 北陸三県陸上競技対抗選手権・兼全国選手権北陸地区予選　百米　徳井武優勝　二百米　徳井武優勝　砲丸投げ　坂田優勝 第三八回全国高校相撲大会　優秀三二校トーナメント入り
八・一	相撲	第一回戦　松任農二―一吉田高（山梨） 第二回戦　此花商高二―一松任農

年号	月日	部名	事項
昭和二九	一一・六・二四	簿記	総合競技大会　第三位
		相撲	加賀地区相撲大会　ベスト八校入り　第一回戦　泉丘三―〇松農
三〇	七・三	相撲	県相撲選手権　個人宮前勝男優勝　木本茂男三位
	一・二九	山岳スキー	第八回県体・スキー競技兼国体スキー県予選　長距離沢辺外喜男第二位
三一			総合三位
	五・三	排球(女)	県バレーボール祭準々決勝進出　準々決勝　桜丘二―一松農
	五・一三	ソフトボール(女)	県女子ソフトボール準決勝進出　準決勝　小松八―〇松農
	七・二八	野球	全国野球選手権県予選準々決勝進出　準々決勝　泉丘五―一松農
	九・二三	相撲	県新人相撲　個人安地三位
	一〇・一四	陸上競技	県新人陸上競技大会　千五百米　浜村隆一優勝
	一一・一二	陸上競技	県駅伝競走選手権　第二位
	一一・一九	剣道	県剣道選手権　個人増川三位　準決勝　増川ノ―尾立(輪島)〇
			三位決定戦　〇増川メコー　押田(二水)
	一一・三	文芸	俳句短歌大会　中江寿男入賞
	一二・三	羽球	県新人団体対抗バトミントン大会　今川単で二位
			単決勝　高瀬(小実)二―〇今川(松農)
			複準決勝　中酒・額谷(泉丘)二―一島崎・今川(松農)
三二			県金沢城一周耐寒継走選手権　第二位
	一・二〇	陸上競技	第九回県体・スキー競技・兼国体スキー予選　大回転　加藤正弘優勝
	一・二六	山岳スキー	継走　松任農第二位
	五・一九	ソフトボール	県女子ソフトボール選手権準決勝進出　準決勝　藤花一〇―八松農
	六・二三	柔道	県春季柔道準々決勝　大聖寺三―二松農
	六・三〇	相撲	県相撲選手権
			優秀一六校入り　一回戦　二　水二―一松任定時制(一部)
			一回戦　七尾農二―一松任農
			優秀八校入り　一回戦　羽　咋二―一松任農　(二部)

松任農業高校

六・三〇	羽球	県バトミントン選手権準々決勝進出　準々決勝　二水三―〇松農
七・二七	庭球	東日本軟式庭球選手権大会　東文雄・中浦芳明出場
九・二八	野球	秋季北信越野球県予選準々決勝進出　準々決勝　小松実一一―〇松農
九・二九	陸上競技	県陸上選手権　一万米　長瀬紀昌優勝
一一・一〇	陸上競技	県駅伝競走選手権・兼全国選手権予選　第三位
一一・一七	剣道	県剣道大会　個人増川第三位
一一・二六	陸上競技	県金沢城一周耐寒継走選手権優勝　岡本・北・長瀬・浜村　タイム　四九分二九秒
一・二六	山岳スキー	第一〇回県体・スキー競技・兼国体スキー予選　長距離　吉田二位 大回転　織田二位　総合二位
二・二三	山岳スキー	近県スキー大会　織田久重優勝
三・一五	写真	全県写真コンテスト　団体賞　筒井光造・横川欣三・新谷紀子(朝日賞)
三・一六	剣道	全日本写真コンクール　武田秀之特選
四・二七	剣道	剣道大会二位　決勝　羽咋三―二松農
六・一	撲球	剣道大会優勝
六・八	羽球	高校相撲金沢大会優秀三二校入り　第一回戦　松農定時制〇―三熊本農
六・二九	相撲	県バトミントン選手権準決勝進出　準決勝　二水三―二松農 県相撲選手権大会　一部　二位　二部　優勝 一部決勝　泉丘三―〇松農　二部決勝　松農二―一七尾実
八・三	羽球	県定時制体育大会羽球　第二位
八・一七	陸上競技	第一〇回県体　総合二位 陸上競技　百米　桜井三位、千五百米　岡本三位、五千米　長瀬二位 八百米リレー　三位　総合第三位
一一・九	剣道	剣道　優勝
一一・一六	陸上競技	県駅伝競走選手権・兼全国選手権大会優勝　岡本孝好・北外男・上野明次・石田正昭出場　タイム　二時間二〇分四四秒
一一・二〇	剣道	県剣道準決勝進出　準決勝　実践商―大将同士―松農
	写真	全日本学生写真コンテスト　有川光造・伊藤喜之入選

年号	月日	部名	事項
昭和三四	一・二四	山岳スキー	第一一回県体冬季大会　大回転　吉田吉麿優勝　水口三位
	一・二五	陸上競技	県耐寒継走選手権大会優勝　石田・牛若・浜村・岡村出場　タイム四八分二五秒
三五	五・一七	羽球	県バトミントン大会兼全国県予選準決勝進出　準決勝　津幡三―二松農
	六・七	相撲	全国相撲金沢大会優秀三二校入り
	六・二一	剣道	県剣道大会兼全国大会県予選第二位　決勝　金市工三―二松農
	七・二六		第一一回県民体育大会　男子優勝
	八・二二	陸上競技	陸上競技　総合第三位
		送球	ハンドボール第二位　決勝　金市工二七―二一松農
	一一・一五	陸上競技	県駅伝競技選手権大会優勝　藤・日向・大原・上野邦・岡本・上野明・石田出場　タイム二時間二三分三一秒
	一・一七	陸上競技	旧金沢城周回県耐寒継走選手権大会第二位
	五・八	陸上競技	県陸上競技対抗選手権大会　四百米　桜井優勝　五千米　日向優勝
	六・二六	送球	全日本高校男女ハンドボール選手権大会県予選第二位　決勝　小松実一一―八松農
	七・二九	陸上競技	第一二回県民体育大会　陸上競技　四百米　桜井隆雄優勝　五千米　日向孝雄優勝
	八・二七	庭球	県男女軟式庭球県予選優勝
	九・	美術	光風会美術展覧会に北村敦夫入選
	一一・三	新聞	新聞コンクール佳作賞
	一一・六	陸上競技	県駅伝競走兼全国高校駅伝県予選優勝　岡本・大原・斉藤・村田・日向・藤・石田出場
三六	一二・一	地歴	「松任史跡」刊行
	二・一九	陸上競技	県耐寒継走選手権大会優勝
	三・一	地歴	「石川平野における農村の年中行事」（「会報」一号）発表

松任農業高校

五・七	陸上競技	県陸上競技選手権大会　千五百米　岡本優勝、八百米　大原三位
五・一四	送球	県ハンドボール大会優勝
七・二四	陸上競技	第一三回県民体育大会 陸上競技　四百米　岡本優勝
七・二四	野球	全国高校野球選手権県予選準々決勝進出　準々決勝　小松実七―二松農
一〇・八	陸上競技	県高校新人陸上競技大会　五千米　岡本優勝
一〇・一	地歴	第六集「金沢城」刊行
一〇・二八	新聞	県新聞コンクール努力賞
一一・二二	陸上競技	県耐寒継走選手権大会優勝　中・斎賀・岡本・高川出場
八・一〇	送球	第一四回県民体育大会 ハンドボール第二位　決勝　金商六―〇松農
一〇・一三	野球	秋季北信越高校野球県大会準優勝　決勝　金市工五―〇松農
三・一	地歴	「松任町の歴史と文化」（「会報」三号）発表
三・一七	陸上競技	旧金沢城周回県耐寒継走選手権大会優勝　西川・橋本・高川・岡本出場
四・二〇	野球	春季北信越野球大会準決勝進出　準決勝　金沢二―〇松農
五・五	相撲	県加賀地区相撲大会優勝
五・一九	野球	春季北信越野球大会出場　一回戦　若狭八―三松農
五・二〇	地歴	第七集「新松任町史」刊行
六・三〇	相撲	県相撲選手権大会優秀一六校入り
八・一一	陸上競技	一回戦　宇出津三―二松農　個人　西野第三位 第一五回県民体育大会 陸上競技　五千米　高川　第三位　四百米　西川　第三位
八・一一	山岳	山岳　団体優勝
一〇・八	地歴	第八集「末松―加賀国分寺跡と加賀国造所」刊行
一一・一七	陸上競技	県駅伝競走選手権大会優勝　高川・西出・川上・西川・橋本・南部・橋爪出場
一・五	陸上競技	県耐寒継走選手権大会第二位
一・二五	山岳スキー	県体スキー高校選手権大会　男子回転　門村和一優勝

年号	月日	部名	事項
昭和三九	三・一	地歴	「松任町御手洗海岸における泥炭層の研究」（「会報」第四号）発表
	四・一九	送球	国体ハンドボール大会県予選優勝　松農三〇―一六県工
	五・五	柔道	県柔道大会　個人南出（重量級）優勝
	六・一三	陸上競技	陸上競技選手権大会予選　八百米　南部第三位
	六・二八	送球	全国ハンドボール県選手権優勝　松農一三―一九小松
	八・二一	送球	第一六回県民体育大会　ハンドボール第二位
	八・二九	送球	北陸三県選手権県予選優勝
	九・二〇	陸上	県新人大会　千五百米　森雄三第三位
	九・二三	野球	秋季北信越高校野球大会県大会準決勝進出
			準決勝　小松実三―一松農
	一一・一五	送球	県ハンドボール選手権大会準決勝進出　準決勝小松二六―一三松農
	一一・一五	陸上競技	県駅伝競走競技選手権大会優勝　岡口・森・浅野・川上・浜田・西出・南部出場
四〇	一・一〇	陸上競技	県耐寒継走選手権大会優勝
	一・二四	山岳スキー	県選手権大会距離競技第三位
	五・五	排球	春季大会準決勝進出　準決勝　羽咋工二―〇松農
	五・二三	相撲	加賀地区大会第二位　個人島田第二位
	六・五	陸上競技	県選手権大会　五千米　岡口昭雄第二位　五百米　森雄三第二位
	六・六	相撲	高校相撲金沢大会優秀三校入り
			優勝トーナメント　第一回戦　松　農二―一富山水産
			第二回戦　熊本農三―〇松　農
	六・一二	球	県選手権兼国体県予選　個人　是永第三位
	六・二〇	羽球	県定時制総体優勝（羽球部）
	六・二七	排球	県選手権大会第二位　決勝　泉丘二―〇松農
	八・五	排球	団体競技大会県予選準決勝進出　準決勝　大聖寺二―一松農
	九・二六	陸上競技	県新人競技大会　五千米　岡口第三位

松任農業高校

一〇・三	送球	北信越選手権県予選第二位	決勝　金商一七―六松農
一一・一四	柔道	秋季大会準決勝進出、三年の部南出第三位	準決勝　鶴来四―〇松農
一一・一四	陸上競技	駅伝競技選手権大会第二位	
一一・一五	山岳スキー	県選手権ソルデック種目リレー第三位	
四・二五	排球	県春季大会準決勝進出	準決勝　泉丘二―一松農
五・二二	相撲	加賀地区大会優勝　個人山崎優勝	
六・四	陸上競技	県競技選手権　五千米　岡口第二位	
八・七	羽球	定時制総体羽球優勝	決勝　松農三―一聖城　北陸四県定時制大会出場
八・一〇	排球	県体兼国体予選第二位	決勝　県工二―〇松農
一一・五	柔道	秋季大会第三位	
一一・一七	排球	県新人大会準決勝進出	準決勝　泉丘二―一松農　本年度年間優秀校
二・一九	送球	県選手権大会　第二位	決勝　金市工二〇―一六松農
四・一六	排球	県春季大会準決勝進出	準決勝　県工二―一松農
四・三〇	剣道	春季大会第三位	
五・七	排球	県高校全国大会予選準決勝進出	準決勝　泉丘二―一松農
五・一四	相撲	加賀地区大会　岡本優勝　南第三位	
六・一一	送球	県国体県予選準決勝進出	準決勝　県工一五―六松農
八・一八	陸上競技	第一九回県体陸上競技　八百米　吉田克美第三位	
一一・五	陸上競技	県駅伝競技大会第二位	
一一・一九	卓球	加賀地区新人大会第二位（ダブルス）	
		決勝　坂井・川端（鶴来）二―一小泉・西山（松農）	
一一・一九	陸上競技	北信越駅伝競走大会出場	
一・七	陸上競技	県耐寒継走選手権大会第三位	
六・二三	排球	県選手権兼国体県予選準決勝進出	準決勝　大聖寺二―〇松農
八・九	卓球	第二〇回県体排球準決勝進出	準決勝　大聖寺実業二―一松農
一一・二四	卓球	加賀地区新人大会　単小島第二位	
五・三一	排球	県選手権大会準決勝進出	準決勝　県工二―〇松農
七・二八	排球	県体兼国体県予選準決勝進出	準決勝　県工二―〇松農

	年号	月日	部名	事項
	昭和五四	五・三〇	陸上競技	県陸上競技大会　千五百米　小林誠司第二位
		六・七	排球	県選手権準決勝進出　準決勝　県工二―〇松農
		七・二七	排球	第二二回県体兼国体予選決勝進出　準決勝　羽咋二―〇松農
		九・二八	陸上競技	県新人陸上大会　五千米　横川利昭第三位
		一一・九	陸上競技	県駅伝競走大会第三位小林・佐野・横川・和多・宮下・三木・山下出場
		一一・二四		県高校「私たちの主張」発表会　優秀賞　三谷弥　文部大臣杯争奪全国青年弁論大会　優秀賞　三谷弥
高校	四六	四・二五	陸上競技	全日本競走大会高校の部十キロ競走　坂下春夫優勝
		一一・七	陸上競技	県駅伝競走大会第三位
	四七	一・一六	スキー	県選手権大会　男子回転　元尾文二優勝
		一一・五	陸上競技	県駅伝競走大会　第三位
	四八	一・一七	スキー	県選手権大会団体三位　大回転　清水一男第三位
農業				大倉岳スキー大会　総合優勝　個人　元尾昭男優勝、土田誠吉第二位、山本雅晴第三位
農任		一一・二三	柔道	県秋季柔道大会　重量級　宮川伸一第三位
				インターハイ国体・中部大会、スキーの部　清水一男出場
		一一・二五	排球	秋季新人大会準決勝進出　二―一松農
松	四九	一・一五	スキー	県選手権大会　アルペン総合第三位　大回転　清水一男第三位
		一・一六	スキー	県耐寒継走選手権大会第三位
		二・二〇		郷土研究サークル「荒屋柏野の寺社由来記」（会誌一二号）発表
		一一・一二	柔道	県秋季柔道大会　中量級　池村広幸第三位
	五〇	二・一		インターハイ・国体スキー大会　清水一男出場
				郷土研究サークル「松任市柏野年表（上）」（会誌一三号）発表

凡例　1　本年表作製にあたっては、北国新聞・北国年鑑・高体連年鑑（石川県高等学校体育連盟）・六星だより・会誌まつのう等を参照した。

2　県ブロック大会は「第何回」の記載を省いた。

編集後記

（一）刊行のいきさつ

本校創立の明治九年から一〇〇年――この一世紀は、日本民族にとって文字通りの激動の世紀であった。徳川三〇〇年の封建時代が終り、明治維新を迎える。民族のエネルギーを富国強兵にかけて、鎖国から文明開化、一躍世界の檜舞台に飛び出した。四五年を経て明治は完成の域にのぼりつつあったが、歴史の流れはとどまることを知らず、続く一五年の大正時代は、第一時世界大戦を契機として、政治・思想等揺れ動く世界史の波に洗われる。社会主義運動と革命、デモクラシーを経て、ファッシズムの台頭となる。この時代は日本近代化の試練期であり、とまどう低迷の時代であった。

昭和が始まる。軍部に発生したファッシズムは次第に日本全土を包み、軍国主義への激しい傾斜となった。作用と反作用―日本は戦争の嵐に自らとび込む。満州事変、日華事変から太平洋戦争への突入、そして敗戦―。流された多くの血のなかに、教訓と反省を求め、人間性の回復、新しい文化の創造に立ち上った。

日本が激動の世紀を経たように、本校も風雪に耐えて生き抜いてきた。本校と同じく農業講習所から出発した農学校は全国に多数あるが、百年の校歴を数えるものは稀有である。本県為政者、農業識者、本校卒業生、教職

員、生徒が「農業の中核たらんとする本校の使命」を常に堅持してきたことは、本校が金沢に始まり、火打谷、小松、松任と転々と校地を移しながら、その都度時流に応じ、否むしろ時流に先んじて発展して来たのである。明治、大正、昭和の三代にわたるこれら学び舎の足跡を尋ね、それぞれの時代に生きた人達の姿を堀りおこすことは誠に意義深い。一〇〇年を契機として、ここに校史の編纂に立ち上ったのである。

本書刊行の第一回準備委員会がもたれたのは、昭和四八年六月九日であった。議件は、開校一〇〇年記念事業準備委員会の結成についてで熱心な討議がなされた。

そして、何回か会合を積み重ねて、ようやく編集委員会組織が一〇〇周年記念事業実行委員長から委嘱されたのは、四九年一月二二日である。編集委員会は四月末から下準備を進め、編集方針、編集要項、資料収集方針、執筆分担などについて打ち合わせを重ね、本格的な編集活動にはいった。

本書の刊行に際し、編集委員に委嘱された人々は、次のメンバーである。

松任農業高等学校百年史編集委員会

○委員長　西　要一

○副委員長　福田与盛

○委　員　平野外喜平・石田喜久男・蒔田達雄・中島康雄・埜谷喜代子・林キヨ・森永文子・藤田崇宣・香城哲隆・山崎昭・肥田保久・町田邦夫・神保肇・山村勢一・山村外志雄・三宅伯二郎・平野茂紀・太田脩・大蔵捷直・志茂克・石井嘉之助・山根公・桂田敬・中田仁

○特別委員　中島栄治・金山顕光・泉松雄・道幸枝・高畠信次・松井芳夫

編集部

○編集主任　山崎　昭
○執筆係　町田邦夫・神保肇・三宅伯二郎・志茂克・山根公・中田仁・埜谷喜代子
○資料係　藤田崇宣・肥田保久・山村外志雄・平野茂紀・太田脩・大蔵捷直・石井嘉之助・綱屋保治

(二)　編集の方針

編集委員会は次のような方針にそって編集を進めてきた。

編集の基本方針は先の「石川県立農学校・石川県立松任農業高校九十年史」（三七三頁）の方針を踏襲することを原則にした。

(1)　本校は創立が古く、一〇〇年という長い歴史を持っているので、明治・大正・昭和三代の社会情勢を背景にして学生生活、学生気質の変遷をたどるとともに、その時代の主たる出来事、あるいはエピソードにスポットライトをあてて、それらを通して昔をほうふつさせたいと考えた。偏見と独断におちいる危険をさけるために、できるだけ事実を客観的に記述することに注意をはらった。

(2)　記述にあたってはなるべくわかりやすいようにつとめること。

(3)　共同執筆という形式のために、全体統一が害われないように注意して、できるだけ連絡と検討をしたものを筆録することに努力した。

(4)　各校や卒業生の方々から提供された資料の採否や利用については、できるだけ利用させていただいたが、資料の中には直接表面にあらわれなかったものも相当あることをお断りしておく。

(5) 叙述の体裁は、執筆者の個性を尊重しながらも、全体の均衡のうえから若干の修正・削除・加筆を編集担当者によって行なうこととした。

(6) 取り扱う年代の下限は原則として昭和五〇年五月をもって打ち切ることとした。

(7) 本文に登場する人々はすべて敬称を略することとした。

(三) 執筆の分担

執筆は編集委員会で次のように分担することに定めた。

第一章 本校の草創期……山根 公
第二章 石川県農学校時代……山根 公
第三章 石川県立農学校時代……山根 公
第四章 石川県立松任農学校時代……三宅伯二郎
(ただし、この章は三宅委員が学校転任されたため、未定稿の部分を山根委員が担当した。)
第五章 松任女子実業学校……中田 仁
埜谷喜代子
第六章 石川県立松任高等女学校……中田 仁
埜谷喜代子
第七章 総合制石川県立松任高等学校…町田邦夫
第八章 石川県立松任農業高等学校時代……神保 肇
志茂 克
(ただし、神保委員が学校転任されたため未定稿の部分を山崎委員が担当した。)

付録……平野 茂紀
石井嘉之助

写真……太田 脩

（四）　編集を終えて

第一回の編集委員会が開かれたのは四九年の二月である。この時には既刊の九十年史を土台にして、これに十年を加え校史、回想録、付録の三部よりなるという構想であった。各章の区分、執筆の分担がきまり、資料収集活動を始めたのは五月の半ばを過ぎていた。

六月には資料収集の目的で時代別の座談会を行なった。出席された同窓会員、恩師の方々の生き生きした話しぶりや、その場の雰囲気から、当時の情景が彷彿し、同席した執筆係は、この情景を回想しながら構想を練り、全章にこの雰囲気を漂わせながら執筆に当ったという。座談会は資料収集係が担当し、録音を文章化するのに、夏休を返上してとり組んだ。座談会が白熱したところ程、テープからの再生がわかりにくく苦労したのである。

資料収集は労多くして功が少ない。数日図書館に通って新聞を漁り、わずか一ページに当る資料を得られただけということもあり、一人の人物の所在を確かめるために、徹夜で資料を読まなければならない場合もある。九十年史編集の時と同様に写真係は、県農学校の跡を尋ねて、羽咋郡志賀町の火打谷にある現在の石川県林木育種場へ出かけた。歳月は旧蹟を流しつくして、わずかに埋められた井戸の岩がこいと、数本の古木を残すのみであった。このように係員の苦労は多く、しかも報われないことも多い。

この間に先輩諸氏から資料の提供や、激励、忠告などが相いつぎ、係は自らを励まし、やがて没頭して行った。このようにして、執筆が進むにつれ、意欲が湧き、構想は次第に膨れ上って行った。当初計画されたページ数では消化出来ないので、回想録を切り離し別冊とすることとなった。

五〇年五月から原稿が出され始め、編集室に閉じこもる日が多くなった。構想が際限なく広がったのと、仕事

に不慣れなため、最終的な編集の段階に至って、予想外に渉らず、予定の時期を過ぎてあせりが出て来たために執筆者に計ることなく、私の責任において一部をカットしたり、補足したりという暴挙をあえてしたのである。ここに掲げて寛恕を乞う次第である。

徹夜につぐ徹夜という突貫工事で、ようやく全章の原稿を送り出すこととなった。最終的な編集は山崎が担当し、校正は各執筆者が分担した。この間、特に山根委員は常に傍らにあって、適切な助言を与えてくれるだけでなく、自らも原稿の整理編集に献身的な努力を続けられたのである。なお、本書の印刷を引き受けられた能登印刷株式会社には、各種の無理な注文を、快よく聞き入れて頂いたり建設的な助言を頂くなど終始良心的に作業を進めて頂いた。ここに厚く感謝の意を表する次第である。

本校の歴史に、さらに百年を積み重ね、本書を土台にして光輝ある二百年史が編集されることを期待してやまない。

（五）　編集に協力された方々

本書の編集に御協力下さった方々は限りなく多い。その一人一人についてもれなく触れることは不可能なことであるが、特に御多忙中の参議院議員安田隆明氏から本書の題字を、石川県知事中西陽一氏から序文をいただき、巻頭をかざることができたことは、この上ない喜びである。また、編集されるまでに、各方面からいただいた御協力はまことに甚大である。貴重な資料を提供して下さった方々、御多忙中にもかかわらず時間をさいて往時を語って下さった方々、これらの先輩各位の御指導御協力がなかったら、本書は中途挫折して日の目を見るに至らなかったであろう。ここに末筆ながら厚くお礼を申し上げたい。

○資料提供者（敬称略）

大井　頼兼　飯田　覚　中川　信次　山田　清光　小島　由雄　浅与四忠　佐藤　政太
正田　則行　鍋島　定明　高畠　信次　本多　嗣男　山岸　賢一　竹本　平一　源　可祝
木村かおる　正見みゆき　大和　千代　道　幸枝　小林　寿子　結城　房子　高野　貞子
森永　文子　埜谷喜代子　林　キヨ　島　つや子　林　貞子　藤永　公子　八木美智子
南手　静子　宮本　米子　村岸美和子　川畑喜美子　得田　君子　森　恭子　高井志津子
土井　康夫　中野　有建　高山　教三　鶴見　正則　宮井登志雄　南　公育　田島　外男
福田　与盛　平野外喜平　子浦　成孝　高木　成昌　飯田　照雄　高野勘兵衛　市野　静夫
山本　巧　中野　義隆　古木　利孝　中村　喜彰　肥田　保久　本田　政夫　中島　澄江
志賀町役場　岡本　春樹　宮田　禊　東　保之　古野　春秋　木戸浦五作　本橋　吉二
蒔田　達雄　西尾　喜三　岡本　慶子

○**主な参考文献**

石川県農学校沿革史、石川県立農学校一覧綴、日本農業発達史、石川県学事報告書、産業教育七十年史、日本帝国主義の形成、実業教育五十周年記念誌、大日本農会報、石川県教育史、石川県史料、石川県史、松任農学校一覧、石川県議会史、朝日年鑑、北国年鑑、松任町史、県立松任高等女学校一覧、昭和九年石川県水害誌、学校日誌、教務日誌、校友会誌、学校要覧、管理計画、学校新聞、まつのう、松苑、北国新聞、北陸新聞、各高校史、高体連関係誌、産業教育九十年史、高文連関係誌、高校十年史、同二十年史、教育界各誌、県公報師範教育史、県年表、各郷土関係研究雑誌、学校農業クラブ活動読本、県統計書、県戦時歳時記、風雪の碑、加能女人

系、実業教育五十年史。
昭和五〇年秋

松任農業高等学校百年史編集委員会
（編集主任　山崎　昭）

昭和五〇年　九月三〇日　印刷
昭和五〇年　十月　一日　発行

松任農業高等学校百年史

編集者　石川県立松任農業高等学校
　　開校百年史編集委員会
発行者　石川県立松任農業高等学校
　　開校百年記念事業委員会
　　（石川県松任市三浦町四〇）
　　松任農業高等学校内
印刷者　能登印刷株式会社
　　（金沢市武蔵町七番一四号）